
真・恋姫†無双～西涼に落ちた天の御遣い～

山の上の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

初投稿で駄文・ありがち・更新遅い、と三重殺ですが、もしよければ読んで頂けると有り難いです。

序章 く邂逅く（前書き）

初めまして、山の上の人と言います。

これが初めての小説になります。週一の更新を目標に書いていく
と思っていますので、よろしく願います。

序章 く邂逅く

「…どこだ、ここ？」

青空の下、目を覚ました少年は辺りを見回しそう呟いた。

周りは鬱蒼と茂った森。彼が立っているのは、その森の中を通る街道の端だった。

『まさか、記憶喪失！？』

そんな事を考えた少年は、自分の名前を口に出してみる。

「北郷一刀、聖フランチェスカ学園の2年生、だよな。うん、大丈夫だ。」

いや、大丈夫じゃないぞ。そう1人ツッコミを入れる。

確かに大丈夫ではない。全く見覚えのない場所に、ぽつんと1人でのいるのだから。

「ともかく、冷静になれ。確か昨日は部活でしごかれて…」

一刀は学園で剣道部に在籍している。元々、彼の祖父が開いている剣道道場で小さい頃から剣術を習っていた事もあり、高校入学と同時に剣道部に入部したのである。

その剣道の大会が来週に控えていたため、土曜日だった昨日は午後に丸々特訓に充てたのだ。そして、あまりにもヘトヘトになった一刀は、寮の自室に戻るなりベッドの上に倒れこんで寝てしまった。

「…で、目が覚めたら森の中、と。さっぱり分からん。…あっ！」

何かを思い出した一刀は急いでズボンのポケットをまさぐると、携帯電話を取り出した。これなら現在位置は分かるし、何より誰かに連絡をとりたかった。

しかし、その思いは画面に映し出された圏外の2文字に打ち碎かれた。

「圏外って、どれだけ田舎だよ。」

ため息をつきながら閉じた携帯電話の画面を慌てて開き直す。

「2時半!？」

携帯電話の時計には午前2時31分と表示されている。腕時計を見ても同じ時間だった。

森に隠れて太陽は見えないが、青空が広がる今が真夜中でない事は分かる。

『海外、なのか?でも、寝ている間に海外なんて…。』

ただの土の道である。スニーカーとはいえ、普段それほど歩き慣れない土の道は、ただ歩くだけで疲れる。

「しかし、車どころか人1人いやしないな。」

しばらく歩いた所で立ち止まり、辺りを見回す。人影すら見当たらない事のため息をつく。と、不意に人の声が聞こえた。

良かった、そう思い早足で歩き出した一刀の足は、その直後に耳に届いた女性の叫び声で再び止まる。一瞬の逡巡の後、カバンから木刀を引き抜いた一刀は気配を殺して声のした方に近付いていった。

一刀は茂みの影から様子をうかがう。

そこには3人の男と1人の女性。巨漢の男が女性の後ろから羽交い締めにして口を手でふさぎ、小さな男が辺りを警戒し、その間に立つ髭の男はズボンを下ろし、下卑た笑いを浮かべていた。

すぐにでも飛び出そうとした一刀。だが、小さな男の手に握られている物を見て体が止まる。

真剣。

鈍く輝くそれは、正しく真剣だった。

序章 へ邂逅へ (後書き)

初回なので、続けてもう1話投稿します。

第1章・涼州編・第1話「馬姫」(前書き)

ここから本編になります。

ではないのか、と一刀は感じていた。

馬超が続けて何かを喋ろうとした所で、

「お姉様ーっ！」

と、大きな声と馬の蹄の音が遠くから聞こえてきた。

「おーい、たんぽぽ！こっちだ！」

馬超は声の聞こえてきた方に手を振り、叫ぶ。たんぽぽと呼ばれた少女は一刀達の前で止まると、馬の背から飛び降りた。

「遅いぞ、たんぽぽ。」

「えーっ。だってたんぽぽが搜索したのは反対側だったんだから、時間がかかるのはしょうがないじゃん。」

馬超に注意されて不満そうな声を上げた。

「ところでお姉様、この人は？」

その問いに馬超が簡潔に答えた後、一刀は自己紹介をする。

「北郷一刀、よろしく。えっと、たんぽぽちゃ…ん！？」

一刀が言い切らないうちに、少女の持つ槍、影閃が喉元に突き付けられる。

「ちよっと！たんぽぽの真名を呼ぶなんて、どーゆーつもり！？」

テルでできているため、光を反射して輝いているように見える。

「だから、叔母様の所に連れて行った方が良いと思うよ。」

馬岱の言う事は最もだった。馬超には彼の正体は分からないが、だからこそ彼女自身には判断が難しい。母に会わせる事に不安が無い訳ではなかったが、このまま放っておく訳にはいかないのも事実だった。それ程に、一刀の出で立ち馬超達の目には奇抜に映っていた。

「一刀、もし良ければ、あたし達と一緒に来てくれないか？その、少し話も聞きたいし、な。」

この申し出は一刀にとってありがたいかった。ここが三国志の世界なら、という仮定はあるものの、馬超と馬岱が居る事からこの場所が涼州であると予想出来た。出来たが、だからと言ってどうなる物でもない。

結局、この世界の人と一緒に居なければどうにもならない状況だった。

「…そうだね。その方が良さそうだ。」

こうして、一刀は馬超達と共に歩き始めた。

一刀達は、助けた少女の村へと帰った。馬超は少女とその家族が

抱擁しているのを横目で見ながら、部下からの報告を受ける。

先程捕えた賊から引き出した情報に従い偵察した所、既に根城はもぬけの殻だった。元々、この村の自警団でも何とか対処出来る程度の規模の賊だったため、逃げるのも早かったのだらう。

馬超からの指示を受けた兵士が離れ、残った彼女は困った顔で頭を掻いた。

「どうかした？」

一刀は馬超に近付きながら尋ねる。

「ああ、一刀。ちょっと、な。」

馬超は報告のために、部下を1人、先行して戻らせようとしていた。そのための報告書を書こうとしていたのだが、先程の賊の襲撃によって蔵の中の筆と硯を壊されたため、報告書が作れないでいた。

この時代、識字率はそれほど高くない。ましてや地方の村では、字を書く機会自体が滅多に無い。その為、村全体で1つの筆を管理していても問題は無かったのだ。

「書く物があればいいのか？じゃあ…。」

そう言いながら、一刀はカバンから筆箱を取出し、その中からシヤーペンを馬超に渡そうとした。と、そこまでやってから、しまった、と思う。馬超も含め、周囲の人達は驚いた様な、何か警戒している様な表情をしていた。

それはそうだ。筆と硯しかない時代に、プラスチックとゴムで出来たシャーペンを見て不思議に思わない訳がない。だが、今更引つ込める訳にもいかず、不審そうな顔の馬超に手渡した。

当然、使い方を一刀が馬超に教える。ちなみに、報告書として使おうとしていた竹簡に書く事は出来ず、ルーズリーフも1枚渡していた。

筆とは全く違う書き心地に悪戦苦闘しながらも、馬超は何とか報告書を書き上げる。部下の1人にその報告書を持たせて先行して帰らせ、他の兵士達には周辺の探索と村の守備を命じた。

一刀と馬超、馬岱の3人は、村人の礼を背に受けながら村を離れた。馬に乗れない一刀は、馬超の後ろに乗せてもらっている。

やっと落ち着けた所で、一刀は疑問に思っている事を尋ねた。

「天の御遣い、って何なの？」

「ん？ああ、それは…。」

漢帝国の首都、洛陽。そこで1つの占いが噂になっていた。

流星に乗り天より御遣いが舞い降りる。

宮中では汚職が横行し、政治が乱れ、人々の日々の暮らしすらままならないこの時代、それはまるで救世主伝説の様に一気に広まっていった。

「ま、あたしはそんな占い、信じちゃいないんだけどな。」

そう言って馬超は笑う。

一刀は、ついでにもう一つ、真名について尋ねた。

真名、真実の名と書くそれは、生まれた時に付けられ、その人の本質を表すと言われている。そのため、家族の様な近い身内か、本人が認めた相手以外がその名を呼ぶ事は叶わない。先程の一刀の様に許しを得ずに呼んだ場合、有無を言わずに殺されてもおかしくない。

だが、一刀の体は緊張と疲労に蝕まれていた。馬超の腹の前で組んでいた手が、ズルツと滑って離れてしまう。落ちる、そう感じると同時に、一刀は馬超の体を掴んだ。

「ひっ！？ど、どこ掴んでんだ、このバカツ！！」

「ゴ、ごめん！」

急に脇腹を掴まれた馬超は思わず変な声を出してしまい、その恥ずかしさを誤魔化す様に大声を出す。怒鳴られた一刀は反射的に謝り、無意識の内に手を離していた。

「あつ……。」

3人の時間が一瞬止まる。

「うわあああ！」

絶叫を残して宙に投げ出される一刀。その体は地面を数回転げ回った後、やっと止まった。しかし、かなりのスピードが出ていたにも関わらず、わずかな擦り傷で済んだのは運が良かった。大した怪我が無い事を知ると、馬超達もホツとした様子だった。

「……しっかし、いい加減にしるよな。」

「しょうがないだろ。馬なんか乗った事が無いんだから。」

頭を搔きながら言う馬超に、一刀は半ば逆ギレ気味に返した。

「馬に乗った事が無いなんて、どんな暮らしをしてたんだよ？……」

そう言いながら、馬超達は座っている女性、馬騰に近づく。馬騰は視線を2人から自分の手元にある紙に移した。

「読んだわよ。天の御遣い、ねえ。詳しく話を聞かせてくれる？」

馬騰の表情は、半信半疑、と言ったところだ。それを不満に思っていた馬岱が、一刀の事を話し始めた。

白く輝く服を着ている事。真名を持っておらず、その存在すら知らない事。見た事もない不思議な筆を持っている事。

それらを、馬岱は楽しそうに話す。

「…そこら辺は報告書にも書いてあるわね。他には何かある？」

「…そう言えば、あたしの事を、錦馬超、なんて呼んでたけど。」

馬岱が話している間、黙っていた馬超が口を開いた。それを聞いた馬騰、そして、もう1人の細身の女性の表情がピクリと動く。

「まあ、とりあえず会ってみましょう。2人とも、その彼を呼んで来てくれる？」

馬騰の言葉に従い、馬超と馬岱は一刀を呼びに部屋から出て行った。

「錦馬超の二つ名を知っているという事は、その彼は羌族の者でしょうか？」

細身の女性が馬騰に尋ねる。

「もし羌族なら名乗っているでしょ。それに、そんな技術も持っていないしね。」

羌族とは、漢帝国の西に暮らしている異民族である。以前は涼州に対して侵略行為を行っていたが、約20年前、馬騰がこの武威の太守の許に嫁いだから友好関係が築かれている。

その理由は、馬騰の出自にある。彼女は漢民族の父と羌族の母を持つハーフであり、結婚するまで羌族の中で暮らしていた。

そのため、馬超はクォーターと言う事になり、羌族の間で武勇と容姿を称えて錦馬超と呼ばれていたのである。

「会ってみれば分かるわよ、鷹那。きっと、ね。」

そう言って、馬騰は少し笑った。

急に声がしたかと思うと、ノックも無しに扉が開けられた。そこには馬超と馬岱の2人が立っていた。

「ノックくらいしろよ！」

「下着姿の下半身をズボンで隠しながら、一刀は2人に文句を言う。だが、2人から謝罪の言葉は返ってこない。」

「
x : : 。」

馬超は一刀の下着姿に顔を真っ赤にし、アワアワと訳の分からない事を呟いている。一方、馬岱はそれとは逆に、興味津々といった表情で一刀の下着をまじまじと見ていた。

「ふーん、天の国の下着って変わってるね。」

「ニヒヒッ、と笑うと視線を下着から一刀の顔へと戻す。」

「じゃあ、たんぼぼ達は外で待ってるから、早くしてね。」

まだアワアワ言っている馬超の背中を押して、馬岱は部屋から出て行った。美少女2人に下着姿を見られて恥ずかしい思いをした一刀は、服を着直した後も部屋の扉を開けるのをしばらくためらった。

馬超と馬岱の2人に連れられて、城の奥へと入って行く。しばらく

く歩くと1つの部屋の前で止まった。

「母様、入るぞ。」

馬超は扉を開けて中に入る。それに続いて一刀が入り、最後に馬岱が入って扉を閉めた。

一刀と机を挟んで1人の女性が座り、その横に細身の女性が立つ。馬超と馬岱もその横に並んだ。

「私がこの武威の太守の馬騰よ。」

椅子に腰掛けた女性が、座ったままで名乗る。一刀も直立不動で名乗った。それを聞いて馬騰は少し微笑んだ。

「よろしく、一刀君。…私は回りくどいのは苦手だから、単刀直入に聞くわね。あなた、天の御遣いな？」

余りにもストレートな聞き方に、馬超と馬岱は少し驚いた顔をした。

「…たぶん、違うと思います。」

一刀の返答を聞いた馬岱は、エーツ、と思い切り不満の声を上げた。その横で馬超は、ほらな、とでも言いたそうな顔をしている。だが、馬騰と細身の女性は一刀の言葉にひっかかった。

「たぶん、とはどういう事かしら？あなたの事でしょ？」

そう言った馬騰の表情には、先程までのにこやかな感じは無かつ

等と考えながら、一刀は目の前の酢豚に手を伸ばした。

劣る振る舞い、許すまじ！」

西に傾き掛けた太陽を背にしている為、顔は見えない。たが、よく通る澄んだ声とそのシルエットから、女性だという事は分かった。

まさかな、と一刀は思う。登場の仕方や口調は、どう考えても正義の味方そのものだ。

「だ、誰だ、お前は！」

ゴロツキの1人が悪役のお決まりの台詞を吐く。

どんな名乗りを聞かせてくれるのか、ちょっとワクワクしてくる一刀。

「悪に名乗る名前は無い!!!」

そう叫ぶと、正義の味方は屋根の上から飛んだ。そのまま空中で2回前方宙返りをして、音も立てずに地面に降りる。

期待を裏切られ、少しガツカリする一刀。その気持ちを感じ取ったのか、正義の味方は手に持っている槍をクルクルと回し、ゴロツキ達に向けてビシッ、と突き付けた。

「我は美と正義の使者、華蝶仮面！悪党ども、覚悟しろ！」

名乗ってるじゃん、というツッコミは心の中にとどめ、一刀は華蝶仮面の姿を観察する。

白を基調とした、丈の短い着物の様な服。振り袖の様に長い袖に

は蝶の羽を模した様な刺繍。足元のポツクリに頭上のナースキヤツプと大変奇抜な格好だが、中でも目を引くのは、その顔に着けている蝶の仮面だろう。貴族や金持ちが仮面舞踏会で着ける様なバタフライマスクであった。

何でこんな格好を、と思うが、取り敢えず黙っておく。

「何やってんだ、テメエ等！びびってんじゃねえ！」

またもや悪人の常套句。ボスの発破に応え、気合いの声と共に手下達は華蝶仮面に襲い掛かる。

フツ、と軽く笑うと、襲い来るゴロツキ達に自ら突っ込んで行った。すれ違いざま振るわれた槍が、一瞬で全ての相手を打ち倒す。

まるで舞う様な華麗な槍捌きは、馬超のそれとは違うが間違いなく強い。

「さて、後は貴様だけだ。どうする？」

ボスに向けて槍を突き付ける華蝶仮面。それに対し、

「くそっ、覚えてやがれ！」

と、三度お決まりの台詞を吐くと、華蝶仮面に背を向けて逃げ出した。だが、その先には巻き込まれない様に離れていた一刀の姿があった。

走って来るボスに合わせて距離を詰めると、その手を取って投げ飛ばす。仰向けに倒れたボスのみぞおちに、一刀は拳を落として気

絶させた。

「ほう、お主なかなかやるな。」

呼吸を整える一刀の背中から華蝶仮面が声を掛けた。振り返った一刀は、少し警戒しながら尋ねる。

「あなたは一体、誰なんですか？」

「我は美と正義の使者、華蝶仮面！」

再び名乗りを上げる華蝶仮面。もちろん、一刀が聞きたいのはその中身の事なのだが、どうやら答える気は無いらしい。ここで一刀は考える。

この華蝶仮面、変な人ではあるが悪人ではないだろう。ならば、このまま無理に聞き出そうとするよりは、気分良く帰って貰った方が良くはないか。少なくとも、彼女に助けられたのは事実なのだから。

そこで、一刀は華蝶仮面のノリに付き合う事にした。スツ、と右手を差し出す。

「ありがとう、華蝶仮面。あなたのお陰で街の平和は守られた。この街を代表して礼を言わせてもらうよ。」

「私は当然の事をしたまで。気にする必要は無い。」

そう言いながら、少し笑って一刀の手を握り返した。

「では、さらばだ！」

一刀の手を放した華蝶仮面は大きくジャンプし、彼女が現れた屋根に飛び乗った。一刀に一瞥をくれると、走り去ってしまう華蝶仮面。

「ありがとう、華蝶仮面。ありがとう！」

その彼女が見えなくなるまで、一刀は手を振り続けた。

華蝶仮面が大立ち回りを演じた通りに面した場所にある酒家。殆どの客が野次馬に店の外に出してしまった中、2人の少女が普通に食事をしていた。

「何やら外が騒がしいですね。」

金髪の少女が、目の前に座る黒髪で眼鏡の少女に話し掛ける。

「大方、星が何かやったのよ。気にしても仕方無いわよ。」

特に何も無かったかの様に、2人は普通に食事を続けた。

事態が一段落して、一刀は少女と老婆の方に近付いた。大丈夫、としゃがみ込んで2人に尋ねる。

「あ、はい。ありがとうございます。」

控え目に笑ってお礼を言う少女。老婆も少し擦り傷がある程度で、問題は無かった。

「まあ、助けてくれたのは華蝶仮面で、俺は何も……！」

釣られて笑った一刀の顔が、一気に強張る。その眼前には、光り輝く刃。

「貴様、月様に何をしている。」

一刀の耳に届く女性の冷たい声。一刀は目の前の刃から、視線をゆっくりと上に上げていく。そこには鎧を纏った銀髪の女性が立っていた。

目が合った一刀は、冷や汗をかきながら引きつった笑みを浮かべる。だが、女性の表情は険しさを増した。

「月様から離れろっ……！」

そう叫び、右手1本で巨大な戦斧を振り上げる。咄嗟に後ろに転がる様にして離れる一刀。その直後、戦斧が轟音をあげて地面を抉った。

「華、華雄さん！待って……。」

「何やってるの、月！いいから離れて！」

戦斧を振り回す女性を止めようとした少女は、その後ろから来た眼鏡に三つ編みの少女に抱かれて離される。

「え、詠ちゃん！？違うの、あの人は…。」

少女は必死に抵抗するが、その声は届かない。

「ええい、ちょこまかと！」

物凄い勢いで振る戦斧をかわされ続け、忌々しげに叫ぶ女性。距離を取った一刀に駆け寄りながら、再び大きく戦斧を振り上げる。

そのタイミングを一刀は狙っていた。さっき地面を転がった時に拾っていた木片を投げ付ける。

虚を突いたとは言え、当たりはせず左手で軽く払われてしまう。しかし、それによって生じる一瞬の間を利用して、一刀は人垣の中に飛び込んだ。

「待て、貴様っ！」

そう叫ぶものの、一刀を追おうとはしなかった。さすがに人混みの中で戦斧を振り回す気は無い様だ。女性は1つ舌打ちすると、2人の少女の方に近付いて行った。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ…。」

人垣を抜けた一刀は路地に入り、荒くなった呼吸を整えながら後ろを確認した。どうやら一刀の読み通り、追っては来ないようだ。ホツと胸を撫で下ろし、城へ向かって歩き出す。その道すがら、一刀はさっきの事を思い出した。

『あの子、斧の人の事を華雄、って呼んでたな。て事は、まさかあの子が…。』

そう考えて、一刀はその想像を振り払うかの様に激しく首を横に振った。一刀には、どうしても少女と自分が考えた三国志の武將が結び付かなかった。正確には、結び付けられなかったのだった。

第1章・涼州編・第3話〈胡蝶乱舞〉（後書き）

と言う事で、華蝶仮面だけでなく、華雄までもが街中で大暴れ、な話になりました。本来は、次話と併せて1つの話の予定でしたが、長くなりそうなのでここで切ります。

原作ではどこかの倉から出てきた蝶の仮面ですが、この小説では、シルクロードを通って西から来た物をこの街で見付けた、と言う事にしました。

ちなみに、ヒロイン達の年齢は原作とは違い、外見相応に設定してあります。

第1章・涼州編・第4話↪天の御遣い↪(前書き)

第4話、前話の翌日の話になります。

第1章・涼州編・第4話／天の御遣い

武威の城の大会議室。普段は文官武官が集まったの軍議が行われるこの部屋も、今日は派手な装飾が施され室内からは楽しげな声が聞こえて来ていた。馬騰の誕生日パーティーが部屋の中で行われているのである。

そこには招待客として、近隣の都市の太守やこの地方の豪族、さらには街の有力者までいる。しかし、一刀の姿は部屋の中には無かった。

今、一刀はパーティー会場となっている大会議室の部屋の外に居る。緊張した面持ちの一刀は、落ち着かない様子で身だしなみを確認する。その服は最近すっかり着慣れた文官服ではない。クローゼットの奥に大切にしまっておいた聖フランチェスカ学園の制服である。馬騰から制服を着るように言われた時に、一刀は全てを理解していた。

一方、部屋の中では招待客の祝辞が終わり、馬騰が挨拶をしていた。

「…ここで皆に1人紹介するわね。しばらく前に都で噂になり、この誕生日パーティーの発起人でもある天の御遣いよ。」

入り口に立つ2人の侍女が両側から扉を開ける。その先に居る一刀に、部屋の中の人達の視線が一斉に注がれた。

一刀は大きく深呼吸すると、背筋をピンと伸ばして大股でゆっくりと歩き出した。

好奇、疑い、恐れ、羨望。様々な種類の眼差しが一刀を襲う。まるで動物園の珍獣にでもなったかの様で、すこぶる居心地が悪い。それらの目を見ないように、正面に立つ馬騰を見据えて歩き続けた。

一刀は馬騰の横で止まり、振り返る。2人の目がチラリと合った。

「天の御遣い、北郷一刀です。どうぞよろしくお願いします。」

そう言って、一刀は頭を下げた。色々な挨拶を考えたが、結局シンプルな自己紹介になってしまった。

しばらくの間の後、招待客から拍手が起こり、一刀はホツとした。そのまま用意されていた席に座る。馬騰を挟む様にして馬超と馬岱の席があり、一刀の席は馬超の隣だ。

お膳の上には様々な料理が乗っている。だが、一刀には料理に手を付ける暇が無かった。招待客がひっきりなしに酒を注ぎに来たためだ。もちろん、馬騰に直接祝いの言葉を述べに来たついでなのだが、彼らの態度を見るかぎりではどちらが本命だか分からない。

少し酔いも回って来た頃、一刀は不意に肩を掴まれた。驚いて顔を上げると、目の前には1人の男性。年は30代半ばといったところか。

いきなりの事に一刀が声も出せないでいると、相手の男性の方が口を開いた。

「ふむ、意外といい体をしているな。」

そう言いながら一刀の肩をバンバンと叩く。お陰で杯の中の酒は全て零れてしまった。

「叔父上、そんな事無いぜ。まだまだだよ、一刀は。」

横から馬超が口を挟む。

「あの、叔父上、つて事は、韓遂さんですか？」

「ああ、そう言えば名乗っていなかったな。私は韓遂、天水郡の太守だ。」

一刀の予想通り、目の前の男性は韓遂と名乗る。

韓遂、字は文約。一刀の知る歴史では、馬騰と義兄弟の契りを交わした人物である。

「では、御遣い殿。義姉上の事を宜しく頼むぞ。」

もう一度、一刀の肩を叩くと韓遂は自分の席へと戻って行った。

「叔父上は、あたしの亡くなった父上の弟なんだ。でも、どうして知ってたんだ？」

もちろん、一刀は知識として知っていたのだが、未来から来た事を秘密にしているため、正直には言えない。取り敢えず、どこかで聞いたという事にして誤魔化した。

『それにしても、韓遂は女性じゃないんだな。』

席へと戻った韓遂を見ながらそんな事を考えていると、急に横から声をかけられた。どこかで聞いた声だと思いながら振り返る。

「あつ、君は…。」

そこにはすまなそうな顔をして立つ少女が居た。身なりは大きく違うが、間違いなく昨日一刀が助けた少女だった。少女は一刀と目が合った瞬間、頭を下げた。

「昨日は本当に申し訳ありませんでした。助けて頂いたにもかかわらず、あの様な事を…。」

「いや、君のせいじゃないし、俺なら気にしてないから。」

一刀は顔を上げて欲しくて言ったのだが、この言葉に反応したのは、頭を下げている少女の後ろに立つ、眼鏡に三つ編みの気の強そうな女の子だった。

「何よ？まるでボクが悪いみたいな言い方じゃない。」

明らかに不満そうな声で喧嘩腰に文句を言う。

もちろん、一刀にそんなつもりは無い。しかし、そう言うという事は昨日の事を気にしているのだろう、と一刀は感じた。

「ダメだよ詠ちゃん、そんな言い方したら。北郷さんは恩人なんだから。」

少女は顔を上げて、眼鏡の娘をたしなめる。

「だって、月…。」

すると、それまでとは全く違う困った様な表情で、情けない声を上げた。

中学生位の少女達の仲の良さげな微笑ましいやり取りに、一刀の頬は自然と緩んでしまった。それに気付いた眼鏡の娘が、一刀をキツ、と睨み付ける。

「詠ちゃん…。北郷さんは恩人だけじゃなく、御遣い様なんだよ。」

子供に言い聞かせる様な柔らかい口調だが、その中に少し怒りが混ざっている様に一刀には感じられた。そして、それは眼鏡の娘も同じだった様で、慌てて睨むのを止めた。

「何だ、月。一刀といつの間に知り合いになったんだ？」

今まで一刀の横で食べる事に夢中になっていた馬超が、口に物を入れたままで喋り出す。その姿を、少しは目の前の少女を見習えばいいのに、と、呆れた顔で見る一刀。一方、その少女は微笑んで返事をする。

「はい、翠さん。昨日、北郷さんに2度も助けて頂いて…。」

そう言っただけ昨日の事を説明し出すが、さすがにややこしくなると思ったのか、華蝶仮面については口に出さなかった。

「そうか。ま、一刀も前よりだいぶ腕を上げたからな。」

そう言って、馬超は空になった口の中に焼売を1つ運ぶ。彼女にとっては何気ない一言だったが、一刀にはそれが凄く嬉しかった。

一刀自身、少しずつではあるが、着実に強くなっている実感があった。だが、自分よりも何倍も強い馬超に褒められる事は自信になった。

「そうだ、まだ君の名前を聞いてなかったよね。」

思い出した様に一刀は言う。馬超や眼鏡の娘が呼んでいる、月、というのは真名だろう。ひょっとしたら会話の中で名前が出て来るか、と思っていたのだが、そうはいかなかった。

この一刀の言葉を聞き、少女はハツとしてまた頭を下げる。

「ごめんなさい、うっかりしていました…。董卓、字は仲穎。隣
の安定郡の太守を務めさせて頂いています。」

やっぱりか、一刀はそう思った。昨日考えた通りの結果だった。

董卓仲穎、三国志における最大の悪役と言っても過言ではないだろう。皇帝をないがしろにし、政を自らの物とした拳句、酒色に溺れて暴虐の限りを尽くした人物。漢帝国を滅亡へと追い込んだ張本人である。

しかし、目の前の少女からはそんな雰囲気は微塵も感じられなかった。

次いで、一刀は眼鏡の少女に目をやった。董卓と仲が良い賢そう

な人物。李儒あたりだろうか、と考えた。

一刀と眼鏡の少女の視線が合う。少し不機嫌そうな顔でそっぽを向くと、自分の名前を口に出した。

「ボクは賈馱、字は文和。董卓軍で軍師をしているわ。」

腰に手をあて、偉そうなポーズで立つ賈馱を見ながら、一刀は予想が外れた事に少しガツカリした。と、急に馬岱が一刀と馬超の間から顔を出した。

「ねえ、月ちゃん。その髪止め可愛いね。どこで買ったの？」

「えっ？こ、これですか…？」

董卓は左手で自分の髪を触ると、頬をうつすら紅く染めてうつむき、上目遣いで一刀を見た。

「…これは、昨日北郷さんに買って頂いたんです。」

確かに董卓の髪にあるのは、昨日一刀が贈った髪止めだった。それを聞いて一刀の周りの空気が変わるが、彼はそれに気付かず喋り出す。

「ああ、良かった。よく似合ってるよ。」

昨日は結局着けた姿を見れなかったため、想像以上に似合っている事にホッとした。だが、それも束の間、目を釣り上げた賈馱が一刀の前に立つ。

「ちよつとアンタ、ボクの月をたぶらかすつもり!？」

「えっ、いや、あの…。」

ボクの、とか、たぶらかす、とかツッコミたい気持ちはあるが、あまりの剣幕に言葉が出ない。と、今度は後ろから。

「一刀さくん、たんぼぼにも何か買ってよ。」

そう言って、馬岱は一刀の首に抱き付く。

「いや、違うんだって、馬岱。これは…。」

一刀は何とか馬岱を引き剥がそうとするが、それまで黙っていた馬騰が爆弾を投げ込んだ。

「なあに、一刀君。翠だけじゃ飽き足らずに、月ちゃんにまで手を出したの？意外と手が早いのね。」

酔っているのか、赤い顔で楽しげに笑う馬騰。

「ちよつと、何言ってるんですか！馬超にも董卓にも手なんか出してませんよ！」

当然、抗議する一刀。このままでは、とんでもない誤解をされかねない。しかし、馬騰は、何を言ってるの、とでも言いたげな顔をしている。

「だって、会ったその日に翠の胸を触って、下着まで見せたんでしょ。」

確かにその通りだ。その通りだが、何もこんな時に言わなくてもいいだろう。

「やっぱり！ダメよ、月。こんな奴に騙されたりしちゃ。」

賈馱は振り返って董卓の両肩をガシツ、とつかんだ。

あまりの状況に、一刀は恥ずかしくなってくる。ふと横を見ると、馬超が顔を真っ赤にして何かを呟いている。

「
x …！」

まずい。一刀がそう思った時にはすでに遅かった。恥ずかしさに耐えられなくなった馬超の拳が一刀を襲う。

「ゴフツ！」

一刀の腹部に突き刺さる馬超の拳。その衝撃で一刀の体は、くの字に曲がる。

「か、一刀さん！？大丈夫！？」

強烈な一撃に、馬岱や董卓だけでなく、先程まで敵意をむき出しにしていた賈馱までもが心配そうな顔をいていた。一刀は激しく痛み腹を押さえながらも、何も食べないでおいで良かった、そんな事を思っていた。

誕生日パーティーが終わった後、一刀達は二次会の様な感じで馬騰の私室に集まっていた。

「…ふふつ。それにしても、一刀君は災難だったわね。」

酒の注がれた杯を揺らしながら、馬騰は楽しそうに笑う。一体、誰のせいで一刀に災難が降り掛かったと思っているのか。しかし、一刀はそれを口に出さない。他に尋ねたい事があつたためだ。

その答えを聞くのは、正直少し怖い。自分の想像している答えと違っていた時の事を考えると、このまま黙っていようか、とも思う。

だが、それでも一刀は意を決して口を開いた。

「俺を、天の御遣いとして紹介してしまつて、本当に良かったんですか？」

字の読み書きですら、この世界に来た当初よりは出来る様になったが、胸を張つて大丈夫とは言えない。

当然、仕事にしてもそうだ。出来る事は増えたが、その1つ1つのスピードやクオリティは、周りの人を満足させられるレベルには到達していない。

何より一刀自身、天の御遣いとして特別な力が無い事を実感している。子供の頃から習っている剣術でさえ、馬超達の足下にも及ばなかったのだから。

そんな一刀の不安な気持ちは顔に出ていた。その表情を見て、馬騰は杯を置いて姿勢を正す。

「…私があなただを天の御遣いと認めたのは、仕事が出来るからでも、力があるからでもないわ。」

「なら…!」

まるで、心の中を見透かされた様で恥ずかしくなり、一刀は声を上げる。だが、馬騰はそれを手で制して話を続けた。

「城中でも非番の時の街中でも、あなたの事は監視させてもらってたわ。その上で、あなたの人となりを見て判断したの。私は、あなた自身を認めたのよ。…これでは納得できない?」

「…分かりました。」

そう言ったものの、一刀の表情はスッキリしていない。そんな重い空気を吹き飛ばす様に、馬超は明るく喋り出した。

「じゃあ、母様。あたしからの誕生日の贈り物。…ほら。」

馬超は自分の後ろから木箱を取り出すと、押し付ける様にして馬騰に渡す。

「開けてもいいかしら?」

もちろん、という返事を聞いてから、馬騰は少しワクワクした表情で木箱の蓋を開ける。その中に入っていたのは、一組の手甲だった。

馬騰は木箱から手甲を持ち上げながら、贈り主を見る。

「母様の使ってる手甲はだいぶ年季が入ってきてるだろ。だから、そろそろ替えた方がいいかと思って、さ。」

母親へのプレゼントなどした事の無い馬超は恥ずかしいのか、馬騰とは目を合わせようとはしなかった。その様子を見て、馬騰は微笑みながら、ありがとう、と、感謝の気持ちを伝える。

そんな親子のホンワカとした空気を馬岱が切り裂く。

「ちょっと、お姉様。せっかくの贈り物に武具を選ぶなんて何を考えてるのよ、もう！」

「なっ！……じゃあ、たんぽぽは何を贈るんだよ？」

馬岱は自信有りげに笑うと、皆に背を向けてゴソゴソとやる。数秒後、その手に服を持って振り返った。

「こ、これ…？」

馬騰は馬岱の差し出した服を見て、完全に引いていた。だが、それに気付かない馬岱は満面の笑みで勧める。

「うん、可愛いでしょ？叔母様、若いんだからきつと似合うよ。」

確かに馬騰は若く見える。彼女が40歳だと聞けば、10人中9人までが驚くだろう。20代後半でも通じる程だ。それでもこの服は厳しい。

デザインとしては、普通のミニのワンピース。しかし、ピンクを基調として黄色などのビビッドな色を配したその服には、大量のフリルが付けられている。

「あ、ありがとうございます…。いつか機会が有ったら着させてもらうわね。」

引きつった笑顔で受け取ると、背後にあるベッドの上に置いた。

「では、琥珀様。私からはこちらを。」

鳳徳は小さな桐の箱を取り出し渡す。蓋を開けると、中には1冊の本。それは馬騰が探していた本だった。先日、武威の街を訪れた行商人が扱っているのを、たまたま見付けたのだ。

「ありがとうございます、鷹那。後で読ませてもらうわね。」

蓋を戻した箱は机の上に置かれた。

「じゃあ、後は一刀だけだな。」

4人が一斉に一刀を見る。その目には期待の色が浮かんでいる。

それはそうだろう。今回の誕生日パーティーや誕生日プレゼントの言い出しっぺは一刀なのだから。

「馬騰さん、おめでとございます。」

制服のポケットから小さな箱を取り出して馬騰に手渡す。

「ありがとう、一刀君。開けさせてもらっわよ。」

蓋を外すと、箱の中には髪飾りが入っていた。両手でそれを取り出した馬騰は、髪飾りに宝石が付いている事に気が付いた。

「これは、琥珀ね。…綺麗な色だわ。」

自分の目線より高い位置に持ち上げ、見上げる様にして見る。半透明の黄色、まさしく琥珀色である。

「…気に入って、もらえましたか？」

おそるおそる、といった雰囲気で見つめる一刀。

「ええ、とても素敵だわ。」

そう言つと、早速着けようと手を頭の後ろに回す。

一刀はホツとした。馬騰の真名と同じ名前の物をプレゼントする事は、果たして許されるのか、という不安があったためだ。一応、昨日の段階で董卓に確認は取っていたが、それでも不安はゼロでは無かった。

しかし、そんな想いは髪飾りを着けて似合うかどうか尋ねてきた馬騰の笑顔で全て払拭された。

「あなた達、本当にありがとう。特に一刀君。あなたのおかげで、今までで一番の誕生日だったわ。」

いえ、と首を横に振る。

「で、あなたにも誕生日の贈り物があるの。」

それは、あまりにも予想外の言葉だった。自分の誕生日はまだまだ先だし、何よりそんな話をした覚えが無い。

不思議そうな顔をする一刀に対し、馬騰は話を続ける。

「天の御遣いとしてのあなたの誕生日は、今日だと言っても間違っていないでしょ。」

一刀は、そういう事か、と納得した。そんな一刀に、鳳徳が大きな木箱を渡す。

大きさの割には軽い箱。一刀は一旦床に置いてから蓋を開ける。その中に入っていたのは、白い服だった。

「これは…。」

箱の中から1着を手取る。それは、今一刀が着ている服とほぼ同じデザインだった。そんな服が4着も入っている。

「これからは、あなたは仕事非番関係なく、この服を着る事。誰にも天の御遣いだと分かる様にね。それから、今あなたが着ている本物は、大事な時のためにしまっておきなさい。」

デザインは確かによく似ている。一刀なら違いが分かるが、普通に見る分には分からないだろう。

しかし、材質だけはそうはいかない。化学繊維であるポリエステル
の光沢までは真似が出来なかった。

「一刀は礼を言いながら手に取った服をたたむ。だが、馬騰からの
プレゼントというのは、これだけではなかった。」

「それと、もう一つ。あなたに、私達の真名の預けるわ。」

突然の事に、えっ、と声が漏れ、服をしまいかけていた手が止ま
る。一瞬の間の後、一刀は慌てた様子で口を開いた。

「ちょ、ちょっと待って下さい！真名って、家族みたいに親しい
人が、よっぽど信頼した人じゃないと呼ばせないんでしょ？それな
のに、俺なんか…」

「一刀のこの反応は当然と言えるだろう。最初に馬岱の真名を呼ん
でしまって殺されかけた時から、真名に対して必要以上に過敏にな
っているのだ。」

だが、そんな一刀に馬騰はため息をつきながら返す。

「…さっき言った事を、もう忘れたの？私達はあなた自身を認め
た、と言ったわよ。少なくとも、あなたは真名を預けるに足るだけ
のものを、私達に示してくれた。そういう事よ。」

「だいたい、もう3ヶ月も一緒に暮らしてるんだぜ。十分家族み
たいなもんだろ。」

何を当たり前の事を、とでも言いたそうな顔で馬超が続けた。

「あら翠、いい事言うわね。確かに、家族と言っても過言ではないわ。私からしてみれば、急に大きな息子が出来た様なものだもの。」

そう言うのと、馬騰は一刀に向かってにこやかに微笑み掛けた。そこで一刀はハツとする。

その微笑みは馬超達に向けられる物と同じ。そして、自分に対しても、しばらく前から優しさに満ち溢れた微笑みを向けていた。

「そうだったんだ…。」

そう呟いた一刀の目から、自分でも気付く事無く涙がこぼれた。

そんな涙溢れる瞳を、馬騰は真っ直ぐに見つめる。一刀も涙を拭いて見つめ返した。

「私の真名は琥珀よ。一刀君、あなたに私の真名を預けましょう。」

続けて馬超。

「あたしの真名は翠だ。よろしくな、一刀。」

馬岱と鳳徳も続く。

「たんぼぼの真名は蒲公英だよ。改めてよろしくね、一刀さん。」

「私の真名は鷹那です。我が真名、一刀さんに預けます。」

4人から真名を受け取った一刀は、背筋をピンと伸ばして姿勢を正す。

「北郷一刀です。天の御遣いの名に恥じない様、精一杯努力していきますので、これからもよろしくお願いします!」

深々と頭を下げる一刀。涙で濡れたその顔は、どこまでも澄み渡る青空の様に晴れやかだった。

第1章・涼州編・第4話「天の御遣い」(後書き)

と言う事で、第4話にしてやっと真名を預けられた一刀君でした。

原作でははっきりしなかった月の役職は、本文中にある通り安定郡の太守にしました。また、原作をプレイして、華雄ら董卓軍の将は月の正式な配下と言うより客將的なポジションの様に感じたんですが、この小説では月の忠実な部下として設定してあります。

第1章・涼州編・第5話〈初陣〉（前書き）

第5話、一刀がやっと戦場に出る事になります。

今更ですが、少し書き方の勉強をしたので、今話から少し文章が変わります。

第1章・涼州編・第5話〜初陣〜

武威の城内の中庭。その中庭の一画にある鍛練場からは、普段と変わらぬ剣戟の音と気合いの入った声が響く。だが、今日は普段と違う事が1つだけあった。

「ま、参りました……」

喉元に訓練用の模造刀を押し当てられた状態の蒲公英が言う。では、模造刀を振るっていたのは誰かと言うと、一刀であった。フーッ、と大きく息を吐いてから剣を下ろす。

「うう、一刀さんに負けるなんて〜」

蒲公英は大変悔しそうだ。それもそのはず、初めて蒲公英は一刀に負けたのだ。しかも、蒲公英達4人の中で初めての負けであった。

その日の夕飯後、一刀は琥珀の部屋に呼び出された。これ自体は珍しい事ではない。週に1〜2回は、小さな宴会の様な雰囲気や酒盛りをしているのだ。今回も祝勝会の名目で酒盛りでもするんだろう。そんな事を考えながら、一刀は琥珀の部屋のドアを開けた。

しかし、一刀の予想に反し、部屋の中には徳利の1本も無かった。琥珀の雰囲気もいつもと違う感じがし、姿勢を正してその前に立った。

「まずはおめでとう、一刀君」

そう言ったものの、琥珀の表情は崩れない。

「あなたに渡したい物があるの」

琥珀がそう言うと、脇に控えていた鷹那が細長い木箱を取り出して机の上に置いた。蓋を外してみると、中には2本の剣。鞘に納まってはいるが、緩やかに反った形状。長さの異なる2本の剣は、まさしく日本刀の様だった。

そう言えば、と一刀は思い出した。しばらく前、日本刀について琥珀に詳しく話をした事を。

兵への支給品がそうである様に、訓練用の模造刀も両刃の直刀である。そのため、反りのある日本刀とは、どうしても扱い方が違ってくる。その事に悩んでいた一刀が琥珀に相談した時に、日本刀の事を色々話したのだった。

一刀はゆっくりと、まるで魅入られたかのように2振りの刀に手を伸ばしていく。だが、その手が刀に触れる直前、琥珀の鋭い声が響いた。あまりにも突然の事に驚き、一刀の手は止まった。

「ただし！ もし、この剣を受け取ったなら、今後あなたには武官としても働いてもらうわ」

その言葉に一刀の体が固まる。琥珀の目を見るが、当然冗談という訳ではなさそうだ。

一刀の動揺を感じ取ったのか、琥珀は少し表情を緩めて続けた。

「私はあなたの内政能力を高く評価しているの。だから、もし受け取らないとしても、それならそれで構わないわ」

一刀は再び刀へと視線を落とす。黙ったまま、身動き一つしない。

「……そうね。すぐに答えの出せる事ではないでしょうし、今夜一晩じっくりと……」

「……いや、大丈夫です」

琥珀の言葉を遮ると、一刀はおもむろに刀をつかんだ。その表情には、すでに迷いが無い。

「……分かってているの？ 私は人を殺せと言っているのよ。あなたにその覚悟がある？」

少し怒った様な口調の琥珀。迷いがあるのは、むしろ彼女の方がもしれない。

刀を手にした状態で、再度琥珀の目を見る一刀。そのまま、ゆっくりと口を開く。

「俺が今こうしていられるのは、琥珀さんや翠のおかげです。もしあの時追い出されていたら、きっとどこかでのたれ死んでいたと思います。だから、その恩に報いたい」

もちろん、琥珀は一刀を善意のみで助けた訳ではない。彼自身、そして天の御遣いの名に利用価値を見出だしたから、ということころ

が大きい。しかし、一刀にしてみればどちらでもよい。彼にとっては、助けてもらった、という事実こそが大事だった。

「……確かに、覚悟は決まってる。人を殺したくなんかない……でも、嫌なんです！ 傷付いている人がいるのに、自分だけ安全な場所でぬくぬくと暮らしていくのは。苦しんでいる人がいて、それを救う力があるのに見過ごす様な真似はしたくない！」

大声ではつきりと自分の決意を述べる一刀。その拳は痛い位強く握られていた。

今日も一刀は夜の自主トレを行っていた。しかし、普段とは違い、その手には先程拝した刀が握られている。

わずかに反ったその形状は確かに日本刀に似ているが、刀身はそれよりも厚い。その分重いが、それでも配給されている剣よりは軽かった。その刀の感触を確かめる様に型を繰り返す一刀。

鍛練が一区切り付いたところで、後ろから声を掛けられる。振り返ると、そこには翠が立っていた。

「本当にいいのか、一刀？」

近くに篝火も無いために、翠の顔を照らしているのは月明かりだけだ。だが、それでも翠の真剣な表情は分かる。

「翠も反対なのか？」

あの場では誰も反対しなかったが、それは表立って、というだけで賛成もしていない。蒲公英でさえ、

「叔母様と一刀さんが良いなら、たんぼぼは構わないけど」

と言っただけであった。

「あたしはたんぼぼと一緒にだ。ただ、お前が本当にそれで良いのか知りたいだけだ」

翠の問い掛けに、一刀は太刀を鞘に戻しながら答える。

「俺は知りたいんだ。自分が何者なのか、何が出来るのか」

いきなりの言葉の意味を分かりかねた翠は、ポカンとした様な間の抜けた顔をしてしまう。その表情に思わず笑いそうになり、一刀は体を横に向けて続けた。

「俺の剣の師匠でもある爺ちゃんがよく言ってたんだ。全ての物事には、必ず原因がある、って」

剣術道場を開いていた祖父に、一刀は小さい頃から懐いていた。祖父もまた、そんな一刀を可愛がった。剣を教えるだけでなく、様々な所に連れ出し、色々な話を聞かせたりしていた。幼少時代の一刀にとっては、両親よりも大きな存在であったのだ。

「だから、きっと俺がここにいる事にも意味があるはずなんだ。それを知るためにも、俺は現実を知らなきゃならない。そうして初

めて、俺に出来る事やしなきゃならない事が分かるんだと思うんだ」

強い決意を秘めた瞳で夜空を見上げる一刀の横顔に、翠の心臓は思わずドキリと跳ねた。

「……ま、まあ、安心しろよ。あたしが守ってやるからさ」

気恥ずかしさをごまかす様にそれだけ言い残し、翠は早足でその場を立ち去った。その背中を見送ると、一刀は再び刀を抜いて刀身を見つめた。

一刀の初陣は、彼が考えていたよりもずっと早く訪れた。蒲公英に勝ってから3日後、一刀は賊討伐に出陣した。場所は武威郡と安定郡の郡境。

中原を荒らし回った黄巾党の首領、張角が討ち取られたという噂は、すでに西涼にまで届いていた。しかし、情勢が安定しつつある中原とは対照的に、今まで黄巾党の被害にあっっていなかった地方に賊が出現し始めた。これは、指導者を失った黄巾党の残党が、官軍の追撃を逃れるために地方に散って行ったためである。

今回、一刀達が討伐の対象としている賊も、黄巾党の残党だった。元々、安定郡に流入したのだが、そこで董卓軍の攻撃を受けた。そこを逃げ出した者達が武威郡に入り、周囲の賊を吸収して大きくなったのだった。

そんな経緯があるため、今回の討伐は董卓軍との合同作戦になっていた。

馬騰軍の大將である翠は、副將の蒲公英、そして一刀を参謀として三千の騎兵を率いて進軍していた。先頭を走る翠が、その後ろを走る一刀に馬を寄せる。ちなみに、この世界に来てすぐの頃から馬術の練習をしていたため、行軍だけであれば問題無かった。

「一刀、緊張してるのか？」

馬を並走させて、翠が尋ねる。緊張を表に出している自覚は無かったし、蒲公英も気付いていなかったが、翠だけは一刀の緊張を見抜いていた。

「安心しろ。母様からは、お前を前線に出さないように言われているんだ。しばらくは、戦場の空気に触れるだけでいい」

その言葉に、一刀は心底ホツとした。と同時に情けなく思う。琥珀達の前であれだけ大きな事を言っておきながら、実際に戦場に着く前から緊張でガチガチになっているからだ。

「それに、言っただろ。あたしが守ってやる、って」

「ああ、そうだったな。ありがとう」

まだ若干硬いが、一刀は翠に笑顔を返した。

「おう、久しぶりやな、翠！」

董卓軍との合流地点に着くなり、1人の女性が明るく声を掛けてきた。上半身は胸にサラシを巻いて肩に羽織を掛けただけ。下半身は袴に下駄履きという服装に一刀が目のやり場に困っていると、女性の方から近付いて声を掛けてきた。

「あんたが北郷一刀やな。なるほどな」

興味津々といった表情で、頭天边から爪先までジロジロと見てくる。少し前かがみになって見てくるため、一刀の目に胸の谷間が飛び込んで来て顔が赤くなった。それに気が付いた女性は、身をよじって悪戯っぽく笑う。

「なんや、詠の言うとおった通りスケベなんやね」

「なっ……！」

恥ずかしさで一気に顔が真っ赤になるのが自分でも分かる。その様子を見て、女性は大声で笑いながらバシバシ一刀の肩を叩く。

「あっはっは。冗談や、冗談。ウチは張遼、字は文遠や。よろしゅうな」

張遼文遠。歴史では董卓や呂布に従った後、その生涯を終えるまで曹操に仕えた名将である。

その張遼の後ろから翠が声を掛ける。

「霞、一刀をからかうのはそのくらいにして、軍議をするぞ」

そやね、と言って振り返ると、張遼は天幕に向けて歩き出し、一刀達もそれに続いた。

天幕に入ると、張遼はテーブルの上に地図を広げて状況説明を始めた。

賊の根城は、今一刀達がいる場所から3キロ程離れた位置にある小さな山の頂上にあった。斥候の情報では、草木の生い茂る山の中を通る道は1本しかない。

「ちゅー訳やから、ウチの隊と翠の隊とで街道の両側から攻めたらええんや」

張遼の作戦に翠はうなずいた。しかし、そこに一刀が口を挟む。

「なあ、本当に他に道は無いのか？ 大軍が通れる様な大きな道じゃなくて、獣道みたいなのとかさ」

翠と張遼はどういう事かと尋ねてくる。

「根城を破壊するのが目的ならともかく、今回は賊の……殲滅が目的なんだから？ だったら、逃げ道は完全に潰しておかないと」

その説明を聞いて、確かにそうだと感じた張遼は、再度斥候を放った。

結果、一刀の心配した通り、根城のすぐ裏からふもとまで抜ける小道の存在が確認された。それを受けて、改めて作戦を練り直す。

張遼が董卓軍三千を率いて街道の東から、翠が馬騰軍三千の内二千五百を率いて西から攻め上がる事にした。そして、残りの五百を蒲公英が率いて小道の出口をふさぐ。一刀もこの別動隊に配置される事になった。

その後、夜半過ぎまで休んでから出陣する。賊に気取られない様に、夜の闇に紛れて根城へと近付いて行った。

荒野の彼方に朝日が昇り、夜明けの静寂を銅鑼の音が打ち破る。

「よっしゃ！ 張遼隊、出陣や！ 馬超隊に遅れんなや！」

「馬超隊、行くぞ！ 賊を一人たりとも逃がすなよ！」

銅鑼の音を合図に、2人の指揮官は部下に檄を飛ばし進撃する。雄叫びと馬の蹄の轟音が辺りに響き渡った。

「始まったみたいだね」

蒲公英は横にいる一刀に聞こえる様に呟いた。剣戟の音と共に聞こえてくる断末魔の叫び。見る見る一刀の顔が青ざめる。それを見た蒲公英が心配そうに声を掛けた。

「だ、大丈夫なの？ 無理そうなら、後ろに下がってた方がいいよ」

「……」めん、そうさせてもらつよ」

一刀には、すでに強がりと言う余裕も無かった。蒲公英に背を向けてその場から離れる。情けなくも悔しくもあつたが、恐怖には勝てなかった。

蒲公英達から離れた場所で気持ちを落ち着かせようとしていると、彼女の前の茂みがガサガサと揺れた。蒲公英達はもちろん、離れた所にいる一刀にも緊張が走る。蒲公英は隠れている兵達に目配せして、戦闘に備えさせた。

茂みからは予想通りに賊が出て来る。それも、1人2人ではない。数10人も賊がゾロゾロと、安堵の表情を浮かべて出て来た。

だが、すぐには飛び出さない。賊を逃がさない様に、十分に引き付ける。

「今だよ！ 馬岱隊、突撃ーっ！」

賊達が7割方茂みから出て来たところで、蒲公英は部隊を突撃させる。逃げ切れた、そう思った時に襲撃され、賊達は一気に崩れていった。

自分の視界の中で行われる殺し合いに、一刀の意識は遠くになっていく。一刀は恐怖に耐えながら、必死に意識を繋ぎ止めていた。

賊の一部が再び茂みの中に逃げ、それを蒲公英達が追いつけ始めた時だった。一刀の後ろの茂みが揺れた。

とつさに隠れて様子を窺うと、茂みの中から3人の男が出て来る。

「どうやら逃げ切れたようですね」

脇にいる男が真ん中の男に話し掛ける。

「ああ。まあ、時間稼ぎ位しか使い道の無い連中だからな」

笑いながら中央の男が言う。その雰囲気と言葉の内容から、一刀はこの男が賊の大将だと当たりを付けた。

逃がす訳にはいかない、と思うが、蒲公英達はこちらに気付いていない。どうするか悩んでいる間にも、賊達は離れて行く。

『くそっ！ 何やってるんだ、俺は！』

一刀は意を決して飛び出した。

「待て、お前等！」

大声で3人の背中に向かって叫ぶ一刀。その右手は刀の柄に掛かっている。

振り返った3人は驚いた様な怯えた表情を見せたが、すぐにそれは消えた。一刀1人、しかも、足が微かに震えている事に気が付いたためだ。

「おい、とつとと殺っちまえ」

賊将はそう言うと、一刀に背を向けた。2人の手下が笑いながら剣を抜き、一刀に近付いて行く。

一方、一刀も刀を鞘から抜いて片手で構えた。すでに、一刀の体から震えが消えている事にも気付かず、賊兵は不用意に間合いを詰める。2人が剣を振り上げた、その瞬間だった。

「ぐわっ!!」

「がっ……!!」

短い悲鳴を残して、賊兵は地面に倒れた。

一刀は彼らを殺してはいない。刀の刃を返して、峰打ちで昏倒させただけだ。

一刀にとって、殺される事は確かに怖い。だが、それと同じ位、殺す事に恐怖を感じていた。しかし、峰打ちならば、頭部を強打する様な真似をしない限り、相手を殺してしまう可能性は低い。そう考えるだけで、一刀の体と心は随分と軽くなった。

だが、戦場はそれほど甘くはなかった。

1人残った賊将は、腰に下げていた斧を手に取り、一刀ににじり寄る。その斧は、華雄が持っていた柄の長い戦斧の様な洗練された武器ではない。木こりが使う木製の短い柄の斧である。

だが、その無骨なデザインと血錆の浮いた刃は一刀を威圧する。

「調子に乗んな、このガキッ!」

力一杯振り下ろされる斧。一刀はそれを大きく後ろに跳んでかわした。続けて振るわれる斧も、華麗な足捌きで避けていく。

武術に関して何の心得も無く、ただ力任せに斧を振り回すだけの攻撃など、今の一刀には全く問題無い。斧をかわしながら、カウンターのタイミングを計る。

だが、一刀は目の前の相手に集中しすぎていた。攻撃をかわすために後ろに引いた右足を、何者かに捕まれ引つ張られる。突然の事に為す術無く倒れる一刀。一体何が起こったのかを考えるよりも先に、彼は地面の上を転がった。その直後、一刀がいた場所に向けて斧が振り下ろされた。

距離を取った後、片膝をついて起き上がる。そこには賊将ともう1人、先程昏倒させたはずの男が立っていた。

打ち込んだ場所が微妙にずれていたのか、それとも無意識の内に力を抜いてしまったのか、それは分からない。しかし、賊兵の1人は一瞬意識が飛んだだけで復活していた。

と、一刀の目にそこにあるはずの無い物が映る。賊将もそれに気付いたのか、余裕たつぷりに笑いながら拾い上げた。

「へっ、武器を手放すなんて、間抜けなガキだぜ」

そう言って、賊将は拾ったそれを背後に投げ捨てた。

今さっきまで一刀の右手に握られていたはずの太刀。倒された拍子に手放してしまったのか、地面を転がった時なのか。ともかく、

一刀自身も気付かないうちに、太刀は彼の手からこぼれていた。

片膝をついたまま、慌てて脇差しを抜く。太刀よりも、圧倒的に心許ないその姿に不安を覚え、再び恐怖が彼を支配しようとしたその時だった。

「一刀っ！」

少女の叫び声が辺りに響いた。

第1章・涼州編・第5話〱初陣〱（後書き）

と言う事で、次回に続きます。

ちなみに、自分は生粋の関東人なので、霞の関西弁はかなりいい加減で、雰囲気ですべて書いています。

第1章・涼州編・第6話〜抱擁〜（前書き）

第6話、前話の最後より少し時間を遡ったところから始まります。

第1章・涼州編・第6話く抱擁く

混乱する賊兵の中、馬上で槍を振るう翠。すでに、賊の陣の真っ只中に突っ込んでいた。だが、そこには賊の大将の姿は無い。

「翠、どうや？ 賊共を率いとる奴はおったか？」

張遼もやって来たが、どうやら翠と同じで賊將を見つけられずにいる様だった。

「どうやら、一刀の言った通りになつたみたいやね」

翠の横に自分の馬を並べて張遼が言う。しかし、翠は押し黙つたままだ。

「なあ、どないしたんや、翠？」

わずかにうつむき、何かを考えている様な表情を見せる翠の顔を張遼が覗き込む。2人の目が合った瞬間、翠は顔を上げた。その勢いに驚く張遼に翠は、

「すまない、霞。こっちは頼む！」

とだけ言い残し、馬首を返す。

「なつ……！ おい、翠、待たんかい！」

そんな張遼の制止も聞かず、翠は陣の裏手にある獣道に馬を飛び込ませた。あくまで獣道であり、普通であれば騎乗したまま駆け抜

けるなど不可能な道。しかし、翠の乗馬の腕と彼女の愛馬、麒麟の力によって全速力で駆け下りて行った。

「えっ？　ちょ、ちよつと、お姉様!？」

逃げる賊を追撃していた蒲公英は、茂みの中から飛び出して来た翠の姿を見て驚いた。馬の足を止めた翠は、辺りを見回しながら蒲公英に尋ねる。

「たんぼぼ、一刀は？　一刀はどこだ!？」

「えっ？　一刀さんなら、後ろに下がってもらったけど……」

そう言つて、後方に目をやる蒲公英と翠。しかし、そこに一刀の姿は見えない。

「あれ？　一刀さんは……?」

緊張感の無い蒲公英を、翠が怒鳴り付ける。

「何やってんだ、たんぼぼ!　一刀を守る様に言つたる!　護衛の兵1人付けないなんて、何やってんだお前は!」

蒲公英を睨み付けた後、再び一刀の姿を探す翠。

そこからかなり離れた位置に一刀を見付けた翠はホッとすが、

そのすぐ側に立つ2人の賊の姿に再び慌てる。

「くそっ！ あんな所に！」

翠の乗る馬が駆け出す。その直後、賊の1人が剣を振り上げた。この距離では、いくら麒麟の足でも届かない。

「一刀っ！」

翠は一刀の名を叫び、その手に持った槍を投げた。

一刀は自分の名前を呼ぶ声を聞いた。次の瞬間、剣を振り上げた賊兵が血飛沫を上げて吹き飛ぶ。その体は翠の槍に貫かれ、一瞬で息絶えていた。

「な、何だ！？」

何が起こったのか分からず、辺りを忙しく見回す賊将。完全に意識の中から一刀は消えていた。

「うわあああああ！」

突然の叫び声と共に立ち上がる一刀。右手に持った脇差しを体の脇に付け、左手を柄尻に添えると、そのまま体ごとぶつかって行く。

一刀の方に向き直った賊将は、恐怖に支配された顔をするが、そ

の表情を見ても一刀の足は止まらない。脇差しの切っ先が賊將の胸に刺さる。それでも勢いは止まらず、脇差しは賊將の体を突き抜けた。

「……ゴボツ」

鏑まで脇差しを突き立てられた賊將は、嫌な音と共に血を吐いた。吐血が頭から掛かり、視界が赤く染まる一刀。

「ああああ！」

再び叫ぶと、両手で柄を握って賊將の胸から脇差しを抜いた。その傷口からは、大量の血が噴水の様に噴き出す。

「一刀、大丈……」

駆け寄って来た翠は、一刀に声を掛けようとして止めた。全身を返り血で真っ赤に染め、血溜りの中に一刀は立ち尽くしていた。

呼吸の荒い一刀。上下に動くその肩を、後ろから不意に掴まれて振り返る。そこには、さっき一刀が殺した男が口から血を流しながら立っていた。驚いた一刀は、振り向きざまに刀を振るい、首を刎ね飛ばす。

頭部の無くなった首から激しく血を噴き出す賊將。しかし、それでも動きは止まらない。恐怖で体を硬直させた一刀の首に手が掛け

られる。

「……や、止める。止めるーっ！」

ガバツ、と上体を起こした一刀は辺りを見回す。月明かりが窓から差すだけの薄暗い部屋の中には、彼以外誰もいない。静寂が包む部屋で、鼓動だけが大きな音で鳴り響いていた。

「夢、か……」

辺りを確認して、ホツとした様に呟いた。時計が無いため正確な時間は分からないが、窓の外には夜が明ける気配は無い。

ふと、一刀は自分が物凄い量の寝汗を掻いている事に気付いた。寝巻だけでなく、布団までぐっしょりだ。

布団を剥ぐと、ベッドの脇のテーブルの上にある水差しからコップに水を注ぎ、一気に飲み干した。すっかり温くなっていたが、汗を掻いて水分を失った体には、それでも気持ち良かった。

続けてもう一杯。渴いた体に水分が吸収されるのを感じて、心が落ち着いていく。しかし、落ち着くにつれ、今朝の事が思い出されてきた。

「俺は、人を殺したんだ……」

その手に人を刺した感触が蘇り、殺めた賊将の顔を思い出してしまった。その男が最後に見せたのは、絶望、恐怖、怨嗟、様々な感情が入り混じった様な表情だった。

一刀は首を激しく振り、頭の中から消そうとする。と、その時、部屋の扉が何者かにノックされた。突然の事に驚き、心臓が大きく跳ねる。

こんな深夜に一体誰が、そう思い返事をしないでいると、もう一度ノックの音が鳴った。視線を扉から外さずに、一刀は枕元に置いてある太刀を手に取る。

「……誰だ？」

小さく低い声で扉の向こうに尋ねた。

「一刀君、起きてるのね？」

扉の向こうの人物は、そうやって扉を開ける。薄暗いために顔は見えなかったが、声で琥珀であると分かった。

「どうしたんですか、琥珀さん。こんな夜中に」

安心した一刀は、太刀を元の場所に戻しながら尋ねた。しかし、琥珀は何の返事もせずに、ただ黙って一刀の方へと近寄る。

「……琥珀さん？」

もう一度名前を呼ぶが、やはり返事はない。表情を窺おうとしても、暗くて出来ない。

そのままベッドの脇まで歩くと、その端に静かに腰掛けた。何となく気恥ずかしくなった一刀は、琥珀から視線を逸らす。だが、琥珀はそんな一刀の肩を掴んで振り向かせると、両手でギュツ、と抱き締めた。

「ちよっ……！ ムグツ……」

頭を抱きかかえられたため、一刀は琥珀の大きな胸に顔を埋める格好になった。驚いて離れようとするが、力で琥珀に勝てるわけが無い。それでもあらがおうとする一刀の髪を、琥珀の手が優しく撫でた。

「よく頑張ったわね、一刀君。でも、もう我慢しなくていいのよ」

一刀がわずかに緩んだ腕の中で頭を動かし琥珀を見上げると、彼女は優しく微笑んでいた。

「……琥珀さん。俺……、俺っ……！」

一刀の頬を一筋の涙がつたう。それが呼び水となったかの様に、彼の瞳から大量の涙が溢れ出した。

「ううう……。うわああああ！」

一刀は琥珀の胸に顔を埋め、大声を上げて泣き出した。

朝に人を殺してから今まで一刀は取り乱す事は無かった。それはその直後もそうで、返り血を全身に浴びて血溜まりに立つ一刀を見て、翠は驚く程冷静だと感じていた。

しかし、心の中はそうではなかった。人を殺した恐怖と後悔、底知れない不安にえもいわれぬ不快感。それらの感情が、一刀の心の内ではない交ぜになっていた。

泣いたり叫んだりして、それらの想いを吐き出したい。全てを捨てて、不安や恐怖から逃げ出したい。そんな気持ちはもちろんあった。だが、一刀はそうしなかった。天の御遣いという立場と、天の御遣いであるという自覚がそれを許さなかったのである。

こうして、表面上は平静を装いながらも、心は激しく動揺している、非常にアンバランスな状態に陥っていた一刀。琥珀により溢れ出した一刀の感情は、まるで堰を切った様に一気に外に放出された。一刀が恥も外聞も無く泣いている間中、琥珀は柔らかな笑みを浮かべ、いとおしそくに一刀の髪を撫で続けていた。

しばらくして落ち着いたのか、ようやく一刀は泣き止んだ。しかし、まだ琥珀の胸に顔を埋めたままだ。

「……フフッ」

そんな一刀の頭の上から笑い声が聞こえる。笑われた、と思い、恥ずかしくなりうつむく一刀。その気持を察したのか、琥珀が口を開く。

「違うのよ。昔の事を思い出したの」

「…………昔の事？」

一刀は琥珀の胸の中で彼女の顔を見上げた。

「ええ。翠もたんぽぽも、初めての夜は一人で寝れなくてね、私の布団の中に潜り込んで来たの。特に翠はね、夜中に廁に行けなくて、おねしょまでして…………」

自分で喋っていて思い出した様で、笑いを堪えながら話した。あの翠ですら、初めて人を殺した後は普通ではいらなかったのだと分かり、一刀は少しホツとする。しかし、それと共に疑問が浮かぶ。

「…………それなのに、何で今は平気で人を殺せるんですか？ やっぱり、慣れるものなんですか…………？」

「…………ええ。あなたの考えている通りよ。きっと、一刀君も徐々に慣れていくわ。だから、心配しなくても大丈夫」

そう言っつて、また一刀の髪を撫でた。だが、彼にしてみれば、人を殺す事になど慣れたくはない。一刀が黙ったままでいると、

「もし辛ければ、刀を返してくれてもいいのよ。今なら、まだ間に合うわ」

と、琥珀が言った。

確かに、これ以上人殺しはしたくない。思わず、はい、と言いつつになつてしまう。だが、一刀は刀を受け取った時に言った言葉を思い出した。

自分が戦う理由。それは、世話になった人達に恩を返すため。そして、力を持たない人々を守るため。それなのに、ここで戦う事を止めてしまったら、それらの人達を裏切る事になってしまう。

そんな風に考えた一刀は、想いを包み隠さず琥珀に伝えた。

「……その気持ちを忘れちゃ駄目よ。どんなに辛くても、戦う理由さえ覚えていれば道を誤る事はないから」

琥珀はまるで諭すかの様に、優しく、そして強い口調で言う。それを聞きながら、一刀は何だか懐かしい感覚に教わっていた。その内に頭が少しポーツとして来る。

「うん……。ありがとう、母さん……」

2人の間の時間が止まる。先に何を言ったのか理解したのは一刀の方だった。

「……あつ、違っ！ ご、ごめんなさい！」

まるで学校の先生に向かって、お母さん、と言ってしまった時と同じ様な恥ずかしさに襲われた一刀。とっさに謝るが、琥珀は黙ったまま肩を少し震わせている。もしかして怒らせてしまったのか、と考えていると、琥珀は力一杯一刀を抱き締めた。

「あーん、もう、可愛い。母さん、だって。私、こんな息子が欲しかったのよ！」

そう言って、少女の様に喜ぶ琥珀。だが、琥珀に力一杯抱き締め

られている一刀にしてみれば、この状況はたまったものではない。骨が軋む位痛いし、何より、胸に顔を押し付けられて窒息しかねない。なんとか脱出を試みるものの、力では琥珀にかなう訳も無く、一刀はただただ藻掻く事しか出来なかった。

しかし、それが功を奏した。柔らかい布団の上だったため、2人はバランスを崩して倒れてしまう。その衝撃でようやく我を取り戻したのか、琥珀は力を弱めて一刀に謝った。

「……あ、いえ。大丈夫です……」

そう言ったものの、一刀は動かない。今になってやっと、琥珀の胸に顔を埋めているこの状況に気が付いたためだ。

薄い寝巻一枚通して、琥珀の体温と柔らかい感触を感じ、甘い香りが鼻腔をくすぐった。理性と欲望が一刀の頭の中で激しく戦う。と、そんな時だった。部屋の扉が、バンツ、と大きな音と共に勢いよく開け放たれた。

その音に驚いた2人が入口を見ると、そこには翠の姿があった。

「x ……！」

目を大きく見開き、何か驚いた感じで口を開けて、何事か呟いている。その手に持った蝋燭の灯りに照らされた顔は、いつもよりもさらに赤く見えた。

翠の様子を見て不思議に思った2人は、互いの目を見てハツとする。この状況は、一刀が琥珀を押し倒して襲おうとしている、としか見えない。その事に気付き、2人は弾けるように離れた。

「……ど、どうしたの、翠？　こんな時間に……」

ベッドの上で座り直し、乱れた寝巻を整えながら琥珀が尋ねる。

「……あ、あたしは、廁に行こうとしたら泣き声が聞こえたから、どうしたのかと思って……。そしたら、一刀が母様を……。そうだ、一刀！　お前、あたしの母様に何するつもりだったんだ!？」

喋っているうちに、驚きや恥ずかしさといった感情は怒りに変わってしまったらしい。蝋燭の揺れる灯りに照らし出された恐ろしい表情のまま、翠は2人にゆっくりと近づく。そんな翠をなだめようと、琥珀は恐る恐ると言っただけで声を掛けた。

「……ち、違つたよ、翠。これは……」

「母様は黙っててくれ!」

琥珀は、西涼の狼、と呼ばれて中原にまでその名が轟いている程の勇将である。その琥珀を、翠は一喝して黙らせる。

琥珀という防波堤を失った一刀。彼の頭の中には、すでに理性も欲望も無く、本能だけが目の前に迫りつつある脅威に対して警報を鳴らし続けている。

「で、どういふ事なんだ、一刀?」

一刀を見下ろしながら近づく翠。そんな彼女に下手な嘘や言い訳は危険だと感じた一刀は、今の状況を正直に話す事にした。

「翠と同じだよ。朝の事を思い出したら怖くて、琥珀さんに慰めてもらってたんだ」

翠と同じ、その前振りが効いたのか、翠は足を止める。そして、その言葉の真偽を確かめるかの様に琥珀へと視線を移す。

「ええ、そうよ。一刀君がうなされている声が聞こえたから、心配になって来てみたの。そして、話を聞いて慰めてあげていただけ」

これは、琥珀が一刀の部屋にいる理由であって、一刀が琥珀を押し倒していた理由にはならない。だが、翠はそれで納得したようだった。

「そ、そうか。まあ、そうだよな、うん。初めてだったんだし、しょうがないな」

独り言の様に言うと、翠は照れ隠しで笑う。

「……お前の周りには、あたしなり母様なり誰かしらいるんだから、1人で抱え込む必要なんか無いんだからな。お前は1人じゃないんだぜ」

「うん、ありがとう」

翠の表情が柔らかくなった事で、2人の緊張も緩む。特に、命の危機に瀕していた一刀は一気に気が緩んでしまった。

「でも、初陣にはよくやった方だと思うぜ、あたしは」

「そんな事ないよ。それより、意外だったな。翠が怖くて廁に行

けずにおねしょをしたなんて」

一刀には、しまった、と思う暇も無かった。言い切るか言い切らないかのうちに、翠の拳が一刀の顔面を襲ったからだ。

「う、嘘だ！ 出鱈目だ、そんなの！ そうだろ、母様！」

ベッドの上に前のめりに倒れた一刀に向かって大声で言った後、琥珀の方に向き直って同意を求める翠。その顔はさらに真っ赤になり、目には涙が浮かんでいる。この表情と語気に気圧され、琥珀は思わず頷いてしまった。

「な！ だから、忘れる！ いいな！」

だが、その声は一刀には届かない。翠の拳がクリーンヒットした時に、すでに気絶していたからだ。

こうして、一刀は琥珀と翠のお陰で悪夢にうなされる事も無く、無事に朝を迎える事が出来た。

その後、数回の出陣をし、その度に幾人かの人を殺めた一刀。琥珀の言ったように慣れはしなかったが、悪夢を見る事はなくなっていた。

第1章・涼州編・第6話〜抱擁〜（後書き）

と言う事で、第6話でした。

次回、董卓軍でまだ出てない2人を出して、第1章は終了します。

第1章・涼州編・第7話〈動乱の幕開け〉（前書き）

第1章の最終話です。

いくつか設定の変わっている箇所があります。

第1章・涼州編・第7話 動乱の幕開け

鷹那は一刀と共に、三千の兵を率いて出陣していた。場所は武威郡と安定郡の郡境近くの街道。今回の任務は賊の討伐などではなく、輸送隊の護衛である。ならば、簡単な任務か、と聞かれればそうではない。

護衛する輸送隊の運んでいる荷物は、シルクロードを使った西方貿易によってもたらされた貿易品である。この貴重な品々を、帝都洛陽にいる皇帝に届けるのだ。とはいえ、護衛はあくまで自領内だけで、安定郡からは董卓軍が引き継ぐ事になっている。

この様に重要な任務のために万が一にも間違いが起こらないよう、普段は琥珀自ら一万の兵を率いて護衛にあたっている。しかし、今回は匈奴族の侵攻とタイミングが重なってしまった。琥珀は輸送隊に出発を遅らせるように頼んだが、皇帝への献上品であるため聞き入れられなかった。

普段であれば、琥珀の勇名と一万もの兵のお陰でよからぬ事を考える者などいないのだが、彼女が危惧した通りになるうとしていた。

「鳳徳將軍、左翼より賊が接近中です。その数、およそ三千」

周囲を探っていた斥候が報告する。すでに土煙が確認出来る距離で、輸送隊の足では逃げ切れないのは確実だった。戦闘準備を始める一刀。だが、彼は鷹那から予想外の指示を受ける。

「一刀さん。あなたは輸送隊を連れて先行して下さい。私は千の兵と共に、賊共を迎撃します」

全軍で迎え撃つものとはかり思っていた一刀は、肩透かしを食らう。

「私達の任務は、輸送隊を無傷で董卓軍に引き渡す事。先程、董卓軍に早馬を出したのですから、少しでも早く合流を果たすべきなのです」

そう説明されては、一刀に反論する事は出来なかった。

「……分かりました。じゃあ、鷹那さん、御武運を」

それだけ言い残し、一刀は二千人の兵を連れて輸送隊を護衛しつつ進む。その背中を見送った後、鷹那は残った兵に向き直った。

「不埒にも、帝への献上品を襲おうなどと考えた不届き者共を、1人たりとも逃すな！ 全軍、突撃ーっ！」

兵達に号令を掛けた鷹那は、自らも愛用の武器、偃月双刀・龍爪牙を手に部隊の先頭に立って駆け出した。

一刀が鷹那と別れてから、およそ1時間が経過していた。輸送隊の面々に安堵の表情が浮かび出すが、それを嘲笑うかの様に、再び賊の一団が現われる。斥候からの情報では、兵数は約六千。3倍もの兵力差がある敵を間近にし、一刀は決断する。

「全軍停止！　ここで賊軍を迎え撃つ！」

賊が進行方向から向かって来ている以上、逃げる事は難しい。先程の様に部隊を分けて逃げ延びたとしても、三度襲われる可能性もある。だからこそ、一刀はここで足を止めて、賊軍を迎え撃つ事にしたのである。

二千人の内、千人を本隊として一刀が指揮し、五百人を輸送隊の直援に回す。残りの五百人は2つに分けて別動隊とした。

「いいな、皆！　とにかく、敵に突破させない様に気を付けるんだ！　時間さえ稼げれば、鳳徳將軍も追い付いてくれるし、董卓軍の援軍も来てくれる！　何としても、輸送隊を守るぞ！」

一刀は刀を天に掲げ、大声で檄を飛ばした。

一刀達が戦端を開こうとしている場所から十数キロ離れた位置にある、郡境の街。その街の中央にある酒家に、1人の小さな少女が飛び込んだ。

「恋殿！　大変ですぞ、恋殿ーっ！」

飛び込んだ先には、赤毛の少女が1人。その少女の前のテーブルの上には、翠に勝るとも劣らない量の料理が乗っている。何かを咀嚼しながら、赤毛の少女は飛び込んで来た薄い緑色の髪の小さな少女を見た。

「馬騰軍から賊の襲撃を受けたと、早馬で知らせて来たです！
急いで助けに行かないと……」

小さな少女が言い切らないうちに、赤毛の少女が立ち上がる。

「……恋は先に行く。ねねは皆を連れて、後から来る……」

表情を変えずに言うと、赤毛の少女は両手に肉まんを持ったまま酒家を出る。そして、外に繋いであった馬に飛び乗り、物凄いスピードで走り去った。

一刀はその手に持った刀で正面の賊の腕を斬ると、返す刀でその横にいる賊の足を斬り付けた。その斬撃は相手の体を切断するどころか、骨にまですら達していない。切っ先で皮と肉を浅く斬っただけ。そんな状態の賊兵が、一刀の周囲には10人程うずくまっている。中には、激しく血を吹き出している者もいるが、その殆どが致命傷には至っていない。

「無理にとどめを刺す必要は無いぞ！ 所詮、相手は賊だ！ 傷を負わせれば戦意を失う！」

一刀は最前線で叫ぶ。そうしながらも、また1人斬り付けた。

一刀率いる馬騰軍と賊軍とが接触したのは、およそ10分前。正面からぶつかり、最初の一撃は押し留めた。しかし、その後は徐々

に押し込まれ始めている。

兵の練度や装備は上でも、5倍以上の兵数の差は如何ともし難い。ましてや、足を止めての乱戦状態では、騎兵の最大の長所である機動力や突破力が活かせない。もちろん、一刀もそれは分かっていた。だからこそ、各個撃破される可能性があるにも関わらず、部隊を分けて遊撃隊を編制したのだ。

だが、その遊撃隊も一刀の考えた通りの働きは出来ずにいた。賊軍の左右から横撃を掛けるものの、兵数が少ないためか、多少混乱させてもすぐに回復してしまう。むしろ、多数の賊軍に囲まれて、遊撃隊の方がピンチに陥りかねない状況だった。

その後、しばらくはなんとか賊軍を防いでいたものの、次第に戦線が崩れだす。特に、右翼の状況がかなり悪い事は、一刀にもはっきりと分かった。しかし、右翼の援護に回る余裕は、一刀にも兵達にも無い。

抜かれるのは時間の問題か、と、一刀が覚悟を決め掛けた時だった。右翼に群がる賊兵達の中に何か大きな影が突っ込んだかと思うと、数人の賊が空を舞い、一刀の目の前に落ちて来た。敵も味方も関係無く、そこにいる者達の目が一斉に賊が飛んで来た方向に向けられる。

視線の先には、馬に跨った1人の少女。赤いショートヘアの髪に褐色の肌。服の隙間から見える肩や腰には、刺青の様な模様がある。そして、戦場には似つかわしくない程の無表情。だが、ひとたびその手に持った戟を振るえば、一度に5、6人の体が真っ二つになる。

その圧倒的な強さに一刀が見惚れていると、今度は左から賊が飛んで来た。慌てて左に目をやると、そこには『鳳』の旗がはためいていた。

「浅ましい賊共を生かして帰すな！ 鳳徳隊、突撃しろ！」

先頭に立つ鷹那の号令で、追いついた鳳徳隊が賊軍の脇腹に突っ込む。右翼から鳳徳隊、左翼から赤毛の少女、さらに、息を吹き返した正面の北郷隊に襲い掛かれ、賊軍は大混乱に陥る。そこに、遅れてやって来た董卓軍までもが参戦した事により、賊軍はあっという間に殲滅された。

「恋殿ーっ！ 大丈夫ですかーっ！」

賊軍を散々に打ち破った後の戦場に、幼い少女の声が響く。その声の持ち主は赤毛の少女に駆け寄ると、心配そうな顔で見上げた。それに対し、赤毛の少女は相も変わらず無表情のまま、自分を見上げる少女の頭を撫でた。

そんな2人に一刀と鷹那は近付いた。

「恋、音々音、助かりました。あなた方のお陰で、輸送隊に被害を出さずに済みました」

鷹那の礼に、赤毛の少女は黙ったまま首を横に振る。一方、薄い緑色の髪の小さな少女は、両手を挙げて元気に答えた。

「まあ、恋殿ならばあの程度の敵、朝飯前ですからな。……ところで、鷹那の後ろにいるのが天の御遣いなのですか？」

「ええ、名前は北郷一刀です。さあ」

鷹那に促されて一步前に出た一刀は、2人に対して礼を述べた。一刀の顔をジーツとみつめ、何も言わずに小首を傾げる赤毛の少女。その仕草を見て、先程の鬼神のごとき戦い振りも忘れ、一刀は可愛いと感じていた。

「月殿や詠達から聞いていた通りの格好。やはりお前が御遣いなのですか」

小さな少女は、そう言つて一刀をジロジロと見る。その目は張遼の様な友好的な物ではなく、警戒心や敵意が見て取れる。しかし、小学生位の少女のそんな表情は、むしろ微笑ましかった。

「ねねの名は陳宮、字は公台。そして、こちらにいるのが天下無双の勇将、呂布將軍ですぞ！」

自分よりも、赤毛の少女に力を入れて紹介する小さな少女。

呂布、字は奉先。言わずと知れた三国志最強の武人。しかし、その強大な武とは反対に、思慮に欠け、目先の利益に飛び付き、数多の裏切りを繰り返した暴将である。そんな呂布に最後まで従ったのが、陳宮という軍師だった。

呂布と聞いても、一刀に驚きは無かった。いい加減、武將が美少女な事には慣れていた。

「……にしても、攻めるのか守るのかハッキリしない、ずいぶんとひどい戦術なのです。あの状況であれば、全員を攻撃に回した方が……」

急に陳宮が先程の戦い方を批判し始めた。それを一刀は黙ったまま、うつむきがちに聞く。

いつまでも続く陳宮の言葉に、さすがに鷹那が止めに入ろうとした時、辺りに物凄い音が鳴り響いた。まるで地の底から響いて来る様な、大きな獣の唸り声の様な、そんな音だった。喋るのを止めた陳宮は、一刀達と共に音のした方を見る。そこには、腹に手を当てた呂布が切なそうな顔で立っていた。

「……お腹すいた。ねね、帰ろう……?」

小さな声で言うと、呂布は3人に背を向けて歩き出した。

「あつ、待って下され、恋殿! ……では、確かに輸送隊はねね達が引き継ぎましたので」

早口で一気に言うと、陳宮は駆け足で呂布の後を追いつけて行ってしまった。2人の背中をしばらくの間見送った後、鷹那も踵を返し、すぐ側で草をはんでいた自分の愛馬の鞍に手を掛けた。

「さあ、我々も戻りましょう。……どうしたのですか?」

鷹那が振り向くと、そこにはさっきと変わらず頭を垂れたままの一刀がいた。

「ひょっとして、先程陳宮に言われた事を気にしているのですか？」

若干の間の後、一刀は頷く。それを見て、鷹那は鞍から手を離し、一刀の方に体ごと向き直った。

「今回の任務は、輸送隊を何の問題も無く董卓軍に引き渡す事。貴方はそれを果たしたのですから、気に病む必要は無いでしょう？」

「でも、鷹那さんや呂布が助けに来てくれなければ、俺達だけでは守り切れなかった。運が良かっただけです」

俯いたまま言う一刀。しかし、一刀の言った事が間違いである事を鷹那は伝える。

「もしも、当ての無い援軍を待っていたのであれば、それは偶然でしょう。しかし、来る事が分かっている援軍を部隊を鼓舞しながら待っていたのであれば、それは必然ですよ」

不意に傍から聞こえた声に驚き、一刀は思わず顔を上げた。いつの間近付いていたのか、鷹那は一刀の目の前に立っていた。

「一刀さん、私はそれでも貴方の事を評価しているのですよ」

鷹那は今まで一刀が聞いた事の無い、優しい口調で語り掛けた。恥ずかしくなった一刀は、思わず視線を外してしまう。

「でも、俺は皆みたいに強くはないし……」

「戦場で必要なのは、武勇だけではありません。姫やたんぼぼは、

思慮に欠けるところがありますから。状況をしっかりと把握し、考えて動ける者がいてくれれば、私としても助かります」

翠はもちろん、琥珀や蒲公英もどちらかと言えば猪突猛進と言っているだろう。その事で苦勞をしているらしく、鷹那の言葉には実感がこもっていた。

「……軍師みたいに、って事ですか？」

一刀のその言葉に、鷹那は目をぱちくりさせる。そこまで求めるつもりは微塵も無かったからだ。しかし、その気があるのなら、わざわざやる気を萎えさせる必要は無い。物になるかどうかはともかくとして、必死に学ぶ事は良い方向に働くはずだ。

そう思った鷹那は、ほんの一瞬だけわずかに頬をゆるませた。

「軍師とは、随分大きく出ましたね。貴方の努力次第でしょうが、それ位の気概を持ってもらわねば困ります」

一刀と鷹那の目が合う。瞳に力が宿ったのを確認し、鷹那は振り返って自分の馬の方に歩き出した。

「……期待していますよ、一刀さん」

一刀に背を向けたまま呟かれたその言葉は、彼の耳に届く事は無かった。

それから数日後、仕事を終えた一刀の部屋に侍女がやって来て、琥珀が呼んでいる事を伝えた。それを聞いて、今日、琥珀達が匈奴討伐から帰って来る予定だった事を思い出した。仕事に集中しすぎて、すっかり忘れていたのだ。一度大きく伸びをした後、一刀は自分の部屋を出た。

琥珀の部屋の扉を開けると、中ではすでに酒宴が始まっていた。お帰りなさい、と言いながら、いつもと同じ場所に座る。と、蒲公英が何やらニヤニヤしている。

「たんぼぼ、何か良い事でもあった？」

何気なく聞いただけなのだが、蒲公英からは予想以上の反応が返ってくる。

「えっ？ 聞きたいの、一刀さん？ そっかー、でも、どうしようかなー」

こんな事を言っているが、本当は喋りたくて仕方がない、そんな顔をしている。なので、一刀は少しからかってやりたくなった。

「言いたくないなら、別にいいけど。女の子の秘密を、無理に聞き出そうとは思わないし」

そう言うと、一刀は蒲公英から反対側にいる翠の方に顔を向けた。

「ゴメン、一刀さん。だから、意地悪しないでたんぼぼの話聞いてよ」

蒲公英は一刀の腕を取り、甘える様に横に振る。

「分かった、分かったから止めろって。こぼれるから」

左腕を大きく左右に振られた事により、右手に持った杯の中身が波打っていた。蒲公英が手を放すと、一刀も座り直して聞く体勢をとった。

「たんぽぽね、ついにやったんだよ。虎殺し！」

「ブーッ！」

蒲公英の話を聞いて、一刀は思わず口の中の物を吹き出してしまった。

「おわっ！ 何やってんだよ、汚い！」

文句を言う翠に謝りながら、一刀は手拭いで床を拭く。そうしながら、蒲公英に確認する様に尋ねた。

「虎って、あの虎？ 黄色と黒の縞模様の……」

「決まってるでしょ。それとも、天の国には違う虎がいるの？」

三国志の武将には、虎殺しの伝説を持つ者が多い事を、一刀は会話をしながら思い出した。

「まったく、あたしなんか13歳の時に虎を狩ったっていうのに、何言ってるんだ」

横から翠が自慢気に言つて、水を差ししてくる。当然、水を差された側の蒲公英は面白くない。プクーツと頬を膨らませ、唇を尖らせてそっぽを向く。そして、わざと翠に聞こえる様に呟いた。

「仕方ないじゃん。たんぽぽはお姉様みたいに脳筋じゃないんだから」

「脳筋、つて言うな!」

2人のやりとりを見ながら脳筋という言葉の意味を理解し、一刀はプツ、と吹き出した。そうしながら、まぐれとは言え、蒲公英によく勝てたものだ、と、そんな事を考えていた。

「……そうだ。そういえば、董卓っていくつなんですか?」

しばらくして、多少酔いも回ってきた頃、思い出した様に口に出した。特に誰かに聞いたわけではなく、そこにいる全員に尋ねる様な言い方だった。

「月はたんぽぽのいつこ下だから……、確か14歳だ。でも、どうして月の歳なんか聞くんだ?」

問いに答えた翠が、逆に問い掛ける。だが、一刀が答えるより先に、蒲公英が口を開いた。

「一刀さん、もしかして……。まあ、月ちゃん、可愛いもんね。」

どこかの誰かさんみたいな脳筋より、ずっと女の子らしいし」

何か勘違いしたらしい蒲公英は、翠の文句はスルーしてニヒヒと笑う。

「違うよ。そうじゃなくて、あんな小さいのに太守なんてすごいな、と思ってさ」

一刀がそう言うと、同じく勘違いをしていたらしい琥珀が真剣な顔になった。

「月の両親が先代の太守だったのよ。あの子は両親が亡くなった後、その後を継いで安定を治めているの」

琥珀は杯の中の酒を呷ると、思い出す様にゆっくりと話し出した。

董卓の両親、特に父親は太守としてだけでなく、武人としても有名だった。実際、琥珀と互角に戦える数少ない人物だったのだ。そのせいもあり、この2人の間には性別を越えた厚い友情があった。

そんな2人が死んだのは、董卓が10歳になる前。原因は流行り病であった。一度に二親を亡くした董卓であったが、彼女にはそれを悲しむ暇は無かった。後継ぎがまだ幼い少女のみ、と言う事もあって、家臣達が様々な思惑を抱いたためだ。ある者は彼女を見限って出奔し、ある者は彼女に取り入って権力を握ろうとし、またある者は彼女を除いて代わりの為政者を立てようとした。

そんな董卓を助けたのが、彼女の父の無二の親友だった琥珀と、先代からの忠臣、華雄であった。琥珀は董卓の後見人として、華雄は董卓のすぐ傍で、邪な考えを持つ者から彼女を守り続けた。そう

している内に、董卓自身は力を付け、幼馴染みである賈馱も軍師としての知識を蓄えて、太守の地位を確立していった。

「あの歳で苦勞してるんだな……」

静まり返った部屋の中で、一刀はボソツ、と呟く。彼は軽々しくこの話を振った事を反省していた。

「……でも、お姉様、大丈夫なの？ 将来、叔母様の後を継ぐんでしょ？」

重苦しい雰囲気に耐え兼ねた様に、蒲公英が喋り出した。それに鷹那が続く。

「ですから、姫。将来のためにもしつかりと勉強して頂かないと……」

「いいんだよ。あたしは太守なんて柄じゃないんだ」

鷹那の説教が始まりそうなを感じた翠は、慌てて話を打ち切ろうとする。その様子を、琥珀は何も言わずに微かに微笑みながら眺めていた。

尚も説教をしようとする鷹那。だが、それよりも早く一刀が口を開く。

「俺は、翠は太守に向いてると思うけど」

その言葉に、4人の視線が一刀に集まった。少しドキツとしたが、話を続ける。

「確かに、政に明るい方が良いと思うけど、それは、得意な人を迎えば済む話だろ。それよりも、民の事を思いやれる優しさとか、逆に民から慕われる人柄とかの方が重要なんじゃないか？」

「そ、そうか……？」

誉められた翠の顔は、少し赤くなっていた。

その時だった。部屋の扉がノックされ、鷹那の部下の女性兵士が入って来た。

「どうした、こんな時間に」

鷹那の問いに、兵士は背筋を伸ばして答える。

「先程、洛陽の間者から連絡がありました。皇帝陛下が……、霊帝が、崩御なされました……」

霊帝崩御の知らせが全国を駆け巡る前の帝都洛陽。その洛陽の中心部にある豪邸の中に、煌びやかな服に身を包んだデブプリと肥えた男がいた。男の名は何進。漢帝国の軍事の最高責任者、大將軍である。

「霊帝め、やっと逝ってくれたか。しかし、これで我が甥、弁が次の皇帝だ。そうなれば、いよいよこの俺が全てを手に入れられる

……！」

この何進、本来ならば大將軍の様な役職に就ける男ではない。洛陽の街で肉屋を営んでいた、ただの庶民であつた。そんな男が、なぜ大將軍になれたのか。その理由は妹にあつた。

何進の妹は、大層な美人だつた。その美しさを靈帝に見初められて後宮に入り、弁皇子という世継を身籠ると、何皇后として権力を握る事になる。さらには、宦官である十常侍の強力な後押しにより、何進は大將軍という過ぎた役職を手に入れた。この時の十常侍には、何兄妹に恩を売る事で取り入り、権力を手にしようとする目論みがあつた。

だが、時が経つにつれて両者の関係は悪化する。張讓を筆頭とする十常侍と、何進を中心とする外戚との権力争い。今までは水面下で行われていたが、靈帝が亡くなった今、一気に表面に吹き出し始めた。

「しかし、十常侍共は遺言書を捏造し、協皇子を帝位に就けるつもりの様です」

何進の脇に控えていた男が伝えた。

協皇子とは、弁皇子の異母弟である。靈帝に似て暗愚な弁皇子と違い、利発で聡明だつた。

側近の報告を聞いて、何進は齒噛みする。

「十常侍共め……！ おい、国中の諸侯達に檄文を飛ばせ！ 宮中を私する十常侍を討つべし、とな！」

黄巾の乱の終結により、平穩へと向かうかと思われた漢帝国は、
こうしてさらなる混乱へと進んで行くのであった。

第1章・涼州編・第7話〈動乱の幕開け〉（後書き）

と言う事で第7話でした。

原作と違い、月の両親はすでに亡くなっています。また、華雄も月の両親の代からの臣になっています。特に華雄はアニメのイメージがあって、一番原作とキャラが変わってしまいました。

今話で出た霊帝や、次話以降で出て来る少帝、献帝は、本来は諷なんです、通りがいいのでこのまま使用させてもらいます。

では、次回から第2章、反董卓連合の話になります。

第2章・洛陽編・第1話〈暴君董卓〉（前書き）

第2章洛陽編、反董卓連合の話になります。

とりあえず、状況説明から。

第2章・洛陽編・第1話〈暴君董卓〉

「はあ！？ んな訳あるか！」

武威の城中に翠の大声が響く。翠が叫んだ理由は、彼女の目の前の書簡にあった。

河北の雄、袁紹から届いた書簡は、都で暴政を敷く董卓を諸侯が協力して討伐すべし、と呼び掛ける檄文だった。

董卓の性格を知っている翠にしてみれば、暴政を敷いている訳が無い、と言い切れた。そして、それは琥珀達も同じだった。実際、間者からの報告や商人からの話にもそんな情報は無い。それを聞くと、翠は少し落ち着いた様で、ほらな、と得意気な顔で言った。

「……私達はこの連合に参加するわ」

「なっ……！」

琥珀の静かな声に、再び翠の語気は荒くなる。

「何でだよ、母様！？ 月は何も悪くない、って、さっき言ったじゃないか！ それなのに……！」

「落ち着いて話を聞きなさい、翠」

ため息混じりに宥める琥珀。しかし、翠は止まらない。尚もギヤアギヤ騒ぎ続ける翠に、つい琥珀の声も大きくなってしまっ。

「うるさいっ！　少しは他人の話を聞きなさい！」

さすがは大陸中にその名が知れ渡っている勇将である。一喝して翠を黙らせた。

「まったく……。一刀君、このバカ娘にも分かる様に、説明してあげて」

琥珀から話を振られた一刀は、驚きで上昇した心拍数を抑えるため、深呼吸を一度してから翠に向き直った。

「確かに翠の言った通り、董卓は暴政なんか敷いちやいない。でも、この書簡にはそう書いてある。なぜだか分かるか？」

理解しやすい様に、ゆっくりと喋る一刀。しかし、分かる訳無いだろ、と翠は仏頂面で即答する。

「ハア、少しは考えてくれよ……」

一刀は肩を落としてため息を吐くと、この直前に琥珀達と話し合った事を、翠と蒲公英に説明し始めた。

袁紹が董卓に対して兵を起こそうとしている理由、それは妬みや嫉みと言った感情にある、と一刀達は考えていた。ただの地方の郡太守に過ぎない董卓が、帝の傍で国政に携わっている。それが四代三公の名門である袁家の当主、袁紹には許せないのだろう、と。

「だから、何でそんな奴と一緒に戦わなくちゃいけないんだよ？」

相も変わらず不満そうな翠。そんな彼女に、話を最後まで聞く様

に言つて、一刀は説明を続ける。

袁紹と敵対する事を恐れたり、この機に乗じて名を揚げようとしたり、様々な理由はあるだろうが、今回の連合の呼び掛けにほとんどの諸侯が呼応するだろう。そうなれば、連合の兵力は少なくとも十万、おそらくは十五万程度にまで膨れ上がる。

それに対し、董卓側の兵力は十万弱。しかし、そのほとんどは何進の兵で、正規の董卓軍とは練度が違う。そのため、同じ戦場に立たせる事が出来ない。実際に計算出来る兵力は、二万にも満たないだろう。仮に、馬騰軍が全軍を以て董卓に助勢したとしても、どうにか出来る兵力差ではなかった。

そこで、琥珀は董卓を洛陽から逃がす事に決めた。幸いにも、連合の集結予定地点は洛陽の東になっている。これは、袁紹の支配している冀州が洛陽の北東にあるためだ。だが、そのお陰で西から涼州に逃げる事は容易くなるはず、と考えられた。

「……でも、何で連合に参加しなくちゃならないんだよ。月を逃がすだけなら、そんな必要無いだろ？」

それまで言われた通りに黙っていた翠が尋ねる。確かに、連合に加わらなくても董卓を逃がす事は出来るだろう。ただし、参加しない場合、その後が問題になりかねない。琥珀が董卓の後見人だった事を知られれば、董卓を逃がした事を疑われる可能性が出て来る。もちろん、足跡は全て消すが、一応でも連合に参加する事で、その可能性を低くする事が出来る。

連合に参加する理由は他にもあるが、これが一番大きな理由だった。

「……どうかしら？　ちゃんと分かった？」

一刀の説明が終わり、翠を怒鳴り付けて以来黙っていた琥珀が口を開いた。その顔には、さっきの様な怒りは見られなかった。

「……理解はしたよ。けど……」

歯切れが悪い翠。彼女は何やら難しい顔をして腕組みをしている。頭で理解はした。しかし、心は納得出来ずにいるのだ。そんな翠の胸中を見抜いた琥珀は、自分の正直な気持ちを語り出した。

「面白く無い、と思うのは当然だわ。私だって、袁紹の五体をバラバラに切り裂いてやりたい、そう思うもの」

穏やかな表情だが、その言葉には確かな怒気と殺気が込められていて、一刀達は背筋が寒くなる。

「月を助けるためよ。……やれるわね？」

琥珀は翠の瞳を見つめながら尋ねた。翠も琥珀の目をじっと見つめ返す。その瞳には、すでに迷いの色は無かった。

「分かった、母様。その任務、必ず果たしてみせる！」

こうして3日後、翠を大将とした馬騰軍は一刀と蒲公英を従え、八千の騎兵と共に出陣した。

洛陽の中心にある宮殿。その中のある一室に董卓軍軍師、賈馱の姿があった。椅子に座った彼女は、眼鏡を外し組んだ両手の甲に額を乗せて目を瞑っていた。

「ハア……。どうしてこんな事になっちゃったのよ……？」

賈馱はこれまでの事を思い出し、ため息混じりに呟いた。今回の事は、運が悪かった、としか言い様が無い。最初のボタンを掛け違ったために、ここまで周囲の状況に流されて来てしまった。

全ての始まりは3ヶ月前。靈帝崩御の知らせの直後に届いた、大將軍何進からの檄文だった。

宦官十常侍の討伐を呼び掛けるこの檄文を、賈馱は無視するつもりでいた。呼び掛けに応じれば、否応無しに中央の権力争いに巻き込まれる事が目に見えていたからだ。実際、琥珀は匈奴への備えを理由に断っていた。

しかし、董卓はこれに参加する事に決めた。権力や地位を手に入る事を目論んだ訳では無い。苦しんでいる庶人を救うためだ。

地方とはいえ、太守である董卓の耳には中央の政治がいかに乱れているのか、その情報が届いている。そして、その乱れが人々を苦しめている原因である事も分かっている。だからこそ、賈馱が洛陽に入る事の危険性を説いても、それを聞き入れる事は無かった。

董卓の説得は無理だと判断した賈馱は、進軍を遅らせる事を画策する。洛陽に着く前に事が終わってしまえば、到着の遅延を叱責される事はあっても、何の手柄も挙げられずに権力争いから脱落出来

る、と考えたのだ。

果たして、賈馱の思い描いた通りになった。何進が呼び掛けに応じた袁紹、袁術らと共に宮中に入り込んだ時、董卓軍はまだ洛陽の西にある旧都、長安の手前にいたのである。

だが、ここから歯車が狂いだした。

宮中に入り込まれた十常侍は、何皇后に兄である何進への取り成しを頼む。自分や兄が今の地位にいられる事に対し、十常侍に恩を感じていた何皇后は、彼らの助命を何進に申し出た。すると、袁紹達の反対意見を無視し、何進は甥の弁皇子を帝位に就ける事を条件にそれを聞き入れてしまった。

こうして何進の思惑通り、弁皇子が少帝として皇帝に即位した。しかし、何進本人はこれですっかり油断してしまい、即位の儀式の後、祝いの品を渡す、と十常侍に呼び出され、宮中で謀殺されてしまったのだ。

これを知った袁紹達は大いに慌てた。何進に従った自分達にまで十常侍の手が伸びるのは必至だったからだ。諸侯の中には急いで洛陽を離れ、自分の領地に戻る者もいたが、ほとんどの者は十常侍に対して先手を打つ事にした。何進を殺害した罪により十常侍を討つ、という名目で宮中に入った諸侯は、しかし、宦官を無差別に殺戮し始める。華やかだった宮中は、鮮血が飛び、断末魔の叫び声がかたまたま地獄絵図へと一変した。これは、十常侍と他の宦官の見分けが付かなかったからだが、暴走し始めた兵士をコントロールする能力を、袁紹達が持ち合わせていなかった事が一番の理由だった。

宦官の全てが、十常侍の様に私利私欲に溺れている訳では無い。

真摯に民や国の事を考えて、政に携わっている者も少なくはないのだ。だが、そんな事は関係無く、ただ宦官であるだけで殺されていく。

しかし、ただ1人、この殺戮劇を逃れた人物がいた。十常侍筆頭、張讓である。彼は袁紹達が宮中に入り込む直前、宮殿、さらには洛陽の街から脱出していた。切り札となる2人の人物、少帝と協皇子を連れて。

この行動を袁紹達は予想出来ていなかった。皇帝や皇子を宮中から外に連れ出すなど、有り得ないからだ。張讓の脱出に気が付いたのは半日後、宮中の混乱が落ち着いた後だった。

だが、読みが甘いのは袁紹達だけではない。張讓もまた、現実を知らなかった。自分達がまともな政治を行って来なかったせいで、洛陽の周りですら賊が跋扈する程に治安が悪い。そんな中に護衛の兵も付けず、派手な衣服に身を包み、煌びやかな装飾の施された馬車で飛び込むのは、飢えた狼の群れに羊を放り込む様な物である。張讓達はすぐに賊に襲われてしまった。

張讓は少帝や協皇子を放り出して逃げる。しかし、簡単に捕まり身ぐるみ剥がされて殺されてしまった。その光景に恐怖し、泣き喚く少帝。一方、弟の協皇子は取り乱す事も無く、兄をかばって賊を睨み付ける。だが、十歳前後の子供が睨んだ位で賊は怯みはしない。薄汚い笑いを浮かべて2人に近付くと、その手に持った剣を振り上げる。

その時だった。遠くから地鳴りが響いて来たのは。その音は次第に大きくなっていく。音が大きくなるにつれて賊は慌て出し、ついには蜘蛛の子を散らす様に逃げ出した。その直後、2人の少年の前

を、鎧に身を包んだ沢山の騎兵が駆け抜ける。呆気にとられて声も出ない2人に、その一軍を率いる董卓は柔らかく微笑み掛けながら近付いて行った。

こうして、賈馱の狙いとは反対に、少帝と協皇子の保護、という一番の手柄を手に入れてしまった董卓軍は、2人の貴人を伴って悠悠々と洛陽に入城する。一方、宮中へと踏み込んだ諸侯達は、少帝が董卓軍に保護された事を知ると兵をまとめ、入れ違いになる形で洛陽を後にした。

これだけであれば、董卓が暴君に仕立て挙げられる事は無かつただろう。むしろ、問題はこの先だった。

宮中の混乱が収まってから数日後。涼州へ戻る準備を進める董卓軍に、驚愕の事態が報告された。

少帝の死。

まだ、即位して10日も経っていない内に少帝は崩御したのである。原因は母、何太后による無理心中だった。

後ろ盾であった何進と十常侍を同時に失った何太后。特に、兄である何進は助命を頼んだ十常侍に殺されている。不安と自責の念に苛まれて自分自身を追い込んだ末に、何太后は少帝を抱いて宮殿の最上階から身を投げたのだった。

2人の葬儀が終わった後、協皇子が献帝として新たな皇帝に即位した。だが、幼い新皇帝には頼れる者がいなかった。

生母は献帝を産んだ直後に亡くなっている。献帝の面倒を見てい

たのは靈帝の母、董太后だが、彼女は宦官虐殺の混乱の際に何者かに殺されていた。養母と兄を失い、自分に仕えていた宦官もいない。そんな状況で、自分を助けてくれた董卓に依存するのは当然だった。

董卓を傍に置こうとする献帝。しかし、賈馥はこれ以上宮中にとどまり続ける事は危険と判断し、何かと理由を付けて安定に戻ろうとする。

何としても董卓を手放したくなかった献帝は、彼女の安定郡太守の職を解いてしまう。そして、新たに彼女に相国の職を与えるのだ。相国とは、漢帝国における最高の役職である。しかし、臣下が就くには位が高すぎる、として、前漢の初期以来就任した者がいなかった。

この事に諸侯は憤りを覚えるが、特に強い不満を持ったのが袁紹だった。袁家は四代に渡って三公を輩出した名門である。その三公以上の役職に地方太守だった董卓が就いた事に、袁紹のプライドが傷付いたのだ。

袁紹は董卓を追い落とすために行動を起こす。

董卓が少帝と何太后を殺害し、自ら相国に就いた。そして、政を己の物として暴虐の限りを尽くしている。そのせいで、洛陽の民は今日を生きる事もままならない。

そんな流言を全国に飛ばした。こうして、暴君董卓は誕生したのである。そして今、作り上げられた暴君を討つために諸侯が集結しつつあった。

賈馱は扉をノックする音にハツとした。続けて侍女の声が聞こえてくる。

「賈馱様、將軍方が揃われました」

「分かったわ。すぐに行く伝えておいて」

侍女の足音が遠ざかっていくのを聞きながら、賈馱は眼鏡を掛け直して立ち上がり、部屋を出た。

賈馱が会議室に入ると、そこには4人の姿があつた。華雄、張遼、呂布、陳宮。いずれも董卓軍の中心人物である。

「どないするんや、詠。連合の奴等、汜水関の東に集まり出しとるで」

「斥候からの情報では、兵力はおよそ十万。最終的には十五万を超えてきますぞ」

張遼と陳宮が続けて報告する。彼我戦力差は圧倒的に不利だったが、2人の顔には不安や焦りの色は無い。あるのは、主を暴君に仕立て上げられた事への怒りだった。無表情な呂布や、腕組みをして目を閉じたまま俯いている華雄も、内心は同じだ。

そんな彼女達を見ながら賈馱は話し始める。

「昨夜、武威から早馬が届いたわ。琥珀様が月を匿ってくれる」

「本当なのか、賈馱!？」

それまで黙っていた華雄が、机をバンツ、と叩いて立ち上がった。

「こんな事、嘘を付く訳無いじゃない。……でも、すぐに、と言う訳にはいかないわ。下準備や裏工作に1ヶ月位の時間が必要なの」

そこまで言うと、賈馱は張遼達に向かって頭を下げた。

「お願いよ。月を助けるために時間を稼いで……!」

その行為に、4人は一様に驚く。気が強い賈馱が頭を下げたところなど、皆見た事が無かったからだ。

「……頭上げえや、詠。月を助けたいんは、ウチらも一緒や」

張遼の言葉に3人が頷く。顔を上げた賈馱の瞳は、今にもこぼれそうな程に潤んでいた。

「……なら、華雄と霞は汜水関に、恋とねねは虎牢関に籠もって、防衛戦で時間を稼いで」

任しとき、そう言って張遼は胸を叩き立ち上がる。だが、華雄が待ったをかけた。

「作戦は分かった。だが、賈馱よ。月様の御様子はどうなんだ？」

華雄の問い掛けに、賈馱は黙って首を振った。董卓は、自分に対しての連合結成が呼び掛けられている事を知って以来、部屋に引き

籠もって食事も満足に取らなくなっていた。

元々何進の檄文に応じたのも、暴政によって生活に困窮している庶民を救わんとしたためだ。それが、自らが暴君に仕立て上げられ、自分の首を狙って戦が起ころうとしている。彼女にとっては全てを否定された様な思いだった。

不意に立ち上がった呂布は賈馱に近寄り、その頭に手を置く。

「……敵は恋達が倒す。詠は月をお願い……」

それだけ言うと、呂布は愛用の武器、方天画戟を肩に担いで部屋から出て行ってしまった。その後を追う様に陳宮も部屋から出る。

「ま、恋の言う通りやな。ほんなら、行ってくるわ」

張遼と華雄の2人もそれに続いて部屋から出た。1人部屋に残った賈馱も流れた涙を拭い、強い決意を秘めた瞳で部屋から出て行った。

「ふっつ、やっと着いた」

武威を立つてから1ヶ月弱、馬騰軍はようやく連合の集結地点に到着した。最短距離を通ればもっと早く着けたのだが、そのためには洛陽の近くを通過しなければならない。当然、そのルートを使う訳にはいかず、翠達は司隸の南、荊州の北端をかすめる様に行軍し

て来た。お陰で、到着したのは諸侯の中で一番最後になってしまった。

「ほら、たんぽぽ。いつまでものんびりしてないで、とっとと天幕を設営するぞ」

馬から降りて伸びをしている蒲公英を、翠が急かした。頬を膨らませて文句を言いながらも、蒲公英は他の兵士達と共に野営の準備を始める。一刀もそれを手伝いながら、周囲に目をやった。

無数の天幕と、そこになびく様々な旗。一番多いのは『袁』の旗だ。色違いで二種類あるが、それだけで全体の半分位の量がある。他に二種類あるのは『劉』の文字。一方は『袁』に次ぐ程の量だが、もう一方は逆に一番少ないと言っつていいだろう。他にも『曹』、『公孫』、『孫』、『孔』等の文字がはためいている。一刀は名立たる武将達の存在に、緊張しながらもワクワクしていた。

第2章・洛陽編・第1話〈暴君董卓〉（後書き）

話がほとんど進まないまま、第1話終了です。

原作でははっきりとは描かれていませんでしたが、月が巻き込まれる形で、三国志演義を混ぜてみました。

次回は軍議になります。

第2章・洛陽編・第2話「反董卓連合」(前書き)

洛陽編の第2話、反董卓連合のお約束、軍議です。

前話ですでに書きましたが、シ水関のシ(三水に巳)は携帯では出ないので、『氾』の字で代用します。

第2章・洛陽編・第2話／反董卓連合

天幕の設営もほぼ終わり、めいめいに休憩を取り始めた馬騰軍の陣に1人の兵が訪れて来た。金ピカの派手な鎧に身を包んだ兵は、軍議を開始するので集まるように伝え、去って行った。

「じゃあ、あたしと一刀で行ってくるから、たんぼぼはしっかり留守番しとけよ」

「えーっ！ 退屈だよ、そんなの。たんぼぼも行きたい！」

翠の指示に、案の定蒲公英が不満を漏らす。しかし、これは聞き入れられなかった。

今の状況で陣内から将がいなくなる訳にはいかない。3人の内、誰かは残らなければならないのだ。翠は琥珀の名代である以上、軍議に出席する必要がある。一刀も一応とは言え、軍師の任を帯びているため、出席しないのはまずい。それに、一刀は劉備や曹操といった英雄達を見てみたかったし、何より、少しでも時間の掛かる方向に話を持って行かなければならないと考えていた。歴史に名を残す様な英雄や軍師相手にどこまでやれるか自信は無かったが、翠や蒲公英に任せるよりはましだろう。

未だに文句を言い続ける蒲公英を置いて、2人は軍議の開かれる大天幕へと向かった。

連合軍全体の陣地のほぼ中央に大天幕はあつた。そこには細長く巨大なテーブルがあり、両脇にいくつもの椅子が並んでいる。テーブルを挟んで入口の反対側、天幕の一番奥は一段高くなっており、そこには玉座の様な豪華な椅子が2つ並ぶ。一刀から見ると左側の椅子には、金髪の小さな女の子が退屈そうな顔で座っていた。

一方、テーブルの両脇の椅子は8割方埋まっていた。そのほとんどが一刀の予想通り、美少女である。中には男性もいたが、全員が中年か初老で一刀と同年代の者はいなかった。

「おい、いつまでも鼻の下を伸ばしてるなよ」

翠は一刀の脇腹を肘で小突くと、自分に割り当てられた椅子に腰掛けた。どうやら、自分でも気が付かない内にニヤニヤしていたらしい。一刀は顔を引き締め直すと翠の後ろに立った。

その後、5分と経たずに椅子は全て埋まったが、ただ1つ、奥の玉座だけがポツンと空いていた。時間が立つごとに諸侯がイライラして行くのが分かる。実際、天幕の外にいる兵を呼び付けて文句を言ったり、その遅れている人物を呼びに行く様に命令する者も出始めた。しかし、何度人を呼びに遣っても渦中の人物は現われない。

そんな状況のまま、およそ1時間が経過する。諸侯の不満も大分限界に近付いて来た、そんな時だった。

「おーっほっほっ！」

どこからともなく高笑いが聞こえて来たかと思うと、天幕の入口に掛かっている布が開けられた。とっさにそちらに目をやる一刀と

翠。2人は気付かなかつたが、諸侯の約半分はげんなりした顔をしていた。

逆光の中に立っていたのは1人の女性だった。金髪の長い髪を縦ロールにし、片手を口元に、もう片方の手を腰に当てて高笑いをしている。その様は、漫画かゲームの中でしか見る事が出来ない様な、ベタなお嬢様、と言った感じだった。

お嬢様は高笑いをしたまま天幕の奥へと歩き出す。その後ろに2人の少女が続くが、3人共先程の兵士よりもさらに豪華な金色の鎧を身にまとっている。もはや、悪趣味としか言い様の無いレベルだ。

ともかく、玉座の前で足を止めたお嬢様は、諸侯を見渡して満足気に笑う。

「どうやら全員揃っていらっしゃる様ですわね。では、早速軍議を始めるとしましょう」

はあく、と大きなため息が至る所から聞こえるが、当事者はまったく気付く素振りも見せずに話し続ける。

「ですが、まずはお互い自己紹介といきましょう。これから共に戦うのですから」

そう言って一歩前が出る。

「ここに集まって頂いたほとんどの方はご存じかと思いますが、中には私の事を知らない田舎者もいらっしゃるでしょう。ですから、一応名乗っておきますわ。私は四代三公の名門、袁家の当主にして冀州州牧、袁本初です。皆さん、よろしくお願い致しますわ」

彼女がこの連合を結成した張本人、袁紹である。何が楽しいのか、再び満足そうに高笑いをする袁紹。彼女の機嫌がよくなればなる程、諸侯の雰囲気は悪くなっていった。

そうしてしばらく気持ちよさそうに笑った後、先程彼女に付いて入って来た2人の少女を紹介する。おかつぱで黒髪のおとなしそうな少女が顔良、緑色のショートカットのボーイッシュな方が文醜。この2人の将が袁紹軍の双璧、2枚看板になっている。

それが終わると、袁紹は玉座にどっかと腰を下ろした。そして訪れる沈黙。普通に考えれば隣の玉座に座っている少女の番なのだが、彼女は手に持った湯呑みに夢中になっていて気付かない。

「ちょっと、美羽さん！ あなたの番ですよ！」

その様子に気付いた袁紹は、多少ヒステリックに声を荒げる。だが、その声も少女には届かず、一心不乱に何かを飲み続けている。距離があつたために一刀には分からなかったが、袁紹のこめかみがヒクヒクし出した事に気が付いた女性が代わりに答えた。

「こちらは袁紹様の従姉妹で南陽郡太守、袁術様です。皆さん、よろしく願いますね」

紺色の短い髪の女性は、笑顔で隣の少女を紹介する。ちなみに、彼女自身の名は張勳、袁術の親衛隊兼お守り役の様な存在である。と、そこでやっと飲み終わった様で、湯呑みを口から放した袁術が大きく息を吐く。

「ぷはっ！ やはり蜂蜜水は最高なのじゃ。……ん？ 七乃、

なぜ皆、妾の方を見ておるのじゃ？」

袁術は口の周りをベトベトにしたままで張勳に尋ねる。

「もう、決まってるじゃないですか。美羽様が可愛らしいからですよ」

もちろんそんな事は無いのだが、袁術は真に受けた様で満面の笑みを浮かべている。そんな様子を見ながら、一刀は内心ホツとしていた。各地に放っている間者からの報告で、袁紹、袁術の暗愚振りには聞いていた。しかし、実際に自分の目で見てみるまでは、と考えていたのだが、それが予想以上だったからだ。その方が一刀達にとっては都合がいいのだ。

さらに諸侯の名乗りは続いていく。次は一刀達とテーブルの対角袁紹側の一番上座にいる人物だ。

「私は陳留太守、曹操、字は孟徳よ」

やれやれ、といった感じで立ち上がった少女は曹操であった。金色の髪をツインテールにした上でロールさせている。蒲公英と同じ位の身長しかないが、その佇まいには威圧感が感じられた。

曹操は後ろにいる髪の長い長身の女性も紹介する。彼女の名は夏侯惇、字は元讓。曹操配下で一番の猛将である。曹操の護衛としてここにいる夏侯惇は、鋭い目付きで諸侯を見渡していた。

続いて曹操の正面に座る女性。

「私は袁術軍の客将、孫策の軍師、周瑜だ。よろしく頼む」

褐色の肌に長い黒髪、眼鏡を掛けた理知的な雰囲気の女性だった。

ここで一刀は引つ掛かりを覚えた。彼の知っている歴史なら、まだこの段階では孫堅が軍を率いていた筈である。すでに亡くなっているのならどこで、と、そこまでで考える事を止めた。元々、武将が女の子、と言う時点で一刀の知っている歴史とは齟齬が起こっているのだ。違いは少なからず存在している。

一刀は頭を切り替えて他の諸侯の名乗りを聞く。荊州牧劉表、幽州北平郡太守公孫瓚等、数人の将が名乗った後、翠へと順番が回ってきた。

「あたしは武威郡太守馬騰の名代で娘の馬超。後ろのは、うちの軍師の北郷一刀だ」

翠に紹介され、一刀は軽く頭を下げた。と、それまで静かだった天幕の中が騒つき出す。どうやら、想像以上に天の御遣いとしての一刀の名は広まっている様だ。特に一刀達の斜向かい、一番の下座に座っている桃色の長い髪の少女は、柔らかく笑いながら手を振っている。それに対し、一刀は半分苦笑いの笑みを返す。すると、キヤーツ、と歓喜の声を上げて家臣と思われる少女達と手を合わせた。しかし、黒髪の少女は少し困惑した顔をしている。

「ちょっと、何をしているんですの!? 次は貴方の番ですわよ」

「は、はいっ! ごめんなさいっ!」

袁紹のヒステリックな怒声に、桃色の髪の少女は椅子を倒す勢い

で立ち上がる。その拍子に、大きな胸がポヨンと揺れた。

「私は平原の県令を務めています劉備、字は玄德です。それと、こっちは義妹の関羽と軍師の諸葛亮。よろしくお願ひします」

そう言つて、深々と頭を下げる。それを聞いて、一刀は思わず吹き出しそうになる程驚いた。黒髪で長身の少女が関羽だろう。だとすると、ベレー帽を被った小さな女の子が諸葛亮だと言う事になる。董卓よりも幼く見えるこの少女が、臥竜と呼ばれた希代の名軍師、諸葛孔明だとは、言われなければ絶対に分からないだろう。

だが、一刀が驚いた理由はそれだけではない。本来ならばこれから先、劉備は軍師の不在によつて苦勞に苦勞を重ねる事になるのだ。それなのに、もうすでに諸葛亮がいる。この世界の未来は一刀にも全く分からなくなった。

「さて、皆さん自己紹介も終わった様ですし、早速軍議を始めましょう。ですが、その前に大事な事を決めねばなりませんわ」

やっと軍議に入れる、と思つていた諸侯にしてみれば、またもや肩透かしを食らつた格好になり落胆してしまふ。だが、そんな事はお構ひ無しに、袁紹は意気揚々と話を進めて行く。

「それは、この連合の大将ですわ。これだけの諸侯が集まつた大連合なので、当然それを率いる者には高い家柄が必要。ですが、それだけではなく、品格、容姿、知性等も必要であると私は思うのです。果たして、その様な傑物がいるかどうか……。皆さんは御存じありませんか？」

しかし、袁紹の問い掛けに答える者は無く、皆一様にうつむいて

彼女と目を合わせようとする者はいなかった。唯一何かを言おうとした袁術も、張勳に口を押さえられている。そんな状況に、袁紹は同じ様な内容の事を繰り返して始めた。

「……なあ、一刀。あれって、袁紹が大将になりたがってるんじゃないのか？」

翠が小声で尋ねる。どうやら、彼女にも見抜けたようだ。一刀は黙って首を縦に振った。

「なら、何で自分からやる、って言わないんだ？ あたしなら、やりたいなら自分から言うけど……」

自分から名乗りを上げない理由までは分からなかったらしい。一刀は翠の耳元に顔を近付け、小声で説明し始めた。

「理由は色々あるだろうけど、一番は自尊心の問題だと思う。自分から言い出せば、手柄を焦った浅ましい奴、と思われかねない。けど、他人から推薦されたのなら、嫌だけど仕方無く、って感じに収められるだろ？」

もつとも、その考えが見透かされれば素直に自分から言い出すよりも評価が落ちるのだが、袁紹にはそこまでの頭は無かった。

「ふーん。何だか、面倒臭いな」

武による名誉以外、地位や権力、名声と言った物にほとんど興味の無い翠らしい答えに、一刀の顔は僅かにゆるんだ。

「ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ……、ふう。……ですから皆さん、これ、と思う人物がいるではありませんか。その者の名を上げてくれればよいのです。華琳さん、貴方なら分かるのではなくて？」

湯呑みに注がれた水を一気に飲み干した袁紹は、最も近くにいる曹操に尋ねた。この2人、お互いを真名で呼び合う様な旧知の仲である。しかし、曹操の返事は冷たかった。

「さあ？ 私にはほとんど心当たりが無いけど？」

明らかに落胆した表情をした後、袁紹はもう一度喋り始めた。

かれこれ2時間以上もの間、袁紹はほぼ1人で話し続けていた。たまに、今回の様に曹操や公孫瓚等の袁紹と既知の人物が、気の無い返事や相づちを打つだけの不毛な時間だった。天幕の中は気だるい空気が蔓延しており、袁術に至っては、離れた位置にいる一刀にも分かる位はつきりと熟睡している。

袁紹が自分からやりたいと言い出さない理由は、プライドだけではない。大小合わせて10名を超える諸侯が集まった連合を率いるのは、極めて大変な仕事になる。彼女はそれが嫌だった。つまり、大将の名が欲しいだけで実は欲していないのである。

それが分かっているからこそ、袁紹を推す声がどこからも上がらないのだ。そんな事をすれば、厄介事を押し付けられてしまうから。

この状況に、さすがに一刀も飽きて来た頃、彼は翠の背中から苛

立ちを感じた。そつと顔を近付け、小声で彼女を諭す。

「俺達の目的は時間稼ぎなんだぞ。間違っても、バカな事は口に出すなよ」

「……分かってる。けど、あたしはこういうの好きじゃないんだ」

そう言われても、翠には我慢してもらうしかない。一刀が再び声を掛けようとした時、バンツ、とテーブルを叩く大きな音と共に、1人の人物が立ち上がった。突然響いた音に驚いて目を覚ました袁術も含め、全員の視線がその人物、劉備に集まる。

「皆さん！ 私達が集まったのは、董卓さんの暴政に苦しむ洛陽の人達を助けるためじゃないんですか！？ こうしている間にも苦しんでいる人がいるのに、いつまで、ここで腹の探り合いをしているつもりなんですか！」

先程まで一刀に見せていたにこやかな顔とは違う、真剣な表情。怒りの中にも憂いの感じられる表情で、劉備は諸侯に語り掛けた。

彼女が劉備だと知った時、一刀はがっかりしていた。確かに可愛い少女ではあったが、曹操の様な特別な雰囲気纏っていないからだった。

だが、今はどうだ。まるで別人の様な表情で放たれる言葉は、一刀の心の奥深くにまで響いて来る。音量や話し方、語句の選び方等の話術ではなく、もっと本質的な部分で惹き付けられる。これこそが劉備の持つ英雄としての力なのだ、と、一刀は彼女の声を聞きながら感じていた。

そんな劉備の声に交ざり、はわわ、と言う声が聞こえた。見れば、劉備の軍師である諸葛亮が、焦った様子でそう呟いている。さらには、その後ろに控えている関羽も、ため息を吐きながら困った顔で額を押さえている。恐らく2人は劉備を諫めていたのだろうが、彼女はそれを突っぱねて発言した様だ。

しかし、そんな言葉もどこ吹く風、とばかりに袁紹は答えた。

「別に、腹の探り合いなんてしていませんわ！ 私はただ、総大将に相応しい人物を知らないか、と尋ねているだけです！」

「なら、袁紹さんがやればいいじゃないですか。そんなにやりたそうにしてるんだから」

「なっ！ わ、私がいっ、やりたそうにしたと言うんですの!？」
ずっとしてたくせに。一同が同じ事を思ったが、誰も口に出す事無く話は進む。

「……ですが、劉備さんがどうしても私でなければ嫌だ、と、そこまでおっしゃるのであれば、まあ、引き受けて差し上げない事もありませんわ」

不満たらたらという言葉とは裏腹に、その顔は嬉しくて笑みを隠し切れなくなっている。

「では皆さん。私が総大将でよろしいですわね？」

立ち上がった袁紹は諸侯に確認を取る。

「私は構わないわ」

「こちらも問題無い」

曹操と周瑜が賛成したのを切っ掛けに、そこにいる全ての者が賛成した。それを受けて、高笑いを始める袁紹。そんな彼女を横目に見ながら劉備は腰を下ろした。しかし、ホツとしたのも束の間、袁紹はとんでもない事を言い出す。

「……さて、劉備さん？ 私、貴方のせいで連合軍の大将という、とても面倒な役目を引き受けなければならなくなってしまいましたの。ですから、もちろん私を助けるために働いて下さいますわよね？」

いきなり名指しで言われた劉備は驚いた顔をしている。しかし、その隣にいる諸葛亮には予想出来ていたのだろう。驚きは無かったが、どんな無茶を言われるのか、少しビクビクしている様子だった。

「で、でも、袁紹さんがやりたいって……」

「あら、私はそんな事、一言も言ってますんわよ。貴方が勝手に勘違いしたのではなくて？」

確かに袁紹の言う通りだった。やりたい雰囲気を出してただけで、やりたいとは一度も言っていないのだ。相手が正論では、劉備にはこれ以上の反論が出来なかった。

「そんなに難しい事ではありませんから。貴方達には連合軍の先陣を務め、汜水関を抜いて頂きたいだけです」

その発言に劉備達だけでなく、一刀や翠、他の諸侯達も驚いた。なぜなら、劉備の兵力は今回参加している諸侯の中で一番小さいからだ。

漢帝国はその国土を13の州に分けられている。州の中には多くの郡があり、その下の行政区分として県がある。劉備の職である県令とは、この県を治める仕事なので兵力が小さいのは当然だった。

劉備はそれを理由に断ろうとする。

「そうですか。それでは仕方ありませんわね。ですが、総大将である私の命令が聞けないとなると……、どうなるか分かっているのでしょうか？」

その言葉に一同耳を疑った。袁紹は自身の強大な兵力を背景にして、脅迫して来たのである。こんな事は連合軍の大將がするべき事ではない。士気の低下は免れないし、最悪の場合、連合の崩壊に繋がりがねないからだ。

劉備はシヨックを受けた表情で少しの間うつむいた後、脇に控える2人を見た。

「……ごめんね、愛紗ちゃん、朱里ちゃん。私のせいで……」

そう言って謝る劉備を関羽と諸葛亮が慰める。そして、意を決した劉備が袁紹に返事をしようとしたその時、別の所から声が飛んだ。

「お待ち下さい、袁紹様！」

その声の主は一刀だった。不思議そうな顔で見上げる翠を一刀は

目だけで制す。

「何ですか？ 貴方は……」

「馬騰軍の軍師、北郷一刀さんです。噂になっている天の御遣いですよ」

名前の出て来ない袁紹に、顔良が耳打ちする。

「そうですね、お使いさん。何の用なのです？」

「違いますよ、麗羽様。御遣いです、御遣い」

「……分かってますわ！ で、その御遣いさんが何の用ですの？」

間違えた恥ずかしさを誤魔化すためか、袁紹は声を荒げた。一刀はそんな袁紹に対して恭しく答える。

「恐れながら申し上げます。あの劉備とか申す輩、偉大なる袁紹様の連合軍の先鋒を務めるには相応しくないと存じます」

一刀は両手を体の前で合わせて頭を垂れる。一方の袁紹は足を組んで玉座にふんぞり返り、訝しげな顔で続きを促した。

「劉備の職はただかだか県令。本来ならば、この場にいる事も叶わない様な低い身分にございます。そもそもこの者は貧しい農家の出ムシ口を織り、草鞋を売って生計を立てていた貧乏人。それが、黄巾の乱に乗じて手柄を立て、県令の職に就いた成り上がりにつきません」

視界の端にいきり立つ関羽と、それを宥める劉備と諸葛亮の姿が映った。さすがに軍神と謳われただけの事はある。綺麗な外見をしているが、半端ではない殺気が放たれている。一刀は足が震えそうになるのを我慢しながら話を続けた。

「尚且つ、劉備めは中山靖王劉勝様の末裔を自称して兵を集めた不届き者。この様な者を先鋒に据えれば、必ずや、袁紹様の御名に傷が付きましょう」

草鞋売りや中山靖王劉勝の末裔と言うのは、あくまで一刀の知る歴史の劉備の話であった。勢いで思わず言ってしまったが、誰も何も言わない所を見ると、どうやら彼女の生い立ちもそうなのだろう。

「ですから、ここは袁紹様御自ら先陣を切って頂き、その御威光の下に我らを導いて頂きたく存じます。もし袁紹様に率いて頂ければ、鉄壁を誇る汜水関、虎牢関すら泥の壁の様に容易く突破し、洛陽に巢食つ悪臣董卓を打ち払える事でしょう。そして、袁紹様の御高名は天下に知れ渡り、漢帝国の老若男女全ての者がその勇名を讃えるに違いありません」

その後もボキャブラリーを総動員して美辞麗句を並べていく一刀。もう、自分でも何を言っているのか分からなくなってきた頃、袁紹の顔から警戒心が消えて頬がゆるんで来た。

「御遣いさんのおっしゃりたい事は、よく分かりましたわ。確かに貴方の言う通りですわね。よろしいでしょう。この、袁本初が皆さんを……」

すつくと立ち上がった袁紹。しかし、それを顔良が諫める。

「ちょ、ちょっと待って下さいよ、麗羽様。関攻めがそんなに簡単にいく訳無いじゃないですか。ものすごい被害が出ちゃいますよ」

「……そ、そうですね。全く、私とした事が……」

せつかく一刀の思い通りに事が運ぶと思いきや、再び心変わりする袁紹。一刀は次の語句を頭の中で懸命に探すが、良い言葉が思い付かない。しかし、全く予想していなかった所から助け船が出された。

「私からもお願いするわ、麗羽」

そう言っ頭を下げたのは曹操だった。それを、袁紹は驚いた様な、それでいて、少し嬉しそうな顔で見下ろす。

「ど、どういっつもりですの、華琳さん？」

「どういっつもりも何も無いわ。私は貴方の力を認めているのよ。貴方のその天才的な軍略の腕を、後学のためにも私に見せてもらえないかしら？」

その言葉に、すでに袁紹は笑いを堪える事が出来なかった。常に曹操の後塵を拝していた袁紹にしてみれば、頭を下げて頼み事をされている今の状況はたまらない物があったのだ。

「おーっほっほっ！　そこまで言われては仕方ありませんわね。」

私が、雄々しく、勇ましく、華麗に皆さんを勝利に導いて差し上げますわ。劉備さん、貴方は後方で私の戦い方を学ぶとよろしいですわ」

そこまで言うと、再び袁紹の高笑いが天幕に響いた。一刀は、フーッ、と大きく息を吐き、強張った体から力を抜いた。

結局、軍議はこれだけで終わり、細かい事は全て袁紹本人が決める、という事で解散となった。それと同時に、関羽は一刀に詰め寄ろうとするが、劉備と諸葛亮によって無理矢理天幕の外に連れ出された。その様子を見ていた翠が一刀に尋ねる。

「どうするんだ一刀、あんな事言つて。あいつ、下手したらあたしよりも強いかもしれないぞ」

「ああ、知ってるよ……」

一刀はそう呟くと、翠の隣の空いた椅子に勢い良く腰を下ろした。

第2章・洛陽編・第2話、反董卓連合（後書き）

と言う事で、汜水関攻めの先陣は袁紹に務めてもらいます。戦い
を始める前に色々とやっておかないとならない事があるので、開戦
はまだ先になりますが。

第2章・洛陽編・第3話〜3人の英雄〜

劉備と諸葛亮によつて天幕の外に連れ出された関羽であったが、今だその怒りは収まる事を知らなかった。

「放して下さい、姉上！ 朱里、お前もお前だ！ 満座の席で桃香様が辱められたのだぞ！ 奴に怒りを覚えなかった、とても言うのか！？」

「あ、愛紗さんの気持ちは分かります。ですが、北郷さんのお陰で私達が助かったのも事実なんでしゅ」

関羽の怒号に身をすくめながら答える諸葛亮。恐怖のためか、舌尾を嚙んでしまう。

「そうだよ、愛紗ちゃん。北郷さんは御遣い様なんだから、本気であんな事を言った訳じゃ……」

「姉上は天の御遣いに幻想を抱きすぎです！ そもそも、あんなエセ占い師の言う事を信じるなど……」

2人の宥める声も届かず、関羽の怒りはさらに増していく。そこへ、緊張感の無いのんきな声が響いた。

「にゃ〜？ お姉ちゃん達、何をしているのだ？」

諸葛亮よりもさらに幼い感じの赤毛の少女が、両手を頭の後ろで組んだまま、てくてくと歩いてくる。ショートヘアの毛に虎の髪飾りを付けた、いかにも活発そうな女の子だ。さらに、その後ろに隠

れる様にしている、諸葛亮とよく似た服を着た少女がもう1人。薄紫色の長い髪を頭の両側でまとめたその少女からは、目深に被った魔女の様な帽子のせいもあって大人しい印象を受ける。

「鈴々ちゃん、お願い！ 愛紗ちゃんを止めて！」

劉備の叫ぶ様な頼みを聞いた赤毛の少女は、後ろから関羽の腰に抱き付いた。その小さな体のどこにそんな力があつたのか、劉備と諸葛亮の2人掛かりで何とか押し止められていた関羽の体は、その少女1人にズルズルと引き摺られて行つた。

そんな彼女達のやり取りは、天幕の中にいる一刀達にも聞こえていた。2人は関羽の怒声が聞こえなくなるのを待つて天幕を出ると、出てすぐの所で声を掛けられた。足を止めて振り向くと、そこには曹操が夏侯惇を伴って立っていた。

「馬騰殿の体調はどうなの？ 貴方を名代に寄越す、という事は余程悪いのかしら？」

曹操の言葉を理解出来なかった翠の脇腹を、一刀が後ろから肘でつつく。そうして、やっと翠は前もって打合せていた事を思い出した。

「……………あ、ああ！ 母様は匈奴の奴らを討伐した時に怪我をして……………で、大した怪我じゃないんだけど、涼州からは距離があるから、大事を取って武威に残ったんだ。……………今頃は、酒でも飲んでのんびりしてるんじゃないかなあ？」

決めておいた台詞を思い出しながらたどたどしく言う翠に、一刀は頭を抱えなくなった。下手に怪しまれて、自分達の目的を悟られ

る訳にはいかないのだ。しかし、曹操は特に気にした様子を見せなかった。

「……そう、残念ね。西涼の狼、とまで呼ばれた馬騰殿に会いたかったのだけれど」

すまないな、と謝って翠は立ち去ろうとするが、曹操はそれを止める。正確には、翠ではなく一刀を、だ。

「貴方はどういっつもりなのかしら。袁紹を連合軍の先鋒に推すなんて」

一刀は一瞬答えに詰まる。その理由を正直に話す訳にはいかないからだ。かといって、適当に誤魔化そうとして失敗する訳にもいかない。そこで、一刀は鎌をかけてみる事にした。

「……多分、曹操さんと同じじゃないかな」

曹操は頭を下げてまで袁紹を先鋒に据える事に協力したのだ。そこには何らかの利、思惑があつて然るべきだろう。そんな一刀の考えを見抜いたのか、曹操は薄く笑うと振り返った。

「北郷一刀、貴方の名前、覚えておきましょう」

呟く様に小声で言うと、曹操は夏侯惇を従えて自分の陣へと帰って行った。

「お帰り、冥琳。どうだった？」

周瑜が自陣に戻ると、1人の女性が声を掛けて来た。

彼女の名は孫策、字は伯符。江東の虎と称された孫堅の遺児であるが、孫堅の死後、袁術の下で客将として一軍を率いていた。

孫策は肩に掛かった長い桜色の髪を掻き上げながら、周瑜に向けて笑顔を見せる。

「ああ、面白かったぞ。しばらく前に噂になっていた天の御遣いがいてな……」

そう言つと、周瑜は孫策に先程の軍議の様子を話し始めた。

「へえ、会つてみたかつたわね、その子に」

「なら、貴方が出れば良かったじゃない、雪蓮」

「いいの？ 劉表の顔を見たら、どこであろうと奴の喉笛に剣を突き立てるわよ？」

顔はそれまでと同様に笑っているが、その目だけは鋭く、強烈な殺気をはらんでいた。

孫堅は劉表の治める荊州の地を攻めた時に戦死していた。劉表が直接手を下した訳では無いが、それでも孫策にとっては親の敵である事に代わりは無かった。

やれやれ、と言った感じでため息を吐く周瑜。

「しかし、私達にとっては良い方向に働くかもしれないわね」

彼女は腕を組んだまま眼鏡を直し、微かに笑った。

一刀と翠が陣に戻るとすでに天幕は全て完成しており、兵達は食事を始めていた。2人はその間を通り抜け、指揮官用の天幕に入る。そこには食事を前にお預けを食らっている蒲公英の姿があった。

「もっつ、遅いよ、2人共」

頬を膨らませて文句を言う蒲公英。2人はそんな蒲公英に謝りながら席に着くと、3人で揃って食事を始めた。

数十分後、テーブルの上の食事を全て平らげると、やって来た世話係の女性兵士が空いた皿を下げ、代わりに茶を置いていった。一刀は急須から茶を注ぐと、翠と蒲公英、そして、自分の前にそれぞれの湯飲みを置く。そうして、人心地付いた後だった。

「じゃあ、一刀。さっきの事、説明して貰おうか？」

翠は普段よりも多少低いトーンの声で尋ねる。それに対し、一刀は湯飲みに口を付けたまま、何を、と、視線で返した。

「決まってるだろ。何で汜水関攻めの先鋒を袁紹にさせるのか、

って事だ。奴の軍が連合の中で一番大きいんだぞ」

先程よりも、イライラしているのが声から分かる。だが、それは対称的に一刀は冷静な口調で答えた。

「おそらく、劉備軍より袁紹の方が沔水関を抜けるには時間が掛かる、そう思ったからだけど？」

テーブルに湯飲みを置きながら答える。直後、パンツ、という大きな音がして湯飲みが跳ねた。翠は両手でテーブルを叩いて立ち上がる。

「そんな訳あるか！ 劉備の兵は三千、袁紹軍は五万近く。それなのに、劉備の方が早く沔水関を落とせる訳無いだろ！ 第一、拠点をとすには守備側の倍以上の兵がいる事位、あたしだって知ってるぞ！」

一刀の変に落ち着いた態度に翠の神経は逆撫でされ、一気に感情を爆発させて大声を出す。

「バ、バカッ！」

この話を他の諸侯に聞かれれば、自分達の身が危うくなる。一刀は慌てて翠の口を塞ぐが、彼女は力任せに腕を振り払い、鋭い目付きで睨み付けた。軍議の内容を知らない蒲公英1人が蚊帳の外で、2人の顔を心配そうな表情で交互に見る。

「とにかく落ち着けて。ちゃんと説明するから」

翠を宥める一刀の顔はわずかに引きつっていた。さすがは歴史に

名を残す猛将である。可愛い顔をしているが、先程の関羽といい、今の翠といい、こうして見せる迫力は半端ではない。内心ビクビクしながらも、蒲公英と2人で翠を座らせた一刀は、袁紹に先陣を取らせた理由を話し始めた。

「そもそも、兵数が多い方が常に有利な訳じゃ無いんだ」

拠点攻略、特に城攻めには、守備側の倍以上の兵を揃えるのが常道だ。しかし、それはあくまで平地にある城を攻める場合である。

街の中に城がある中国では、日本の山城の様に攻め込まれにくい場所に城を作る訳では無い。街の発展を考えれば、街道沿いや河川沿い等、人や物資の行き来に便利な場所に作った方が良いからだ。その様な開けた場所にある城に対しては、大軍を持ってしての包囲戦が有効になってくる。

しかし、関では周囲の地形が大きく違う。切り立った崖に挟まれた道を塞ぐ壁の様に、関は作られている。そのため、基本的には一方向からしか攻撃を行う事が出来ない。また、部隊を展開するスペースも狭いため、ある一定数以上の兵は意味を成さなくなる。しかも、兵の練度が低かったり、兵を率いる将が無能だったりすれば、お互いがお互いの動きに干渉し合い、マイナスにしかならなくなってしまう。

袁紹軍の二枚看板である顔良と文醜は決して優秀ではないが、かと言って無能な訳ではない。しかし、この2人に続く将がおらず、五万もの兵を指揮し切れない、と言うのが一刀の読みだった。

「……でも、五万と三千だぞ？ 五万と三万ならともかく、いくら何でも違い過ぎないか？」

まだ納得出来ない様子の翠に対し、一刀はさらに説明を続ける。

数に任せた正面からの力押しによる攻略が不可能な以上、策を用いて攻め落とさなければならぬ。そうになると、問題は袁紹軍よりも、むしろ劉備軍の方であった。天才軍師として、また、名宰相としても歴史に名を残した諸葛亮の存在である。

「諸葛亮、って、あのちっちゃい奴だろ？ あんなのが、本当にすごいのか？」

翠の疑問ももつともだ、と一刀は思う。軍議の席では慌てた表情で、はわわ、と言っていた印象しかない。歴史を知っている一刀ですら、これが本当にあの天才軍師か、と思っただ程だ。

しかし、その才が本物なのは間違いないだろう。それは、目の前にいる翠が証明している。錦馬超の名に恥ない武を有している翠自身、何よりの証拠なのだ。

「ああ。諸葛孔明、臥竜とも呼ばれている俊才で、一部では、臥竜か鳳雛のどちらかを得れば天下が獲れる、とまで言われている人物だ」

もちろん、これは一刀が知っている歴史の話である。軍議の席で初めて諸葛亮の存在を知ったのだから、当然ではあるが。

「……後は、意趣返しだな」

「意趣返し？」

一刀の発した意外な言葉に、蒲公英は思わずオウム返しで尋ねてしまった。

「この戦は、袁紹の嫉妬や欲から始まったんだ。董卓を悪人にして。なのに、その張本人が安全な所で高みの見物、なんておかしいだろ？ 少しは痛い目にあってもらわないとな」

一刀がそう言い終わったところで、翠は大きく息を吐いた。

「……分かった。一刀がそこまで言うなら信じるよ。実際、もう決まった以上、ゴチャゴチャ言ってもしょうがないしな」

若干不満げな口調と表情だが、とりあえずは納得してくれたらしい。その様子を見て、一刀はホツと胸を撫で下ろした。今回の件の本当の理由を言わずに済んだからだ。

袁紹に先鋒を取らせたのは二次的な物に過ぎず、一番重要視していたのは、劉備軍を最前線から外す事だった。歴史では、汜水関に於いて華雄と関羽が一騎打ちをし、敗れた華雄が首級を挙げられている。もちろん、歴史通りになるかどうか、それは一刀にも分からない。しかし、可能性を低くしておくに越した事はなかった。

「ありがとう、翠。それと、ごめん。翠には、せめて一言断つとくべきだったと反省してる」

一刀は両手をテーブルの上に突き、頭を下げた。こうされては、翠もこれ以上不満そうな顔は出来なかった。

「べ、別に、あたしは謝ってもらいたい訳じゃないぞ。ただ、理由を知りたかっただけで……。第一、あたしやたんぼぼには、お前

みたいに頭を使うのは出来ないし……。その……。あたしも悪かったよ。話も聞かずに大声出して、さ」

そう謝った翠は照れ臭いのか、すっかり温くなった茶に口を付ける。その姿を、蒲公英は微笑みながら見ていた。

それからしばらくし、すでにすっかり日も暮れた後、一刀はおもむろに立ち上がった。

「翠、付き合ってくれるか？」

「ああ、鍛練か？ いいぞ」

翠も立ち上がり、立て掛けてある槍に近付く。しかし、一刀はそのつもりで声を掛けた訳では無い。翠の言葉を否定すると、今度は蒲公英が声を上げた。

「そうだよ、お姉様。こんな時間に誘われる、って事は……。二ヒッ」

蒲公英のいやらしい笑い方に、翠は顔を赤くした。だが、当然蒲公英の考えも違っている。

「そうじゃなくて、劉備さんの所に謝りに行くことと思うんだ。袁紹を前に出すためとは言え、いくら何でも酷い事を言い過ぎた」

神妙な面持ちの一刀に、翠は冗談ぽく返す。

「そうだな。関羽のあの怒り様じゃ、いつ後ろから切られないとも限らないからな」

こうして一刀と翠は、もう留守番は嫌だ、と駄々をこねる蒲公英を連れて、劉備軍の陣地へと向かった。

劉備軍陣地。その陣内を近寄り難い雰囲気を身にまとい、大股で歩く1人の少女がいた。

「……まったく、桃香様は何を考えてらっしやるのだ。奴に対して怒らないばかりか、いい人などと……」

その少女、関羽はブツブツと不満を呟きながら歩いていた。陣に戻るまでも、戻った後も劉備と諸葛亮の2人に宥められていたが、一向に怒りは治まらない。それどころか、馬騰軍の陣地に出向いて文句を言っつてやろうか、と考える程だった。さすがにそれは思いとどまったが、まさに憤懣やる方無し、と言った感じだ。

せめてもの気晴らしに、と、陣内を巡回している関羽の前を、1人の兵士が慌てた様子で駆けて行く。

「何事だ！」

陣の外まで響く様な大声に驚いた兵士は、体をビクツと震わせて足を止めた。関羽自身も自分の声量に気付き、一度深呼吸をして心を落ち着けてから、再度兵に尋ねる。

「どうしたのだ、それ程までに急いで？」

「はい。劉備様との面会を求める方が陣の入り口まで来ておりまして……」

「姉上にお会いしたいだと？一体誰だ」

「涼州武威郡太守、馬騰殿の名代の馬超殿と、その軍師の北郷……」

「な、何だと!?!」

報告の途中、いきなり先程よりも大きな声で叫ぶ関羽。そうかと思えば、今度は俯いて小声で何事か呟き出した。

「奴め、一体どういうつもりだ？ 衆人の前で桃香様を辱めただけでは気が済まんのか？ まさか、また桃香様を罵りに……。いや、それだけではなく……!」

その様子に心配になった兵が声を掛ける。が、それと同時に、関羽は俯いていた顔を上げて叫んだ。

「……ふっ、ふざけるな!」

あまりの迫力に、側にいた兵は腰を抜かしてその場にへたり込んでしまう。だが、今の関羽の視界にはそれすら入っていない。怒りを隠そうともせず、鬼のような形相で陣の入り口に向かって走り出してしまった。

一方、陣の入り口で待つ一刀は、とりあえず劉備に謝罪して事情を説明し、それから関羽に取り成してもらおうと考えていた。しか

し、物事は往々にして思い描いた通りにはいかないものである。

遠くから誰かが駆け寄ってくる。篝火が焚かれているとは言え、顔が確認出来る程には明るくはない。よく目を凝らして見てみると、縛った髪の毛が走るのに合わせて揺れている。そして聞こえる叫び声。

「貴様ーっ！ 桃香様に何をするつもりだっ！」

その人物が関羽だと気付いた時には、彼女はすでに愛用の武器、青龍偃月刀を振り上げていた。まずい、そう思った翠は、銀閃を振り上げるために構える。そんな2人より早く動いた者がいた。一刀である。

「すいませんでしたーっ！」

全力の土下座だった。関羽からしてみれば完全に予想外の行動で、思わず偃月刀を止めてしまう。そして、それは翠と蒲公英も同じだった。一刀の周りの時間が止まる。

「なっ……、なっ……」

声すら出ない関羽。そうこうしている内に、その場に劉備達がやって来る。

「何してるの、愛紗ちゃん!？」

この状況を見た劉備は、驚いた様な声を上げた。一刀が自ら土下座したのだが、何も知らない劉備には、関羽が偃月刀を振り上げて無理矢理土下座させた様にしか見えないだろう。そして、関羽自身

もその事に気付いた。

「ち、違います、桃香様！ 違うんです！」

関羽の叫び声が夜空に響いた。

その後、一刀達は天幕へと招かれ、そこで改めて謝罪と釈明を行った。しかし、関羽とは対称的に、劉備はまったくと言っていい程怒っていなかった。それどころか、一刀に対して好意的な雰囲気すら感じる。

「ほらね、愛紗ちゃん。私の言った通りだったでしょ」

そう言って、劉備は関羽に笑い掛けた。視線を外した関羽は未だ不機嫌そうな顔をしているものの、どうやら、これ以上文句を言うつもりは無い様だ。すると、それまで大人しくしていた赤毛の少女が、劉備の袖を、クイツ、と引っ張った。

「桃香お姉ちゃん、鈴々も」

少女は劉備の顔を見上げて言った。

「うん。そうだ、雛里ちゃんもおいで」

諸葛亮の後ろに隠れる様にしている大きな帽子を被った少女に向かい、劉備は手招きをする。あわわ、と、一瞬慌てた表情を見せた

ものの、おずおずと劉備の方に近づく少女。先に名乗り始めたのは、赤毛の少女の方だった。

「鈴々の姓は張、名は飛、字は翼徳。桃香お姉ちゃんと愛紗の義妹なのだ」

勢い良く言うと、張飛は満面の笑顔を見せた。髪型といい服装といい、男の子に間違えられそうな、元気な少女だ。張飛とは反対に、もう1人の少女は帽子の鍔を両手で引き下げ、顔を隠してモジモジしている。その体勢のまま上目遣いで一刀を見上げ、ボソボソと喋り出した。

「……鳳統、字は土元、です……」

今にも消え入りそうな声で名乗ると、鳳統は軽く頭を下げ、トテテッ、と、諸葛亮の方に走って行ってしまった。

「ふえくん。怖かったよ、朱里ちゃん」

「よく頑張ったね、雛里ちゃん」

お互いに手を取り合う2人。その姿は、まるで仲の良い姉妹の様に見えた。

「しかし、驚いたな」

一刀は口の中で呟いた。張飛が10歳位の小さな女の子だった事も確かにそうだが、ここにいる事自体は予測の範疇だった。むしろ、問題なのは鳳統の方だ。さっき一刀が翠に話した、臥竜と鳳雛の話の鳳雛とは、鳳統の事である。歴史ではここにいるはずの無い2人

の存在に凄いと思う一方、軍議の時から感じていた違和感が一層大きくなった。

「劉備さんは、どうしてこの連合に参加したんだ？」

一刀は不躰と知りつつも劉備に尋ねた。

「もちろん、董卓さんの暴政に苦しんでいる洛陽の人達を助けるためです」

真剣な眼差しの劉備。その答えは、軍議の席での言葉と同じだった。しかし、これこそが一刀の感じていた違和感だ。

董卓が暴政を敷いている、と言うのは、袁紹が大義名分を得るための出任せである。劉備がそれをそのまま信じた可能性はあるが、諸葛亮と鳳統の2大軍師が付いていて情報の裏を取らなかったとは考えにくかった。

一刀はその視線を劉備から2人の軍師に向ける。鳳統の表情は帽子の鏢に隠れて分からなかったが、諸葛亮は一刀と目が合った瞬間に視線を逸らした。その動きから一刀は真実を感じ取る。

「劉備さんは、本気でそう思ってるのか？ 董卓が暴君だって」

一刀は再び劉備を見る。その強い眼差しに、劉備は言葉を出すまでに一瞬の間を要した。

「……本気で、って、どついう事ですか？」

訝しげな表情の劉備。そんな彼女を一刀は冷たく突き放す。

「俺よりも、後ろの2人の方が良く分かってるんじゃないか？」

後ろの2人とは、もちろん、諸葛亮と鳳統の事だ。劉備は振り返ると2人を見下ろした。

「朱里ちゃん、雛里ちゃん、どういう事なの？」

だが、2人は慌てて劉備から視線を逸らし答えようとはしない。代わりに関羽が声を上げた。

「姉上、この様な者の言う事など聞いてはなりません！」

関羽は強い口調で劉備を諫めるが、彼女はそれを聞こうとはしない。それどころか、この強い口調に何かを感じたのか、逆に関羽に食って掛かる。

「もしかして、愛紗ちゃんも何か知ってるの？ もしそうなら教えて！？」 皆、私に何を隠してるの！？」

さっきまでの劉備からは想像出来ない様な鋭い声が飛ぶ。関羽も何も答えず、ただ黙って俯くだけだった。

「……ねえ、お姉様。どういう事？」

「あ、あたしに聞いたって分かりっこないだろ」

一刀は背中からそんな声を聞いたが、とりあえず説明している場合ではないので放っておく。劉備達の間にはピリピリした空気が流れる中、それまでずっと黙っていた張飛が口を開いた。

「早く言っつてしまえばいいのに。3人が嘘を吐いているのはバレバレなのだ。第一、愛紗はいつつも鈴々に、嘘は吐くな、って言っているのだ」

まるで茶々を入れる様な口振りだったが、関羽は言葉を詰まらせる。そして、余計な事は言っつな、とでも言いたげな目付きで張飛を忌々しそうに睨み付けた。だが、張飛には微塵も怯んだ様子は見えない。なりは小さくとも、さすがは燕人張飛、と言っつたところだ。

「……分かりました、桃香様。お話します」

さらに増した緊張感の中で、意を決した様な諸葛亮の言葉。関羽はそれを制止しようとするが、諸葛亮は首を横に振つた。そして、一度一刀を睨んでから劉備へと向き直る。

「……申し訳ありません。私達は桃香様に隠し事をしていました。……董卓さんが都で暴政を敷いている、そんな事実はありません」

「えっ……？ で、でも、袁紹さんからの手紙には、そう書いてあつたでしょ？」

信じられない、と言っつた表情の劉備。一方、諸葛亮の表情はまったく変わらない。

「それは、袁紹さんが大義名分を得るための出鱈目です。事実、問者からの報告では、何進大將軍と十常侍が権力争いをしていた頃より治安は安定し、人々の暮らしは良くなつています」

洛陽の実状を聞いた劉備は俯いてしまふ。余程ショックだったの

か、しばらく黙った後、絞り出す様に喋り始めた。

「どうして……？ 私達は力無い人達を守るため、皆が笑って暮らせる世の中を作るために立ち上がったんだよ？ それなのに、何でも悪くない董卓さんを皆で攻撃する様な真似をしなくちゃいけないの？」

「それは……」

諸葛亮は言い淀む。もちろん、劉備に真実を告げなかった事には理由があった。だが、それを言ったところで事実は変わらない。

そうして諸葛亮が一瞬悩んでいる間に、劉備は天幕の入り口に向かい歩き出していた。関羽はその腕を慌てて掴み引き止める。

「どちらに行かれるつもりですか、姉上」

「決まってるでしょ。袁紹さんの所に行つて、こんな無意味な戦いを止めてもらうの」

劉備は関羽の手を振り解こうと激しく腕を振る。

「そんな事は無理です！」

「無理じゃないよ！ 袁紹さんだけじゃなく、曹操さんや皆に本当の事を話せば……」

無理矢理腕を引き、関羽の手から離れる。そのまま出て行くことする劉備の背中に、一刀が声を掛けた。

「無理だよ、劉備さん。他の諸侯は洛陽の実情を知ってる。その上で、この連合に参加してきているんだ。董卓が悪人かどうかなんて、もう関係無いんだよ」

それを聞いた劉備はその場に崩れてしまう。

「……………どうして？ どうしてなの！？ ようやく黄巾の乱も終わって、皆で手を取り合って平和な世界を作っていけると思ったのに……………。幸せに暮らしている人達を虐げてまで戦う必要なんてあるの？ 何にも悪くない董卓さんを悪人に仕立て上げて戦争を起こすなんて、そんなの間違ってる！」

何度も地面を叩きながら、劉備は感情を爆発させる。人々が平和で幸せに暮らせる世の中を作る、それを掲げて旗揚げした彼女は、こんな無意味な戦いを望んではない。他の諸侯とは違い、純粹に洛陽の解放を目指していたからこそ、劉備には戦う理由が無くなってしまう。

「……………ああ、劉備さんの言う通りだ。他人を悪者に仕立て上げる様なやり方は、絶対におかしい」

へたり込んで涙を流す劉備の正面に回り、膝を曲げた一刀は、両手で彼女の手を取った。顔を上げた劉備は、驚いた表情で一刀を見上げる。潤んだ瞳は、まるで救いを求めている様だ。一刀もそんな劉備の瞳を真っ直ぐに見つめた。

「劉備さん、俺達を手伝ってくれないか？」

第2章・洛陽編・第3話〈3人の英雄〉（後書き）

タイトルの割りには、華琳と雪蓮の扱いが小さいですが、とりあえず顔見せ、という事で。ただ、基本的に蜀 なので、雪蓮達の出番は他の勢力よりも少なくなる予定です。

作中で言っている歴史とはあくまで演義の方で、正史は考えていません（特に馬騰に関しては、演義と正史で正反対になってしまうので）。なので、一刀君は劉備に対して初めから好印象を持っていません。途中で独断専行を謝った一刀君ですが、劉備なら大丈夫じゃないか、という思いは桃香を知る前から持っていました。

次回もまだ戦闘は始まりませんが、お付き合い頂けたら、と思います。

第2章・洛陽編・第4話〜劉玄德〜

「劉備さん、俺達を手伝ってくれないか？」

劉備の口から、えっ、と声漏れた。だが、驚いたのは劉備だけではない。翠と蒲公英もそれ以上に驚いた表情をしている。

一刀が言った手伝いとは、当然だが董卓の救出作戦の事だ。当たり前の様に超重要機密で、他者に漏らすなど有り得ない。思わず止めようとした翠と一刀の視線が交わる。だが、その真剣な眼差しを見た翠は、それまで言おうとしていた言葉を吞んでしまう。そして、1つため息を吐いた後、別の言葉を口から出した。

「劉備、あたし話を聞いてくれるか？」

翠達は劉備達とテーブルを挟んで座り、董卓の人柄から連合が結成される経緯、董卓の脱出計画に至るまで、全てを説明する。最初の内こそ翠が説明していたものの、途中からは、ずっと一刀が喋り続けていた。不安そうだった劉備の顔は、話が進むにつれて明るくなっていく。

「……と、言う訳なんだ。どうだろう、劉備さん。董卓を助けるのに手を貸してもらえないかな」

手を貸す、と言っても、特に何をやる訳でもない。時間稼ぎが目

的である以上、むしろ何もしない方がいい位だ。一刀が指示したのは、董卓軍との戦闘を出来る範囲で回避する事だった。さらには、これまでの話の中で、手伝ってくれた場合の見返りについても話している。決して劉備軍にとって悪い話では無いはずだ。

「もちろん、私達は御遣い様に協力します。愛紗ちゃん、いいよね？」

劉備は、当然、と言う感じで関羽達に話し掛ける。しかし、張飛以外の3人は納得していない事が表情から分かった。劉備もそれに気付いたらしく、悲しそうな顔になってしまった。

「3人は嫌なの？ 董卓さんを助ける事には反対？」

「いえ、そうでは……」

劉備の問いに言い淀む関羽に代わり、諸葛亮がはつきりと答える。

「桃香様の掲げられた理想から言えば、馬騰軍に協力して董卓さんを助けるのは当然の事でしょう。提示された見返りから考えても、軍師としては反対する理由はありません。しかし、雛里ちゃんや愛紗さんも同じだと思いますが、北郷一刀さん、私には貴方が信じられないのです」

諸葛亮の発言を、当然だな、と思いながら聞く一刀。天の御遣いなどと言う肩書きを胡散臭く感じるのは当たり前で、劉備の様に頭から信じる方がおかしい。一刀からしてみれば、裏を疑いたくなくしてしまう位だ。

だが、劉備に裏など無い。彼女は黙ったままの一刀を擁護する。

「御遣い様は絶対本物だよ！ それは私が保証する！」

一刀本人ですら確証の無い事を、劉備は何を根拠にしてここまではっきりと言いつつたのかは分からない。しかし、諸葛亮が言ったのはそういう事ではなかった。

「桃香様、私は北郷さんが御遣いである事が疑わしい、と言っている訳ではありません。北郷さん自身に信用がおけないんです」

諸葛亮の隣で、鳳統が何も言わずに頷く。劉備はそんな2人から、一刀の方へと顔を向けた。表情から、一刀が気を悪くしていないか心配しているのがうかがえる。わずかに微笑み首を横に振った一刀は、諸葛亮の言葉に神経を集中させる。

「先程の軍議の席で、桃香様の事を草鞋売りだとおっしゃっていましたが、北郷さん、貴方はどこでそれを知ったんですか？」

その言葉の意味が理解出来ず、返答に詰まる一刀。そんな彼に、諸葛亮は愛らしい容姿には似付かわしくない鋭い眼光を放ちながら、さらに言葉をぶつけていく。

「桃香様が中山靖王劉勝様の血を引かれています事は、桃香様の名を高めるために広めました。しかし、草鞋を売って生計を立てていたのは、私ですら知らなかった事。なのに、一体どうやってそれを知ったのか、教えて頂けませんか？」

一刀の体から、焦りで一気に汗が吹き出す。軍議の時に何の反論も無かったので、すっかり油断していたのだ。

しかし、この状況は現実と言った事が違っていた時以上に、一刀にとつて都合が悪かった。違うだけなら、適当な事を言った、と言う事にもして誤魔化せる。だが、知り様の無い事を知っている、となれば、そう言う訳にもいかない。一刀は頭をフル回転させて、上手い言い訳を考え始めた。

そんな一刀の横で、翠が気配を消してゆっくりと立ち上がった。そのまま、柱に立て掛けてある銀閃に手を伸ばす。テーブルを挟んだ反対側では、同じ様に関羽が青龍偃月刀を手に行っている。2人はそつと天幕の入り口に近寄ると、お互いの呼吸を合わせるように目を見て頷きあつた。

「誰だっ!？」

関羽は大声を発すると共に、入り口に掛かっている布を左手で跳ね上げた。と同時に、2人は入り口の闇に向かって武器を突き出す。ガギツ、と金属同士のぶつかる激しい音。ここに至って、一刀達はやつと翠達の動きに気付いた。

天幕の外には人影が1つ。だが、一刀達の位置からは、誰であるかまでは分からない。それも気にはなつたが、一刀の興味は別にあつた。

翠と関羽の一撃を、人影の直前で防いでいる1本の槍。この時代において、最強と言ってもいい2人の攻撃を止めた人物とは誰なのか。そんな事を思っていると、入り口の影から全身を白を基調とした服に身を包んだ少女が現われた。

「やれやれ、危ないところでしたな、白蓮殿。私がおらねば、今頃その身は骸と化していましたぞ?」

そんな物騒な事を、少女はあっけらかんと言う。一方、言われた側の人物は、腰が抜けたのか、その場にペタンと座り込んでしまった。

「ぱ、白蓮ちゃん!？」

大声で叫んだ劉備は、慌てて入り口の外に座っている人物に駆け寄った。一刀がよく目を凝らして見てみれば、心配そうな顔の劉備に介抱されている人物は、先程の軍議の席で見た公孫贇だった。

『そう言えば、劉備と公孫贇は同じ私塾で学んだ仲だったな』

そんな事を思い出しただけで、一刀の興味はすぐに槍を携えた少女の方に戻った。相手もそれに気付いたのか、翠と一刀に視線をやると名乗り始める。

「初めてお目にかかるな、錦马超殿、御遣い殿。私は公孫贇殿に客将として世話になっている趙雲、字は子龍と申す」

一刀の後ろでは、名前を知られていなかった蒲公英が小声で文句を呟いている。それが気になってしまい、一刀は趙雲が薄く笑った事に気付かなかった。

「ところで、公孫贇殿。我々の話、聞かれましたか？」

武器を下ろした関羽が小声で尋ねる。それに対し、公孫贇は劉備の顔を見ながら、すまない、とだけ答えた。

とっさに槍を持つ手に力を込める翠。しかし、関羽と趙雲に制止

されてしまう。さらには、劉備までもが公孫贇を庇った。

「馬超さん、白蓮ちゃんなら大丈夫だから！　ね、白蓮ちゃん。私達に協力してくれるよね？」

劉備の純粹な瞳と、翠の殺気に満ちた眼に襲われた公孫贇には、首を縦に振る以外の術は無かった。

公孫贇と趙雲も天幕内に招き入れ、再度今回の作戦を説明する。とは言え、細かい動きを決める必要は無いので、説明自体は10分も掛からずに終わってしまう。その後は、すっかり雑談の時間になった。

「にやゝ？　話は終わったのか？」

それまでテーブルに突っ伏して寝ていた張飛は、真面目な話が終わると同時に目を覚ました。

一人で天幕を出た一刀は、劉備軍陣地の隅にある草原の上に腰を下ろした。諸葛亮から逃げ出したかったし、それ以上に周りが女の子のみ、と言う状況の居心地が悪かったのだ。

「そう言えば、学園もこんな感じだったな」

星空を見上げて呟く。一刀が現代日本で通っていた聖フランチェスカ学園は、元が女子校だったために男女比率が物凄く偏っていた。

1クラスに男子1人が基本だった程だ。

ふと、一刀は気付いた。久しぶりに現代の事を思い出した事に。この世界に来た当初は、毎日の様に思い出していたものだった。

「母さん達、元気にしてるかな……」

そんな物思いに耽る一刀は、背中から声を掛けられた。

「御遣い様つ。何してるんですか？」

一刀が振り返ると、そこには劉備の姿があった。にこやかな表情で一刀に近づく劉備。しかし、一刀の顔を見た途端、その足ははたと止まる。

「何か悲しい事でもあったんですか？ そんなに涙を流して……」

そう言われて、一刀は自分が泣いている事に初めて気付いた。咄嗟に劉備に背を向けて涙を拭う。そして、再び振り返ると笑顔を見せる。

「何かあったんですか？」

劉備は心配そうな顔でゆっくりと近付きながら、もう一度尋ねた。

「ホームシック、じゃなくて、故郷を思い出したら、少し淋しくなっちゃってね」

自分で言いながら気恥ずかしくなり、劉備から視線を外して星空を見上げる。そんな一刀の隣に、劉備は膝を抱える様にして座った。

肩と肩が触れ合う位の距離に、一刀の胸は高鳴る。さらに、真名の通りの甘い香りに鼻腔をくすぐられ、恥ずかしさで居たたまれなくなった一刀は体半分距離を取る。

しばらく沈黙が続いた後、怖ず怖ずと劉備が口を開いた。

「天の国のお話って、聴かせてもらってもいいですか？」

もちろん。そう言って、一刀は劉備の方を向いた。

「天の国の暮らしは、どんな感じなんですか？ やっぱり平和で、皆幸せに暮らしてますか？」

よつぽど天の国に興味があるのか、劉備は瞳を爛々と輝かせて尋ねてくる。それに対し、一刀はまたもや空を見上げ、思い出しながら話し始めた。

「うーん、俺の暮らしていた国は平和だったかな。でも、他の国はそうじゃなくて、よその国と戦争してたり内戦状態の国もあるんだ。それに、独裁者の圧政に苦しんでいる人達もいる。結局、どこだろうと、いつの時代だろうと、人間の本质は変わらないのかもしれないな」

えっ、と劉備から驚きの声が漏れた。その声を聞いて一刀は、しまった、と思う。未来から来た事はずっと秘密にしていたのに、思わず口が滑ってしまった。

しかし、劉備が驚いていたのはそこではなかった。

「御遣い様、人間なの!？」

一瞬、ボケかと思う様な問い掛けに、一刀の方が驚きの声を上げてしまう。

「じゃあ、病気や怪我に苦しんでいる人を助けたり、日照りに困っている場所に雨を降らせたりとか出来ないんですか？」

「ずい、と劉備は顔を近付ける。一刀は若干気圧され、上体を大きく後ろに引いた。

「そんな、神様や仙人みたいな事、出来る訳ないよ」

一刀がそう言うと、劉備はあからさまにがっかりした表情になり、元の様に膝を抱える。あまりの落ち込み様に、一切非が無いはずの一刀の心は罪悪感で一杯になった。

再びしばらくの沈黙の後、劉備は呟く様にゆっくりと話し出した。

「私は皆が笑って暮らせる世の中を作りたいんです」

それは劉備の想いだった。

「皆で手と手を取り合って助けていける、弱い人が苛められる事が無い様な、そんな世界。でも、黄巾の乱の時、曹操さんから言われたんです。……そんなのはただの理想、甘い夢の様な物だ。何の覚悟も無いくせに理想を語るな、って。御遣い様も、そう思いますか？」

劉備は不安そうな瞳で一刀を見る。おそらくは、彼女自身も分かっているのだらう。だからと言って、諦める事は出来ない。これが

劉備の戦う理由、劉備が今ここにいる理由だからだ。

そう感じた一刀は、頭の中で慎重に言葉を選ぶ。だが、劉備はその沈黙を肯定と受け取ったらしい。ハア、とため息を吐くと、暗く沈んだ表情で自分の膝に顔を埋めた。

「やっぱり私って、駄目なんだなあ。理想ばかりで、現実が見えてない。さっきだってそうだもん」

一刀達が董卓救出計画を説明する前、諸葛亮は劉備に真実を黙っていた理由を話していた。

劉備の治める平原県は、袁紹が牧を務める冀州の隣、青州の州境に位置している。そのため、もし連合への参加を断れば、董卓と通じている、などと難癖を付けられかねず、行き掛けの駄賃とばかりに、攻め滅ぼされる可能性はかなり高かったと言える。

しかし、劉備が洛陽の実状を知れば、いくらその危険性を説いたところで、連合への参加は認めなかつただろう。だから、諸葛亮は鳳統や関羽と謀り、劉備に真実を伝えないまま連合に参加させたのだった。

「そのうち、皆に愛想尽かされちゃうんだろうな、きっと」

「そんな事はないよ」

自虐的になる劉備を慰めようとする一刀。その言葉に対し、劉備は少し寂しそうに笑って首を横に振った。

「だって私、何にも出来ないから。愛紗ちゃんや鈴々ちゃんみた

いに強くないし、朱里ちゃん達の様に頭も良くない」

「なら、俺だってそうだよ。武力じゃ馬超の足元にも及ばない。軍師としてだって、諸葛亮みたいに深謀遠慮がある訳じゃない。俺の方こそ、中途半端で何も出来ない」

2人は揃ってため息を吐く。そうして、お互いに顔を見合った。

「……プツ。アハハッ」

どちらともなく笑い出す2人。そのままひとしきり笑い合う。

一刀は不思議な心地好さに包まれていた。今日初めて会った劉備に、誰にも話した事が無い様な本音を話している。笑い過ぎて溢れた涙を拭う劉備を見ながら、これが彼女の持つ力なのだと感じていた。

「さっきの話だけど、俺も理想だと思う。現実はそのなりに甘くない」

笑顔だった劉備の表情が曇る。

現代から来た一刀には、劉備の掲げる理想がいかに現実的で無いか分かる。少なくとも、これから千八百年の間は、人間は世界中至る所で争いを繰り返すことになるからだ。

「でも、凄く素晴らしい理想だと思う。劉備さんは間違っていないよ」

しかし、そんな一刀だからこそ、劉備のこの考えに心を惹かれる。

本当にそんな世の中になれば素晴らしいだろう。そして、劉備には、もしかしたら、と感じさせる雰囲気があった。

「本当ですか？」

劉備は顔色を窺う様に、上目遣いで一刀を見上げる。

「ああ、俺だってそんな世の中になれば、って思う。俺に出来る事なら協力するよ」

一刀が笑みを浮かべて言うと、釣られる様に劉備も笑った。そして、勢い良く立ち上がる。

「私、頑張ります！ 愛紗ちゃん達と一緒に、幸せな世の中を作るために」

もし、この世界に来て最初に劉備に出会っていたらどうなっていただろう。きっと、彼女の理想のために生きようとしたのではないか。立ち上がった劉備を見ながら、一刀はそんな事を考えていた。

ふと、目の前に綺麗な手が差し出される。劉備の手だ。イメージ通りの柔らかくて優しい手を掴み、一刀も立ち上がる。

「ありがとう、劉備さん」

「桃香、私の真名です。預かってもらえますか？」

劉備は月明かりの下でも分かる位に頬を染めている。まさか、出会ったその日に真名を許されるとは思っておらず、一刀は正直驚いた。しかし、大事な物だからこそ、他人に許すのには理由や勇気が

いる。その事をすでに理解している一刀は、劉備の正面に立って姿勢を正した。

「ありがとう、桃香。なら、俺の事も、御遣い様、じゃなくて、一刀、って呼んでくれないか？俺達は同じ世界を目指す仲間なんだから」

「……はいつ。よろしくね、一刀さん！」

劉備に満開の笑顔の花が咲いた。

一刀が劉備と共に天幕へと戻ると、すでに公孫賛と趙雲は自分達の陣へと帰ってしまった。翠と蒲公英も引き揚げるために天幕の外に出て、一刀の事を待っていた。

「まったく、どこ行ってたんだよ」

文句を言う翠の横で、関羽が劉備に心配そうに声を掛けている。

「姉上、何か変な事はされませんでしたか？」

「もう、大丈夫だよ。愛紗ちゃんは心配性なんだから」

不安そうな表情の関羽に、劉備はあっけらかんとして答えた。そんな彼女に一刀は挨拶をして帰ろうとする。

「じゃあ、桃香。俺達も戻るから」

その言葉を聞いて、関羽は驚愕した。そのままの驚いた表情で劉備の顔を窺う。劉備が笑顔で答えているのを見て、関羽は彼女が真名を許したのだと悟った。だが、納得は出来なかった。

「ど、どういふおつもりですか!? なぜ、こんな奴に真名を預ける様な真似を!」

「こんな、つて、一刀さんは御遣い様なんだから……」

関羽の語勢にたじろぐ劉備。しかし、関羽は構わず続ける。

「そもそも、此奴が本当に天の御遣いかどうかなど、分かったものではありません! この様な胡散臭い格好、それこそ自称しているだけです。私はこんな奴……」

その時、関羽の背後から低くどすのきいた声が響いた。

「おい、いい加減にしとけよ。一刀の事は、あたしの母様が認めただ。その一刀を辱める事は、母様を辱めるのと同じだ」

怒気を隠そうともせず、翠は関羽に詰め寄って行く。しかし、関羽も引きはしない。

「何を言っている! 第一、貴様等が先に桃香様を辱めたのではないか! こちらが文句を言われる筋合いは無い!」

2人の間に不穏な空気が流れる。翠はさらに前に出ようと一歩踏み出す。

「あがつ……！」

その瞬間、綺麗なラインを描く翠の顎が跳ね上がった。ポニーテールにまとめた長い髪を捕まれたためだ。筋でも違えたのか、首を押さえながらうずくまった翠は、恨めしそうな顔で髪を引っ張った人物、一刀を見上げた。

「何やってんだよ。関羽は別に、琥珀さんをなじるつもりがあった訳じゃ無いだろ。これからは味方として戦うんだから、そんなにいきり立つなよな」

一方の関羽には、劉備が優しく声を掛ける。

「一刀さんの言う通り、私達は皆の幸せのために戦う仲間なんだから、仲良くしよ？ ね？」

それぞれ言い含められ、2人は黙ってしまふ。しかし、お互い納得出来ていない事は態度と表情で分かる。

まいったな、と思いながら一刀は2人を見る。これからの事を考えれば、仲良く、とまではいかなくても、しこりを残しておきたくない。

「まったく、愛紗は頭が固いのだ」

いくぶん軟化して見えた関羽の表情は、張飛の一言によって再び強ばる。しかし、張飛はまったく気にする様子も無いまま、関羽の前を鼻歌混じりに歩いて一刀に近寄る。

「桃香お姉ちゃんが真名を許したのなら、鈴々もお兄ちゃんに真名を許してあげるのだ」

張飛の言葉に驚く関羽。そんな彼女を見て、これ以上話をこじらせたくなかった一刀は、

「ありがとう、鈴々」

と言つて、張飛の頭を軽く撫でた。幸せそうな張飛の笑顔に、関羽は何か言つゝ氣力を失ってしまった。

自陣へと帰る間も仏頂面をしている翠に、蒲公英が声を掛ける。

「お姉様、いい加減に機嫌直したら？」

「んな事言つたつて、あいつが悪いんだぞ。だいたい、何でお前はそんなにのほほんとしてられるんだよ」

一刀自身、のほほんとしているつもりはないが、そう思われてもおかしくない位に落ち着いている事は自覚していた。何となくだが、関羽が自分の事を嫌っている理由が分かったからだ。

もちろん、一番の原因は軍議の席で劉備を辱めた事だが、それだけではなく、劉備の事を本当に大切に思っているはず。だからこそ、自分の様な得体の知れない者を近付けない様にしたのだろう。

一刀がそう感じる事が出来たのは、以前にも同じ事を経験しているからだ。翠も一刀と初めて会った時には、関羽と同じ様な対応をしていた。一刀の保護に反対したのも、大切な母親や領民から怪しい人物を遠ざけたかったためだ。

その事を翠に告げると、彼女は驚いた表情をして黙ってしまった。

再び歩き出す3人。夜風に吹かれながら、一刀は不意に思い出した。

「あつ、そうか」

わずかに呟いたその声は、2人には届かない。頭の隅に引っ掛かっていた事が解決し、一刀の足取りは少しだけ軽くなった。

第2章・洛陽編・第4話〈劉玄德〉（後書き）

という事で、第4話でした。

お気楽そうに見える桃香にも、もちろん悩みはあるわけで。お人好しのアマちゃん同士、慰め合う形になりました。とはいえ、あの理想を貫き通した桃香は強いような気がしますけど。

やっと開戦前の準備が終わり、次回より汜水関の戦いが始まります。反董卓連合の話を投稿し始めてひとつき経つのに、まだ戦いが始まらない状況に自分の事ながら呆れますが。

第2章・洛陽編・第5話〈忠将華雄〉

軍議の翌日、連合軍は野営地を引き払い、汜水関へ向けて進軍を開始した。とはいえ、汜水関まで大した距離がある訳でもない。朝に野営地を発つて、夕方には目的地に新たな陣を設営していた。

次の日の昼過ぎになって、ようやく袁紹から諸侯の配置が通達された。前曲中央に袁紹軍、その両翼には曹操軍と劉表軍を配置する。袁紹軍の兵数が多いため、両翼は直接関攻めには参加せず、援護が主な役目になってくる。

袁紹軍に次いで兵数の多い袁術軍は、本陣の守備へと回された。客将である孫策達もここだった。

その袁術軍の前、袁紹軍の後方に劉備軍や他の諸侯が配置される。また、ほぼ騎兵のみで編成される馬騰軍と公孫賛軍は、劉備達の両翼をそれぞれ割り当てられた。

「おーっほっほっ！」

汜水関に向けて進む袁紹軍の中軍に高笑いが響く。その笑い声の主である袁紹は、屈強な男達が担ぐ輿の上にいる。何がそんなに楽しいのか、非常に満足気な表情で笑い続けている。

そんな彼女の元に、前方から報告が届いた。内容は、董卓軍が汜

水関の城門前に部隊を展開させている、という物だった。報告を聞いた袁紹は、ため息を吐きながら首を横に数回振った。

「まったく、董卓さんという方はおバカさんですわね。わざわざ有利な場所を捨てるなど……」

守備側は拠点に拠って戦う方が有利、その位の知識は彼女にもある様だ。

袁紹が言った通り、兵力差の大きいこの状況では、普通に考えれば籠城以外に手は無い。そうして少しずつ戦力を削り、大兵力を擁した遠征の際に問題になりやすい兵糧を攻めるのが常道だろう。それをしてこない、となれば、何らかの計略がある、と見るべきだ。

しかし、そこまでの頭は彼女には無かった。前線を預かる顔良・文醜両将軍に突撃命令を出すと、輿の上で再び高笑いを始めた。

「よし、やっと暴れられるな」

袁紹からの突撃命令を受けた文醜は、早く戦いたい、と言わんばかりに腕を回している。一方、袁紹軍唯一の常識人である顔良は、董卓軍の動きに不安を感じていた。

「ねえ、文ちゃん。やっぱりちゃんと調べた方がいいよ」

「何言っただよ、斗詩。相手は多く見積もっても五千人位だろ。」

何があっても負けっこないって」

顔良の心配などまったく気にする様子の無い文醜。尚も不安そうにしている顔良に対し、言葉を続ける。

「あんまりのんびりしていると、麗羽様に怒られるだろ？」

「う〜……。じゃあ、文ちゃんは前線で指揮をお願い。私は少し下がって、何かあった時に対応出来る様にするから」

心配性だな、と返したものの、文醜には反対するつもりは無かった。剣を振るえるのであれば、それでよかった。

結論から言えば、顔良の心配は取り越し苦労だった。董卓軍の狙いは、何かあるのではないか、と思わせて、行軍を遅らせる事だったからだ。

「どうやら、見抜かれた様だな」

汜水関の前に展開している部隊を率いる華雄は、馬上でそう呟いた。実際には見抜かれた訳では無いのだが、結果から見れば一緒だった。

袁紹軍は砂塵を上げながら汜水関に向かって来る。華雄達はそのまま関へと後退すれば無傷で済むが、それでは袁紹軍を勢い付けさせるだけ。自軍の士気を上げるためにも、一戦交えてから引き上げる

事になっていた。

「袁紹軍ごとき弱兵共に後れを取る様な者は、我が華雄隊にはおらんだろうな!？」

応、と喊声上がる。それを聞いて、華雄は兵達から袁紹軍の方に向き直った。

「全軍、突撃ーっ！ 袁紹軍を蹴散らしてやれ！」

号令を掛けた華雄は、自ら部隊の先頭に立って袁紹軍へ突っ込んで行った。

激しくぶつかる両軍。華雄隊四千に対し、文醜隊は一万。数の上では文醜隊が圧倒的に有利だったが、初撃ではむしろ華雄隊が押しんでいた。これは、兵の質の差が原因だった。

董卓軍や馬騰軍のほとんどを占める軽騎兵は涼州兵と呼ばれ、この当時、最強を謳われていた。

涼州は良馬の産地である。そのため、他の地域よりも騎馬を揃え易い。また、人々が馬に接する機会も多く、兵達は総じて馬術に長けている。しかし、涼州兵を最強足らしめているのは、実践経験の豊富さであった。

黄巾の乱があったとはいえ、中原は基本的に平和だった。それに対し、涼州は常に異民族の脅威にさらされてきた。そのため、兵達は数々の実戦を経験し、鍛えられているのである。

個の戦いでは華雄隊が勝っていた。しかし、数で勝る文醜隊は華

雄隊を包囲する様に展開する。その時、汜水関の上で激しく銅鑼が打ち鳴らされた。

「合図か……。者共、撤退するぞ！」

華雄の命令を受けた兵達は、素早く反転して後退を始める。文醜隊はそれを追撃するが、わずかに速度が及ばずに追いつかない。そのままズルズルと引つ張られ、汜水関へと近付いて行く。

「待てーっ！ アタイと勝負しろ！」

背中から響く文醜の叫びを聞いて、華雄はわずかに笑う。そして、右手に握られた戦斧、金剛爆斧を高く掲げた。その直後、汜水関から文醜隊に向かって無数の矢が放たれる。雨の様に降り注ぐ矢の嵐に、文醜隊は次々と倒れていった。

深追いし過ぎた事に気付き、文醜は部隊を後退させようと号令を出す。しかし、部隊の前部は混乱しており、彼女の命令が届かず、多くの兵が討ち取られてしまう。その様子を見ながら、華雄は悠々と汜水関へと帰還した。

馬を兵に預けると、華雄は汜水関の城壁上へと向かった。

「おう、ご苦労やったな、華雄」

到着するなり、張遼が声を掛けた。

「ふん、あの程度の敵、どうという事は無い。それより、撤退指示が少し早かったのではないか？ 我々はまだやれたぞ」

腕を組んだ華雄は不満顔だ。だが、張遼とて何の考えも無しに撤退指示を出した訳では無い。城壁の上から戦場を見渡していた彼女には、右翼にいた曹操軍が華雄隊の後方を窺う動きを見せた事が分かった。退路を断たれて全滅、という最悪の状況を回避するために、張遼は若干早いタイミングで撤退指示を出していたのだった。

その事を伝えられても、華雄はまだ少し不満そうだった。

「分かつとるんやろな。ウチ等の目的は……」

「月様が逃げるまでの時間を稼ぐのだろうか？ 分かっている。だから、お前の指示に従って戻って来たのだ」

華雄は自分を諭す様に話し出した張遼の言葉を遮る。そして、壁面に立て掛けておいた戦斧を手に取ると、馬面の一番前にまで進む。

「貴様等がいくら来ようと、月様は私が必ず守る！」

華雄は連合軍を睨み付けたまま、戦斧を床に突き立てて吠えた。

後退して来た文醜隊と合流した袁紹軍本隊は、部隊を編成し直すのと、本格的に汜水関の攻略を開始した。と言っても、ただ数に任せて正面から突撃するだけ。陥落させられる雰囲気もまったく無いまま、被害のみが広がっていく。

「猪々子さん、斗詩さん、汜水関はまだ落とせませんか!?」

袁紹軍が汜水関を攻撃し始めてから3日。遅々として攻略が進まない事に腹を立てた袁紹は、顔良と文醜を天幕に呼び付け、朝から2人を怒鳴った。

「でも、麗羽様」

「でももへつたくれもありませんわ。貴方達は名門袁家の將軍ですのよ。それが、あの様な田舎者すら討つ事が出来ないなどと、恥ずかしいとは思いませんか？」

甘える様な声を出す文醜に対し、袁紹はピシヤリと言い放つ。さらに説教を続けようとしたところで、報告のために1人の兵士が天幕に入ってきた。邪魔をされた袁紹は、一目見て不機嫌と分かる顔になった。そんな彼女に代わり、顔良が報告を受ける。

「麗羽様にお会いしたい、という方が見えているそうなんですけど……」

「忙しいのですから後になさい！」

予想通りの反応に、顔良は袁紹から見えない様、うつむいてから軽くため息を吐く。そのまま体を兵士の方に向け、顔を上げた。そんな彼女の瞳に、天幕の入り口に垂れる布を捲る人物が映った。

「だいぶ苦戦している様ね、麗羽」

そこにいたのは曹操とその護衛である夏侯惇だった。2人は許可も無いのになぞかずかと入って来る。

「べ、別に苦戦などしていませんわ。あんな関の1つや2つ、すぐにも落として見せます」

もちろん、袁紹にそんな手立ては無い。あくまで強がりだ。そんな袁紹の様子を見て、曹操はかすかに笑みを見せた。

付き合いの長い曹操には、袁紹の言葉が強い自尊心から来る出任せである事が分かっている。曹操の笑みは嘲笑だった。しかし、袁紹はそれに気付かず、何の用か尋ねた。

「汜水関を突破する方法を考えたのだけれど……、必要無かった様ね」

そう言つと、曹操は立ち去ろうと踵を返した。袁紹は慌ててその背中を引き止める。

「お待ちなさい!」

その声に足を止めた曹操。しかし、袁紹の方に振り返ろうとはしない。

「その方法とは、一体何のですの?」

「あら、すぐに汜水関を抜いてみせるのではなかったかしら?」

嫌味混じりに言いながら、曹操は振り返る。ぐっ、と言葉に詰まる袁紹。しかし、それも一瞬だった。

「……もちろん、手は考えてあります。ですが、せっかく華琳さんが私のため、夜も寝ずに考えてくれた策ですもの。それを聞かず

に帰してしまいう程、私は薄情ではありませんわ。まあ、参考までに聞いて差し上げましょう」

教えて欲しくて仕方が無いのに、よくここまで尊大な態度がとれるものだ。自分の主を見て、顔良は今更ながらにそう思った。

そのまま横目でチラリと曹操に目をやる。さっきまでと変わらず薄く笑みを浮かべている様を見て、顔良は安堵した。しかし、実際のところ、曹操のこめかみには青筋が立っており、無理矢理笑顔を作っているだけだった。

何とか平静を装ったまま、曹操は話し始める。

「簡単な事よ。甲羅にこもった亀は殺せない。亀を殺そうと思えば、首を甲羅の外に出させればいい」

それを聞いた袁紹は、怪訝そうな顔を曹操に向けた。

「亀？ 亀を殺そうなどとは思っていませんわ。そもそも、どこに亀がいるとおっしゃるつもりかしら。全く、貴方に期待した私がバカでしたわね」

いかにもがっかりした感じで、袁紹は大きなため息を吐いた。

当然だが、曹操がしたのは例え話である。亀とは董卓軍、甲羅は汜水関、首は軍を率いる將の事を差している。それを直接的な意味にとられ、なおかつバカにされた。曹操は、はらわたの煮え練り返る思いだった。

そんな事とは微塵も疑っていない袁紹と文醜の横で、顔良は顎に

手を当て何事が呟いている。と、何か得心がいったのか、その顔はパアツと明るくなる。そして、

「ありがとうございます、曹操さん」

と、頭を下げた。

「……細かい事は、貴方が考えなさい。じゃあ、失礼するわ」

それだけ言い残し、曹操と夏侯惇は立ち去った。2人が消えた天幕で、顔良は全く話の见えていない袁紹達に説明を始める。

一方、天幕の外では、曹操が後ろを歩く夏侯惇に声を掛けた。

「春蘭、貴方には私の言った事の意味が分かったかしら？」

突然の問いに、夏侯惇はドキリとする。

「……もも、も、もちろんです、華琳様」

こんなのもり方をしては、分かってない、と言っている様な物だ。足を止めた曹操は、夏侯惇の方に振り返ると意地の悪そうな笑みを見せた。

「なら、答えてもらおうかしら？　でも、間違っている時は、分かっているわね？」

狼狽する夏侯惇。その顔を見た曹操は、溜飲が下がる思いだった。

汜水関の上に立つ張遼は、袁紹軍の動きが昨日までとは違う事に気付いた。何も考えずに突撃だけを繰り返していたのが、今日はある程度離れた場所に整列している。何を始めるつもりか、じっと観察していると、一斉に何かを叫び始めた。てんではばらばらな事を叫んでいるため、何を言っているのか、ハッキリとは分からない。しかし、どうやら華雄の武を罵り、辱めている様だ。

挑発。張遼は袁紹軍の目的をそう見抜いた。正面からの正攻法で突破出来ない以上、何らかの策を用いて来るのは当然だった。

張遼は横にいる華雄に目を遣る。だが、彼女には全く意に介した様子が見えない。むしろ、彼女の部下の方が気にしている様だ。数時間もしない内に、兵士達は袁紹軍への怒りを口にし始めた。

「華雄將軍！ あんな奴等に好き放題言わせておいて、よろしいのですか！？」

血気に逸る部下の問いに、張本人である華雄は冷静に応じる。

「無論、腹は立つ。だが、我等の目的は何だ？ 言ってみろ」

「……董卓様を御護りする事、です」

部下の1人が答えた。うつむいているその様子から、華雄の言わんとしている事は分かったのだろう。

「そうだ、董卓様を御護りする事が全て。それに比べれば、私の

「勇名などどつでもいい」

そう言つと、華雄は部下達に背を向ける。そんな彼女の様子に安心する張遼。

「ほんなら、こつちは任せるわ。ウチは周辺の偵察に行つて来る」

張遼は部下数人を引きつれて汜水関から出て行つた。

「斗詩く、全然効果無いじゃんか」

1日罵倒し続けても、董卓軍は全く汜水関から出て来る様子を見せなかった。すっかり疲れ果てた顔で、文醜は顔良に文句を言う。

「おかしいなあ。緒戦で自ら部隊を率いて打つて出たから、絶対自分の武勇に自信を持っている、と思つたのに」

当てが外れた顔良は、少し困り顔だ。

「アタイがあんな事言われたら、間違い無く飛び出すけどな」

「もう、文ちゃんが引つ掛かつてどうするの」

呆れた発言をする文醜に、顔良はため息混じりに返した。そうしながら、明日は少し攻める方向を変えてみよう、と思つた。

翌日も張遼は周辺の偵察を行っていた。汜水関の裏門から出て、崖の上へと赴く。下を見れば、袁紹軍が何やら大声を上げている。張遼には、何を言っているかまでは分からない。だが、前日と変わらず挑発をしているのだろう、と予想していた。

「意味もあらへんのに、御苦労な事や。……って、何しとんねん、あいつ！」

張遼の目に飛び込んで来たのは、勢い良く開かれた汜水関の城門と、そこから駆け出す騎兵の群れ、そして、先頭を駆ける華雄の姿だった。予想外の事態に、張遼は今来た道を慌てて引き返した。

裏門から汜水関に入るなり、1人の兵が張遼の傍に駆け寄ってくる。そのまま報告を始めるが、張遼はそれを遮った。

「上から見て分かつとる。それより、どついう事や？」

「それが、奴等、今日は華雄將軍ではなく、董卓様の事を辱めて……」

「それで、頭に来て飛び出した、ちゅう訳か。全く、アイツと詠はどんだけ月の事が好きやねん」

張遼は眉間にしわを寄せて呟く。その様子を見て、どつすればいいか、兵士は恐る恐る尋ねた。

「ほつとく訳にもいかんやろ。張遼隊、出陣準備をせい！ 華雄を助けに出るで！」

張遼の掛け声に、部下達は喊声で応える。

「こうなつた以上、汜水関はもうもたん。指示しとつた通りに撤退準備をせえ。洛陽と虎牢関に早馬を送るんも忘れんなや」

張遼の傍にいた兵も返事をし、その場から離れて行った。

こうして汜水関の戦いは、激しく動き出すのであった。

第2章・洛陽編・第5話〈忠将華雄〉（後書き）

第5話、汜水関の戦いの前半戦でした。

以前の話の後書きで書いた様に、この話の華雄にはアニメのイメージ（乙女大乱の10話、月と詠のピンチに駆け付けるシーン）が反映されています。彼女の中で一番大事なものを、自分の勇名から月へと変えてみました。とはいえ、それをけなされた時の猪武者振りは変わりませんが。

しかし、袁紹軍は斗詩がないと全く話が進みませんね。常識人の必要性を痛感しました。

次で汜水関の戦いは決着しますので、次回もよろしくお願いします。

第2章・洛陽編・第6話〜一騎討ち

「あら、何だか外が騒がしくなりましたわね」

天幕の中で茶を飲んでいた袁紹は、独り言を呟いた。退屈そうに頼杖をつく彼女の元に、1人の兵がやって来る。

「報告します。策は成功、敵将華雄が汜水関より打って出ました」
それを聞いて立ち上がる袁紹。彼女はお得意の高笑いを辺りに響かせる。

「おーっほっほ！ まあ、私の考えた策なのですから当然ですわね」

大本を考えたのは曹操、具体的な部分については顔良が考えたはずなのだが、彼女の中では自分で考えた事になってしまっているようだ。顔良も文醜もない今の状況では、誰からも突っ込まれる事無く話が進む。

「では、予定通り汜水関を落とす様、猪々子さんと斗詩さんに伝えなさい」

ひとしきり笑った後、袁紹は兵士に命令を出す。その兵士が出て行った直後、入れ替わる様に別の兵士が入って来た。

「何です？ まさか、もう汜水関を陥落させたのかしら。さすがは、名門袁家の将ですわ」

報告も聞かずに決め付けると、袁紹は満足そうに頷く。だが、実際にはそうでは無かった。

「敵部隊により前線が突破されました！ そのまま、この本陣に迫っています！」

「ど、どういふ事ですの!?!」

叫んでみたところでどうなる訳でもなく、袁紹は兵士に促されるまま、自分の陣から逃げ出した。華雄隊が袁紹軍の陣に飛び込んだのは、その直後だった。

まだ遠くには行っておらず、しっかりと探せば袁紹の首級を挙げ、る事も出来ただろう。しかし、その事を知らない華雄は搜索をせず、一気に敵陣深くまで切り込む事に決めてしまう。

「よいか！ 我等はこのまま連合軍の本陣に切り込む！ 総員、我に続けーっ！」

華雄の号令に喊声で応える部下達。彼等は華雄を先頭に、袁術の守る本陣を目掛けて突撃を開始した。

汜水関の関門前では、顔良と文醜が混乱した部隊の再編に努めていた。

「うーん、結構やられたな。斗詩、そっちは？」

「死者はそれ程でもないけど、怪我人が多いかな」

2人は被害状況を確認し合う。

華雄を汜水関から引き摺りだすまでは良かったが、問題はその後だった。怒りに燃える華雄とその部下の勢いは凄まじく、袁紹軍は迎撃態勢をとっていたにもかかわらず、いとも容易く突破されてしまった。顔良と文醜も、自ら前に出て何とか押し留めようとはした。しかし、華雄隊のあまりの勢いに袁紹軍の一部はパニックを起こし、2人はまともに戦う事すら出来なかった。

「とにかく、華雄の奴は汜水関から出たんだ。今の内に落とすぞ！」

文醜は気合いを入れる。だが、顔良は反対に心配そうな顔をしていた。

「ねえ、文ちゃん。麗羽様は大丈夫かな？ 華雄さん、凄い勢いだったけど」

そう言って、袁紹がいる天幕の方向を見つめる。それに対し、文醜の態度はそっけなかった。

「平気だって。麗羽様の悪運の強さは、斗詩も知ってるだろ？」

顔良はしばらく心配そうな顔をした後、平気かなあ、と言いながら汜水関へと向き直った。そんな彼女の瞳に飛び込んで来る物があった。ゆっくりと開いた関門の中にはためく『張』の文字である。

「よっしゃーっ！ 袁紹軍のアホ共、いてこましたれや！」

『張』の旗の下、先頭に立つ張遼の檄が飛ぶ。それに応えた張遼隊の兵達は、各々の跨る騎馬を駆けさせる。

対する袁紹軍は、完全には混乱から回復出来ておらず、陣形すらまともに組めていない。張遼隊の突撃に袁紹軍は一切勝負にならず、散々に打ち破られてしまった。

「どうやら、動き出した様ね」

汜水関から離れた位置で様子を観察している人物がいた。連合軍の右翼を務めている曹操だ。

「秋蘭、汜水関の様子はどうなっているかしら？」

「主将華雄、及び副将張遼共に汜水関より打って出ました。関にはほとんど守備兵が残っていません」

曹操の脇に立つ、水色の短い髪の女性が答えた。彼女の名は夏侯淵、字は妙才。夏侯惇の双子の妹である。浅慮で短気な姉とは違い、思慮深く冷静沈着。曹操から非常に厚い信頼を得ている将だ。

そんな夏侯淵の言葉を聞き、曹操はわずかに口角を上げた。

汜水関から将を引っ張り出して戦え、と袁紹に伝えたのは、当然

好意などではない。そこには当たり前の様に裏があり、袁紹のために考えた、と言うのは、真つ赤な嘘に他ならなかった。

涼州兵の精強さを聞き及んでいた曹操は、袁紹軍の弱兵では相手にならない、と踏んでいた。おそらく、派手に打ち負かされ、激しく混乱するだろう。その間に部隊を前に出し、守備の薄くなった汜水関を攻め落とす。それが曹操の思惑だった。

ここまでは計画通り。後は、隙を突いて汜水関に向かうだけ。曹操は愛馬、絶影に跨りながら、そう考えていた。

そこへ、前衛部隊を指揮する夏侯惇の副官である少女が報告にやってくる。少女の名は許緒。ピンクの髪を頭の上で2つにまとめた、まだ幼さの残る少女だ。だが、力だけで言えば、曹操軍最強を誇る夏侯惇と互角に渡り合える程の剛の者である。

「華琳様、汜水関前の袁紹軍ですけど、予想以上に混乱が激しくて部隊を前に進められません」

それを聞いた曹操の表情がわずかに曇る。

袁紹軍の統制が、想像していた以上にとれていない事が原因の1つではあった。しかし、一番の誤算は張遼までもが出陣した事だった。

「どうしましょう、華琳様？」

許緒が顔を上げた時には、曹操の表情は普段通りに戻っていた。

「ならば、季衣。春蘭には待機する様に伝えなさい」

混乱している袁紹軍に割って入れれば、動きが大きく制限されて連携もとれなくなる。その状態で汜水関に攻め掛かった場合、仮に勝つ事が出来たとしても、甚大な被害を出してしまうだろう。確かに、曹操には手柄が欲しかった。しかし、先の事を考えると、ここで悪戯に戦力を減らす様な真似はしたくなかった。

『取り敢えず、最低限の目的が果たせただけでした、と言う事ね』

小さくなっていく許緒の姿を見ながら、曹操は自分自身を納得させた。

袁術の守る連合軍本陣を目指して馬を走らせる華雄隊。その行く手を阻む様に一団が姿を現す。掲げられた旗には『劉』の文字が刻まれていた。

華雄は立ちはだかっている部隊が小勢である事を見て取った。このまま一気に突破してしまおう、と考えていると、劉備軍の中から単騎で進み出て来る人物があった。騎馬に跨ったまま、長い黒髪をなびかせながらゆっくりと近付いて来る。その様を見て、華雄は笑みを浮かべた。

「面白い。この私に一騎討ちを挑むとは」

部下に命じて隊の進軍を停止させると、華雄も一人で前に出る。

両者の間が30メートル程にまで詰まったところで、どちらからもなく馬を止めた。

「我が名は華雄！ 無謀にも、私に一騎討ちを挑んで来たその度胸だけは誉めてやろう！」

「我は劉備が義妹、関羽！ 華雄よ、私はお主と……」

「問答無用っ！」

関羽の言葉を遮ると、華雄は馬を駆けさせ距離を詰める。そうしながら、両手で戦斧、金剛爆斧を振りかぶった。

一刀が何としてでも回避したかった両者の一騎討ちは、こうして始まってしまった。

斥候からの情報で華雄が汜水関から打って出た事を知った翠は、部隊を率いて劉備軍の方へと向かっていた。

騎兵は攻城戦において、ほとんど役に立たない。そのため、騎兵が部隊の大半を占める馬騰軍と公孫贛軍は前衛から外されたのだ。そうして中盤に配置された両軍には、野戦になった際の迎撃が主任務として与えられていた。

しかし、翠達が華雄隊の所に向かっているのは、もちろん戦うためではない。逆に戦いを止めるためだ。だが、全軍でぶつかってお

いて戦わない、という訳にはいかなかった。そこで、翠は先行する事にした。

「あたしと一刀は先に行く。たんぽぽ、お前は部隊を率いて後から来い。いいな？」

それだけ言うと、翠は返事も聞かずに自らの跨る黄鵬の腹を蹴り、スピードを上げさせた。今回の遠征にあたり、翠から彼女の愛馬である麒麟を借り受けている一刀は、その首を軽くたたく。すると、それだけで全てを察したのか、麒麟は速度を上げて黄鵬の後ろに付いて駆けた。

金属同士のぶつかる高い音が戦場に響く。華雄が両手で振り下ろした戦斧を、関羽が青竜偃月刀で防いだためだ。

「ほう、私の一撃を防ぐとは、少しはやる様だな」

攻撃を防ぐと同時に馬を下がらせ距離を取った関羽に対し、華雄は余裕の笑みを見せた。

「くっ……！ 華雄よ、私の話を聞け！」

「問答無用と言ったはず！ 貴様等と話す舌など持ち合わせてはおらん！」

翠達から話を聞いている関羽は、出来る事なら戦いを回避したい、

と考えていた。しかし、華雄は聞く耳を持たず、険しい表情で大喝する。

再び間合いを詰める華雄。一方の関羽は戦う気が無いとは言え、このまま黙ってやられるつもりも無い。華雄の攻撃を止めるため、偃月刀を持つ手に力を込める。

『んっ……！』

そこで関羽は自分の手が痺れている事に気付いた。華雄の初撃を防いだ時のものだ。そのせいで反応が一瞬遅れる。何とか華雄の横薙を防いだものの、関羽はバランスを崩してしまふ。その隙を見逃す訳も無く、華雄は追撃を掛けた。

華雄の使用している戦斧と言う武器は、長い柄の先に巨大な斧の刃が付いている。そのため、翠の使っている槍や関羽の偃月刀と比べて、武器の先端の方に重量が偏っている。それにより、強烈な一撃を放つ事が出来るのだ。ただし、その分攻撃が大きくなり、隙が出来易くなる。

しかし、華雄の操る戦斧は違っていた。円を描く様に振るわれる戦斧には、攻撃と攻撃の継ぎ目が無い。切り返しの際が生じなくなるのである。しかも、遠心力によってさらに威力が増していた。

とは言え、誰にでも出来る事ではない。ただでさえ先端に重量の寄っている戦斧に遠心力が加われば、これを操るためには相当な力が必要になる。ましてや、華雄は馬上で行っているのだ。驚嘆に値する行為だった。

「どうした、関羽とやら！ 自ら一騎討ちに臨んでおきながらそ

の程度とは、片腹痛いぞ！」

防戦一方の関羽に対し、華雄は調子に乗ってさらに攻撃を仕掛ける。

関羽はその攻撃の威力に面食らっていた。しかし、それも最初の内だけだ。体勢を立て直してみれば、確かに一撃は重く隙も無いが、攻撃自体は単調である事に気付く。正面から攻撃を防ぐのは大変でも、力の方向を変えて攻撃を受け流すだけなら簡単だった。

「話を聞け、と言うのが分からんのか!？」

余裕が出て来た関羽とは対称的に、華雄には苛立ちが見て取れる様になってきた。

「うるさいっ！ 貴様も武人であれば、言葉ではなく己が武で語ったらどうだ！」

そう叫び、華雄はさらに激しく戦斧を振るう。その攻撃を捌きながら、関羽の中にも次第にイライラが募ってきた。

なぜ華雄はこちらの話を聞かないのか。なぜ話し合いをしようとしているのか。そもそも、なぜ奴の言う事を聞かねばならないのか。自らの主を辱めた男なのに。

数日前から積もりに積もったフラストレーションが、堰を切った様に一気に爆発する。

「いい加減に、しろーっ！」

まるで雷鳴の様な咆哮と共に振るわれた青龍偃月刀は、華雄の戦斧と激しくぶつかり合う。その衝撃と関羽のあまりの迫力に、華雄は思わず下がって距離を取ってしまった。

「……北郷に馬超、それに貴様。涼州の連中は、どいつもこいつも……」

関羽の憎気な呟きは、距離があったために華雄の耳にはつきりとは届かなかった。

「何？ 貴様、どういう……」

「黙れっ！ それ程までに武で決着を付けたいのなら、付き合っ
てやるうではないか！」

華雄を大喝した関羽。彼女は偃月刀の切っ先を華雄に突き付ける様にして構える。

何か腑に落ちない物を感じたものの、それは華雄の頭の中からすぐに消えた。元々彼女の方が話し合いを否定していたのだ。真っ向から打ち合えるのであれば、文句などあるはずは無かった。

「ならば、その素っ首を叩き落とし、本陣突入の景気付けとしてくれる！」

両者同時に馬を走らせる。頭上で戦斧を一度回し、勢いを付けてから振り下ろす華雄。それに対し、関羽は右に目一杯体を捻り、反動を付けて偃月刀を薙ぐ。気迫と誇りを乗せて交錯する互いの刃。

勝負は一瞬だった。

長年に渡り数多の戦場を潜り抜けて来た戦斧は、その持ち主の元を離れて宙を舞った。何が起きたのか理解出来ない華雄。だが、関羽は容赦無く追撃を掛ける。

「はあああつ！」

体の左側へ振り抜いた偃月刀を、気合いと共に右側へと引き戻す。武器を失った華雄にそれを防ぐ術は無い。偃月刀に脇腹を抉られ、そのまま落馬してしまう。関羽が地面に仰向けに倒れる華雄へ偃月刀を突き付けても、何の反応も示さなかった。

「敵将華雄、この関羽が討ち取った！」

関羽は偃月刀を天に突き立てる様に掲げ、高らかに勝ち名乗りを上げた。

「くそつ、間に合わんかったか！」

華雄を連れ戻しに来た張遼は、関羽の勝ち名乗りを数百メートル離れた場所で聞いた。大将を討たれた華雄隊が浮き足立っているのは、この距離でも確認出来た。

このままでは全滅は必至である。華雄は助けられなかったが、その部下にまで同じ道を辿らせるつもりは張遼には無い。

「おい、銅鑼を鳴らせ。華雄隊を連れて撤退や」

言われた通り、張遼の副官は銅鑼を打ち鳴らす。その音を聞いた華雄隊は、『張』の旗を目にした事で落ち着きを取り戻したらしく、隊列を整えて張遼の方へ後退し始めた。当然だが、劉備軍に追撃の動きは無い。

「張遼將軍、華雄隊の合流、完了しました」

副官の言葉に、張遼は意識を引き戻される。それまで、彼女の瞳には関羽の姿しか映っていなかった。

華雄は、将としての総合力はともかく、武力では自分以上の力を持つている、と張遼は評価していた。その華雄を一撃で仕留めた関羽に興味を抱くのは、武人として当然だった。自分も関羽と一戦交えたい。そんな思いが張遼の頭の大部分を占めていたが、副官の言葉で思い止まった。

部下達が撤退を始めたのを確認してから、張遼も馬首を返す。

「華雄、必ず月は守ったるから、迷わず成仏するんやで」

それだけ言い残し、張遼は汜水関へと撤退して行った。

顔良と文醜は、汜水関の前で部隊を再度立て直していた。そこへ、本陣を捨てて逃げていた袁紹が合流する。

「全く、何をしているんですの、お2人は！ 名門袁家の将として、恥ずかしいとは思いませんかの!？」

袁紹は大声で2人を叱責する。2人は頭を垂れ、甘んじてそれを受け入れていた。そこへ、1人の兵が報告にやって来た。恐る恐る報告をしようとしたその兵を、袁紹は怒鳴り付ける。

「私達は忙しいのですから、そんな物は後になさい！」

そうして2人への叱責を再開しようとする袁紹だったが、兵は下がろうとはしなかった。深い深いため息を吐き、仕方ない、といった表情で、袁紹は報告する様促す。

「連合軍の本陣へと向かった張遼隊が引き返し、我等の後方より迫っております」

「な、何ですって!？」

仰天した袁紹は、顔良と文醜に迎え撃つ様に命じたが、すでに手遅れであった。袁紹は2人の将と数人の側近に守られ、這う這うの体で逃げ出すのがやっとであった。

その様子を、曹操は少し離れた場所から眺めていた。

「あれが神速の張遼。フフツ、欲しいわね」

脇に控える夏侯姉妹に聞こえる様、曹操はわざと大きな声で呟く。その顔には、妖しい笑みが浮かんでいた。

曹操から欲されている事など知る由も無い張遼は、袁紹軍を軽く蹴散らして汜水関に帰還した。休む間も無く、今度は汜水関からの撤退に取り掛かる。とは言え、出撃前に撤退をする事は伝えてあったし、元よりいつでも放棄出来る様な準備はしてあった。

兵糧や武器を積んだ輜重隊は、すでに虎牢関へ向けて発っている。後は、賈馱の計に従い最後の仕上げをするだけだ。

「汜水関に火を放て！ そしたら、ウチ等も撤退すんで！」

張遼の命令を受け、兵達は予め決められていた場所に火を点けた。油を伝って広がる炎は、蛇の様に汜水関の至る所を這い回る。そして、要所要所にうず高く積まれた藁や枯れ木に引火し、次々と激しい火柱を上げていく。瞬く間に大蛇へと成長した炎は、全てを飲み込みながら汜水関の中をのたうち回った。

こうして炎の壁となった汜水関は、兵が撤退した後も連合軍の進攻を阻み続けたのだった。

第2章・洛陽編・第6話〜一騎討ち〜（後書き）

という事で、半ば八つ当たり気味に愛紗に倒される華雄でした。

董卓軍は汜水関に火を放ってから撤退。次回から、舞台は虎牢関に移ります。

第2章・洛陽編・第7話／汜水関を越えて

翠と一刀が華雄の下に着いたのは、ちょうど一騎討ちの決着が付いた時だった。関羽の偃月刀を脇腹に受けて、華雄の体は地面に激しく叩きつけられた。

やはり無理なのか。関羽の勝ち名乗りを聞きながら、一刀はそう考えていた。

それから数時間後、翠達3人は劉備軍の陣内にいた。案内された天幕の中には檻がある。そして、そこには手枷と足枷をはめられた華雄の姿があった。

安心する翠達。しかし、華雄はそんな3人に向かって吠えた。

「どういう事だ、馬超！　なぜ、貴様がこいつ等と……！」

そこまで叫んだところで、華雄は顔をしかめて脇腹を押さえる。偃月刀の柄で痛打され、彼女の肋骨には数本ひびが入っていた。

そんな華雄を宥める様に、翠と一刀は事情を説明する。最初の内は鋭い眼光で睨んでいたが、説明が終わる頃には表情から険が取れていた。

「……って訳だ。だから、大人しくしてくれよ」

翠の言葉に、華雄は素直にうなずいた。

「でも、本当に無事で良かった……」

心底安心した様で、一刀はしみじみと呟いた。骨にひびを入れられている以上、正確には無事ではない。だが、一刀の知る歴史では、華雄はこの時の一騎討ちで命を落としている。それと比べれば、無事と言っても何の問題も無いだろう。

改めて大人しくしている様に伝え、翠達は天幕を出る。そこには、3人を案内してくれた桃香と関羽がいた。前に会った時と同じで柔らかな微笑む桃香と、こちらにも相変わらぬの険しい顔を見せる関羽。そんな2人に、一刀は頭を下げて礼を言った。

「別に、私は礼を言われる様な事はしていない」

関羽はにべもなく答える。彼女は一刀と目を合わそうともしない。自分のせいとはいえ、ここまで嫌われるとやはり淋しい。それが美少女であるなら尚更だ。その思いが面に出たのか、桃香は申し訳無さそうな顔になる。

「何言っただよ。お前、あの時手加減したろ。わざと柄で打ち込んだんだろうが」

翠の言った通りだった。偃月刀が華雄を捉える瞬間、関羽は腕をわずかに伸ばした。刃ではなく、柄が当たる様にするためだ。

距離があつた事と、何より偃月刀の振りが速過ぎて、一刀には全く見えなかった。自分との実力の違いを、改めて思い知らされた一

刀だった。

「なつ、わ、私は……」

凶星をさされ、関羽の頬はわずかに朱に染まる。

「そうだよ。だって、愛紗ちゃんは優しいもん」

さつきと180度違う満面の笑みを見せた桃香は、関羽の右腕をその胸に抱く。大きな胸は、ムニユリと形を変えた。

「と、桃香様、何を仰っているのですか。は、離して下さい」

関羽はよっぽど恥ずかしいのか、耳まで真っ赤になってしまう。

「やくだ」

関羽が振り解こうといくら腕を振っても、桃香は笑顔のまま甘えた声を出して離そうとはしない。どちらが姉で、どちらが妹かわからない光景だった。

そんな2人のほのぼのする姿から視線を外し、一刀は左手の方に目をやる。その方向には、日が暮れてもまだ炎を上げる汜水関があった。夜空を赤く染める汜水関を、一刀はしばらく眺め続けていた。

そして、一刀以外にも汜水関を眺める人物があった。曹操である。彼女はしばらく汜水関を見つめた後、フツッ、とかすかに声を漏らして笑った。

袁紹軍の統制の無さに計画をふいにされ、昏間は怒りを覚えてさ

えいた。しかし、今になってみれば、そのお陰で助かったのかもしれない。もし、計画通りに袁紹軍を出し抜いて汜水関に突入していたら、あの炎に巻かれて全滅の憂き目に遭い兼ねなかった。もちろん、火を放つ前に制圧出来たかもしれない。しかし、汜水関に火を放たれる事を想定していなかった以上、前者の結果に至る可能性は決して低くなかった、と言えるだろう。

汜水関に背を向けて、曹操は天幕に戻るべく歩き出す。その後ろでは、夏侯姉妹が対称的な顔をしていた。曹操の心中を察した様に薄く微笑む夏侯淵に対し、姉である夏侯惇は、笑った事にも気付いていない様子で、真っ赤に燃える汜水関をポーツと眺めながら歩いていた。

汜水関を放棄した張遼は、虎牢関へと入った。部下達に休息を取らせると、自身は呂布と陳宮と共に虎牢関の上に出た。

「すまん。汜水関も華雄も守れんかった」

汜水関での結果を、張遼は2人に詫びる。呂布は普段と何ら変わらない無表情のまま、フルフルと首を横に振った。

「……霞は頑張った」

呂布に励まされた事がむず痒くて、張遼の頬はゆるむ。さらには、陳宮が続ける。

「連合軍の動きが遅かった事もあって、汜水関での時間稼ぎはほぼ計算通りなのです」

自分の半分程度しか人生経験の無い小さな軍師に気を遣われた。張遼の心の中は、気恥ずかしさや申し訳なさで一杯になる。そんな気持ちに誤魔化す様に、張遼は声を上げて笑う。そして、陳宮の頭を帽子の上から撫で付けた。

「や、止めるのです、霞」

「恥ずかしがらんでもええやん。ほれ、ええ子ええ子」

止めるように言うと共に、陳宮は脱出しようと身をよじらせた。だが、カラカラと笑う張遼は、上から押さえ付ける様に頭を撫でて逃がさない。最初の内は、自分の気持ちを誤魔化すため、また、少なからず感謝の思いがあつてやっていた事だった。しかし、ここに至り、張遼の心は嗜虐心に支配されつつあった。

尚も暴れる陳宮とじゃれ付く張遼。そんな2人に呂布がスツと近づく。助けてもらえる、と思った陳宮は、涙目で呂布を見上げながら、

「恋殿〜」

と、哀願する様に真名を呼んだ。しかし、呂布はそれを止めようとはせず、張遼の方に自分の頭を差し出した。

「……………霞。……………恋も」

その場の時間が一瞬止まった。予想外の言葉に、目を見開いて驚

いた張遼は、思わず爆笑してしまう。一方の陳宮は、全身から力が抜ける様な感覚に襲われた。

「あつはつは！ そやな、恋もええ子や！」

笑い過ぎて目尻に涙を浮かべた張遼は、開いている右手で呂布の頭を撫でた。陳宮にしているよりは弱いものの、それでも結構な力を入れている。髪の毛がくしゃくしゃになるが、呂布は嬉しそうな雰囲気醸し出していた。

しばらくそうしてから手を離すと、張遼は真剣な表情で2人に向き直った。

「劉備軍の関羽、華雄を殺った奴の名や。綺麗な長い黒髪やった」

「……そいつ、強い？」

関羽の武を直にその目で見た張遼には、自分との力量差が分かっていた。

勝ち目が無い訳では無い。だが、5回やって1つ勝てるかどうかだろう。ひよっとしたら、翠よりも強いかもしれない。張遼はそう見ていた。

それでも彼女の中には、関羽とやり合ってみたい、という思いがあった。武人の性を感じ、張遼は自嘲気味に笑った。

「まあ、ウチでは勝てんやろな。せやけど、恋なら……」

コクリとうなずいた呂布は、汜水関のある東の方を見やる。燃え

盛る汜水関により、夜明け前だと言つのに空は明るかった。

「……華雄の敵は恋が討つ」

いつも通り静かな口調だが、その言葉には力強さがあった。

「……せやけどウチ、月ちゃんに会わず顔無いわ」

肩を落としながら呟く張遼。3人の中では、華雄はすっかり死んだ事にされてしまっていた。

汜水関の火が消えたのは、それから3日後の事だった。とはいえ、すぐに通過出来るものでもない。まだくすぶっている火も多く残っているし、温度も高くなっている。何より、焼け残った汜水関の耐久力を確認してからでなければ、部隊を進める事が出来なかった。

結局、全軍が汜水関を越えたのは、それから2日後だった。連合軍は汜水関からわずかに進んだ場所に陣を築くと、虎牢関攻略に関する軍議を始めた。

軍議に出席した一刀は、汜水関攻めの先鋒に推した事を袁紹から叱責される覚悟をしていた。事実、袁紹の機嫌はすこぶる悪かった。しかし、その怒りの矛先は一刀ではなく、彼女の従姉妹である袁術に向いていた。

「美羽さん、あの様に後方で縮こまって見ているだけなど、恥ず

かしくはありませんの！？ 貴方も名門袁家に名を連ねるのであれば、自ら前線に立つたらどうです！」

袁術を後衛に回したのは袁紹自身なのだが、すっかり忘れていらしい。

「なつ……！れ、麗羽姉様、そんなのは横暴なのじゃ！」

当然、袁術は反論するが、袁紹は自分の意見を押し付けるだけで、全く聞こうとはしなかった。結局、袁術はそのまま押し切られ、虎牢関攻めの先鋒を務める事にされてしまった。

自分の天幕に戻った袁術は、その小さな体躯には似付かわしくない大きな椅子に深く腰掛けた。足首がやっと座面から出ている状態で、駄々をこねる様に四肢をじたばたさせる。

「腹が立つのじゃ、あの妾腹！ 七乃、蜂蜜水を持って来るのじゃ！」

袁術と袁紹は従姉妹なのだが、血縁関係としては異母姉妹になる。今袁術が言った様に、袁紹は妾の産んだ子だ。その袁紹が跡継ぎのいない本家の養子に入り、2人は従姉妹となった。元々姉の事を妾腹と蔑んでいた袁術である。本妻の子である自分を差し置いて、姉が本家の跡取りとなった事に強い憤りを覚えた。

張勳から差し出された湯呑みを受け取ると、袁術は蜂蜜水を一気

に飲み干した。プハーツ、と満足そうに息を吐く。四肢をばたつかせる動きは治まったものの、その顔はまだ不満そうだ。

「どうするのじゃ、七乃。妾は面倒な事は嫌なのじゃ」

「大丈夫ですよ、美羽様。そのために孫策さん達を飼ってるんじゃないですか」

張勳はニツコリ笑って言う。その進言を聞き入れた袁術は、直ぐ様客将である孫策を呼び付けた。

「……と言う訳で、孫策よ、よろしく頼むのじゃ」

孫策は天幕を訪れるなり、袁術から虎牢関攻めを申し付けられた。

「ちょっと、私達だけで虎牢関を落とせ、って言うの!？」

「もちろん、私達も後方から援護しますから、安心して下さい」

驚いた声を上げる孫策に、張勳は相変わらずの笑顔で答える。しかし、先程袁術に対して向けていた笑顔と違い、目は笑っていないかった。

張勳の言葉が信用出来ない事を、孫策は嫌と言う程分かっている。今言った事は、あくまで建前。実際には、危険な事はこちらにやらせて、手柄だけを得ようとする魂胆だろう。しかし、それが分かっているとしても、孫策には断る事が出来ない。

袁術は孫策を客将として迎えるにあたり、いくつか保険を掛けていた。その内の1つとして、孫策の妹である孫権を引き離して監視

していたのである。である以上、孫策には下手に逆らう様な真似は出来なかった。

「分かったわ。張勳、あてにさせてもらつわよ」

渋々ではあるが、面には出さない様、無理矢理に笑顔を作つて孫策は答えた。

「あーもう、ムカつく！ 聞いてよ、冥琳」

自陣に戻つた孫策は、その足で周瑜の天幕へと飛び込んだ。そのまま、机に向かつて仕事をしている彼女の背中から抱き付く。

「ちよ、ちよつと、止めなさい、雪蓮」

完全に不意を突かれた周瑜は、驚いた声を上げる。だが、孫策は制止を無視し、じゃれるかの様に体を左右に振つた。

この2人の間にあるのは、ただの主従関係だけではない。2人は幼なじみであり、共に天下統一する事を夢見て義姉妹の契りを交わした仲である。その心の結び付きは強く、同じく義姉妹となった劉備3姉妹に勝とも劣らない。

「……雪蓮。貴方、いい加減に……！」

周瑜の言葉に怒気が含まれる。肩越しに机の上を覗いてみれば、

そこには書きかけの書簡があつた。途中までは綺麗な字で書かれているが、最後の方はミミズがのたくった様に墨が暴れていた。とっさに孫策は周瑜から離れる。

「あはは……。ごめんね、冥琳。そんなに怒らないで、ね？」

そう言つて孫策は謝るが、大して悪いとは思っていない。周瑜の説教を受けたくないがために、形として謝つたに過ぎなかつた。

しかし、周瑜はそんな事には慣れつこな様子だ。仕方が無い、という様な感じで大きなため息を吐きながら、ずれた眼鏡を指で押し上げる。そして、机に両手を突いて立ち上がると、孫策の方に振り返つた。

周瑜には孫策の言いたい事が分かつていた。だが、愚痴の1つも聞いてやろう。そんな思いで何があつたのか尋ねようとした時、天幕の入り口から1人の女性が顔を出した。

「何じゃ、話し声がすると思つたら、策殿が戻つておつたのか」

そう言いながら、その女性は中に入って来る。孫策は周瑜から女性の方へ向き直つた。

「祭、冥琳が苛める」

「人聞きの悪い事を言わないで。聞いてあげないわよ」

再び周瑜の方を向いた孫策は、えーっ、と不満の声を漏らす。その声を聞きながらも、周瑜は澄ました顔でそっぽを向いた。そんな2人のやり取りを見て、声を上げて笑う女性。

彼女は黄蓋、字は公覆。孫策の母、孫堅の代から孫家に仕える古参の将である。孫策達と同じく褐色の肌に、髪の色こそ銀髪だが、これまた2人と同じ癖の無いストレートのロングヘアをしている。

「で、どうしたの？ 袁術に何を言われてきたの？」

周瑜に促され、孫策はここに来た目的を思い出した。周瑜とじゃれ合いに来た訳ではないのだ。ゆるんだ顔を引き締めた孫策は、袁術から虎牢関攻めを命じられた事を2人に伝えた。

「何と、儂等だけでか！？ あの童、相も変わらず無茶を言うてくれる」

話を聞いた黄蓋が驚くのも無理はなかった。袁術の客将に過ぎない孫策が有する兵力は五千人程。連合に参加した者の中では、劉備に次いで少ない。たったそれだけの兵力で、汜水関よりも堅牢な虎牢関を落とせと言うのだから。

だが、孫策軍の軍師である周瑜の表情は、普段と少しも変わっていない。彼女にとって、この命令を受ける事は想定の内だった。袁紹が袁術に虎牢関攻めを命じた時に、周瑜はこうなる事を予測していたのだ。いつも通りの凜々しいたたずまいに、孫策と黄蓋は頼もしさを覚えた。

「その様子だと、虎牢関攻めに何か妙手でもあるんでしょ？ ねえ、教えてよ、冥琳」

孫策の問いに、周瑜は速答する。

「無いわよ、そんなの」

2人が感じた頼もしさを、一気に吹き飛ばす一言だった。

「ちょっと、どづいう事よ、冥琳」

「お主、儂等を無策のまま虎牢関に突っ込ませる気か？」

2人が文句を言うのも当然だった。正面からでは攻め落とせない以上、何らかの策が必要になってくる。にもかかわらず、軍師に、打つ手が無い、と言われれば、誰だって文句の1つも言いたくなるものだ。

しかし、周瑜は冷静なままだった。2人を宥めると、足りなかった言葉を補う。

「虎牢関を落とす手は無い。でも、今の状況を切り抜ける事なら出来るわ」

翌日から、孫策軍は虎牢関への攻撃を開始した。それを迎え撃つ張遼達は、虎牢関の上からそれを眺める。

「なあ、あれはどづいう事や？」

「……ねねに聞かれても、分からないのです」

2人が困惑するのも無理は無かった。孫策軍は、矢が届くか届かないかの距離から散発的に射かけてくる。当然、全くと言っていい程に董卓軍の被害は無い。後は、汜水関の戦いの様に、罵声を浴びせて挑発するだけ。虎牢関を攻め落とす意志は全く感じられず、呂布などは城壁の上で寝息を立てる有様だった。

「普通に考えれば、正面に意識を集中させて、その隙に側面や後方に回り込む事を考えている、と思うのですが……」

陳宮は自信が無い様で歯切れが悪い。それはそうだ。意識を集中させようとすると、激しく攻め立てるのが当たり前だからだ。

「ともかく、警戒を一層厳しくしておくのです」

とりあえず、彼女達に出来る事はそれしかなかった。

孫策軍が虎牢関を攻め始めてから3日が経った。その間、ずっと初日と同じ様に意味の無い攻撃を繰り返していた。

「ねえ、いつまでこんな事を続けなければいいのよ」

すっかり日も暮れた後、孫策は不満たらたらで周瑜に尋ねる。彼女にとつて、こんな戦い方は消化不良でフラストレーションが溜まるだけだった。と、そこに1人の兵がやって来る。その兵が身に付けている鎧は袁術軍の物だった。

「明日より虎牢関攻めの指揮は、袁術様が自ら執られます。孫策殿には、後方に下がるよう通達されました」

必要な事だけ伝えたと、その兵はとつと帰ってしまつ。その姿が見えなくなつてから、周瑜は口を開いた。

「ふむ、予想通りの時間だな」

眼鏡を掛け直す周瑜の口元がゆるんだ。

虎牢関攻めは、袁術自身が袁紹から申し付かつた事だ。それを客将である孫策に丸投げした。戦果が上がれば、それでも文句は無かつただろう。しかし、何の進展も無いこの状況では、袁紹が怒り出し、袁術に対して督戦するのは目に見えていた。そうなれば、袁術が何を言つたところで耳を貸さなくなり、自ら前線に出ざるを得なくなる。

思い描いた通りの状況となり、満足そつに薄く笑う周瑜。だが、一兵も損なわずにすんだというのに、孫策は不満顔を崩さない。

「せつかく暴れられると思つたのに、つまんな〜い」

「あ、貴方ねえ……」

大将としてあるまじき発言に、周瑜は軽くめまいを覚えた。だが、孫策は悪びれる風も無く続ける。

「飛將軍と謳われる呂布がそこにいるのよ？ 祭だつて、戦つてみたい、と思うでしょ？」

「確かにのう。最強と呼ばれる者の武がいか程なのか、自分自身で確かめてみたい気持ちがありますな」

「雪蓮！ 祭殿も、煽る様な真似はしないで頂きたい」

武人としての本能を隠そうとしない2人を、周瑜は強い口調で諫める。肩をすくめた孫策は、残念、とでも言いたげに、黄蓋と微笑みあった。

こうして次の日から、袁術軍が虎牢関攻めに掛かり始めた。だが、袁術は袁紹以上に無能だった。もっとも、現代日本であればランドセルを背負っている歳の少女に、一軍を率いる能力を求めるのが間違っているのかもしれないが。

袁術にその力が無いため、普段は張勳が軍の指揮を取っている。だが、彼女は袁術の世話で忙しかった。そのため、他の将が率いて虎牢関を攻めているのだが、状況は芳しくない。元々兵達の練度が高くない上に、大将が天幕にこもって出て来ないのであれば、士気が上がるはずも無かった。

そんな状況を見逃す董卓軍ではない。機を見て虎牢関から討つて出ると、袁術軍を散々に打ち破る。袁術は張勳に抱きかかえられ、大混乱に陥った兵達の中を逃げ惑うしかなかった。

第2章・洛陽編・第7話〜汜水関を越えて〜（後書き）

という事で第7話でした。

何とか無事に生きていた華雄。彼女にはもう1働きしてもらわなければなりませんので。

雪蓮にとつての美羽、曹操にとつての麗羽は目の上のたんこぶ。まだまだ弱小勢力でしかない彼女達にとつて手柄を上げる事は重要ですが、それ以上に被害を抑えて後のために力をためる事に重点をおいています。その上で、たんこぶを取り除く、とまではいかなくとも、小さく出来れば御の字と考えての行動です。

ともかく前哨戦は終わり、次回から虎牢関戦の本番になります。この次もよろしく願います。

第2章・洛陽編・第8話〜飛將軍呂布〜

「妾はもう嫌なのじゃーっ！」

この日の軍議は袁術の叫び声で始まった。前日、董卓軍にこてんこてんにやられ、袁術は涙声になっている。

「大体、お主らするいのじゃ。なぜ、妾ばっかり……」

堪え切れず、ついに袁術は泣き出してしまう。その様子を、諸侯はため息を吐きながら眺める。袁術軍が負けた事により、新たに先陣を務める部隊を決めるための軍議なのだが、そんな雰囲気ではなかった。

「全く、それでも袁家の人間ですか？ 情けないですわね」

張勳にあやされている袁術を横目で見てから、袁紹は長い机の両側に腰掛ける諸侯の方に目を向けた。

「ですが、美羽さんのおっしゃる事もともとですわ。私達以外の方は、ほとんど戦っていらっしやらないのですから」

確かに彼女の言う通りだった。袁家の2人以外に、大きく兵を損なった者はいない。ようやくその事に気付いた袁紹は、しばらくうつむいて何事か考えた後、おもむろに口を開いた。

「ならば、こうしましょう。毎日皆さんが交替で虎牢関を攻撃するのです。そうすれば、平等に戦う事になりますから」

袁紹の思い付きはそのまま採用された。連合軍はいくつかの班に分けられ、翌日から班単位で虎牢関攻めに掛かる事になった。

「なあ、良かったのか？ 何も言わなかったけど」

軍議から戻る道すがら、翠は一刀に尋ねた。彼女には、袁紹の立てた作戦が有効な物の様に感じられていた。他の諸侯から反対の声が上がらなかつたのも、それを裏付けている気がしてならなかつた。

「たぶん、大丈夫だよ。翠の考えている様な事にはならないと思う。むしろ、こっちにとって有利に働くんじゃないかな」

翠の心配などよそに、一刀はあっけらかんと答える。楽天的とも取れる言葉だったが、翠の不安な心は不思議と落ち着いた。

まず最初に虎牢関を攻める事になったのは、劉表と劉備の合同軍だった。少ない兵しか持たない者は、大きな兵力を持つ他の諸侯に従う形で虎牢関攻めに当たる。しかし、劉表はまともに戦おうとはしなかつた。もちろん、桃香からしてみればありがたかつたのだが。

「劉表さん、いいんですか？ こんなにのんびりしてて」

一応、桃香は尋ねてみる。

「何、構わんよ。真面目にやったところで、袁家の娘共の手柄になるだけじゃからな」

劉表は真つ白な顎髭を撫でながら、桃香の問いに答えた。

『やっぱり、朱里ちゃんの言ってた通り、なのかな。でも、これなら一刀さん達との約束も守れそう』

劉表の答えを聞いて、桃香は胸を撫で下ろした。

この状況を、諸葛亮は予測していた。毎日寄せ手が代わる事には、大きな問題があるからだ。苦勞して虎牢関を攻撃し、落とす寸前までいっても、次の日には別の諸侯が寄せ手を担当する事になる。そうなれば、手柄は得られずに損害だけが残る事になってしまう。誰もそんな貧乏くじは引きたくなかった。

だが、この作戦を立案した袁紹だけは違う。連合軍の総大将である袁紹は、誰が虎牢関を落としたかに関係なく手柄を得る事が出来る。しかし、袁紹のそんな魂胆はほとんどの諸侯に見抜かれていた。

被害を被る事無く手柄を得たい。そんな不埒な思いを持った者が真剣に虎牢関攻めに当たる訳も無く、散発的な攻撃を繰り返すだけの無意味な日々が過ぎていった。

守備側からしてみれば、こんなに楽な事は無かった。だが、張遼達は兵の緊張を切らさない様、一層軍紀を引き締める。油断して、万が一にも敗北を喫する訳にはいかないのだ。

また、関にこもり続けるために生じる兵達の不満を除く事も忘れない。普段は固く関門を閉ざしているが、袁紹などと与し易い相手が前線に来ている時には、関門を開いて討って出る。

こうして虎牢関を死守し続けた張遼達の下に、ようやく待望の知らせが届いた。

「申し上げます。董卓様、ならびに賈馮様は、無事に洛陽を脱出。張將軍方も虎牢関を放棄し、西涼へ脱出する様に、とのお達しです」

報告を受けた張遼は、よっしゃーっ、と叫び、ガッツポーズを作る。その横では、陳宮が呂布に抱き付いて喜んでいる。呂布は普段と変わらず無表情なままだが、付き合いの長い張遼には、雰囲気で嬉しい気持ち伝わって来た。

だが、彼女達の顔からは、すぐに歓喜と安堵の色が消えた。特に、張遼は戦場のど真ん中にいるかの様に、獰猛な顔になる。

「撤退する前に、落とし前だけはきっちり付けとかんとな。せやないと、ウチは月に顔向け出来へん。陳宮、兵達を集めえや。董卓軍最後の戦、派手にぶちかましたる！」

その日の夜半過ぎ、董卓軍は連合軍へ夜襲を掛けた。寄せ手を務めていたのは青州牧の孔融だったが、戦下手な彼は夜襲への警戒をしておらず、いい様に蹂躪されるのだった。

「全く、いつまでもこんな所で足止めされている場合ではありませんわ！ 今日こそ、虎牢関を突破して見せなさい！」

早朝から袁紹の檄が飛ぶ。それに応え、袁紹軍の将兵は猛烈に虎

牢関を攻め立てる。とはいえ、相も変わらず正面からの力押しだが。

両軍が激しくぶつかり合う中、太陽が中天に差し掛かった頃だった。連合軍の中軍辺りが騒がしくなったかと思うと、幾筋もの煙が立ち上る。それを合図としたかの様に関門が開き、張遼率いる董卓軍が飛び出した。

いきなりの事に、袁紹軍の前線は崩れかかる。が、顔良と文醜、両將軍の指揮で何とか持ち堪えた。しかし、状況は芳しくない。

「斗詩、後は任せた。アタイは、兵達が落ち着く時間を稼いでくる」

「えっ？　ちよつと、文ちゃん!？」

顔良の制止も聞かずに馬を走らせた文醜は、そのまま単騎で張遼隊に突っ込んでいく。馬上で大剣、斬山刀を激しく操り、寄つて来る張遼隊を次々切り捨てる文醜。そうして、10人程の死体が辺りに転がったところで大声で名乗りを上げる。

「アタイは袁紹軍の将、文醜！　張遼、アタイとの一騎討ちを受ける度胸があるか！」

言い終わるか終わらないかの内に、張遼隊は自らの大将のために道を開く。その道を、張遼は馬に跨り悠々と文醜の前まで進み出た。

「弱兵ばかりで退屈しottaとこや。お前は、ウチを楽しませてくれるんやろなあ？」

その瞳に殺意を宿した張遼は、ニヤリと笑うと飛龍偃月刀を両手

で構えた。文醜も、ワクワクした様子で楽しそうに笑う。顔良に向かつて言った、時間稼ぎ、という言葉は、自分が暴れたいがための建前に過ぎなかった。その点において、彼女は、強者と戦う事至上の生き甲斐を感じる張遼と似ていた。

「汜水関での借りを返す！」

「恋においしいところを譲ったんや。その分、ここで暴れさせてもらうでーっ！」

袁紹軍の後方に部隊を展開する曹操は、斥候から現状報告を受けた。それを元に、これからの動きを考える。

後方で上がっている火の手は、昨晚の夜襲をめぐらましにして関の外に身を潜めた董卓軍の仕業だろう。なぜ劉表と劉備を狙ったのかは分からないが、とりあえず無視しておいて問題無い。むしろ、曹操は虎牢関の方に意識を集中させていた。虎牢関から打って出たのは張遼だけ。呂布の旗は虎牢関にはためいたままで、その姿は見えない。

好機ね。そう呟くと、曹操は考える事を止めた。

「春蘭、貴方は私が汜水関で言った事を覚えているかしら？」

夏侯惇は曹操の前に跪く。

「はっ！ 張遼の事ですか？」

彼女が覚えていた事が以外だったのか、曹操はその答を聞いて笑みを浮かべる。

「ええ、そうよ。このままでは、連合に参加した意味が何も無い。せめて、張遼だけでも私の前に連れてきてくれる？」

張遼を生け捕る様に命令された夏侯惇は、返事をした後、誰が見ても分かる淋しそうな顔を見せた。

「……しかし、あの……、華琳様……」

なぜか歯切れが悪い夏侯惇。何か言いたそうにモジモジしながら頬を赤らめると、曹操から視線を外してしまう。そんな彼女らしくらぬ所作の理由を思い当たった曹操は、その笑みを艶っぽいものに変えた。夏侯惇に一步近づくと、ゆっくりと手を伸ばす。細くしなやかな指が、夏侯惇の紅潮した頬にそつと触れる。

「安心なさい、春蘭。張遼を私の前に連れてきてくれれば、今夜は貴方をたっぷり可愛がってあげるわ」

曹操の指は、頬から顎へとなめらかに滑っていく。顎先に指を掛け、自分の方へ顔を向かせる。すると、夏侯惇の顔はさらに赤くなり、とろける様な表情へと変わった。曹操もいとおしそうな眼差しで見つめ返している。

だが、それはわずかな間だけだった。夏侯惇から指を離すと同時に、曹操は普段通りの引き締まった顔に戻る。

「やり方は貴方に一任するわ。見事、張遼を捕らえてみせなさい」
「こちらもキリリとした表情に戻った夏侯惇。再度返事をした彼女は、自分の部隊へ戻ると張遼を攻略する準備を始めた。

「秋蘭、貴方も一緒に行つて春蘭を援護しなさい。こちらの守りは、季衣がいれば大丈夫よ」

そう命令された夏侯淵も姉と同じ様に返事をし、進撃する準備に取り掛かった。

曹操軍よりもさらに後方、劉表・劉備合同軍は混乱に包まれていた。天幕や集積された物資など、陣内の色々な所から火の手が上がっている。兵達が忙しなく右往左往する中、鈴々は1人のんびりと歩いていた。とはいえ、ただ散歩をしている訳では無い。潜入している敵兵を探しているのである。

鈴々はふと足を止めた。両肩に担ぐ様にしていた丈八蛇矛を下ろすと、地面に突き立てる。

「そこに隠れている奴、出て来い！ 鈴々には分かっているのだ」

鈴々が大声で叫ぶと、天幕の影からゆっくりと1人の少女が現われた。赤い髪に入れ墨の様な模様の入った褐色の肌。呂布であった。方天画戟を右手で無造作に持ち、いつも通り表情を変えずに鈴々に近づく。

さすがは2人共、歴史に名を残す豪傑である。お互いに構えている訳でもないのに、その身から発せられる雰囲気だけで、周囲の温度がわずかに下がる。

「…………お前が関羽か？」

ピリピリとした緊張感の中、先に口を開いたのは呂布だった。

「違うのだ！ 鈴々は張飛、字は翼徳。愛紗は鈴々の姉者なのだ。お前は一体誰だ」

「…………恋は呂布。関羽でないなら用は無い…………」

そう言えば、霞が関羽は黒髪だと言っていたな。そんな事を考えながら、呂布は張飛に背を向ける。

「待てーっ！ お前が呂布なら、このまま見過ごす訳にはいかないのだ！ 鈴々が相手だ！」

呂布の背中に向かい、張飛は蛇矛を構えながら叫ぶ。劉備軍と馬騰軍の密約から考えれば、相手だ、という言葉はおかしい。だが、軍議のほとんどを寝るかボーツとするかして過ごしている彼女は、今回の事を全て理解している訳では無かった。と言うより、今だに敵としか認識していないのかもしれない。

一方の呂布も、馬騰軍と劉備軍が協力関係にある事など知らなかった。先程言った様に、関羽以外に用は無い。しかし、誰が関羽でどこにいるのかも分からない。ならば、目の前にいる関羽の妹を利用すればいい。呂布は張飛の方に向き直った。

両手で蛇矛を持ち、腰を落として構える張飛。対して、呂布は片手で戟を持ったまま、特に構えを取る事はしない。

先に仕掛けたのは鈴々だった。力強く大地を蹴ると、一気に距離を潰す。勢いをそのままに、鈴々は上段から蛇矛を振り下ろした。呂布は右足を引いて、半身になる様にしてそれを躲す。目標を失った蛇矛は地面を陥没させるが、鈴々はそれを強引に引き抜くと、斜めに振り上げる様に薙ぐ。だが、呂布が後ろに跳んだため、蛇矛は再び空を切った。

鈴々は体をそのまま1回転させて呂布を正面に捕らえると、今度は激しく突きを繰り出した。常人の目には映る事もかなわない速さの突きを、呂布は戟を使いもせずに回避していく。何度目かの突きを放った後、鈴々は蛇矛を引き戻さず、横に躲した呂布に向けて薙いだ。後ろに下がるのは距離が近すぎて出来ない、と判断した呂布は、この一騎討ちにおいて初めて戟を使う。互いの得物が十字を描く様に交差し、雷鳴と間違える程の激しい激突音が辺りに響いた。

そのまま、両者は力比べの格好になる。表面上は拮抗して見えるが、両手で押し込んでいる鈴々に対して、呂布は未だに右腕一本しか使っていない。この事に鈴々のプライドは傷付き、意固地になった彼女は、さらに力を込めて押し込もうとした。その心の内を見透かしたかの様に、呂布はタイミングを合わせて戟を引く。鈴々は予想していた抵抗が無くなった事により、つんのめってわずかにバランスを崩す。すると、今度は呂布が戟を押し込み、蛇矛を弾いた。まるでバトンを操るかの様に軽々と戟を回すと、大きく体勢を崩している鈴々に向かって突きを放つ。その一閃を何とか防いだ鈴々だったが、あまりの威力に2、3歩よろめいた後、尻餅をついてしまった。

だが、そんな隙だらけの鈴々に対して、呂布は追い討ちを掛けようとはしなかった。戟を肩に担ぎ、つまらなそうな目で鈴々を見下ろしている。

「……お前じゃ、恋には勝てない。早く関羽を連れて来い」

代わりにお前は見逃してやる、とでも言わんばかりの物言いに、鈴々は頭に血を上らせた。

「鈴々をバカにするなーっ！」

尻餅をついた状態のまま、呂布に向かって蛇矛を突き出す。しかし、踏張りの利かない、上半身だけで放った突きが通用するはずもない。突きを躲した呂布は、空いている左手で蛇矛を掴み、グイと自分の方へ引き寄せた。蛇矛を握ったままの鈴々の体は宙に浮き、呂布へと近付いていく。そんな無防備な鈴々の体に、呂布は容赦無く膝蹴りをたたき込む。強烈な一撃に、思わず蛇矛から手を離してしまった鈴々。その体は高々と舞い上げられた。

受け身を取ろうと空中でもがくものの、ダメージのために体が上手く動かず、見る見る近付いてくる大地に激突するのは免れない。覚悟を決めた鈴々は、目を瞑って全身に力を入れる。だが、その体は予想に反して柔らかいものに包まれた。いつも嗅ぎ慣れた甘い香りが鼻腔をくすぐってくる。

「……愛紗」

目を開けると、そこには関羽の顔があった。彼女はホツとした様に相好を崩していたが、すぐに眉尻を上げた。

「全く、お前は何をやっているんだ。董卓軍とは戦わない、と説明しただろ？　いつも軍議の席で居眠りなどしているから、こんな事になるんだ」

いきなり始まる関羽の説教に、鈴々は逃げ出したい衝動に駆られる。しかし、関羽の腕に抱きかかえられている今の状況ではそれは叶わず、げんなりした顔で早く終わるのを待つ他は無かった。

「…………お前が関羽？」

そんな2人に、呂布が離れた位置から声を掛けた。すっかり呂布の存在を忘れていた関羽は、鈴々への説教を中断して声のした方に視線を移す。

「ああ、そうだ。貴公は呂…………」

関羽は思わず息を呑んだ。うつむいた呂布の体から放たれる殺気のために。

数々の修羅場を潜り抜けてきた関羽でさえ感じた事の無いそれは、もはや殺気という言葉すら生温い様に感じられた。彼女に抱かれる鈴々も同じ事を感じているらしく、2人は身じろぎ1つせず、呂布を見つめている。遠くから聞こえてくる兵達の声も、近くで聞こえる鳥や虫の鳴き声も耳に届かない。それ程までに、関羽は呂布に集中していた。

関羽の背中を汗が伝う。その時だった。呂布は顔を上げると同時に地面を蹴り、一気に関羽に迫った。一方の関羽も、放り投げる様にして鈴々を放すと青龍偃月刀を構えた。にやっ、という悲鳴が聞

こえたが、それを気にしている余裕は無い。関羽は呂布の斬撃を真っ正面から受け止めた。五体がバラバラになったのでは、と錯覚する程の衝撃が体を貫くが、四肢を踏張り何とか耐える。そうして、両者は鏝迫り合いの様な体勢で動きを止めた。

「くっ……！ 呂布よ、私の話を聞け。私達はお前の敵では……」

「……うるさい、黙れ。敵は取る……！」

何とか戦いを回避したい関羽。だが、呂布は聞く耳を持たない。これ以上話をする気はない、とばかりに、関羽の腹部に前蹴りを放って距離を取る。

「あ、愛紗！」

心配そうな叫び声を上げる鈴々を、関羽は横目で見遣った。まだダメージが抜け切っていないのか、辛そうな表情で体を起こしている。

「鈴々、お前は休んでいる。この場は私に任せておけばよい」

妹を制した関羽は、話をするためには荒事もやむ無し、と覚悟を決めて偃月刀を握り直した。

虎牢関の前で行われていた一騎討ちは、張遼の圧勝で終わっていた。力、技、速さ、全てにおいて張遼の方が上回っていたが、特に

差があつたのは馬術と馬の能力だった。

袁紹に仕える以前、顔良と共に馬賊をしていた文醜の馬術も高いレベルにある。彼女の跨がる馬も、袁紹が金に飽かせて手に入れた良馬であつた。だが、それでも張遼の馬術と馬の方が、圧倒的に上だった。

自分達が敬愛する将が負けた事で、袁紹軍の混乱は収まるどころかさらに深刻なものになってしまった。結果、袁紹軍は虎牢関から撤退しなければならなかつた。

「ふう、これで少しは落ち着け……そうもないな」

独り言の様に呟く張遼の目には、袁紹軍と入れ違いに近付いて来る一軍が映っていた。掲げる旗には『曹』と『夏侯』の文字が書かれている。

『チツ、曹操とは、厄介な連中が来たもんや』

心の中で舌打ちをする。曹操軍の精強さを聞き及んでいたため、今までぶつからない様にしてきたのだ。だが、ここで後退する訳にはいかない。決死の覚悟で敵陣に潜入した兵や、華雄の敵を討ちに行つた呂布のためにも、関門前は死守しなければならない。

「どう見ても、ウチ等より多いな。このままやと包囲されてまうけど、どうしたもんや……」

包囲されて乱戦になってしまえば、虎牢関からの援護射撃は期待出来ない。かといって、関門から離れる事も出来なかつた。どうしたものか悩む張遼。

だが、曹操軍はそんな張遼の予想とは違う動きを見せる。虎牢関からかなり離れた位置で停止すると、そこから1人の女性が進み出る。長い黒髪をなびかせながら馬を歩ませるのは夏侯惇だった。彼女は張遼から数十メートル離れた位置で馬を止めた。

「我が名は夏侯惇！ 張遼よ、大人しく我が主、曹操様に降伏しろ！ そうすれば、貴様と部下の命は我が名に誓って助けてやろう！」

大声でのべられる口上。当然だが、張遼がそれに従うはずもない。

「はあ？ 何言うとんねん。董卓軍には、我が身かわいさに敵に尻尾を振る様な腰抜けはおらんわ！」

だが、その返事は夏侯惇の予想通りだった。むしろ、ここで素直に投降する様な者は、華琳様の将となるのにふさわしくない、そんな風に考えていた。

「ならば、私と一対一で打ち合え。私が勝てば、貴様と貴様の部下の命は私が預かる」

夏侯惇は大剣、七星餓狼の切っ先を張遼へと向けた。一方の張遼にも、一騎討ちの申し出を断るつもりは無かった。両軍が正面からぶつかった場合、呂布達が戻るまで関門前を支え切れる自信が無いからだ。一騎討ちを受ける意思表示に、馬をゆっくりり進ませる。

「ウチが勝つたらどないするんや？ お前らまとめて、うちの大將に付くんか？」

馬の足を止めた張遼は、そんな事を尋ねた。あくまで興味本意で尋ねただけで、別に言質が欲しい訳ではない。

「そんな物は必要無い。私が貴様に負けるなど、あり得んからな」

それを聞いた夏侯淵は、やれやれ、といった感じで肩をすくめる。姉らしい答えに呆れてはいたが、それと同時に好ましく思う。自分の勝利を微塵も疑わない純粹さ。それでこそ、私の愛した姉者だ。夏侯淵はそんな事を思っていた。

そして、夏侯惇の答えに好感を抱いた人物がもう1人、張遼である。

「あつはつは！ ええ答えや。ウチはあんたみたいな奴、結構好きやで。……ほんなら、ウチが勝った時には、あんたの首級で我慢しといたるわ」

ひとしきり大笑した後、張遼は射抜く様な鋭い視線を夏侯惇にぶつけた。並みの者であれば、それだけで気を失ってしまう程の殺気をはらんでいる。

「……フンッ。さっきの私の言葉、忘れるな！」

夏侯惇もまた、獰猛な笑みを見ると、勢い良く馬を走らせた。

「あんたはウチを失望させへんやろな!？」

文醜との一騎討ちが消化不良だった張遼も、そう叫びながら馬の腹を蹴った。

今、関羽は馬超達の忠告を無視した事を後悔していた。呂布の強さは桁が違う。出来る限り戦うな。翠からはそう伝えられていたし、特に一刀からは、最低でも鈴々と二対一で戦うように、と言われていた。

自分の方が強い、などと慢心があつた訳ではない。現に、強さにムラがあるものの、全力で戦えば自分よりも鈴々の方が強い、という事も分かっている。しかし、ある程度は戦えるはず、と、そんな自信があつたのも事実だつた。

2人は十数合打ち合った後、最初の様に鏑迫り合いの体勢に戻つた。動きが止まつた事により、関羽に若干の余裕が生まれた。

このままでは勝てない。一か八かの勝負に出るべきか。

余裕が出来た事で、そんな迷いが関羽の頭に生じた。迷いはわずかながらも隙を生む。そして、その隙を見落とす程、呂布は甘くない。

「……………がつ!?!」

呂布の左手が関羽の首根っこをつかんだ。そのまま、左腕一本で関羽の体を持ち上げる。呂布の握力と自分の体重とで気道が潰されている関羽は、みるみる顔色が変わっていく。

「……………!」

口を開いても声が出ず、まるで金魚の様にパクパクとするだけ。足をばたつかせ、爪を呂布の左手に食い込ませるが外れない。そんな関羽の苦しみもがく姿を、呂布は冷ややかな瞳で見つめている。

次第に力は弱くなり、ついには四肢がダラリと垂れ下がる。関羽の象徴である青龍偃月刀も、ガランと音をたてて赤茶けた大地の上に転がった。

「……とどめ」

殺意を込めて呟くと、呂布は戟を逆手に持ち変え、ピクリとも動かなくなつた関羽の心臓に狙いを着けた。

「愛紗から手を放すのだーっ！」

その時、大気を震わす咆哮と共に、火の玉の様な勢いで鈴々は呂布へと突進した。先程とは違う雰囲気をまとつた鈴々に対し、呂布は本能で危険を感じとる。関羽の体を投げ捨てる様に放すと、鈴々を正面に構えた。

さつきはかわせた鈴々の斬撃だが、今回はそうはいかなかった。全力で降り下ろされた蛇矛を戟で受け止める。

「……っ！」

呂布の顔がわずかに歪む。押さえ切れない、と感じた呂布は、左手を戟に添えた。そのまま両手で戟を振るい、鈴々を弾き飛ばす。宙に浮かされた鈴々は、空中で体勢を立て直すと着地と同時に地面を蹴って呂布に肉薄する。その勢いそのまま体ごとぶちかましにいつ

た突きは、すんでのところでかわされてしまった。

しかし、鈴々は諦めない。蛇矛の穂先を下げて大地に打ち込む。すると、鈴々の体は、まるでメトロノームの振り子の様に半回転し、きれいに地面に降り立った。間髪入れずに蛇矛を振るう。予想外の行動を取られ、呂布の反応がわずかに遅れた。

「くうっ……！」

鈴々の一撃を防いだ呂布は、そう苦悶の声を上げる。衝撃でその体は1メートル程押し出された。

しかし、呂布も負けてはいない。空気も切り裂く程の速さの突きを、連続で繰り出す。その攻撃を防ぎかわした鈴々は、逆に呂布の戟を強く弾いた。体勢を崩した呂布に対し、大きく蛇矛を振りかぶる。

「つりやーっ！」

気合いと共に降り下ろされた蛇矛は、しかし、またもやかかわされてしまった。再度振り上げ追撃を図る鈴々。だが、わずかに呂布の動きの方が早い。左足で蛇矛を踏みつけて動きを封じると、戟を左足の外側に突き立てる。それを軸にして、強烈な蹴りを鈴々の顔面に放った。蛇矛を押さえられて身動きのとれなかった鈴々の体は数メートル吹き飛ばされ、地面を2、3回跳ねて転がった。

地面に倒れて動かない鈴々を見ながら、呂布は乱れた呼吸を整える。ここまでの危機感を抱かされたのは、随分と久し振りだった。董卓に仕えてすぐ、琥珀と刃を交えて以来であろう。しかし、その時はあくまで訓練。実際に命のやり取りをした訳では無い。今まで

にない血のたぎりを感じ、呂布は武人としての充足感に浸っていた。

そこへ、遅れて趙雲が駆け付けた。

「愛紗！ 鈴々！」

2人の名を呼ぶが返事は無い。その2人から呂布に目をやれば、肩で息をしているものの、かすり傷の1つも無い様に見えた。公孫贇に客将として仕える以前、諸国を旅していた趙雲は、涼州を訪れた時に呂布の勇名という物は耳にしていた。しかし、まさかこれ程とは思っても見なかった。自分と同等か、それ以上の力を持つ2人を無傷で倒すなど、考えられるはずもなかった。

一体どれ程強いのか、非常に興味がある。だが、趙雲は呂布と争うために来たのではない。むしろ、逆だ。

「呂布よ、武器を収めろ。我等は貴公の敵ではない」

だが、呂布にしてみれば、いきなりそんな事を言われても信用できるはずはなかった。肩を上下に揺らしながら、趙雲に向けて戟を構える。

「……恋は華雄の敵を討つ」

「華雄？ 今、華雄の敵、と言ったのか？」

趙雲の問いに、呂布は黙って頷いた。

「ならば、それこそ武器を収めよ。華雄は死んでおらんだぞ」

それを聞いた呂布は、目を数回パチクリさせた後、言われた事を良く理解出来なかったのか、小首を傾げた。殺気は大分減ったが、未だに構えは解いておらず、隙を見せてはいない。

「我が主、公孫贄殿と劉備殿は馬超殿より話を聞いて、董卓殿の脱出計画に協力している。だからこそ華雄を生け捕り、捕虜として身柄を確保させてもらったのだ」

だが、趙雲の説明を聞いても、呂布は戟を下ろさなかった。しかし、それまでの様にしつかりと定まった構えではなく、趙雲には迷いがありありと見えた。

そこへ、馬の蹄の音が響いてくる。栗色の長い髪を、まるで吹き流しの様に風になびかせて、馬に跨がる翠の姿が2人の瞳に映った。翠は2人の間に突っ込むと、慌てた様子で馬の背から飛び降りた。そのまま仲裁に入る翠の背中に向かい、趙雲が声を掛ける。

「どうやら、私の言葉では信用出来んらしい。説明は任せるぞ」

そう言いながら槍を下ろした趙雲は、当然だな、と思い、自分の台詞を鼻で笑った。初対面、しかも敵対している勢力の人間から、自分は敵ではない、と言われても、すんなり信用出来るはずがない。それは、自分を相手と置き換えてみれば、簡単にわかる事だった。

『もつとも、簡単に人を信じてしまうお人好しも、いるにはいるがな』

そんな事を考えた趙雲は、喉の奥でククツと笑った。

翠から状況を説明された呂布は、驚く程素直に武器を収めた。や

はり、真名を許しあつた者同士とは、信頼関係が違ふという事だ。そのやり取りを見て、もう大丈夫だ、と判断した趙雲は、2人に背を向けると未だに倒れたままの鈴々へと近寄つた。

「大丈夫か、鈴々？」

「……………うう、悔しいのだ」

そう言うだけで、鈴々は上体を起こす事も出来ないでいた。

「フツ、さしもの燕人張飛も、飛将呂布の前では形無しと見える。……………ほれ」

鈴々の脇にしゃがみ込んだ趙雲は、その背中で小さな体をおぶつた。今さつきまで呂布と真つ向から打ち合つていたとは思えない程、小さくて軽い体躯だった。趙雲は鈴々を背負つたまま、翠達の側へと戻る。

「ところで、お主1人なのか？ 蹄の音は2つあつた様に思うのだが」

「ああ、一刀も一緒だ……………、つて、あれ？」

趙雲の方に向き直つた翠は、辺りをキョロキョロと見回す。忙しなく動く彼女の視線は、ある一点を見て止まつた。驚いた様に大きく目を見開き、頬にはわずかに赤みが差している。不思議に思つた趙雲も、その視線を追つた。

「……………ほう」

そう呟くと、ニヤリと笑う趙雲。その視線の先では、一刀が関羽を抱き締めていた。

第2章・洛陽編・第8話〈飛將軍呂布〉（後書き）

という事で第8話でした。

圧倒的な力を見せた恋。原作よりも両者の力量差が大きくなっていく感じもしますが。ただ、愛紗は最初は様子見でしたし、鈴々も全力が出せていた訳では無かったたので、本気でやり合えばここまで一方的にはならないはずです。

恋の誤解も解け、バッキバキに折れていたはずの愛紗のフラグが何やら立ちそうなところで次話に続きます。霞と春蘭の一騎討ちの決着で、虎牢関の戦いは終了です。

第2章・洛陽編・第9話〜虎牢関の戦い〜

『一体どうしたのだ……?』

関羽は不思議な感覚に包まれていた。ふわふわとした感覚。まるで、宙に浮いているか、水面をたゆたっているかの様だ。

『ここは、どこなのだ……?』

そう思ってみても、何も分からない。辺りは漆黒の闇に包まれ、自分がまぶたを閉じているのかすらあやふやになる。だが、意外にも不安や恐れといった感情は無く、むしろ、安らかな心持ちだった。何かを考える事すら面倒臭くなっていく。

「……羽、関羽……」

そんな中、彼女は自分の名を呼ぶ声を聞いた。遠く小さな声で、はつきりとは聞こえない。

『……桃香様か? 全く、仕方の無いお方だ。いつまでも私に甘えて。長姉として、もう少し自覚を持ってもらわねば……。いや、違う。桃香様であれば、私を真名で呼ぶはずだ。なら、一体誰が……?』

その間にも、声は次第に大きく、鮮明に関羽の耳に届く様になっ
ていく。

『……男、か? しかし、どうしてこんな悲痛な声を上げている
のだ? 聞いているだけで、心が痛い……』

その声は、関羽の名を呼び続けるだけ。しかし、そこに表れている気持ちは、朦朧とした意識の彼女にもしっかり伝わった。

『そうか、私か。私のせいで、この声の主はこんなにも苦しんでいるのか。ならば、私は……』

関羽の心に反応してか、暗闇の彼方に明かりが灯る。地平線から顔を覗かせた朝日の様に眩い光を放つと、闇を白く塗り替える。関羽の体は溢れんばかりの光に包まれた。

翠の後を追って、呂布が死闘を演じた場所に着いた一刀。彼の視界には、武器を構える呂布と趙雲、倒れている関羽と張飛の姿が飛び込んできた。翠が呂布達の方へ馬を駆けさせたのを見て、一刀は近くに倒れている関羽へと近付いた。

その姿を見た一刀の心臓は大きく跳ねた。関羽の首筋にくっきりとアザが浮かんでいたからだ。慌てて馬から降りると、関羽の口元に耳を寄せる。

「良かった……」

関羽が呼吸をしていた事で、一刀は心底安心した様に呟いた。念のために脈もとってみるが、問題は無さそうだった。気を失っているだけだと分かると、一刀は関羽の脇に膝を付き、軽く頬を叩きながら名前を呼んだ。しかし、反応は無い。地面に正座をして座り直

した一刀は、注意しながら関羽の上体を抱き起こした。背中を太ももに乗せると、左腕で首を固定しながら肩を抱き、軽く揺すりながら再度声を掛ける。

「関羽、関羽！」

さっきと変わらず反応が無い。その様子に、一刀もだんだんと焦ってきた。次第に声も大きくなっていく。

そうして何回名前を呼んだらだろうか。ついに関羽の整った細い眉がピクピクと動いたかと思うと、ゆっくりとその双眸を開いた。それを見て、一刀は先程と同じ言葉を、先程よりもずっと気持ちのこもった風に呟いた。良かった、と。

一刀に抱きかかえられたままの関羽は、状況が分かっていないのだろう。眩しそうに目を細めたまま、瞳を左右にゆっくりと動かし、そして、2人の目が合う。一刀はそっと微笑み掛け、関羽は瞳を数回瞬かせながら、一刀の目を見つめ返した。と、次の瞬間、

「ななな、なぜ貴様がここにいる！？　ここ、こんな格好で……！　とにかく、離れる！」

そう叫んで上体を起こす。状況を把握した関羽の顔は、茹でタコのように一瞬で真っ赤になっていた。さらに、一刀を押し退けようと両手で突き放す。しかし、直前まで気を失っていた関羽の体は上手く言う事を聞かず、逆に自分が後ろに倒れそうになる。一刀は咄嗟にその腕を掴むと、グイと自分の方へ引き寄せた。結果、関羽の体は一刀の胸に寄り掛かり、両腕の中にスッポリと納まる形になってしまった。

「なっ……！」

「さっきまで気を失ってたんだから、無理しちゃ駄目だって」

驚きの声を上げる関羽に構わず、一刀はそつと肩を抱いた。関羽は体を強張らせるが、ふと、さつき自分を呼んでいた声が一刀の物である事に気付いた。なぜ、という思いが彼女の中に去来する。

私は彼に罵声を浴びせ、散々に罵った。天の御遣いであるなど嘘だ、と彼自身を否定する事まで言った。なのに、どうしてこんな私の心配をするのか。これではまるで、桃香様ではないか。

そこまで考え、関羽は一刀の腕の中でかぶりを振った。桃香様とこの男が同じはずはない、と。

離れなければ、と考えるにはいるのだが、体は動かない。それは女性の本能だったのかもしれない。男性特有の筋肉質な体は、彼女の心に万難から守られている様な安心感を与えていた。

「愛紗よ、お主も随分としおらしくなったものだな。どこぞの生娘かと思っただぞ」

いきなり声を掛けられ、関羽は体をビクツとさせた。声のした方を見てみれば、そこには趙雲がニヤニヤしながら立っている。

「ちっ、違っぞ、これは！ 私がしたくてしたのではない！」

そう叫んでみても、まだ体には力が入らない。大人しく抱かれていますしかなかった。

「やれやれ。そんなに顔を赤くしては、説得力などありはしまい」

「にははは。愛紗のお顔が真っ赤なのだ」

趙雲に続き、彼女に背負われている張飛にまでからかわれる関羽。そんな3人のやり取りを、一刀は微笑ましく見ていた。

「ところで、北郷。いつまでも、そんな顔をしていてよいのか？」

話を振られたものの、一刀はピンと来なかった。が、今度は彼が体をビクつかせる事となる。

「なあ、一刀。お前、いつからそいつとそんなに仲良くなったんだ？」

ゆっくりとした低いトーンの声が背中に突き刺さる。恐る恐る振り返ってみれば、そこにはひきつった笑みを浮かべる翠の姿があった。翠は喜怒哀楽が素直に面に出てしまうタイプである。それが、笑いながら怒っている。一刀にとって、これは普通に怒りを露にされるより、ずっと恐ろしかった。

「ち、違っんだ、翠。これは……」

少なからず、彼の中にもやましい気持ちはあったらしい。慌てて取り繕いながら離れようとするも、やはり関羽はふらついてしまう。そうなれば、一刀はそれを支えざるを得なかった。しかし、その様を見て、翠のこめかみがひくひく動く。

「……まあ、あたしには関係無いけどなっ！」

笑みも消え、フンツと鼻息荒く、翠はそっぽを向いてしまった。その横では、相も変わらず趙雲がいやらしく微笑んでいる。そんな2人の間から呂布が顔を覗かせた。

「……翠から聞いた。ごめん……」

そう言った呂布の顔は、わずかだが眉尻が下がっている。趙雲達からしてみれば、ただ謝っただけにしか見えなかっただろう。しかし、彼女の普段の無表情っぷりを知っている翠には、本当に反省しているのが感じられた。

「っ！ ……いや、私達も無事だったのだ。気にする必要は無い。そもそも、張飛の奴がしつかりと説明出来ていれば、今回の様にはならなかったはずだ。こちらにも落ち度はある。すまなかったな、呂布よ」

呂布を責める事もせず、関羽は落ち着いた様子で返答をする。一刀に抱かれたままとはいえ、堂々とした態度だ。だが、一刀だけは、関羽が虚勢を張っている事に気が付いていた。

彼女の体はわずかに震えており、他の者からは死角になっている右手で自分の首をさすっている。そんな関羽を、立派であると思うと共にいじらしく感じた一刀。わずかだが、彼女を抱く手に自然と力がこもった。

「……じゃあ、恋は戻る」

いつの間にか姿を表した愛馬に手を掛けながら、呂布が言った。その声に翠と趙雲は振り返る。

「まだ、虎牢関の前は戦闘が続いてるみたいだから、気を付けろよ。……本当は、あたしも手伝ってやりたいんだけどな」

翠の言葉に対し、呂布は黙ったまま首を横に振った。

「そうだな。じゃあ、先に西涼で待つてくれ。あと、月達によろしくな」

今度はその言葉にうなづく。呂布に事情を説明した際、翠は董卓達の脱出が完了した事を聞いていた。だから、この後虎牢関を放棄し、西涼まで逃走する事になるのも分かっていた。

「呂布！ もう一度、鈴々と勝負するのだ！ 今度会ったら、ぜっつたい負けないからな」

鈴々は勇ましい台詞を、趙雲におぶさったままの情けない格好で言った。ヒラリと馬の背に跨がり、呂布は振り返る。

「……張飛、強い。強い奴と戦うのは楽しい。……約束」

2人は互いの目を真っ直ぐに見つめ合う。強者同士、通じ合うものがあるのだろう。それだけ言い残し、呂布は去っていった。

「あの……、北郷、殿。そろそろ放して頂いても……」

おずおずと発したその言葉で、関羽はようやく一刀から解放された。まだ多少ふらつく感じはあるが、だいぶ体に力が入る様になった。右手を数回握りながらそんな事を考えていると、再び鈴々が口を開いた。

「愛紗ばかりお兄ちゃんと仲良くしてずるいのだ。鈴々も、お兄ちゃんに抱き締めて欲しいのだ」

それを聞いて、一刀と関羽だけでなく、翠まで顔を赤らめた。そんな3人の顔を見遣った趙雲は、またもニヤリと笑う。

「そうか。ならば、北郷に陣まで連れ帰ってもらえ」

そう言つと、趙雲は自分の背中へと手をやる。鈴々の服を、まるで猫の首を持つかの様につかむと、ヒョイと持ち上げた。そのまま下手投げでトスする様に、一刀に投げて寄越す。鈴々の体は綺麗な弧を描き、一刀の胸へと飛び込んだ。

虎牢関の前で行われている張遼と夏侯惇の一騎討ちは、五十合以上打ち合つても決着は付いていなかった。最初の内は互角であった2人だが、四十合を過ぎた辺りから張遼が押し始める。

純粋な武であれば、夏侯惇の方が上である。力、技、速さ、どれをとつても張遼は夏侯惇に一步及ばない。だが、馬術だけは別だ。これに関しては、張遼が夏侯惇を大きく引き離していた。さらには跨がっている馬の差もある。勝負が長引いて疲労が積み重なってきた事でその差が大きくなり、両者のパワーバランスを崩したのだ。

「どないした、夏侯惇！ あんだけの事言つといて、この程度か

いな!？」

「くっ! 調子に乗るなよ、張遼!」

疲労により馬の反応が鈍くなっているため、どうしても後手に回ってしまう。こうして夏侯惇が吠えてみも、彼女の馬が元気になる事はない。そして、その差が決定的な物になるのは、さらに十合程打ち合った後だった。

張遼の重い一撃を大剣で受け止めた夏侯惇は、逆に弾き返そうと力を入れた。だが、彼女と違い、すでにその馬は限界に達していた。ガクツと前足が折れ、つんのめる様になりながら前に倒れる。当然、夏侯惇の体は投げ出され、右肩を強かに打ち付けてしまう。その拍子に、彼女の手から大剣がこぼれた。急いで起き上がり武器を拾おうとするが、その動きは片膝を立てたところで止まる。彼女の鼻先には、張遼の繰る偃月刀が突き付けられていた。

夏侯惇は視線を偃月刀の穂先から、徐々の上に移していく。この戦いに納得したのか、呼吸の荒い張遼の顔には満足気な笑みが浮かんでいた。

「馬の差とは言うても勝負は勝負や。約束通り、その首、この張遼がもろた!っ!」

勝利を確信し、張遼は飛龍偃月刀を大きく振り上げた。だが、その張遼の体が横に傾ぐ。彼女の跨がる馬が、力無く倒れたためだった。あまりにも突然の事に、張遼は受け身すら取れずに地面に叩き付けられる。その瞬間、ボキツという嫌な音と共に、左手の小指に鈍痛が走った。

『……ちつ、折れよつた』

ほんの一瞬痛みに顔を歪ませたものの、すぐに表情から消した。夏侯惇に悟られないため、というのはもちろんだったが、自分の事以上に、倒れた馬の事が気になったからだ。張遼はこの馬を、もう2年近くも相棒としている。癖や限界といった物は彼女の体に染み付いており、それを間違えるはずは無かった。

上体を起こし、張遼は倒れた愛馬の体に目を向ける。すると、首に2本の矢が突き刺さっている事に気付いた。一騎討ちを邪魔され、その上、愛馬まで殺された。激情にかられる張遼。

「夏侯惇！ 己、どういう事や！？ 一騎討ちや言うつといて、負けそうになれば横槍を入れる。これがお前等のやり方なんか！？」

しかし、これは、夏侯惇が命じた事ではない。彼女も張遼と同じく、戦場の流儀を重んじるタイプの武人である。一騎討ちに負けそうだから他の者に助けをもらつ、などという考えは、彼女にはあり得ない。そもそも、負ける事自体を考えていないのだから。

「わ、私ではない！ ……秋蘭、どういっつもりだ！？」

矢が放たれたであろう方向を振り向きながら叫ぶ。張遼もつられて首を回した。その視線の先には、弓を構えたままの夏侯淵が立っていた。

「姉者よ、我等の全ては華琳様の物だ。華琳様の掲げる覇道のために我等の全てが存在する事、忘れたのではないだろう。このようなどころで、無意に命を散らさせる訳にはいかん！」

曹操の名を傷付ける行為である事は分かっている。姉を助けたい、という個人的な思いもあった。だが、これから先の事を考えれば、夏侯惇という猛将はどんな事をしても失う訳にはいかなかった。

「何ぬかしとんねん！　んなモン、ウチの知ったこつちやないわ！」

そう叫んで立ち上がった張遼に対し、夏侯淵は矢を射掛ける。何とか偃月刀で払い落としたものの、おいそれとは飛び込めない程の速さと正確さだった。

張遼の意識が妹に移った隙に、夏侯惇は愛剣、七星餓狼を拾い上げる。そして、わざと張遼の正面に回り込んでから斬りかかった。妹の言っている事は分かるが、その行動には後ろめたさを感じた。だからこそ、夏侯惇は虚を突く様な真似はせず、両者の間に割り込む形で攻撃を仕掛けたのである。

夏侯惇の存在が意識の端へと行ってしまっていた張遼ではあったが、さすがに視界のど真ん中から仕掛けられれば、しっかりと対応出来る。夏侯惇の放った斬撃を偃月刀で弾く。その瞬間、折れている左手に衝撃が加わり、激しい痛みが体を貫いた。思わず顔をしかめ、左手を柄から放してしまふ。そこへ、夏侯惇は振り下ろした大剣の刃を返し、あえて偃月刀を狙って切り上げる。右手1本では夏侯惇の馬鹿力に対抗する事は出来ず、飛龍偃月刀はその名の通りに宙を舞い、地面に突き刺さった。

さらに追い討ちを掛ける夏侯惇。上に振り抜いた大剣の柄尻を、張遼の左肩目掛けて振り下ろす。その一撃は綺麗に鎖骨を捉え、張遼の耳に再び不快な音を響かせた。

「がつ……！」

悲鳴を上げた張遼は、左肩を押さええてうずくまる。そんな彼女の首筋に刃が触れた。

「張遼、大人しく降服しろ。それ程の腕をここで散らすのは惜しい。我らが主、曹操様のためにその力を奮え」

降服を勧める夏侯惇を、張遼は下から睨み付ける。

「アホめかせ。邪魔が入らんかったら、ウチの勝ちや。あんな卑怯な奴を飼つとる時点で、曹操の器もたかが知れとるわ！」

時間稼ぎが目的で一騎討ちを受けたのは確かだ。曹操に降るつもりなど全く無かった。だからと言って、戦前に取り決めた事を、たとえ口約束とはいえ、反故にする様な恥知らずな行為に走る張遼ではない。もし、正々堂々一対一の勝負に負けていたら、降服勧告に従っていただろう。だが、邪魔をされた。夏侯淵の独断だと思いつつも、夏侯惇に対して激しく失望はしていた。

一方の夏侯惇にも後ろめたい気持ちがある。たとえ自分が指示した事ではないとはいえ、だ。だから、約束を違えようとしている事に文句を言うつもりは無いし、曹操を罵倒されても耐えた。しかし、ここで張遼を見逃す訳にはいかなかった。自分と互角に戦える者を生かしておけば、将来の禍根となる。そう思い、夏侯惇は大剣を振り上げた。

「覚悟はいいな？」

「当たり前やろ。ウチは武人、戦場で死ぬ事こそ本望や」

夏侯惇が首を落としやすい様に、張遼は頭を垂れた。

『ウチの部下は、ねねの奴が何とかしてくれるやる。ま、ここを確保しとくんは無理やるうけど、恋ならナンボでもやりようがあるしな』

そして、まぶたを閉じる。

『あゝ、また、月ちゃん悲しませてまうわ。……せやけど、華雄もあれで寂しがりやし、1人きりにしとくんは可哀想、か』

そう考え、張遼は自嘲気味に笑った。だが、悔いはない。武人としての矜持を貫いたのだから。

「ぐわっ！」

辺りに大きな叫び声が響いた。だが、それは張遼の物ではない。目を開けた張遼の視界に、七星餓狼が落ちてくる。それに続いて赤黒い物が2、3滴垂れて大地にシミを作った。驚いて視線を上げてみれば、夏侯惇は両手で左目を押さえている。その手には赤い筋が走り、指の間からは、まるで眼球から生えてきたかの様に、矢羽が突き出ていた。

「姉者！？ 姉者！」

夏侯淵は転げる様に馬から降りると、弓を投げ出して夏侯惇へと駆け寄る。普段の冷静沈着な彼女らしくない、半狂乱と言ってよい程の取り乱し様である。

あまりの事に呆けていた張遼は、そんな夏侯淵の悲痛な叫びで我を取り戻した。本当に目から矢が生えるはずもなく、何者かが夏侯惇に向かって射掛けたのだ。

「一体誰や!? こんなふざけた真似したんは!」

激怒した張遼は、叫びながら振り返る。大声を上げたために肩と指に激痛が走るが、そんな事は気にならなかった。彼女の中には、助かった、などという思いは微塵も無い。あるのは、自分の矜持を汚された、という事だけだった。

あまりの剣幕に、彼女の副官ですら怯えている。そんな兵達の間を通り、1頭の馬が張遼へと近付く。馬上の人物の手には、騎射を行う時に使う短弓が握られていた。

「恋……? あれをやったんはお前なんか?」

怒りを隠そうともしない張遼に対し、呂布は平然と近付き首肯する。

「何でや! ウチは一騎討ちに負けてんねんぞ! それを曲げる訳にはいかんやろが!」

今度は首を横に振る。

「……先に勝ち負けをねじ曲げたのはあっち。邪魔が無ければ、霞が勝ってた」

「せやけど……」

張遼にもそれは分かっていた。だが、その事も含めて負けを認めたのだ。それに、夏侯惇を罵倒した手前もある。呂布の言葉を認めてしまえば、夏侯惇と同列になってしまう。それは、あまりにもみっともなかった。

「……華雄が生きてても、霞が死んだら悲しい」

「んな事言うたかて……、って、華雄の奴、生きとるんか!？」

「……翠がそう言った。」

呂布は再び首を縦に振る。張遼にとっては寝耳に水だった。驚喜の想いが体の内側から沸き起こる。と同時に、華雄が1人で寂しがつている、と考えた事を思い出し、恥ずかしさに身悶えた。

しかし、華雄が生きている事と一騎討ちの結果は別だ。心を動かされたものの、翻意にまでは至らなかった。

「……この勝負、分けにしておいてやる」

不意に背中から声を掛けられ振り向くと、夏侯惇が妹の肩を借りながら立ち上がろうとしていた。

「お前、大丈夫なんか!？」

敵でありながらも、思わず心配してしまう。その様子に、夏侯惇は脂汗を浮かべたままかすかに笑った。

「フンッ。この程度、傷の内に入らん」

右手を突き刺さっている矢に掛ける夏侯惇。その横では、夏侯淵が涙を浮かべて心配そうな顔をしている。次の瞬間、夏侯惇は自らの眼球ごと矢を引き抜いた。

大量に噴き出す血。悲鳴を上げる夏侯淵。絶句する張遼に、わずかに眉をしかめる呂布。それらに一切構わず、夏侯惇は引き抜いた眼球を自分の口へと運び、再び己の物とした。

「……張遼、次に会う時には、必ず決着を付けてやる」

「……ハッ、ええやる。今回は、痛み分け、つちゅー事で手打ちにしたる」

ここまでやられては、さすがの張遼も退くしかなかった。呂布の後ろに腰を下ろした張遼は、馬上から声を掛ける。

「夏侯惇！　こんな所で死ぬんやないで！」

それだけ言うと、張遼達は離れていく。兵達も2人に従い、董卓軍は全て虎牢関に撤退した。それを確認すると、夏侯惇は妹の腕の中で気を失った。辺りには、夏侯淵の慟哭だけが響くのだった。

第2章・洛陽編・第9話「虎牢関の戦い」(後書き)

という事で、第9話でした。

霞と春蘭、本文中に書いた様に、普通に戦えば原作通りに春蘭が勝ちです。ただ、この話では、翠や霞など一部のキャラは馬術の技量が飛び抜けている設定にしております。そのため、騎乗した状態なら霞の方がわずかに上になります。

また、原作と違い霞は曹操には降りません。霞1人欠けただけで、意外と人材難になる魏ですが、そこら辺は風や他のキャラに頑張ってもらおうと思います。

戦いはこの話で終わり、後は戦後処理になります。

第2章・洛陽編・第10話 洛陽入城

「愛紗ちゃん！」

関羽達が陣へと戻ると、すでに報告を受けていた桃香が心配そうな顔で駆け寄ってくる。その後ろには、諸葛亮と鳳統の姿もあった。桃香はそのまま関羽に抱き付く。

「大丈夫なの、愛紗ちゃん!？」

うつすら涙を浮かべて尋ねる。白魚の様な指が、呂布によって付けられた関羽の首筋のアザにそつと触れた。

「ええ、問題ありません。それより、申し訳ありませんでした。

この様な失態を演じてしまい……」

「何言ってるの！ 愛紗ちゃんが無事でいてくれるのが、一番大事なんだよ！」

桃香は目を剥き、愛紗の言葉を遮った。眉尻はつり上がり、普段の柔らかい雰囲気とは全く違う。その語勢に気圧されて、関羽も黙るしかなくなった。

「でも、本当に無事に帰って来てくれてよかった……。ご苦労様」

そう言っつて、いつも通りの温かみのある微笑みを見せ、関羽を優しく抱き締めた。こうして桃香の柔らかい体に抱かれていると、関羽の心は非常に落ち着いていく。だが、先程一刀の腕に抱かれていた時の様な安心感は無かった。

「桃香お姉ちゃん、鈴々だって頑張ったのだ。愛紗ばかりズルイのだ」

仲のよい姿を見せる姉妹に、その末妹が不満を訴えた。すっかり回復しているにもかかわらず、未だに彼女は一刀に背負われたままだった。

「うん、鈴々ちゃんもお疲れさま。ありがとう」

関羽から離れた桃香は、鈴々の頭を優しく撫でる。にやはは、と幸せそうに笑う鈴々を見ながら、そのまましばらく撫で続けた。まるで仲睦まじい親子の様な光景に、関羽の心はチクリと痛んだ。

「お姉様、皆は先に帰らせちゃったよ」

そこへ、兵達に指示を出し終えた蒲公英がやって来た。

「じゃあ、あたし達も帰るか。じゃあな、劉備。悪いけど、もうしばらく華雄の奴を預かっといてくれるか？」

翠が桃香に挨拶をしている横で、一刀は鈴々を背中から下ろした。とたんに、もつとおんぶしろ、と言わんばかりの不機嫌な顔になる鈴々。そんな彼女を宥める様に、一刀は鈴々の頭をポンポンと叩く。歳の離れた妹ができた様で、何となく嬉しかった。

「はい、任せて下さい。それと、2人を助けてくれてありがとうございます。ごぞいました、馬超さん。一刀さんと星ちゃんも、ありがとう」

桃香は3人に向かって頭を下げた。しかし、3人が3人共、大し

た事をした自覚が無い。何もしてないから、と翠が返したが、謙遜した訳では無かった。

「ええ、我等は何も礼を言われる様な事はしておりませぬ。そうであろう、北郷？」

一刀に話を振り、趙雲はニヤリと笑った。思わずドキツとする一刀。さっきの事を思い出し、わずかに顔が赤くなる。その様子を見た桃香は、頭の上にクエスチョンマークを浮かべた。

何かあったのか尋ねても、口ごもってはつきり答えない。不思議そうな顔をしている桃香に、何の悪意も無く鈴々が答えた。

「さつき、お兄ちゃんと愛紗が抱き合っていた、ムグ……」

「な、何を言っている、鈴々！ でたらめを言うんじゃない！」

関羽は顔を真っ赤にし、慌て鈴々の口を塞ぐ。離れた場所では、関羽と同じ位顔を赤くした諸葛亮と鳳統が、はわわあわわと呟いておろおろしている。少女達のそんな慌てふためく様を見て、元凶である趙雲は、肩を震わせながら笑いをこらえていた。

関羽からしてみれば、たとえ諸葛亮や鳳統には知られても、桃香にだけは知られなくなかった。いくら色恋沙汰に疎いとはいえ、桃香が一刀に好意を抱いている事位は気付いている。傷付けたかもしれないと思い、関羽は桃香の顔色をうかがった。

「よかった。愛紗ちゃんも、やっと一刀さんと仲良くなれたんだね。2人がどうやったら仲良くなれるか、私もずっと心配してたんだから」

関羽の思いは杞憂だった。一片の他意も無い眩しい笑みに、関羽は誤魔化そうとした己の行動を恥じる他なかった。

もう一方の張本人である一刀にも、今回の事を聞かれたくない人物がいた。今その人物は、彼の目の前で爛々と目を輝かせている。

「ねえねえ、どういう事なのか、たんぽぽにも教えてよ」

思わず一刀は蒲公英から視線を外す。だが、そう易々と諦める訳も無く、一刀の顔を下から覗き込んで二ヒツと悪戯っぽく笑った。

彼女に知られれば、どんな尾ひれを付けて話を広められるか、分かったものではない。一刀は助けを求めようと翠へ目配せするが、まだこの事を怒っているのか、そっぽを向かれてしまった。どうやって誤魔化そうか、と一刀はため息を吐いた。

『まったく、あいつは……』

一刀を突っぱねたもののやはり気になるのか、翠は横目で視線を送った。そうして、自分でも無意識の内に集中していたため、桃香が傍に寄って来ても、声を掛けられるまで気付けずにいた。

「馬超さん、本当にありがとうございました」

慌てて向き直った翠に対し、桃香は改めて礼を言くと、深々と頭を下げた。

「気にすんなって。趙雲が言った通り、あたし達は何もしてないんだからさ。それより、董卓が無事に逃げ出せたんだ。礼を言うの

はこっちの方だ」

少し照れた様子で、翠も頭を下げ返す。そうして顔を上げた2人の目が合うと、お互い声を出して笑った。

「……それでね、馬超さん。2人を助けてもらったお礼、というか、同じ目的を持って戦った仲間として、私の真名を預かって欲しいんです。……駄目、ですか？」

笑顔が一転、眉尻を下げた申し訳無さ気な表情になる。いきなりの事に驚いたものの、翠は桃香を安心させる様につこりと笑った。

「ああ、いいぜ。あたしの真名は翠だ。よろしくな、桃香」

「はい、よろしくお願ひします、翠さん」

再び笑顔に戻る桃香を、翠は手で制す。

「ちょっと待った。その敬語は止めてくれないか？ 後、さん付けもさ。こそばゆくなっちまうよ」

「……うんっ。じゃあ、改めてよろしくね、翠ちゃん」

少し居心地悪そうに頭を掻く翠に、桃香は満面の笑みを見せた。その様子を見て、蒲公英は一刀から手を放して2人の方へと駆け寄る。

「はい、たんぱぽも劉備さんと真名を交換したーい」

手を上げて元気に言う蒲公英にも桃香は笑顔を向ける。蒲公英の

追究を回避出来た事にホツとしながら、一刀は3人の様子を眺めていた。

翌日、持ち回りで先鋒を受け持った曹操軍は、虎牢関を労無く落とした。董卓軍は昨夜の内に虎牢関から撤退しており、無人となっていたためだ。それを知った袁紹は大層悔しがったが、すでに後の祭りであった。虎牢関を陥落させた手柄は、全て曹操のものとなったのである。

日が沈んだ後、曹操は虎牢関の城壁の上へと出た。虎牢関の表にも裏にも数多の篝火が揺らめいており、まるで天の川が地表に落ちたかの様である。彼女は虎牢関の裏手側、今は漆黒の闇に包まれている洛陽の方向を眺めていた。虎牢関を突破した事で安心したのか、兵の大部分は深い眠りに就いており、虫の声だけがかすかに耳に届く。

そんな静寂の中に、どれ程の間いたのだろうか。曹操は闇の中から声を掛けられた。

「華琳様、姉者ですが、命に別状は無いそうです。ただし、傷が深く出血の量も多いため、しばらくは安静にさせるように」と

「……そう。なら、貴方は春蘭の傍についてあげなさい。兵達は季衣に任せればいいわ」

いきなり声を掛けられたにも関わらず、曹操には微塵も驚いた様

子は見えない。正面を向いたまま命令を出すと、報告に来た夏侯淵は、申し訳ありません、とだけ言っつてその場を離れた。

再び1人きりになると、ホツとした様に表情をゆるめる。将兵の前では、夏侯惇が左目を射抜かれた事を聞いても、極めて冷静に振る舞っていた曹操であったが、心の内は激しく動揺していた。夏侯惇は曹操の部下、というだけでなく、従姉妹でもあるのだ。そして、何より彼女を深く愛していた。愛する者が死ぬかもしれない程の傷を負った事を知り、それでも平常心を保っていられる程、曹操は薄情ではなかった。

だが、普段は冷静な夏侯淵が見た事も無い取り乱し方をし、兵達に動揺を与えている。そんな状況では、曹操までが感情のままに動く訳にはいかなかった。こうして1人になり、夏侯惇の無事を聞かされた今、やっと彼女は自分の本心を表に出す事が出来たのだ。

「……フツ。情けないものね、華琳。大切な部下の片目と引き換えに手に入れた物が、この無人の虎牢関だけだなんて」

しばらくした後、曹操は自嘲しながら呟いた。そして、天を仰ぐ。

「……必ずや、この手に天下をつかんでみせるわ。とくと見ていなさい、私の歩む覇道を！」

空に浮かぶ月へと手を伸ばし、それを奪い取るかの様に拳を握る。小さな声であったが、その言葉には強い決意がみなぎっていた。

連合軍が虎牢関を陥落させてから2日。洛陽の城壁をはつきりと視認出来る距離にまで近付いた連合軍内では、またもや先鋒を決めるための軍議が行われていた。しかし、今回は初めから袁紹が名乗り出た。ここまで何の手柄も立てられず、ただいたずらに損害を出しただけ。さすがに彼女にも焦りがあるのだろう。諸侯からの反対も無く、話がまとまりかけた時、1人の兵が報告に入ってきた。

「皇帝陛下よりの御使者で、董承と名乗られる方がお見えですが、いかがいたしましたしょう」

この報告を聞いて、翠や桃香達を除くほとんどの諸侯は違和感を覚えた。あくまで反董卓連合軍であり、漢帝国に刃を向けた訳では無い。大義名分とはいえ、漢帝国を救うために戦っているのだ。である以上、敵対している董卓からならともかく、献帝から使者が来るのはおかしかった。可能性があるとするれば停戦の仲介だが、完全に時期を逸してしまっている。

結局、いくら考えてみたところで分からない。献帝からの使者を追い返す訳にもいかず、董承は天幕へと招き入れられた。

簡単に口上を交わすと、すぐに本題に入る。董承の後に続いていた2人の従者は前に進み出て、大事そうに抱えていた箱を開けた。その中に入っていたのは生首だった。まだ幼さの残る少女の生首を、それぞれの箱から1つずつ取り出す。いきなりの事に諸侯が呆気に取られていると、

「これは、董卓とその軍師、賈馱の首級でございます」

と董承が話し出した。彼が言うには、連合軍を迎撃するために呂

布達が洛陽を出た際に、献帝一派が2人の首級を挙げた、との事だった。さらには、主君を失った董卓軍は四散。虎牢関から戻った呂布達も行方をくらました事を伝える。

この話をおかしいと感じた者は少なくなかった。現実には、董卓は暴政を敷いていないのだから、献帝が董卓を取り除く理由が無いのだ。だが、誰もそれを指摘する事が出来ない。指摘してしまえば、連合軍の掲げる大義を自分達で否定する事になるからだ。

それにこの話、よくよく考えてみると、それ程辻褄が合わない話でもなかった。董承は献帝の祖母であり、養母となっていた董卓の甥である。つまりは、献帝の外戚だ。善政を敷く董卓と、私腹を肥やそうとする外戚との間で対立があった可能性は充分にあった。

「董承さんとおっしゃいましたわね。よくやってくれました。これで、後は洛陽に入城するだけですわ」

事の裏側など全く考えた様子の無い袁紹。彼女は立ち上がると、片手を腰に、もう片方の手を口元に当てていつものポーズをとる。そして、高らかに笑い声を響かせようとした瞬間、曹操によって制止されてしまった。

「待ちなさい、麗羽。董承、その首、改めさせてもらえる?」

「なっ……! 陛下の申された事を疑うつもりか!??」

「そうではないわ。ただ、董卓軍はあまりにも鮮やかに撤退している。ひよつとしたら、私達を洛陽に誘い込もうとしているのかもしれない、そう思っただけよ。……それとも、改められたら困る事でもあるのかしら?」

隣で激しくむせている袁紹をよそに、2人の話は進んでいった。こう言われては董承も断る訳にはいかず、それ以上反論する事はしなかった。

「馬超、貴方は董卓の顔を知っているのかしら？」

「ああ、間違いない。これは、董卓と賈馱の首だ」

曹操をはじめとして、連合軍に参加している諸侯のほとんどが董卓の顔を知らなかった。同じ涼州の馬超ならあるいは、という思いで尋ねられた問いに対し、翠は即答した。だが、曹操はまだ腑に落ちないものを感じていた。

「劉備、貴方のところの関羽が、董卓軍の将を捕虜にしていたわね。その者をここに連れて来なさい」

それから30分程で、関羽と数人の兵に囲まれた華雄が天幕に入つて来た。もちろん丸腰で、手枷をはめられている。そんな彼女の瞳に飛び込んで来たのは、テーブルの上に置かれた生首だった。

「……と、董卓様？ ……董卓様！」

カッと目を見開いた華雄は、董卓の名を叫びながらテーブルへと駆け寄り、枷をはめられたままの手でその首を抱き締めた。その場に崩れ落ち、人目もはばからずに大粒の涙を流して何度も董卓の名を呼ぶ。忠義に厚い華雄の慟哭だった。その様を見て、曹操の中の疑念も薄れていくのだった。

「フンッ、もう十分でしょう。……猪々子さん」

文醜は華雄に近寄ると、未だに泣き叫ぶ彼女の胸から無造作に生首を引き抜いた。突然の事にはたと泣き止み、華雄は文醜を睨み付ける様に見上げる。薄ら笑いを浮かべ、まるでバッグを持つかの様に髪をつかんで生首をぶら下げる文醜の姿に、華雄の怒りが爆発した。

「うおおっ！」

立ち上がりながら文醜のみぞおちに頭をめり込ませる。その威力で文醜がよろめいた隙に、後ろにいた兵の腰に下がる剣の柄をつかむ。今度はその兵を蹴り飛ばし、華雄の手には抜き身の剣が残った。

「袁紹ーっ！」

そう叫ぶ華雄の瞳には、復讐の炎が燃えている。袁紹の首級をあげるべく、華雄は片足をテーブルの縁に掛けた。このまま一気に、そんな彼女の思いは、しかし叶う事は無かった。

華雄がその体をテーブルに上げようとした瞬間、後ろにグイと引かれた。不安定な体勢だった事もあり、華雄は大きく後ろに飛ばされてしまう。

「何をしているんだ、貴様は！」

華雄の襟首をつかんで投げ飛ばした関羽は、偃月刀を鼻先に突き付ける。こうなってしまうえば、華雄はこれ以上暴れる事が出来なかった。

「ま、まったく……。早くその者を連れて行きなさい」

かなり距離があつたにもかかわらず、袁紹はだいぶ肝を潰した様だ。椅子からずり落ちそうになつた体を直しながら、犬でも追い払う様に手を振っている。関羽はそんな袁紹に一礼し、怒りの収まらない華雄を連れて天幕の外へと出た。

「……それにしても、見事な演技だつたな」

天幕からかなり離れた位置まで来た所で、関羽は華雄にささやいた。

今、関羽が言った通り、華雄の怒りは演技だつた。そもそも、董卓と賈馱とされていた首は、彼女達のものではない。最近、事故で死んだ歳の近い少女の遺体を使ったのだ。写真も無いこの時代では、董卓を見知っている人物がそうだと言えば、誰でも本人に仕立て上げる事が出来た。

董卓達が死んだ事にしたのは、後の追及をかわすために琥珀が考えた事なのだが、使者の人選などの細かい部分は賈馱が考えていた。前もって話を聞いていた一刀は、華雄に首改めの役が回る可能性を考え、しっかりと打ち合わせをしておいたのである。彼も関羽と同じく、名演技だと感じていた。翠の様な大根でなくてよかつた、そう思っていた。

「主のためなら、私の名などどうでもよいからな。それに……、貴様が止めねば、本気で奴の首を落とすつもりだつたのだがな」

そう呟くと、華雄はほんの少し口元をゆるめる。その顔は、どこか満足気だつた。

翌日、反董卓連合軍の先陣を切り、袁紹は意気揚々と洛陽に入城した。輿に乗りながら、彼女は皆が自分の行いを崇めているものだと思っていた。自分の名声が四海に広まった、と。

しかし、実際にはそうではなかった。董卓が来てからというもの、治安はよくなり、経済も安定していた。洛陽の民にしてみれば、救世主の様な存在だったのだ。その董卓を追い出した反董卓連合軍に対し、彼等が悪印象しか持たないのは当然だった。ましてや、先頭で高笑いをしている袁紹への評価は、地の底よりも低いものとなっていた。それに気付かない袁紹は、洛陽の市中をいつまでも練り歩き、その悪名をどこまでも広めていくのだった。

反董卓連合軍が洛陽に入城してから2日後、すでに一部の諸侯は自らの領地への帰り支度を始めていた。洛陽の城壁外には馬騰軍と劉備軍、公孫賛軍の姿があった。その片隅で、一刀、諸葛亮、公孫賛の3人が竹簡を見ながら会話をしている。

「北郷さん、目録よりも多いですが？」

竹簡と目の前に積まれた物資を見比べながら諸葛亮は尋ねた。3人が行っているのは、董卓救出の協力を要請した時に約束していた見返りの受け渡しである。

「それは、華雄の身柄を引き受ける代わりだよ。ほんの少しだけ」

華雄と交換で差し出されたのは、馬50頭だった。元々、予備として連れてきた馬である。騎兵が中心の馬騰軍に所属している一刀からしてみれば、釣り合いがとれていない様な気がしていた。だが、貧乏な劉備軍の台所を預かる諸葛亮にすれば、かなりありがたかった。

そもそも大陸の東端にある青州では、同じく西端にある涼州の良馬など、いくら金を積んでも易々と手に入る物ではない。部隊に組み込んで戦力の増強を図るもよし、売却して金に変えるもよし、そう考えていた。

「なあ、北郷。私が言うのも何だけど、こっちは桃香のこと違って、ほとんど何もしてないぞ。それなのに、いいのか？」

今度は公孫贇が尋ねてくる。その顔は、かなり申し訳無さそうだ。

「そんな事無いだろ。趙雲がいなかったら、関羽も鈴々も呂布に殺されていたかも知れないんだから」

やっぱり私じゃないのか。そんな事を思い、公孫贇は軽くため息を吐く。

「それに、例え何もしてなかったって、約束は約束だ。それが口約束であっても、ね」

約束を守る。一刀にとっては当たり前前の事だが、諸侯が互いの動

向をつかがい牽制し合うこの時代において、その誠実さは稀有であった。しかし、だからこそ他者の信頼を手に入れる事が出来る。諸葛亮も、そんな一刀の事を少しだけ信用してみよう、と思った。

そんな彼等の耳に、少し離れた所から喚声が届く。そちらに目を遣ると、3軍の兵達が人垣を作っていた。その中では、翠と鈴々が一騎討ちを行っている。人垣のため、一刀には結果は分からなかったが、かすかに鈴々の上機嫌な声が聞こえた。

「にやはは。鈴々の勝ちなのだ」

人垣の中では、尻餅を付く様に倒れた翠に向け、鈴々が蛇矛を突き付けていた。

「く〜っ！ けど、まだ2勝2敗。次で決着だからな、鈴々！」

「へへ〜ん。鈴々は、もう翠には負けないのだ」

悔しそうな翠とは対称的に、にこやかな表情をした鈴々。余程馬が合ったのか、2人はいつの間にか真名を交換していた。

意気揚々と再び武器を構えた鈴々だが、いきなり後ろから耳を引っ張られた。かなり強く引っ張られ、彼女の体はつま先立ちになっ
てしまう。

「まったく、何をしているんだ、お前は」

鈴々の耳を引っ張っていたのは関羽であった。自由を奪われた鈴々がしばらくもがいていると、関羽は大きいため息を吐いてからその手を放す。

「朱里の確認が終わったらすぐに発てる様、準備をしておけ、と言ったろう。それはどうしたのだ？」

引つ張られて真つ赤になった耳をさする鈴々を、関羽が怒気を隠そうともせずに見下ろしている。

「そ、それは雛里が……」

「雛里には、桃香様を補佐して全軍の指揮を執る様に伝えてあるが？」

関羽の放つ威圧感に、鈴々の小さな体はさらに縮こまっていく。ついには観念した様で、分かったのだ、と不満顔で呟いて答えると、のっそりとその場から離れていった。その背中を見ながらもう一度ため息を吐くと、関羽は視線を翠へと移す。敵意を含む様な鋭い目付きでわずかの間睨むと、翠が何かを言う前に振り返ってしまう。その先には、華雄がすでに枷を外された状態で立っていた。そのまま関羽の脇を通り、翠の方へと近付く。

「すまなかつたな、関羽」

「私は約定に従っただけだ」

表情を柔らかくして礼を言った翠に対し、関羽も返事はつっけんどんではあるが、幾分軟化した顔で答えた。その後で、翠の隣に立った華雄に向かい、神妙な面持ちで頭を下げる。

「……華雄よ、すまなかつたな」

だが、華雄には関羽が謝る理由が分からなかった。お互いに、自分の信念に基づいて戦った結果だ。行き違いがあつたとはいえ、謝罪する理由にはならない。しかし、関羽が謝つたのはそこではなかった。

「私は思い違いをしていた様だ。貴公程に忠節に厚い者を、私は見た事がない」

忠義を褒められたのが嬉しかったのか、訝しげな表情だった華雄の顔は、得意気な笑みへと変わる。一方の関羽は、申し訳無さそうな表情から、いつも通りの引き締まった顔に戻った。

「それで、だ。もしよければ、私と真名を交換してもらえないだろうか？」

華雄の目を真っ直ぐに見つめ、関羽は頼んだ。彼女は、きっと華雄も同じ思っているはず、と勝手に思っていた。だが、一瞬驚いた顔をした後、華雄は目を逸らしてしまう。

「……私とは、真名の交換は出来ない、と？」

「いや、そういう訳では無いのだが……」

失意の中に少しの怒りが混ざった関羽の言葉に対して、華雄は珍しく歯切れ悪く答えた。困った様な、迷っている様な感じで言葉を探す華雄。だが、直情型の彼女は考えれば考える程、自分の心の内を上手く口に出れなくなる。2人の間に微妙な空気が流れ始めた。

「悪いな、関羽。華雄は真名が無いんだ」

そう言って口を挟んだのは、側にいた翠だった。

真名は産まれた時に親から付けられるものである。しかし、姓や名、字とは違い、人前で呼ばれる事はほとんど無い。そのため、死別したりして物心つく前に親と別れてしまつと、真名はあるのに本人が知らない、そんな事態が起こり得るのだ。

華雄の過去を察し、関羽は再び謝罪する。華雄は何かを言おうと口を開きかけたが、しばらく躊躇して止めてしまふ。そして、いや、と呟く様に答えただけで、関羽とは目を合わせる事をしなかった。

物資の受け渡しは、それから1時間もしない内に終了した。主要な人物が集まり挨拶を交わす。中でも桃香は大層名残惜しいらしく、今にも泣き出しそうだった。

そんな彼女達に背を向けて、関羽は1人、兵の指揮を執っていた。といつても、すでに発つ準備は出来ている。今はただ、待機しているだけだった。そこへ、馬に跨がったままの趙雲が近付いて声を掛けた。

「良いのか？ 北郷に何も言わず」

「な、何を言う！？ 奴に話など、ある訳が無かるう！」

顔を真っ赤にし、むきになって答える関羽。その反応が予想通りだったのか、趙雲は笑いを噛み殺しながら、それはすまなかつたな、

とだけ言って馬首を返した。背中を向けた趙雲の肩が小刻みに震えているのを見てからかわれた事に気付き、気恥ずかしさと怒りが込み上げて来る。

「うるさいっ！ 静かにせんか、お前達！」

普段は決して見せない一面を目の当たりにしてざわつく兵に対し、関羽は八つ当たり気味に一喝した。一瞬で水をうった様に静まり返る。まったく、と呟きながら、関羽は桃香の方を横目で盗み見た。その瞳に映るのは彼女の姉か、それとも一刀か。それは本人にしか分からない事だった。

「色々大変だと思っけど、頑張ってね」

一刀は桃香の瞳を見つめながらそう言った。これから先に訪れるであろう苦勞の連続を思い、自然と彼の口からこぼれた言葉だった。

「大丈夫だよ。私には皆がついてるから」

桃香は隣にいる鈴々の頭を撫でながら答える。その顔は誇らしげだ。撫でられている鈴々も胸を張っている。

諸葛亮と鳳統がいる以上、一刀の知る歴史通りにはならないかもしれない。ひよっとしたら、曹操ではなく桃香が袁紹を倒す可能性すらあるだろう。それならそれで、一刀は構わなかった。むしろ、彼からしてみればその方がありがたいのだ。

頑張つてね、その言葉をもう一度繰り返し、一刀は桃香と別れる
のだった。

第2章・洛陽編・第10話〈洛陽入城〉（後書き）

という事で第10話でした。

読み返してみて、何だか詰め込みすぎた感じがします。

前半は、仲間と共に理想を目指す桃香と、先頭に立って理想に向かう華琳の対比のつもりで書いてみました。

月を死んだ事にするのは、華琳が張3姉妹を自分の下に置いた時に使った手と、基本的には同じです。なるべくおかしくならないように気を付けたつもりですが、どうだったでしょうか。

次回、久しぶりに舞台を涼州に戻し、第2章は終了します。なお、来週はいつもより1日早く、日曜の夜に投稿する予定です。

第2章・洛陽編・第11話 満月

洛陽を発った馬騰軍。彼等が西涼を離れてから、すでに2ヶ月が経過していた。やっと故郷に帰れるとあり、兵達の表情は一樣に明るい。あれ程大きかった洛陽の街もみるみる小さくなり、今では地平線の向こうに姿を消してしまっている。

休憩も終わり、再び駆け出した直後、蒲公英は一刀の傍へと馬を寄せた。いつも見せるはずらっぱい笑みに、一刀は若干身構えた。この笑みを見せる時は、大抵引つ掻き回されて悪い目に遭うからだ。

「もう、たんぼぼで良ければ、いくらでもしてあげるのに」

いきなりそう言われても、一刀には何の事かさっぱりだった。ポカンとした顔をする一刀に向かい、蒲公英はさらに続ける。

「星姉様から聞いたよ。関羽さんと熱い抱擁を交わしていた、って」

「なっ……！」

一刀の口から思わず声が漏れた。一体いつの間に趙雲と真名を許し合う仲になったのかは知らないが、一番知られたくない人物に知られてしまったのは確かだった。蒲公英の口元に手を当てて笑う顔が、趙雲の人を小馬鹿にした様な笑みとダブって見えた。

このやり取りが聞こえていたのだろう。その時の事を思い出した翠が、少し離れた位置から一刀を睨む様に見ていた。言い訳を考えるのに必死な一刀は彼女の態度に気付かない。逆に、それに気付い

た蒲公英は、翠まで巻き込んでからかい始める。

「たんぽぽなら抱擁だけじゃなく、それ以上してもいいんだよ？
それとも、たんぽぽよりもお姉様の方がいい？」

「なつ、何を言ってるんだ、たんぽぽっ！　こそ、そんな事、出
来る訳無いだろ！」

いきなり話を振られた翠は、先程の一刀以上に狼狽する。その顔
は耳まで真っ赤だ。

途端に賑やかになる3人へ向かい、部隊の先頭を駆ける女性が大
声を上げる。

「何をしているんだ、お前等！　もたもたしている暇など無いの
だぞ！」

それは華雄だった。あばらにヒビが入っている彼女だが、まった
くそんな様子は感じられない。本来なら、痛みで馬を走らせる事な
ど出来るはずはないのだ。だが、西涼に帰れば董卓に会える、との
思いが彼女から痛みという感覚を忘れさせていた。

洛陽から武威までは、多少急いだところで到着が早まる様な距離
ではない。実際、来る時は1ヶ月程の時間を要していた。その時と
違い最短ルートを通れるとはいえ、それでも20日間位はかかるだ
ろう。しかし、それを言ってお聞き華雄ではない。3人は大人しく彼
女の言葉に従い、馬の速度を上げるしかなかった。

「やっと、帰って来たな……」

武威の街が遙か彼方に見える小高い丘の上で、翠は感慨深げにそう呟いた。3ヶ月もの長い間この街を離れたのは、彼女にとって初めてだった。その横では、こちらも長期間離れるのが初めての蒲公英が、翠と同じ安心した様な微笑みを浮かべていた。そして、もう1人。一刀も2人と同様にホツとした表情を見せている。

小さな頃からここで暮らしている翠達とは違い、一刀はまだ数ヶ月しか暮らしていない。それでも武威の街は、一刀にとって故郷と呼べる存在となっていたのである。

ここから見える武威の街は、3ヶ月前と変わっていない。だが、吹き抜ける風はその時とは違い、わずかに冬の匂いはらんでいた。

武威の城中、ある一室の扉が勢いよく開け放たれた。

「ただいま、母様！」

それと共に翠の元気な声が飛ぶ。彼女の視線の先には、椅子に腰掛ける琥珀の姿があった。娘の帰りを待ちわびた母親の顔を見せる琥珀。しかし、安堵の表情はすぐに消えてしまい、呆れた様な顔へと変わった。

「おかえりなさい、翠。……にしても、もう少し静かに入って来れないのかしら？」

まったく、といった感じのため息を吐く。帰還した早々小言をもらった翠の顔は、げんなりしつともどこか嬉しそうだった。

いくら一騎当千の猛将とはいえ、中身はまだ17歳の少女である。威厳と優しさを併せ持つ母に会えて、ホツとしているのだろう。それに、武人として尊敬する母の名代として、多くの諸侯と交渉を持ったのだ。少なからず重圧を感じていたはずだ。

「たんぼぼもよくやってくれたわ。それに、一刀君も。2人のお守りは大変だったでしょう？」

その言葉に、一刀は、いえ、とだけ答え、曖昧な笑みを見せた。2人を差し置いて独断専行したのは彼の方で、むしろ彼女達の方が苦勞をしたろうから。

「……馬騰殿、月様はどちらに？」

先程からキョロキョロと部屋の中を見回している華雄が尋ねる。確かにその通りだった。張遼と呂布、陳宮の姿はあるが、董卓と賈馱はここにはいない。翠達も言われて初めて気が付いた。そして、もう1つ気付く。董卓の名前が出た瞬間、そこにいる者達の表情が沈んだのだ。

「おい、張遼！ どういう事だ！？」

華雄も回りの雰囲気が変わった事に気付いたらしい。一番近くにいた張遼に対し、つかみかからんばかりの勢いで問い詰める。しか

し、張遼は視線を逸らして答えようとはしない。ラチが明かない状況に、痺れを切らせた華雄が肩をつかんだ時だった。

「待ちなさい、華雄。月のところに案内するわ。翠、貴方達も」

琥珀はそう言って立ち上がる。険しい表情で華雄達の脇を通ると、そのまま扉まで歩き、振り返る事なく部屋から出ていってしまう。その後続く華雄と翠達。さらには、張遼達までもが共に部屋を出た。

琥珀の背中を見ながら歩く一刀には、今のこの状況は意味が全く分からなかった。董卓と賈馱は無事に洛陽から脱出出来た、と聞いていた。しかし、この雰囲気は2人に何かあったとしか思えない。その隣では、翠と蒲公英が同じ様に神妙な面持ちでいる。はつきりとした事は分からないが、ただ事ではない空気は感じている様だ。

やっぱり俺はいいです。そう言って逃げ出したい衝動に駆られるが、とても言い出せる訳も無く、一刀は黙って付いて行く事しか出来なかった。

そうこうしている内に、琥珀はある部屋の前で足を止めた。そこは賓客や中央からの使者など、特別な相手を泊めるための客室だった。取手に手を掛けた後、琥珀はわずかに間を置いてから扉を開けた。

大きな窓からは陽光が射し込み、ベッドの天蓋に反射してキラキラと光を放つ。備え付けられている調度品も、一目見て高価だと分かるものが置かれていた。

天蓋付きのベッドの脇に置かれた椅子に座る少女は、扉の開く音

で振り返る。そこにいるのが琥珀だと気付くと、少し慌てた様子で立ち上がり礼をする。琥珀はそれを手で制し、座らせた。

「……どうかしら、詠？」

部屋の中にいたのは賈馱だった。だが、一刀は以前会った時の様な気丈な感じを受けなかった。覇気が無く、どこか疲れた感じの賈馱は、いえ、とだけ言って首を横に振り、再びベッドの方へと向き直ってしまう。

琥珀に促され、ベッドに近づく華雄。その足取りは重く、後ろに立つ一刀にも緊張が伝わってくる。

「……ゆっ、月様っ!？」

ベッドの脇に立った華雄は、ビクツと肩を震わせた後、董卓の名を叫んでその場に崩れ落ちてしまった。そのままベッドに手を掛けるんだれる。一刀からは、わずかにその肩が震えているのが分かった。その様子に、彼等はそれ以上近付けなくなってしまう。

「……どういう事だ、賈馱。一体これは、どういう事なんだ!」

「華雄將軍も知っているはずですよ。連合が結成された頃から、月があまり食べ物を口にしなくなった事を」

ベッドに手を掛けたまま、隣にいる賈馱を見上げる様に華雄は睨む。一方の賈馱はベッドの上に視線を落としたままだ。

董卓が賈馱の反対を押し切ってまで何進の檄文に応じたのは、乱れた政治によって苦しむ民を救うためだ。宦官と外戚の権力争いを

早期に終結させる事が、庶民の暮らしの安定に繋がると考えたからだ。宦官十常侍と外戚何進は図らずも共倒れとなり、これで平穏な日々が訪れる。反董卓連合軍が結成されたのは、まさにその矢先の事だった。

自分の存在が大規模な戦の引き金になった。この事實は、彼女の心に大きな影を落とす事となる。無論、彼女に非がある訳では無い。責められるとすれば、私欲に溺れ、無為な戦を起こした連中であるし、そもそも、漢帝国の力と威信をここまで落とした者達だ。しかし、その事をいくら伝えてみたところで、董卓が自分を苛めるのを止める事はなかった。

優しいが故に自分を追い詰めてしまった董卓。そのせいで次第に食が細くなり、西涼に着いてからはほとんど何も口にしなくなっていた。

「なぜだ……。なぜ、お前が付いていながら……」

「……ボクだって、何とか出来るならしたいわよ！ でも、月が食べてくれないんじゃ、どうしようも無いじゃない……」

当然、この時代に点滴の様な物は無い。董卓の傍にいても、賈馱には日に日に衰弱していく彼女をただ見ている事しか出来なかった。彼女の瞳からは無念の涙が零れている。それを見ては、華雄もそれ以上口を開く事は出来なかった。

「……さん……？」

不意に声が聞こえ、その場にいる全員が顔を上げた。今にも消え入りそうな、蚊の鳴く様な小さな声。そして、誰よりも華雄が耳に

したかった人物の声だ。

「ゆ、月様……！」

今まで寝ていた董卓は、賈馱と華雄の会話で目を覚ました。満足に力の入らない体で、ゆつくりと上体を起こす。そこで初めて一刀の視界に董卓の姿が映った。

「……っ！」

一刀は思わず息を飲んだ。董卓の肌はカサカサで髪はボサボサ、頬はすっかりこけており、何よりその瞳からは生気が感じられない。以前会った時の可憐な姿はそこには無かった。

「月様、何かを食べて頂かなければ、このままでは……」

華雄は泣きながら董卓の体にすがり付く。何としても董卓を助きたいと願う華雄だが、その想いは届かない。董卓は感情の感じられない顔で首を横に振った。

「……私のせいで多くの方が亡くなりました。私は、その罪を償わなければならぬ。……私だけが生き残る訳にはいきません」

淡々とした口調で語られる董卓の決意。それを聞いた華雄は、ベツドに突っ伏して董卓の名をつわ言の様に繰り返しながら激しく泣き叫んだ。

すでに幾度となくこの問答はしたのだろう。賈馱や琥珀達は取り乱す事は無い。ただ、何も出来ない己の不甲斐なさに、苦虫を噛み潰した様な顔をしていた。翠と蒲公英も、変わり果てた董卓の姿に

ショックを受け、何も言葉を発せなかった。

そんな中、一刀だけは激しい憤りを感じていた。もちろん、董卓をここまで思い詰めさせた袁紹に対しての怒りはある。だが、そのほとんどは董卓へのものだった。拳を震わせたままベッドへ近付くと、華雄の肩を後ろから取って引き剥がす。何事かと驚きの表情を見せる一同をよそに、一刀は董卓の胸ぐらをつかむと、右手で痩せこけた頬を張った。かなり加減はしているが、それでもパァンという乾いた音が響く。

「……き、貴様っ！」

「……あ、あんた、何を！」

突然の事に思考が付いていかなかったのだろうか。華雄と賈馱は多少の間の後で激昂する。一刀につかみかかろうとする華雄を琥珀が慌てて羽交い締めになると、それに呼応するかの様に、鷹那は賈馱を後ろから抱えて止めた。

普段と違う様子の一刀に賭けてみよう。私達が万の言葉を掛けても届ける事が出来なかった想いを、彼ならば届けられるかもしれない。天の御遣いである一刀ならば。

琥珀のそんな心の内を気にする様子も無いまま、一刀は董卓の両肩をがっしりとつかんだ。

「ふざけるな……、ふざけるなよ！ お前が何をしたって言うんだ！ ただ、皆が幸せになる事を願っただけじゃないのか！ それのどこが罪だ！？」

「……私が浅はかだったから、詠ちゃん達に迷惑をかけて、多くの人を死なせる事になったんです。私にはもう、生きている権利が無いんです」

頬を張られて横を向いたまま、董卓は視線を合わせようともしない。だが、一刀はお構い無しに続けていく。

「そうだよ。お前のために多くの人が戦ったんだ。俺達も、賈馱や張遼達もだ。けど、皆が何のために戦ったと思ってるんだ？」

「……」

「皆、お前を助けるために戦ったんだぞ！ お前を生かすために、多くの人が死んでいったんだ！ その人達の想いを、董卓、お前は無駄にするのかよ！？」

董卓の肩がわずかにビクツと揺れる。その肩をつかむ手に、一刀はさらに力を込めた。

「お前は思い違いをしてる。董卓、人間には生きる権利なんて無い。あるのは、生きる義務だけだ。それに、死んで償える罪なんてありはしない」

董卓はゆっくりと首を回し、一刀の瞳を見つめる。その目には、かすかにだが生気が戻っている様に感じられた。

「本当に贖罪を望むのなら、生きる！ 生きている限り、生きる事を諦めるな！ お前のために死んでいった人の分まで、精一杯生きるんだ！」

「……いい、んですか？ ……私は、生きていてもいいんですか？」

上目遣いで一刀を見上げる董卓。助けを求める様な、不安そうな瞳だ。

「当たり前だ。もし、お前が生きるのを邪魔する奴がいたら、俺が守ってやる。だから、生きろ！」

力強く言い放ち、一刀は董卓を抱き締める。

「俺も、皆も、君に生きていて欲しいんだ。だから、死にたいとか、生きていられないとか、そんな悲しい事は言わないでくれ……」

それまでとは違い、優しい口調で董卓の耳元に語りかける。そんな一刀の頬を一筋の涙が伝う。

その瞬間、董卓の瞳からも大粒の涙が零れ落ちた。溢れ出る感情を抑える事無く、少女は一刀の腕の中で大声を上げて泣くのだった。

董卓が泣き疲れて眠ってしまうと、彼女は華雄と賈馱に任せ、一刀達は部屋から出た。

「痛っ！」

部屋を出た途端、背中を思い切り叩かれた一刀。バシンと大きな

音が響き、衝撃で2、3歩前によろけてしまう。叩かれた場所を押さえながら痛みをしかめる彼の横を、嬉しそうな笑顔の琥珀が通り過ぎていく。その目は真つ赤に充血していた。

「ようやった！ ホンマに偉いわ、一刀！」

と、今度はすこぶる上機嫌の張遼に後ろからヘッドロックの様にして押さえ込まれ、髪をクシャクシャにされる。彼女は胸にサラシを巻いて法被を肩にかけるだけ、という露出の多い格好だ。そのため、柔らかくてスベスベした肌に顔を押し付けられる事になり、とても気持ちがいい。だが、それを享受していると大変な目にあう事を散々学習してきた一刀は、しばらくこのままでいたい気持ちを押し殺し、必死にもがいて頭を抜いた。

「いきなり何するんだよ、張遼」

手櫛で髪を整えながら、一刀は張遼に向かって文句を言う。内心ドキドキしているのを覚られない様、不満顔で、だ。だが、言われた側の張遼も頬を膨らませ、一刀以上に不満そうな顔を見せている。

「そない他人行儀な呼び方せんでもええやん。一刀やったら真名で呼んでくれて、全然かまへんよ」

そう言つと、今度はニカツと笑う。まるで猫の目の様にクルクルと変わる表情に、一刀の頬も自然と緩んだ。

さらに、袖を引っ張られた感覚に振り返ってみれば、呂布が一刀の服を摘まんでいた。

「……恋の事も、真名で呼んでいい。ねねも……」

「む……。恋殿が言うなら、ねねの真名も呼ぶ事を許してやるのです」

しばらく不満そうに低く唸っていたものの、結局は呂布に従い、陳宮も一刀に真名を許してくれた。

その日の夜、一刀は董卓の部屋の扉を叩いた。こんな時間に女性の部屋を訪れるのはどうかとも思ったのだが、様子が気になってしまい眠れそうにない。賈馱が華雄はいるだろうし、最悪、侍女の一人もいるはずだ。彼女の様子を聞ければ十分。一刀はそんな思いだった。

ノックの後しばらくして、部屋の内側から扉が開かれる。案の定、その隙間から顔を出したのは賈馱だった。

「あんた、何の用なの？」

その声には明らかに棘がある。そうして、一刀は賈馱に嫌われていたらしい事を思い出した。琥珀の誕生パーティー以来会っていない上に、昼間、張遼達に真名を許してもらった事に浮かれ、すっかり忘れていたのだ。

「……董卓の様子が気になったんだけど、どう？」

きつい目付きで眼鏡越しに見上げる賈馱に、一刀はわずかに気圧

されていた。

「もう大丈夫だと思うわ。少しだけ粥を食べて、今は寝てるのよ」

賈駆は一旦部屋の奥を見ると部屋から出た。後ろ手に扉を閉め、一刀の正面に立つ。薄暗いためにはっきりとは分からないが、その顔には朱が差している様に見えた。

「……月を助けてくれて感謝してるわ。ボクじゃあ、もうどうしようもなかったから」

少しうつむき加減で恥ずかしそうに礼を言う。先程とは違う雰囲気。賈駆に、一刀は何だかむず痒くなり、彼女から視線を外した。

「……それで、あんたにボクの真名を預けようと思うの」

「えっ！？ 賈駆の真名を！？」

驚きのあまり、思わずそのまま聞き返してしまう。それ程までに、賈駆の言った事は意外だった。

「か、勘違いしないでよ！ 別に、あんたを認めた訳じゃ無いんだから！ ボクと月は、公には死んだ事になっている以上、もうこの名前を使えない。真名だけで生きていくしかないの。そ、それだけなんだから、変な勘繰りとかしないでよね！」

真っ赤になって怒鳴りながら捲し立てると、賈駆は勢いよく扉を閉め、部屋の中へと戻ってしまう。1人残された一刀は、しばらくその場で立ち尽くしていた。

「鷹那、こつちよ」

月明かりに照らされている中庭を歩く鷹那は、そんなのんきな声をかけられた。しかし、声の主を探そうとはしない。なぜなら、その声は、彼女の向かう先である東屋にいる人物から掛けられた物だったからだ。

そろそろ床に就くため、寝間着に着替えようとした鷹那の部屋を侍女が訪れたのは10分程前。中庭で琥珀が呼んでいる事、そして、すでに軽く出来上がっている事を伝え、侍女は下がった。

着替えを中断した鷹那は、部屋の外に出掛けたところで足を止めた。昼はともかく、朝晩は結構冷える。間違っても風邪を引かない様、自分と琥珀、2人分の肩掛けをタンスから取り出すと、改めて部屋を出た。

そうして東屋へ来てみれば、鷹那が危惧した通り、琥珀は昼間と変わらない服装で酒を飲んでた。部屋の中で飲む様に促そうと近付くが、すぐに思い直す。久しぶりに良い酒を飲んでいるのだと、その表情で分かった鷹那は、それに水を注したくはなかった。肩掛けを琥珀に掛けると、その正面に腰を下ろした。

「あら、ありがとう。やっぱり貴方は気が利くわね」

琥珀は左手で肩掛けを触りながら、右手で空の盃に酒を注ぐ。そ

うしてなみなみと酒の注がれた盃を鷹那の前に置き、自分の盃に口を付ける。それに倣い、鷹那も酒を半分程口に入れた。

「それにしても、随分と嬉しそうですね」

盃をテーブルの上に置き、一息ついてから尋ねる。もちろん、理由は分かっていたが。

「それはそうよ。月ちゃんが生きようと思っ直してくれたんだもの。本当にあのままだったら、烈砂と夕に申し訳が立たないところだったわ」

そう言っつて、盃の中の酒を一気に飲み干す。鷹那は、ええ、とだけ相づちを打って、空になった盃に酒を注いだ。

「……………それにしても、生きる義務、だなんて、考えた事も無かったわね」

琥珀は一刀の台詞を思いだし、独り言の様に呟いた。

この世界は、現代日本程生きる事は易くない。食料は少なく、医学も進んでいない。武威郡辺りは琥珀の統治によって比較的平和であるとはいえ、少なからず賊はいるし、異民族の脅威は依然としてある。現代日本より、死はずっと身近なところに存在しているのだ。

生きる事に必死にならなければ、生きていく事が出来ない世界。そんな世界では、生きる事が義務だ、という考えになど至る訳は無かった。

「ところで、貴方から見て一刀君はどうかしら？」

この2人、大層な酒豪であつた。山の様にあつた徳利は、すでに7割以上が空になつている。特に、鷹那に至つては、顔が赤くなつてさえない。彼女は普段通り真面目に答える。

「武も知略もまだまだでしょう。しかし、彼がここに来て、まだ半年。それを考えれば、いくら下地があつた……」

「違うわよ。私が聞きたいのはそうじゃなくて、男としてどうかつて事」

「なつ……！ よ、酔つていらつしやるのですか？ こんな、人をからかう様な事を……」

10年近い付き合いがある琥珀ですら、数える程しか見た事が無い取り乱し様だ。しかし、琥珀は酔つてはいたが、からかうつもりは無かつた。少し沈んだ表情で、手元の盃に視線を落とす。

「貴方が私に仕えてくれて、もう10年になるわね。あの人が亡くなつた直後の一番大変な時で、本当に助かつたわ。でもね、そのために、貴方の幸せを犠牲にしてしまつたんじゃないか、そう思うのよ。もちろん、結婚だけが女の幸せじゃない。けど、子を成し、育む事が、大きな幸せである事に違い無いわ」

鷹那は現在25歳。馬家に仕官したのは15歳の時だ。戦場を駆け抜け、政務に追われて彼女の10代は終わった。他の少女の様に洒落や色恋に興味を持つ暇が無かつた。何より、彼女は興味を惹かれる男性に巡り会わなかつた。

ならば、一刀がそうか、と聞かれれば、それも違う。彼の事を認

めてはいるものの、異性として見てはいない。

「そもそも、一刀さんは姫の婿にするつもりなのでは？」

「そうなってくれるのが一番なんだけど、大切なのは当人の気持ちでしょ？」

それがあれば、大概の事は乗り越えられるわ」

そう言うと、琥珀は何かを懐かしむ様な、遠い目をした。

彼女の夫婦生活は、決して順風満帆ではなかった。羌族とのハーフである彼女との結婚に、彼女の亭主は周りから猛反対を受けた。それを押し切って夫婦となったものの、その後も嫌な目で見られ続けた。それでも、今振り返ってみて、あの結婚生活が幸せだったと思えるのは、お互いを強く想いあっていたからに他ならない。

「翠が他に見つけられるならそれでもいいし、一刀君にしてもそう。要は、彼がここに残ってくれればいいのよ。だから、貴方でもたんぱぽでも、月ちゃんでもいい。ただ、お互いが強く惹かれあっているなら、ね」

そこまで言って照れ臭くなったのか、琥珀は酒を一気に煽る。

「……琥珀様。私は幸せです。失礼ですが、私は姫やたんぱぽを、自分の妹の様に見てきました。姫達の成長を見守り、琥珀様の愛したこの街とここに住む人々を守る。少なくとも今は、それが私の幸せです」

鷹那は琥珀の目を真っ直ぐに見て、誇りに満ちた顔で言い切った。琥珀は優しい笑みを浮かべ、黙って鷹那の盃に酒を注いだ。

自分の部屋に戻る途中、一刀は華雄に捕まった。半ば強引に連れ出され、2人は今、城壁の上にいる。

昼間、董卓を殴った事を咎められるのか、と戦々恐々としている一刀。何しろ、初対面で勘違いから殺されかけているのだ。それを、目の前で殴ったとなれば、必要以上に恐怖心を抱くのも無理はなかった。

「北郷、昼間の事は、本当に感謝している」

そう言って、華雄は頭を下げる。董卓の家臣としては至極真つ当な態度なのだが、身構えていた一刀からすると、肩透かしを食らった気分だ。

「お前がいなければ、月様のお考えを覆す事は出来なかっただろう。本当にすまなかった」

「い、いや。そんな、礼を言われる事じゃ……」

さらに深く頭を下げる華雄に、一刀はかなり困惑していた。

「ところで、北郷よ。お前が言った、月様を守り続ける、というのは本当だろうか」

えっ、と一刀は一瞬逡巡した。董卓に言った言葉は本心ではある。

しかし、あの場の勢いもあつたし、何となくだが、違うニュアンスでとられている気がする。それでも、華雄の眼差しは否定する事を許さなかった。

「そうか。……これから先の月様に必要なのは、私の様なその身をお守りする武人ではなく、お前の様に心を支えてくれる存在なのだろう。……よろしく頼むぞ」

少し寂しげに笑う華雄。短く切った銀髪が月光に煌めき、普段とは違う神秘的な雰囲気醸し出している。一刀は思わず見とれてしまった。

「それで、だ。これから月様を支えてくれるお前には、私の真名を教えて……」

「何やてーっ!」

華雄が言い切らない内に、辺りに絶叫が響いた。驚いた2人は、キョロキョロと周囲を見回すが、近くには誰もいない。離れた位置には見回りの兵が何人が巡回しているが、とても華雄の声が届く事の無い距離だ。何より、あの絶叫はもつと近くから聞こえていた。

と、いきなりガランと大きな音と共に、何かが降ってくる。

「なっ……、張遼」

「し、霞。どこから……?」

2人がそちらを見れば、そこには張遼が足を開き、踏ん張る様にして立っていた。彼女は楼閣の上で月を肴に飲んでいたので。顔を

上げた張遼は華雄を睨むと、下駄を激しく鳴らしながら近付いて行く。両肩をがっしとつかまされると、その勢いに華雄は少し身を引いた。

「どついう事や!? お前、真名無しなんとちゃうんか!? ウチはお前やつたら真名を預けてもええと思つとつたのに、お前はウチの事、信用してへんかったんやな!」

えらい剣幕で詰め寄る張遼。それを見ながら、一刀は疑問を感じた。

「あのさ、真名無し、つてどついう事? 真名つて皆持っているんだろ?」

「あん?」

振り返った張遼は、不機嫌な声を出しながら一刀を睨み付けた。

「ああ、お前は天の国から来たんやつたな」

その事を思い出した張遼は、少し冷静さを取り戻す。そうして彼女は、真名が産まれた時に名付けられる事。そのため、物心つく前に親と死に別れたりすると、真名を知る事が出来ない可能性がある事を一刀に伝えた。

「じゃあ、華雄も……?」

「そうだ。私の産まれた村は賊に襲われ、まだ乳飲み子だった私だけが母の亡骸の下で生きていたそうだ」

1 人生き残った華雄は、賊の討伐に来た董卓の父親、董君雅によつて助けられた。元々、華雄の父親は地域の有力者で、董君雅とも親交があつた。そのため、華雄は彼の下に引き取られて成長したのだつた。

「先代には色々な事を教えて頂いた。といつても、身に付いたのは武術と馬術位なものだが」

わずかに自嘲して話を続ける。張遼も静かに話に耳を傾けた。

「そうして、先代と奥方との間に待望の世継ぎ、月様が生まれたのが、私が14の時だ。その時に、先代は月様の真名を教えてくださいさつただけでなく、私に真名を名付けてくださつた」

華雄は一旦うつむき、自分の気持ちに改めて整理をつけた。

「……月が綺麗に輝けるよう、清夜、と」

気恥ずかしさがあるのか、ほんのりと頬を赤く染めた華雄。だが、その瞳には迷いや後悔は感じられない。

「すまない、張遼。別に、お前が信用出来なくて真名を預けなかつた訳では無いのだ。私の真名は月様の真名と対になっているし、先代からの願いも込められている。誰にも教えずにいたのは、願掛けの様なものでな」

「……すまん、華雄。ウチ、そんな事とは知らんと……」

珍しくしおらしい態度を見せる張遼に、華雄は笑って言う。

「フツ、お前らしくもない、気にするな。……もう、いいのだ。月様をお守りするのには、私だけの使命ではなくなったからな」

どこか寂しげな顔で星空を見上げる華雄。その名の通り雲ひとつ無い星空には、大きな満月がぽっかりと浮かんでいた。

第2章・洛陽編・第11話〈満月〉（後書き）

という事で第11話でした。

華雄を生き残らせて西涼に属させる事を決めた時に、真名が無いままは可哀想で考えてみました。真名があるのに周りの人間が知らない、という状況にするために、月の両親から与えられた事にしてあります。何らかの取っ掛かりがないと、名前を付けられないものもあります。その分、月が割りを食って大変な事になってしまいました。ちなみに、清夜の読み方は「しんや」です。

一刀君は原作より熱血君になってしまいました。これから先も、ちよこちよここの部分が出て来ると思います。

これで第2章、洛陽編は終了。出来れば華雄の過去の話や、2・8で1行だけ書いた恋と琥珀の勝負等も書いてみたいのですが、取り敢えず話を進めます。ひよっとしたら、外伝的な感じで書くかもしれません。

今回は普段通りに月曜の夜に投稿させてもらいますので、よろしく願います。

第3章・長安編・第1話〜平穏な日々〜（前書き）

今回から第3章、長安編になります。

今話から桂花が出てきますが、「イク」の字が携帯では出ないため「或」の字を代替えで使います。また、エン州の「エン」の字は代わりに使う字が思い付かなかったため、カタカナのままにしておきます。

第3章・長安編・第1話〜平穏な日々〜

一刀達が西涼に帰ってからおよそ1ヶ月後。冷たい風が荒野を吹き抜ける中、琥珀は安定の街に来ていた。

反董卓連合の解散後、連合に参加した諸侯には、それぞれ褒賞が与えられていた。琥珀には、月が解任されて中央から代理が派遣される状態になっていた安定郡の太守の任が与えられた。武威郡太守と兼任だ。

そのため、彼女は翠と一刀、霞と清夜を伴って安定を訪れた。さらに、馬車の中には、だいぶ元気になった月と詠の姿もあった。引き継ぎ等を考えれば、2人がいた方が好都合だったからだ。

一通りの事務処理が終わると、琥珀は月と清夜と共に城を出た。彼女達を安定まで連れてきた1番の目的を果たすために。

街の外れにある1本の大木。その前で3人は足を止めた。

「お父様、お母様、ご無沙汰していました。やっと……、やっと帰って来られました」

しゃがみこんだ彼女の前には、30センチメートル四方の石がある。流行り病で亡くなった、月の両親の墓石だった。

洛陽での苦しい日々や、父から受け継いだ安定の街を守れなかった申し訳なさなど、様々な思いが胸の中に去来し、月の瞳からは自然と涙がこぼれた。その脇に立つ2人にも特別な思いがあった。

『烈砂様、奥方様、申し訳ありません。お2人からあれ程の恩を受けたにもかかわらず、それに報いる事が出来ませんでした。これより先は、私の仲間と共に、必ずや月様をお守り致します』

『烈砂、夕、安心しなさい。月の事は、私がちゃんと面倒を見るから。うちの娘よりしっかりしてるんだもの、大丈夫よ』

琥珀達が墓参りをしている間、一刀は詠と城内にある書庫や武器庫を回っていた。そこで、一刀は見慣れない物を見つける。

「なあ、詠。これって……？」

木製のパーツがいくつも合わさった銃のような物を手に、一刀は振り返った。

「それは弩よ。て言うかあんた、一応でも軍師なんですよ？ 弩も知らないで務まると思ってるの？」

この時代に対してある程度の知識を持つ一刀には、これが弩であるだろうと予測は出来た。あくまで念のために聞いただけなのだが、その言われ様に若干傷付いた。

弩、というのは、現在のクロスボウにあたる飛び道具だ。この時代においては、弓以上に普及している最もポピュラーな武器である。弓の様にシンプルではない造りの弩は、製造にも維持にも弓より高いコストがかかる。にもかかわらず普及しているのには、大きな理

由があつた。弩は扱いを習熟するまでに必要な時間が、弓と比べて圧倒的に短くて済む。その上、性能が個人の技量に大きく左右されない利点がある。命中精度はともかくとしても、有効射程距離は弓よりも長く安定する。これは軍を指揮する者にとって、非常に戦力の計算がしやすかつた。

しかし、欠点も存在する。連射性能の低さだ。弩は弓の様に両手だけで弦を引く事が出来無い。足で弩を踏んで固定し、上体を使って弦を引く様に設計されている。そのため、再度矢をつがえるのに弓より長い時間が必要であり、馬上での再装填も不可能であつた。

一刀に弩を見た経験が無かつたのはこのためだつた。馬上で扱うのであれば短弓の方が使い勝手がよく、馬騰軍に弩は一挺も無かつた。董卓軍でも拠点防衛用にある程度の数があるだけだつた。

「これって、もらつていつてもいいのか？」

「もらつても何も、琥珀様の領地でしょ。あんた、何言つてんの？」

心底呆れた様に盛大なため息を吐きながらも、詠は手にした目録に持ち出す物として弩を書き込んだ。

反董卓連合軍が解散した後、全ての諸侯は洛陽から撤収していた。献帝を擁立しようとする者は誰もいなかった。第2の董卓となる事を恐れたのはあるだろう。それに、皇帝を助ける事に利は無しと判断した者もいただろう。ともかく、幼い皇帝には何の後ろ楯も無く

なっていた。

しかし、まだ漢帝国に利用価値を見いだしている者がいる。陳留の太守からエン州の州牧へと出世した曹操だ。彼女は本拠地である陳留の城内にいた。

「無様なところをお見せして申し訳ありませんでした、華琳様」

「勝敗は兵家の常。いつまでも気にする事は無いわ、春蘭」

玉座に座る曹操と、その前にひざまずく夏侯惇。恋に左目を射抜かれた後、医師から安静を言い渡されていた夏侯惇は、久しぶりに甲冑を身に付けて出仕していた。彼女の失われた左目には、蝶の姿を模した眼帯が付けられている。

「ところで、献帝の件はよかったですか？ 袁紹も手を引いた今が好機では……？」

「あら、珍しいわね。貴方が戦に関係無い事に口を出すなんて」

「も、申し訳ありません」

薄い笑みを浮かべる曹操の言葉に、夏侯惇は顔色を失った。だが、曹操は自分のやり方に異を唱える様な真似をした夏侯惇を責めた訳では無い。単純に、彼女が政治にかかわる事に意見を述べたのが珍しかったのだ。その事を伝えようと曹操が口を開くより早く、隣に立つ少女が声を上げた。

「あんた、バカじゃないの？ そんな簡単に事が運ぶ訳無いでしょ。その傷口から、血と一緒に脳味噌まで流れたんじゃない？」

「何だと、桂花！」

栗色の柔らかそうな髪の毛を猫耳の様な形のフードで覆った少女は、その可愛らしい外見とは正反対の毒を吐いた。しかも、夏侯惇が殺気をはらんだ目で睨み付けても、怯むどころか見下した様に平然と受け流している。大した度胸の持ち主だ。

彼女の名は荀彧、字は文若。曹操が反董卓連合に参加していた折には陳留の留守居役を任された、信任厚い軍師である。しかし、才能はともかく、その性格には大きな問題があった。

「一体何が問題だと言うのだ」

「何で、私があんたなんかには教えなきゃいけないのよ。脳味噌の足りない頭で少しは考えてみればいいでしょ」

声を張り上げて言い争いを始める2人。久しぶりに繰り広げられるやり取りを、一同はいつもの事と苦笑いを浮かべながら見ている。

そんな中、最近仕官したばかりの少女だけが、あまりの剣幕に才口口していた。その隣にいる許緒が、少女を落ち着かせようと声を掛ける。

「大丈夫だって、流琉。いつもの事だから」

「えっ？ う、うん……」

頷きはしたものの不安が消えた様子は無く、少女の眉尻は下がったままだ。

彼女の名は典韋。黄緑色の短い髪にリボンを付けたた、まだ幼さの残る少女である。許緒の幼馴染みで、彼女の紹介で曹操に仕える事となった。

典韋の心配をよそに、夏侯惇と荀或の言い争いはさらに激化していく。最初の内は夏侯惇の回復を嬉しく思い、苦笑いを浮かべるだけにしていた曹操だが、さすがに辟易としてきた。

「桂花、春蘭にも分かる様に説明しなさい」

「はい、華琳様！ ……まったく、一度しか言わないから、しっかりと聞きなさいよ」

荀或は、まるで飼い主にしつぽを振る犬の様に曹操の言葉に答えたものの、夏侯惇に向き直ると完全に見下した顔を見せ、渋々説明を始めた。

大半の諸侯とは違い、漢にはまだ利用価値がある、と曹操は考えていた。いくら人民の心が離れようと、この大陸を治めているのは漢帝国であり、その皇帝だ。これを無視して天下を目指せば、国に逆らう反逆者になる。そうなれば、仮に天下を統一しても、篡奪者として歴史に名を残す事になってしまう。例えそれが、民のため、という大義を掲げたとしても、だ。

そうならないためには、皇帝より禅譲される必要がある。その近道として、皇帝の保護があった。まだ幼い献帝を擁立し、傀儡として実権を握る。そうして国を立て直し、自分の力を内外に見せつけ、その上で禅譲を迫る。それが曹操の腹積もりだった。

そこで問題になるのが、どう献帝を擁立するか、だ。エン州の州牧とはいえ、なつたばかりの彼女に大きな力は無い。今の状況で自ら手を上げれば、今度は反曹操連合が結成されかねなかった。董卓の轍を踏まないためには、献帝の方から保護を求め、という構図が必要になる。そして、遠からずそうなると、曹操は読んでいた。

漢帝国、ひいては献帝が持つ兵力はさして多くなく、練度も低い。その上、兵を率いる事の出来るまともな将がない。十常侍が宮中を仕切っていた頃に、心ある家臣達は皆地方へと飛ばされ、皇帝の傍から遠ざけられたためだ。結局、どこかの勢力の保護を受けなければ立ち行かなかった。

では、どの勢力が、という話になる。まずは、現時点での最大勢力である袁紹と、その従姉妹である袁術だが、この2人は無いと曹操は考えていた。献帝が董卓を寵愛していた事は、彼女の耳にも入っている。であれば、董卓を殺した遠因である2人を頼る事は無い。

荊州牧の劉表は名士として名高いが、天下を狙う野心も国政に携わる度量も無い。それが曹操の評だった。

西涼の狼として勇名を轟かせる琥珀も、献帝から頼られる事はあり得なかった。異民族の混血である彼女の庇護を受けるなど、漢帝国の皇帝としてあつてはならない事だからだ。

後は、謁見した時に献帝の覚えのよかった桃香だろう。遠縁とはいえ血縁者である事に、献帝は親近感を抱いたらしい。しかし、彼女の勢力は極めて小さい。それに、諸葛亮と鳳統の2人が付いていて、火中の栗を拾う様な真似をさせるはずが無かった。

最後に曹操だが、彼女の場合、陳留郡の太守としての実績があつ

た。黄巾の乱で大きな手柄を立て、反董卓連合でも虎牢関を落とすて名を上げている。さらに、曹操には宮中とのパイプがあった。彼女の祖父が宦官だったためだ。そして、彼女が州牧を務めるエン州は、洛陽のある司隷の東側に接しており、地の利もある。全てが曹操にとって有利であった。

自ら何かする事無く、望む物が向こうからやって来るのを待てばよい。そんな状況だった。

「……という事よ。分かったの？」

「ああ、もちろんだ。で、秋蘭。結局、どうすればいいのだ？」

「全く分かってないじゃないの！ あんたに説明した時間を返さないよ！」

再燃する2人の言い争いに曹操の雷が落ちたのは、すぐ後の事だった。

ともかく、曹操は本拠地となったエン州の安定と発展に努め、新たな人材の発掘に傾注していく。そうして、楽進や郭嘉など、後の覇道を助ける有為の人材を数多く得るのだった。

褒賞をもらったのは琥珀や曹操ばかりではない。冀州牧である袁紹は、その隣にある并州の牧も兼任する事になり、南陽郡の太守だった袁術は大陸の南東、揚州の牧となった。幽州北平郡の太守だっ

た公孫贄は幽州牧へと出世している。

そんな中、一番の出世頭となったのは桃香だろう。平原県の県令に過ぎなかった彼女は、徐州の州牧へと一足飛びの出世を果たす。一気に統治する範囲が広がった事で今までに無かった数多くの問題が山積するが、彼女は仲間と協力し、少しずつ暮らしをよくしていく。

この地に自分の理想、皆が笑って暮らせる国を造ろう。そう誓いを立てて政に励む桃香は、ある程度状況が落ち着くと、幽州にある故郷の村から母親を徐州へと呼び寄せる。他にも、義勇軍として旗揚げした当初から付いて来ている者の家族も、希望する者は呼び寄せた。

本来、住民の流出は為政者にとって避けたい事である。しかし、幽州牧となった公孫贄は桃香の親友であったため、喜んでそれを認めてくれたばかりか、趙雲率いる護衛隊まで出してくれた。

「ありがとう、星ちゃん。白蓮ちゃんにもお礼を伝えてね」

とんぼ返りで幽州へと戻る趙雲を、桃香はそう言って見送った。

一刀達が安定から武威に戻ってから数日後、雪が街を覆い、辺り一面を真っ白に変えた。これ程積もった雪を見た事の無い一刀は子供の様にはしゃいだものの、3日で飽きてしまった。珍しくなくなれば、ただ寒くて歩きにくいだけだ。現代から比べれば満足な暖房

器具も無い中、震える体を我慢しながら一刀は会議に参加していた。

「……やっぱり、工兵隊の様な物は必要だと思えます」

部隊編成について一刀が述べる。騎兵が大部分を占める馬騰軍は、攻城戦に於いてほとんど有効な手段を持たない。その弱点を補うため、新たに工兵隊を新設したい、というのが一刀の考えだった。

「そんなの必要無いだろ。一体、どこの城を攻めるつもりなんだよ、お前は？」

「こちらから攻めなくても、敵に城を奪われてそれを奪還する、なんて状況は十分考えられるだろ？」

大きなテーブルを挟んで相向かいに座る翠の反対意見に、一刀は即座に反論した。

「でも、敵って誰だよ？ 匈奴の奴等か？」

「それもある。けど、異民族だけじゃない」

黄巾の乱と反董卓連合、2つの大きな戦乱によって、漢にはすでに昔日の力が無い事がハッキリした。である以上、力のある諸侯がおとなしく漢帝国に従っている訳が無い。大陸の支配という野心を持った者達による群雄割拠の時代は、すぐそこに迫っているのだ。いくら琥珀が野心を抱いていなかったとしても、この涼州にも戦火が飛び火するのは間違いないかった。

「確かに一刀君の言う通りでしょうね。……いいわ、貴方に任せましょう。詠に色々教えてもらいながらやってみせなさい」

はい、と返事をして一刀は椅子に腰を下ろす。

「ところで、その詠と月はどうしたの？ 今日からのはずでしょ？」

琥珀が尋ねた様に、体調の回復した月と詠は、今日から一刀付きの侍女として働く事になっていた。

詠は軍師として一流の知識をもっているし、月は太守としての経験があるだけに内政には長けている。公に死んだ事になっている2人だが、一刀の侍女として傍にいればその才を存分に奮える。しかも、2人が傍にいる事で、一刀自身の成長も期待出来た。

確かに遅いな、と考えていると、部屋の外から足音が聞こえて来る。バタバタと聞こえる足音はどんどん大きくなり、部屋の前で止まったかと思うと、勢いよく扉が開かれた。

「ちよつと、あんた！ 何なのよ、このヒラヒラした服は！」

扉を開けた人物は、肩で息をしながら怒鳴った。そこにいたのは詠だったが、その服は董卓軍の軍師をしていた時の戦装束でも、武威に来てからの文官服でもない。黒と白のミニのエプロンドレスで、腰には大きなリボンを結んでいる。俗に言うメイド服だ。

さらにパタパタと足音が聞こえると、遅れて月も姿を現した。

「ま、待って、詠ちゃん」

膝に手を付いて息を整える月。彼女の服も以前の様な儼かな雰囲気

気のものではなく、詠と同じデザインのメイド服だった。ただ、詠の服よりスカート裾が長く、ストッキングの色も、詠の黒に対して月のは白になっている。

「それは俺がいた国の侍女が着る制服で、メイド服って言うんだ。……うん、2人共、よく似合ってるよ」

一刀は素直な気持ちを口にした。へう、と恥ずかしそうに呟いてうつむく月。一方の詠も照れて頬を赤くするが、その思いを誤魔化す様にさらに大声を上げる。

「な、何言ってるのよ、あんたは！ 月はともかく、ボクなんかにこんな可愛い服が似合う訳無いでしょ！」

「そんな事あらへんよ。よう似合うとるで。お清かてそう思うやろ？」

霞はフォローに入るものの、その顔は完全にニヤケており、詠から睨み付けられた。鋭い眼光から逃れようと、霞は清夜に話を振る。

「ええ、霞の言う通り、よく似合ってます、月様」

「あ、ありがとうございます、清夜さん」

清夜の誉め言葉に、月は嬉しそうに微笑んだ。

一刀に真名を預けた後、清夜は霞や翠とも真名を交換していた。どうやら琥珀すら知らなかったらしく、この話を聞いた時の彼女の驚いた顔は、一刀の中ですべて印象に残っている。もともと、お清、という呼ばれ方には、最初はとも抵抗があった様だが。

「何サラツとボクの事を無視してんのよ!……琥珀様も何か言っ
てください。ボク達は死んだ事になっているのに、こんな派手な服
を着てたら目立ってしまいます」

余程メイド服を着るのが嫌なのか、詠は琥珀に懇願する様な眼差
しを向けて訴えた。琥珀自身もメイド服に袖を通すのは嫌だ。しか
し、他人が着るなら話は別である。可愛らしい服を着ている姿を見
るのは大好きな琥珀だった。

「確かにそうね……。なら、こうしましょう。めいど服、だった
かしら? それを城で働く侍女の制服にするわ。それなら、2人だ
けが目立つ事も無くなるし」

「琥珀様……」

最後の望みが断られた詠は、深いため息を漏らして落胆した。そ
んな彼女に月が声を掛ける。

「私はこの服好きだよ? 可愛いし、何より詠ちゃんとお揃いだ
から」

結局、月の一言で、詠は喜んでメイド服を着る事となった。

辺り一面を覆う銀世界の様に、この国は久方の平穏に包まれてい
た。だが、春を告げる雪解けと共に、大陸中は争乱に包まれるのだ

つ
た。

第3章・長安編・第1話〜平穏な日々〜（後書き）

という事で、新章第1話のため、半分状況説明的な話になりました。次回からは少しずつ話が進んでいくと思います。

最近投稿した話に比べると大分量が少なくなってしまい、申し訳ありません。前回まででほとんど話のストックを使ってしまったため、1週間で書くのはこれくらいが限界ですので、次回からも5、6000文字になると思います。

ますます話の進みが遅くなってしまいましたが、これからもよろしく願います。

第3章・長安編・第2話／小霸王、起つ

「くそっ！ どうなってんだよ！」

部隊の先頭で愛馬の1頭である紫燕に跨がる翠。降り注ぐ矢の雨を、彼女は槍を振って叩き落としていく。逃げる敵を追撃した翠は、ものの見事に伏兵にはまっていた。部下達は次々に矢を受けて倒れていく。

「きゃあーっ！」

「たんぽぽっ！」

ついには、翠の脇にいた副将の蒲公英までもが矢を受けてしまう。彼女の悲鳴に、翠は無意識にその名を叫んだ。

「しまっ………！」

わずかに集中力が乱れ、1本の矢を落とし漏らしてしまっ。しまった、その一言も言い切らない内に、矢は翠の胸に当たった。

「イテテ……。まったく、ひどい目に遭ったな」

「ちょっと、お姉様！ それはこっちの台詞でしょ！」

「そうや！　ウチが、鷹那の退き方は罨がある、って言うたんを無視して突っ込みよるから、こないな事になんねん！」

「何言ってんだよ！　あたしが、罨ごとぶっ飛ばせばいい、って言ったら、霞だって賛成しただろ！」

敗戦の責任を擦り付けあう3人。先程の戦いは模擬戦だったため、矢に鏃は付いていなかった。当たれば結構痛い、余程当たりどころが悪くない限り、死ぬ様な事は無い。胸に矢を受けた翠も、その部分が薄いアザになっているだけだ。

そんな3人のやり取りを尻目に、勝った一刀達は真面目に模擬戦の内容について意見を交換している。

「まさか、弩にあんな使い方があるとは思いませんでした」

「まったくね。もっとも、数が少ないから今回の様に引き込まないと効果が薄いけど。でも、その状況を作れば非常に強力だよ」

一刀の提案した戦法は思いの外効果が高く、鷹那と詠の評価も上々だった。自信が無い訳では無かったが、2人から太鼓判を押されたのは心強い。その反応に、一刀はホッと胸を撫で下ろした。そんな彼等の向こうでは、未だ言い争いを続ける3人に、琥珀の痛い拳骨が落ちていた。

その夜、城へと戻った翠は1人で鍛練をしていた。仮想の敵を相

手に槍を突き、穂先を払う。雪が溶けたとはいえ、朝晩はまだまだ寒い。にもかかわらず、その度に珠の様な汗が飛び散っている。

「フッ！」

息を強く吐き出しながら槍を大きく前に突き出す。イメージの中で相手を倒した翠は、片手で槍をクルクルと回すと緊張を解いた。フッ、と肺の中の空気を全部吐き出した後、手で汗を拭う彼女に背中から声が掛かる。

「お疲れ様、翠」

そこには手拭いと竹の水筒を持った一刀が立っていた。彼から水筒を受け取ると、それを一気に空にする。

「ちゃんと汗を拭いておかないと風邪ひくぞ」

そう言いながら、空っぽになった水筒と交換で手拭いを渡す。汗をかいて上気した翠の姿はやけに色っぽく、普段とは違う雰囲気、一刀はドギマギしてしまう。手拭いで首筋の汗を拭う翠と不意に目が合い、彼は慌てた。

「あつ……、昼間、大丈夫だったか？」

「ああ、少しアザになったけど、あれくらいは日常茶飯事だ。それより、まさかお前に負けるなんてな」

自分の事ながら、情けなさそうに翠は返す。しかし、一刀が気にしていたのはそれではなかった。

「いや、それよりも、琥珀さんに殴られた方は？ 物凄い音がしたけど」

ああ、と返事をする、昼間の事を思い出してげんなりした顔をする翠。頭にそつと手を当ててみれば、そこには大きなたんこぶが出来ていた。

「一刀はまだ、殴られた事は無いんだな。気を付けろよ、母様の拳骨は岩より硬いから。あれなら、鉄鞭で殴られた方がまだましだ」

さすがにそれはないだろう。一刀はそう考えながらも、あの音を思い出して身震いしてしまった。

「……なあ、聞いてもいいか？」

一刀がそんな事を考えていると、翠がおずおずと口を開いた。その表情は真剣、というよりも、何か思い詰めているかの様であり、どこか物悲しさをはらんでいた。真剣な顔なら、戦場でもそれ以外でも何度となく目にしている。しかし、今彼女が見せている表情は、一刀には覚えが無かった。彼は思わず頬を引き締め、翠に向き直った。

「お前は、どうするんだ？」

自然に、えっ、と聞き返してしまう程、あまりにも漠然とした質問だった。しかし、それ以上聞き返す事はばかられる雰囲気を出され、一刀は何とか真意にたどり着こうと頭を巡らす。だが、結局は翠の方が痺れを切らし、足りなかった言葉を補い出した。

「前にあたしに言ったろ？ ここに来たのには理由があるはずだ、

って。もしそれが果たされたら、お前はどつするんだ？ ……天の国に帰る、のか？」

言葉を省かれ過ぎていて、そんなつもりで言ったのだとは思わなかった。

全ての物事には意味がある。一刀が小さい頃より祖父に言われていた言葉だ。だから、一刀は自分がここにいる事にも意味がある、と考えている。理由や使命といった言葉でもいいだろう。だが、彼はまだそれを見付けられずにいた。自分がしなければならぬ事どころか、自分に何が出来るのかすら分かっていないのだ。

「まだ理由も見付けられてないしな……。それに、初めての時に言ったと思うけど、俺は寝て起きたらここにいたんだ。どうやってここに来たのかも、どうすれば帰れるのかも分からない。一生ここにいるのか、それとも、今日寝て起きたら戻っているのか」

だから、彼は戻る事を諦めていた。戻れるのかどうか、そんな不確かなものを期待するより、この世界で精一杯生きていく方を選んでいた。

「……じゃあ、もし戻る方法が分かったら、その時はどつするんだ？」

だから、その瞳に不安の色を浮かべる翠の問いにも、一刀は即答する事が出来た。

「戻らないよ。だって、ここが俺の家だから」

その言葉を聞いた翠は、心の底から安心した。もし帰ると言われ

たらと思うと、足が震えるくらい怖かった。しかし、それでも聞かずにはいられなかった。一刀の思いが分からない方が不安だったから。

「……もしかして、俺が帰る、って言っていたら、寂しいとか思っただ？」

一刀の問いは、まるで翠の心の内を見透かした様だった。凶星をさされた彼女の顔は、月明かりの下でもそうだとはつきり分かる程、耳まで一気に赤くなった。

相変わらず、思った事がすぐ面に出るな。翠の様子を見ながら、一刀はそんな風感じていた。琥珀の後を継いで一国の主となるには不安が大きい。表と裏を使い分ける必要がある外交など、不利になる事が多すぎるからだ。しかし、1人の女性として見た場合、その純真さはとても魅力である。一刀が彼女を好ましく思う理由の1つもそれだった。

「なっ……、そ、そんな訳あるか！ か、母様が……、そう、母様がお前の事を頼りにしてるからだ。あたしは別に、お前の事なんか……。だ、だから、勝手に変な事考えんな！」

翠は派手にどもった後、恥ずかしさを吹き飛ばす様に大声で叫ぶ。同時に手にしていた手拭いを一刀に向かって投げ付けると、その場から逃げ出す様に駆けていった。小さくなる背中を見ながら、からかいすぎたかな、と思うとともに、翠の香りが残る手拭いに少し鼓動が早くなる一刀だった。

そんな平和な西涼とは違い、大陸の東部では戦乱の炎が吹き出していた。その中心にいるのは袁家の2人、袁紹と袁術である。

冀州と并州を治める袁紹はその北、公孫贇の統治する幽州へと攻め込んだ。公孫贇は白馬義従と呼ばれる白馬だけで編成された、涼州兵にも劣らない強力な騎兵隊を有しており、兵の質では公孫贇軍が勝っている。だが、兵の数は袁紹軍が圧倒的に上回っていた。さらには北方の異民族、烏桓族も袁紹の動きに呼応するかのように侵攻してきたため、公孫贇は大した抵抗も出来ずに敗北する事となった。彼女は趙雲と数名の近衛兵に守られて幽州を脱出するしかなかった。

一方、揚州の州牧となった袁術であったが、その支配には問題があった。揚州は西から東に大河、長江が流れている。袁術が居を構えている寿春を含む長江北部は、彼女の支配下にあった。だが、長江南部はそうではなかった。数多くの豪族がひしめき合うその土地には、袁術の支配も及んでいないのだ。そこで、彼女は客将である孫策に江東の平定を命じるのだった。

「……という訳じゃ。孫策よ、妾に従わぬ長江南部の豪族共を懲らしめて来るのじゃ」

袁術が孫策に江東平定を命じたのは、ただ単に彼女にとって使い勝手のよい駒だから、というだけではない。

孫策の母、孫堅は存命の頃、江東一帯を支配下においていた。弱くなったとはいえ、孫家の影響力はまだ残っている。それを利用すれば、あまり時間がかからずに平定出来るだろう。張勳からそんな進言を受けたためだった。

対する孫策にも、この命令はまたと無い好機であった。袁術の監視下を離れて江東に赴く。これは独立する絶好の機会なのだ。

張勳が考えている以上に孫策と江東の繋がり強い。孫堅が死に、孫策が袁術の庇護下に入る時、軍師である周瑜の策で配下の多くは江東の地に潜伏した。彼等は水面下で孫策支持のネットワークを広げ、いつ孫策が旗揚げしても支援出来る様、その牙を研いでいるのである。

しかし、孫策が行動を起こすためには1つ問題があった。

「分かったわ。なら、私の妹を連れて行ってもいいかしら？」

「な、なんじゃと!？」

孫策の言葉に、袁術が思わず大声を上げてしまうのも無理は無かった。孫策の妹である孫権は、表向きには袁術に保護されている事になっている。しかし、実際のところは孫策が反旗を翻すのを防ぐための人質として、袁術によって幽閉されているに過ぎない。それを解放しろ、というのは、いくらおつむの弱い袁術でも危険な事であると分かった。

当然ね。袁術の表情から答えを察した孫策はそう思い、相手よりも先に口を開く。

「小さな頃から母と共に戦場を渡り歩いてきた私と違って、あの子は江東で育ったの。だから、私より地理に詳しいし顔も広いわ。きつと役に立つんだけど……」

「二心が無いとアピールする様に、努めて笑顔で明るく言う。玉座に座る袁術は、脇に控える張勳をチラリと見上げる。だが、彼女が孫策の言葉を信じるはずがなかった。」

「駄目ですよ、孫策さん。それでもし妹さんに何かあつたら、お嬢様が孫堅さんに顔向け出来なくなってしまうじゃありませんか」

建前とはいえ、孫権を保護している立場にある者の言葉としては筋が通っていた。しかし、孫策は張勳とやり合つつもりはない。袁術の首を縦に振らせてしまえばいいのだ。そして、そのために何が一番効果的なのかも知っている。

「そう、なら仕方無いわ。でも、それだと大分時間がかかつてしまつわね。……そういえば、貴方の従姉妹の袁紹が幽州を攻め落としました、と数日前に耳にしたんだけど。あまりモタモタしていると、どンドン差が開いていきそうね」

そう言うつと、孫策は一礼して袁術の前から下がろうとする。その背中に向かい、待つのだと、と声が掛けられた。足を止めた孫策は、首だけで振り返る。その視界には、眉間にシワを寄せて悩む袁術の姿が映った。

袁術の持つ袁紹への激しい対抗心を利用する孫策の考えは、見事に的中した。こうなってしまうえば、張勳の諫言も届かない。

「……認めてやるのじゃ。しかし、一刻も早く長江の向こう側を制圧するのじゃぞ。よいな、孫策！」

仕方無いなあ。張勳は袁術を見ながら誰にも聞こえない声で呟くと、笑顔で孫策の方に向き直った。

「でしたら、孫策さん達だけでは大変でしょうから、こちらからも将兵を出しますね」

「あら、ありがとつ、張勳」

孫策も負けず劣らずの笑顔で返す。だが、2人共目だけは全く笑っていない。孫策の監視、という思惑を抱く張勳。対する孫策は、思惑を見抜いた上でその案を了承していた。事を起こす時に殺せばいいだけ。そんな風に考えていた。

「雪蓮姉様！」

「久しぶりね、蓮華。……少し太った？」

「な、何を言われるのですか！ 久しぶりに会えたと言つのに……！」

姉妹の感動的な再開のはずが、孫策の一言でぶち壊しになる。顔を真っ赤にして怒る妹、孫策に対し、姉である孫策は苦笑い混じりに謝った。

孫権、字は仲謀。江東の虎と呼ばれた孫堅の次女である。姉と同じ鮮やかな色の髪と褐色の肌を持つ少女だ。

孫策が謝っても、孫権はまだぶつくさ文句を呟いている。しかし、

そんな様子もお構いなしに、孫策は妹の体を包み込む様に優しく抱き締めた。

「ごめんなさい、苦勞をかけたわね」

急に抱き締められ、孫権は一瞬泡を食う。恥ずかしさで顔を紅潮させたものの、姉の香りと温もりは遠い日の母の思い出を呼び起こし、彼女の心に安らぎを与えた。

母の才を色濃く継ぎ、武に天才的な才能を見せる姉とは違い、孫権はいくら鍛練を重ねてもあまり腕は上達しなかった。その武力だけでなく、皆をまとめる統率力も、他人を惹き付ける魅力も、人の上に立つ者に必要な才能は全て姉の方が上である、と孫権は考えていた。強い尊敬と憧れを抱くと共に、才能溢れる姉にわずかに嫉妬もする。そんな思いに気付くたび、孫権は自己嫌悪に陥るのだった。

しかし、今の彼女にはそんな惨めな思いは欠片も無い。姉の無事を心から喜んでいいる自分に嬉しくなり、孫策の体を抱き締め返した。

「いえ、姉様に比べれば……。少しおやつれになったのでは？」

「そう感じる、って事は、貴方やっぱり太っ……………」

孫策の言葉を遮る様に、姉様、という孫権の怒鳴り声が飛んだ。そんな2人の仲のよいやり取りを、周瑜は昔を懐かしむ様に微笑みながら見詰め、黄蓋は声を上げて笑いながら眺めていた。

第3章・長安編・第2話／小霸王、起つゝ（後書き）

という訳で第2話でした。

前半の戦法は日本人なら誰でも知っているだろうものですので、あまり期待しないで頂ければ、と思います。もっとも、察しがついた方も多いでしょうが。

そして、独立への第一歩を踏み出した孫策。これから先しばらくは西涼の話は少なくなり、中原から東の方を舞台に進めていきます。

第3章・長安編・第3話〜曹操の誤算〜

日が西に傾きかけた武威の城内を、一刀は首を左右に振り、肩を回しながら歩いていった。最近軍事演習に参加してばかりで、机仕事は久しぶりだった。以前と違い、月と詠がいるお陰で内政に携わる必要性が低くなった事が理由だ。ならば、なぜ一刀が机仕事を行っていたかといえば、月と詠、2人揃って休みを取ったためだ。

朝から1人部屋に籠って仕事をしていた一刀。彼は丸1日かかる事を覚悟していたが、予想に反して夕方前に仕事は終わる。前倒しで仕事を片付けてくれた2人に感謝しつつ、彼はこれからどうしようかと考えていた。

まだ日も高いし街に出ようか。太陽の位置を確認してそんな事を思う一刀の視界の端に、月の姿が映る。だいぶ見慣れてきた感のあるメイド服ではなく、町娘が着る様な地味な服に袖を通している。

何か考え事をしているのだろうか。欄干に手をそえて中庭を眺める彼女からは、一刀の存在に気付いた気配は感じられない。

少し驚かせてやろう。そんな悪戯心が一刀の中で首をもたげる。気配を殺し、月の背中側からそつと近付く。後少し、そのまま腕を伸ばせば届くくらいの位置にまで来ると、一刀は大きく息を吸い込んだ。

「何してんのよ、あなた」

「わあっ!」

「ひゃあつ！」

予期せぬ方向からいきなり声をかけられ、一刀は驚いて思わず声を上げてしまう。その声に驚き、月も悲鳴を上げてしまった。結果だけ見れば目的を果たせた訳だが、あまりにもかっこ悪すぎる。わずかに眉尻を吊り上げながら振り向くと、案の定、そこには詠が冷たい目をして立っていた。

「いきなり声をかけるなよ。驚くだろ」

自分の事は棚に上げて文句を言う。フン、と鼻を1つ鳴らし、詠はそんな一刀の脇を黙って通り抜けた。

「あつ……、詠ちゃん。それに、一刀さんも……」

相当驚いたらしく、月は胸に手を当てて肩を上下していた。その月の視界から一刀を消す様に動く詠。

「ボーツとしてちゃ駄目よ。こいつに何をされるか、分かったもんじゃないんだから」

「何か、つて、俺が一体何をする、つて言うんだ！」

酷い言われ様に、一刀もつい語気を荒げてしまう。しかし、詠はそれに怯む様子も無く、眼鏡越しに一刀を睨み付けた。

「じゃああんた、さつき月にこっさり近付いて何をしようとしたのか、言ってみなさいよ。どうせ、いやらしい事でもしようとしてたんでしょ」

「勝手な事を言つな！ 俺は……」

そこで一刀は口ごもってしまふ。別にいやらしい事をしようとしていた訳では無いが、普通に話しかけようとしたのでもない。驚かせようとしたりした事を正直に言えば、そこを突っ込まれるのが目に見える。だから一刀は逡巡したのだが、詠の前では黙る事すら許されなかった。

「ほらみなさい。言えないのが証拠よ。月、仕事の際は仕方無いとしても、それ以外の時はこいつに近付いちゃ駄目よ。いやらしい事しか考えてないんだから」

勝ち誇った顔で一刀を見下した後、月に向き直って説得を始める。一刀もここまで言われては黙っていられない。2人の間で言い争いが再燃する。その様子を見ながら、月はオロオロするでもオドオドするでもなく、クスクスと声を出して笑った。

予想外の事に2人の言い争いは自然と止まる。呆気にとられた顔で見詰められている事に気付いた月も笑うのを止め、決まり悪そうにはにかんだ。

「ごめんなさい。詠ちゃんと一刀さん、すごく仲が良くなったから嬉しくて……」

「なつ、何言ってるのよ！ ボクがこんなのと仲良くする訳無いでしょー！」

詠は恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら否定する。一刀もそう思った。顔を会わせる度に悪態をつかれる今の関係を仲が良いというのなら、それはもう、価値観がおかしい、としか言い様が無い。そ

んな考えが顔に出たのか、月は少しうつむき加減になって続けた。

「詠ちゃん、一刀さんと話している時凄く生き活きしてるよ？
それに、前はもっと刺々しかったもの」

本人にも思い当たる節があるのか、詠はグツと言葉を詰まらせてしまう。そして、横目でチラリと一刀の顔を見た。

『あれだけ罵詈雑言がポンポン出て来るのは、そういう見方もあるか。それに、確かに最初の頃よりはいいかもな』

さつき詠が言った様に、今でこそ仕事絡みなら普通に話す事が出来る様になった。しかし、2人が侍女になったばかりの頃は、公私問わず月に近付いただけで噛みつかれたものだ。

気の強い妹、くらいに思えばいいかな。そんな風に考えていると、彼の頬は自然とゆるんだ。

「何ニヤニヤしてるのよ、気持ち悪い」

一刀のこめかみに青筋が浮かんだ。

詠に構っていると話が進まないの、一刀は笑顔を張り付かせたまま月に尋ねた。

「考え事をしてたみたいだけど、何かあった？」

物憂げな表情をしていた彼女が気になったから声をかけようとしたのだ。詠が隣で文句を言っているが、完全に無視しておく。

感じられなかった。

「すまないな、桃香」

「謝らないで。白蓮ちゃんにはお母さんの事もお世話になったし、何より私達親友でしょ？ 親友が困っていたら助けるのは当たり前だよ」

申し訳無さそうな顔の公孫贄に対し、桃香は屈託の無い笑顔を向けた。建前や気遣いから出た言葉ではなく、本心だった。

袁紹に敗れた公孫贄は数名の部下と客将である趙雲に守られて幽州を脱出した後、親友である桃香の治める徐州へと落ち延びた。その際に怪我を負い、数日間療養していた。ほぼ完治したところで、公孫贄は城へと出て来たのだった。

そんな彼女達の下に斥候からの連絡が入る。袁紹軍はその本拠地である冀州の東、青州への侵攻を開始した。これは、諸葛亮等の侵攻予測よりもずっと早いタイミングだ。

幽州は公孫贄の無難な統治により、普通の生活が普通に出来る地域だった。そんな為政者を排したのである。占領地政策にしっかりと時間を割くのが常道だ。だが、袁紹は民から搾取するだけ搾取すると、再び進軍を開始したのであった。

遠くない未来にこの徐州にも戦火が及ぶのは明白で、桃香達は急

ぎ対策を練るため軍議を始めた。そんな彼女達の下へ、青州の州牧である孔融から使者が訪れる。内容は、袁紹軍の侵攻に対する救援要請であった。

諸将のほとんどは、要請に従うべき、との意見だった。孔融とは同盟を結んでいる訳では無いが、隣接した土地のため交流はある。それに、青州が落ちれば、次は徐州へ侵攻して来るのは間違い無いだろう。その時に劉備軍単独で袁紹軍に勝つのは不可能に近い。孔融軍と共同戦線を張れば、勝つ可能性はグッと高くなる。徐州を戦場にせずにはすむ事もあり、反対する理由は無い様に思えた。

だが、桃香だけは難色を示していた。袁紹軍と戦になった場合の事を考えれば、孔融からの救援要請に応えるべきだ、という主張は彼女にも理解出来る。難色を示す理由はそれ以前、戦い自体を回避出来ないか、と考えていたからだ。

戦になれば民が苦しむ。その事を説けば、きっと剣を納めてくれる。

しかし、袁紹相手にその考えは意味を持たない。彼女にとって庶民の生活など、二の次どころか考える必要の無い物でしかなかった。今回の幽州及び青州への侵攻も、ただただ自己顕示欲を満たしたいがためのものでしかない。

袁紹とも付き合いの長い公孫賛から説得を受け、桃香は寂しげな顔で視線を落とした。1つ大きく深呼吸すると、自分を奮い立たせる様に、ヨシツ、と口に出して顔を上げる。腹は決まった様だ。

「孔融さんの救援要請を請けて、一緒に袁紹さんをやっつけよう！」

勢いよく言い放ち、桃香は立ち上がった。関羽達も返事と共に立ち上がる。

桃香の理想は戦の無い世界。誰もが笑って暮らせる世界だ。その理想を守るためには、自分が否定する戦を行うしかない。矛盾を抱えながらも前に進むしかなかった。

それから3日後、先遣隊の出陣準備を終えた桃香の下へ1人の使者が訪れた。この使者により、桃香の運命は流転する事となるのであった。

麗羽が先に青州を攻めるとはね。袁紹の動きについて報告を受けた曹操は、そう言っただけで口角を上げた。助かった、と思った訳では無かった。

兵力では大きく劣るとはいえ、国力ではそれ程ひけをとらない。むしろ、袁紹軍はその兵力に対して国力、つまりは生産力が低すぎる。守りを固めて持久戦に持ち込めば必ず勝てる、と自信があった。

しかし、今という時期に戦いたくなかったのも事実だ。というのも、彼女の目論見通り、献帝を保護する話が進んでいたからである。このまま献帝を、ひいては漢帝国を手中に納めるまでは、余計な事に関わりたくはなかった。

しかし、曹操の計画は思わぬ形で崩れる事となった。献帝が拉致

されたのである。

拉致、という言葉は正確ではないかもしれない。外戚の一部が董卓軍の下級士官だった李確、郭汜を引き込んで、献帝を連れて長安へと強引に遷都をしたからだ。曹操の庇護下に入る事で、権力を失うのを恐れたための強攻手段だった。しかし、曹操からしてみれば拉致と変わらなかった。

曹操の眉間に歯痒さでしわが寄る。すぐにでも長安に乗り込んでいってやりたい衝動に襲われていた。夏侯惇などは乗り込む気満々で、妹の夏侯淵に諫められている始末だ。しかし、今それをする訳にはいかなかった。もしそんな事をすれば、これまで積み上げてきた物が全てふいになってしまう。

「止めなさい、春蘭。これは、まだその時ではない、という事よ。焦る必要は無いわ」

夏侯惇に向けた言葉ではあったが、それは自分自身に対して言った事でもあった。曹操は怒りを押し殺し、再び時が訪れるのを待つよりなかった。

李確と郭汜の両名は董卓軍の将として月に従い、安定から洛陽へと移った。そこで見た都の暮らしは、涼州で育った者達の目には大層眩しく映った。急に洛陽という大都市を治める事になったため、董卓軍は組織の末端にまで目が行き届かなくなり、李確達は軍規を犯して略奪を働いてしまう。すぐに捕らえられた彼等は、軍規に則

つて処刑される事となった。しかし、直属の上官である霞は2人を処刑する直前、脱走される失態を犯していた。何とか汚名を返上しようと思死に搜索するも、遂に2人を見付ける事は出来なかった。

そうして連合軍が勝利し、諸侯がそれぞれの本拠地に戻った後、2人は洛陽へと舞い戻り、盜賊まがいの事をやっていた。そこを外戚に拾われた訳である。

李確、郭汜共に、最初の内は分不相応な官職に満足して、外戚の駒として彼等の思惑通りに動いていた。しかし、思い上がった2人は近隣の村々で略奪を行い、若い娘を拐う暴挙を行い始める。本来なら手綱を引かなければならない外戚達も、略奪した物の一部を受け取り、むしろ助長する始末。

こうして、正常さを取り戻しつつあったこの国の政治は、さらに混乱の度合いを深めていくのであった。

第3章・長安編・第3話〈曹操の誤算〉（後書き）

という事で第3話でした。

オリキャラとして李確、郭汜の2人を出します。李確の『確』の字は人偏、郭汜の『汜』は三水に巳ですが、携帯では出ない字なので代替えの字を使います。

ちなみに、この話では馬騰と鳳徳以外のオリキャラはほとんどが男性です。終盤に、ひよっとすると女性のオリキャラを出すかもしれませんが。

次話から大陸の情勢も激しく動き出す事になりますので、またよろしく願います。

第3章・長安編・第4話〈徐州陥落〉

徐州彭城の城内において、劉備軍の將が集まり緊急の会議が開かれていた。議題は先程訪れた使者への対応である。

「私は反対です。袁術と同盟を結ぶなど」

関羽の言った通り、袁術からの使者は同盟の申し込みにやって来たのだった。それに対し、関羽だけは全面的に反対したものの、諸葛亮や鳳統は不安点を指摘しつつも賛成した。

袁術が同盟を持ち掛けてきた理由にはつきりとしていない。しかし、袁術と袁紹の姉妹仲の悪さを考えれば、それが理由かとも思う。とすれば、袁紹に次ぐ勢力を誇る袁術との同盟は利が大きい。それが2人の軍師の考えだった。孔融軍と共同戦線を張るとはいえ、戦力差は歴然としている。袁術軍の戦力があれば互角以上に戦えるはずだ。

しかし、そこには問題もあった。袁術が果たして信用できるのか。そして、民の事を顧みない政治を執っている袁術と同盟を結んでもよいのか、という事だ。民の幸せを第一に考える桃香の政治とは真逆である。

諸葛亮が説明を終えると、そこにいる者達の視線が桃香へと集まる。後は君主である桃香の判断に任せるだけだ。

「袁術さんと同盟しよう」

「よろしいのですか？」

そう言ったのは、唯一反対の立場をとっていた関羽だった。自分の意見が退けられた事に不満を抱いた訳では無い。ただ、どうしても袁術に対する不信任は拭えない。

「私もね、袁術さんが信用出来るかどうか、正直分からないの。でも、分からないなら信じてみようと思う。それに、私達だけじゃ袁紹さんに勝つのは難しいんだよね？ なら、同盟しなくちゃ駄目だよ。今は、この徐州を守る事を考えないと」

真剣な眼差しで、関羽だけでなく全員に向けて自分の思いを述べた後、大丈夫だよ、と笑顔を見せた。桃香が決意をしっかりと固めているのなら、関羽にはこれ以上言う事は無かった。

「じゃあ、愛紗ちゃんと雛里ちゃんは予定通り先遣隊を率いて出陣を。朱里ちゃんは私と使者の方に会ってもらえるかな？」

「鈴々は何をしたらいいのー？」

諸葛亮が、はい、と返事をするのと同時に鈴々が尋ねる。小さな体を少しでも目立たせる様、椅子の上に立って手を大きく挙げていた。その姿に桃香の頬は思わずほころんでしまった。

「鈴々ちゃんには本隊の出陣準備をお願いするね。白蓮ちゃんと星ちゃんも手伝ってくれる？」

現在、客将としてここに身を置いている公孫賛と趙雲も反対するつもりはない。2人は歯切れよく返事をする。テーブルを挟んだ反対側では、鈴々が関羽に、行儀が悪い、とばかりに小さな尻をひっぱたかれていた。尻を押さえながら文句を言うその姿に、当事者の

2人を除く全員から笑いがこぼれた。

江東平定の任を帯びて寿春を発った孫策は長江を渡河し、南岸の大都市である建業を半包囲する形で部隊を展開させていた。焦って攻撃する事はせず、じっくりと攻める構えを取っていた。そんな孫策の前に1人の少女が姿を現した。

「ご苦労だったわ、明命。で、袁術の動きはどうなの？」

孫策と共に天幕の中にいた孫権と周瑜は、孫策の言葉を聞くまで少女の存在に全く気付かなかった。2人が慌てて孫策の視線を追うと、その先には長い黒髪の少女が片膝をつき、頭を下げていた。

少女の名は周泰、字は幼平。潜入調査や破壊活動等を得意とする、孫策配下きつての作業員である。彼女は孫策が寿春を離れた後もそこに残り、袁術の動向を探っていたのだった。

「はい、袁術は徐州牧の劉備と同盟を結んだ後、兵をまとめて徐州へと進軍を始めました」

その報告を受けて驚いた顔を見せる孫権。それに対し、孫策は面白そうにわずかに笑みを見せるだけで、周瑜にいたっては眉一つ動かしていない。

「まさか劉備と同盟とはな。袁術を焚き付け過ぎたのではありませんか？」

周泰の帰還により中断したものの軍議の最中だったためか、周瑜の口調は孫策の友人ではなく、孫策軍の軍師としてのものだった。一方、主である孫策は普段の様に飄々とした雰囲気崩さない。

「いいじゃない、上手くいったんだから。それより、うちの軍師様はこんな好機を黙って見逃すのかしら？」

もちろん、そんなつもりは更々無い。袁術の下から離れて影響力の強い江東にいる上に、袁術自身も本拠地である寿春にいない。独立の企図を実行に移す機会としては、今を置いて他に無いのだ。

「そうよね。なら、邪魔者にはとっとと消えてもらいましょうか」

孫策の纏う空気からいつもの陽気さが消え、その瞳には殺気が宿った。

それからの孫策軍の行動は早かった。袁術より派遣されていた監視役の将を殺す。猛獣の如き孫策の戦い振りに恐怖した兵達は降伏建業にいる内通者に連絡を取って城門を開けさせ入城したのは、まだその日の夕方だった。

孫策が独立した、と江東一帯に広まると、各地の豪族達は次々に帰順の意を示し始めた。もちろん、全ての豪族が孫策を支持した訳では無い。大きな勢力を持つ豪族のほとんどが孫策不支持に回ったが、それでも江東の6割近い豪族が味方に付いた。寿春を発つ時には五千人程だった兵は、わずか数日の間に数万人にまで膨れ上がった。

その様子を見ながら、姉妹は改めて母の偉大さを思い知る。と同時に、孫策は自分の肩にのしかかる期待の重さに苦しくなる。

ここにいる者達は孫策を支持している。だがそれは、彼女が孫策だからではない。彼女が孫堅の娘だから、である。自分に母、孫堅に比肩、あるいはそれを越える力がある事を示さなければ、彼等にすぐ見限られるだろう。

下手は打てない。1度の失敗で全てが終わる。母様の誇りも、私の思いも全部。

自らを認め、戴いてくれている者達を、まるで親の敵を見るかのように睨む孫策の手が不意に握られた。

「蓮華……」

ポツリと妹の名を呼ぶ。

「……私は将として、姉様の足元に及ぶくもありません。それでも私は孫伯符の妹、孫仲謀。たとえ姉様の代わりは務まらなくても、姉様と共に孫家の旗を支えるくらいの事はしてみせます。ですから、その様に1人で全てを背負い込もうとするのはお止めください」

孫権は両手で姉の右手を優しく握り、強い眼差しで訴えた。

私では全てにおいて姉様に敵わない。それでも、姉様に全てを押し付ける様な真似はしたくない。姉様の隣に立ち、姉様と同じ景色を見てみたい。

妹のそんな思いに気付いたのか、孫策はその体を優しく抱き締め
た。そして、耳元に口を持っていく。

「ありがとう、蓮華。でも、そんなに自分を卑下するものではな
いわ。……きっと、王としての才は貴方の方が上なのだから。」

きっと、より後は心の中で呟いた言葉だ。誰に評された訳でも無
いし、親友である周瑜にも言った事は無い。ただの勘だ。

だが、この勘には絶対の自信を持っている。いつか家督を妹に譲
る日が来るだろう。だからこそ、妹が一人前になるまでは自分が矢
面に立たねばならない。

妹を離れた孫策は群衆の方へと向き直る。孫権の瞳には、姉の大
きな背中が映っていた。

独立を果たした孫策の下に集まってきたのは兵ばかりではない。
様々な物資や金もそうだが、何より大きいのは、各地に潜伏してい
た旧臣達が戻ってきた事だ。

「よく無事に帰ってきてくれたわ、思春、穩」

特に孫策が喜んだのはこの2人だ。

1人は甘寧、字は興霸。孫策配下の将にあつて、唯一孫策と互角
に打ち合える武人である。

もう1人は陸遜、字は伯言。周瑜の弟子で将来を嘱望される軍師だ。

そして、この場にはもう1人、先日までいなかった人物の姿があった。孫策の隣に立つその少女の名は孫尚香。孫策、孫権の妹である。姉譲りの淡い桜色の髪をしているが、まだ幼いせいか、2人の姉と違い体の凹凸は少ない。

兵、将共に揃った事で、孫策は計画を次の段階に進める。

彼女は揃った戦力を2つに分ける事にした。1つは孫策自ら率いる本隊。周瑜や周泰を伴い、袁術の本拠地である寿春を攻略する。

もう1つは孫権を大将にした部隊。こちらは江東で、孫策に帰順しなかった豪族の討伐を行う。孫権も含め、甘寧や陸遜など経験の浅い将が多いため、古参の将である黄蓋もこちらに入った。

こうして孫策は江東において独立を果たし、天下取りへと名乗りを上げるのだった。

孫策が独立した事など知る由も無い袁術は、劉備と共に袁紹と戦うため、自ら兵を率いて北進、徐州へと入っていた。馬車の中で蜂蜜水を飲みながらご機嫌の袁術は、外の景色に目を遣った。

季節は春。辺り一面に色とりどりの花が咲き誇っている。その景

色を見ながら、袁術は妄想を膨らませていった。

「七乃。あの花から取った蜂蜜は、どんな味がするのかなのう」

「そうですねえ。こちら辺は穀倉地帯として有名ですから、きつと、とつても甘い蜂蜜が取れると思いますよ」

「とつても甘い蜂蜜……」

張勳の言葉を反芻する袁術。彼女の頭の中は、とつても甘い蜂蜜で一杯らしい。手に蜂蜜水を持っているにもかかわらず、ダラダラとよだれを垂らしている。張勳は嬉しそうな顔でよだれを拭き、ついでに蜂蜜水でベトベトになった口の回りを拭いた。

「決めたのじゃ！ この徐州を妾の物にする！」

「ええっ!？」

この発言にはさすがの張勳も驚きを隠せず、次の言葉を繋げられなかった。それには構わず、袁術は話し続ける。

「妾が劉備と同盟を結んでやったのは、麗羽姉様に徐州を渡したくないからじゃ。妾が徐州を取ってしまったえば麗羽姉様に渡さずにするむし、蜂蜜も全て妾の物に出来る。まさしく一石二鳥じゃな。そうである、七乃？」

同意を求められた張勳は、心の中で、やっぱり馬鹿だな、とため息を吐く。確かに一石二鳥かもしれないが、得る物に対して失う物が大きすぎるからだ。同盟を結んでいる相手を攻撃する様な真似をすれば、諸侯からの信用は完全に地に落ちる事になってしまう。

しかし、諫めようと口を開きかけたところで止めた。元々失墜する信用が無いのだ。何を今さら、という感じだ。それに、このままの方が後で美羽様の困った顔が見られそう。張勳の頭の中を、そんな不届きな考えが横切った。

「分かりました。じゃあ、すぐに手配しますね」

張勳は馬車を停止させると、將軍達を呼び寄せテキパキと指示を出した。彼女は性格に難があるものの、決して無能ではなかった。

張勳の指示通りに動いた袁術軍は、周辺の城を次々落としていく。徐州と揚州の州境にある城には、以前はある程度の兵力が配置されていた。だが、同盟が成立した事で兵力の一部を袁紹との戦いに回ってしまった。そのため、大した抵抗も出来ずに城を落とされる羽目になったのである。

袁術が一方的に同盟を破棄して攻撃を仕掛けてきた事は、すぐに桃香達の耳に届いた。すでに劉備軍は袁術軍との合流地点に到着しており、そこに簡素な陣を形成していた。

報告を聞いた桃香は愕然とする。まさかそんな事が、と、信じられないというより信じたくない様子だ。

「袁術の奴！ 鈴々がぶっ飛ばしてやるのだ！」

蛇矛をブンブン振り回し、鈴々は憤りを隠そうともしない。今にも1人で乗り込んでしまいそうな彼女を、趙雲が羽交い締めにして止めている。

そんな様子を見ながら諸葛亮は臍を噛む。袁術が裏切る可能性は考えていた。しかし、裏切るとすれば袁紹との戦いが始まってからだと考えていたのだ。戦況が膠着するか不利になるかした時に不穏な動きをされるかもしれない、そう思っていた。まさか、州を跨いですぐに行動を起こすとは、考えてもみなかった。

「……どうしよう、朱里ちゃん？」

桃香は絞り出す様に声を出す。その顔には焦りや不安がありありと出ていた。

「とりあえず陣をたたみ、彭城に退きます。この兵力差で野戦はしたくありませんから」

袁術軍の正確な数は分からなかったが、最低でも三万以上の兵力だと報告を受けていた。対する劉備軍は先遣隊に兵を割いている事もあり、一万強しかいなかった。

彭城で籠城戦を行い時間を稼ぐ。その後、引き返して来た先遣隊と挟撃を仕掛ける。これが諸葛亮の腹積もりだ。

だが、そんな計画を吹き飛ばす報告が届いたのは、陣の撤収が全て終わった後だった。

彭城陥落。

この報告を聞いた時、さすがに諸葛亮も驚いた。はわわ、と繰り返し呟くだけで、しばらく頭が回らなかった。

他の支城と違い、彭城にはある程度の兵は残してある。ここから帰還するくらいの時間は持つはずだった。しかし、城の守備を任されていた者が大軍の前に戦意を喪失。城は一戦も交える事無く明け渡されてしまった。

諸葛亮は頭を切り換え、次の策を講じ始める。やはり野戦はしたくない。どこか近隣の城にこもって籠城戦を、と思う。しかし、近場には小城しかない。備蓄されている物資も乏しく、大軍相手に何日も持たせるのは不可能だった。

そんな状況のところ、新たな報告が飛び込んでくる。それは、袁術軍の襲来を告げるものだった。

せめて陣がそのまま残っていれば、結果は違っていたのかもしれない。しかし、何の備えも無く、半ば奇襲された感じで戦闘に突入してはどうしようもなかった。

この一戦において、劉備軍は壊滅的な大打撃を被る。桃香を連れて逃げ出すのがやっと、という有り様だ。

何とか追撃をかわし、安全な場所まで逃げてみれば、残った兵は千人にも満たない。しかも、そのほとんどが傷を負っている。将も兵も皆一様に口をつぐみ、うずくまっていた。

そんな中、すつくと立ち上がる人物があった。白い戦装束に身を包む趙雲だった。彼女は愛槍を携え歩き出す。

「どこへ行くんだ？」

趙雲の背中に公孫贇が声を掛けた。足を止めて振り返る。

「忘れ物を取りに彭城まで」

「なっ……！ 何考えてるんだ、お前は。大体、忘れ物って何だ？」

「幽州より持ち出した秘蔵のメンマがありません。あれを袁術ごときに渡す訳にはいきませんまい？」

メンマぐらいで。そう言おうとして、公孫贇はハツとした。袁紹に破れて幽州から脱出する時も、今回の様に何かを持ち出す余裕など無かった。

そういう事か、と思い、公孫贇はチラリと桃香の方を見た。

「死ぬなよ、星。」

「無論。何しろ、まだ仕えるべき主君にも巡り会っていないのですからな」

フツ、と涼しく笑うと、趙雲は1人その場を去っていった。

第3章・長安編・第4話〈徐州陥落〉（後書き）

という訳で、第4話でした。

意外な方向からの攻撃で、たった1話で徐州が落とされました。原作では曹操にやられました。この話では、彼女の目は中央に向いたままです。

後2話程は主人公が出てきませんが、これからもよろしくお願いします。

第3章・長安編・第5話／別離

「ふむ、随分と静かだな」

彭城へと忍び込んだ趙雲は、街の様子を見て呟いた。まだ宵の口だというのに、街中には人っこ一人いない。

「とはいえ、私がここにいると知られる訳にはいかな」

さらに呟くと、趙雲は民家の屋根に飛び上がる。そして、大きく開いた胸元から何かを取り出すと、ドユワツ、と叫びながらそれを顔に着けた。

「美と正義の使者、華蝶仮面見参！」

そう名乗りを上げてみたところで、聞いている者は誰もいなかった。しかし、恥じ入る様子は微塵も見せない。

趙雲の顔に着いているのは、以前武威を訪れた時に手に入れた、蝶を模している仮面である。そう、すでに1年近く前になるが、武威の街で一刀と月をゴロツキから守った華蝶仮面の正体は趙雲であった。彼女はそのまま屋根の上を駆け抜け、一気に城へと迫った。

意外なほどに警備は緩く、容易く忍び込む事が出来た。向かう先は離れになっている建物。桃香の母が暮らしていた屋敷だ。

そつと中を窺うが、人の気配は感じられない。扉に手を掛け、ゆつくりと押し開く。部屋の中は争った、というより、家捜しをされた様な荒れ方だった。死体はおるか血痕すら無い事にホツとしつつ

も、袁術に囚われた可能性を考え、屋敷を後にしようとする。その時、外から男の声が聞こえ、趙雲は咄嗟に物陰に隠れた。

扉が開くと、そこには数人の男達。そして、その内の1人が暴れる少女を屋敷の中に突き飛ばした。床に倒れる少女を見下ろし、男達は下卑た笑いを浮かべる。

「ゲス共が……!!」

怒りを孕んだ声で呟き、趙雲は物陰から躍り出た。一瞬で4人の男を打ち倒す。少し離れた位置にいた最後の1人こそ剣を抜く暇があったが、結局はそれだけ。石突きでみぞおちを突かれて気を失った。

「お主、大丈夫だったか？」

そう言いながら、趙雲は槍を下ろして振り返る。助けた少女の顔は、趙雲には見覚えがあった。桃香の母に付いて身の回りの世話をしていた侍女だ。

何か分かるかもしれん。趙雲は少女に尋ねる。

「ここには劉備殿の御母堂が住まわれていたはず。お主は何か知らぬか？」

「は、はい。御母堂様は袁術軍が城内に乗り込んで来る直前、護衛の方達に守られて城からお逃げになりました」

それを聞いて、趙雲はとりあえず安心した。上手く逃げ仰せたかは分からないが、最悪の事態だけは回避出来たようだ。

「あの、貴方様は……？」

侍女がおずおずと尋ねた。趙雲が彼女の顔を覚えていたのなら、逆もそうであるはずだ。だが、そう尋ねたという事は、彼女は目の前の人物が趙雲だと気付いていないのだろう。服装は普段のまま蝶の仮面を着けただけ。そんな格好であるにもかかわらず、だ。

趙雲本人は、完璧な変装、とても思っているのだろう。一切の淀み無く、華蝶仮面であると名乗りを上げた。

そこで緊張の糸が切れていたのか、扉が開くまで外の気配に趙雲は気付かなかった。入り口に立つ男と趙雲の目が合う。男が何かを叫んだのと、趙雲が剣を拾って投げ付けたのはほぼ同時。剣を額に突き刺され、男は吹き飛ぶ様に後ろに倒れた。

ヒッ、と小さな悲鳴が後ろから聞こえたが、それに構っている場合ではない。剣を投げて空になった左手で侍女の腕をつかみ、半ば無理矢理に立ち上がらせて屋敷から飛び出す。すでに周囲には敵兵が集まり始めていた。

自分1人なら強引に突破する事は可能だ。だが、侍女を連れていくこの状況では無理は出来んか。趙雲は齒噛みし、兵の薄い方へと駆け出した。

さすがは一騎当千の将である。行く手を阻む敵を、右手1本で槍を手繰り蹴散らしていく。それでもやはり、多勢に無勢。次第に追い詰められ、袋小路へと追いやられてしまった。

『今はまだ剣や槍だからよいが、弓を使われたら守れぬかもしれ

ん

最初は、2人共捕まえてひんむいちまえ、などと下劣な声が飛び交っていた。だが、仲間が次々倒されていく内に、彼等にそんな余裕は無くなっていた。今はある程度距離を取り、囲む様にして重圧をかけている。

「さて、どうしたものか……」

壁と自分の背中で侍女を挟む様にしながら守る趙雲は、そう呟いた。周囲を鋭い視線で睨み付ける彼女にも、普段の余裕は無くなっていた。

「華蝶仮面様……」

不意に趙雲の耳へ声が届いた。今にも消え入りそうな細かい声だったが、恐怖のせいだろう、声が震えているのがはっきりと分かった。声と同時に侍女の手が趙雲の背中に触れたが、こちらもやはり、ガクガクと震えている。

趙雲は今更ながら思い出した。今の私は常山の昇り龍、趙子龍ではない。美と正義の使者、華蝶仮面である、と。

『そう、私は正義。ならば、私の前に立ち塞がる奴等は何だ？ 奴等は悪！ 正義が悪に屈する道理は無い！』

趙雲の瞳に火が灯る。

「安心しろ。お主の事は何があっても守ってやる」

肩越しに微笑みそう囁いた。そして、改めて袁術軍の兵達へ向き直る。

「聞けい！ 我が名は華蝶仮面！ 美と正義の使者だ！ 悪党共、死にたい奴からかかって来い！」

それは名乗り、というより大喝に近かった。その迫力に気圧され縮み上がる兵達。一方、趙雲の萎えた気組みは奮い立つ。槍を持つ手にも自然と力が戻った。

趙雲が彭城へ桃香の母の救出に戻った後も、劉備軍はその場から動かなかった。趙雲や関羽達との合流を待っていた訳では無い。落胆した桃香が頑なにその場を動かこうとしなかったためだ。いつ追っ手が現れるか分からない以上、一刻も早く移動するべきなのだが、諸葛亮の言葉は桃香に届かずにいた。

「……もう駄目だよ。せつかく皆で頑張った徐州も奪われて、愛紗ちゃんやお母さんも……。全部私のせいだ……。私が、私が……」
膝を抱え込んで座る桃香は、膝に顔を突っ伏してうわ言の様に繰り返している。だが、これ以上、ただ落ち込ませておく訳にはいかなかった。

「桃香、いい加減に……」

「お姉ちゃん、嘘つきなのだーっ！」

業を煮やした公孫贇が桃香を叱咤しようとしたのと同時に、それまでほとんど黙っていた鈴々が大声を上げた。諸葛亮や公孫贇がいくら声を掛けても反応を示さなかった桃香の体が、その大声のせいかわくつと跳ねた。公孫贇は口から出しかけた言葉を飲み込み、口惜しさを感じつつも後を鈴々に任せる。そんな思いに気付いた様子も無く、鈴々は感情のままに言葉を繋げた。

「桃香お姉ちゃん、鈴々と始めて会った時に言ったのだ。鈴々みたいにお父さんやお母さんを亡くして、寂しい思いをする子がいないですむ世の中になりたい。皆が仲良く暮らせる国にする、って。そのため精一杯頑張ろう、って、あの時3人で誓ったのだ。なのに、こんなところで諦めるなんて、そんなのお姉ちゃんじゃないのだ！」

今にもこぼれそうな涙をこらえながら、鈴々は大声で叫ぶ。そして、クルリと3人に背を向けると大股で歩き出した。どこへ行くんですか、と慌てて諸葛亮が声を掛けた。

「これからお城に行つて、鈴々が袁術の奴をぶつ飛ばして来るのだ。それで、また皆でこの国をよくするために頑張るのだ」

「無理ですよ！　いくら鈴々ちゃんでも1人ではどうにもなりません！」

「無理じゃないのだ！　愛紗がいないから鈴々がやらないと。鈴々がお城を取り返して、お姉ちゃんを元気にしなきゃいけないのだ！」

珍しく大声を出した諸葛亮に、それ以上の声で鈴々は返す。

「……じゃないと、愛紗もお姉ちゃんも鈴々の傍からいなくなっちゃう。鈴々、また1人ぼっちになっちゃう。……もう、1人ぼっちは嫌なのだ！ だから、無理でもやらなくちゃならないのだ！」

そう叫んだ鈴々の肩は小刻みに震えていた。諸葛亮も公孫贇も何も言えない。しかし、このまま鈴々を行かせる事も当然出来ない。何とか言葉を探そうとするそんな2人の横を、1つの影が抜けた。桃香だった。

「駄目だよ！ 鈴々ちゃん！」

「離すのだ！ 鈴々が行かなきゃならないのだ！」

桃香は鈴々を後ろから抱き締めた。それを振りほどこうと、鈴々はその瞳から滝の様な涙を流しながら激しく暴れる。臂力の差を考えばすぐに振りほどかれてしまいそうだが、桃香は必死にしがみついて鈴々を離さない。そうしながら、何度も何度も大声で謝り続ける桃香の両の瞳からも、涙が激しくこぼれていた。

その姿を見ながら、公孫贇は情けなく感じた。もちろん目の前の2人が、ではない。自分自身が、だ。

私が一番長い付き合いにもかかわらず、何も出来なかった。親友と自負しているし、桃香もそう言ってくれているのに。そんな情けなさを押し隠す様に、公孫贇は唇を強く噛み締めた。

袁術が同盟を一方的に反故にした事は、すぐに先遣隊を率いる関羽の耳にも届いた。孔融に使者を送って事情を説明すると、部隊をまとめて彭城へと引き返す。その途中、彭城陥落の知らせが入り、さらに続けて本隊壊滅の知らせが届いた。

「何と言う事だ……。雛里よ、我等はどうすればよい？」

「すでに占領されてしまった以上、このまま彭城へ向かう訳にはいきません。桃香様の後を追いましょう」

桃香が無事に脱出した事を聞いたものの、さすがにショックを隠せない。鳳統も驚いた様子で、あわわ、と呟いていたが、関羽に尋ねられて落ち着きを取り戻した。

桃香がどういう経路で逃げているかは、もちろん分からない。しかし、西に逃げた事は分かっている。北は青州で袁紹と孔融が争い、南の揚州は袁術が治める土地だ。そして、東に海が面しているこの状況で逃げるとすれば、それは西しかなかった。

転進した関羽隊の遙か前方に、砂塵を巻き上げて疾走する1台の馬車が見えた。その周囲には、護衛とおぼしき劉備軍の兵士達の姿もあった。大分距離があつたが、一番見慣れたその軍装を見間違えるはずがない。

そんな馬車の後方には、別の一団も見えた。馬車とは比べ物にならないほどの砂塵をもうもつと上げるのは、袁術軍であつた。

「皆の者、前方にいる友軍の援護をするぞ！」

言うのが早いか、関羽は馬の腹を蹴り、そのスピードを上げた。あ

そこに桃香様がおられるかもしれない。そう考えた時、関羽の体は自然と動き出していた。

鳳統や兵達も慌てて後を追うが、差は縮まるどころか徐々に開いていく。無理も無かった。関羽の跨がる馬は、反董卓連合解散の折に馬騰軍から譲り受けた涼州馬の中でも一番の駿馬だ。赤いたてがみをなびかせて疾駆する姿は、まるで火の玉の様であった。

「おい、その馬車には誰が乗っている!？」

護衛の兵に並びかけると、関羽は蹄の音に負けない様に大声で尋ねた。いきなりの事にギョツとした顔を見せたものの、相手が関羽だと分かると顔の強張りも取れた。

「この馬車には、劉備様の御母堂様がお乗りになっています!」

「義母上が!?! ……分かった。ならば、お前達は先に行け! 奴等の相手は私がする!」

馬車の中の人物が桃香でなかった事に若干の落胆を覚えたものの、それが助けられない理由にはならなかった。ましてや、義姉の母であれば自分にとっても義母だ。楼桑村で旅立ちを決めた時も、徐州に移ってから、自分達に優しく微笑んでくれる義母を守る事に、迷いなどあるはずもなかった。

彼女も鈴々と同じで、幼い頃に両親を亡くしていた。優しかった実母の面影を、少なからず桃香の母に重ねていた。もっとも、それを桃香に伝えた時には、

「そんな事無いよ。怒ると物凄く怖いし。私なんか、家の前を流

れる川に何回投げ込まれたか……」

と、苦笑いをしながら言っていたが。

馬の足を止めると、関羽は馬首を返して接近して来る袁術軍へと目を遣った。距離は十分空いている。部隊と合流して体勢を整えるくらいの時間はあるな。そう思うと、関羽も大きく息を吐き、乱れた呼吸を整えた。

関羽隊と袁術軍の戦闘は、結果だけ見れば関羽隊の勝利に終わった。桃香の母の乗る馬車を無事に逃がし、袁術軍を撃退したからだ。

しかし、内容に目を向ければ、どんなに鼻肩目に見ても分けが精一杯だろう。それほど損害を出していた。青州との州境から強行軍を続けていたため兵の疲労が激しく、普段通りの動きが出来なかったのが原因だった。

これにより、関羽達は桃香との早期の合流を諦め、追っ手をおかわすために進路を変えざるを得なくなるのであった。

一体どれ程の間泣き続けていただろうか。しかし、泣き張らした桃香の顔からは、すっかり迷いは消え去っていた。

「ごめんね、朱里ちゃん、白蓮ちゃん」

「いえ、私の方こそ申し訳ありませんでした。袁術さんの危険性に気付いていながら、みすみすこの様な事に……」

謝り返す諸葛亮に対し、桃香は笑って首を横に振った。徐州の蜂蜜が欲しい、という理由で袁術は同盟を破棄したのだ。それを読むのは、いくら諸葛亮でも不可能だったろう。

「それより、これからどうしたらいいんだろう？」

前向きな問いに対し、諸葛亮はもう一度謝る。

「申し訳ありません。この状況では、徐州の奪還は不可能です。今は一時も早くここを離れるべきでしょう」

「でも、どこへ行くの？」

「荊州へ行きましょう。反董卓連合に参加した際に、桃香様は劉表さんと懇意にされていた様ですし、匿って頂ける可能性は低くないかと。……それに、私達が学んでいた私塾、水鏡女学院もありますから。水鏡先生も、きつと力になってくれるはずですよ」

桃香がへこたれ、泣いていた時もずっと頭を回転させていたのだろう。諸葛亮は即答してみせた。ただ、それに、の部分で一瞬間が空いたのは、やはり鳳統の事を思ってた。

「大丈夫だよ、朱里ちゃん。雛里ちゃんも愛紗ちゃんも、きつと」

思いがけず心の中を見透かされ、諸葛亮は恥ずかしくなりうつむいてしまった。

徐州から荊州へ向かうには、かなりの距離を移動しなければならぬ。当然、他の諸侯が治める土地を通って、だ。見つかった場合、すんなり通してくれる保証は無い。大勢力である袁術と敵対している以上、捕らえられる可能性も決して低くはないだろう。いくら千人にも満たないとはいえ、兵を連れて移動すれば目立つ事この上無い。

そこで、諸葛亮は兵を捨てて移動する事を進言した。兵にはこの場で鎧を脱がせ、農民として暮らしてもらおう事になるだろう。

千人足らずの兵では、戦闘になっても大して役に立たない。ならば、いつそゼロにしまい、発見される可能性を極限まで低くした方がよい、というのが諸葛亮の考えだった。

それを聞いた桃香は一瞬悩んだ。ここで別れた兵達は、袁術の過酷な支配の下で暮らさなければならぬ。それを思うと心が痛む。

桃香が苦悩の表情を浮かべていると、近くにいた兵の1人が立ち上がった。

「劉備様。俺達は、皆劉備様のお役に立ちたくて兵士になったんです。だから、劉備様の足を引っ張る事になるなら、俺達はこのに残ります。……大丈夫です。心配しないでください」

桃香がすまなそうな顔を見せたため、その兵は慌てて付け足した。その後ろの兵達も続く。桃香は、ありがとう、ごめんなさい、と頭を下げるしかなかった。

こうして兵のほとんどが去ったところで、この場に趙雲の姿が無い事に、桃香はようやく気付いた。それを尋ねられた公孫贄は正直に答えてよいものか、ためらってしまった。そこへ、涼やかな声が響く。

「私ならここにおりますぞ、桃香殿」

笑顔で振り返った桃香だったが、声の主の姿を見て絶句した。木にもたれ掛かって立つ趙雲は、その白い服も透き通る様な肌も真っ赤に染まっている。服は所々裂け、無数の裂傷が見えるが、どれもかすり傷程度。ここまで服や肌を染める程では無いはずだ。実際、趙雲が赤く染まった理由は返り血だった。

「大丈夫なの、星ちゃん!？」

3人は慌てて駆け寄るが、心配するな、とばかりに手で制す。

「メンマを取りに戻ったのですが、そこで見つかってしまいましたな。面目次第もない」

そう言って自嘲気味に笑う。しかし、正面に立つ桃香の顔は険しかった。

「本当に？ まさか、私のお母さんを……」

しまった、そう思った。いきなり言い当てられ、思わず顔に出してしまったからだ。普段は抜けているのに意外なところで鋭い。誤魔化せないと感じると、趙雲は正直に彭城での事を話始めた。

「申し訳無い。私が城に着いた時には、すでに桃香殿の母君は脱出されておりました」

趙雲は頭を下げた。不意にその体は柔らかい物に包まれる。気が付くと、桃香に優しく抱き締められていた。

「と、桃香殿。御召し物が汚れます」

「ごめん……。ごめんね、星ちゃん……」

趙雲にとって、謝られるとは想像もしていなかった。命令された訳ではなく、彼女の独断だったのだ。むしろ、助けられなかった事を責められるとさえ思っていた。

「……でも、もうこんな無茶はしないで。これからの私には、星ちゃんの力が必要なんだから。お母さんが助かって、星ちゃんが無事でなかったら意味が無いよ」

そう言った桃香の瞳から一筋の涙がこぼれた。

この人は、自分の母より私の方が大事だと言ってくれるのか。ただの客将に過ぎないこの私を。やはりそうだったか。

趙雲はかすかに笑った。視界をおおっていたもやはスッキリと晴れていた。

桃香から離れると、槍を置いて片膝をつき頭を垂れた。

「この趙子龍、生涯を賭して仕えるべき真の主君に、今巡り会いました。これより我が身、我が武の全ては、劉玄德様のために捧げ

ましよう」

「えっ……？ 星ちゃん？」

「まあ、これからもよろしく頼みます、という事ですよ、桃香様」

いきなりの事に呆気に取られている桃香に向かい、趙雲はいつも通りの悪戯っぽい笑みを見せた。

「ケホッ……。迷惑をかけてしまつてごめんなさい、愛紗さん」

「気になさらないでください。さあ、どうぞ」

桃香の母は関羽の差し出した湯飲みを受け取り、口を付けた。猛烈な苦味が口の中に広がるが、我慢して喉の奥へと流し込んだ。

桃香の母を救出した関羽は、追撃をかわすための逃避行を行っていた。その際、少しでも人目を避けるために兵のほとんどを農民に戻す策を鳳統が献策したのは、さすがに同門の士といったところだろう。

今現在は激しい雨を避けるため、廃寺の中にいた。疲労と心労が重なったせいも、桃香の母は前日から体調を崩している。本来なら医者に見せたいところだが、この雨の中を無理する訳にもいかない。取り敢えずは、薬草の知識のある鳳統が作った薬湯に頼るしかない。

った。

桃香の母や護衛の兵達もすでに休み、自分達もそろそろ、と鳳統が思ったところで、関羽は青龍偃月刀を手に立ち上がった。何事かと見上げると、関羽は入り口を睨み付けたまま、動くなよ、とだけ言った。そのまま入り口にジリジリと寄っていく。そして、扉の脇まで行くと呼吸を整え、偃月刀を握り直す。次の瞬間、扉が外から勢いよく開けられた。

「はあーっ！」

裂帛の気合いと共に降り下ろされる偃月刀。しかし、その刃が目標を捉える事は無く、代わりに激しい金属音が響いた。

「貴様は、関羽！」

「なっ……、夏侯惇!？」

互いの名を叫びながらも、2人の黒髪の美女は力を緩めようとはしなかった。

第3章・長安編・第5話〈別離〉（後書き）

という事で、第5話でした。

終盤の桃香と星のやり取りは、演義の長坂坡をイメージしてみたのですが、何ともグダグダな感じですね。設定が違うため、というのもあるでしょうが、文才の無さが如実に出た格好に……。

最後まで読んでいただければ分かりますが、桃香の母には阿斗だけでなく、もう1人別の人物の役割もはたしてもらいます。

ここら辺から次の4章辺りが、一番この話の色を出せるところだと思いますので、頑張っていきたいと思います。

第3章・長安編・第6話〈曹操の時〉

徐州が袁術の手に落ちた事は、すぐさま曹操の耳にも届いた。その報告を受けた時、そう、とだけ返事をし、一瞬だけつまらなそうな顔を見せた。

『貴方なら、私の霸道に花をそえる事も出来るかと思ったのだけ
れど』

袁術ごときに破れ去るのなら、所詮それまで。曹操は頭を切り替え、これから先の事を思索し始めた。

袁術は問題無い。江東で孫策が袁術から独立し反旗を翻した以上、その対処で手一杯のはず。逆に、孫策も同じだろう。

やはり、問題は北の袁紹と西の李確・郭汜だった。

李確達に関しては、すでに外戚の一部と折り合いが悪くなっていた。献帝は現在の状況を憂いており、外戚の中でも献帝に近い者はその意思を酌んでいる。その献帝に近い一派が、以前曹操に献帝の保護を依頼していたのである。そう時間が経たない内に、再び献帝側から曹操に接触を図るのは明白だった。

青州において孔融と戦をしている袁紹は、その次には曹操の治めるエン州に攻め込んで来るだろう。しかし、持久戦に持ち込んで国力の低さを突けば問題無く勝てる。ただし、それを指揮する人材が問題だった。

今現在、曹操が全幅の信頼を寄せる事が出来る将は夏侯淵しかい

ない。その姉である夏侯惇は、確かに曹操の軍中でもっとも腕がたつが、いかんせん直情型であつた。しかも、それを止める事が出来るのは曹操が夏侯淵だけ。とてもではないが、1人で軍を任せるほどの信は無かつた。

広く人材を求めたため、文官武官問わずに有為な人材は増えてはいた。しかし、新しく登用した武官に関しては、どうしても実戦不足であつた。賊でも頻発してくれば少しは補えただろうが、曹操の治世が優れているが故の問題だつた。

そんな中、曹操は夏侯惇とわずかな兵を護衛に付け、自ら偵察へと出掛けた。しかし、袁紹軍への偵察ではない。いくつか予想される進軍経路上で戦場とするのに適した場所は無いか、その選定のためだ。基本的には籠城戦を選択する事になるが、野戦で打撃を与えられるならそれに越した事はない。

そろそろ引き上げようとした時、にわかにかが雲に覆われたかと思つと、雷鳴を伴つて激しく雨が降り始めた。あまりの激しさに帰還を中断し雨宿りの出来る場所を探すと、古い廃寺が近くに見付かつた。これ幸いと彼女達はそこに向かう。

だが、その敷地に入る直前、曹操を夏侯惇が制した。

「華琳様、お下がりください。中に人の気配があります」

一軍を任せる事は出来なくとも、その武と自分への忠誠心は疑いようもない。曹操は言われた通りに兵達の後ろに下がつた。

主の視線を受けながら、夏侯惇と数名の兵は廃寺へと近付いていく。激しい雨は足音を消してくれるため、忍び寄る、という風では

なかった。そのまま今にも崩れ落ちそうな扉の前まで来ると、手にした大剣を握り直した。

「はあっ!」

気合いと共に扉を蹴破る。次の瞬間、雷鳴の様な轟音が辺りに轟いた。しかし、それは金属同士の衝突音だった。

「貴様は、関羽!」

「なっ……、夏侯惇!?!」

2人は同時に相手を認識し、互いの名を呼び合う。しかし、武器を持つ手に込めた力は緩めない。

「貴様、ここで何をしている?」

「それはこちらの台詞だ。なぜ、こんなところに……?」

夏侯惇の問いに対し、関羽もまた問いで返す。両者は激しい鏖迫り合いのままだ。

「双方、武器を収めなさい」

いつの間にか夏侯惇の背後に近付いていた曹操が声を掛けた。それに従い夏侯惇がわずかに剣を引くと、それに応じて関羽も偃月刀を引いた。しかし、まだお互いに不満そうなままだ。

「関羽、貴方の問いには私が答えてあげるわ。私がここにいる理由、それはここが私の治める土地、エン州だからよ」

ハツとした表情を見せた後、関羽は慌てて曹操に頭を下げた。気付かないうちに州を越えてしまっていた。それを見て、フンと鼻を鳴らす夏侯惇とは対称的に、曹操は表情を変えずに関羽を見下ろしている。

「今度は貴方が答える番よ。この私の領内で、貴方は一体何をやっているのかしら？」

「そ、それは……」

曹操の問いに対し、言い淀む関羽。そこに1人の兵がやって来る。

「曹操様、寺の裏手で数頭の馬と馬車を発見しました」

そう報告を受けると、曹操は兵を下がらせて関羽へ向き直る。

「ここで何をしているのか、もし答えたくないのならそれでも構わないわ。ただ、その時はどうなるか、分かっているわね？」

そう言った曹操には、有無を言わせない迫力があつた。さすがに誤魔化す事は出来ない。関羽は正直に事情を話さざるを得なかつた。

「……そう、劉備の母親が、ね。ところで、中に入ってもいいかしら？ 私達も雨に降られて困っているのだけれど」

曹操と夏侯惇は屋根の下に入っていたが、ほとんどの兵は雨に打たれたままだ。断る権利も無いため、関羽は中に入るよう促した。そうすれば、当然だが桃香の母と直接会う事になってしまう。関羽の心配をよそに、騒ぎを聞いて起きてきた桃香の母は曹操に挨拶を

する。

「……貴方、体調が優れない様ね」

挨拶の中に混じった咳を聞き、曹操は断定的に尋ねた。桃香の母は咳き込みながら肯定した。

「春蘭、近くの城に医者への準備をしておく様、使いを出しなさい」

その意外な言葉に明らかに納得のいかない表情を浮かべつつも、夏侯惇は傍にいた兵を捕まえてその旨を伝える。すると、その兵は未だ雷鳴轟く中を駆け出していつてしまった。その背中を見送りながらも、夏侯惇はまだ不満顔のままだった。

そしてもう一人、納得のいかない顔をしている人物がいた。関羽である。

「何なの、その顔は。私の治める土地で困っている者を私が助ける。それがそんなにおかしいのかしら？」

「私達がエン州の民であればそうでしょうが、違う以上、助けて頂く理由がありません」

真剣な表情の関羽の言葉を曹操は鼻で笑う。

「フフン。劉備に従っている貴方の言葉とは思えないわね」

だが、関羽からしてみれば、桃香に仕えているからこそ言える言葉だった。

以前、黄巾賊を討伐した際に曹操と共闘した事があった。その時に、ある程度は人となりを理解したつもりだ。曹操の性質は姉上とは真逆。そこに何らかの利がなければ動かない。これが関羽の曹操評だった。

しかし、関羽はそれ以上は何も言わなかった。義母を医者に見せれるのならば、多少の危険は覚悟の上だった。

翌日、関羽と鳳統は廃寺から一番近い城の中にいた。謁見の間で、桃香の母を助けてくれた事に対して礼を述べる。それに対し、気にする必要はないわ、と返す曹操。しかし、そんな謙虚な言葉とは裏腹に、足を組み頬杖について高い位置から見下ろす態度は非常に高圧的だ。とてもではないが、その言葉を額面通りに受け取る事など出来はしなかった。

「で、貴方達はこれからどうするつもりかしら？」

2人の希望としては、桃香の母の体調が戻り次第、桃香を探しにここを発ちたかった。だが、それは口に出せなかった。大きな問題があるからだ。すると、心の内を見透かした様に曹操が言葉を続けた。

「まさか、劉備を探してあての無い旅を続けるつもりなの？ そんな事をして、今度も大事に至らないとは限らないわよ」

今さら言われるまでもない。それが分かっているから答えられない

かったのだ。忌々しく思い、せめて睨み付けてやろうか、と考えたが止めた。わざわざ曹操の機嫌を損ねる必要も無い。

「関羽。貴方、私に仕えなさい」

そう言われ、関羽は思わず刺す様な視線を曹操に投げ付けてしまった。だが、その反応は折り込み済みだったらしく、視線をいなす様にかすかに笑った。

「別に、劉備を裏切れ、と言っている訳ではないわ。劉備の居場所が分かるまで、客将としていたらどうか、と言っているの。もちろん、劉備はこちらでも捜させるし、母親の面倒を見る事も約束するわ」

関羽は返事に詰まる。本来なら、今すぐにも桃香を探しに行きたいのだ。だが、何の手がかりも無いし、その状況でいつまでも桃香の母を連れ回す訳にもいかない。何より、曹操には彼女を助けてもらった恩があった。

悩む関羽はチラリと横を見る。鳳統の表情は、愛紗さんにお任せします、と言っている様に見えた。

「曹操殿。姉上が見つかれば我等は自由にしてい、という事でよろしいのですか？」

「くどい。この曹孟徳の言が信用出来ないか？」

真っ直ぐに見つめる関羽の問いに、曹操は少し憤ってみせた。

「いえ。……この関雲長、ならびに鳳士元。これより先、我等が

主劉玄徳が見つかるまでの間、我等の力を曹孟徳公にお預けする事を誓いましょう」

頭を下げる2人を見ながら、曹操は彼女達に気付かれない様に口角を上げた。そして、こつと呟く。

「劉備が見つかるまで、ね」

建業を発つた孫策軍は順調に北進し寿春城に迫る。袁術の圧政に苦しんでいた揚州の民は各地で孫策を歓迎し、自ら城門を開け放つたため、道中で被害はほとんど無かった。

そして、圧政に苦しんでいるのは寿春の民も同じであった。さすがに他の支城と違い、ある程度の兵力が残っていたため住民の反乱は抑え込む事が出来た。それでも内側で火種がくすぶっている状態では、兵力で大きく上回る孫策軍に対抗出来るはずもない。袁術の本拠地である寿春城は呆気なく陥落した。

「なぐんか、楽勝だったわね」

「あまり気を緩め過ぎないでよ。まだ、何かあるか分からないんだから」

孫策と周瑜は寿春の城壁の上にあった。彼女達が見つめるのは北の空、袁術がいる徐州の方角だった。

「どうするの？ このまま一気に徐州まで攻め込む？ 私、暴れ足りないのよね」

「馬鹿な事は言わないでよ。蓮華様が江東一帯を制圧するまでは、ここに留まるわ」

ため息混じりに返した周瑜に、孫策はあからさまに不満顔を見せた。そのままの顔で、つまんな〜い、などと言う始末だ。

「袁術のお陰で、揚州は治安も経済も最悪の状況なのよ？ 今は私達に期待している民衆も、自分達の暮らしがよくならなれとなればすぐに離れる事になるの。やる事は山程あるわ」

「……分かってるわよ〜」

口を尖らせて言ったのでは、納得していないのが丸分かりだ。親友のそんな姿を見て、やれやれ、といった感じで周瑜は首を2、3回左右に振る。

「まあ、今日ぐらいは羽を伸ばしても、何も言わないわよ」

周瑜が徳利を取り出して見せると、孫策は満面の笑みで抱き付いた。

「めーりん、だ〜い好き」

袁術の下に孫策反乱の報が届いたのは、寿春の陥落の報と同時だった。いかに情報収集に力を入れていないかがうかがえる。

「孫策め、妾の施してやった恩を忘れおつて！ 七乃、裏切り者に制裁を加えてやるのじゃ！」

報告を受けた袁術は、その小さい体をじたばたさせながらわめき散らした。だが、その横に立つ張勳は普段通りの笑みを崩さない。

「恨みは一杯買つていても、恩は1つも売つてないと思いますよ
お」

そんな軽口を叩きながらも、彼女はこの状況を打開すべく頭を回転させる。そうして1つの答えを導き出すが、それは普通に考えれば到底受け入れられないものであった。

「ここは麗羽様と同盟を結びましょう」

「なっ、何じゃと!?!」

彼女が予想していた通り、袁術は驚きの声を上げた。それを無視して説明を続けていく。

青州の戦は袁紹の勝利で決まりかけている。となれば、北に袁紹、西に曹操、南に孫策と3方を押さえられる事になってしまう。東側が海に面している以上、周囲は敵だらけだ。そこへ袁紹と同盟すれば、袁紹対曹操という構図が描け、自分達は孫策との戦いに集中出来る事になるのである。

妾腹と呼んで姉を蔑んでいる袁術と違い、袁紹は妹に対して普通

に接していた。今回の劉備との一件も大して気にしていないだろう。こちらが頭を低くして頼めばこの申し出を受けてくれる。張勳はそう考えていた。

始めの内は難色を示していた袁術であったが結局は折れ、袁紹と同盟を結ぶ事となるのであった。

陳留へと戻った曹操の下に、孫策からの使者が訪れた。

「恐らく、同盟を申し込むつもりでしょう」

曹操の脇に控える荀彧が言った。言葉とは裏腹に自信満々な表情を見た曹操は、浮かせかけた腰を戻して他の軍師の意見も確認してみる事にした。

「そうですね。風も桂花ちゃんと同意見なのですよ」

長い金髪の少女が答える。彼女の名は程立、字は仲徳。曹操が工州牧となつて以降に仕え始めた軍師である。頭に変な人形を乗せ、どこにしまっているのか分からない飴を舐めるつかみどころの無い少女だった。

「なら、稟。貴方はどう？」

そう意見を求められたのは程立の隣に立つ少女だ。名を郭嘉、字を奉孝と言い、程立と共に曹操に仕えていた。彼女は幼さの残る2

人の軍師と違い、大人とまではいかなくとも、十分な色気を持っている。また、アップにされた癖の無い黒髪と眼鏡は、彼女に理知的なイメージを与えていた。そんな彼女は右手で眼鏡を押し上げながら答える。

「大体は2人の言った通りでしょう。しかし、同盟というよりは不可侵条約に近いものだと思います。我々と袁紹、孫策と袁術の対立をはつきりとさせ、お互い不干渉の立場を……」

そこまで流れる水の様に淀みなく話していた郭嘉の声が急に止まる。そして、何事かを呟き出した。

「ふ、不感症の私を、華琳様が閨で開発……。ブーツ！」

すると、勢いよく鼻血を吹き出し倒れてしまう。まるで虹の様な綺麗なアーチを彼女の鼻血は描いた。

郭嘉は妄想癖があり、鼻血を出し易い体質だった。すでに周囲の者達は慣れたもので、呆れている者はいても驚いたり心配している様子を見せる者はいない。侍女達も慣れた手つきで床を拭き、汚れた服の代わりを用意していく。それを横目で見ながら曹操は腰を上げた。

「フフ、どちらが正解かしらね？ 風、稟の介抱をしてあげなさい」

「は〜い稟ちゃん、トントンしましょうね〜」

曹操に言われるより先に、程立は郭嘉の介抱を始めていた。仕官する以前は一緒に旅をしていた事もあり、彼女の厄介な癖への対処

はお手のものだった。

果たして孫策からの使者は、郭嘉の予想通りに期限付きでの不可侵条約を申し込んできた。表立って敵対している訳では無いものの、周囲を他の勢力に囲まれている曹操はそれを受ける事にした。

曹操の下に献帝からの使者が訪れたのは、それから2日後の事だった。長安において暴虐非道の限りを尽くす逆臣、李確と郭汜を討つべし。そんな内容の勅命だった。この勅命を受けた事により、彼女は長安に兵を進める大義名分を得た事になる。後は李確等を討ち取り、献帝を保護すれば、今まで曹操の描いてきたシナリオが完成するのだ。

とはいえ、李確等イレギュラーの存在は痛かった。彼等によつて曹操の計画は数ヶ月遅れ、その数ヶ月の間に袁紹は青州にまで版図を広げていた。いつエン州に攻め込まれてもおかしくない状況だった。

長安を攻めるにしても、当然、その分の守備兵は残しておかなければならない。曹操軍の兵力はおよそ六万。その内の四万を守備に割かなければ防ぎきれない、というのが軍師達の見立てだった。

だが、長安の兵力は最低でも五万以上、との報告が間者からもたらされている。しかも、長安は前漢の時代までこの国の首都だった大都市である。いくら寂れたとはいえ、その堅牢な城壁は以前のままだ。そこをわずか二万の兵で攻略する。曹操軍の誇る3人の軍師

でも、妙手は浮かばなかった。

そんな中、曹操が口を開いた。彼女には初めから一計があった。

「桂花、西涼の馬騰に使者を送りなさい。この勅命を盾に兵を出させるのよ」

すぐさま荀或は席を立つ。

『西涼の狼に天の御遣い。我が霸道に仇成す存在かどうか、貴方達の力、見せてもらいましょう』

かすかに笑う曹操の瞳が怪しく光った。

第3章・長安編・第6話〈曹操の時〉（後書き）

という事で第6話でした。

今話から出てきた風ですが、彼女の「イク」の文字はケータイでは表示出来ないため、「立」のままでもいいと思います。

魏の3軍師が揃いました。原作では、桂花>風>稟というイメージがあつたのですが、この話では、軍略に関しては3人の並びを逆転させて話を書いていきます。桂花は軍略よりも政治向きとし、本拠地でのお留守番が多くなると思います。桂花好きの方、申し訳ありません。自分の中で荀或のイメージがこうなので……。

さて、愛紗と雛里を客将として迎えた華琳は、西涼勢も巻き込んで長安攻めにかかります。やっと、長安編というタイトル通りの舞台に辿り着きました。次回からは主人公達も出せるので、もし読んでいただけると嬉しく思います。

第3章・長安編・第7話〈長安出兵〉

「ほれ、しつかりしいや、一刀！」

まったくうるさい。遠くから聞こえる霞の声にそう感じたものの、それを口に出す余裕は今の一刀には無かった。正面から振り下ろされた戦斧を横に飛び退いてかわすと、1つ息を吐いて構え直した。彼の目の前にいる清夜も戦斧を持ち直し、改めて腰を落とした。

一刀は清夜との訓練の真っ最中だった。それを離れた場所から観戦する霞は非番のため、2人の戦いを肴に昼間から酒を飲んでいた。その横には心配そうな顔で黙って見つめる月と、大声を上げる詠の姿があった。

「ああもう、何やってんのよ！ ……危ないっ！ ……ほら、そこよー！」

言葉の内容と2人の動きから、一刀の方を応援している事が分かる。相当夢中になっているのか、霞がニヤニヤしながら見ている事にも気付いていない。

「そない心配せんでも大丈夫や。一刀の奴、この半年でだいぶ腕を上げとるし」

霞の言った通り、一刀はこの半年の間にしつかりと修練を積み、かなり腕を上げていた。ほぼ毎日の様に誰かしらと刃を交えている。恋がいた頃は、彼女とも何度も手合わせをしていたのだ。当然、嫌でも強くなる。

だからといって、一足跳びに強くなれる訳でも無かった。蒲公英には5割近い勝率を残せる様にはなったが、翠にしる霞にしる、蒲公英以外にはまだ1度も土を付けた事は無い。

そんな中で、一刀にとつては清夜は対峙しやすい相手だった。訓練用の戦斧で刃引きしてあるとはいえ、重量があるために気は抜けない。当たりどころが悪ければ怪我ではすまなくなる。それでも槍などとは違って突きが無い分、距離を潰しやすい。刀の間合いは短いため、いかに相手の懐に飛び込むかが重要だった。

清夜は巨大な戦斧を両手で振り上げる。それに対し、一刀は左足を1歩前に出した。刀の切っ先を下にして頭上で構え、清夜の戦斧を受け流す。真っ正面から受け止めれば一撃で叩き折られてしまうため、攻撃のベクトルをわずかに逸らしていく。金属同士が擦れあい、耳をつんざく様な高く激しい音が耳元で響く。そして、その音が消えると共に刀を大上段で構えた。

「たあーっ！」

気合いを込めて刀を振り下ろす、はずだった。振り下ろそうとした瞬間、鈍い音と共に手首に激痛が走り、一刀は堪らず刀を手放してしまった。清夜は戦斧から左手を放し、右手1本で戦斧を回転させて石突きを打ち込んでいた。

「つつ……」

思わず怯んだ一刀の首筋に戦斧が押し当てられた。彼は素直に負けを認めた。

そこへ月が駆け寄ってくる。その後詠、最後に霞がのんびりと

歩いて一刀へと近付く。

大丈夫ですか。そう尋ねながら月は一刀の手を取った。

「ああ、これくらい何ともないよ」

激しく痺れていたものの強がりと言ったのは、やはり彼が男だからだろう。そこへ遅れてやって来た霞は月をどけて、一刀の手を確かめる様に優しく触る。

「……骨に異状は無いみたいやな。せやけど、これは腫れるやろな。月、手拭いと水を張った桶を持って来てや。冷やしとかんとあかん」

返事をする、月はすぐさま駆け出した。それに詠も続く。

「惜しかったな、もうちょいやったのに」

「惜しくなんかないだろ、あれだけ手加減されて」

別に手を抜いている訳では無いのだろうが、翠や霞とやっているのを見れば、自分に対して本気を出していないのは分かった。酔っ払いに気を使われた事が情けなくなり、多少つつけんどんな言い方になってしまった。しかし、言われた側は全く気にした風ではなく、変わらず屈託無い笑顔を一刀に向けている。

「ま、それが分かる様になったんも、少しは腕が上がったからやお清かて、そう思うやろ？」

「以前よりは、な。だが、月様をお守りするためにはまだまだだ」

手首を押さえてうづくまる一刀に近付くと、石突きを地面に突き刺して仁王立ちになる。視線の高さが清夜の腰の辺りにちょうど合っ
てしまい、一刀は慌てて顔を背けた。

彼は2人が苦手だった。性格や人柄が、ではない。その露出の多い
服装が、である。

霞の上半身は胸にさらしを巻いて肩に法被を掛け、下半身は袴に
下駄履き。清夜の方は、上半身はほぼ胸当てのみで、下半身はロン
グスカート風だが腰までの深いスリットが入っている。動く度に太
もが見えるし、下着が見えたのも1度や2度ではない。いい加減、
訓練の時は気にならなくなったが、平時ではそうそう慣れなかった。

綺麗で大胆な格好をしたお姉さんに挟まれて気まずい思いをして
いると、ようやく月達が戻ってきた。月が手拭い、詠が水の入った
桶を持って小走りに駆けてくる。

「足元気い付けや」

霞が何気無く言った時だった。何も無いところで蹴躓く詠。する
と、その手に持っていた桶は見事な放物線を描き、一刀の頭にその
中身をぶちまけた。

「す、すみません、一刀さん！」

そう謝ったのは月だった。慌てて持っていた手拭いで拭こうとす
るが、一刀はそれを手で制して詠の方へと近付いた。

軍師としては一流の頭脳を持っている詠であったが、侍女として

は致命的にドジだった。その事が分かっているのに、一刀も今さら水をかけられたくらいでは怒らない。大丈夫か、と聞きながら詠の手を取る。

一刀に促され無言で立ち上がった詠は、やはり気まずそうに視線を合わせようとはしない。しばらく時間が流れた後、ごめん、とそっぽを向いたままで呟く様に謝った。

「……って、こんな事してる場合じゃないのよ。すぐに全員集まるように、琥珀様からの命令よ」

一刀の手を振りほどき、少し早口で伝えた。月もすっかり忘れていたらしく、あっ、と声が漏れた。

「全員、ってウチもか？ もう酔っぱらってるんやけど」

言いながら、霞はまだ半分以上残っているとっくりの口を閉めた。

一刀達が会議室に入ると、すでに文武官のほとんどは集まっていた。街の警邏に出ている翠の姿だけが無い。

着替えるくらいの時間はあったかな。そう思いながらいつもの位置まで歩く。ここに来るまでにざっと手拭いで拭いただけで、服が濡れているのは遠目にも分かる状態だった。実際、琥珀は少し不思議そうな顔を一刀に向けている。彼は苦笑いを浮かべながら椅子に腰掛けた。

一刀が座っているのは琥珀から2つ目の席だ。一番近い席は娘である翠が座るので、その隣になる。

そのまま2、3分待ったところで扉が勢いよく開け放たれた。相当急いで戻ってきたのか、肩で息をしている翠がそこにいた。早足で一刀の隣まで来ると、

「ごめん、母様。ちよつと色々あつて……」

と謝りながら席に付いた。しかし、琥珀は何も答えずにジツと翠の顔を見るだけだった。

翠の口の回りには、黒いタレの様な物が付いていた。しかし、本人がそれに気付いている様子は無い。あまりに長い間見つめられ、翠は段々と落ち着かなくなっていく。

「な、何だよ、母様。あたしの顔に何か付いてるのか？」

その言葉に、琥珀だけでなく一刀や鷹那まで深いため息を吐いた。

「……で、貴方は警邏中に何を買食い食いして遅くなったの」

「あ、あたしは、買い食いなんかしてないぞ」

どうやら強引に誤魔化すつもりらしい。証拠が無いと思っているのだから、それも無理は無いのかもしれないが。

そこへ、横から手拭いがスツと差し出された。さっきまで一刀が使っていた物だ。

「女の子なんだから、口の回りくらい綺麗にしとかないと」

その言葉でようやく気付いたらしい。引つたくる様に手拭いを受け取ると、まさにゴシゴシと音が聞こえてきそうな勢いで拭き取っている。娘のそんな情けない姿に、琥珀は改めてため息を吐いた。

「すでに知っている者も多いと思うけど、先程エン州牧の曹操から使者が訪れたわ」

翠が拭き終わるのを待って、琥珀は話し始めた。

「曹操に勅命が下ったそうよ。長安に巢食う逆臣、李確と郭汜を討て、とね」

2人の名前が口から出された瞬間、旧董卓軍の面々の体がわずかに反応した。もちろん、各地に放っている間者からの情報で、2人が長安にいる事は知っていた。それでも、討伐命令が出たと聞けば勝手に体が動いてしまった。彼女達、特に、直接の上官であった霞にとつてその名は汚点であり、清算したい過去であった。

すっかり酔いも覚めた様で、霞は鋭い眼光で琥珀を見つめている。

「表向きは出兵要請。でも、実際には勅命を盾にした命令ね。もし従わなければ、次は私達が逆臣に仕立て上げられるのは間違い無いでしょう」

「なら、それに応じて兵を出す？」

翠の問いに、琥珀は1つ頷いた。漢の臣である以上、勅命に逆ら

うつもりは無い。それに、関中と呼ばれる長安一帯は涼州と接している。李確等が暴挙に及んでいるのはまだ関中だけであるが、いつ涼州にまで飛び火してくるか分からない。対岸の火事ですんでいる内に消火してしまおう、という腹積もりだった。

「すみません。ウチが言っていない事やない、つちゆう事は分かっていますけど、この戦、ウチも連れていってもらえませんか？」

「ええ。正式な編制は後で通達するけど、霞にも出てもらおうわ。汚名返上の機会は、一刀君に作ってもらいなさい」

「よろしく頼むで、一刀」

「……出来る限り善処するよ」

普段は見せない真剣な眼差しに、一刀も軽い言葉を選ぶ事は出来なかった。

その数日後、琥珀を大将とした馬騰軍は長安に向けて進軍を開始した。副将には翠が就き、一刀と蒲公英、霞の姿も見える。さらには、およそ一万五千の兵がその後続いた。

「華琳様、ただ今使者が戻り、馬騰がこちらの申し出を受けた、と報告が入りました」

「なら、諸将にはかねてから命じてある通りに動け、と伝えなさ

い。それから、本隊の準備は出来ているのでしょうか？ 明日、日の出と共に出陣するわ」

涼州からエン州まではかなりの距離がある。どんなに急いで使者が戻ったとしても、そこには小さくないタイムラグが発生してしまう。すでに馬騰軍は武威を発っているはずだ。使者に大まかな作戦も伝えさせた以上、曹操は遅れる訳にいなかった。

袁紹への備えとして、夏侯淵と郭嘉、程立等を濮陽へと配置。董卓連合に参加した時と同様、後方支援のために荀或を陳留に残す。結果、曹操と共に長安へと進軍する将は、夏侯惇と李典しかいなかった。

夏侯惇と違い、李典はまだ実戦経験に乏しく、曹操は彼女を指揮官向きではない、と評価していた。さすがにこの人員では厳しい。だが、曹操には考えがあった。

「桂花、関羽と鳳統にも伝えておきなさい。せつかくですもの、あの2人にも手伝ってもらおうわ」

こうして曹操軍はその命令通り、翌日の早朝には長安へ向けて出陣した。

涼州を出て関中へと入った馬騰軍は、長安へ後数日の位置にまで進軍していた。現在はそこに陣を張り、現状とこれからの作戦を確認しているところだった。

「ここまでは迎撃をされる事もなく、無事にこれたね」

お茶に口を付けながら、蒲公英はのんびりとした様子だ。

「ま、あいつ等には斥候を放って周囲に気を配る、何て真似は出来んやろ。せやけど、さすがにここまで近付けば、いくら何でも気が付くと思うわ」

「気付いてもらわないと困るんだけどな」

さすがは元上官、と思ったものの、それを口に出すと不機嫌になるので一刀は黙っておく。

「曹操軍の進軍状況はどうなっているの？」

「はい、予定通りに潼関の東にまで進んでいます」

潼関とは、長安の東にある関の名前である。そのさらに東側に曹操軍はいるというのだ。長安までの距離は、援軍を請われた側である馬騰軍の方が近い。だが、これは作戦通りだった。

長安の様な堅城に五万を超える兵で籠られれば、勝つ事自体が難しいし、勝てたとしても大変な損害を被ってしまう。この戦で重要なのは、いかに李確軍を城から引きずり出し野戦へと持ち込むか、という事だ。東西から挟撃する動きを見せながらも、上手く連携がとれずに足並みが揃っていない様に進軍しているのは、李確等に各個撃破を企図させるためだった。

その頃、長安において私欲にまみれた暮らしを送る李確等の耳に、ようやく曹操達の進軍の知らせが届いた。しかし、それを聞いても2人は焦った様子を見せず、いつも通りに美女を侍らせ酒を飲んでいた。

「まったく、そんな大声出すんじゃないやねえよ。酒が不味くなるじゃないか」

李確はそう言って杯を一気にあおる。余裕綽々といった姿の李確とは違い、正面に座る郭汜は少し不安そうな顔をしている。

「何だ、そのしけた面は。心配することあねえんだよ。奴等は合わせて三万ちよつと。こつちは六万近くいるんだぞ。負ける訳ねえだろ！」

「で、でもよ、あの馬騰だぞ。大丈夫なのかよ？」

「ちつ、情けねえな。馬騰こととき、この俺様が蹴散らしてやるからよく見とけ！」

叫ぶ様に言うと、徳利をつかんで直接酒をかつ食らった。

第3章・長安編・第7話〈長安出兵〉（後書き）

という事で第7話でした。

久しぶりに涼州勢を書いたので、キャラの口調や性格がぶれてる感じがあります。特に、主人公である一刀君が。

華雄の服がかなりセクシーな気がするのは自分だけでしょうか？
翠みたいなのミニスカートよりも、ロングスカートにスリットの方が色っぽさは高いと思うのですが。

話としては、次話の頭から戦闘に入るための調整の回になっています。中身が薄い印象を、自分で読み返してみても感じました。どうもすみません。

ただ、一刀君が軍師を拝命してから初めての大规模な戦闘という事で、少しは頑張らせたいと思います。反董卓連合の時は、戦闘に参加しませんでしたので。

では、次回もよろしければ読んでください。

第3章・長安編・第8話 軍師一刀

長安の西に広がる平野では、馬騰軍と李確軍が対峙していた。琥珀自らが率いる騎兵約一万に対し、李確軍はおよそ二万五千。軽く倍を超えていた。

「うわっ！ 思ったよりも兵を出してきたね。やっぱり、西涼の狼の二つ名は伊達じゃないよね」

これだけの兵力差を突き付けられても、蒲公英は普段の陽気な口調を崩さない。武の腕前は遠く及ばなくとも、さすがは琥珀の姪である。胆はしっかりと据わっていた。

「それにしても、こうしてたんぽぼと戦場に立つのも久しぶりね。どう？ 少しは腕を上げたの？」

もちろん、と自慢気に胸を反らせる。

「でも、確かにそうだよ。月ちゃん達が来てから、叔母様ほとんど戦場に出なくなった」

「もう年なんだから、少しは楽をさせてちょうだい」

「全然若いよ。だって、叔母様はたんぽぼの目標なんだから。可愛くて強い、叔母様みたいな大人の女性にたんぽぼはなるの」

年だとアピールする様に自分の肩を揉む琥珀だったが、蒲公英に若いと言われて満更でもない表情を見せた。しかし、その顔はすぐ引き締まる。馬を数歩進ませて馬首を返し、兵達の方へと向き直

った。

「聞け、皆の者！ 奴等は朝廷に仇なす反逆者だ！ 奴等を生かしておいたとしても、この国にとって一切の利は無い！」

そこで彼女は自らの兵に背を向け、李確軍をにらむ。

「奴等の数は確かに多い。だが、所詮は数に頼らなければ戦えない連中だ！ 勇猛果敢な我が軍の敵ではない！ 全軍突撃！ 奴等を1人残らず討ち取れ！」

琥珀の号令に鬨の声が上がる。圧倒的な咆哮が大気を震わす。その直後、今度は馬の蹄の音が大地に響いた。敵味方合わせて三万を越す馬の駆ける音だ。辺りにはその轟音しかなかった。

「邪魔だ、どけーっ！」

ぶつかり合う両軍。その先頭で愛用の三叉槍、光閃を振るい、琥珀は次々に敵兵を蹴散らしていく。降りかかる血飛沫をものともしない。彼女の周りには、あっという間に死体が積み上がった。

蒲公英も負けじと槍を手繰るが到底追い付かない。決して蒲公英が弱い訳では無く、琥珀の腕が立ちすぎているのだ。

戦闘が始まってから10分程経った頃、馬騰軍の後方から銅鑼の音が響いた。後退を指示する銅鑼だ。その音を聞き逃す事無く、琥珀とその配下の兵達は統率のとれた動きで後退を開始した。

個々の士気と兵の質の差で初撃こそ押し込んだものの、李確軍は数の利を使い包囲しようと動いた。その動きを察知し、後退の指示

が出たのである。

李確軍は逃げる馬騰軍を追撃するものの、練度の違いか、馬騰軍の方がわずかに速く差が開いていく。そうしてしばらく経ち、李確軍が追うのを諦めかけた頃、馬騰軍もまた速度を緩めた。

「チツ、奴等、なめやがって……。おい、何してやがる！ とつとと奴等を血祭りにあげるんだよ！」

怒りのこもった命令を受け、李確軍の兵達は再びその速度を上げた。呼吸を整える暇も無い李確軍に対し、待ち受ける馬騰軍には体勢を整えるのに十分な余裕があった。第2戦も初戦と同じく馬騰軍有利で始まった。そして、包囲される前に後退するのも同じだった。

「何だが、上手くいきすぎなくらいに引つ掛かってくれてるね」

「油断して、足下を掬われない様にしなさい」

馬を並走させながら、琥珀は蒲公英に気を引き締めるように伝える。だが、大丈夫、と笑顔で返す蒲公英に、やはり不安は残った。

蒲公英は翠の様に短絡的ではない。しかし、調子に乗りやすい傾向がある。それでも、ここは彼女に任せるしかなかった。

ある程度の距離をとり、再び歩を緩める。猛然と突っ込んでくる李確軍の先頭には、この状況に業を煮やした李確自身が立っていた。彼の大槍が振るわれる度、馬騰軍の兵士が吹き飛ばされた。

「逃げる事しか能の無い腰抜け共！ 誰か、この李確様の相手になる奴はいねえのか!？」

「ここにいるぞーっ！」

李確の野太い声を切り裂く様に少女の声が飛ぶ。

「馬騰の姪、馬岱！ その首、もらったーっ！」

蒲公英は見事に馬を操り、敵味方の兵が入り乱れるなかを縫う様に駆け抜けた。そのまま一気に李確に迫り、影閃を振り下ろす。だが、その一撃はすんでのところで防がれてしまった。そのまま足を止めて正面から打ち合う。

李確の槍術は決して上手いとは言えない。力任せに振り回しているだけ、といってもいい程だ。だが、重量のある大槍と合わさって、その威力は驚異となる。速さと技では蒲公英が上回っていたが、力とリーチでは李確の方が上であった。

拮抗する両者の力。しかし、10数合打ち合ったところで銅鑼が打ち鳴らされる。蒲公英は李確の槍を受け流し、素早くその場を離脱した。

「待て、このガキ！」

「べーだ。待て、って言われて待つ訳無いじゃん。悔しかったら追い付いてみれば？」

相手を小馬鹿にした様な表情を見せる蒲公英は、尻をペンペンと叩いてみせる。あからさまな挑発だ。だが、これまでの戦闘でフラストレーションが溜まっている李確には、この方が効果的だった。

みるみる顔が真っ赤になり、頭に血が上るのが分かった。トドメとばかりに蒲公英はニシシ、と笑ってから逃げ出した。李確はいきり立ち、遮二無二馬騰軍へと追撃をかけた。

「李確様。 奴等、我々を誘い込んでるんじゃないやありませんか？」

副官らしき男が李確に馬を並走させて尋ねた。彼は李確とは違い、冷静だった。しかし、その声は彼の上官には届かない。

「うるせえ！ あんなガキになめられてケツ捲れるか！」

「し、しかし、こちらの被害も大きくなってきていますし……」

「うるせえつつつてんだろ！ てめえが先にバラされてえか！？俺たちや戦争やってんだぞ、被害が出るのは当たり前だろ！ それに、見てみる。 奴等も兵を減らしてんだよ！」

李確の怒声に首をすくめた副官だったが、何とか諫めようと言葉を続ける。しかし、さらに激しく声を荒げられたため、それ以上は何も言えなくなってしまった。

3度の接触により、李確軍はすでに五千人近い兵を失っていた。対する馬騰軍も、現在は七千人程にまで減っている。これだけ減れば、遠目にも少なくなった事がはっきりと分かる。

しかし、李確は重大な事を見落としていた。馬騰軍の兵の死体は三千人分も無かったのである。

ここまでで戦死したのは千人程。ならば、後二千人はどうしたのか、といえば、李確軍の目を盗みながら少しずつ離脱させていた。

その理由の1つは、被害を大きく見せる事で相手の追撃意欲を刺激するためだった。自分達が一方的にやられている状況では兵の士気も下がり、例え相手が後退したとしても追撃しようとは思わない。

今回の作戦のポイントは、いかに李確軍を引き付けられるか、という事だ。彼等は見事なまでに琥珀と一刀の術中にはまっていた。

逃げる馬騰軍を追いかけるうち、李確軍は狭路へと誘い込まれた。右側は深い森、左側は崖が壁の様にそびえている。しかし、それでも追撃をやめようとはしなかった。距離が縮まりつつあったからだ。

狭路に入った事で馬足が鈍りやがった。そう考えた李確は、さらに速度を上げさせる。だが、後ろから追走する李確には、馬騰軍の先頭がそれまでにない動きをしているのが見えなかった。もし崖の上から俯瞰で見えていたら、はつきりと分かっただろう。馬騰軍の動きは、まるで川の水が中洲を避けて流れる様だった。

そこにいる一団を、先頭から縦に裂けて駆け抜けるその動きには一切の淀みが無い。こんな芸当が出来るのは、しっかりと訓練を積んでいるのもちろんだが、何より部隊の指揮を執る琥珀の腕によるところが大きい。すでに個人の武では琥珀を超えた翠でさえ、用兵では遠く及ばないのだ。

李確がその動きに気付いたのは、最後尾の兵が駆け抜けて一団が姿を現した時だった。突然現れた兵に身構えたか、前衛の馬足が鈍る。

「何やってやがる！ あんな寡兵、揉み潰しちまえばいいだろ！」

李確の声に前衛は再び速度を上げた。彼が叫んだ様に、現れた一団には千人程しかいない。しかし、この千人相手に壊滅的な被害を被る事になるなど、この時の李確軍は誰一人として考えなかった。

「一刀君、後は任せるわよ。しっかりやって見せなさい」

一番前についていた琥珀は馬を止め、普段より少しだけ早口で言うとその場を離れた。その直後、最後尾にいた蒲公英が笑顔で手を振りながら駆け抜けていく。一刀はすっかり言葉の届かない距離にまで離れた琥珀の背中に向かい、任せてください、と呟いた。

この森に伏せていた北郷隊を指揮する一刀は、琥珀達を見送ると反対へと向き直った。轟音を轟かせながら李確軍が迫る。

斥候からの報告では、まだ二万弱の兵が健在らしい。まともによつければ、あつという間に蹴散らされてしまう兵力差だ。逆にいえば、まともによつからなければ何とかなる。そして、そうなる様ここまで敵を引っ張って来たのだ。

隊の先頭に立つ一刀は、腰に下げた太刀をゆっくりと鞘から抜く。抜き身となった太刀を掲げる様に頭上に上げる。白刃に1つ、陽光が煌めいた。その瞬間、

「撃てーっ！」

と、腹の底から全てを絞り出す勢いで号令をかけ、天に掲げた太刀を振り下ろす。と同時に、彼の後ろにいた兵達は構えていた弩から一斉に矢を放った。

まるで雨の様に無数の矢が李確軍の前衛に降り注ぐ。ある者はその体を貫かれ馬の背から落ち、またある者は自らの跨がる馬を射られて大地へ投げ出される。こうして地面を覆った兵馬の骸は後続の兵にとって大きな障害となり、二重三重に被害をもたらした。前衛は一気に大混乱に陥ってしまった。

「落ち着け、お前等！ 奴等の持つてる物をよく見てみる！ ありやあ、弩だ。次を撃たれる前に近付いてぶっ殺せばいいんだよ！」

弩は弓と違い連射が利かない。弦を引くのに全身を使わなければならぬからだ。どんなに扱いに慣れた者でも、次射を行うまでに1分はかかってしまう。そして、弩の射程距離は120〜30メートル程。馬はもちろん、人の足でも潰せる距離だ。

部下に何とか落ち着きを取り戻させ、仲間の死体を避けながら前に進ませる。李確の指示は適切であった。相手が一刀でなければ、だが。

弩の持つ弱点を一刀はしっかりと把握していた。その弱点への対処法も、彼は知識として持っていた。

「第2班、前へ！」

一刀は部隊に弩を組み込むにあたり、3班に分けて編制していた。

彼の号令を受け、一番後ろにいた兵達が先程矢を放った者達の前に出る。彼等はまた矢をつがえたままの弩を手にしていた。

「構え……、撃てっ！」

体勢を建て直しつつあった李確軍に、再び無数の矢が降り注ぐ。

そう、一刀が弩の欠点を補うためにとった戦法は、戦国時代に編み出された鉄砲の三段撃ちを流用したものだ。弩の特徴を聞いた時、彼は火縄銃を思い出したため、すんなりとこの戦法を思い付く事が出来た。

続けて第3班の射撃が始まる。次々に倒れていく李確軍の兵達。それに対して指揮官である李確は、何ら有効な手を打てずにいた。

「い、嫌だ！ 死にたくねえ！」

ただ死を待つだけの状況から逃げ出すべく、1人の兵が馬を下りて森へと入る。それを見て数人の兵も馬を下りようとするが、しかし、彼等の動きは止まった。兵士が森の中に足を踏み入れて数歩、うっそうと茂った藪の中から矢が放たれたからだ。矢はその兵だけでなく、茂みの側にいた他の兵にも襲い掛かる。伏兵の存在を警戒し、彼等は森へ逃げる事を諦めた。

だが、これは伏兵などではなかった。木の間に縄を張っておき、ある程度以上の力で引かれると弩から矢が放たれる、そんな単純な罠だ。それでも混乱しているこの状況では効果的で、彼等はいもしない伏兵を、自ら勝手に産み出してしまふ。李確軍に森への逃走を制限させるには十分だった。

一方、李確軍の後衛も軽く混乱し始めていた。狭路に誘い込まれ部隊が長く伸びてしまった事により、彼等には前衛の正確な様子が伝わらない。しかし、全く前に進まない現在の状況と、かすかに聞こえてくる悲鳴や怒声は、彼等を不安にさせるのに十分だった。

そんな中、前から1人の兵が人混みを掻き分けやって来る。まるで何かに怯えた様な顔で、焦っているのが一目で分かる程だった。

「お、おい。前の方はどうなってるんだ？」

「前衛の連中はほぼ全滅だ！俺は死にたくないから、下ろさせてもらおうぜ！」

そう言い残し、その兵は味方を押し退け森の入り口の方へと逃げていってしまった。しばらく固まっていた後衛の兵達だったが、

「お、俺も、これ以上付き合ってられるか！」

と、1人が叫んで逃げ出すと、全員が我先にと逃げ始めた。

李確軍は旧董卓軍や官軍を中心に構成されているが、関中で賊まがいの事をやっていた者も少なくない。将もついていない状況で、そんな連中の統制をとるなど不可能だった。そして、これも一刀の仕掛けた策だとは、彼等の誰も見抜けなかった。

最初に前方から逃げてきた兵は馬騰軍の間者である。時機を見計らって扇動する様、一刀から指示を受けていたのだった。混乱しかけていた事もあり、効果はてきめんだった。

「李確様、後衛の兵が逃走を始めました！」

この事はすぐに李確の耳に届く。何だと、と報告した副官を忌々しげに睨み付ける。だが、そうしたところで何が変わる訳でもない。

前方からは弩で連続的に矢を放つ部隊が近付き、森の中に逃げる事も出来ない。李確に残された手は1つしかなかった。

「……撤退だ。長安まで撤退するぞ！」

そう叫ぶ様に命令すると、未だ矢の雨にさらされ続けている味方を見捨て、李確は後退を始めた。後には李確軍だけの兵馬の死体が辺りを埋め尽くしていた。だが、この戦はまだ終わってはいなかった。

「……やつと出番か。随分待たせてくれたな。行くぞ！ 奴等を1人たりとも逃すなよ！」

李確軍を誘い込んだ森の入り口で、周囲に伏せていた兵に号令を出す翠。彼等は喊声を上げながら、狭路よりほうほうの体で出てくる李確軍に襲いかかった。

助かった。そう思った矢先の襲撃である。強引に逃げようとして討ち取られる者。今出てきた狭路へと戻ろうとして、人の流れに飲み込まれる者。中には早々と武器を捨て、投降の意思を示している者もいる。しかし、戦って血路を開こうとする者は誰1人としておらず、彼等は次々討ち取られていった。

そうして、李確等前衛の者達がその場へと辿り着いた時には、ほとんどの兵が死ぬか投降している有り様だった。

「も、もう駄目だ！」

悲鳴に近い叫び声を上げ、副官は李確を見捨てて逃走を図る。止めようと李確がそちらに顔を振った瞬間、副官は馬超隊の兵に槍で突かれて絶命した。舌打ちをする彼の正面に翠が進み出た。

「ここまでだな、李確。観念しろ」

部下に見捨てられたその様に若干の憐れみを覚えた。彼女にしては珍しく大喝する様な大声ではなく、声の勢いを落としている。

「み、見逃してくれ、頼む！ もうあんた達の前には姿は見せねえ。だから、な？ 知らねえ仲じゃねえだろ！？」

知らない仲じゃない、と言っているが、恐らく旧董卓軍との共同作戦等で顔を会わせたただけだろう。彼女には会話した記憶も無いし、顔を見た覚えすら無いのだ。

この状況で命乞いとは、呆れるのを通り越して少し滑稽でさえあった。と同時に、こんな奴に例え少しでも同情した自分に腹が立つ。

『仮にも武人のくせに、1合も打ち合う事無く命乞い、か……』

翠はため息を吐きながら槍を下ろす。あいつなら、そう思いかけてかぶりを振った。

今は戦闘中だぞ、何考えてんだあたし。あいつの事なんか関係無いじゃないか。

思いがけず頭に浮かんだ顔を振り払うべく、奇声を上げながら激しく頭を左右に振った。その様子があまりにも怪しくて、敵味方共に翠へと視線が集中。戦場の時間がしばらく止まった。

「……ともかく、お前をどうするか決めるのはあたしじゃない」

正氣に戻った翠は顎をしゃくつて指し示す。李確がそちらに目を向ければ、自分の方へと駆けてくる騎兵が1騎。肩にかけて法被をマントの様に風になびかせる霞だった。

「見つけたで、李確！ あん時の落とし前、きつちり付けたるわ！」

「げえっ！ ち、張り……」

だが、李確は霞の名を呼び切る事は無かった。神速の張遼という二つ名の通り、疾風のごとき速さで駆け抜けた霞。彼女がすれ違い様振り抜いた飛龍偃月刀は、一撃で李確の首を撥ね飛ばした。李確の体は無くなった頭部の代わりに首から大量の血を噴き上げ、しばらく後に馬上から崩れ落ちた。

霞はそれに一瞥する事も無く、撥ね飛ばした首の方へゆっくりと近付く。無念さと怯えた様な表情を残す首に偃月刀を突き立て、それを高々と掲げる。

「お前等の大将は討ち取った！ 大人しく投降せえや！」

霞が投降を呼び掛けると、すでに戦意が底をうつっていた李確軍の残兵達は素直に従う。その様子に翠も槍を収め、こうしてこの戦いは終結した。

第3章・長安編・第8話〈軍師一刀〉（後書き）

という事で、第8話でした。

以前、3・2の冒頭で書いた戦法は、今回の三段撃ちの事です。もつとも、読んでくださった方の多くは分かれたと思いますが。一応、『北郷』、ですので、有名な信長の方ではなく、島津家の方を使ってみました。

霞の因縁も片付いたところで、次回は攻城戦に移ります。だいぶあっさりすると思いますが、よろしくお願いいたします。

第3章・長安編・第9話 西涼の狼

後退していく李確軍が視界から消えた後、一刀は隊の者に構えを解く様指示を出した。自身も太刀を鞘に収め、ふうっ、と息を吐く。ようやく安堵した。

大きな問題も無く済んでよかった。一刀が特に心配していたのは、馬鎧を装備されていないか、という事だった。

馬鎧とは、字の通り馬に装備する鎧の事だ。重量が増加するため機動力は低下するものの、特に矢に対する防御力が大きく上昇する。それは弓より高い威力を誇る弩に対しても同じで、有効射程距離は半分以下になってしまう。

当然そこまで近付かれてしまえば、三段撃ちをやったところで押し切られてしまう。なので、その場合に詠から別の作戦も預かっていたが、ここまで被害を抑えて勝つ事は出来なかっただろう。

「上出来だったわ」

「ほんと凄かったよ、一刀さん」

戻ってきた琥珀と蒲公英が馬上から彼を褒めた。

「そんな……。今回は、ここまで見事に敵を誘導してくれた2人のお陰ですから」

謙遜ではなかった。予定通りに敵を誘い込めた時点で、9割方勝利は決まっていたからだ。

その言葉に気をよくした蒲公英が、調子に乗って長安で土産を買ってくれるよう、一刀にせがむ。苦笑いを浮かべながら曖昧に返事をする一刀に、琥珀から助け船が出された。

「まだ、戦は終わっていないのよ。一刀君は予定通り、長安に向かないさい。こちらは翠達を援護してから行くから」

はい、と返事をした一刀は、森の中に繋いでいた麒麟の方へと歩き出した。背中から蒲公英が何事かぶつぶつ呟く声が聞こえたが、振り返らずに森へと入る。麒麟の手綱を引き道へと戻った時には、すでに琥珀達の姿は小さくなっていった。

琥珀達が森から出た時には、すでに李確の首が撥ね飛ばされていた。2人の方へ馬を近付け、ご苦労様、と声をかけた。

「すみません、わがままを聞いてもろて……」

琥珀を見るなり礼を言う霞に向かい、彼女は柔らかく微笑んで首を横に振った。霞の手に握られている偃月刀の穂先に刺さる物を見れば、彼女の本懐が遂げられたのが分かる。

「じゃあ、霞とたんぽぽは投降した兵の処置を。翠は私と共に長安へ先行。いいわね？」

投降した兵の中には、元々董卓軍に所属していた者も少なくない。

彼らの心情を慮り、琥珀は元上官である霞を残す事にした。

李確が自ら兵を率いて打って出た、と報告を受けた曹操は、行軍速度を上げて一気に潼関を突破した。長安の東に陣を張り、最終的な作戦の打ち合わせに入る。夏侯惇に李典、関羽達の集まった天幕で軍議が始まるうとしたその時、斥候からの報告が飛び込んできた。内容は、馬騰軍が西門に取り付いた、というものだった。

この展開は曹操にとって予想外だった。まさか、迎撃に出た李確をここまで早く撃退し、逆に城門に迫るなど思ってもみなかったのだ。

こうなると、彼女達の取る作戦も変わってくる。曹操と李典が東門を、夏侯惇が北門を、関羽と鳳統が南門をそれぞれ攻める予定だった。だが、西門を馬騰軍が押さえているこの状況では、四方を完全に塞ぐ事になってしまふ。相手をわざわざ死地に追い込んでやる事になるのだ。

死地に追い込まれた軍を相手にすれば、自軍の被害が大きくなる。曹操は夏侯惇に作戦の変更を伝えた。

弩兵隊から離れた一刀は、本隊とは違うルートで長安へと向かう

別動隊と合流した。大きな荷物を引いた馬車が数台と、兵が約千人。一刀はその先頭に立ち、長安へと急いだ。

彼等が目的地に着いた時、琥珀と翠は先に到着していた。西門の前に陣を敷いてはいたものの、城攻めにかかる気配は無い。彼女達は一刀の到着を待っていたのだ。

「すみません、遅くなりました。すぐ準備します」

馬の背から下りた一刀は、一旦琥珀に謝ってから別動隊の方へ向き直った。彼が指示を出すと、兵達は荷車から幌を剥がす。そこには大小様々な大きさの木材が大量に積まれていた。

それらを次々に荷車から下ろし、まるで大きな模型を組み立てるかの様に木材同士を組み合わせ、何かを形作っていく。散々訓練を重ねてきたお陰で、その動きには淀みが無い。

「さすがによく訓練されてるわね」

ときばきと動く一刀とその部下を見ながら、琥珀は呟く様に言った。隣にいる翠の耳にはその声が届いたはずだが、何の返事も無いふとそちらを見てみれば、翠は少し惚けた顔で一刀を目で追っている。琥珀は嬉しそうに微笑むと、自分も一刀へと視線を戻した。

そうしているうちに、そこには木製の機械が5機、姿を現した。それは一刀が知識を絞り出して開発した攻城兵器、巨大弩砲だった。バリスタ

基本的には弩をそのまま大きくした作りになっている。ただし、それでは威力が足りないため、弾性に富む動物の腱や板バネを使って強化してあった。

弦を引くにはウインチを使って巻き上げる。これにより、弩とは違い威力の強弱がつけられる様になった。さらに、発射角度も数段階に調節が可能になっており、この2つを組み合わせる事で高い命中率を誇っていた。

「準備完了しました。いつでもいけます」

一刀の報告を聞いた琥珀は1つ頷き、長安の城壁へと向き直った。

「任せるわ。しっかりとやってみせなさい」

そう言った琥珀の顔は、普段見せる母親の様な柔らかいものではない。武人としての険しい顔に、一刀も気を引き締め直した。彼は巨大弩砲を中心とした工兵隊へと再び向き直る。

「では、これより長安城城壁に対し砲撃を行う！ 布幔車を前に出せ！」

巨大弩砲の間から、大きな布を吊り下げた4輪の車が進み出る。

布幔とは、麻縄を編んで作った弓矢に対する巨大な盾の事である。攻城兵器を操作する兵や城壁にとりつく味方を、守兵の放つ矢から守るための物だ。

巨大弩砲の射程距離は、弾の種類にもよるが、長くても150メートル程度。城壁の上から弩を放てば十分に届く距離だ。そのため、布幔による防御は必須だった。

布幔車の後を巨大弩砲が続く。一刀にとってこの状況で一番やら

れたくないのは、攻城兵器の破壊を目的に城から打って出られる事だった。しかし、後方から琥珀率いる涼州兵が睨みを利かせている状況で、郭汜軍の中にその選択が出来る者はいなかった。

城壁の上から放たれる矢は、布幔に遮られて巨大弩砲にまでは届かない。焦って数を増やしてみても結果は同じだ。

「よし、全台停止。まずは1番弾を使う！」

予定の位置まで前進すると、今度は攻撃準備に入る。巨大弩砲の後ろから、屈強な兵が数人がかりで巨大な矢を運ぶ。切り出した丸太を形成して矢羽根を取り付け、先端に金属板を貼って補強した物だ。それを台座に乗せ、ウインチを巻き上げて弦を引く。その後、発射角度を調節して全台の砲撃準備が整った。

一刀は城壁の方に振り返った。城壁の上では、守備兵が先程から変わらず矢を放っている。一刀は一旦瞳を閉じ、気持ちを落ち着かせた。

「……巨大弩砲、全台発射！」

一刀の号令を受け、5本の巨大な矢が空に向かい放たれた。丸太のような物体が空を飛ぶ。そんな衝撃的な光景に、守備兵は驚きと恐怖で身をすくませ、逃げる事すら出来なかった。

わずかな静寂の後、鼓膜を突き破る程の轟音が響き渡る。もうもうと上がる土煙の中、城壁の一部がガラガラと音をたてて崩れ落ちていく。悲鳴と怒声が辺りを覆い、城壁の上は蜂の巣をつついた様な有り様となった。

5本の矢のうち2本は城壁に突き刺さり、一部を崩壊させていた。数人の兵が巻き込まれて転落している。もう2本は城壁の上に乗り、幾人かの兵を圧死させた。残りの1本も城壁の上に落ちたものの、バランスを崩して落下し、今は大地の上に転がっていた。

人的被害は10人を少し越えた程度。怪我人を合わせても50人にも満たない。しかし、城壁という施設に与えた被害は甚大で、その威力は守備兵の戦意を挫くのに十分だった。

一刀達が次弾の発射準備に入ると、それだけで右往左往し統率が取れなくなる始末。お陰で数種類用意した弾のテストも滞りなく進み、予定よりも遥かに早くデータを集める事が出来た。

すると、一刀は巨大弩砲をばらしてしまった。このまま攻撃を続ければ、西門の突破は時間の問題であるにもかかわらず、だ。しかし、これには理由があった。

琥珀達がここにいるのは曹操に対する援軍である。長安攻めの中、心は、あくまで曹操なのだ。大将格の李確を討ち取っただけでなく、長安への一番乗りまで果たしてしまえば、曹操の面目は丸潰れだ。関係を悪化させたくない、というのは、一刀と琥珀の2人が共に考えていた事だった。

こうして琥珀達が城壁を破壊した翌日、ようやく曹操軍も長安へと到着した。早速斥候が報告に来る。

「東門に『曹』と『李』、南門には『関』と『鳳』の旗が掲げられております」

それを聞いた一刀は眉間にシワを寄せた。

『関と鳳？ ……ああ、そういう事か』

一瞬、誰の事かと思った。しかし、すぐに思い当たる。徐州が袁術によって落とされた事は一刀も知っている。であれば、関羽と鳳統だろう。後で会っておこうか。そんな事を思っている間にも、報告は続いていた。

「ねえ、北門に誰もいないんじゃない？」

「ああ。母様、ここはあたし達が兵を回した方がいいんじゃないか？」

北門に兵が配置されていないと聞いた蒲公英と翠が、そちらに兵を送る事を提案する。しかし、琥珀には全く乗り気な様子はない。霞も少し呆れた様な顔をしている。

「ど、どうしたんだよ？ 何だよ、その顔は！」

2人の反応に、翠は焦った様子で大声を上げた。正論を言ったはずなのに、どうしてこんな態度を取られなければならないのか、彼女には分からなかった。

琥珀は一刀に視線を送る。説明してやって、琥珀の瞳はそう語っていた。仕方無いな、という様に、一刀も1つため息を吐いてから口を開いた。

「……自分を相手の状況に置き換えてみるよ。もし、四方を完全に囲まれたらどうする？」

「そんなの……、敵を倒すために必死に戦うに決まってるだろ」

若干言葉の間が空いたのは、言われた通りに真面目に考えた証拠だろう。期待した答えが返り、一刀も1つ頷いた。

「ああ。生き残るためには戦って勝つしかないからな。でも、今回の様に包囲の一部に穴があって、逃げ道が確保されている状況ならどうなる？ いざとなったら逃げ出す事が出来るんだ。死を覚悟してまで戦わなくなるだろ？」

だから、わざと北門には兵を取り付かせていないんだ。そこまでは言われなくても翠にも分かった。

「……じゃあ、逃げる敵を討つために、どこかに兵を伏せていたりとかするの？」

先程意見を否定されたせいか、自信無さげに顔色を窺う様にして尋ねる。一刀が首肯すると、そもそもこの話を振った蒲公英が口を開いた。

「でも、お姉様でも分かる様な事に引っ掛かるのかな？」

「たんぼぼも翠と一緒に見抜けていなかった。それに、追い込まれた人間は畏だと分かっているけど、わずかな可能性を信じてしまふものなんだ。もしかしたら、兵を配置し忘れたのかも。そんなありもしない可能性を、な」

一刀が説明してやると、ふん、と返す。あまり興味が無さそう。その態度に業を煮やしたか、琥珀が話に入る。

「まったく、学問に励まないからそうなるのよ。一刀君、西涼に帰ったら詠ちゃんと一緒に2人の面倒を見てくれるかしら。真面目にやらなければ、いくらでも私に告げ口してくれていいから」

「げっ！」

「嘘っ!?!」

そんな言葉が思わず口からこぼれてしまう。翠は恨みがましい眼差しを蒲公英に向けるが、蒲公英自身もげんがりしている。まさに藪蛇だった。

東門に迫った曹操にも、長安攻略に際して秘密兵器があった。

「真桜、霹靂車の方はどうなっているの?」

「準備は完了しとります。いつでもいけませ」

そう答えた少女が李典だった。字を曼成と言い、童顔とそれに似つかわしくない大きな胸が目立つ。

そんな彼女は曹操軍の兵器開発を担当していた。霹靂車というのは、彼女が開発した投石機の名前である。これはテコの原理を利用しており、数人がかりで巨石を飛ばす事が出来た。

東門と南門の両方に霹靂車からの砲撃を受けた旧都長安。元々、

馬騰軍の巨大弩砲を使用した攻撃により士気が下がっていた事もあり、容易く長安の守備隊は崩壊した。そして、囲まれている北門から脱出した者は、翠の予想通りに近場に伏せていた夏侯惇隊によって全滅させられてしまった。

こうして長安へと入城した曹操は献帝に謁見した後、西門の方へと足を運んだ。そこには衝撃的な光景が広がっていた。

崩壊した城壁や突き刺さった丸太に飛び散った瓦礫。斥候からの報告は受けていたが、想像していたよりもすさまじい破壊の跡だった。霹靂車よりも圧倒的な破壊力を持った物の存在を見ただけで感じる。

それと共に、これ程早く守備隊の士気が崩れた理由も分かった。これだけの物を見せつけられて、兵が動揺しない訳が無いからだ。

後で真桜に検分させないと。そんな事を考えながら、曹操は馬騰軍の陣中に平然として入っていく。訪れる事を前もって伝えていないし、取り次ぎを頼んでもいない。普通であれば見咎められる状況であるが、曹操とその護衛である夏侯惇の放つ威圧感に声を掛けられる者はいなかった。

「久しぶりね、北郷一刀」

不意に背中から声を掛けられた一刀は、その声の主を見て驚いた。曹操が来るとは少しも聞いていなかったからだ。作業を中断し、慌

てて曹操に向き直った。

「馬騰さんに用が……？ それなら、案内するけど」

「ええ、お願いするわ。でも、その前に貴方に話があるの」

早速歩き出そうとしていた足を止め、曹操に視線を向ける。

「あれは貴方の仕業かしら？」

顔は一刀に向けたまま、目で城壁を指し示す。一刀もチラリと横目でそちらを見てから返事をした。

「……ああ。うちで新しく開発した攻城兵器を試してみたんだけど……」

「天の国の知識を使つて？」

「……少なからず、ね」

一体何の目的があるのかつかめない。俺から情報を引き出そうとしているのか。

一刀は間を取りながら話していく。こちら辺は斥候からの報告で分かる部分なので、無理に誤魔化す必要もない。

あからさまに警戒する一刀だったが、曹操に気にする様子は無かった。体の前で腕組みをし、右手を顎に添えて一刀の頭から爪先まで、まるで値踏みするかのごとく舐めるように見ている。

「1年前より顔つきは精悍になっているし、体つきも逞しくなっているようね。大分男らしくなったかしら」

「あ、ありがとう……」

いきなり褒められ照れてしまった一刀は、思わず視線を外して礼を言ってしまった。かなり気の強そうな外見をしているが、曹操も紛れもなく美少女である。その曹操に、男らしくなった、と言われた。ましてや、真意を計りかねて警戒していたところへ不意打ち気味だったのだ。照れない訳が無かった。

しかし、そんな気持ちはすぐに吹き飛ぶ事になった。

「北郷一刀、私の下へ来なさい」

「……はっ？」

無意識のうちに一刀の口から声がこぼれた。何を言われたのか分からず、ポカンとした顔をしてしまう。曹操の後ろに控える夏侯惇も寝耳に水だったらしく、驚いた表情を見せている。

「聞こえなかったのかしら？ 私の下に来る様に言ったのよ。貴方のその力、我が霸道のために振るわれるべきだわ」

「華琳様！ この様な男を引き入れるなど……!!」

「春蘭、貴方には聞いていないの。黙っていなさい」

いきり立つ夏侯惇を曹操がたしなめる。不満そうな顔はしているが、彼女は言われた通りに口をつぐんだ。

「天の御遣いとしての力は、我が下にあつて最大限に活かす事が出来る。違つかしら？」

わずかに微笑みを浮かべたまま、曹操は一刀の瞳を真っ直ぐに見つめた。その笑みの正体が自信にある事は、彼女の目を見れば分かった。断る事は無い、と確信している目だった。

しかし、一刀は首を縦に振るつもりは無い。

「曹操さん、悪いけど……」

わずかに曹操の眉間にシワが寄る。

「貴様、華琳様の命を断るつもりか！」

「春蘭！」

一刀に食つて掛かろうとする夏侯惇を、曹操が先程より語気を荒げて一喝した。

「なぜかしら？ 理由を聞かせてもらえる？」

明らかに先程よりも不機嫌で、しかし、笑顔を顔に貼り付かせたまま尋ねる。

「馬騰さんは右も左も分からない俺を拾ってくれた。あの人がいなければ、俺はとくに野垂れ死んでいたと思う。その恩を、まだ10分の1も返せていないんだ。何より、馬騰さんや馬超達は俺の家族みたいな物だ。家族を裏切る奴はいないだろ？」

その言葉を聞いた時、曹操の纏う空気はつきりと変わった。その顔からは笑みが消え、怒り、蔑み、失望、様々な感情がない交ぜになった目を一刀に向ける。

一刀には意味が分からなかった。ただ単に断った事に腹を立てている訳では無いのは分かったが。

「フン、家族ですって？ くだらないわ」

曹操は吐き捨てる様に言った。その言葉に一刀も怒りが沸々と湧いてくる。

「それがこの国をここまで腐らせたのだと気付かないの？ 家柄や生まれだけよくて、何の才も無く、何の努力もしない愚図共がのさばった結果が今の状況よ。家族なんて物に縛られるのは愚者のする事と知りなさい。我が霸道によってこの国は生まれ変わるわ。家柄に左右されず、才能ある者がしつかりとした地位に就ける国。努力した者が報われる国にね。そこには庶民も何も関係無いわ。これこそが、この国の民のためなのよ。貴方が天の御遣いだというのなら、民のためにも我が霸道にその力を捧げなさい！」

曹操の言葉は一見正しい様に聞こえた。しかし、それに従う気は全く起きなかった。

曹操が俺を求めているのは、俺が北郷一刀だからじゃない。俺が天の御遣いだからだ。天の国の知識と、天の御遣いの名を欲しているだけなのだ。曹操の言葉からはそれが透けて見えた。北郷一刀という一人の人間を認めた上で真名まで預けてくれた琥珀とは違っていた。

それにもう一つ、どうしても許せない事があった。

「霸道、か。そんな物、何の興味も無い」

その物言いに再び夏侯惇が怒りを露にするが、曹操が手で遮った。しかし、そんな彼女の顔は怒りで歪んでいる。

「……そんな物、だと？ 貴様、我が霸道を愚弄するか！」

「先に人の大事な物を馬鹿にしたのはそっちだろう！」

「私の霸道と貴様の家族を一緒にするか！」

「同じ事だ！」

一刀はさらに語気を強くする。そうしなければ、曹操に押し切られてしまうからだ。どうあっても退けない。

「人は皆、別の道を生きているんだ！ 大事な物だって人それぞれに違う！ それなのに、それを考えずに人の大事な物を簡単に踏みじめる様な真似をする奴が、誰かのため、なんて言葉を口にするな！」

ぐっ、と曹操が言葉を詰まらせる。しかし、それも一瞬だった。彼女がスツと右手を出すと、夏侯惇が1振りの大鎌を差し出した。曹操愛用の大鎌、絶だ。

「……私にそこまでの大口を叩いた以上、覚悟は出来ているのでしようね」

曹操が大鎌を振り上げようとするのに合わせ、一刀も太刀の柄へと手を伸ばした。が、次の瞬間、

「……てっ！」

ゴンツ、という鈍い音と共に一刀の音が漏れ、彼の首が前に傾いだ。後頭部に激しく鈍い痛みがある。両手でそこを押さえながら振り返ると、背後には琥珀がまなじりをつり上げて立っていた。

「何やってるのよ、貴方は。さっさと残った仕事を片付けてきなさい」

でも、と口ごもる一刀の目の前で、琥珀は右手に握り拳を作った。

「もう1発殴られないと分からない？」

やんわりとした笑みを浮かべてはいるものの、その目は笑っていない。それが逆に怖く、一刀は後ろ髪を引かれたもののその場を後にした。それを見送り、琥珀は曹操へと向き直る。

「ごめんなさいね。うちのが失礼な事を言って」

「……いいわ。私も熱くなりすぎたようね」

すっかり毒気を抜かれ、曹操は大鎌を夏侯惇へと返す。彼女は感情的になり過ぎた事を反省していた。

「寛大な心に感謝するわ。でもね、曹操。覚えておきなさい」

琥珀の雰囲気が一変に変わる。曹操と夏侯惇はハツとして彼女の方へと視線を向けた。

「私はね、貴方程心が広くないの。私の大事な物に手を出すのなら、無事にエン州に帰れると思わない方がいいわよ」

刺す様な鋭い眼差し。その顔は優しい母の物ではない。西涼の狼の二つ名通り、殺気を隠そうともしない獰猛な顔。普段、一刀達には絶対に見せない顔だった。

それまで、にこやかな顔を見せてはいたのだが、内心はそうではなかった。曹操が一刀を勧誘するのを少し離れた場所から見ていた琥珀は、はらわたが煮え繰り返る思いでいた。

『……何なの、これは。この私が動けないなんて……』

圧倒的な殺気に圧され、曹操はもちろん、百戦錬磨の猛者である夏侯惇も身じろぎ1つ出来なかった。まるで、蛇にいらまれた蛙の様だ。ただただ、身体中から汗が吹き出るのを感じているしかなかった。

「それじゃあね。何か用があるのなら、ちゃんと話は通してちょうだい」

明るい声で言うと、琥珀もその場を立ち去っていく。残された2人はようやく金縛り状態から解放された。そうなる前から息すらしていなかった事に気付き、まるで全力疾走した直後の様に激しい呼吸を繰り返す。その体は嫌な汗でぐっしょりだった。

第3章・長安編・第9話〈西涼の狼〉（後書き）

という事で第9話でした。

バリスタというと、昔あったS・RPGを思い出しますが、この話では弩をそのまま大きくした物と考えて下さい。工兵より砲兵の方が正しい感じですが、布幔車の操作や輸送中の路面補修なども彼等の仕事になります。

霹靂車は本来、程イクが発明したとされていますが、恋姫で発明と言えば真桜ですので彼女の作にしてあります。

今更ながら、文章を書くのは難しいと実感しました。最後のシーン、琥珀の恐怖をどうしても表現できませんでした。まあ、イメージ通りに表現出来るのがプロなんだろう、と開き直って頑張りたいと思います。

第3章・長安編・第10話 旧都長安

「……」無事ですか、華琳様」

琥珀が立ち去った後、我を取り戻した夏侯惇が気遣う。彼女の息はまだ荒いままだ。

「……ええ。直接手を出された訳では無いし、問題は無いわ。……それにしても、馬騰に北郷。考えていたよりも危険ね」

呟く様に言いながら、でも、と頭の中で続けた。

大事な物に手を出したら無事に帰さない、という事は、言外にこちらからは仕掛けない、と言ったのだ。ならば今は放置しておけばいいわね。献帝を受け入れ、麗羽との戦いに決着がつくまでは。

その辺りまで考えが巡った時には、激しく上下していた彼女の肩も落ち着きつつあった。

一刀は未だにじんじんと痛む後頭部を擦りながら歩いていた。大きなたんこぶになっているのが触っただけではつきりと分かる。以前翠が言っていた、母様の拳骨は鉄鞭よりも痛い、という言葉が思い出された。

何を大袈裟な。その話を聞いた時にはそう思ったが、実際殴られ

てみるとあながち嘘ではない様に思えてしまう。目から火が出る、という表現ですら生ぬるい気がしていた。

そんな一刀を見つめる少女の姿があった。その少女　翠は黙ったまま一刀を目で追い、彼が視界から消えるのを見送った。

「はあ……」

大きなため息を吐き、その場にしゃがみ込む。

何やってんだ、あたし。

この言葉を、ここ最近何べん思っただろう。気が付くと彼女の視線の先には一刀がいる。もちろん、彼がそうなる様に動いている訳では無い。無意識のうちに翠の目が一刀を捉えてしまうのだ。その事に気付く度に視線を外そうとするのだが、その都度彼を余計に意識してしまう。彼女は知らない不安感に襲われ、時には訳の分からない高揚感に包まれた。

だが、彼女は経験した事が無いだけで、それが何であるかは臍氣に分かっていた。ただ、それを認めたくなかった。

「何してるの、お姉様？」

しゃがみ込んでいる翠の背中から声が掛けられた。呼ばれ方と声で蒲公英だと分かり、何でも無い、とだけ振り返りもせず答える。

「何でも無い訳無いじゃん。じゃあ、たんぽぽが答えてあげよっか？ ……ズバリ、恋患い！」

ドキリと翠の心臓が跳ね、それに合わせ彼女自身も跳ねる様に立ち上がる。真っ赤な顔で振り返った。

「な、何言つてんだ、たんぼぽ！ あた、あたしが一刀の事を、すつ、すつ、好き、だなんて、そんな事ある訳無いだろ！」

動揺しているのが誰にでも分かる程の激しい吃り方だった。さらに、自分で言った言葉に益々顔を赤くする。

そんな従姉妹の様子を見て、蒲公英は口元を押さえながら笑った。

「たんぼぽ、一刀さんの事だなんて一言も言っていないよ？ ニヒッ」

嵌められた、と分かった時にはすでに遅かった。耳だけでなく、その滑らかな首まで真っ赤になる。こんな状態では、いくら凄んで睨み付けられたところで怖くなかった。

「素直に一刀さんが好きだ、って認めちゃえばいいのに。じゃないと、誰かに取られちゃってもたんぼぽ知らないよ」

「だ、だから、あたしは……。おい、たんぼぽ。取られる、ってどういう事だ？」

「えっ？ そのままの意味だよ？」

だが、翠はいまいちピンとこないらしい。納得のいかない顔をしている。

「だから、お姉様以外にも一刀さんの事を好きな人がいるんだっ

てば」

「へ、へ……、そうなのか……。で、誰なんだよ、そんな物好きは」

必死に興味が無い風を装っている様が、蒲公英には可愛らしく見えた。

「えつとねえ、まずはたんぽぽでしょ。それから、月ちゃん。あと、詠ちゃんは……、どうなんだろ？」

指折り数える蒲公英。彼女が名前を挙げる度に翠は、なっ、とか、えっ、とか声を出し、驚きを露にする。その様子が可笑しくて、蒲公英の中に悪戯心がムクムクと沸き上がっていく。

「霞さんやお清さんもそうだし、鷹ねえもそうでしょ。あとは、叔母様」

「か、母様まで!？」

驚愕した表情を見せた翠はがっくりとうなだれる。微塵も疑う様子を見せない彼女の反応に、ついに蒲公英は笑いを堪え切れなくなった。声を上げて笑う蒲公英を見て、翠は自分がかかわれている事を悟った。

「た〜ん〜ぽ〜ぽ〜?」

笑いの止まらない蒲公英の脳天に、怒りに震えた翠の拳骨が落ちた。いった〜い、と文句を言う蒲公英を残し、翠は肩を怒らせて足音高く去ってしまう。

「からかい過ぎちゃったかな」

翠の背中を見送りながら、蒲公英はそうつぶつぶいた。

初めて訪れる長安の街中を関羽と鳳統は連れ立って歩いていた。寂れたとはいえ、以前はこの国の首都だった都市である。いつか桃香様の下へ戻った時、この見聞が政に役立つかもしれない。2人にはそんな思いがあった。

不意に関羽の足が止まる。その後ろをキョロキョロしながら歩いていた鳳統は気付くのが遅れ、そのまま関羽の背中にぶつかってしまった。

「う、ごめんなさい」

気の弱い少女は反射的に謝る。しかし、関羽は何の反応も返さなかった。どうしたのか、と横から見上げてみれば、関羽はある一点を見つめていた。その視線の先に目を遣ると、白く輝く服を身に纏った青年、つまりは一刀の姿があった。

鳳統は関羽へと視線を戻す。彼女には、一刀の事を睨んでいる様に見える。

「愛紗さん……？」

鳳統はその小さな手で関羽の手を握る。そこでようやく気付いた

のか、ハツとした表情でしばらく鳳統を見下ろした。

「……すまない。では、行くか」

顔を上げて再び歩き出そうとするが、鳳統がその手を引っ張る。

「愛紗さん、北郷さんと話してみなくてもいいんですか？ もしかしたら、桃香様の行方を知っているかもしれませんけど……」

関羽はドキリとした。心の内を見透かされたか、と思ったためだ。実際には違っていた事に安堵したものの、自分で思ってもみない程に動揺していた。取り敢えず、そうだな、と考えている様な返事をして間を取り、心に平静さを取り戻す。

「……しかし、涼州といえば僻地だぞ。曹操殿がつかんでいない情報を、あの男が知っているとは思えんか？」

暗に田舎だから、と言った訳では無い。徐州と涼州とでは大陸の東と西。州を接しているエン州とでは距離が違う。距離が開けば情報が入りにくくなるのは当然だった。

だが、気弱な鳳統が珍しく引かなかった。

「確かにそうかもしれませんが。でも、私達には桃香様の足跡すらつかめていないんです。例えわずかでも情報があれば、そこから推論する事も可能になります。それに……」

鳳統の声のトーンが下がる。

「……曹操さんが情報を隠している可能性は否定出来ませんから」

鳳統の邪推は、しかし当たっていた。

関羽達が客将になる事を了承した日から10日と経たないうちに、曹操は桃香の居場所を突き止めていた。早速彼女はこの件に関して箝口令を敷く。重要機密扱いとなり、この事を知っているのは3軍師と夏侯淵だけ。腹心である夏侯惇にも知らせない徹底ぶりだった。さらには、関羽達が城外へ出る事も禁止する。こうして、曹操は彼女達が情報を得る機会そのものを潰していった。

鳳統が自分の意見を押し通そうとしたのはこのためだった。せっかく巡ってきたこの機会に、自分の耳目で情報を集めたかったのだ。

「さつき、愛紗さんがいらんでいたのも分かります。北郷さんに嫌悪感を抱いているのも。ですが、今は……」

そう見えていたのか。本心が面に出ていなかった事に安堵すると共に、にらんでいたと言われた事に軽い衝撃を受けた関羽だった。

一方、一刀は悶々としながら歩いていた。頭の中をグルグルと回っているのは、もちろんさっきの曹操とのやり取りだった。

あの時曹操が纏っていた空気は、今までに一刀が感じた事の無い物だった。殺気とは明らかに違う空気と彼女が大鎌を構えた事に恐怖し、思わず刀に手を掛けてしまった。もしあの場に琥珀が現れなければ、確実に抜いていた。そして、曹操とは分からないが、間違いない無く夏侯惇には斬られていただろう。考えてゾツとした。

それにもう一つ、曹操との口論も問題だった。これが原因で、琥珀と曹操の仲が険悪なものになってしまっているのではないか。せっかく

手柄を放棄してまで曹操と良好な関係を築こうとしていたのに、自分の軽率な行動で全てをふいにしてしまったのではないか。彼は猛烈に後悔していた。

しかし、曹操に対して暴言を吐いた事を謝罪する気は起きなかった。覆水盆に帰らず、の言葉通り、1度口から出た文言が消える訳では無い。例え曹操が謝罪を受け入れたとしても、言った事実は残るのだ。

それに、謝罪をしまえば、曹操の言葉を認める事になる様な気がしていた。自分の恩人を、自分の大切な人達を、くだらないと切って捨てた。それだけは、どうしても許せなかった。

つまり、一刀は自分が悪いとは思っていないのだ。間違った事を言っただけでもない。その状態で謝罪をしたところで、所詮はうわべだけだ。うわべだけの謝罪ならいっそ謝らない方がいい。剣の師でもあった祖父の言葉が思い出された。

「北郷殿」

後ろから不意に声を掛けられた一刀は足を止め、誰だろうと振り返った。そこには長い黒髪の美少女と、その影に隠れる様にして彼を窺う女の子の姿があった。関羽と鳳統だ。

「……久しぶりだね」

自分自身、非常に渋い表情をしているのが分かり、努めて笑顔を作った。その笑みが関羽に虎牢関での事を思い出させる。激しい動揺を呼び、次の言葉を紡げない。結局、会話を繋げたのは声を掛けられた側である一刀だった。

「徐州では大変だったみたいだね」

「……いや。我々が不甲斐無ければかりに、桃香様や領民を苦しめる結果になってしまった。まったく情けない限りだ」

徐州という言葉に、関羽はさすがに落ち着きを取り戻し、沈痛な面持ちで嘔み締める様に語った。話題を間違った事に気付き、一刀は矢継ぎ早に続けていく。

「でも、2人が元気そうでよかったよ。そういえば、どうして曹操のところに？」

焦っていたせいか、聞きたいと思っていた事が思わず口からこぼれてしまった。

一刀の知る歴史でも劉備が徐州を追われた後、関羽は曹操の下にいた事がある。それは劉備の妻を守るためだった。しかし、桃香は女性だ。どういう理由があつてここにいいのか、興味があつた。

「私達が徐州から脱出した時、桃香様の母上を護衛していた。その後、体調を崩されたところを曹操殿に助けていただいたのだ」

なるほど、と思った。

「じゃあ、その恩を返すために曹操のところには？」

「ああ。桃香様の所在が分かるまで、という条件で客将として世話になっている。北郷殿は桃香様について、何か聞いてはいないだろうか」

ようやく本題まで辿り着いた。取り敢えずホッとして一刀の顔を見ると、彼は少し不思議な顔をしていた。

「……桃香の居場所なら、斥候から報告を受けてるけど」

「ほ、本当か!？」

関羽は一刀にズイと顔を近付ける。その迫力とあまりの顔の近さに圧され、思わず後ずさってしまった。だが、彼女はそんな一刀の心などお構い無しだ。まるで糸で引かれているかの様に一定の距離で付いていく。

両者の間はわずか数センチ。関羽が歩を進める度、彼女の長く艶やかな黒髪が揺れて一刀の鼻腔をくすぐる。そんな状況の中、関羽は期待と懇願の混じった瞳で一刀を真っ直ぐに見つめているのだ。彼の方が気恥ずかしさに耐え切れなくなり、視線を外してしまった。

「あ、あのさ、関羽？ その……、近いんだけど……」

「……えっ？」

言われてやっと気付いた。お互いの吐息がかかるくらいの距離に顔がある事に。

「も、申し訳無い!」

叫ぶ様に謝ると、大きく後ろに飛びずさる。彼女は顔を真っ赤にさせてうつむいてしまった。ゆっくりと一刀を窺う様に顔を上げ、目が合うと妙に意識して視線を逸らせてしまう。その様子を鳳統も

頬を赤く染めながら見ていた。

「…………で、桃香の居場所なんだけど」

「あ、…………ゴホン」

一刀が声を掛けると、関羽はばつが悪そうに咳払いをして姿勢を直した。

「桃香は荊州の牧、劉表さんのところに客将として迎えられてる。そこで、新野城って城を任されているらしい」

「荊州！？ それは、間違いないのか!？」

関羽は再び近付こうとして思い止まった。さすがにさっきの今で取り乱す事は無かった。

「俺が武威を発つ前に聞いた情報だけど、今も荊州にいるのは間違いない」

一刀は言い切った。その目には自信が満ちている。関羽もそれを感じ取ったのだろう。深々と頭を下げた。

「感謝する、北郷殿。この恩は、いつか必ず…………」

「気にしなくていいさ。それより、無事に会える事を祈ってるよ」
首を横に振る一刀に対し、関羽はわずかに微笑んだ。しかし、すぐに表情を引き締め直して踵を返す。

「行くぞ、雛里」

呼ばれた鳳統もペコリと頭を下げ、一刀に背を向けた。

「あつ、待って、鳳統」

一刀が背中から呼び止めると、少女の体はビクンと跳ねた。足を止め、恐る恐る振り返る。その顔は今にも泣き出しそうだ。

そんな鳳統に一刀はゆっくりと近付き、そつと耳打ちした。彼女が、えつ、と彼を見上げたのと、関羽が再度彼女の真名を呼んだのは同時だった。要領を得ない様子の鳳統だったが、もう1度お辞儀をして今度こそ関羽の後を追い掛けた。

その日の夜、曹操から酒を振る舞われた馬騰軍。将も兵も皆盛り上がっている。そんな中、その輪を離れて1人酒を飲む琥珀へと一刀は近付いた。昼間の事が申し訳無く、一刀は言葉が出てこない。

「どうしたの？」

背中越しに声が飛ぶ。そうしながら自分の座る左側を叩き、そこに腰を下ろせと伝えた。促された通りに土の上に座ると、一刀は琥珀の顔色を横目で窺った。

飲む前からそうだったが、怒っている様子は無い。だからといって、昼間の事を放っておく訳にはいかなかった。

「すみませんでした。昏間はついカツとなり、琥珀さんに迷惑をかけてしまって……」

「まったくよ。貴方は翠達の暴走を止める立場なのよ？ それが、曹操と口論した挙句、刃傷沙汰に及ぼうだなんて……」

琥珀は杯を空けると、手酌で酒を注ぐ。うなだれる一刀だったが、そのせいで琥珀の表情に気付かなかった。呆れた風な言葉とは裏腹に、彼女は思い出す様にして笑っていた。

「でもね、貴方があそこで怒ってくれなければ、もっと大事になっていたかも知れないわ」

とつくりを置いて空いた左手で一刀の頭を撫でる。小さい子に対してする様な行為に恥ずかしさが込み上げてくるものの、彼はそれを嫌がる事無く受け入れていた。何だか懐かしい気持ちになる。

「……ありがとう」

一刀の口からは自然とその言葉が漏れていた。

翌日、琥珀と一刀、翠の3人は曹操の仲介で献帝に謁見する事になった。しかし、一刀は出来る事なら行きたくはなかった。そこに曹操の思惑が透けていたからだ。

今でこそ鳴りを潜めたが、一刀がこの世界に来た当初、天の御遣いの噂話は、彼が救世主であるかの様な内容で国中に広まっていた。豪族や地方領主はともかく、漢王朝の中心に近い位置にいる者がそれを快く思っているはずがない。にもかかわらず、曹操が一刀を献帝に目通りさせようとするのは、彼女が献帝一派に対して重圧をかけるために他ならなかった。そうする事で、最初からお互いの力関係をはつきりさせてしまうつもりなのだ。

しかし、前日の事があるために一刀も拒む事が出来ず、結局は曹操に従わざるを得なかった。

第3章・長安編・第10話〈旧都長安〉（後書き）

第10話でした。

長安での話は今回で終了しますが、長安編はまだしばらく続きます。これからもよろしくお願いします。

第3章・長安編・第11話 関羽千里行

曹操は献帝を保護すると、そのまま本拠地である陳留へと戻った。李確等の時の轍を踏まないために、献帝を手元に困うつもりだった。

「報告は聞いているわ。ご苦労だったわね、秋蘭」

濮陽において対袁紹の指揮を執っていた夏侯淵は、侵攻してきた袁紹軍を返り討ちにした。この勝利により、しばらく侵攻を止める事が出来たと判断した夏侯淵は、指揮を郭嘉に任せて許緒と共に報告のために陳留へと帰還していた。

曹操が陳留へと戻った翌朝の事。玉座へと腰を下ろした彼女の下に、荀彧が息を切らして駆け込んできた。

「どうしたの、そんなに慌てて」

曹操は手元の竹簡から一瞬だけ視線を上げ、すぐに戻す。荀彧の言葉が来る前に、脇にいる夏侯淵に竹簡を指差しながら指示を出した。彼女は袁紹との争いが一段落している間に南の豫州へと領土を拡大させるつもりであり、夏侯淵への指示はそれに関係するものだった。

「た、大変です！ 関羽が……、関羽が劉備の母親等と共に姿を消しました！」

「な、何ですって！？ 本当なの、桂花！？」

寝耳に水、といった感じでひどく狼狽した曹操は、思わず大声で

聞き返して玉座から立ち上がった。そんな彼女に、荀或は手にしていた竹簡を手渡すべく近づく。その際、関羽の部屋に、と短く付け加えた。

竹簡を広げて視線を落とす。そこにはいかにも関羽らしい整った、しかし、力強い字が書かれていた。

まずは、義母を保護してくれた事に対する曹操への礼。続いて、桃香の所在が判明した事。最後に、世話になったにもかかわらず、何も告げずに去る非礼を詫げる文章でまとめられていた。

それを一読すると、竹簡を夏侯淵に渡してひざまずく荀或を見下ろす。一目で不機嫌と分かる顔だ。

「……で、どういう事なのかしら？」

関羽に関する事の全般は、荀或が責任者となっている。曹操が詰問するのは当然だった。

「申し訳ありません。細心の注意を払い、出入りする者の選定まで行っていたのですが……」

確かに荀或の言う通りだった。劉備の居場所に関しては重要機密として管理され、それを知る事の出来る人物から制限していた。さらには、関羽達の外出にも規制をかけていた。

一体どうやって。そう考えた時、曹操はハツとした。可能性があるとなれば、長安に出兵していた時しかない。それならば、陳留に戻ってすぐ、という時期も納得がいく。

「北郷一刀……！」

ギリツと音がするほど強く齒軋りをし、忌々しそうにその名を口に出した。呟く様に小さな声だったため、荀或はそれに気が付かずに話を続ける。

「すぐに追撃部隊を編成して……」

「駄目よ！」

荀或の言葉を曹操は声を荒げて遮る。あまりの剣幕に、言われた荀或だけでなく夏侯淵まで体をビクツとさせた。

「忘れたの？ 私は、劉備が見つかるまで、という約束で関羽を客将として召し抱えたのよ。その約束を反故にしる、と？ 貴方は私の名を穢すつもり？」

「い、いえ……。申し訳ありませんでした」

もちろん、荀或もそんなつもりだった訳では無い。ただ、曹操が名を取ったのに対し、荀或は実利を優先しようとしたためだった。

今現在、確かに劉備は劉表の客将に過ぎず、警戒する必要の無い相手である。しかし、血筋だけが取り柄の貧しい農家の娘だったにもかかわらず、州牧にまで成り上がったのだ。いつまた、どんなきっかけで浮上してくるか分からない。

だからこそ、荀或は桃香の母親を逃したくはなかった。彼女を人質とし、劉備に対する抑止力としておきたかった。しかし、主である曹操はそれをよしとしなかったのだった。

「うわっ！ ……どうかしたんですか？」

と、そこへ許緒がやって来た。何やら急いでいた様子であったが、その場の空気を感じてか、扉のところで二の足を踏んでいる。

「……ああ、問題無い。どうしたのだ、季衣」

夏侯淵はチラリと横目で曹操の顔色を窺う。未だ不機嫌そうな顔を崩さない主の様子に、彼女が代わりに答えた。許緒は何となく気になったものの、秋蘭様が言うなら大丈夫だろう、と曹操達の方へ数歩近付いた。

「さつき、春蘭様が数人の兵を連れて凄い形相で出ていったんですけど、何かあったんですか？」

許緒の話聞いた3人は顔を見合わせた。3人が3人共、同じ考えだった。

「秋蘭、急いで後を追いなさい！ 春蘭にやらせては駄目よ！」

はっ、と短く返事をし、夏侯淵は外へと駆け出した。ただならぬ雰囲気、事情を知らない許緒だけがオロオロしていた。

夏侯惇はわずか10騎の部下と共に関羽を追跡していた。この10騎、いずれも彼女の配下の中では馬術を得意としている者達であ

る。輜重隊もない今の状況での馬足はかなり速い。

一方、関羽の方かというと、鳳統と桃香の母を乗せた馬車の存在により、夏侯惇の部隊に比べるとだいぶ速度は遅かった。彼女達はまだ日の高いうちに夏侯惇に捕捉された。

どうするべきか、一瞬悩む。義母上達だけ先行させるか、と考えたが、それは自分の中ですぐに否定された。辺りは平坦な草原である。夏侯惇だけなら自分1人でも足止め出来よう。しかし、10人もの騎兵を1人で止められる訳が無い。ならば、2人を傍において自分が守るしかない。関羽はそう覚悟を決めた。

足を止めた関羽達の周囲を夏侯惇の部下が囲う。その間から夏侯惇が進み出た。その顔には怒りがありありと出ている。

「貴様、華琳様より恩を受けておきながら、どこへ行くつもりだ」

「恩ならば、長安において返したはずだ」

「あれしきの働きで返せるほど、華琳様より施された恩を軽いと思うな！ 戻れ、関羽！ 戻らねば……！」

夏侯惇は背中の大剣に手を伸ばす。

「戻らなければ……、どうだと言うのだ。こちらは、姉上が見つかるまで、という約定で客将となったのだ。それを今さら反故にしようとするのは、道理に反するのではないか？ それでもなお我が行く手を阻むというのなら、こちらも容赦はせんぞ！」

関羽も大喝し、馬の背に付けた偃月刀に手を掛けた。

関羽は、まさか夏侯惇が独断で追跡して来たとは思っていなかった。曹操の命令で追って来たと思っていた。それが普通だからだ。だからこそ、これ以上のやり取りは無駄だと判断し、実力行使に出る覚悟を決めた。

それを見て、夏侯惇はニヤリと笑う。

彼女の心の中には葛藤があった。確かに関羽の実力は高い。このまま残れば華琳様の覇道の助けになる事は間違いない。しかし、頭ではそうだと分かっているにも、納得は出来なかった。

彼女には曹操軍最強という自負がある。曹操の事を誰よりも愛している自信がある。そんな自分より、関羽の方が寵愛を受けるかもしれない。後から来た客将のくせに。華琳様を慕ってもいなくせに。そんな思いが夏侯惇にはあった。曹操の事を思うほど、嫉妬に身を焦がす事になった。

だからこそ、彼女は笑った。戻る事を拒んだのだ。関羽を討つ事こそが華琳様のためになる。彼女の中から葛藤が消え、シンプルな結論に辿り着いた。

「その首、置いていってもらおうぞ！」

夏侯惇は馬を寄せながら大剣を引き抜くと、そのまま関羽へと振り下ろす。関羽は偃月刀でその一撃を受け止め、両者の一騎討ちが始まった。

お互いの得物を激しく打ち合う2人だが、わずかに夏侯惇が押し始める。目の前の相手にのみ集中すればいい夏侯惇と違い、関羽は

周囲の兵にも意識を向けながらの戦いだ。

鳳統達の護衛についている兵は、馬車を操っている者を含めても3人しかいない。相当に不利な状況だった。

そんな散漫な状態で夏侯惇に勝てる訳が無い。強烈な突きを捌きそこなつた関羽。バランスを崩した彼女に、夏侯惇は一気呵成に攻め掛かる。連続で重い斬撃を打ち込まれ、関羽は防戦一方になってしまった。

こうなると、関羽にも周囲を警戒する余裕は無くなってくる。その隙を突き、夏侯惇の部下は鳳統達に襲い掛かる。護衛の兵も何とか抵抗しようとするが、数で負けている上に相手は精鋭揃い。3人の兵は容易く討たれてしまった。

断末魔の叫びに関羽が気付いた時には、鳳統に向かって敵兵の1人が剣を振り上げたところだった。

「離れっ！」

関羽の悲鳴に近い絶叫が飛ぶ。しかし、鳳統は恐怖で動く事が出来ない。今まさに自分の命を刈り取るうとしているものを、怯えた瞳でただ見つめるだけだった。

その時、何かが空気を切り裂いた。キンッ、という高い金属音が響き、兵士の振り上げていた剣が宙を舞う。その剣が落ちた隣には、1本の矢が転がっていた。

「貴様は……！」

そこにいる者の視線が一斉に矢の飛んできた方向に集まる。そこには馬に跨がった1人の女性の姿があった。

「り、呂布……！ なぜここに……！」

一同が驚いた表情を見せても、恋にはまったく動じた様子が無い。普段通りの無表情で、ゆっくりと関羽の方に近付いていく。

「……恋は、関羽に用がある」

恋はボソツと呟く。彼女の登場ですっかり戦場の時間は止まっており、関羽はいつの間にか夏侯惇の間合いから抜けていた。

『私に用、だと？』

関羽は怪訝そうな顔をする。それはそうだ。彼女はかつて、恋に殺されかけているのだ。首筋が疼くのを感じ、体は自然と強張った。

身構えた関羽が何かを尋ねるより先に、夏侯惇が2人の間に割って入る。

「貴様の用など知らん！ 呂布、この傷、忘れたわけではあるまいな！」

夏侯惇は失った左目を隠す眼帯を指差す。それに対し、恋は覚えていないのか、小首を傾げたままで動きが止まった。誰も何も言わないまま1分が経ち2分が経ち、いよいよ夏侯惇が痺れを切らしかけたところで、ようやく恋は口を開いた。

「……蝶々、可愛い」

この一言に、夏侯惇はキレた。

「貴様あ！」

大気を震わす雄叫びと共に、怒りを込めた大剣が恋へと迫った。まるで、血管の切れる音が聞こえてくるかの様な激昂ぶりに、彼女の部下すら竦み上がる。しかし、恋は顔色を全く変えず、戟を片手で操ってそれを受け止めた。

「……褒めたのに、何で怒ってる？」

「ふっ、ふざけるなっ！」

不思議そうな呂布の言葉に、夏侯惇はさらに怒りをたぎらせた。

彼女の着けている蝶を模した眼帯は、かつて虎牢関で恋に射抜かれた左目を隠すための物だ。それを張本人である恋に、可愛い、などと言われれば、馬鹿にされていると考えるのは当然だった。例え恋には全くその気が無くても、だ。

「恋の邪魔をするなら……！」

わずかに恋の眉間にシワが寄る。両手で方天画戟を構えると、周囲の空気が冷たくなった。その威圧感に負けない様、夏侯惇も七星餓狼を両手で握り直した。両者はジリジリと距離を詰めていく。

「姉者、待てーっ！」

そんな緊張感が極限まで高まったところへ、馬に乗った1人の女

性が駆け込んだ。ようやく追い付いた夏侯淵だ。

「いいところに来た。私が呂布をやるから、秋蘭は関羽を止める」

妹を一瞥した後、夏侯惇は呂布に正対し直す。しかし、夏侯淵にはその指示に従う事は出来なかった。

「待て、と言っているんだ、姉者。華琳様の御命令だ、兵を退いてくれ」

「し、しかし……」

妹の言葉に夏侯惇は抗おうとする。その気持ちは夏侯淵にはよく分かった。双子の姉妹だ。姉の事は誰よりも、それこそ主である曹操よりも理解している自負があった。それでも、これ以上姉の暴走を許す訳にはいかなかった。

「華琳様は関羽と、劉備が見つかるまで、と約束をされているのだ。にもかかわらず、姉者が関羽を追撃すれば、華琳様の名を穢す事になってしまうぞ？」

同じ事は先程関羽にも言われている。しかし、頭から敵と決め付けている相手と自分の妹では、同じ事を言われても受け取り方が違う。その上、曹操の名を穢す、とまで言われれば、夏侯惇には剣を収める他無かった。

渋々退いた夏侯惇の姿に、呂布も構えを解いた。それを見て、夏侯淵は2人から関羽の方へと向き直る。

「姉者の独断とはいえ、すまない事をした」

「いや、こちらこそ急いでいたとはいえ、曹操殿に一言も無しに発ったのは礼を欠いていた。申し訳無い」

2人は互いに頭を下げ合う。そうしてから、夏侯淵は腰に下げた袋を関羽に突き出した。

「華琳様から。2人が仕えていた間の給金だそうだ」

恐らくは、夏侯惇の事も含めて貸し借りを無しにしたい、という事なのだろう。だから、関羽は気兼ね無く受け取った。さつき口に出した様に、彼女にも後ろめたいところがある。それも含めて無しに出来るからだ。乗らない手は無かった。

「礼を欠いたにもかかわらずこの様な心遣い、曹操殿に感謝していると伝えていただけるか？」

「ああ、確かに伝えよう。……姉者、戻ろう」

夏侯姉妹は兵をまとめて陳留へと戻っていった。その様子を見て、関羽は軽いため息を吐いた。だが、まだ安心は出来ない。

「……呂布、私に用とは何だ？」

関羽は偃月刀を手にしたまま、警戒は緩めていない。

「……張飛と約束した」

「約束？ 張飛と、か？ それは一体……」

さらに尋ねようとしたところで、獣の唸り声の様な低く大きな音が辺りに響いた。周囲を見回すが、唸り声を出しそうな獣の姿は関羽の瞳には映らない。首を捻りながら視線を戻す。すると、わずかに切なそうな顔をした呂布が腹を押さえている。

「……お腹空いた」

呟かれたその言葉に、関羽の緊張は一気に失われた。

「ちゃんと聞くのです！」

音々音の怒鳴り声にハツとしたのは関羽だけではなかった。鳳統と桃香の母も呆けていた。

恋の大きな腹の虫の鳴き声を聞いた関羽は、朝から何も食べていない自分達も空腹である事に気が付いた。そこで、近くを流れていた小川のほとりで食事を取る事にした。そんな状況で彼女達が何に呆けていたのかといえ、恋の食事の仕草だった。

まるで、リスが頬袋一杯に食物を詰め込む様な食べ方をする恋の姿は、とても飛將軍と呼ばれる武人とは思えない。彼女を中心に、小動物を愛でるかの様な癒しの空間が出来上がっていた。そのお陰で、音々音の言葉の半分も届いていなかった。

関羽はわざとらしく咳払いをし、恋が視界に入らない様に座り直す。

「すまない、もう一度話してもらってもいいか？」

まったく、と文句を言いながら、音々音は再度口を開いた。

虎牢関で鈴々と戦った後、恋は再戦を約束していた。その約束を果たすため、春に涼州を発ち、徐州まで旅をしたのだ。しかし、2人が徐州に着いた時、すでにそこは袁術の手に落ちていた。

しばらくは徐州にとどまり情報を集めていたものの、悪政のために人の出入りがほとんど無く、外からの情報は全くと言っていい程に入ってこなかった。そこで、一旦涼州に戻ろうという事になった。その途中、関羽らしき人物が陳留にいる事を聞いて進路を変更したところ、偶然出会う事が出来たのだった。

「なので、張飛の居場所を知っているのなら、ねね達に教えて欲しいのです」

そう言われて関羽は悩む。恐らくは桃香様と一緒にいるのだろうが、果たして会わせてよいのか、と。

「呂布よ、あくまで武人としての勝負、なのだな？ 殺し合いをするのが目的ではないのだな？」

関羽の問いに、焼いた魚にかじりついていた恋の動きが止まる。関羽を真っ直ぐに見ると、恋は魚から口を離れた。

「……別に、張飛の事、嫌いじゃない。……強いし、面白い」

それだけ言うと、再び魚を頬張り始めた。その姿に邪気は感じら

れない。助けてもらった恩もあり、関羽は2人を荊州まで連れていく事に決めた。

ハア、と大きなため息が1つ。武威の城壁の上には翠の姿があった。

彼女は直前まで鍛練に使っていた槍を壁に立て掛けた。そして、もう1つため息を吐く。一刀の顔がちらつき、鍛練にも全く身が入っていないかった。ふと、蒲公英の言葉が甦る。

「やっぱりあたし、一刀の事が……」

好きなのか、とは、例え独り言とはいえ、恥ずかしくて口に出す事は出来なかった。でも何であいつの事を、と自問自答する。あたしより弱いのに。

翠が5つか6つの頃。彼女の父がまだ存命だった頃の事だ。翠は琥珀に、なぜ父様と結婚したの、と聞いた事があった。私より強かったから、という母の答えは翠の心に深く刻まれる事になった。母に対して強い憧れを抱いていた翠は、自分もいつか自分より強い男と結婚する、と、その時自然と考えていた。

しかし、母から武の才を色濃く受け継いだ翠。同年代では男女問わず、彼女に勝てるものはいなかった。唯一それが出来たのは恋だけだ。

そんな訳で、翠は今まで異性を好きになつた事が無かつた。一刀も条件から漏れているはずなのだ。なのに、彼の事が気になっている自分に戸惑う。

「あーっ、もうっ！」

モヤモヤを吹き飛ばそうと叫んでみるが効果は無い。

誰かに相談してみようか、と思つて愕然とする。相手が全くいない。

すぐに候補から外れたのは蒲公英と霞だった。2人に知られれば、3日と経たずに街中に、しかも尾ひれを付けて言い触らされるのは目に見えている。

次に外れたのは鷹那と清夜だ。清夜はともかく、鷹那とは小さい頃から一緒にいるが、彼女の側に男性がいた記憶は無い。清夜も同じ様なものだろう。当てには出来ない。

それに、長安での蒲公英の話进行を思い出すと、月に相談するのは憚られた。その親友である詠も同じだ。

となると、彼女が相談出来る人物は1人しか残っていないかつた。

「……母様、か」

「なあに？」

「ひゃあっ！」

いきなり背中から声を掛けられ、翠は思わず飛び上がった。バクバクいう心臓を押さえながら振り向けば、そこには翠以上に驚いた様子の琥珀が立っていた。

「な、何なのよ、貴方は。人の事を呼んだかと思えば、いきなりすつとんきような声を上げて」

「ご、ごめん、母様」

よほど考え事に集中していたらしい。彼女にしては珍しく、琥珀の気配を感じる事が出来なかった。当然、母親である琥珀は娘の様子がおかしいと気付く。

「で、何の用なの？」

「へっ？」

「へっ、じゃないわよ。用があるから私を呼んだんじゃないの？」
少し怪訝そうな目で見られ、とっさに翠は慌ててしまった。母様に相談しようか、とは思ったが、まだ決心はついていない。

「な、何でも無い何でも無い。母様に相談なんか無いから」

「あら、私に相談？ 珍しいわね。いいわよ、何でも聞いてあげるから」

娘からの相談など久しぶりで、思わず琥珀は嬉しくなった。だが、翠の方はといえば、バレた事にドキツとしていた。自分が口を滑らしたのも気付いていない。だから、誤魔化そうとしてさらに傷口を

広げてしまっ。

「相談なんか無いって言ってるだろ！ 大体、あたしに一刀の事で相談なんか、ある訳無いじゃないか！」

「一刀君の事？」

琥珀がニヤリと笑うと、翠はさらに泡を食った。顔を真っ赤にさせワタワタと手を振る。必死に否定しようとするが、なかなか言葉が出てこない。

「いいのよ、恥ずかしがらなくても。母様に話してみなさい」

両手を広げて翠へとゆっくり近付いていく琥珀。私の胸に飛び込んできなさい、とでも言わんばかりだ。1歩、また1歩と距離を詰められ、翠もジリジリと後退る。

その背が壁面に触れた。もはや逃げ場は無い。琥珀の目が妖しく光った気がした。

「……だから、何でも無いって言ってるだろーっ！」

翠は街中に聞こえる様な大声で叫び、琥珀を突き飛ばして逃げ出した。

「まったく……」

たたらを踏んだ琥珀は物凄い速さで小さくなっていく娘を見ながら、ため息混じりにそう呟いた。その顔には呆れた様な、それでいて、どこか嬉しそうな微笑みが浮かんでいた。

琥珀から逃げ出した翠は、そのまま城壁の上をぐるりと反対側まで駆け抜けた。壁に背中を預け、乱れた呼吸を整える。

せつかく母様から話を切り出してくれたんだから、言ってしまうはよかったかな。そんな事を考えてかぶりを振った。

あの目は面白がっている時の目だ。あの目の時に相談なんかしてもろくな目にあわない。きつとあたしの気持ちを一刀に伝えてしまおう。もしそうになったら、あいつはどう思うだろう。

そこまで思いが巡り、翠はハツとした。一刀はあたしの事をどう思っているのか。翠は一気に熱が冷めていくのを感じた。

「……そうだよな。こんな男みたいな女の事……」

好きになる訳無い、とは怖くて口に出せなかった。

ふと、激しい鼓動を繰り返していた胸に当たった右手が目に入った。右手をギュツと握り、それを覆う様に左手を被せる。そのままストンと尻をついた。

小さい頃から鍛練に明け暮れてきた彼女の掌は、マメができては潰れを何度も繰り返し、かなりゴツゴツしている。小さな傷だらけの指はだいぶ節くれだっている。すっかり母と同じ手になっていた。子供の頃に握った母の手を目標に頑張ってきた成果だ。

しかし、ついさっきまで誇らしかったこの手が、今はとても恥ずかしい。月の細くて小さな手を思い出すと、他人に、一刀に自分の手を見せたくなかった。

そう考える事は、大好きな母を辱しめる事の様な気がして、翠は自分が少し嫌いになった。

第3章・長安編・第11話〈関羽千里行〉（後書き）

という事で、第11話でした。

久々に登場して愛紗達のピンチを救った恋。彼女の仕草に桃香の母親までまとめて虜にされています。

演義と違い、荊州まで真っ直ぐ向かっているので五関の突破もなく、この後は平穩に荊州へ着く事が出来るでしょう。

後半は、ガッツだけれど恥ずかしがりやで乙女らしい翠の可愛らしさが出ていれば、と思います。

今回は、愛紗が向かっている荊州で、桃香達の話になります。

第3章・長安編・第12話 荆州の闇

徐州を脱出した桃香達は、荊州牧である劉表の下へ身を寄せていた。反董卓連合の際に桃香をいたく気に入った劉表は、彼女達を喜んで迎え入れる。そして、荊州の北部にある新野城を彼女に貸し与え、辺り一帯の統治を認めたとのである。

そんなある日の事。劉表から酒宴に招かれた桃香は趙雲を護衛に伴い、荊州の州都である襄陽を訪れた。

宴会場に入ると、劉表にその息子、劉奇と劉宗を初めとし、劉表に仕える文武官や荊州の有力者の姿があった。その中にある女性を見つけ、桃香は頭を下げた。相手も気付いたらしく、微笑みながら頭を下げ返した。

女性の名は司馬徽といい、一般には水鏡とよばれている。彼女はこの襄陽で水鏡女学院という私塾を開いていた。

諸葛亮と鳳統は桃香に仕える前、この水鏡女学院で勉学に励んでいた。そのため、桃香達は最初に襄陽を訪れた際、彼女に劉表への取り次ぎを仲介してもらっていた。

朱里ちゃんも連れてくればよかったかな。そんな事を思いながら桃香は用意された席に着いた。劉奇、劉宗に次ぐ位置は、客将としては破格の待遇だ。それゆえ、彼女には視線が突き刺さる。特に、劉表配下の一部からは厳しい視線を向けられていた。居心地の悪さに、なかなか酒も進まなかった。

「どうじゃな、楽しんでおられるか？」

宴が始まってからしばらくしたところで劉表に声を掛けられた。気が重かった桃香だが、この頃には多少酔いが回り始めていた。

「はい。どうもありがとうございます、劉表様」

そう礼を言った後、笑顔を見せる。その様子に劉表は満足そうに頷きながら真っ白い顎髭を撫でた。

「それはよかった。ところで、酔い醒ましに少し付き合ってくれんかの？」

「はい、もちろんです」

酔いを醒ます程には飲んでいなかったが、劉表からの誘いでは断れない。それに、酔ったところで居心地の悪さが解消される訳でも無かった。

趙雲を見てみれば、出された酒とメンマに至福の顔をしている。邪魔しちゃ悪いな、と、桃香は声を掛けずに席を立った。

宴会場から露台へと出た。あまり酔ってはいないが、多少なりとも顔は熱を持っている。夜風に吹かれると心地よかった。特に、襄陽の北には漢水という川が流れている。川面を滑ってきた風はひんやりとしていた。

「荊州での暮らしには慣れましたかな？」

「はい、お陰様で。荊州の人達は皆いい人ばかりで助かりました」
頭を下げた後、桃香は劉表から街の方へと視線を移した。宵の口はとうに過ぎてているが、人の気配はそこかしこから感じる。治安が
いい証拠だ。

荊州は漢水と長江の流れにより、非常に肥沃な土地となっている。
この国を代表する穀倉地帯だ。そんな豊かな土地のせいか、ここに
暮らす人々は温かい人が多い。素敵な土地だと思う。

「劉備殿」

街を眺めていた桃香は名前を呼ばれて振り返る。当然、そこには
劉表しかいない。しかし、いつもの好好爺然とした雰囲気は無く、
桃香も自然と姿勢を正した。

「儂の後を継いで、この荊州を治めてはもらえぬか？」

「えっ!？」

「この老いぼれの最後の頼み、どうか聞き届けてもらいたい」

いきなりの事に困惑する桃香に構わず、劉表は深々と頭を下げた。

「ちよ、ちよつと待つてください。劉表さんには劉奇さんと劉宗
君、立派な世継ぎが2人もいるじゃないですか」

「……情けない話じゃが、あの2人ではこれから先、荊州を守り

抜く事は出来まいて」

顔を上げた劉表は無念そうに首を横に振った。

次男の劉宗はまだ10歳にも満たない子供だ。とてもではないが、州牧など務まらない。

一方、長男の劉奇はすでに20歳を越えている。聡明で優しく、人望もあつた。しかし、彼は生まれつき体が弱かつた。

今は平和な荊州も、遠からず戦渦に巻き込まれるのは目に見えていた。その時に先頭に立つ者が病弱では、将兵の士気にかかわる。平時であれば何の問題も無いのだが、今の状況では劉奇に州牧の役は重すぎた。

桃香にとつてもありがたい話であつた。徐州の州牧を務めていたとはいえ、現在は劉表の客將に過ぎない。新野城も貸してもらつていただけだ。本拠地も無く、これからの方針も決まっていない状態そこへ、何の苦勞も無く荊州が転がり込んでくる。大変おいしい話だつた。

しかし、桃香にはこの話を受けるつもりは無い。もし劉表に世継ぎがいなければ、喜んで話を受けたらう。だが、そうではないのだ。

いくら乞われたとはいえ、このまま桃香が跡を継ぐ事は道に反する。少なくとも、彼女の信念、正義にはあてはまらない行為だ。

その事を伝えると、劉表は落胆した表情を見せたものの納得してくれた様だつた。ホツとする桃香。しかし、まだ話は終わってはい

なかった。

「ならば、儂の息子の嫁ではどうじゃ？」

「……えっ？ えーっ!？」

一旦安心した事もあり、桃香の驚き様は先程以上だった。自分でも顔が赤くなつたのがはっきりと分かる。

「誰か将来を約束した相手でもおるのか？」

それを聞いて、桃香の脳裏には一刀の顔が浮かんだ。何だか恥ずかしくなり俯いてしまう。

いきなりの事にただでさえ混乱しているのだ。そこに一刀を思い出した事で、混乱はさらに加速していた。お陰で何も言葉が出てこない。

「……まあ、年寄りの戯れ言じゃ」

沈黙を否定ととつたのだろう。そう冗談の様に言った劉表の顔は、やはりどこか寂しそうだった。

酒宴が終わると、桃香と趙雲は用意されていた宿へと戻った。襄陽で一番高級な宿だ。戻った時には夜半も過ぎようか、という時間だった。だが、桃香は寝付く事が出来ず、隣で気持ちよさそうに寝

息をたてている趙雲を起こさない様、気配を殺して部屋を出た。

すでに街全体が寝静まっている。聞こえるのは虫の声と風の音だけ。そんな静寂の中を桃香は目的も無く歩いている。その頭の中には、先程の劉表との会話が思い出されていた。

「結婚か。一刀さんとそうなたりしたら……。きゃーっ！」

頭の中で妄想を膨らまし、恥ずかしさで1人身悶える。端から見れば大層珍奇な行動だろう。本人にもその自覚があった様で、落ち着いてからさらに恥ずかしくなった。

生まれ故郷の楼桑村にいた頃は、いつかは自分も普通に結婚し普通に子供を生むのだろう、と思っていた。だが、自分が中山靖王劉勝の血を引いていると知った時から全てが変わった。皇家に名を連ねる者として、苦しむ民を救いたい、と思うようになった。何より桃香自身が今の世の中を非常に憂いていた。

そんな中、彼女は頼もしい義妹2人と出会い、共に乱世を終わらせるべく義勇兵として立ち上がった。あの時から結婚なんて事を考える暇は無くなっていた。

3人で交わした義姉妹の契りを思い出し懐かしくなる。同時に、関羽が傍にいない事への寂しさと不安も思い出してしまった。徐州陥落からかなり経ったが、私がつまらなく感じている、という思いは未だに消えていない。

「愛沙ちゃん……」

名前を呼んでみる。だが、当然返事は無い。鳳統や母も同じだっ

た。

きつとどこかに無事にいる。そう強く信じてみても、何も情報が入ってこない状況に心は折れそうだった。

足を止めたため息を吐く。その時、後ろに人の気配を感じた気がして振り返ってみた。

そこには2つの人影。月明かりしかないが男性だと分かる。そして、彼らがただの通行人でない事も。おっとりしているものの、彼女とて数々の修羅場を潜り抜けているのだ。彼等の雰囲気は剣呑でない事くらいは感じ取れた。

逃げないと。そう思った桃香の足は正面に向き直ったところで止まった。前方にも同じ様な男がやはり2人。すでに囲まれていた。

右手にあった商家の壁に背中をつけ、背後に回られない様にしてから懐に手を入れる。普段腰に佩いている宝剣、靖王伝家は、宿に置いてあるため今は無い。手元にある武器は護身用の短剣のみだった。

それを引き抜き構える。だが、腰が引けたその構えは、お世辞にも強そうには見えない。彼女には絶望的に武の才能がなかった。

桃香を囲んでいる男が、いつの間にか1人増えていた。恐らくは男達のリーダーなのだろう。他の4人より1、2歩前に出ている。その男が静かに右手を上げた。

その瞬間、ドガツ、という激しい音がしたかと思うと、桃香から見て左端の男が崩れ落ちた。その影から現れた人物は桃香へと駆け

寄る。

「大丈夫ですか、桃香様？」

「う、うん。ありがとう、星ちゃん」

それは趙雲だった。意外な程に落ち着いている様子の趙雲は、桃香の返事を聞いて安堵の表情を浮かべた。だが、すぐに険しい顔に戻り、男達の方を睨み付けた。

「貴様等、この方を劉表様の客将、劉備様と知つての狼藉か！もしそうだと言うなら、貴様等全員、我が槍の鏑にしてくれる！」

穂先を向けながら、趙雲は大喝する。人々が寝静まった街に彼女の声が響いた。

こんな深夜に大声を出せば、少なくともこの一帯の住民は何事かと起きてくるはず。人目につく事を恐れ、奴等は退かざるを得ないだろう。

趙雲のそんな読みは的中した。2人が倒れた仲間を抱え、もう2人が趙雲を牽制しながら彼等は闇の中に消えていった。

気配が完全に消えたのを確認すると、趙雲は面倒な事になる前に桃香の手を引いてその場を離れた。

「では、どういう事が説明していただけますか？」

趙雲が一暴れした通りからしばらく離れた裏通りに2人はいた。

「説明、って言われても、いきなり襲われたから……」

桃香には襲われる心当たりなど無かった。可能性があるとするれば、夜中に1人で出歩いていたから、としか思えない。しかし、趙雲が聞きたいのはそこではなかった。

「襲ってきた連中も気になりますが、私が聞きたいのは、なぜこんな夜更けに1人で外出されたのか、という事です」

「そ、それは……。星ちゃんが気持ち良さそうに寝てたから、起こしちゃ悪いと思って……」

趙雲の顔色を窺いながら返事をする桃香。それを聞き、趙雲は深いため息を吐いた。

「まったく……。桃香様のお命と私の安眠、一体どちらが大切だとお思いか？」

「ごめんなさい、と情けなく謝られたが、許すつもりは無かった。淡々とした口調で説教を始める。

普段は飄々として人をからかった様な言動の多い彼女だが、締めるところはピシッと締める。真面目一辺倒の関羽とも、常にゆるゆるな鈴々とも違う。劉備軍において一番オンオフの切り替えがはっきりしている。

「……という訳ですから、今後はこの様な真似はしないでいただきますな？　もし御身に何かあれば、皆に会わず顔がありません」
だからだろう。説教は桃香が驚くくらいの短時間で終わった。

「もう終わりでいいの？　愛紗ちゃんだと、最低でも半刻は続けるの？」

「おや、桃香様は愛紗の様な長い説教をお望みか？　ならば……」
説教が再開されそうな雰囲気桃香は慌てる。

「大丈夫！　大丈夫だから！」

首と手を振って激しく拒否する姿に、趙雲は頬が緩むのを我慢出来なかった。その表情につられて桃香も笑顔を見せた。

「ありがとう、星ちゃん。私の事、だいぶ探し回ってくれたんでしょ？」

趙雲が助けに現れたのはギリギリのタイミングだった。自分を見つけてくれるのが少しでも遅れていれば、どうなっていたか分からない。しかし、趙雲は予想外の答えをしれっと答えた。

「いえ、そんな事はありませんぞ。桃香様の後をつけていましたからな」

「……えっ？　だって、星ちゃん寝てたでしょ？」

趙雲の意外な言葉に桃香は一瞬言葉に詰まった。その表情も固ま

っている。

「確かに眠っていましたが、部屋を出る桃香様の気配で目が覚めましたな。どこへ行くつもりかと、後をつけていたのですよ」

趙雲は事も無げに答える。それを聞いて、だったら怒らなくてもよかったのに、と思ったが、それを言うとまた怒られるのが分かりきっていたので桃香は黙っていた。

と、桃香はさっきの自分の行動を思い出した。ついてきていた、という事は見られていたのだろうか。恐る恐る尋ねてみる。

「見ておりませぬよ。御遣い殿の名を呼び、幸せそうに体をくねらす姿など」

きゃーっ、と叫んで桃香は自分の口を押さえる。時間は真夜中だ。そのままの体勢で恨めしそうに趙雲を見上げた。だが、主からのそんな視線にも趙雲はにやけたままだった。

「さて、では行きましようか」

そう言つて趙雲は歩き出す。だが、その足が向いているのは宿の方向ではない。桃香がその事を伝えても、

「道すがら説明いたしましょう」

と言つて、足を止める事はしなかった。

先程、桃香を襲撃した連中について、趙雲は予想を立てていた。

後退する時の統率ある動き。劉備という名を聞いても微塵も怯む事のなかった気配。恐らくはどこかの兵士で、桃香様の御命だけを狙っていたのだろう。

だとすれば、このまま宿に戻るのは危険な気がした。そこで彼女は水鏡女学院に匿ってもらう事にした。

深夜に突然訪問したにもかかわらず、水鏡は2人を快く迎え入れてくれた。事情を聞くと大急ぎで寝所を用意してくれ、2人は安心して休む事が出来た。

翌朝、趙雲は1人の生徒に使いを頼んだ。万が一に備え、新野城からの迎えを要請する文を届けてもらうためだった。

「桃香様、何か心当たりはありませんか？」

迎えに来た諸葛亮にそう尋ねられても、桃香には首を横に振る事しか出来なかった。元々桃香は他人から恨みを買う様な性格ではない。もともと、乱世である事を考えれば、いつどこで恨みを買っていたとしてもおかしくはなかった。

しかし、この件を分らない、で済まず訳にはいかない。何か変わった事はなかったか、食い下がる様に問い掛けた。すると、しばらく悩んだ後で、そういえば、と桃香は何かを思い出した素振りを見せた。

「劉表さんに、自分の後を継いで荊州を治めて欲しい、って頼まれたけど……」

それを聞いて、諸葛亮だけでなく趙雲と水鏡も目を剥いて驚いた。ただ1人、鈴々だけがよく分かっている。3人の反応に、桃香は誤解されない様に言葉を繋げる。

「もちろん断ったんだよ！ 劉表さんには立派な世継ぎがいますから、って。そしたら……、結婚する気はないか、って言われて」

頬を赤く染めて俯く桃香。それを聞いて、趙雲は桃香の奇行に合点がいった。

「桃香お姉ちゃん、お嫁さんになるのか？」

「お嫁さんになんかならないよ」

困った顔をする桃香とそれをみて笑う鈴々。そして、1人ニヤニヤする趙雲。だが、諸葛亮と水鏡の2人は真剣な表情を見せていた。お互いの視線がぶつかり、確かめ合う様に2人は頷く。どうやら同じ答えに辿り着いたらしい。

和やかな雰囲気のところ、真面目な声音で諸葛亮の声が飛ぶ。

「桃香様を襲ったのは、蔡夫人の一派で間違い無いでしょう」

蔡夫人とは劉表の後妻である。その弟の蔡瑁は劉表軍の將軍で、軍事関係の最高責任者を務めていた。

劉奇が前妻の子であるため、蔡夫人は実子の劉宗を劉表の後継者

にしようとは画策している。そんな話は、諸葛亮がまだ水鏡女学院にいた頃から囁かれていた。恐らくは、劉表の話が蔡夫人達の耳に入ったのだろう。

「でも、私にそのつもりは無いのに……」

「桃香様のお考えは彼等には関係無いんです。劉表様が桃香様に荊州を譲る考えを捨てない限り、彼等は桃香様の御命を狙い続けるでしょう。とりあえずの措置として、これから外出時には必ず鈴々ちゃんか星さんに護衛についてもらいます」

その後もテキパキと指示を出していく諸葛亮。教え子の成長した姿に、水鏡は目を細めた。

第3章・長安編・第12話〈荊州の闇〉（後書き）

第12話でした。

今回は後へのフリというか、荊州の状況説明の様な感じに。最初は、もう1つ2つ話を入れて、と考えていたのですが、予想以上に文字数が増えてしまったためにここで切らせていただきます。

3章も後2話で終わる予定ですが、この話辺りからとたんに筆の進みが悪くなり始め、現在3章の最終話で難航中です。週1ペースでいけるか微妙なところですが、これからもよろしくお願いいたします。

第3章・長安編・第13話〈再会〉

武威の街の一角にある空き地から、いつもの様に子供達のはしゃぐ声が響く。楽しそうに遊ぶ子供達の姿を物陰から伺う男が1人。一刀だった。

だが、彼の瞳に映っているのは子供達ではない。彼等と一緒に遊んでいる翠の方だった。

屈託無い笑顔で子供達と遊ぶ翠。長い栗色の髪が、彼女の動きに合わせて踊る様に跳ねている。

一刀は翠に対し、好意を抱いていた。ハッキリ言えば、愛情である。もちろん、男女の間での、だ。ただ、それを相手に伝える勇氣は出せずにいた。

彼女が自分を憎からず思ってくれている事は一刀にも分かる。だからといって、自分を好きでいてくれると思ひ込める程、彼にはモテた経験が無く、そんな幸せな頭も持つてはいなかった。むしろ、頭に浮かんでくるのは悪い結果ばかりだ。

もし翠の側に自分以外にもう1人、同年代の男性がいたら。そして、態度の違いで分かるかもしれないのに。そんな事を思うくらい一刀には、翠の自分に対する態度は蒲公英達に対するそれと変わらない様に感じられていた。周りから家族同然に思われるのは嬉しかったが、翠にだけはそう思われなくなかった。

ちなみに、自分以外にもう1人、という考えはすぐに頭から消された。翠を誰かに取られるかもしれない。そう思うだけで、彼の心

は平穩ではいらなかった。

不意に気配を感じ、一刀は視線を下げる。いつの間に近付いたのか、女の子に上着の裾をキュツとつかまれていた。さっきまで翠と一緒に遊んでいたはずだ。

「みつかいさまも、いつしよにあそぶ？」

その言葉を受けて顔を上げてみれば、翠が睨む様にしてこちらを見ている。誤魔化して逃げる訳にはいかなかった。

「そうだね、仲間に入れてくれる？」

頭に手をおいて微笑みかけると、少女はパアツと笑みの花を咲かせた。

しばらく子供達と遊んだ後、一刀は倒れる様にして地面に腰を下ろした。土の上だが汚れるのもお構い無しだ。

時々こうして子供達と遊んでいるが、そのバイタリティーには毎度驚かされる。日本にいた時より相当体力が上がったという自負があるが、それでも遊びでは子供達にはついていけない。未だ元気に駆け回る姿を見ながら疲れた体を休めていると、翠が近づいてきた。

「もう疲れたのか？ 情け無い」

そう言った彼女の肩も上下している。うつすらと汗が浮かび、首筋には髪の毛が張り付いていて色っぽい。思わず見惚れてしまった。一刀の目の前に翠の手が差し出された。一旦手に視線を落とした後、再び翠を見上げる。

「御遣い様が、そんな情けない格好を子供達に見せんよ。ほら」
立たせてやるから、とでも言う様に、翠はさらに手を近付けた。

少しドキドキしながら、一刀は翠の手に自分の手を重ねようとす。が、触れる直前、翠はサツと手を引つ込めた。それでも、座っていたためにバランスを崩す様な事は無かった。

空を切り、所在のなくなった手から翠の方へ顔を上げる。どういふつもりか質す様な視線を投げた。

「別に、自分一人で立てるだろ」

翠はそっぽを向いてしまう。照れているのか顔が赤い。

今まで翠の手をつかんだ事は何度もあった。にもかかわらずこんな反応をされると、一刀も微妙に気まづくなる。翠から視線を外して立ち上がり、汚れているであろう尻をはたく。沈黙が2人の間を支配していた。

そこへ、遊んでいた子供達の1人が近付いてくる。一刀の服をつかんでいた子の姉だ。妹をそのまま一回り大きくした、と言っている。いくらい目鼻立ちがよく似ている。

「馬超様と御遣い様は付き合ってるの？」

「なっ……！」

予想外の質問に、2人揃って言葉に詰まった。答えとしては、違う、としかないのだが、一刀の本心からするとそれは言いづらい。そう言う事で、翠に気が無いと誤解されなくなかった。しかし、そうだ、と言う訳にもいかない。

一刀はチラリと翠を窺う。翠もまた、横目で一刀の様子を窺った。2人の視線が交錯し、次の瞬間には離れていた。

「うちのお母さんが言ってたよ。馬超様と御遣い様はお似合いだ、って」

少女はそんな2人の態度を気にした風もなく続けた。さらには、他の子達も話に加わる。

「私のお母さんは、御遣い様が馬超様と結婚してくれたら、この街ももっとよくなるのに、って言ってたー」

私も、うちも、と声が飛ぶ。時代や場所が変わっても、こうした男女の話に積極的に参加しているのは、やはり女の子の方だった。

そんな中、急に男の子の声がある。といっても、声変わり前の少年の声だ。口を開いたところを見ていなければ、分からなかったかもしれない。

「馬超様は、将来俺と結婚するんだ！」

少年は高らかに宣言すると、翠の腰に抱きついた。絶対無理、な

いよね、そんな声が少女達から上がる。少年も反論し、翠の周りでは口論が始まってしまった。

恥ずかしがり屋の翠も、さすがにこのくらいの歳ならば問題無いらしい。少年に抱きつかれたまま喧嘩の仲裁をしている。微笑ましい光景だ。だが、一刀にとってはそうではなかった。

馬鹿みたいだな、あんな子供に嫉妬なんて。情けなくて、一刀は思わず自嘲した。

無事に新野城へと戻る事が出来た桃香だが、その日から厳しい外出制限がなされた。不必要な外出を出来る限り禁止し、外出時には鈴々か趙雲が護衛に付く。いっどこで命を狙われるか分からないからだ。

元々、彼女には外出時に護衛を伴う事を義務付けていた。しかし、こっそりと一人で街へ抜け出す事も少なくなかった。諸葛亮はそこを徹底させるつもりでいたし、桃香もそれを素直に受け入れた。

という訳で、今桃香は鈴々を護衛に街に出ていた。建前は政務に関係する視察となっている。だが、実際には息抜きのため、鈴々の警邏に付き合っているだけだった。あまり籠りっぱなしなのも可哀想だと、諸葛亮も一応は許可している。桃香は久々に羽を伸ばした気分だった。

新野城は吹けば飛ぶ様な小城にもかかわらず、街中はかなりの賑

わいを見せている。劉表、さらには桃香と、善政を敷く為政者の努力の賜物だ。

活気ある声が飛び交う大通りを歩いていると、張飛將軍、と鈴々を呼び止める声が聞こえた。キヨロキヨロと声の主を探す桃香と違い、鈴々は誰に呼ばれたか分かったらしい。一直線に道端の屋台に向かっている。

「ありがとうなのだ、おっちゃん」

桃香が追い付いた時には、鈴々は礼を言いながら満面の笑顔で肉まんを受け取っていた。早速、蒸しあがったばかりで湯気のたつ肉まんを頬張る。

美味しそう、という考えを振り払う様に頭を振る桃香。彼女は未妹の行動をたしなめる。

「駄目だよ、鈴々ちゃん。お仕事中に買い食いなんかしたら」

「これは買ったんじゃないかって、おっちゃんから貰ったのだ。だから、これは買い食いじゃないのだ」

鈴々にそれを気にする様子はない。こんな屁理屈をこねる始末だ。もし関羽がいれば、怒り心頭になるであろう。そして、関羽がいない今、自分がしっかりしなければ、と桃香は考えた。もっと厳しく注意しようと口を開きかける。

「これは、劉備様。気付きませんが、申し訳ありませんでした。もしよろしければ、お1ついかがですか？」

だが、屋台の主人の方が先に言葉を発した。機先を制された格好になり、桃香は思わず勢いを削がれてしまった。

「私は……」

私はいいです。そう言いたかったのだが、それより先に彼女の腹が鳴ってしまった。顔を真っ赤にして俯く桃香に、主人は笑いながら肉まんを差し出す。

「……い、いただきます」

桃香は恥ずかしそうに両手を差し出して肉まんを受け取る。熱いが持てない程ではない。ゆっくりと口に近付けると、食欲をそそる香りが鼻を抜けていく。ゴクリと唾液を飲み込み、肉まんを1口かじる。その瞬間、口の中に旨味たっぷりの肉汁が広がった。

「美味しい」

自然と笑みがこぼれ、感想が口をつく。

「おっちゃんの肉まんは荊州一なんだから、旨いのは当たり前なのだ」

鈴々がまるで自分の事の様に自慢げに胸を反らす。店の主人は謙遜しながらも、内心では満更でもなさそうだった。

2人は礼を言うと、警邏に戻る。食べ掛けの肉まんは片手に持たれたままだ。

「鈴々！ 貴様には平原にいた頃から、警邏中に買い食いをする

な、と口を酸っぱくして注意してきたはずだぞ？　どうやら、まだ説教が足りていない様だな」

突然背後から襲った声に、2人は体をビクツとさせた。足を止め、互いに顔を見合わせる。

凜として迫力のある声。意思の強さを感じさせる通りのいい声。そして、何より桃香と鈴々がずっと聞きたいと願っていた声だった。

2人はゆっくりと振り返る。

「大体、桃香様まで一緒になって……。本来なら、桃香様がこやつを行い止めねばならないのですよ？　少しは長姉としての自覚を……」

「愛紗ちゃんっ！」

「愛紗ーっ！」

長く艶やかな黒髪。ピンと伸びた背筋。携えた青龍偃月刀。そこに立っていたのは、紛れもなく関羽だった。

小言等お構い無しで、桃香と鈴々はようやく再会出来た関羽に抱き付いた。まるで体当たりでもするかのような勢いで抱き付かれ、彼女はバランスを崩してしまう。2、3歩たたらを踏み、結局は3人仲良く往來に転がった。

だが、それでも2人は関羽を離そうとはしない。もう2度と離れるのは嫌だ、と言わんばかりにしがみつく。

「愛紗ちゃん、よかったよ」

桃香は涙声だ。関羽に覆い被さる格好で顔を上げると、その瞳には今にも決壊しそうな程の涙がたまっている。

「……申し訳ありません、桃香様。ご心配をお掛けしました」

謝りながらも関羽は微笑みを浮かべる。桃香もまた、笑顔で首を横に振る。その拍子に涙の粒が宙に舞った。

「鈴々もすまなかつたな。心配させた」

「……鈴々は、愛紗の事なんか、全然、心配してないのだ！」

そう言う鈴々の言葉は涙でつつかえつつかえで、誰の耳にも強がりであると分かった。優しく微笑み掛ける関羽の顔を見ると、思わず耐え切れなくなる。涙と鼻水でパツクされた顔を関羽の胸に押し付け、大声を上げて泣いた。

そんな妹の頭を撫でながら、

「桃香様、戻ったのは私だけではありませんよ」

と言って、関羽は目線で促した。桃香が顔を上げてそちらに目を遣ると、そこには関羽と共に行方知れずになっていた鳳統が立っていた。やはり、彼女もポロポロと涙を流している。どうやら関羽に注意が向いていたため、気付かなかつたらしい。

そちらに駆け寄ろうと立ち上がったところで、鳳統の隣に立つ女性の姿が桃香の目に入った。まさかと思い、固まる。徐州で生き別

れ、もう2度と会う事は叶わないと覚悟をしていた母の姿。

「……お母さんっ！」

「……桃香っ！」

互いに互いを呼び合つと、弾かれる様に2人は駆け出す。そして、互いの無事を確認する様にしつかと抱き締め合った。

「お母さ〜ん……」

関羽の時は長姉として我慢をしていた。しかし、母の前では最早限界だった。止めどなく溢れる涙を拭く事もせず、桃香はうわ言の様に母を呼び続けた。

いつの間にか辺りには人垣が出来ていた。彼等もこの光景に涙し、再会を自分の事の様に喜んだ。

その後、騒ぎも大分収まったところで、関羽は恋と音々音を紹介した。鈴々はどうやら恋との約束を忘れていたらしく、その事を指摘されると笑って誤魔化していた。

城へと戻つた桃香達は、諸葛亮と鳳統の感動の再会が終わるのを待つて、現状の報告と今後の方針を決めるための会議に入った。蔡夫人一派の暗躍を聞いた関羽は怒りを露にしたが、証拠が無い以上根本的な対策をとる事は出来ない。今まで通り、桃香に護衛を付け

ておくしかなかった。

また、そのために劉表の勧めに従って荊州を治めるべき、との意見も出たが、桃香は頑として首を縦に振らなかった。劉表の統治の下で人々が幸せに暮らしているこの状況で跡目を奪う様な真似をするのは、彼女の信念に反する。

しかし、いつまでも新野城にとどまっている訳にもいかなかった。曹操と袁紹の戦いは曹操側が優勢に進んでいる。まだ時間は掛かるだろうが、曹操が河北を制圧した後、他の地域へも侵攻を開始するのは火を見るより明らかだった。

可能性があるのは徐州、涼州、荊州のいずれかだが、制圧後の統治の難しさを考えれば涼州は外れるだろう。桃香が、曹操の力で他者を従わせるやり方をよしとしていないため、両者の衝突は避けられない。である以上、曹操が河北一帯を制圧する前に戦力を整えなければならぬ。

いくら平和で幸せに暮らせる世界、という理想を掲げていても、それを実現するためには軍事力が必要になってくる。矛盾している事は桃香も理解しているが、それが現実だ。そして、曹操に対抗する力を得るには、新野城という小城だけでは到底足りるはずもなかった。

そんな彼女達に思いもよらない方向から光明が射し込むのは、まだ少し先の事だった。

第3章・長安編・第13話〈再会〉（後書き）

という事で、第13話でした。

次回でようやく第3章が終了です。週1ペースを維持するために1話あたりの文字数を減らしたとはいえ、だいぶ話数がかさみました。書き始めた時のアバウトな計算では、1年程で終わるはずだったんですが、半年以上経った今、まだ半分にも到達していない状況です。

まだまだ先は長いですが、もしよければお付き合いください。

第3章・長安編・第14話〈曹操暗殺計画〉

その日、武威の街に中央からの使者が訪れた。内容は、許昌において新しく完成した宮殿の落成式典への出席を伝えるものだった。

許昌というのはエン州の南、豫州の西部にある都市の名前だ。獻帝を手中に納めた曹操は豫州へと侵攻し、この国の首都を許昌へと遷都したのである。

落成式典への出席を翠や蒲公英は大層喜んだ。羌族との混血であるというだけで、琥珀は今まで式典や祝賀行事に参加することが許されなかったからだ。そんな中、一刀は1人浮かぬ顔をしていた。

その夜、一刀は琥珀の部屋の扉を叩いた。彼の顔は昼と同じく浮かないまま。むしろ、何か思い詰めたかのような渋い顔をしている。

それとは対称的な明るい声が扉越しに入室を許可した。覚悟を決める様に大きく息を吐き、一刀は扉を押し開いた。

「一刀君もお土産をねだりに来たの？ 大丈夫よ、心配しなくてもちやんと……」

机に向かい何やら書き物をしながら話し出した琥珀だったが、顔を上げて一刀を視界に納めると言葉が発するのをやめた。一刀の表情から、先程の蒲公英の様な軽い用件で訪ねてきたのではない事は察する事が出来た。

筆を置いて姿勢を正すと、一刀に傍に来る様に促す。それに従い、一刀は机を挟んで椅子に腰掛けている琥珀の正面に立った。その後

は、琥珀の方から話を急かす様な事はしない。ただ黙って一刀の目を見つめた。

一刀はもう1度だけ深く息を吐いた。

「先程の使者は、本当に落成式への招待だけのために見えられたんですか？」

「そうよ。貴方にも書簡は見せたでしょう？」

確かに一刀が見せてもらった書簡にはそう記されていた。だが、それが尚更彼の疑念を助長させた。

曹操は許昌を占領した後、献帝から丞相に任じられていた。実際のところはどうかなのか、一刀には測りかねたが、少なくとも表向きにはそうなっている。許昌への遷都は丞相となった曹操主導で行われた事だった。

だからこそ、一刀は献帝から届いたとされるこの書簡に違和感を覚えた。書簡の中に、曹操の存在や思惑といったものが感じられなかったからだ。彼の見た限りでは、鷹那や詠も同じ様に違和感を覚えた様子だった。それでもあの場で何も言わず、一刀の様に琥珀の部屋を訪れないのは、その先へと推論が続かないからだ。

しかし、一刀は違った。未来から来た一刀には、この先起こるはずの事が分かっている。その知識から、この違和感の正体を推測する事が出来るのである。

「……曹操を討つよう、命令が下されたんじゃないやありませんか？」

一刀が推測した答えは曹操暗殺計画だった。歴史では計画が露見し、馬騰は曹操に処刑される事になる。だが、琥珀と同じ未来を歩ませる訳にはいかない。一刀は真剣な眼差しで琥珀の返事を待った。

「……まったく、物騒な事を言うものじゃないわ。仮にもこの国の丞相よ。どこで誰が聞いているかも分からないのに……」

若干の間の後、大きくため息を吐きながら琥珀は答えた。

否定の言葉。だが、一刀の中で推測は確信へと変わった。

驚いた様子を見せなかったのはなぜか。それを考えた時に答えは出た。本当にゼロの状態から聞いたのであれば、いくら琥珀でもこんなに落ち着いていられるはずはない。知っていたからこそその反応のはずだ。

だが、このまま問答を続けても琥珀は正直に話してはくれないだろう。彼がジョーカーを切らない限りは。

「……すいません、琥珀さん。俺は皆にずっと嘘を吐いていました」

今まで意識してはいなかったが、嘘を吐いていた、と改めて口に出してみると罪悪感にさいなまれる。自分を家族として接してくれた人を騙していた事に後ろめたさを感じる。だが、それでも一刀は琥珀から視線を逸らさなかった。

一方の琥珀はわずかに眉をしかめて怪訝そうな顔をしたものの、何も言わずに続きを促した。

「俺は、天の御遣いなんかじゃない。俺が暮らしていたのは、1800年後の未来の世界なんです」

話を聞いても、琥珀は特に表情を変えざる事は無かった。あまりにも突拍子もない話についてこれないのだろうか。相変わらず何も言わないまま、それでも両肘を机に突いて前のめりになった。

「この国で今起こっている争乱は、1800年後にまで読み物として残されているんです。その中で琥……、馬騰さんは曹操の暗殺計画に参加するものの、事が露見して……」

そこから先は思わず言葉を濁してしまった。琥珀の反応が何も無い事に、自分の言葉は届いているのか、と不安になる。信じがたい事を言っているのは重々承知だ。だが、それでも話を聞いてもらうしかない。

「信じられないのは分かっています。こんな荒唐無稽な事、とは自分でも思います。でも、本当の事なんです！ 本当に……」

それまで出来る限り感情を抑えていたが、思わず声を荒げてしまう。そんな一刀を琥珀は手で制した。

「貴方が嘘や冗談でこんな事を言う人でないのは分かっているわ。それに……、この件を言い当てた事から考えても、本当に貴方が未来から来て、知っていたのだとは思っつ。ただ……」

数日前、彼女の下には献帝から密使が使わされていた。内容は先程一刀が言った通り、曹操を討つための算段だった。昼間に訪れた使者は、ただ形だけのものだ。

しかし、それでも中々納得出来ないのか、琥珀は額に手を当てて考え込む様な仕草を見せた。

「……そういえば、どうして私の名前を呼び直したの？」

ふと、さっきの一刀の言葉を思い出して尋ねた。

一刀が知っている三国志の人物は真名を持っていない。その事を伝えられると、琥珀はしばらく考え込んだ。

「……真名が無い、ね。他にも、何か違う事はあるの？」

一刀の知っている歴史との相違点を上げればキリがない。元々、有名な将のほとんどが女性、というところからして違うのだ。黄巾の乱や反董卓連合など、有名な物事が起こっているのは間違いない。だが、起こる時期が違うし、事態の進みが早い。

さすがにそれらを全部伝える事は出来ないので、かいつまんで説明する。一通り話が終わるまで耳を傾けた後、琥珀はおもむろに口を開いた。

「大丈夫よ。心配しなくても」

なつ、と一刀の口から思わずこぼれる。慌てる一刀を宥める様に、琥珀は言葉を続けた。

「貴方の話だと、私が曹操を殺害する計画に加担して、それが明るみに出て処刑される、という事でしょ？ だから、大丈夫だと言ったの。根本から違うのだから」

「どういう事ですか？」

自分の話が通じていないのか、と思っていたところに理解しづらい事を言われ、一刀はついぶつきらぼうになってしまった。

「確かに協力するよう話を持ちかけられたわ。けど、私が許昌まで行くのは曹操を殺害するためじゃない。この企てを中止させるためよ」

だから安心なさい、とでも言うかの様に琥珀は笑う。

だが、一刀の不安は拭えない。でも、と食い下がる。

反董卓連合では、月は助かったものの董卓という人物は死んだ事になった。桃香は、曹操ではなく袁術と争ったにもかかわらず、徐州を奪われ荊州へと落ち延びた。献帝も紆余曲折あったものの、曹操の手の内に落ち着いた。

プロセスは違ってても、結果は変わっていないのだ。だから、理由はどうあれ琥珀が許昌に赴く事が、最悪の結果を招く事に繋がる様な気がしてならなかった。

それを伝えようとする一刀の言葉を琥珀は遮る。

「貴方の言った通り、ずさんな計画だからどこから漏れるとも限らないし、仮に漏れずにいけたとしても、曹操を討てるかどうかは微妙でしょう。もし失敗すれば、献帝は今よりもさらに立場を悪くする事になるわ。この漢の国を守るためには、外戚の暴挙を止めなければならぬのよ」

そう言って安心させる様に微笑みかけるが、一刀の胸中には、どうして、という思いが浮かぶ。

羌族との混血である事で、琥珀は迫害や差別を受けてきた。普通ならもつと高い官職に就ける程の功績を残しているのに地方の郡太守に留まっているのもそのためだ。それなのに、どうしてこの国に忠義を尽くそうとするのか。一刀にはそれが理解出来なかった。

「何で……、何ですか！？　だって、琥珀さんは……！」

叫ぶ様に大声を上げたものの、そこで黙ってしまふ。琥珀が迫害や差別を受けてきた事は本人から聞かされた事ではない。主に詠から聞いた事だ。言わなかったのは言いたくなかったからだと考え、一刀は口をつぐんだ。

だが、それを口にしようとした事に後悔を覚える。自分の意見が聞いてもらえないからと、まるで駄々っ子だ。情けない。

一刀のそんな心の内を見透かしたのか、琥珀は少し呆れた様に笑った。そして、駄々っ子を諭すかの様に優しく語りかける。

「小さい頃、私は羌族の村で暮らしていたから、漢軍に多くの友人や知り合いを殺されたわ。嫁いだ後しばらくは、漢人だけでなく羌族の同胞からも白い目で見られていた。漢という国によって辛い経験を強いられたのは間違い無い」

しかし、そう言った彼女の表情には悲しみや恨みの色は無く、何か昔を懐かしんでいる様に見える。

「でもね、辛い事ばかりだった訳では無いわ。この国が無ければ

あの人と巡り会う事は無かった。あの人との間に翠を授かる事も無かった。私を慕ってくれる領民や、私の大切な家族と暮らす事も出来はしなかった。もちろん、貴方に会う事も、ね」

一刀の目を見て微笑むと、琥珀は表情を引き締める。

「この国にあるあの人との思い出のため、私はこの国を守らなければならぬ。あの人が生まれ、育ち、愛したこの地で、これからも生きていくために」

琥珀の瞳には決意がみなぎっている。それを見て、いくら言葉を紡いだところでこの決意が覆らない事を一刀は悟った。それに、これ以上琥珀を引き止めようとするのは、彼女の思いを侮辱する行為の様な気がしていた。

「亡くなったご主人の事、今でも愛しているんですね」

「……ええ。あの人よりいい男は、国中探したっていはしないわね」

かすかに目を剥いた後、頬をわずかに赤く染め、堂々とノロケた。

もう10年も前に亡くなった夫の事をハッキリと好きだと言える。一刀には羨ましく感じられた。自分もそんな関係を築けたら、と思う。

「でも、貴方ならあの人と肩を並べるくらいには、男振りを上げられるかもしれないわね」

そう言われれば、一刀も満更ではない。本当ですか、と嬉しそう

に尋ねる。

「しつかりと男を磨きなさい。そうすれば、きっと、ね」

返した琥珀も嬉しそうに笑っている。だが、その理由　自分の娘を惚れさせたのだから、とは、さすがに本人に申し訳無くて言わなかった。

それから3日後、翠達は揃って琥珀の出立を見送っていた。しつこく土産をねだる蒲公英をあしらい、皆に声をかけていく。

「……じゃあ、留守の間は頼むわね」

鷹那が、はい、と短く返事をする、今度は翠へ向きを変える。

「そういえば、私が帰ってくる頃には、ちょうど貴方の誕生日ね。帰ってきたら、誕生日ぱーていーでもしましょうか？」

「えっ？　い、いいよ、あたしは。柄じゃないし」

「私の時みたいに大々的にするつもりじゃないわ。身内だけでご馳走でも食べて」

ご馳走、という言葉に引き気味だった翠の顔が緩む。琥珀はその隙を突く様に、スツと顔を近付けた。

「一刀君を一撃で落とせる様な可愛い服を買ってきてあげるから、楽しみにしてなさい」

「んなっ!？」

耳元で囁かれた言葉に、翠は思わず変な声を出してしまふ。顔を真っ赤にする娘の姿に笑みをこぼし、最後に一刀へ向き直った。

「私の娘達の事、よろしく頼むわね」

「はい。……気を付けてください」

一刀が未来から来た事は2人の間での秘密となった。重要な事だけに、戻ってからどうするかを決めようと、とりあえず保留した格好だ。

心配なのは変わらない。だが、無事に戻る事を祈りつつ、一刀は努めて笑顔を作り琥珀を見送った。

涼州の南方、漢帝国の中で南西に位置する地、益州。険しい山々に四方を囲まれた天然の要害である。その益州東部にある江州の城内に1人の女性がいた。

董色の長い髪を持つその女性は、乙女と呼ぶには少々とうがたっている。だが、ただ微笑みながら椅子に腰かけているだけの今の状況でも、女性としての色香がムンムンと溢れていた。

彼女の名は黄忠、字は漢升。益州牧である劉璋に仕える将だ。黄忠は益州と荊州の州境にある永安を治めているのだが、この日は人に会うために江州を訪れていた。

しかし、その相手は出掛けていてまだ戻ってきていない。膝の上でスヤスヤと寝息をたてる愛娘、璃々の頭を撫でながら、黄忠は相手の戻りを待った。

不意に部屋の外から足音が聞こえた。壁越しでも不機嫌である事がハッキリと分かる足音に、黄忠は苦笑いを浮かべた。パンツ、と勢いよく扉が開け放たれる。

「すまん、紫苑。待たせた」

そう言いながら部屋に入ってきた女性も、黄忠に負けず劣らずの艶っぽさだった。薄く紫がかかった銀髪の彼女が黄忠の待ち人であり、この江州を治めている敵顔である。

黄忠は苦笑したまま首を横に振ると、敵顔が向かいに座るのを待ってから口を開いた。

「その様子だと、やはり劉璋様は聞き入れてくださらなかったのね？」

「相変わらずだ。わしの諫言には耳も貸さず、宦官共の甘言ばかりを聞いておる」

ハア、と深いため息を吐きながら敵顔は答えた。その顔には諦めや憤りだけではない、もつと深い思いが出ていた。

この敵顔と黄忠、そして同じく劉璋に仕える張任の3人の名は、巴蜀の三傑として益州の外にまで響き渡っている。3人は文武両面で、劉璋の父である先代の益州牧、劉焉を助け、益州の発展に尽力

した。忠臣と呼ぶに相応しい働きをしてきた彼女達であったが、2年前、劉焉が亡くなってからおかしくなり始めた。

劉焉の跡を継いだ息子の劉璋は政の一切を宦官に任せ、自分は酒色に耽った。黄忠や嚴顔を始め、その事を諫めた者は地方へと左遷され、州都である成都には劉璋に取り入るうとする愚臣と宦官しか残っていない状況となっていた。

今回もまた、嚴顔は主の素行を諫めに行ったのだが、煙たがられるだけでまともに取り合われなかった。

「いい加減決断しないと間に合わなくなるわよ、桔梗」

黄忠の言葉に嚴顔は、ああ、とだけ答えて瞳を閉じた。

今回で最後のつもりだった。だが、いざその状況になってみるとやはり迷いはある。

今は袁紹に兵力を集中している曹操だが、河北一帯の制圧が終われば他方面へ侵出するのは明らかだった。献帝を押さえている以上曹操は官軍だ。他国を攻める口実ならどうとでもやりようがある。そして、益州も侵略対象に入っているのだ。今の状態で曹操と戦争になれば、万に1つの勝ち目も無い。

だからこそ、嚴顔は最後の諫言に赴いたのである。聞き入れてもらえれば、国力を建て直して軍備を再編する事が出来る。この地を守る天然の要害を上手く利用すれば、遠征してくる曹操軍を退ける事は難しくない。だが、それを説いても、嚴顔の言葉は劉璋には届かなかった。

「……桔梗」

決断を催促するように、再び黄忠は嚴顔の真名を呼んだ。

彼女はすでに劉璋に見切りをつけている。これ以上遅らせる事は、この国に住む民のためにならない。そう考えていた。そして、それは嚴顔も同じだった。

「焰耶」

心は決まった。嚴顔は目を見開き、自分と共に部屋に入った女性の名を呼んだ。ハッ、と齒切れよく返事をする、嚴顔の方へと歩み寄る。

彼女は魏延、字を文長といい、嚴顔配下の将ではあるが、2人の関係は師匠と弟子に近い。短く切られた髪と女性にしては長身なその外見は、一見しただけでは男性と見間違えそうである。

黄忠の懐から取り出された書簡を一読すると、嚴顔はそれを魏延に手渡す。

「分かっておるな？ この書簡を荊州の劉備殿に、確かに届けるのだぞ」

嚴顔達は、悪い言い方をすれば、益州を劉備に売るつもりだった。劉璋に代えて、仁君として名高い劉備に益州の牧へ就いてもらう。それが益州の民のためだと、劉焉の代から仕える将の多くも賛同してくれていた。例え売国奴のそしりを受けたとしても、彼女達にはそれを成すしかなかった。

使者として訪れた魏延によりもたらされた書簡の内容に、桃香達からは様々な意見が出た。

巴蜀の三傑の名は彼女達の耳にも届いている。そんな人物が、果たして裏切る様な真似をするだろうか。むしろ、蔡夫人一派の仕掛けた罫ではないか。特に関羽は懐疑的であった。

「敵顔様が信用出来ないのか？」

「巴蜀の三傑といえば、益州の地で並ぶ者の無い傑物だと聞いている。そんな方が主を裏切るなど、私には到底信じられん。もし真実だというのなら、それ程の人物だとする評価の方が間違っているのではないか？」

「貴様っ！ 桔梗様を愚弄するか！ お2人や賛同してくれた方は益州に暮らす民のためを思い、あえて汚名を被る覚悟で事を起こしたんだぞ！」

関羽の言葉に魏延はいきり立つ。そんな両者の間に割って入る桃香。彼女は関羽をたしなめた後、玉座を降りて魏延へと近づく。突然の行動に面食らい、わずかに上体を引く魏延に構わず、桃香は彼女の手を取った。そして、胸の前で抱く様に両手で包み込み、ニッコリと笑いかけた。

「私は、魏延さんも敵顔さん達の事も信じてるよ。私達と同じ志を持った人達だと思うから」

「り、劉備様……」

その時、魏延の頬にわずかに朱が差したのだが、それには目の前にいた桃香も気付かなかった。

2人の様子を見ながら、相変わらずだな、と公孫贇は思った。私塾で机を並べていた頃から、すぐに他人を信用するお人好しなところは変わっていない。危なっかしく思えるのも昔と同じだが、その純粹さがあるからこそ、桃香は周りの人を惹き付けるのだろう。桃香を支えられる様、私もすっかりしないとな。公孫贇は、そう気合を入れ直した。

「なあ、朱里。さっき愛紗が言ったみたいに、罫とか計略とかって可能性は無いのか？」

「そこら辺はほとんど考えなくていいと思います。暗殺という短絡的な手段の後には手が込んでいますし、実際、劉璋さんの代になってから、旧臣との間に軋轢が生まれているのも事実な様ですから」

そうか、と口にした公孫贇は、朱里が言うなら大丈夫だろうと胸を撫で下ろした。

その日も普段と変わらない1日になるはずだった。

警邏を終えた一刀。そろそろ琥珀さんも戻ってくる頃だな。そんな事を考えながら城門を潜ると、月が息を切らせて駆け寄ってきた。その顔には焦りがありありと出ている。

「……か、一刀さん。……大変なんです！早く、早く来てください！」

大分涼しくなってきたにもかかわらず、月は大粒の汗を掻いている。それを拭う事もせず一刀の手をつかみ、グイと引っ張った。

普段、見る事の無い月の慌てた様子に、一刀の胸に不安がよぎる。彼は手にしていた細長い木箱を懐に仕舞うと、月に続いて駆け出した。

月に引かれて着いたのは、玉座の間だった。部屋の中からは数人の叫ぶ声が漏れてくる。さらに不安が募るが、ためらう間もなく月が扉を押し開いた。

「お姉様、落ち着いてよ！」

「いい加減にしとけや、翠！」

「とにかく少し落ち着いてください、姫！」

蒲公英が、霞が、鷹那が叫ぶ。彼女達の真ん中には暴れる翠の姿。その顔は真っ赤で、錯乱している様にも見えた。清夜も含めて4人で押さえられているにもかかわらず、彼女は止まらない。

「うっせーっ！ 放せ、お前ら！」

叫ぶと同時に右手1本で蒲公英を投げ飛ばす。一刀の方へと飛ばされてきた蒲公英は、強かに壁へ打ち付けられた。痛む肩を押さえながら、少女は一刀を見上げた。

「一刀さん、お姉様を止めて！」

叫ぶ様に懇願する蒲公英の顔には涙の跡が見えた。壁にぶつかった痛みで泣いた訳では無い。それに、翠のあの取り乱し様。一刀にはその理由が分かってしまった。

沈痛な面持ちでまぶたを閉じる。だが、それは一瞬だけだった。一刀は暴れる翠の方へとゆっくり近寄っていく。

「何があつたんだよ、翠。少し落ち着いて、話を……」

声をかけられた翠は暴れるのを止め、ギンツ、と一刀を睨み付けた。その眼力だけで、彼は1歩下がってしまった。

「……何があつた、だと？ ふざけんな！」

壁すら振動させる程のわめき声。怒りで肩がワナワナと震えている。その双眸からは今も涙が溢れる。

「……母様が、母様が曹操に……、殺されたんだ！」

やっぱりそうか。一刀は沈痛な面持ちで天を仰いだ。

第3章・長安編・第14話〈曹操暗殺計画〉（後書き）

という事で第14話でした。

今回で第3章が終了。次回から第4章、渭水編になります。

第4章・渭水編・第1話〜決別〜

「……母様が、母様が曹操に……、殺されたんだ！」

翠の絶叫に一刀は天を仰ぐ。後悔が彼の心を支配する。しかし、感傷に浸っている暇は無かった。

「そんで、琥珀はんの敵討ちに出るって聞かへんねん！ 一刀からも止めたってえや！」

翠を羽交い締めにしなから霞が叫ぶ。その言葉で思い出したかのように、翠は3人を振りほどこうと再び暴れ出した。

「とりあえず、少し落ち着けて」

激しく振り回される腕を抑えようと、一刀は両腕でつかんだ。だが、

「うるせーっ！」

という叫びと共に、物凄い力で吹き飛ばされてしまった。床に叩きつけられ痛む体を起こすと、側にいた詠が心配そうに手を貸してくれた。

「大丈夫なの？」

「ああ……。それよりも、どうなってるんだよ。琥珀さんが殺されたなんて話、聞いてないぞ」

「ボ、ボクだつて聞いてないわよ。さつき韓遂様から使いが来て、許昌に放っている間者から、曹操の殺害を企てたとして琥珀様が処刑されたと報告があつたつて……」

詠も事態を把握出来ている訳では無いのだろう。見上げながら尋ねた一刀に対し、彼女にしては珍しく、歯切れ悪い言葉で返した。

おかしい。詠の答えを聞いた一刀の率直な思いだ。

一刀には情報という物の重要性が分かっていた。だからこそ、間諜の扱いに長けた詠が陣営に加わった後は、鷹那と3人で間者や斥候の質の向上に励んだ。正確で詳しい情報を早く入手する事は、大きな力となるからだ。

韓遂軍の間者の質はもちろん分からない。だが、自分達が使っている間者より質が高いとは、一刀にはどうしても考えられなかった。

しかし、そんな疑問よりも翠を止める方が先だった。放っておけば、1人でも許昌に乗り込まんばかりの勢いだ。

「少しは冷静になれつて。……その報告が正しいとは限らないんだし」

ピタッと翠の動きが止まった。

「……お前は、叔父上がこんな嘘を吐いたつて言うのか？」

「そうじゃない。ただ、間者の持ち帰る情報全てが正しい訳じゃないんだよ。相手を混乱させるために、わざと間違つた情報をつかませる事もあるんだ。ともかく、うちも許昌には間者を放つてある

んだし、それが戻ってくるまで待つてくれ」

「……そんなの、嘘かどうかなんて分からないじゃないか。なら、あたしは……！」

「馬鹿な事言つな！」

自分を押さえる3人を引き剥がそうとする翠に対し、一刀は大声で怒鳴り付けた。普段では見た事の無いその行為に、翠だけでなく霞達まで驚いて一刀に視線を注いだ。

「そんな事をして、本当に琥珀さんが許昌に無事でいたらどうなると思ってたんだ！曹操に対して兵を起こしたりしたら、それこそ琥珀さんはただじゃすまないだろうが！」

翠はグツと言葉に詰まる。確かに一刀の言う通りだった。

あたしが軽率な行動をとれば、その責任は全て母様に行く。そして、最も影響を受けるのは西涼の民だ。だけど、もし本当に母様が殺されているとしたら。

翠は唇を強く噛んだ。荒ぶる感情を必死に押し殺す。口を開いた時には、柔らかかそうなその唇にすっかり歯形が付いてしまっていた。

「……分かった。お前の言う通り、ハッキリするまで待つ事にする。ただし、出陣の準備だけは進めるからな！」

不満を隠し切れない翠は、足音高く部屋から出て行ってしまった。とたんに部屋の中は、シン、と静まり返る。誰も何も口に出さない。

激しく取り乱した翠がいたため、他の者は琥珀が死んだという事を嘔み締める余裕も無かった。ようやく、その事を考えられる様になったのだ。

どれ程の間そうしていただろうか。重苦しい雰囲気になんて耐え切れなくなった蒲公英が、わざと明るい声を上げた。

「だ、大丈夫だよ、きつと。だって、あの叔母様だよ？ きつと今ごろ、元気にこっちに向かっているよ」

「……そ、そやな。あの琥珀はんが、こない訳分からん死に方するはずないな。ハハッ……」

蒲公英と霞は喝いた笑いを響かせるが、他は誰も同調しない。すぐに笑い声は消え、再び静寂がその場を支配する。

「……詠、問者からの報告の取りまとめを頼む。それと、関中へ問者を増やそう」

「え？ ……ええ、そうね、そうするわ」

全員が気落ちし動揺する中、この可能性を知っていた一刀だけは、まだ冷静でいられた。今は少しでも情報を集め、これからの対応を考える事が重要だった。

事態は一気に動き始める。その日、曹操の使者が武威を訪れた。

玉座の間に通された使者とその従者に対し、翠達は威圧する様に取り囲む。それに気付かない程鈍感なのか、彼は怯む事もなくいつそ堂々としていた。

「武威郡及び安定郡太守馬騰。丞相暗殺を企てた罪により斬首に処し、また、太守の任を解くものとする」

そう言つて使者の男は懐から何かを取り出し、翠の前に放つた。キンツ、と高い音を立てて床で跳ねる。それを見て、一同は言葉を失つた。

去年の琥珀の誕生日に一刀が贈り、常に身に付けていた髪飾り。しかし、綺麗な琥珀の宝石が埋め込まれていたはずが、今はその輝きが無い。代わりに、赤黒いものが髪飾りを覆っていた。

玉座から崩れ落ちた翠は膝をつき、水面からすくい取る様にして髪飾りを両の手に納めた。それを胸に抱く。怒りなのか、はたまた泣いているのか。俯いていたためにどちらなのかは分からなかったが、彼女の肩は小刻みに震えていた。

その様子を興味無さげに見下ろしたまま、使者の男は、フン、と鼻を鳴らした。尊大な態度を崩そうともせず、書簡の続きを読み上げる。

「なお、馬騰の娘馬超、ならびに姪馬岱。この両名は馬騰と凶つていた可能性が高いため、このまま許昌までの出頭を命じる」

言い切るか言い切らないかの刹那だった。

いきなり立ち上がった翠。腰から護身用の短剣を引き抜くと、一瞬のうちに使者へと襲い掛かった。翠の振るった刃は相手の胸に鏝まで突き刺さり、本人が殺された事を自覚出来ない程の早さで息の根を止めた。一刀達には止めるどころか、言葉を発する間さえ無かった。

「鷹那！ こいつの首を落として、曹操に送り返せ！」

驚きで声も出ない中、翠の怒声が響く。さらに彼女は従者の方に目を向ける。2人は恐怖で腰を抜かしていた。

「お前達は生かしておいてやる。こいつの首を持って、とつとと帰れ！ そして、曹操に伝える。母様の墓前に貴様の首を捧げてやるから、首を洗って待ってる、ってな！」

短剣を抜かなかったため、出血量は多くなかった。それでも、怒りに歪んだ顔には返り血が跳んでいる。2人は声も出せない程の恐怖に支配され、翠の言葉にただコクコクと頷くだけだった。

こうして使者だったものとその従者が武威を離れるのと入れ違いになる様に、ある一団が街へと近付いた。天水郡の太守である韓遂と、彼の率いる軍隊だ。韓遂は兵を街の外に残し、自身はわずかな近衛と共に城へと入っていった。

「叔父上、どうしてここに？」

「決まっているだろう。お前は母の仇討ちをするんじゃないのか？」

翠達は血で汚れてしまった玉座の間の掃除を侍女に任せ、今は主のいなくなった琥珀の部屋へと移っていた。琥珀がいつも腰を下ろしていた椅子は、空っぽのままだ。

当然だ、と翠は力強く頷く。その目には、復讐の炎が燃えている。

「もちろん、私も協力させてもらう。私の義姉だからな。それに、差し出がましいかとも思ったが、涼州の軍閥や豪族達にも兵を出す様に呼び掛けておいた。おっつけ合流してくるだろう」

涼州にも漢朝から任命された州牧がいる。しかし、実質的に涼州をまとめあげていたのは琥珀だった。その彼女が曹操に討たれたのだ。周囲の豪族達も仇討ちへの協力は、やぶさかではないはずである。

こうして準備を進める中で、琥珀の死は領民にも伝えられた。街中が悲しみと絶望に包まれる。韓遂に促され、翠はそんな民衆の前に立った。

「あたしの母、馬騰は曹操に殺された。中原へと誘き出され、騙し討ちにされたんだ！ 武人であった母は、大層無念だったはず。あたしもそうだ！ 正々堂々戦って負けたのならともかく、こんな卑怯な手段で母を陥れた曹操を許しはしない！ あたしはあの卑怯者の首を、絶対に母様の墓前に捧げてみせる！」

悲しみに沈む彼らの前でそう誓うと、大きな喚声が上がった。悲

しみは曹操への憎しみへと変わり、戦意は大いに高まった。人々の思いをその背に受け、弔い合戦を示す白装束に身を包み、翠の率いる馬超軍は韓遂軍と共に出陣するのだった。

武威を発った時には馬超軍三万、韓遂軍二万、合計五万の軍勢だったものが、関中を目前にした今、涼州の豪族が合流したために十万近くにまで増えていた。

翠達は今後の進軍計画を決めるための軍議を行っているのだが、総大将である彼女は一目で不機嫌と分かる顔をしていた。その理由は一刀にあった。この期に及んでもまだ進軍を諫める彼に、怒りを乗り越して不信感すら覚えていた。

一刀が進軍に否定的なものには理由がある。許昌に放った問者は戻ってきたものの、イマイチ情報があやふやだった。琥珀の処刑は公開されず、曹操から正式な発表があった訳でも無い。いつの間にか許昌の街に噂話として広まっていたらしい。正確な情報はつかめてはいないのだ。一方、長安や潼関へと放った問者からは、変化無しとの報告を受けていた。

琥珀を殺せば、その弔い合戦に兵を起こすのは想像に難くないはずである。にもかかわらず、関中に対して戦力の増強を行っていない。いくら袁紹との戦に戦力を傾けているとはいえ、曹操がこんな失策を犯すとは思えなかった。

だが、翠は一刀のそんな説明を聞く事もせず、辛辣な言葉を投げ

付けた。

「この、腰抜け！」

翠の放った単語と語勢に一刀は言葉を詰まらせる。それは、彼の事をよく知らない豪族達の心の声でもあった。そして、霞達ですらわずかにそう感じつつあった。

怯んだ一刀に対し、翠の言葉はさらに激しさを増していく。

「お前は母様から受けた恩を忘れたのか!? 母様のお陰で、今こうしていられるんじゃないのか!? ……お前は、恩知らずだ。恩知らずの腰抜けの、最低野郎だ！」

パンツ、と机を叩きながら叫び、一刀を睨み付ける。思わず視線を外しそうになった。普段は一刀に対して絶対に見せない射抜く様な眼光に怯えた訳では無い。そう思われて当然な事を言っている、と恥じ入ったためだ。

だが、何とか踏み止まった。自分が罵詈雑言を浴びせられる事で進軍を止めてくれるなら、と顔を上げ続けた。

一刀は口を開く。しかし、それよりも早く韓遂が両者の仲裁に入った。

韓遂にしてみれば、これ以上2人の仲をこじらせたくないという善意だったのだが、一刀にしてみれば、余計な事を、といった思いだった。結局、ここまで険悪な雰囲気になってしまったため、ここで軍議は打ち切られる事となった。

ほとんどの者が出ていった後の大天幕には、翠と鷹那、韓遂の3人だけが残っていた。

「翠、お前は涼州連合軍の盟主だろう。それが、全体の士気を落とす様な真似をするものじゃない」

先程の態度に対しての注意を、翠は仏頂面で聞いている。しかし、内心では言い過ぎた事を後悔していた。一刀がそんな薄情な男でない事は分かっている。だからこそ、なのかもしれない。一刀に憤りを覚え、失望したのは。

きつと、一刀ならあたしの気持ちを分かってくれる。母様の仇を討つために、最大限力を貸してくれる。そう思っていた。

それが自分の勝手な思い込みだとは気付く事も無く、翠は一刀を叱責した。言い過ぎたのかもしれない。翠のそんな気持ちを見透かしたかの様に、天幕を出た直後、鷹那は声を掛けた。

「姫、一刀さんのところに行かなくてもよろしいのですか？」

「な、何でだよ。あたしは、間違った事を言っただつもりはないぞ」

考えを言い当てられた感じがして、翠はばつが悪い。

「別に、謝罪を、と言っている訳ではありません。一刀さんがあそこまで頑なになっている以上、1度冷静に話を聞いてみた方がいいのではないか、と」

「ま、まあ、確かに話ぐらい聞いてやっても……」

鷹那が言うから仕方無く、という体出来る事に翠はホツとして、一刀の天幕へと足を向けた。

一刀に割り当てられている天幕には、彼だけでなく蒲公英や月達の姿もあった。

翠同様、一刀の態度に対して不満そうな顔の蒲公英と霞に清夜。その様子に不安げな顔を見せる月。一刀の考えが理解出来るのか、詠はそのどちらでもなかったが、それでも彼の味方をする気は無かった。使者を殺し、軍を起こしてしまった今、もう進軍を止める事は不可能だからだ。

コイツなら、当然それは分かっているはずなのに、どうしてここまで進軍に反対するのか。一刀を責める蒲公英達の言葉を聞きながら、詠はそう考えていた。

「……アンタ、何でこんな頑なに反対するのよ。確かに腑に落ちない点が多いわ。けど、今さら軍を退けないのは分かっているでしょ?」

3人に責められても、ほとんど何も言い返さない。そこには何らかの理由がある。だって、コイツは腰抜けなんかじゃないから。ただ戦うのが嫌で反対している訳じゃ無いから。

詠が眼鏡越しに問い質す様な眼差しを向ける。蒲公英よりも小さい背丈。しかも、文官であるために武官である蒲公英より明らかに

華奢な体つき。しかし、適当な話で誤魔化す事を許さない迫力が彼女にはあった。

「……琥珀さんは、曹操の暗殺を企む連中を止めるために許昌まで出ていったんだ。なのに、どうして曹操に処刑されたのか。そこがどうにも分からないんだ」

琥珀が自分を安心させるために嘘を吐いた、とは思えなかった。琥珀の死は額面通りではないんじゃないか。

そんな一刀の考えは、霞に一蹴される。

「んなもん、曹操が琥珀はんの罪をでっち上げたんやろ。もしくは、巻き込まれたか。どっちにしろ、曹操に殺された事には違いあらへんわ」

その可能性は一刀も考えた。だが、何となく釈然としない物が残った。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。何でアンタ、そんな事知ってるの？ ボクは、宮殿の落成式に出席する、としか聞いてないわよ？」

詠の言葉でようやく周りもその事を疑問に思う。どういう事が、尋ねる様な視線が一刀に向けられた。

さすがだな、とそこにいる全員に見られながら一刀は思った。詠なら違和感に気付いてくれるはず。その読みは見事に当たった。

彼は琥珀に話した全てを皆に伝えるつもりだった。誤魔化すのではなく、正直に自分の秘密を話す。その上で、この戦が迎えるであ

ろつ結末を語り、彼女達にも進軍を諫める側に回ってもらおう。そう決意を固め、一刀は口を開いた。

自分が天の国ではなく、未来から来た事。そのため、これから起こるであろう事がある程度予測出来る事。この話を聞き、皆一様に驚く、かと思つたが、話が突飛過ぎてついてこれないらしい。詠は理解している様だが、蒲公英と清夜は頭から煙を噴き出しそうだ。それでも一刀は話を続ける。

「……あの夜、俺が琥珀さんの部屋を訪れたのは、琥珀さんが許昌に行くのを止めるためだった。俺が知っている歴史では、馬騰さんは曹操に殺されたから」

「……けど、それやったらやつぱり……」

完璧には理解し切れていないながら、霞が思った事を口に出す。

それとほぼ同時に、天幕の入り口に掛かる目隠しの布が勢いよく跳ね上がった。

驚いて、そこにいる全員の視線が入り口に集まる。だが、それよりも早くそこにいた人物は天幕の中へ飛び込んだ。

「ぐっ……」

一刀の口から呻き声が漏れた。彼は飛び込んできた人物　翠によつて襟元を絞り上げられ、苦悶の表情を浮かべていた。

「どういう事だ、一刀。お前は、母様が曹操に殺される事が分かっていたのに、それなのに母様を行かせたのか？　お前は母様を見殺しにしたのか？　……どうなんだ、一刀！」

「……」
「……」

一刀の返事を聞いた翠は、クツ、と呟いた。否定して欲しかった。言い訳でもよかった。謝られたら、認められた事になる。

「くそっ……、ちくしょーっ！」

翠の心の中はぐちゃぐちゃだった。悔しいのか、怒りなのか、それとも悲しいのか。そんな事すら分からない。ただただ感情が溢れ、翠は一刀を殴り付けた。

吹っ飛ぶ一刀。その体は柱に激突し、天幕が潰れてしまうのでは、と思わせるほどに激しく柱を揺さぶった。

「……もう、お前の顔なんか見たくもない。……出てけ、出ていけ！ 2度とあたしの前に顔を出すな！」

倒れた一刀を見下ろしながら叫び、踵を返す。あまりの事に一同呆けてしまっていたが、ハツとした霞が翠の肩をつかんで引き止めた。

「ちよ、ちよい待ち！」

だが、振り返った翠の瞳に彼女は思わずたじろいだ。普段、翠が霞を見る瞳ではない。まるで敵を睨むかの様な、殺気すら孕んだ瞳だ。

「霞も嫌なら出ていって構わないぞ。これは、あたし達家族の問題だ。他人であるお前達に、無理に協力してもらおうとは思

ってないからな」

普段とは全く違う様子で冷たく言い放ち、肩に乗った霞の手を払う。

「何っやねん！ あの態度は！」

そのまま天幕を後にした翠の背中に向けて、霞は悪態を吐いた。

「ごめん」

「は？ 何で一刀が謝らなあかねん。アホか」

怒りの治まらない霞は吐き捨てる様に返した。多少の間の後、一刀はもう1度、ごめん、と呟いた。

翌朝、長安に向けて進軍を開始した涼州連合軍の中に、一刀と月の姿は無かった。

第4章・涓水編・第1話〈決別〉（後書き）

という事で、今回から第4章になります。

本来は一刀が殴られた後のシーンまで書くつもりでしたが、文字数が多くなりそうなので次回に回させていただきます。

第4章・渭水編・第2話（メイド軍師・前）

徐州彭城。

かつての主である桃香を排除し、この地を支配していた袁術の姿も今は無かった。太陽が中天に差し掛かるまでは人々の絶叫や剣撃の音に包まれていたこの街も、夕暮れが近付くにつれて静けさを取り戻しつつあった。

孫策は彭城において袁術を打ち破り、悲願を果たしたのである。現在、孫策軍は敗残兵の掃討を行っていた。とはいえ、収まりつつある喧騒を聞く限り、それもほぼ終わっているらしい。

そんな中、大将である孫策は、主のいなくなった城の露台で沈み行く夕日をぼんやり眺めていた。その姿を、彼女を探しに来た周瑜が見付けた。

何か考え事をしているのか、滅多に見せない物憂げな表情。桜色の髪は風にサラサラと流れ、陽光を受けてまるで絹糸の様に煌めく。幼馴染みである周瑜でさえ、その姿に思わず見惚れてしまった。

「こんなところにいたのね、雪蓮」

「あら、冥琳。どうしたの？」

孫策は露台の欄干に体を預けたまま、周瑜の方には目線すら向けなかった。2人は物心ついた頃からの付き合いである。相手の声を聞き間違えるはずがない。ましてや、孫策の事を、雪蓮、と真名で呼び捨てにするのは、今では義姉妹の契りを交わした周瑜しかいな

かった。

「なぜ、袁術と張勳を見逃したの？」

軍全体の方針では、最悪でも袁術だけは身柄を押さえるか、首級を挙げる事になっていた。袁術の暴政によって苦しめられた徐州、揚州に暮らす者の不満を低下させ、孫策への支持を高めるためだ。

しかし、孫策自身が袁術と張勳を見逃した。しかも、2人の喉元に剣を突き付けるところまでいって、だ。

その事を孫策の親衛隊から聞かされ、どういうつもりか尋ねる周瑜。だが、その口調は問い質す様な強いものではない。それが分かっているから、孫策も表情を緩めたままで答える。

「ん〜？ さすがに涙と鼻水だけじゃなく、失禁までしながら命乞いをするのを見せられちゃったらね。殺す気も失せちゃったわ」

そう言って笑う孫策につられる様にして、周瑜も声を上げて笑った。

「それに、あの2人はこれから先、ここで殺されていた方がマシだった、って思うくらい苦労するでしょ？ だったら、そっちの方が気分いいじゃない」

「フフツ、趣味が悪いわね」

袁術は放っておいても問題無い、と周瑜は考えていた。全てを失った袁術を受け入れる可能性があるのは、従姉妹の袁紹ぐらいなものだ。だが、袁紹は曹操を相手に苦戦している状態で、とてもでは

ないが袁術の再起を助ける余裕は無いだろつ。

民衆の不満を取り除く材料に使えないのは痛いけど、方法はそれだけではない。孫策が いいのなら、周瑜はこの件に関してこれ以上言う事は無かった。

「……やっぱり、青州まで出るのは無理よね？」

「ええ、やはり被害が大きすぎるわね。徐州で体勢を整えないと確認する様に尋ねた孫策に、周瑜は少しため息を吐きながら答えた。

予定では徐州を落とした後、余勢を駆って青州にまで侵出する事になっていた。曹操と袁紹が互いに目を向けている隙に、領土を奪い取るつもりだった。しかし、思いもよらぬ人物の参戦により、彼女達の計画は崩れる事になってしまった。

その人物とは、飛將軍と謳われた呂布　つまりは恋であった。

恋が鈴々との約束を果たすために徐州を訪れた時、すでにそこは袁術によって攻め落とされた後だった。

尽きかけていた路銀を稼ぐため。また、桃香達の情報を集めるため、恋は短期間、袁術の客将となっていた。その時に、孫策は恋とぶつかったのである。結果は、予想外の大きな損害を被る事となった。

袁術軍は弱兵揃い、という油断があった事は否めない。しかし、一番の問題は孫策の戦い方にあった。

大将自ら前線に立って武勇を示す。それにより、味方の士気は上昇し、敵の士気は削がれる。孫策ほどの武があれば、有効な戦い方ではある。

しかし、孫策が負けたり苦戦する姿を晒したりすれば、効果は逆転する。そして、この時の戦いがまさにそうであった。恋の武は孫策を軽く超えていた。

自分達の大将が負けるかもしれない。初めての事に孫策軍の動揺は大きく、浮き足立ってしまった。そこを突かれ、大打撃を受けた訳である。

ちなみにこの時の戦は、最終的には孫策軍が勝利した。江東制圧を終えた孫権隊が援軍として合流し、体勢を建て直したためだ。また、恋に対しても、孫策と周泰だけでなく黄蓋と甘寧も加わり、孫策軍の誇る猛将4人がかりで何とか撤退させる事に成功した。

その後は、恋がすぐに袁術の下から去った事もあり、徐州を陥落させる事が出来たのだった。

「この停滞が、致命的にならなければいいけど」

それがあまりにも都合のいい事だとは、呟いた孫策も分かっていた。

涼州勢力の蜂起を聞いた曹操は、慌てて報告に来た荀或とは対称的に落ち着き払っていた。

「華琳様、ここは馬超に使者を送っては……」

跪きながら進言した荀或を、玉座に座った曹操は足を組んだままで見下ろしている。

「使者を送ってどうすると言うの？ 馬騰が我が領内で死んだのは事実よ。何を言ったところで、それが変わる訳では無いわ」

曹操の言葉に荀或は、しかし、と返す。今の状況で涼州軍と戦うのは、何としても避けたかった。

涼州軍の兵力は現時点でおよそ十万。この先関中に入れば、その兵力がさらに増えるのは間違い無い。最終的には十五万に届くだろうと、荀或は予想していた。

一方の曹操軍は袁紹との戦のために河北に兵を回しており、今すぐ動員出来る兵力は三万にも満たない。最低でも、5倍もの兵力差で戦わなければならない事になる。軍師としては、戦を回避しようとするのは当然だった。

だが、曹操は理を説かれても、首を縦に振ろうとはしなかった。

「どんな理由があろうとも、この私に弓を引いた以上は許せないわ。我が覇道を妨げるものは、全て排除するのみよ」

立ち上がった曹操は、その脇に控える夏侯惇に対し、前に回る様

に指で指示を出す。それに従い曹操の正面に移動すると、荀或の隣で同じ様に跪いた。

「春蘭、すぐに兵を出す準備をしなさい。私が率いるのだから、遅れは許されないわよ」

はい、と返事をし、夏侯惇は玉座の間を後にする。

「桂花、貴方は秋蘭に連絡をとりなさい。最低限の兵を残し、こちらに戻る様に伝えるのよ」

やはり曹操自身も、このままでは勝ち目が無い事は分かっていた。それでいて戦を起こすのなら、荀或にはそれを止めるつもりは無い。そもそも、自分の言葉で曹操の決意が覆らない事は分かっていた。

彼女も夏侯惇同様返事をし、曹操の前から去ろうとする。その背中に向け、曹操は声を掛けた。

「それから、事態の把握も分かっているわね？」

もう1度返事をし、荀或はその場を退室する。1人残った曹操は、改めて玉座に深く腰を下ろし、大きくため息を吐いた。

「ごめん、霞。あんな事言ったけど、これからも翠に力を貸してやってくれないか？」

上体を起こした一刀は、口元の血を手の甲で拭いながら霞に声を掛けた。あんな事、とは、出ていってもいい、と言った事だ。言われた霞は相当腹を立てたらしく、一刀の方に振り返った時には眉間に深くシワが入っていた。

「……まあ、あいつが短いんは分かっとするし。それに、琥珀はんにはまだ返し切れてへん恩がぎょうさんあるしな」

それでもため息を吐くと、彼女の表情は少し柔らかくなった。その返事に、一刀はホッとする。

だが、周囲はそうではなかった。心配されているのは霞ではなく、むしろ一刀の方だ。

翠があれば激昂するのは、10年以上付き合ひのある蒲公英や鷹那ですら見た事が無い。2人には、寝て起きたら怒りが治まっている、とは到底思えなかった。明日の朝、翠が一刀に対してどんな態度をとるのか。悪い方向に、容易く想像がついた。

そこにさっきの一刀の言葉である。まるで、自分は出ていくが、と言っている様だった。

「アンタはどうすんのよ。……出ていくつもりなの？」

詠の言葉は、そこにいた者の気持ちを代弁した格好になった。答えの予想はたっている。だからこそ、誰も口にしなかったのだ。

しばらくの沈黙の後、一刀は心苦しそうに、ごめん、と絞り出した。

「どうして!？」

思わず口をついて出た言葉がひどく間抜けな事に、蒲公英は言うてから気が付いた。理由など、聞かなくても分かっている。

そんな蒲公英に、一刀は寂しげな笑みを見せた。

少女の心がきしむ。

蒲公英は翠の様に色恋沙汰に疎くはない。むしろ敏感な方だ。翠の気持ちも、一刀の気持ちも分かっている。

たんぽぽの大好きな2人が、互いを想い合っている2人が、どうして離れなきゃならないの。

蒲公英が気付いた時には、その瞳からポロポロと涙がこぼれていた。慌てて止めようとした彼女の頭に、ポンと手が置かれる。顔を上げてみれば、目の前には一刀の姿。申し訳無さそうなその顔に溢れる涙をこらえ、蒲公英は、大丈夫だよ、と言う様に笑顔を作った。

こんな状況でも、詠は冷静な風に努めていた。内心は動揺しているのだが、それを面に出さないのはさすがに一流の軍師だった。

「……で、ここを離れてどこに行くつもり？ 西涼に戻るの？」

「いや、益州へ行くつもり」

一刀がそう答えると、詠は怪訝そうな顔をした。

「益州？ 何であんなところに……。まさかさっき言ってた、ア

ンタが知っている歴史と関係があるんじゃないの？」

一刀は1つ頷き、ゆっくりと口を開いた。

「この戦いは、負け戦だ。何とか落ち延びた後、最終的には益州を治める劉備のところにも身を寄せる事になる。だから、そのために渡りをつけに行こうと思う」

荊州にいた桃香が長江を遡っていると聞き、一刀には益州攻略が始まったのだと分かった。恐らくは、無事に益州を手に入れるはずだ。

歴史通りであったなら、桃香に渡りをつける必要など無いだろう。だが、徐州において袁術と争い、赤壁の戦いはおろか曹操が荊州へ侵攻もしていない。桃香と曹操は敵対してはいない状況なのだ。

そんなところへ曹操に破れた者が訪れて、受け入れてもらえるのか。そんな不安があった。もっとも、反董卓連合の時に会った桃香と長安で会った曹操では、理想が違いすぎて最終的には敵対せざるを得ないだろうが。それに、桃香が困っている者を助けられない訳は無いとも思う。

それでも諸葛亮達はどう反応するか分からない。あり得ないとは思うが、身柄を拘束され、曹操との取引材料にされる可能性もゼロではない。だからこそ、一刀はあらかじめ接触しておきたかったのだ。

「我々が負けるだと！？ 馬鹿を言うな。こちらは十万、奴等は三万に届くかどうか、という詠の見立てだろう？ 3倍以上の差があつて、それでも負けると言うのか！」

清夜が吠える。

無理も無いだろう。兵力の差が戦の勝敗に直結しないとはいえ、結果を左右する大きな要因の1つである事は間違い無いのだ。これだけの差があつて負けるとは、普通は思わない。

だが、詠は今の涼州連合軍が抱える問題点に気付いていた。連合軍である以上仕方の無い事だが、練度や戦意、指揮系統の違う軍がひとまとめになつている状況は、やはり危険である。それに、琥珀の弔い合戦という事もあつて翠が盟主を務めているが、彼女に連合軍をまとめあげる事が出来るのか、そんな不安もあつた。決して楽に勝てる戦ではない。詠はそう踏んでいた。

そして、彼女に師事していた一刀もまた、同じ事に対して不安を感じていた。それを口に出して伝えると、一刀は深く頭を下げた。いきなりの行動に、そこにいた全員が面食らう。

「皆の力を翠に貸して欲しい。……負け戦だつて言っておきながら、勝手な事を言っているのは承知してる。でも……、あいつを守つて欲しいんだ！」

本当は、自分自身で翠を守りたい。翠の傍らにいて、彼女の力になりたい。その思いが叶わない以上、他の誰かにその役目を託すしかなかった。

歴史通りにいけば、ここで翠が死ぬ事は無いはずである。だが、そんな確証はどこにも無いし、それを確かめるつもりも無かつた。

「顔を上げてください、一刀さん。その様な事、言われるまでも

ありません」

それまでずっと黙っていた鷹那が口を開いた。顔を上げ、窺う様に鷹那を見る。

先程の翠と同じ事を感じているのではないか。彼の胸の中にはそんな不安があった。不安が面に出ていたか、鷹那にしては珍しく、返す声が柔らかい。

「貴方は琥珀様を止めようとしたのでしょうか？ あの方も、姫に負けず劣らず頑固でしたから。例えば私が止めていたところで、聞き入れてはくださらなかったでしょう」

気にしなくていい。そう慰められて、不意に鼻の奥がツンとする。泣きそうになるのを鎮めるため、一刀は再度頭を下げた。

このまま翠の下にとどまる事に、一同異存は無かった。詠だけが条件を付けてきたものの、それが満たされなければ出ていく、という様な脅迫めいたものではなかった。

条件の1つは、この戦について知る限りを教える事だった。もちろん、一刀には細かい部隊の動きなどは分からないが、直接の敗因なら知っている。離間の計により、馬超と韓遂の仲を裂かれたためだ。そして、離間の計を曹操に献策したのが賈馱。つまりは詠である。

この事を伝えるべきか、一瞬悩む。1から説明しなければならぬいし、余計な混乱を生みかねない。

だが、一刀は正直に話す事に決めた。ひよっとしたら、何かの役

に立つ情報かもしれない。それに、自分を偽っていた後ろめたさもあつての事だった。

「……じゃあ、詠ちゃんがないから、一刀さんの話通りにはならないって事かな？」

「もしボクが曹操の下にいたら、間違い無く仕掛けるわよ。そして、ボクが思い付く以上、曹操軍に何人かいる軍師が気付いても不思議じゃない」

蒲公英の楽観的な予想を、詠はバツサリと切り捨てた。

大小様々な勢力が集まる連合軍には、離間の計の様な切り崩し策は非常に有効である。例え成功しなくても、互いに疑心暗鬼な状態に持ち込めれば、十分な効果が見込めるからだ。

一刀の話を聞いても、詠は驚いた様子を微塵も見せない。そのまま2つ目の条件を口に出す。一同はその内容に驚愕させられた。

「月も益州に連れていきなさい」

「え、詠ちゃん！？ どうして!？」

中でも一番驚いているのは、名前を出された月本人だ。

「コイツの話は聞いていたでしょ。今回の戦は相当厳しいものになるの。月はコイツと一緒に離れた方がいいわ」

「何で？ 私だって、琥珀様の御無念を晴らしたいの。だから、私も……」

食い下がる月を見る詠の目が急に冷たくなり、ハア〜と非常に大きなため息を吐く。

「……分からないならハッキリ言っわ。月じゃ足手まといにしかならないの」

「……っ！」

親友であるはずの詠から浴びせられた一言が、月の心を深くえぐる。シヨックで言葉を失い、目を激しく泳がせる月。さらに辛辣な言葉が追い討ちをかける。

「ボクのように知略に富む訳でも無ければ、霞や清夜のように部隊の指揮や個人の武に才がある訳でも無い。いてもらっても、迷惑なだけなの。邪魔なのよ」

月の頭の中では、何で、という単語がぐるぐると回っていた。

『何で、詠ちゃんはこんな事を言うの？ 何で、優しかった詠ちゃんがこんな事を……？』

渦を巻く感情は、やがて涙となって溢れ出す。と同時に、月は天幕から飛び出した。月様、と叫びながら清夜がその後を追う。

残された者達は入り口から詠へと視線を移し、ハツとした。やれやれ、といった感じの苦笑いを浮かべる霞が詠に近付く。

「まったく、心にも無い事言っからや」

「つつさい……」

霞は詠の眼鏡を外すと、滝の様な涙を流すその顔を、自分の大きな胸に優しく抱き締めた。

慰めるつもりで言った霞の言葉は、若干的外れであった。もちろん、詠が月に対して足手まといだとか、邪魔などと思っていた訳では無い。ただ、軍師である詠にとって、月は弱点であった。月を思う気持ちが強すぎて、彼女が絡むと判断が鈍るのである。

董卓軍の軍師であるうちはそれでもよかった。月の事を第一に考えるのは大抵の場合、董卓軍の利に繋がるからだ。

だが、今の月は馬超軍の文官、もしくは侍女である。例えば、月の命と軍の勝利、二者択一を迫られた場合、どちらを選ぶべきかは考えるまでもない事だ。そんな当然の事でさえ、実際にそうなった時に即決する自信は詠には無かった。

「詠、何しとるん？ 軍議やで」

記憶の淵に沈んでいた詠の意識は、聞き慣れた訛りの強い声で引き戻された。分かっているわよ、と返し、机の上に置いていた眼鏡をかけて立ち上がる。

「アイツに変な事されたら、ぶっ飛ばしちゃっていいんだからね、月」

そう独り言を残して、詠は天幕を後にした。

第4章・渭水編・第2話〈メイド軍師・前〉（後書き）

という事で第2話でした。

一刀と月は翠と別れて益州へ。4章では馬超対曹操を中心に、合間に一刀や桃香の話を含んでいく形になると思います。

第4章・渭水編・第3話／メイド軍師・後

関中に入った涼州連合軍は、長安から潼関まで破竹の勢いで進軍した。関中の豪族も加わった事により、連合軍の兵力は荀或の予想した十五万に届きつつあった。

関中の豪族達は、琥珀に対して恩義を感じている訳では無い。涼州連合軍の勢いが盛んである事から、戦後の保身と、あわよくばおこぼれを貰おうという浅ましい考えで参加したに過ぎない。戦力としてはあてにできないが、彼らの参加を拒んで曹操側に付かれるのも問題だった。

一方、許昌を発った曹操は二万五千の兵を率いて西進。洛陽の西を守る函谷関の先に陣を張った。

兵力が劣っている以上、関に拠って戦うのが常道である。ましてや、時間を稼げば援軍の来着は間違い無い状況だ。にもかかわらず、函谷関より前に出たのには当然理由があった。

関中から曹操の本拠地である許昌へ向かうには、2通りのルートがある。1つは潼関から東へ進み、函谷関と洛陽を越えるルート。もう1つは、反董卓連合の時に翠が通ったルートで、潼関を越えて南に下り武関を越える。その後、荊州の北端を東進して許昌に迫るルートである。

函谷関と武関、その両方に兵を回すのは、現在の曹操軍では不可能だった。いくら関に籠ったとしても、兵力が少なければ長く保たせる事は出来ない。

かといつて、どちらか一方のみに兵を集中させる訳にもいかなかった。当たり前だが、兵の配置されていない方を選択するだろう。この場合最悪なのは、部隊を2つに分けられ、一方の部隊に足止めを食らっている間にもう一方に許昌を急襲される事だ。そのため函谷関より先に進み、武関へ向かう分岐点を押さえる様に陣を張ったのである。

そんな曹操の下に、連合軍に潜り込ませている間者から報告が入った。内容は、北郷一刀が連合軍から姿を消した、というものだった。1件だけでなく複数報告が上がってきている事から、信憑性は高いと曹操は感じた。

曹操はほくそ笑む。厄介な存在がいなくなった、と。

今現在は袁紹と争っているが、それが片付けば他方面へも侵出する考えていた曹操。彼女が涼州勢で警戒していた人物は、琥珀と一刀のみだった。

高い指導力を持ち、涼州の民や豪族達からの人望も厚い琥珀。用兵家としての実績も十分にあり、武人としても極めて高い位置にいる。何より長安で見たあの威圧感こそ曹操に、西涼の狼の二つ名は伊達ではない、と思わせた。

一刀にしてもそうだ。天の御遣いとしてその名は広く知られている。軍師と名乗っていた事から、長安攻めの際に使用された攻城兵器の開発に携わっているだろう。倍以上の兵力差があつた李確軍をあっさりと打ち破つたのも、その知略があつてこそのはず。曹操は一刀を高く評価していた。

その2人がいないのである。連合軍の侵攻を防いだ後は、一気に

涼州まで版図を広げる好機か。曹操はそんな事まで考えていた。

さらに重要な情報が彼女の下に届いた。対陣している涼州連合軍の物資集積所が判明したというのだ。すぐに作戦が浮かび、従軍している将に召集をかけた。

「全員揃ったようね。たった今間者から報告があり、彼等が軍需物資をまとめている場所が分かったわ。春蘭は夜陰に紛れ、敵陣を迂回して集積所を襲い、火をつけなさい。本隊はその火を合図に、浮き足立った連合軍に仕掛けるわ」

連合軍の物資集積所は、その陣の奥にある小高い丘の上だった。大軍になればなるほど軍需物資の量は多くなり、保管も難しくなる。しかし、幾重にも陣を展開している油断か、集積所自体の守りは厚くなかった。

勝利を確信する曹操。だが、彼女は何者かの手の上で踊らされている事に気付いていなかった。

涼州連合軍の陣内にある大天幕。そこでは先程まで軍議が行われていた。大天幕から出てきた奇妙な格好をした少女が軍師であるなどと、連合軍に潜入している間者の誰一人として思わなかった。そもそも、少女の着ている奇妙な服は馬超軍の侍女の制服だ。小間使としか思われていなかった。

その小間使と思われる少女、詠の指示により、連合軍は曹操

軍と対陣したまま動きを止めていた。総大将である翠は全軍での突撃を考えていたが、詠の作戦を聞き、鷹那や韓遂の諫めもあって思い直した。

詠の立てた作戦。それは曹操軍の間者を使った作戦だった。

様々な勢力の混在する連合軍では、潜入された間者を見つけ出すのは不可能である。ならば、逆に利用してやればいい。わざと相手が食い付きそうな情報を流し、相手の行動をこちらの望む様に制限する。

一刀が翠と仲違いをして軍を去った事は、詠の指示であえて秘匿されずにいた。これにより、特に馬超軍の兵の間には動揺が走り土気の低下が起こったが、そこには目をつむる。それよりも、曹操軍が油断する事の方が有利に働くからだ。

また、軍需物資の集積所に関する情報も、詠が意識的に流したものであった。そこの守りを敢えて薄くする。

曹操はそれを見逃す事無く動いてくるだろう。夜陰に紛れて一気に急所を突いてくるはずだ。

戦いの趨勢は、詠の思い描いた通りになりつつあった。

夏侯惇は部下千人を率いて夜の闇の中を進んだ。連合軍に見付からない様、森や藪を抜けて物資集積所に迫った。

目的の場所に目と鼻の距離にまで近付くと、彼女は兵を森の中に伏せて休ませる。それと共に、数人の兵を斥候として様子を探りに行かせた。

斥候の持ち帰った情報は間者からの報告と同じで、集積所の警備が緩いと改めて分かった。すでに月は中天を過ぎていく。夏侯惇とその部下は姿を隠していた森から躍り出ると、集積所の見張りへと襲い掛かった。

7、8人いた見張りは一瞬で倒される。彼等の断末魔の叫び声を聞いて他の兵も集まってきたが、返り討ちにあい、生き残った者も全て逃げ出してしまふ。

「ふん、他愛の無い」

夏侯惇は蜘蛛の子を散らす様に逃げる敵兵を見ながら、吐き捨てる様にそう言った。自らの部下ではないとはいえ、情けなくなる。本来なら、1人残らず討ち取ってしまいたいところだが、重要な任務を帯びている最中だ。さすがにそれは思い止まった。

「よし、この一帯にある物全てに火をつける。兵糧も武器も、全部燃やしてしまえ」

その命令を言い切らないうちに、集積所にある物資や天幕から火の手が上がった。勢いよく吹き上がる炎に、さすがの夏侯惇も焦る。なぜなら、彼女達はまだ火をつけていないのだから。

「フツ、見事に引つ掛かってくれたな」

不意に聞こえた声と共に、1人の女性が夏侯惇の前に姿を現した。短い銀髪に巨大な戦斧。馬に跨がる清夜の姿は堂々としている。昼の様に辺りを明るくする炎に照らされ、いつそ神秘的ですらあった。

そんな清夜が右手に持った戦斧を掲げる。すると激しく銅鑼が打ち鳴らされ、辺りに潜んでいた連合軍の兵が夏侯惇隊を取り囲んだ。チツ、と苦々しい顔で舌打ちをする夏侯惇を、清夜は冷たい目で馬上から見下ろしていた。

清夜の部隊が敢えて自軍の物資集積所に火を放った訳で、当然そこには本物の物資はほとんど無かった。荷物の多くは空の木箱や水の入った瓶などだ。

この物資集積所が罠である事を知らない曹操は、火の手が上がったのを見て、別動隊の襲撃は成功したものと勘違い。本隊を進軍させてしまった。

今まさに風前の灯となった曹操の命。だがここで、彼女にとって幸運な事が、詠にとっては最も危惧していた事が起こってしまう。伏せていた一部の部隊が作戦を無視し、曹操軍へと仕掛けてしまったのである。

詠の作戦では、この部隊は曹操をやり過ぎす事になっていた。そうして曹操軍を連合軍の懐に引き込んだ後、その部隊で退路を断つはずだった。この一戦で曹操の首を取る詠の作戦は、その目前でふいにされてしまった。

奇襲を受けて浮き足立つ曹操軍だったが、さすがによく訓練されている。すぐに体勢を立て直す兵を見ながら、曹操はこの奇襲に違和感を感じていた。

なぜこの時機に、しかも後詰めも無く仕掛けて来たのか。そんな疑問が頭を巡る中、ふと彼方の炎が目に入った。先程と炎の大きさが変わっていない様に見える。物資の全てを燃やす様に言っていたのだが。

そういう事か、と曹操の中で答えが出た。

「総員、後退する！ 季衣、殿を務めなさい。急げ！ すぐに敵が来るぞ！」

曹操の命令は一瞬のうちに全体に伝わり、統制のとれた動きで撤退を開始する。殿を命じられた許緒は、鎖の先に巨大な鉄球を付けた武器、岩打武反魔を振り回し、群がる連合軍を蹴散らしていく。彼女の奮闘により、曹操軍はさしたる損害も無く陣へと撤退した。

「一体どういっつもりだ！ 後少して曹操の首を取れたんだぞ！」

大天幕の中、軍議の席上で翠が吠える。彼女の視線の先には、先程勇み足をした豪族が縮み上がっている。

「も、申し訳ありません」

彼は顔面蒼白で、ただ頭を下げるしかなかった。曹操の首に手を掛けておきながら逃がす事となった翠の怒りは大きい。だが、この場にいる者で最も憤っているのは詠だった。表向きには侍女であるため発言は控えているが、内心は穏やかでない。

短期決戦を考えていた詠は、この一戦で決めるつもりでいたのだ。長引けば長引くほど、自分達にとって不利になると考えたからだ。

大軍であるがゆえに、必要な兵糧も膨大な量になり、長期戦には向かない。時間が経てば曹操軍に援軍が到着するのは間違い無い。何より詠が気になっているのは一刀の言葉だ。時間を与えれば与えた分だけ、曹操に離間の計の様な切り崩し策を行う時間を与える事になってしまう。

寄せ集めの連合軍であるだけに、作戦通りに動かない可能性がある事は詠も理解していた。だから、翠を通して何度も作戦通りに行動しろと命じていたのだが、結局、制御する事は叶わなかった。

「孟起よ、少しは落ち着け。そう怒鳴ってばかりでは、全体の士気にも関わってくる」

怒りを露にする翠だったが、韓遂の諫めで徐々に冷静さを取り戻していく。浮かせていた腰を椅子へと戻し、目を閉じてわずかに俯いた。

「やれやれ。……彼の処罰だが、今後の戦功を以て減じる、という事でどうだろうか？」

伺いをたてる様に言った後、韓遂は翠の耳元に口を寄せた。

「ここで敵罰を下せば、他の豪族が離れかねん。寛大な処置をした方がいい」

「ああ。叔父上がそう言うのなら……」

若干興味無さげに聞こえたその言葉に、詠は思わず、なっ、と声を上げてしまった。慌てて口を塞ぐが、軍議に参加している者達からジロリと睨まれる。彼女が元董卓軍軍師、賈文和である事を知らない者も多いのだ。詠は深々と頭を下げながら、馬鹿じゃない何考えてんの、と心の中で悪態をついた。

確かに韓遂の言った事も真実である。命令違反を犯した彼を処刑したとすれば、その下についている将兵や他の豪族は、翠に従おうとはしなくなるだろう。彼等には、手を貸してやっている、という意識があるからだ。

だからといって、何も罰を与えなければ組織として機能しなくなる。ましてやこの言い方では、戦功をあげれば命令違反をしてもいい、とそんな風にも受け取れる。そんな事になれば、それこそ軍は崩壊してしまう。

詠と同じ危機感を感じた鷹那が、今度は翠の右耳にそつと耳打ちをした。それを受けて再び翠が口を開く。

「ただし、今回だけだ！ 2度目は無いから、そのつもりでいる

」!

その言葉にどれ程の重みがあるか。詠には正直、期待出来なかった。

自陣へと戻った曹操の下に、翌日の夜になってようやく夏侯惇が帰ってきた。しかし、千人いた彼女の部隊はほぼ全滅に近く、生き残ったのはわずかに数10人。その誰もが少なからず傷を負っていた。夏侯惇本人も、決して無傷ではない。

「申し訳ありません、華琳様」

「顔を上げなさい。今回の敗戦は貴方のせいではないわ」

跪き、頭を垂れる夏侯惇に向かい、曹操は玉座に腰掛けながら言った。彼女からすれば、夏侯惇が生還しただけでも御の字だった。

「天の御遣いが去ったと聞いた時に、これで相手に知恵者がいなくなつた、と油断した私の責だわ」

確かに失った物は大きい。しかし、得た物もある。それは、まだ連合軍にも戦を云々出来るだけの人物がいる、という情報である。

もう油断はしない。曹操は気を引き締め直し、次戦に備えるのだった。

第4章・渭水編・第3話〈メイド軍師・後〉（後書き）

という事で、第3話でした。

今回はかなり会話文が少なくなっていました。元々、他の方が書かれている作品よりも少ないんじゃないかな、とは感じていたんですが、これだとだいぶ淡々と話が進んでいく感じになりますね。主要人物が戦に絡む前に終わっているので、仕方無いか、とも思うんですが。少し気を付けて執筆しようと思います。

次回は関中から離れ、桃香達の益州攻めになります。

第4章・渭水編・第4話〈落鳳坡の戦い〉

使者として荊州を訪れた魏延が大層名残惜しそうにしながらも帰った後、桃香達は早速益州へ向かう準備を始めた。そんな中、桃香は関羽と諸葛亮を伴い、劉表へ挨拶に伺った。

「義妹とも再開出来た以上、いつまでも劉表様の御好意に甘えさせていただく訳には参りません」

そう述べると、桃香は益州を攻めるつもりである事を伝えた。話を聞いた荊州牧、劉表はこれに反対する。彼は州牧の任を、自分の2人の息子達ではなく、桃香に継いでもらいたいと考えていたのだから当然である。

しかし、荊州の軍事における最高責任者である蔡瑁が桃香を支持した。彼は自分の甥である劉表の次男、劉宗を跡継ぎにしようと画策しており、桃香の暗殺を企てた事もあるのだ。この状況で、桃香が荊州を離れるというのを反対する理由は無かった。

ならば、と兵を貸す事を提案する劉表だったが、周囲への備えを理由にこちらも蔡瑁に反対されてしまう。北の曹操は確かに脅威ではあるが、彼等にとっては東の揚州を押さえる孫策の方が問題であった。

孫策の母、孫堅は荊州を攻めた際に命を落としている。孫策にとつては、劉表は母の仇であり、荊州は因縁の地であるのだ。現在は北方に目を向けているが、そちらが落ち着けば荊州を狙ってくるのは明らかだった。

もちろん、反対した理由はそれだけではない。桃香はこの場で、益州に自分を支持してくれる勢力が存在している事を話してはいない。劉表や蔡瑁は、桃香が新野城で集めた数千の兵力だけで益州攻めを行うと思っっている。そのまま返り討ちにあい、果ててくれる事を蔡瑁は期待していた。

最終的には、荊州の水軍を使つて益州との州境まで送る、という事になった。桃香達は襄陽から船に乗り、漢水を長江まで下る。合流後は逆に長江を遡り、約束通り益州の手前で彼女達は下船した。そこから陸路で益州に入ると、益州側にある州境の城、永安へと入城。城主である黄忠や、彼女と共に桃香の入蜀を画策した嚴顔らと対面を果たした。

この時点で、益州のおよそ3割の地域が桃香側に付く事となった。特に、地方にその傾向が強い。益州牧である劉璋の怠惰な生活を諫めた者は、煙たがられて地方へ回されている。彼等の多くは劉璋に見切りをつけ、黄忠達の考えに賛同していたのだ。そして、益州の州都である成都へ向けて進軍を開始すると、それまで日和見を決めていた地域までもが次々と桃香の側に付く事を表明した。

こうして戦闘を行う事も無く成都へ向かう劉備軍だったが、その手前、ラク城だけは桃香への帰順を示さずにいた。益州攻めにおいて初めての戦を前に、劉備軍は黄忠達も交えて軍議を開く。

「ラク城は、そんなに堅固な城なんですか？」

机の上に広げられた地図から視線を上げ、諸葛亮は黄忠と嚴顔、どちらともなく尋ねた。

「ええ、成都を守る最後の城だもの。堅牢なのはもちろん、周囲

の地形を使つて大軍を展開させにくい様に造られているのよ」

黄忠の返答に、諸葛亮は再び地図に視線を落とす。ラク城の周囲は森に覆われ、確かに大軍をもつて包囲する戦い方は難しそうだ。かといつて、ラク城を迂回する事も出来ない。成都まで大軍で移動出来る道は1本しかなかった。

「そう難しい顔をするな、朱里。実は、ラク城の脇に抜ける間道があつてな。正面からの本体を囿に使い、少数の精鋭で相手の側面を突いてやれば、そう被害を出さずに落とす事も出来よう」

自信たつぷりな敵顔の言葉だつた。この辺りの地理に関しては、2人の方が自分よりも圧倒的に明るいと思ひ、諸葛亮は敵顔の策に従う事にした。チラリと隣を窺えば、鳳統もコクコクと頷いていた。

「では、紫苑さんと桔梗さんには間道を進む部隊の道案内をお願いします。桃香様は本隊に。それから……」

諸葛亮は将を割り振つていく。本隊には桃香の他に関羽、諸葛亮、魏延が配置され、別動隊には黄忠と敵顔、鈴々、趙雲、鳳統、さらには恋と音々音が回つた。間道に行く別動隊が本命である以上、兵の少なさを将で補う形になつた。

「この辺りの民が、落鳳坡、などと呼んでいる険しい道だからな。気を付けんと、兵に無駄な損害が出かねんぞ」

「えつ……？ 落鳳坡、ですか？」

敵顔が何気無く言つた言葉に鳳統が反応した。人見知りが激しく恥ずかしがりやの彼女は普段、軍議の席であっても発言を促されな

ければ声を出す事があまり無い。そんな珍しさに、そこにいた全員
の視線が鳳統に集まる。天幕内であつたために帽子を被っていない
彼女は、顔を隠す事も出来ず、あまりの恥ずかしさにただ俯くだけ
だつた。

「そつか。落鳳坡なんて、雛里ちゃんにとっては縁起悪い名前だ
よね。朱里ちゃんと交代する？」

「い、いえ！ 大丈夫です、桃香様」

真つ赤な顔をフルフルと横に振る鳳統。彼女が落鳳坡という単語
に反応したのは、桃香の言つた様に、鳳が落ちる、その名前に不吉
なものを感じたからではなかつた。彼女の頭に浮かんでいたのは、
以前長安で会つた一刀の言つた別れ際の言葉。

落鳳坡には気を付けてね。

あの時は全く意味が分からなかつた。落鳳坡という言葉に一切聞
き覚えが無かつたからだ。だが、今になってみれば、この場所の事
を言っていたのだと思う。

落鳳坡の意味は分かつた。しかし、そこで新たな疑問が浮かぶ。
なぜ涼州にいる彼が、益州の奥にある間道の名前を知っていたのか。
そして、気を付けてね、とは、一体何に対してなのか。

鳳統は真剣な表情で地図へと視線を移した。

「成都からの援軍はまだ来ないのか」

「はい、何度も援軍の催促は行っているのですが……」

ラク城の城内には、黄忠、嚴顔と並ぶ巴蜀の三傑の1人、張任の姿があった。元々成都にいた彼は、劉章の命令を受けてラク城の守りに就く事になった。

ラク城に配備されている兵は約五千。対する劉備軍はおよそ三万。いくら堅固なラク城とはいえ、この兵力差ではいつまでももたせる事は出来無い。張任はラク城へ赴いた直後から劉章に援軍を要請しているのだが、援軍はおるか、返事の1つも返ってきていなかった。

「どういうおつもりなのだ、劉章様は。ここを突破されればもう後が無いというのに」

そう呟いた張任の言葉は間違っていた。ラク城からの援軍要請は劉章の耳にまで届いていない。全て劉章の周囲にいる宦官の手によって握り潰されていた。

というのも、宦官はすでに劉備軍に買収されていたためだ。それなりの金を渡し、成都占領後の地位を約束してやると、彼等は簡単になびいた。もちろん、この件を進めた諸葛亮には、約束を守るつもりなど無かったが。

そんな事とは知らない張任は、副将に向かってもう1度援軍を要請する様に伝える。

「はい。それで、作戦はどの様に……?」

「敵顔と黄忠が敵に回つたのだ。劉備軍は、恐らく落鳳坡を抜けてくるだろう。お前は城に残って指揮を執れ。私は落鳳坡で伏兵を仕掛ける」

そう言つと、彼はわずかな手勢を伴つて城を出ていった。

落鳳坡は、元々崖だったところに崖崩れを利用して造られた道である。それだけに道幅は狭く勾配も急。道の両側は切り立った崖になつており、その上には鬱蒼と木々が生い茂っている。まさに、兵を伏せるにはうつつつけの場所だった。

放つておいた斥候からの報告では、落鳳坡を進む劉備軍は五千。対して張任隊は二百。伏兵を使つての奇襲を行ったところで全滅させるのは不可能な差だ。

そこら辺は張任も分かっている。彼には初めから全滅させるつもりなど無い。狙いは一点だ。

どんなに癡猛な虎でも、どんなに大きな蛇でも、頭を潰されれば動く事は出来ない。彼の狙いは軍の頭である。

とはいえ、桃香は本道を進んでいる。代わりに張任が狙いをつけたのは、軍師である鳳統だった。軍師を討てば進軍を遅らせる事が出来る。上手くいけば、一時的にでも撤退させられるだろう。援軍が到着するまでの時間を稼げれば勝機はある。成都の実情を知らな

い張任は、あくまでラク城に籠る考えだった。

張任が落鳳坡に兵を伏してからほどなくして劉備軍が姿を現した。細い間道を通過するため、兵は長く伸び、陣形を成していない。その先頭に立つ旗には『黄』と『嚴』の文字が刻まれている。

眼下を通過する旗を崖の上から見下ろす張任。かつての戦友に、今は敵として相対する事となった彼の胸に去来する思いはいかほどか。それは誰にも分からない。彼はただ、眉1つ動かさずに2人の旗を見送った。

次いで『鳳』の文字が彼等の視界に飛び込んでくる。一気に緊張が高まる中、張任が旗の下を確認する。

視線の先では、小さな体躯に鍔の広い三角帽子を被った少女が馬に揺られていた。これが本当に鳳雛と謳われた天才軍師か、とも思ったが、間者からの報告にあつた特徴と一致している。

間違い無いな。

目標を定めた張任は部下へと目配せをする。彼等は気配を殺しながら配置についた。

鳳統は兵に周囲を守られる様に、部隊の中軍を進んでいる。しかし、狭い落鳳坡の中でも、張任がいる崖の下は特に道が細くなっていた。予想通り兵が渋滞を起こし始め、細長かった隊列がさらに細くなる。当然、鳳統の回りにいる兵の数は減った。まさしく好機であつた。

「よし、今だ！ 総員、斉射！」

張任は号令と共に矢を放つ。それとほぼ同時に、彼の部下も一斉に矢を射掛ける。無数の矢が宙に舞い、鳳統とその周囲に向かって降り注ぐ。

前後には味方の兵馬。左右には切り立った崖がそびえている。逃げ道は無い。張任は、殺った、と確信した。彼は、帽子の鏝に隠された少女の顔が、ニツと笑った事に気が付かなかった。

まるで雨の様な大量の矢が迫る中、少女は自分の跨がる馬の背に着けた長い棒を手を取った。それは、正確には棒ではない。その片側には、蛇の様に波打つ刃が付いているからだ。

長さが1丈8尺ほどもある蛇矛を両手で持つと、少女はそれを風車の様に激しく回転させた。次々と降り注ぐ矢を、グルグルと回る蛇矛が全て払い落としていく。矢の雨が止んだ時、少女の周囲にいた数人の兵は全員射殺されていた。だが、張任の目標としていた少女だけは、人馬共に無傷だった。

落鳳坡を強い風が吹き抜ける。少女の帽子が宙に舞った。帽子の下には薄紫色の長いツイントールではなく、赤毛のショートカット。そこにいたのは鳳統ではない。彼女の格好をした鈴々だった。

「さすがは雛里、言われた通りに伏兵がいたのだ」

嬉しそうに呟く鈴々。彼女が口にした通り、鳳統は今回の伏兵を見抜いていた。そして、自分が狙われる可能性が最も高いと考え、一計を案じたのである。

しまった。張任がそう感じた時にはすでに遅かった。喚声が上が

り、彼等の潜む森へと劉備軍の兵が雪崩れ込もうとしている。

このままでは、自分達の方が全滅しかねない。撤退指示を出そうとした瞬間、ヒュン、という空気を切り裂く音と共に、彼の右肩に衝撃と激痛が走った。あまりの衝撃に2、3歩よろめく。ぐっ、と低くうめきながら右肩を確認すると、そこには深々と矢が突き刺さり、血が指先へと垂れていた。

木が乱立する森の中に矢を射掛けるなど、普通の腕で出来る事ではない。だが、彼には1人だけ心当たりがあった。わずかに開いた木々の隙間から、予想通り、弓を構えた黄忠の姿が見えた。

「ここまでであろう、張任？ 大人しく投降せい」

「……敵顔、か」

首筋に冷たい物を押し当てられた張任は、振り返る事なく背後からの声に答える。

「いたずらに兵を損なうのは、お主の望むところではなからう」

相手が敵顔であれば、五体満足でも勝てるかどうかは微妙なところだ。右腕が使えない今の状況で、勝ち目などあるはずはない。それに、敵顔の言う通り、部下まで負けが確定した戦に付き合わせるつもりは無かった。張任が弓を手放すと彼の部下達もそれに続き、彼等は捕虜として捕らえられる事となった。

張任を捕虜とした別動隊は、前日軍議を開いた陣にまで後退した。本道を進んでいたはずの本隊もここまで戻ってきている。桃香は張任を説得し、黄忠や嚴顔の様に力を貸してもらうつもりでいたのである。

誠心誠意、己の主義主張を語り、これから先の展望を口にする。簡単な血止めの治療を受けただけの張任は、桃香の言葉に対して真摯に耳を傾け続けた。抵抗する素振りを見せなかった彼は、傷を負っている事もあって、その身を拘束されてはいなかった。

思いを語り尽くし、桃香が不安げな表情で張任の返事を待つ。きつと分かってくれるはず。そんな期待を抱いて。

「……なるほど。確かに劉備殿の理想は素晴らしい。嚴顔や黄忠達が貴殿にこの国を任せようとした判断は、間違いでは無いでしょう。」

桃香の顔が華やぐ。だが張任は、それでも、と続ける。

「私は劉備殿に降る事は出来ん」

「どうしてですか!？」

「我が主は先代劉焉様と劉章様のみ。いくら大義を掲げようと、私から見れば侵略者に過ぎん。侵略者に頭を垂れるほど、我が忠義、軽くはない!」

激しく落胆する桃香。一方、彼を以前から知る黄忠達はこの答えを予測していたのか、表情を変える事は無かった。

でも、と説得する言葉を探す桃香の肩に、そつと関羽の手が置かれた。

「桃香様。これ以上の説得は、張任殿の忠義に礼を欠きます。こは忠義に殉じさせてやるべきです」

わずかに目を剥いた後、数瞬間の間を伴ってから桃香は頷いた。その口は、真一文字に固く結ばれていた。

天幕から表に出る最中、関羽に敵顔が声を掛ける。

「愛紗よ、すまんが張任の首を刎ねる役、わしに譲ってくれんか？」

関羽は思わず敵顔の顔をまじまじと見返してしまった。長い間苦楽を共にした戦友が処刑されるどころなど、自分であれば見たくはない。ましてや、自らの手で首を刎ねようとは、一体どういう見なのか。関羽には想像もつかなかった。

「愛紗ちゃん、私からもお願いするわ」

黄忠にまで頼まれれば、関羽に断る道理は無い。何とも言えない気持ちを押し殺し、敵顔へとその役目を譲った。

張任は後ろ手に縛られ、両膝をつく形でしゃがんでいる。敵顔は剣を片手に彼の横に立った。

「迷惑をかけるな」

「ふん、何を今さら。あの時、袂を分かった時に、こうなる事は覚悟した」

少し不満そうな嚴顔とは対称的に、張任は声を上げずかすかに笑った。だが、それも一瞬の事だ。すぐに笑みは消え、元の真剣な表情へと戻る。

「後は任せるぞ、嚴顔。劉章様の事、そして、この益州の事を、な」

「……他に何か言い残す事は無いのか？」

2人の会話は小声であるため、誰の耳にも届いていない。しばらく沈黙した後、張任は口を開く。

「……出来れば俺のために、もう1度笛を吹いてはくれないか、桔梗」

「ああ、約束しよう、鷺。……向こうで旨い酒でも見付けておけ。わしが逝った時に、2人で酌み交わそう」

お互いに笑みを見せる。

「頼む、嚴顔」

「おう！」

返事をするや否や、嚴顔の右手に握られた白刃が振り下ろされた。わずかに遅れて張任の首がゴロリと落ちる。その顔は、誰の目にも安らかに映った。

その夜、劉備軍の陣中にはいつまでも笛の音が響いていた。

第4章・渭水編・第4話〈落鳳坡の戦い〉（後書き）

という事で第4話でした。

あまり桔梗のエピソードを見た事が無い様な気がして入れてみたのですが、正直、口調がつかみづらかったです。キャラは立っているはずなのに書きにくい……。

今回は関中に舞台を戻し、馬超対曹操の第2ラウンドになります。

第4章・渭水編・第5話〜風向き〜

涼州連合軍と曹操軍との緒戦から数日。今度は連合軍側から戦端を開いた。数の差を活かした正面からの力押し。被害の大きさに目を瞑れば、単純な戦法だけに効果も大きかった。

だが、対する曹操も負けてはいない。連合軍の中核を成しているのが騎兵であると見抜いた曹操は、陣を移動。深い茂みやちよつとした木立が点在する位置へと移る。騎馬が広く展開するのを妨げるためだ。さらには、馬防柵を使って騎馬の侵攻を止め、その後方に配した弓兵や弩兵で損害を与えていく。

こうして守勢に回った曹操軍は、少なくとも被害を出しながらも連合軍の突入だけは防いでいた。

戦線は一進一退を繰り返し、次第に膠着してくる。

「……おかしいわね」

戦況を観察しながら、曹操は1人呟いた。

前回の戦いで自分を出し抜いた相手が何の策も無く、ただ正面から突撃を繰り返すだけ。そんな事があり得るかしら。こちらの間者に偽情報をつかませる真似をする者が、こんな策と呼べない力押しを選択するはずは無いわね。

考えを巡らせる曹操の視界に両軍の激突している様子が何気無く入った。お互いの戦力が、曹操軍の陣の正面に集中している。

その時、曹操の頭にある考えが浮かんだ。急いで地図を広げ、辺りの地形を確認する。

「フフ……。なるほど、そういう事ね」

彼女の口角がニヤリとつり上がった。

剣撃の音と怒号が飛び交うその場所から離れたところを、霞とその部下は疾駆していた。小高い丘の上。木立の間を抜けていく細い道。ここを抜ければ、曹操軍の脇腹をつける。

若干開けた場所に出て、さらに速度を上げようとする張遼隊の前に、ある一団が現れた。先頭に立つのは長い黒髪の女性。霞の覚えている姿とは違い、蝶をかたどった眼帯を着けているものの、紛れもなく以前一騎討ちで刃を交えた夏侯惇であった。その後ろには、曹操軍の軍装に身を包んだ兵が隊列を成していた。

霞は慌てて部隊を停止させる。

「なっ、何で自分がここにおんねん!? ……はっ! まさか、ウチらの作戦が見抜かれたんか? 何て事や……」

「はっはっは! 当たり前だ。曹操様が、貴様らごときの考えた策を見抜けんとでも思ったか!」

大仰に驚き、落胆して見せる霞に対し、夏侯惇は得意気に高笑い

をする。

「……こないなったら、お前を倒して先に進むまでや！」

顔を上げた霞は飛龍偃月刀を構え、鋭い眼差しでキツと夏侯惇を見据える。高笑いを止めた夏侯惇も真顔へと戻り、その背から七星餓狼を抜く。2人の間の空気がピンと張り詰めた。

「いいだろう。あの時うやむやになった勝負の決着、今ここで着けてくれる」

「ええんか？ 負けそうになった時、助けてくれる妹がおらんけど？」

「馬鹿にするな。あの時は馬の差だ。だが、今回は違うぞ。曹操様の愛馬、爪黄飛電をお貸しいただいたからな。もう負けはせん！ 貴様など、その駄馬ごと叩つ斬つてくれる！」

駄馬、という言葉に霞のこめかみが震えた。馬に並々ならぬこだわりと愛情を持つ彼女にとって、聞き捨てならない言葉だった。

「……んなら、その名馬で駄馬に負けた時の言い訳、しっかりと考えとけやーっ！」

叫ぶと同時に馬の腹を蹴り、夏侯惇との距離を詰める。互いの武器が交錯し、辺りに轟音を轟かせる。その音は、さながら一騎討ちの開始を告げるゴングの様であった。

霞の率いる別動隊が夏侯惇の襲撃を受けた事は、直ぐ様本陣にいる翠達へ報せられた。だが、彼女達には動揺した様子は無い。なぜなら、こうなる事は予測済みだったからだ。こうなる様に仕向けた、と言っても過言ではないだろう。

「なら、作戦を第3段階に進めるわよ」

報告に來た兵が下がった後で、詠が口を開く。不特定な者がいる状況では、決して軍師としての口をきかない詠であった。

作戦の第1段階は正面からの力押し。単純にそれを繰り返す事で曹操軍の意識を正面に集中させる。

単純な力押しで終わるはずがない。相手がそう思い始めるであろう時機を見計らい、作戦は第2段階へ。あえて見付かりやすい進路を選択し、別動隊を進軍させる。その迎撃のために將兵を動かし、曹操の守備が薄くなったところで、本命である第3段階へと移行する。ここまで温存していた切り札を投入する時だ。

精強で知られる涼州兵だが、とりわけ馬超軍の強さは格別であった。その中でも琥珀と翠の親衛隊は群を抜いている。最強の兵、合計二千で曹操の陣に突っ込み首を挙げる算段だった。

「では、私は先に行きます。花道は作っておきますので」

鷹那はそう言いつつ椅子から立ち上がる。翠はそんな彼女を見上げながら、

「ああ。この一戦でケリを着けるぞ。奴の首を持って西涼に帰るんだ」

と返した。彼女の頭には、曹操を討った後の事など何も無い。曹操の首を母の墓前に捧げる。ただその思いがあるだけだ。曹操が死んだ後に起こるのである。中原の混乱にも、献帝を保護して得られる。後ろ楯にも興味は無かった。

天幕を出た鷹那は自らの部隊を率い、前線へと向かう。前曲中央は馬岱隊が支えている。後方から近付いた鳳徳隊が激しく銅鑼を打ち鳴らすと、蒲公英の指揮の下、馬岱隊は左右に分かれた。

まるで並木道のように真っ直ぐ開けたスペースを鳳徳隊が駆け抜ける。左右についた馬岱隊からの援護射撃を受け、猛然と突撃する鳳徳隊。馬防柵を飛び越え敵陣へと躍り込む。一瞬にして、蜂の巣をつついた様な大混乱へと陥った。

右往左往する曹操軍の兵を、鳳徳隊は次々に屠っていく。まさに、蹂躪、という言葉がぴったりの光景である。

だが、まだ終わりではない。最後の一矢が残っている。

曹操軍が崩れ始めたのを見てとると、鷹那は旗を大きく左右に振らせる。それを合図に、後方に控えている馬超隊がついに駆け出した。

鳳徳隊は敵を押し込みながら、馬岱隊と同じ様に左右へと展開し道を作る。ぽつかりと開いた道の先には、宿敵曹操がいるであろう。ひととき大きな天幕がある。翠はただ一点、その天幕だけを目掛けて黄鵬を駆けさせた。

霞と夏侯惇による2度目の一騎討ちは、夏侯惇がわずかに勝っていた。

『爪黄飛電言つたか、この馬。悔しいけど、こつちよりいいのは間違い無いな。確かに名馬や』

前回の一騎討ちは、馬の差が結果に大きく影響した事は分かっている。今回はそれが逆転した格好だ。

さらには、夏侯惇自身の腕も上がっている様に思う。隻眼になった事で死角が増え、距離感をつかみづらくなっているはずである。先程から夏侯惇の左側に回り込む様にして攻撃を繰り返しているものの、全て弾かれている。そればかりか、わずかでも隙を見せれば一気呵成に攻め込まれてしまう。

「どうしたどうした！ 貴様の實力はそんなものか!？」

調子に乗り、かさにかかって攻撃を続ける夏侯惇。対して霞は駄馬と呼ばれた事への怒りも薄れ、冷静さを取り戻しつつあった。そうして自分の役目を思い出す。

目的は夏侯惇に勝つ事ではない。翠が本懐を成し遂げるまで、夏侯惇をここに足止めする事だ。ならば、と攻撃から守りに意識を切り替える。

回避、防御、受け流し。がっちり守りを固められては、いくら夏侯惇といえどもそう易々とは攻撃が届かない。

「なぜ本気でやらんのだ、張遼!？」

「アホぬかせ!　ウチははなつから本気でやっとなねん!」

霞の偃月刀と夏侯惇の大剣とが鏝迫り合いの様になり、2人の動きが止まった。両者共に肩で息をしている。全力で三十合以上打ち合っているのだから無理もない。至近距離で睨み合う2人の耳に、かすかな喊声が彼方から届いた。

今までと違う。

何が、とははっきりと言えなかったが、夏侯惇は直感した。霞を押し出す様にして距離を開けると、喊声の聞こえた方向に顔を向けた。

彼女達がいる丘の下、開けた平地に曹操軍の陣がある。一騎討ちを始める前は、陣の端で両軍がはっきりと分かれていた。だが今は、陣の中程にまで涼州連合軍の兵が食い込んでいる。曹操軍を混乱させ、その先にある曹操の天幕に迫る勢いだ。

慌てて馬首を返し救援に向かおうとする夏侯惇だったが、その行く手を霞が塞ぐ。

「張遼!　貴様、謀ったな!」

「何言っとなねん。ウチらがやっとなのは戦争やで。騙された方が悪い」

くっ、と言葉に詰まり、忌々しげな顔を見せる。それに対し、霞はニヤリと笑う。

「せやけど、こっちは別や。真っ向から打ち合おうやないか」

霞は偃月刀の切っ先を夏侯惇に向けて構える。だが、夏侯惇は構えを取る事もしない。ただ俯くだけだ。そんな夏侯惇を訝しんだ霞が声を掛けようとした時だった。

「……邪魔だーっ！」

顔を上げた夏侯惇は目をカツと見開きながら叫ぶ。その咆哮に大気は震え、霞もその馬も思わず竦んでしまった。そのため、一気に間合いを詰めてきた夏侯惇への対応がわずかに遅れる。斬撃は何とか防いだものの偃月刀は跳ね上げられ、大きく体勢を崩してしまう。

アカン殺られる。霞は死を覚悟した。だが、夏侯惇はそんな霞を無視し、その脇を一瞬で駆け抜けた。

「華琳様ーっ！ すぐにお側に参ります！」

呆気に取られる霞には目もくれず、部下の間を突っ切って一目散に駆けていく。爪黄飛電の速度は凄まじく、あっという間に彼女の姿は木々の向こうに消えてしまった。

少し遅れて夏侯惇隊の兵達も彼女を追って撤退を始めた。呆けていた霞もその動きにハツとし、慌てて追撃指示を出す。

「……ア、アカン！ 奴等を行かせんな！ 追え、追えーっ！」

指示を出すと同時に、自身も馬を駆けさせる。そうしながら、霞は考えていた。あの一瞬、夏侯惇の視界に自分の姿は映っていなかった、と。助かった事への安堵感もある。だが、自分の存在が消えた事に対する悔しさの方が、彼女の心中において大部分を占めていた。

「申し訳ありません、敵軍に前線を突破されました。間を置かず、この本陣に到達されるものと思われます。ここは脱出を……」

曹操の天幕に1人の兵士が息を切らせて飛び込んできた。外の喧騒を聞いて事態を予想していた曹操に、別段驚いた様子は見えなかった。だが、内心では平静を保っていられなかった。

前回に引き続き、今回の戦闘でも裏を取られ、いい様に踊らされたのだ。自分の不甲斐なさに腹がたつのを通り越し、半ば呆れていた。曹操にしては珍しく、弱気になっていた。だからだろう。兵の言葉に素直に従って天幕から外に出る。

「っしやおらっ！」

出た途端、遠くから叫び声が聞こえた。まるで雷鳴の様に大気を引き裂かんばかりの声に、曹操は体をビクツと震わせた。恐る恐る声のした方に目を向ける。視線の先では彼女の兵が宙を舞っていた。

物凄い勢いで突っ込む翠に対し、ただの兵卒では相手にならない。

気圧された多くの兵は翠の進路を塞ぐ事すら出来ず、自ら道を空ける有り様だった。恐怖に足が竦み動けなくなった者だけが、結果として翠の前に立ち塞がる。

だが、所詮は恐怖に支配された者達である。何の抵抗も出来ない槍で突かれ、馬に撥ね飛ばされ、次々と人だったものへと姿を変えていく。

鎧袖一触。まさにそんな状況だった。

思わず、ヒッ、と小さな悲鳴が曹操の口から漏れた。その行為を情けないと考える余裕は無かった。

翠とはまだだいぶ距離がある。とても相手の表情まで認識出来る様な位置にはいない。にもかかわらず、曹操は目が合った気がした。

それは気のせいではなかったのかもしれない。現に、翠は一直線に曹操へと向かい始める。

蛇に睨まれた蛙の様に、曹操は身じろぎ1つ出来ない。ただ自分の意思とは関係無く、ガクガクと震えるだけだ。彼女は翠の放つ、殺気と言つのも生温い様な気配に当てられていた。それは、以前長安で琥珀が放つたものと同質だった。

「曹操様！ 早くお逃げください！ ここは私が食い止めます！」

彼女の傍らにいた兵は、そう言い残して翠へと駆けていく。その言葉で曹操の意識は現実へと引き戻された。震える足を無理矢理動かす、とにかく前に進む。その先には、愛馬絶影の姿がある。

そこまで辿り着ければ、絶影に跨がれば、逃げ切れる。曹操は必死だった。

背後から聞こえる蹄の音はどんどん大きくなる。槍を携えた先程の兵士は、すれ違い様に首をはねられ、断末魔の叫びを上げる事も無くすでに絶命していた。

絶影まで後わずか。手を伸ばせば届きそうな距離だ。だが、体が重い。恐怖で思う様に体が動かない。翠は曹操の背後にまで迫っている。

しかし、恐怖が逆に曹操を助ける事になるとは、その時まで誰も考えなかった。

「曹操、覚悟ーっ！」

絶叫と同時に十文字槍、銀閃が繰り出された。その瞬間、あまりの恐怖に力が入らなくなっていた曹操の足がもつれた。バランスを崩し、前につんのめる。銀閃は曹操のどくろを模した髪飾りと髪を数本刎ね、その向こう側にある木の幹に深々と突き刺さった。

「くっ……、このっ！」

翠は何とか引き抜こうとするが、戈の部分まで幹に食い込んでしまっているため、容易には出来そうにない。これを好機と見た曹操は慌てて体を起こし、顔に付いた泥を払う事も無く絶影へと跨がる。

「逃がすかつ！」

ここまで来て討ち漏らす訳にはいかない。翠は槍から手を離し、腰にはいている剣を抜いた。曹操は気付いていない。この距離なら

投擲しても十分当てられる。翠は振りかぶった。

「やめろーっ！」

まだ幼さの残る少女の声と共に、巨大な何かが翠の横っ面へと襲い掛かる。振りかぶった剣でとつさに防御するが、あまりにも重い一撃に黄鵬もよろけてしまう。何とか弾き返した後、剣には大きなひびが入っていた。

「季衣！」

曹操は思わず自分を助けた少女の名を叫んだ。

「華琳様、ここはボクが引き受けます！ だから、早く逃げてく
ださい！」

許緒は小さな体に不釣り合いな大きさの鉄球を頭上でグルグルと回すと、そのまま距離を測る様に翠へとにじり寄っていく。

「任せるわ、季衣」

「あつ、待て！」

2人が睨み合う隙を突き、曹操は絶影を走らせた。反射的にそちらへと視線を向けてしまった翠に対し、季衣の岩打無反魔が襲い掛かる。

ひびの入った剣では、これだけの重量がある物体を防げない。無用の長物と化した剣を投げ捨て、馬上で身を伏せる。ポニーテール

にまとめた髪を掠めて、鉄球は翠の上を抜けていった。

許緒は急いで鉄球を引き戻そうとする。が、それよりも早く、鉄球と柄を繋いでいる鉄鎖を翠がむんずとつかんだ。まるで綱引きの綱の様に鉄鎖はピンと張った。しかし、それはほんの一瞬だけだった。

「うりゃあーっ！」

大声を発しながら翠は鎖を引く。

安定しない馬上にいる翠と、両の足を大地に着けた許緒。普通に考えれば許緒の方が圧倒的に有利なはずだが、ズズツと小さな少女の体が引つ張られる。

「わっ、わわっ！」

一度動き出してしまうともう止まれない。釣竿で放られる餌の様に許緒の体は空を飛ぶ。そのまま翠を挟んだ反対側の地面に叩き付けられ、目を回した。

フン、と鼻を鳴らして鎖を手放すと、翠は馬から降りる。木にめり込んだ槍を両手で握り、足を幹に掛けて一気に引き抜く。バキバキと木っ端を撒き散らしながら、ようやく穂先はその姿を現した。

急いで黄鵬に再度跨がり、だいぶ小さくなった曹操の姿を追う。

曹操の跨がる絶影は確かに名馬だが、翠の所有する3頭、麒麟、黄鵬、紫燕も負けず劣らずの力を有している。特に黄鵬は荒い気性をしているものの、速力も持久力も他の2頭より頭1つ抜けている。

徐々に2人の距離が詰まっっていく。周囲には、すでに曹操の身を守る者はいない。

翠は銀閃を馬の鞍に固定すると、馬上弓を左手に取った。右手も手綱から放し、矢を鞍に着けた矢筒から抜いて弓を引き絞る。手放しになり、背筋を伸ばした事で安定しない体勢を落ち着かせるため、内腿に力を入れて鞍を挟む。息を吸いながら限界まで弓を引き、息を止めて曹操に狙いを付ける。

一意専心。彼女の耳には、蹄が大地を蹴る音も、耳元で鳴っている風切り音も聞こえていない。その瞳には、前を駆ける曹操の背中だけが映っている。

フツ、と短く息を吐く。と同時に、指先から矢が離れた。

空を裂き、曹操に背後から迫る。が、わずかに距離があったか、矢は曹操の左腕を掠めるにとどまった。それでも痛みで体勢を崩す事は出来た。

全速で駆けている馬の背に乗る者がバランスを崩せば、当然馬もバランスを崩してしまう。斜行しながら絶影は馬足を大きく緩めた。

千載一遇の好機だ。翠は馬上弓を投げ捨てて銀閃を再度手に取る。

「母様の仇！」

ほぼ静止した曹操の脇を駆け抜けつつ、翠は槍を払いに行く。

間一髪、曹操は馬上から身を投げる事で助かった。衝撃で不覚にも悲鳴が漏れてしまう。だが、それを恥じている暇は無い。すでに

翠は馬首を返しつつある。

押っ取り刀で逃げ出したため、手元には愛用の大鎌、絶は無い。あるのは絶影の鞍に着けてある剣が1本だけだ。それでもここで死ぬ訳にはいかない。曹操はその唯一の武器を手にした。

しかし、使い慣れない武器では翠の相手になどならない。掬い上げる様に振るわれた銀閃の一撃で、曹操の手の内にあつた剣は天へと飛ぶ。止めとばかりに振り下ろされる槍を、曹操は地面を転がりながらかわした。

白磁の様な肌は土で汚れ、黄金色に輝く髪にも泥土がベツトリ付着している。そこには凜とした霸王の姿は無い。そこにいるのは生にしがみつくと少女だけだ。

幼少時より、文武において高い才を發揮していた曹操。だが、今の彼女があるのは才能だけではない。たゆまぬ努力があつてこそ、だ。同年代の子供達が遊びに耽るなか、勉学に励み、武を磨いた結果なのだ。

それでも、いくら力を付けてみても、どうにもならない物があつた。家柄、つまりは生まれの差である。

何の才も無く、努力もしない。なのに、4代に渡つて三公を輩出した名門というだけで、常に袁紹が上にいる。それが曹操には許せなかつた。

だから彼女は誓つたのだ。生まれの貴賤に左右されない實力主義の国を造る、と。努力した者が報われる世界にする、と。

そんな自分の考えが間違っていないと証明するために、曹操は自らに大きな枷を付けた。霸道を貫き、力でこの国を手に入れる。力を以て国を統べ、民に安寧をもたらす。そうして己が名を歴史に刻む事こそが自分の存在意義であると、曹操は誓っていた。

である以上、こんなところで死ぬ訳にはいかなかった。他者に頭を垂れるくらいなら進んで死を選ぶが、そうでなければ、例え泥土にまみれようと生き延びる。強い決意が曹操の瞳には宿っていた。

その場に第三者がいれば、彼女の姿は滑稽に見えたかもしれない。死期をわずかに遅らせるだけの無駄な足掻きに思えたかもしれない。だが、生への執着が風向きを変える。

「華琳様ーっ！」

遠くから絶叫の様な声が響く。

「春蘭！？」

その声に、曹操の意識はわずかに移った。そのため、繰り出された突きに対して反応が一瞬遅れる。穂先が曹操のふくらはぎを浅く裂いた。

しまった。そう思ったのは曹操だけではなかった。翠もまた、夏侯惇の声に気を取られ、手先を狂わせていた。

再度曹操に攻撃を仕掛ける時間は無かった。夏侯惇の乗る爪黄飛電が驚異的な速度で駆け、2人の間に割り込んだためだ。

「御無事ですか、華琳様！？ しばらく御辛抱ください。すぐに

馬超を討って見せます！」

そう言って大剣を構える。その肩は激しく上下している。

無理もない。霞と一騎討ちをした後、全力で馬を走らせていたのだ。彼女の体力は限界に近かった。

実際、わずか数合刃を交えただけで夏侯惇は押され始める。だが、すでに風向きは曹操にとって追い風となっていた。

体勢を崩した夏侯惇に翠が追撃しようとした、まさにその時だった。1本の矢が翠に向かって放たれた。槍の柄を使って何とか防ぐが、夏侯惇を討つ好機は逸してしまふ。矢の飛んできた方に目を遣れば、弓を構えた1人の女性の姿があった。

「姉者、華琳様をお連れして下され！」

その女性、夏侯淵が言葉を発した時には、姉である夏侯惇は倒れている曹操を馬上から抱え上げ、妹の方へと馬を走らせていた。

追わなければ、という考えが頭をよぎったが、夏侯淵の後方に次々と現われる兵の姿を見て、翠は断念せざるを得なかった。というより、急いで後退しなければ、逆に自分の方が討ち取られかねない。母の仇を討った後ならともかく、それを成さないうちに死ぬ訳にはいかない。翠は断腸の思いで馬首を返すのだった。

第4章・渭水編・第5話〈風向き〉（後書き）

という事で第5話でした。

またしても千載一遇のチャンスを逃した翠。一方、絶体絶命のピンチを潜り抜けた曹操。涼州側にあった流れは、ここから逆転し始めます。

この話の曹操は、原作よりも武力は低くイメージしてあります。魏では関羽の一撃を止めていましたが、真つ向から打ち合うのは厳しいくらいの強さ。一刀も曹操も自分からすれば大差無い、という無印での星の台詞を元にしています（パソコンを持っておらず、この話を書き始めた時にはPS2版の夢見しかプレイしていません）。たため）。

また、許緒と典韋も一騎討ちに関しては少し弱いと考えています。あの重量の武器は、一騎討ちには向かないと思うので。逆に、寡兵で大軍を相手にする場合等には適していると思えます。一騎討ちだけであれば、楽進の方が上じゃないかと。

色々とおかしいところがあると思いますが、この話なりの設定として御容赦ください。

第4章・渭水編・第6話〈漢中〉

涼州及び関中と益州とを隔てる様に横たわる秦嶺山脈。険しい山々が連なるこの地に、カンという乾いた高い音が幾度も響いていた。

「よし、じゃあ今日はここまでにしよう。お疲れ様、月」

「……は、はい。ありがとうございます……ございました、一刀さん」

地面に突っ伏す様に倒れていた月は、へとへとになった体を無理矢理に起こし、一刀へ頭を下げた。2人の手には、長さが60センチ程の棒が握られていた。それを使い、一刀は月に剣の稽古をつけていたのである。

この事を言い出したのは月の方だった。2人が翠の下を離れた日の夜、月は一刀に剣を教えてくれる様に頼んだ。一刀は、自分もまだ未熟者だから、と一度は断つたのだが、最終的には月の真剣な眼差しに心動かされた。それ以来、ほぼ毎日の様に一刀は稽古をつけている。

フラフラとした足取りで歩いていく月の背中を見ながら、よく続くな、と考えていた。月は武に関して、ずぶの素人だった。一刀にとっては決して大変ではない鍛練も、経験の無い彼女にとってはかなり苦しいはずだ。実際、生傷も相当増えている。それでも弱音を吐かないのは、やはりあの時の事が原因だろう。

一刀は月の背中が見えなくなると、野営をするために火起こしを始めた。

一刀から離れ、月は近くを流れる小川へと歩を進めた。そのほとりにしゃがみ込むと、両手で掬った水を口に運ぶ。鍛練のお陰でからからに渴いた喉から胃へと向かい冷たい水が流れる。気持ちいいそのまま数度、水を掬っては飲み掬っては飲みを繰り返し、ようやく人心地ついたところで、フウと息を吐いた。

すると、今度は上着を脱ぎ始める。ノースリーブになり、両の腕が露となる。白く綺麗な肌をしているが、そこにはいくつものアザやみみず腫が浮かんでいた。剣の鍛練で出来た傷だ。

痛く苦しい鍛練ではあるが、あの時の事を思い出すと何でもなくなる。あの時 詠に辛辣な言葉を投げ付けられた時の事だ。

邪魔。その言葉を聞いて天幕を飛び出した月を、後を追いかけてきた清夜が慰める。あれは本心ではない、貴方のためを思い言ったのだ、と。それは月も分かっていた。

彼女がショックを受けたのは、詠に邪魔だと言われたからではない。詠に邪魔だと言わせた事に対してだった。自分が不甲斐ないばかりに、無二の親友に酷い事を言わせてしまった事がショックだった。

常に自分は誰かに甘えて生きていた。月は今までの事を思い返してみる。両親が存命だった頃は2人に、2人が亡くなった後は琥珀

に後見人として助力してもらった。傍らにはいつも詠と清夜がいて、智と武の両面から支えてもらっていた。自分1人では何も出来やしない。月は痛感させられた。

だから、せめて自分の身くらいは守れる様になろう。そうでなければ再び詠の前に立つ資格は無いと、月は1人心に決めるのだった。

小川の水に浸した手拭いを、赤く腫れた箇所こそつと当てる。熱を持っていたところに冷たい物が触れて気持ちいい。

「でも、やっぱり冷たすぎて水浴びは無理かな」

少し残念そうに呟いた。かなり汗をかいたし、土埃にまみれてもいる。水で洗い流してスッキリしたかったが、風邪でも引いたら大事だ。濡らした手拭いで体を拭くにとどめた。

季節は秋も終わりに近付いている。涼州より南に下ったとはいえ、山地で標高が高い。その分、冬は早く訪れそうだった。

手拭いを固く絞ると、月は持ってきた桶に水を汲んで来た道を戻った。

彼女が一刀の下へ戻ると、焚き火は赤々と燃え、その周りには夕飯が並べられていた。夕飯、といっても、今日の移動中に採った木の実や果物、携帯用の保存食が並んでいる程度だが。

2人で旅を始めてからは、野宿の時は大体こんな物だ。極まれに、野鳥や野うさぎも食べる事があったが、片手で簡単に数えられる程

度の回数しかない。それも、彼等が自分達で狩りをしたのではなく、道中出会った獵師から譲ってもらっただけだった。

月はともかく、一刀には決して満足出来る量ではない。それでも食べる物が無ければ我慢するより他にない。もつとも、保存食には数日分の余裕があるのだが、それを消費する訳にはいかなかった。

簡素な食事が終わる頃には、太陽は西の山影に沈んでいた。こうなると、後は寝るしなくなる。2人は少し離れた場所で丸くなっている麒麟へと近付くと、その腹を枕にする様に横たわる。そして、毛布代わりの外套に寄り添う様にしてくるまった。

最初から何の抵抗も無く、2人はこうして寝る様になった訳ではない。月は一刀への淡い思いを胸に秘めている事もあり、恥ずかしさと嬉しさが半々といった感じだった。むしろ、一刀の方が一緒に寝る事を頑なに拒んでいた。

月に対して、一刀は妹の様な感覚で接してきた。しかし、あくまで妹の様な感覚であり、本当の妹ではない。だいぶ幼い雰囲気を残しているものの、かなりの美少女だと一刀も感じている。そんな月と一緒に寝て、絶対に間違いが起こらない、とは自信を持って言えなかった。

もしそんな事になれば、詠や清夜からの信頼を裏切る事になる。何より、どの面下げて翠に会えと言うのか。そんな思いが彼の中にはあった。

だが、結局はこうして一緒に寝る事になっている。あまりの寒さに2人と1頭、肌を寄せ合わなければまともに寝る事も叶わなかったからだ。

最初のうちこそ、2人共緊張で中々寝付けずにいたが、3日もすると普通に眠れる様になった。というより、寝不足が過ぎたため、緊張に睡魔が勝つ様になった。そうして1度グッスリ眠ってしまったと慣れたのか、多少ドキドキはしても眠れないという事はなくなっていた。

今日も月はわずか数分でスヤスヤと寝息を立て始めている。安らかな寝顔を見ながら、一刀も眠りに落ちていった。

山の上からの眺望は確かに素晴らしいが、それにもすぐ慣れて、特別な感動も無くなってしまふ。だが、この日は今までにない景色が、麒麟の背に跨がる2人の目に飛び込んできた。

「ふう、あれが漢中の街か」

一刀は大きく息を吐きながら、しみじみといった風で呟いた。山頂より少し下った場所からは、山あい広がる盆地が見える。その盆地の真ん中にあるのが漢中の街。益州の入り口であり、一刀達の旅の中間地点だ。

漢中に着いたら、とりあえず宿を取って旅の疲れを癒そう。防寒具を揃えて、食料の補充もしないと。

そんな考えが一刀の頭の中を回る。路銀には結構余裕があった。

翠の下を離れる時に、一刀は麒麟を、月は予備の軍馬を1頭拝借した。路銀が心許なかった事から馬を売却し、秦嶺山脈に入る前に旅装を整えた。その時の残りが、まだ半分以上も残っていた。

あまり贅沢は出来ないしするつもりも無いが、それでも少しは休みたい。その思いは月も同じらしく、2人の表情は明らかに緩んでいる。そこに緊張感も欠片も見られない。

そんな中、麒麟だけが異変を察知した。急に足を止め、耳を真っ直ぐ立てて忙しく動かす。周囲を警戒する仕草だ。

一刀は麒麟の背からヒラリと降りる。その顔は先程までと違い、引き締まったものへと変わっている。一刀自身は異常を感じていないが、何も無しに麒麟がこんな動きをするとは思えない。辺りに目を配りながら、一刀はゆっくりと歩を進めた。

そうして10メートルほど前に出たところで、前方にある茂みの奥から木の枝が折れる様な音がいくつか聞こえた。と、次の瞬間、何か茂みから転がり出てくる。小さな悲鳴を背中に受けながら、一刀はとっさに太刀の柄へと手を伸ばす。一気に緊張が高まった。

わずかな間の後、転がり出てきた塊はやおら起き上がった。上体を起こし、左右に首を振っている。

出てきたのは人間だった。

それが分かると、安堵した月はホッと息を吐く。しかし、一刀は警戒を緩めない。柄から手を離してはいるが、いつでも動き出せる体勢のままだ。

相手は何者なのか。なぜ茂みから転がり出てきたのか。それらが判明し、自分達にとって害が無いと判断できるまで気は抜けない。

それから、一刀が気になっているのは相手の服だ。何カ所か切り裂かれた様に破けており、流血しているのが今の距離でもはつきりと分かる。木の枝を折りながら転がったと思われるから、多少の傷は負うだろう。しかし、それにしては傷が大きい感じがする。

キヨロキヨロと辺りを窺っていたその人物と一刀の目が合う。年の頃は一刀と同じか少し上くらい。赤い髪に意思の強そうな顔立ちの、まさに好青年と呼ぶのに相応しい雰囲気をもっている。

「駄目だ！ 逃げろ、お前達！」

目が合うなり、青年は大声で叫んだ。向こうに行け、と言わんばかりに大きく手を振っている。しかし、見ず知らずの相手からいきなり逃げろと言われても、素直に従う事は出来ない。面識があり、信用のおける人物であれば話は別だが、何の説明も無しでは判断も出来なかった。

すると、青年が出てきた位置よりさらに向こうの茂みがガサガサと揺れた。

「くそっ……、追い付かれた！」

音のした方を振り返った青年は、忌々しそうに呟くと懐から刃渡り30センチくらいの小刀を取り出した。その様子を一瞥し、一刀も茂みへと視線を移す。

そこから1つの物体が姿を現す。先程の青年の様に飛び出してく

るのではなく、あくまでゆつくりと。雄々しく、堂々と自らの姿を日の光に晒す。太い四肢で大地をつかみ、足音も立てずに歩く。全体的に黄色い毛皮で覆われているが、筋の様に走る黒い毛が見事な縞模様を作り出している。威嚇か警戒か、それともただ単に機嫌が悪いだけか、グルルルと低い唸り声が辺りに響く。

一刀は思わず肝を潰した。視線の先にいるのは、ライオンと並ぶ猛獣である虎だった。小さい頃、両親に連れていってもらった動物園で見たものと同じ姿形。だが、迫力は全然違う。金網が無いせいか、それとも野生のなせる業か。ともかく、一刀は虎という存在に飲まれかかっていた。

「何をしている。早く逃げろ！」

赤毛の青年が前に出ながら、振り返らずに声を掛けた。その言葉で一刀は我に返る。

「逃げろって、あんたはどうするんだ？」

「俺がこいつを仕留め損なったせいで、君達を巻き込む事になった。なら、君達が逃げるまでの時間稼ぎくらいはしてみせる」

彼を囷に残して逃げ出せば、助かる確率は確かに高いだろう。ただ、漢中への道は虎が塞いでしまっている。逃げるとすれば、今来た道を引き返す事になる。今日中に漢中に着くはずのものが、3日は余計にかかってしまう。無駄に時間を消費したくない。

それに、いくら親しくないとはいえ、人が虎に襲われるのを見過ごしたら寝覚めが悪い。月と目の前の青年を守り、今日中に漢中に到着する。両の思いを叶えるべく、一刀は覚悟を決めた。

コッソ、と小石が虎の顔に当たる。虎と赤毛の青年、両方の視線が小石の飛んできた方へと注がれる。もう一度、小石が虎の額に当たった。

「何をしている！？ 早く逃げろと言ったぞ！」

一刀が虎に向かって石を投げている光景を見て、青年は怒号した。

「悪いけど、それは聞けない。こっちは蜀への旅の途中なんだ。あまり時間が無いんだよ」

そう言いながら、一刀は虎へと数歩近付く。彼の心は虎を見た直後とは違い、自分でも驚くほどに落ち着いていた。

以前、蒲公英から虎殺しをやった、と自慢話を聞いていたのも原因だろう。その時の虎が、一刀の眼前にいる虎と比べてどうか、という事はもちろん分からない。それでも、ほぼ互角の腕である彼女が虎を狩った事実は、彼を十分に勇気付けた。

それに、もう一つ。いざ冷静になってみると、虎に対しての恐怖心はそれほどでもなかった。虎と戦った経験が無い事に対する不安感はある。だが、虎から受ける殺気の様なもの、それほど強くは感じていない。むしろ、翠や恋と訓練で相対した時の方がよほど恐怖心を感じる。足の震えを抑えるのでさえ一苦労だ。

『ていうか、虎より怖い女の子って……』

そんな事を考え、口許を緩めるくらいの余裕が生まれていた。

小石をぶつけられた虎は、そのターゲットを赤毛の青年から一刀へと切り替えた。一刀を視界の中心に捉え、円を描く様に距離を詰め始める。

虎がどんな動きで襲い掛かるのか、一刀にはその知識は無かった。しかし、ネコ科の動物である以上、猫やライオンと同じ様な動きをするだろう。ある程度まで距離を縮めたら飛び掛かり、前足で獲物を押さえ付けるはず。一刀はそう予測を立てた。

虎の体重は分からないが、自分より重いのは確かだろう。その体重で、しかも鋭い爪を使って押さえ込まれたら、脱出は困難だ。下手に防御に力を入れるより、一撃で決めるべきか。

足を肩幅よりも大きく開き、右足を前に出す。虎に対して半身の体勢になり、ぐっと腰を落とす。左手で鞘を返して刃を空に向ける。そのまま鯉口を切り、右手を鞘に添えた。

抜刀術。剣の師匠である祖父から直接教えてもらった事は無い。しかし、彼はよく精神統一に真剣を使い、居合い抜きを行っていた。それを小さい頃から、一番間近で見ってきた。そのイメージを元にした世界で修練を重ねてきた。

大丈夫だ、絶対出来る。一刀は自分に言い聞かせる様の中に繰り返した。

構えをとる一刀の背中側へと弧を描く様にしながら徐々に間合いを詰める虎。一刀はそんな虎に右足のつま先を向ける様に回転しながら、摺り足でじわじわと前が出る。緊張が辺りを支配し、風が木々を揺らす音だけがかすかに聞こえていた。

虎のまとう雰囲気が変わった。

来る。そう感じた瞬間、大気を震わす咆哮を上げながら、虎は後ろ足で跳躍。両前足を高々と掲げ一刀へと襲い掛かる。

普通の人間であれば咆哮に竦み上がり、あっけなく命を落としていただろう。だが、一刀は違う。虎が動くと同時に左足で大地を蹴り、右足を大きく前に踏み出す。右手を斜め前に振り上げる様になりながら、刀身を鞘の中で滑らせる。と同時に、一瞬でも早く太刀を解き放てる様、左手で鞘を後方に引く。

狙いは振り下ろされる虎の左前足。ただその一点をめがけ、刃を振るう。

白刃と虎爪が交差した。

その刹那、虎の足首から先が宙に舞う。ワントンポ遅れて足首があつた箇所から大量の血が吹き出す。まるで、思い切り蛇口を捻った水道の様な勢いだった。

踏み込んだ右足に左足を引き付けつつ、体の向きを90度回転させる。一刀の目の前には無防備な虎の脇腹が。振り抜いた太刀を一段で両手に持ち直し、

「てやああっ！」

気合いと共に、真っ直ぐに振り下ろす。虎の脇腹は見事一直線に裂け、そこからも激しく出血する。2、3歩よろめき、一刀の方へ眼球を向けたところで、虎はドタンと音を立てて倒れた。

一刀は大きく息を吐き出す。虎の胸は小さく上下しているが、もう起き上がる事は出来ないだろう。緊張を緩め、構えを解いた。

「すまないが、少し待っていてくれるか？」

一刀の返事も待たず、赤毛の青年は倒れている虎へと近付く。その傍らに立つと、先程から手にしたままの小刀を逆手に持ち変え、体重を乗せて虎の首筋に突き立てた。苦しげに繰り返していた浅い呼吸が止まった。

一刀は月に返り血を拭いてもらいながら、青年の動きを背中越しに見ている。と、引き抜いた小刀で、今度は腹を一気に引き裂いた。腹の中に手をつっ込んで内臓を引き摺り出す。腰から下げた革製の袋に、それらを選別しながら収めていく。最後に、多少肉を切り取って別の袋に入れると、青年は一刀の方へと引き返してくる。血まみれの姿に、月はかなり引いていた。

「助かったよ、ありがとう。すまないな、礼も言わずに」

虎の血が付着して真っ赤になってしまった顔で爽やかに笑う。月だけでなく、一刀もドン引きだ。

「俺の名は華佗。漢中で医者をしているんだ」

華佗といえばこの時代において一番の名医である。その華佗が、どうして虎に襲われていたのか。一刀は興味が湧いて尋ねてみた。

「ああ、虎の内臓は漢方薬の原料になるんだ。普段は腕のたつ武芸者に頼むんだが、急に入り用になってな。1人で山に入ったら、たまたま大きいのと出会ってしまった、という訳だ」

医者自ら虎狩りなんて、と、つい呆れてため息が出てしまった。しかし、華佗には気にした様子が無い。そのまま話を続けてくる。

「そういえば、蜀に行くと言っていたな。なら、今日は漢中で宿を取るんだろ？ だったら家で泊まっていた方がいい。……もちろん金は必要無い。お前は命の恩人だからな。さあ、行くぞ！」

華佗はまたもや一刀の返事を聞かずに歩き出す。このタイプには何を言っても無駄だ、と一刀は諦める。悪い人ではなさそうだし、厚意に甘えさせてもらう事にした。

漢中にある華佗の家の前では、数人が彼の帰りを待っていた。診察の邪魔をしては悪いと、一刀と月は荷物だけ置かせてもらい買い物へと街に出た。食料や衣類など、これからの旅に必要な物を買って回る。買い物を終えて華佗の家に戻った頃には、すでに空は暗くなり始めていた。

「すまなかつたな。俺が招いたのに何のもてなしもせず」

もうだいぶ前に患者は帰ったのか、ちょうど華佗が料理の乗った皿を運んでいるところだった。促されるまま席に着いて料理を待つ。

みてくれはよくなかったが、味は思いの外よかった。もつとも、何日もまともな食事をしていなかった、というプラス要素はあったが。

食事も終わって腹がふくれると、強烈な睡魔が2人を襲う。無理もない。野宿続きでしつかりとした睡眠は取れていないのだ。その上、慣れない剣術の稽古で月の疲労はピークに達しつつある。一刀にしても、虎との命のやり取りによってかなり精神をすり減らしていた。

2人揃ってあくびを必死に噛み殺している様子に、華佗は口許が緩むのを堪え切れなかった。

「ふふっ、今日はゆっくり休んでくれ。寝床も用意してある」

立ち上がった華佗に続き、一刀もテーブルに両手をついて立ち上がる。眠気と満腹感が体が重い。隣では月が船を漕いでいる。軽く肩を叩いて目を覚まさせると、足取りのおぼつかない月の手を引き、華佗の後に続いて部屋を出た。

通されたのは小ぢんまりとした部屋だった。客間だろうか。ベッドと机が1つずつあるだけの、生活感が全く感じられない部屋だ。

「この部屋を自由に使ってくれ」

それだけ言って立ち去ろうとする華佗を、一刀が後ろから呼び止める。

「わざわざ部屋を用意してもらってアレなんだけど、寝台が1つしかないんだけど、さ？」

部屋を用意してくれたのは一刀が頼んだ訳ではなく、華佗の厚意によるものだ。こんな事を言うのは正直気が引けた。だが、野宿な

らともかく、さすがに一緒の布団で寝る訳にはいかない。それを聞いた華佗は、何を言っているんだ、という風な真顔で返してくる。

「一緒に寝ればいいじゃないか。2人は夫婦なんだろう？」

「違う！」

かなり食い気味に、全力で否定する。背後から、月の恥ずかしそうな、へう、という声が聞こえた。

「何だ、違うのか？ 月は育ちが良さそうに見えたので、駆け落ちでもしているのかと思ったのだが」

真顔でしれつと言うところを見ると、どうやら他意は無いらしい。そもそも、華佗にこんな勘違いをさせた原因は一刀達の方にあつた。名前は名乗ったものの、詳しい素性を明かさない。姓と名を隠して真名だけを伝える少女。育ちの良さそうなその少女と、ある程度腕のたつ武芸者風の青年。許されない恋の果ての逃避行。そんな想像をさせるのには十分だった。

「違うって。俺達は、そう……、兄妹みたいなもんだ！」

その言葉に月は寂しそうな表情を浮かべるが、同意を求めるべく一刀が振り返った時には、はい、と笑顔で頷いた。

結局、別々の部屋をあてがってもらつた。久々にぐっすり寝られるな。そんな一刀の期待は叶わなかった。

暗い部屋でまぶたを閉じる。すぐに意識が眠りの底に落ちていく。

その先には、ぼつと浮かぶ翠の姿。はつとして目が覚めた。

今までは毎日を過ごすのに必死で、翠達の事を思い出す余裕など無かった。腹が満ち、暖かい布団で眠れる。精神的に落ち着いた事がきっかけだろう。

「翠……」

上半身を起こし、暗闇に彼女の名を呼ぶ。一刀にとって最も大事な女性の真名。

「翠……！」

もう一度、声に力を込めて。だが、当然返事は無い。

本当にこれでよかったのか。どんな事をしてでも彼女の傍に残るべきだったんじゃないのか。この戦が負け戦になるのなら、歴史を知っている自分がいれば、どこかでひっくり返せるかもしれない。

そもそも、俺が全てを話していれば歴史は変わったのかもしれない。あの時、皆が俺を信用して真名を預けてくれた時に全部話していれば。そうすれば、琥珀さんを引き止めた時の言葉の重みも変わっていたかもしれない。

もしもの話が一刀の頭をぐるぐると回る。いくら考えても答えは出ないし、何が変わる訳でもない。それが分かっているでもなお思い巡らすのは、やはり後悔の念が彼を苛むからだった。

いつの間にか流れていた涙を両の手のひらでぐしぐしと拭う。夜

風に当たってぐちゃぐちゃになった頭を冷やそうと、ベッドを下りる。廊下に出たところで、さつき夕飯をご馳走になった部屋から明かりが漏れている事に気付いた。何となく気になって中を覗くと、華佗が1人で酒を飲んでいた。

「……ん？ どうした、一刀。眠れないのか？ もしよければ、漢方を処方してやるぞ」

断ろうかと一瞬思ったが、一刀はお願いする事にした。華佗は盃をテーブルの上に置き、背後にある薬箆筒へと向かう。さつきまで華佗が座っていた椅子の正面に腰を下ろし、一刀は薬を待つ事にした。

「ところで、一刀は蜀の方へ行くんだったな。理由を聞かせてもらってもいいか？」

さっきの様に妙な勘繰りをされても困る。全部は話せないが、出来る範囲では伝えておこう。そう思った。

涼州で仕官していた事。そして、その関係の用向きで成都まで行かなくてはならないと伝える。ついでに、月は自分の同僚であるとも。

「しかし、成都は劉備に制圧されたと聞いたが。それでも行くのか？」

「ああ、用があるのは劉備だから」

そうか、と言いながら、華佗は処方した漢方と瓶から汲んだ水をテーブルの上に置く。粉末の薬を口に入れ水で一気に流し込む。一

刀が思っていたほど苦くはなかった。ありがとう、と言って立ち上がる。

「気にするな。お前から受けた恩は、この程度で返せるものではないしな」

律儀な奴だな。そう考えながら部屋を出ようとして、入り口で足を止める。その場で振り返り、華佗の顔を真っ直ぐに見詰めた。

「恩に感じてくれていているなら、1つ頼まれてくれないか？」

翌日、一刀と月は漢中を発った。その懐には、華佗お手製の成都までの地図があった。もちろん、現代日本で売っている様な地図ではない。分かれ道の目印や危険な場所、途中立ち寄れる村等が書き込まれているだけの、簡素な物だ。それでも、地元の人間に道を尋ねるだけだった漢中までの道程とは違い、そこから先の旅は非常にスムーズだった。

「どういう事だ！ そんな事、私は一言も聞かされていないぞ！」

「あまり大声を出されると、気付かれますよ。今の状況で他人が来たら困るのは、貴方の方では？」

そう言った男は嘲る様に目だけで笑った。というのも、彼は黒装束に全身を包み、目の部分しか表に出していないからだ。口にも布が巻かれているため、その声はくぐもってわずかに不明瞭だった。

「……どうすればいい」

黒装束の正面、少し離れた位置に座る人物は、感情を押し殺した低い声で尋ねる。

「何も変わりありません、今まで通りですよ。こちらからも、これまで以上の協力を約束します」

それだけ言うと、黒装束は闇に溶ける様に消える。その場に1人残った人物は、頭を抱えて机に突っ伏した。

第4章・渭水編・第6話〈漢中〉（後書き）

ということでした。

原作とは違い、この話の華佗は針1本で何でも治せる力はありません。もちろん、天才的な腕の医者ではありません。

次回は……、と言いたいところなのですが、まだ書いていません。今まで投稿時には、最低でも次の分は書ききっていたのですが、恐らく来週までに書き上がらないんじゃないかと。なので、今まで週1回の更新でやってきましたが、しばらく休止させていただきます。こうと思います。月末には再開出来るよう頑張りますので、楽しみにしてください。お待ちしておりますので、お待たいただければ幸いです。

第4章・涓水編・第7話「裏切り」(前書き)

どうも、お久しぶりです。何とか月末に間に合いました。ただ、
かかった時間と話のデキが比例していないのは申し訳ない限りです。

第4章・渭水編・第7話〈裏切り〉

河北から一部の兵を引き上げてきた夏侯淵と合流した曹操は後退。黄河に流れ込む渭水という川の、さらに支流を渡って陣を張った。

対する涼州連合軍は残された物資を自分達の物にしなから追撃。曹操軍と川を挟んで対陣する。

ここで連合軍の快進撃は止まる。問題なのは両軍の間に流れる川だった。

大体のところ膝辺りまで。深い場所でも成人男性の腰ぐらいの水深しかない。だが、この浅さが厄介なのである。もっと深ければ船で兵馬を対岸に渡す事も出来るが、この程度の水深では歩いて渡河するしかない。だが、歩兵にしる騎兵にしる、水の中を進めばどうしても足が鈍くなってしまふ。曹操軍はそこを狙って射掛けてくるだろう。連合軍は慎重に対応せざるを得なかった。

上流や下流に渡河を行える場所がないか探ってみるものの、そういった地点には曹操軍の見張りがついている。動きを察知されれば、別の場所で迎撃を受けるだけだった。

「しばらくは全軍待機。馬鎧が必要数揃い次第、曹操軍に突撃を仕掛けます」

軍議の席で鷹那が命令を出す。緒将が頷く光景を、詠は翠の後ろに控えたまま見ていた。

全体での軍議の前に、詠は翠や韓遂等中心人物と少人数での軍議

を行っていた。そこで出た結論が、今鷹那が言った馬鎧を使用する、というものである。

状況が芳しくないのは翠も分かっていた様で、さすがに、突撃だ、とは言わなかった。韓遂はというと、軍を2つに分けて許昌への急襲を提案した。しかし、この案は翠と詠に反対され採用されなかった。

同じ意見を示した2人だったが、その理由はかなり違っていた。曹操の首を挙げる以外に決着はない、と考えている翠。

対して詠は人材不足を理由に反対した。今の連合軍に、ある程度以上の大軍を率いる事が出来る者は翠と韓遂しかない。必然的にこの2人でそれぞれの部隊を指揮する事になる。だが、翠を諫める事が出来るのも、今の状況では韓遂だけ。この2人を離してしまうと、万が一の時に翠の暴走を止められなくなってしまう。

アイツがいてくれたら。詠はそんな事を思った。

しかし、馬鎧を用いるのにも問題がある。涼州の騎兵は軽騎兵が主で馬鎧を装備しない。そのため、十分な数を用意するには時間がかかる。詠の見立てでは、最短でも1ヶ月は必要だった。

これは兵法の基本に反する事になってしまいが、拙速を心掛けて全滅する訳にはいかない。敵の様子や周囲の地形を把握する事に努める。同時に、隙あらば仕掛けられる様に準備を怠らない。そうしつつ、馬鎧の完成を待つ他無い。詠はそんな風に考えていた。

こうして両軍がにらみ合いを始めてから数日後の軍議で、韓遂がおもむろに口を開いた。

「私の使っている間者が曹操軍の補給経路を突き止めてな。輜重隊を襲撃し、物資を奪い取ってはどうか？ 戦いたくてウズウズしている連中も多い。不満を解消する意味でも、悪い作戦ではないはずだ」

彼の言う通りだった。ここまで連勝で来ただけに、このまま一気に決めてしまえ、という雰囲気は兵達の間広がっていた。そこで停滞である。土気は下がり、なぜ攻撃しないのか、と上に対する不満も高まっている。このまま放っておけば、いさかいを起こしかねない。

翠は、いいのか、と目で詠に尋ねてくる。琥珀の死の時といい、情報源が明らかにされない事が気にはなる。それでも、ただ留まっているよりはマシ、と、詠は首肯した。

「申し訳ありません、華琳様。許昌からの輜重隊がまたしても襲撃され、物資を強奪されました」

曹操軍の陣中、軍議の席で夏侯淵が報告する。顎に手を当てたまましばらく黙っていた曹操は、

「風、貴方はどう思つかしら？」

夏侯淵と共に河北から戻った程立に問う。

「これで3回連続、見事にやられていますからねー。間者か、もしくは内通者がいると見て間違いないと、風は思つのですよ」

何だと、と叫び夏侯惇はいきり立つ。そんな姉を宥める夏侯淵を横目で見ながら、どうするべきか、曹操はさらに尋ねる。

「……ぐー」

「寝るな！」

ほんのわずかな時間目を離している隙に、程立はイビキをかいていた。思わず夏侯惇がツツコミを入れる。振るわれた夏侯惇の手が程立の頭を掠め、綺麗な金色の髪に乗っていた人形が吹き飛ばす。

「おおっ！ 宝慧ー」

飛んでいく人形の名を呼び、悲しそうにその手を伸ばす。宝慧と呼ばれた人形は天幕の布壁に当たってポトリと落ちた。それを一番近くにいた、同じく河北から戻った典韋が拾い、程立に手渡す。

「まったく、酷い目にあつたぜ」

「やっぱり、風の相方は稟ちゃんしかいませんねー」

程立は人形を頭に戻しながら、宝慧の分も声色を変えて言い分ける。

「で、どうするべきかしら？」

「特に何もする必要は無いかと。当面は河北からの物資だけで事

足りませんからー。むしろ泳がせておいて、不穩分子のあぶり出しに使った方がお得ではないでしょうか」

曹操の問いに答えると、どこにしまっていたのか、程立は飴を取り出してペロペロと舐め始める。これ以上何も言う事は無い、と言言している様に周囲には感じられた。

こういった奇行は目立つものの、曹操は程立を軍師として高く評価していた。のほほんとしているが、荀或とは違い私情や状況に流されない。大局的な見方をするのは荀或や郭嘉よりも上だろう。

今回、川岸に陣を張ったのも、程立の独断であった。曹操が夏侯淵と合流し、ここまで後退してきた時にはすでに陣は8割方完成していた。

また、会うなり程立は逸る曹操を宥めてもいる。この戦は時間を稼げば劣せずして勝てる。正面からの戦いに付き合ってやる必要は無い、と。

涼州連合軍の約3割を占める関中の豪族は涼州の者達と違い、死んだ馬騰に恩義がある訳ではない。ただ尻馬に乗っただけ。戦況が膠着すればすぐに揺らぐ様な、そんな脆弱な結束でしかないのだ。相手の攻め気をいなし、氣勢を挫いてから事を構えればよい。

程立は己の主に向かいそう進言し、曹操もまたそんな軍師の言葉を聞き入れたのだった。

輜重隊への襲撃は、しばらくの間は上手くいっていたものの、ある時を境に手痛い反撃を受ける様になる。今日も見事に迎撃され、これで3回続けて全滅に近い損害を出していた。

「元々、奴等から物資を奪う必要性も無かったんだ。これ以上は意味無いだろう」

翠は作戦の中止を指示する。こうまで厳しく警戒されては、成果を上げるのは期待出来ない。

次いで、鷹那に馬鎧の準備の進捗状況を確認する。

「申し訳ありません。当初の予定よりだいぶ遅れています。現在、予定の4割程度しか生産出来ていません」

その報告に翠は齒噛みした。川を挟んだ対岸に母の仇がいるというのに、手を出す事が出来ない。時間を無駄に浪費し、代わりに不満が積み重なっていく。思わず怒鳴りたくなる感情を抑え、生産を急がせる様に命令し、軍議は終了となった。

自分の天幕へと戻った韓遂は酒を用意させると、宵の口から飲み始めた。ブツブツと何事か不満気に呟きながら、早いペースで酒をあおる。そうして半ば酔いが回り始めた頃、暗がりから黒装束の男が姿を現した。

これでもう何度目か。最初の時の様に驚く事は無い。が、それは別の感情が韓遂の心を支配している。

「どういう事だ！ 前日も今回も、協力すると言っておきながらこの様だ！ まったく、貴様の情報などアテにならん！」

黒装束に怒りをぶつける。酔いのせいもあって、韓遂の声はかなり大きい。誰にも気取られない様に、と行った人払いを、自らフイにする勢いだ。

酒をグイとあおり口を湿らすと、韓遂はさらに文句を並べる。それに対し、黒装束は反論はおろか、身じろぎ1つせずに直立している。その様子が逆に気に障り、韓遂が盃を机に置いて立ち上がった時だった。

黒装束の頭がわずかに動いたかと思うと、そのまま首から上が胴から滑り落ちる。まるで空気の抜けたゴム毬の様に、地面で跳ねる事なく転がる。その上に首の無くなった胴体がゆっくりと倒れ、覆い被さった。

いきなりの事に、韓遂も言葉を失う。しかし、いつまでも呆然とはしていない。側に置いておいた剣を鞘から抜き放ち両手で構える。

「警戒しなくても大丈夫ですよ」

優しい口調ではあるが、そこに隙は感じられない。韓遂は辺りに忙しなく目を配る。だが、声を発した人物の姿は見えない。首を左右に振り、天幕の隅々にまで注意を向ける。

韓遂は思わず体を硬直させた。倒れた男の向こう側。先程まで誰もいなかったその場所に人影が見えたからだ。

「貴様、何者だ」

「私はただの使者です。我が主は……、この男を殺めたのが私だとすれば、自ずと答えは出るでしょう?」

声の質と体の線で女性らしいと分かる。

気配の消し方から見て、問者か暗殺者か。少なくとも、自ら名乗った使者だとは思えない。どうする、と韓遂は剣の切っ先をその女性に向けたまま思考した。

誰か兵を呼ぶべきか。人払いをしているとはいえ、大声で叫べば聞こえるはず。問題は、兵が駆け付けるまでの間、持たせられるかどうか、だ。

彼も自分の武にある程度の自信はある。それでも、目の前にいる女性と争うのは避けたい。得体の知れない不気味さが彼女にはあった。

そんな心の内を読んだかの様に、その女性は口を開く。

「安心してください。貴方を始末せよ、とは命令されていませんので。もっとも、騒がれた場合はその限りではありませんが」

抑揚の無い口調で淡々と語られる言葉に、韓遂はとりあえず従っておく。脅しの類いで無いのは間違いなかった。それに、彼女の正体は分からないが、使者だと名乗ったのだ。何らかの話があるに違いない。

「……一体、どんな用件でここまで来たのだ?」

相手に刃を向けたまま、警戒を解かずに尋ねる。それに答える事なく、女性は懐へと手を入れる。とっさに体を強張らせた韓遂に、彼女は嘲る様に薄く笑う。懐から出した手には書簡が握られていた。

書簡を受け取ると、韓遂は数歩下がってからそれを広げた。すぐにはそちらに目を落とさず、しばらく牽制する様に相手を睨む。しかし、まったく気にする様子はない。それでも使者に対して意識を割きつつ、書簡の内容に視線を移した。

途端に韓遂の眉間にシワが寄る。読み進めるにつれて、ありありと怒りの色が浮かぶ。

「ふ、ふざけるな！」

韓遂は叫ぶと同時に書簡を叩きつけた。だが、その書簡を届けた使者は動じた様子を見せない。無表情のまま、転がっている首を軽く蹴る。

「彼はいい人でした。死ぬ前に、知っている事を全て、私に教えてくれたんですから」

足下へ転がってきた男の顔を見て、韓遂は思わず声をあげそうになる。さっきは暗がり立っていた事もあつて気付かなかつたが、男の両目がくり抜かれているからだ。さらには、歯も数本しか残っていない。恐らくは凄まじい拷問を受け、死を得る代わりに知っている事を吐いたのだろう。韓遂は背筋が寒くなった。

「貴方がこちらに従っていただけなのであれば、仕方ありません。無理強いはするな、との命ですから。……ところで私、案外口

が軽いんですよ？　今回知った事も、どこかで漏らしてしまうかも知れませんが……」

初めて女性らしいしなを見せながら、使者は韓遂に背中を向けた。

「ま、待て！　あれは、私も聞かされていなかった事だ！」

その背中に向かってすすがる様に叫ぶ。

「それは私ではなく、馬超殿に言われてはどうですか？　それを信じるかどうかは、伯父である貴方自身が一番よく分かっているでしょうが」

結果は言われなくても見えている。聞く耳を持つてくれるかどうか、という問題がまずある。仮に耳を傾けてくれたとしても、自分の事を許してくれはしまい。この事を知られる訳にはいかないのだ。

言葉に詰まり俯く韓遂に、その女性は書簡を拾い上げて手渡す。

「ここにも書いてありますが、従っていただけなのであればこれまでの事は不問に処し、天水郡の太守の任は保証します。上手くいけば、それ以上の役職に就ける事も考える、と我が主は申しております。逆らって自分の姪に殺されるか、従って更なる地位を手に入れるか。……明日まで待ちましょう。では、色好い返事が頂ける事を期待していますよ」

女性の姿は闇の中に溶ける様に消えた。入れ代わるように様にやって来た兵士が天幕の外から声を掛ける。大声が聞こえたので不信に思ったらしい。

韓遂は書簡を隠すと中に入る様に伝える。天幕内に足を1歩踏み入れたところで兵の足は止まった。

「か、韓遂様。これは……？」

黒装束に身を包んだ死体が転がっているのだ。兵士が驚くのも無理はない。

「どこぞから忍び込んだ間者を始末しただけだ。恐らくは、曹操の放った者だろうがな。片付けておけ」

韓遂は身を竦ませている兵に向かい命令する。若干毒気を抜かれた様な感じで返事をし、その兵は仲間を呼びに天幕から出ていく。それを確認してから、韓遂は書簡を隠した木箱の方をじっと見つめた。

その数日前、新たな漢の都である許昌。その街に最近建てられたばかりの宮殿内は激しい喧騒に包まれていた。男も女も関係なく怒号が飛び交う。何か固い物で殴打する音とそれに続く悲鳴。曹操軍の兵士達は、次々と宮殿内にいる者を取り押さえしていく。

皇帝の暮らす宮殿、という事で刃物を使う事はない。だが、抵抗する者には容赦なく鉄鞭が振るわれている。肉が裂け、血を吹き出し、気を失いそうになる程の痛みに絶叫する。そんな光景に、女子供は血の気を失い大人しくなる。

曹操軍は闇雲に宮中の人間を襲っている訳ではない。そのほとんどは献帝の血縁者、外戚である。

「貴様ら、どういっつもりだ！ 神聖なる宮中でこの暴挙、許される事ではないぞ！」

後ろ手に縛られ、膝を床に着けさせられた状態で、外戚の1人が声高に兵達の無礼を叫ぶ。が、次の瞬間、背中を強かに鉄鞭で殴られ、彼は苦悶の声を上げた。

「どういっつもり、ですって？ あんた、随分ふざけた事を言ってくれるわね？」

兵達の間から少女が姿を現した。周囲の兵よりも2回りは小さい身長に、猫耳の様な変わった形の頭巾。曹操軍軍師、荀彧だった。彼女は汚物でも見る様な瞳で外戚を見下ろしている。

「丞相であらせられる曹操様の殺害計画、私達に漏れていないとも思ってたんの？ それに、別件でも容疑があるのよ。あんた達みたいなゴミ以下の連中が、本当になめた真似してくれたじゃない」

吐き捨てる様に言うと、傍にいた女性兵士に向かって連行する様に伝える。

こうして、かつて琥珀が危惧した通り、曹操暗殺計画は事を成す前に露見し、関係者は全て捕らえられたのであった。

「くそっ……!!」

寝台の上で上体だけ起こし、翠は呟やく。

「何で、今さらあいつの夢なんか……」

ここ数日、彼女は似た様な夢を見ていた。出てくるのは決まって一刀で、彼が何事が叫んでいる。しかし、その声は翠の耳に届かない。

今日もそうだった。必死に叫んでいるのは分かる。だが、やはり彼の声は掻き消されてしまう。それでも彼の悲痛な叫びに、翠は心を揺さぶられた。

「くそっ……!!」

自分の頬が濡れている事に気付き、もう一度呟く。

翠にとって何より腹立たしいのは、一刀が自分の夢に出てきた事ではない。夢の中の自分が一刀の姿を見ただけで喜んでいる事が。声も聞こえないのに、何かを伝えようとするとその表情だけで自分を思ってくれていると感じ、嬉しくなる事が。彼女には腹立たしかった。

あいつはあたしと母様を裏切った。そう割り切ったはずなのに。

未だ心のどこかに一刀の存在が強く残っていると思いきらされ、自分自身が情けなくなってしまう。

だが、いつまでも感傷に浸っている暇は無い。曹操軍と川を挟んで対陣し、すでに1ヶ月近くが経過している。着々と兵力を増強する曹操軍に対し、涼州連合軍の士気は目に見えて低下していた。敵を前にしながら戦わないその姿勢に、不満も少しずつ噴出し始めている。一部では、兵士のいさかいすらも起こっている。兵力では大きく上回っているものの、追い込まれているのは涼州連合軍の方だった。

気合いを入れるべく、両手で勢いよく自分の頬を叩く。そのまま朝の冷たい空気を吸おうと天幕から出た翠は自分の目を疑った。辺り一面真っ白で、伸ばした手の指先すら霞む。夢の続きを見ているのか、と一瞬錯覚する。それほどまでに深い霧が辺りに立ち込めていた。

「これだ！」

何かを閃いた翠は、身支度も整えずに真っ白い闇の中を慎重に、早足で歩き出した。

翠が訪れたのは鷹那の天幕だった。すでに起床していた鷹那は、髪をとかして普段通りの服に着替えている。対して翠は、

「どうしたのですか、姫？ その様な格好で」

と、鷹那が軽く驚いてしまう様な、完全に寝て起きたままの格好だった。

普段、ポニーテールに縛っていても腰まである栗色の髪は、まと

めていない今の状態だと地面に着きそうになるくらい長い。寝巻きの裾もこれまた長く、こちらは完全に引きずってしまっている。寝相が悪いのか、胸元も大きくはだけたままである。

自分の姿に気付いた翠は、慌てて胸元を整える。

「と、とにかく、すぐに皆を起こしてあたしの天幕に集めさせる！」

いつもはがさつだが、こういうところは非常に女らしい。恥ずかしさを誤魔化すために叫ぶその姿に、鷹那は頬が緩みそうになるのを堪えながら、はい、と短く返事を返した。

翠が辺りに人影が無いのを確認して天幕の外に出る。鷹那も続いて天幕から出ると、そこはやはり真っ白い世界。翠の姿はすでに霧の向こうに霞んでいる。

そういう事、ですか。臆気に見える翠の背中を見ながら、彼女がどうしてこんな早朝から訪れてきたのか、合点がいった気がした。

蒲公英や韓遂らに声をかけてから翠の天幕に向かう。着いた時には、翠はいつもの服に着替えており、髪もすっかりまとめられていた。

朝からシャキツとしている鷹那や詠、清夜と比べ、蒲公英と霞はまだ少し眠そうにしている。そんな2人に、翠は咎める様な視線を向ける。日頃、自分が1番寝起きが悪いという事実は、彼女の頭の中には微塵も残っていない。その事に対し文句の1つも言いたい蒲公英であったが、何の用も無しに呼び出すはずはない、と黙って翠の話待つ事にする。

「この霧を利用して、奇襲をかけるぞ！」

自信満々に翠は言い放つ。

確かにこれだけ霧が深ければ、渡河をしても対岸から見える事はないだろう。もちろん音は消せないが、音だけで正確な位置を把握するのは不可能だ。少なくとも、矢の命中率をかなり落とす事は出来るだろう。他方向から渡河すれば、それだけ成功する確率も上がるはずだ。

だが、この策には大きな問題がある。

霧が出ているのは朝の短い間だけ。それも毎日ではない。朝起きて、霧の有無を確認してから出陣の準備に取り掛かったのでは遅すぎる。かといって、毎日やみくもに出陣準備をして夜明けを迎える訳にもいかない。

韓遂がその事を指摘すると、翠は言葉を詰まらせた。

「霧が出るかどうかなら、かなりの確率で分かるわよ」

そう横から口を挟んだのは詠であった。

「まあ、何日も先の事は分からないけど、夜には次の日の朝に霧が出るかどうか、大体予想がつくわ」

ここで発生しているのは川霧である。寒い冬の朝、陸の上にある冷たい空気と、川の上にある暖かい空気とが混じりあうと霧が出る。そんな原理はもちろん知らないが、書物と経験則から、詠はよく晴

れた夜の翌朝には霧が出やすいと理解していた。

なら、と翠は意気込む。が、今度はその詠が待ったをかけた。

霧に紛れての奇襲。その考えは悪くない。ただ、相手からこちらが見えないという事は、こちらからも相手の動きが見えないという事だ。恐らくは奇襲の可能性を考え、何らかの対策をとってくるはず。

そして、一刀から教えてもらった事の中に、今回の作戦に引っかけりそうなものが1つある。1晩で城壁を造るといふ、氷城の計の話だ。

土を高く盛り、そこに水を撒いておく。すると、朝の冷気で水が凍り、ただ土を盛っただけの山が固い城壁に変わる、というのである。巨大弩砲でも使えば簡単に破壊出来るだろうが、騎兵の足を止めるには十分すぎる。

そのため、詠は翠の考えに諸手を挙げて賛成は出来ずにいた。しかし、馬鎧を必要数揃えられる予定が全く立たない以上、代案は必要であり、この霧を利用する考えは悪くない。詠はしばしの間思案した後、自分の考えを口に出した。

霧を利用しての奇襲を決めてから3日。その間、早朝に霧が立ち込める事はなく、両軍共に静かな時を過ごしていた。

「明日は霧が出るわね」

この日の夜、雲一つ無い星空を見上げながら詠は確信した。もちろん、彼女は放射冷却という言葉も原理も知らないが、よく晴れた夜の翌朝は冷え込みが強い事は知っている。そして、冷え込みが強いほど霧が出やすい事も、だ。

詠の報告を聞いた翠は、作戦を実行に移す様に指示を出す。明朝出陣する部隊には夜半まで仮眠を取らせ、日の出までに準備を整えさせる。朝が近くなり、予想通りに霧が出始めた。太陽が姿を現した時には、すっかり対岸は見えなくなっていた。

霧の中で銅鑼が激しく打ち鳴らされる。わずかに遅れて鬨の聲が上がり、涼州連合軍の兵達は冷たい川へと突入した。

銅鑼の音と鬨の聲、そして水を跳ねる音が霧の中から聞こえ、曹操軍は慌てて迎撃に入る。何も見えない霧の向こうに音だけを頼りに次々と矢を放つ。だが、方向も距離も、正確な情報が何一つ無いこの状況は、ただ当てずっぽうに射っているのと変わらない。矢は敵兵に当たる事なく、全て川の中へと落ちていった。

涼州連合軍が全く被害を受けていないのには理由がある。なぜなら、彼等は渡河を試みていないからだ。ただ単に銅鑼を鳴らして鬨の声を上げる。川岸で水を踏み、バシャバシャと水音を立てる。川を強引に渡ろうとしている、と思わせるための策であった。

ならば、なぜこんな事をするのか。それは、本命が別にあるから。その存在を曹操軍に気取られない様にするためだ。

上流と下流に兵を回し、霧の中を慎重に渡河させる。対岸に渡っ

た後は適当な場所に兵を伏せ、待機。馬鎧を装備した鉄騎兵を突撃させ、曹操軍の意識を正面に集中させたところで、伏せておいた兵で左右から挟撃する。これが詠の作戦であった。

霧が晴れる。曹操軍の陣に、警戒していた氷城の様な物は確認出来ない。なら突撃してしまえばよかった、と言われればそうではない。それは結果論に過ぎず、最悪の事態を想定するのは軍師として当然だからだ。それに、霧にしる夜の闇にしる、視界の悪い状況での戦闘は同士討ちの危険性が高まる。その危険を犯してまで乱戦に持ち込みたくはなかった。

「どんな様子だ、詠？」

詠が対岸に布陣する曹操軍の動向を観察していると、不意に背後から声を掛けられた。声の主は韓遂である。

「今のところは順調です。翠や霞達も無事に対岸へ移った、と報告を受けていますし」

詠の返事に、そうか、とだけ返し、韓遂も同様に曹操軍の陣へと向き直る。その顔を、詠は横目で窺う。

不安があるとするれば、この韓遂だけだった。一刀が語っていた離間の計を、果たして本当に仕掛けてくるのかどうか。表立って動けないながらも、詠は韓遂の周囲を監視している。その限りでは、怪しい動きは見られていなかった。

太陽が中天に到達する。作戦の開始時刻だ。用意できた馬鎧を装備したおよそ一万の鉄騎兵が、対岸の曹操軍を威圧する様に並ぶ。

いくら馬鎧の矢に対する防御力が高いとはいえ、近距離から射られれば防ぐ事は不可能だ。それが可能であれば、わざわざ別動隊を対岸に渡す様な真似はしない。この部隊には敵陣に突入した後、曹操軍の意識を引き付けるために、しばらくは単独で暴れてもらう必要がある。そのため、どれ程の数が対岸に到達出来るか。それが作戦の成否を握る重要な鍵であった。

鉄騎兵の指揮を執る清夜が部下の前に進み出る。士気を上げるべく、号令をかけようとしたまさにその時。伝令兵が1人、息を切らして駆け込んできた。

「ほ、報告します！ 上流に伏せていた馬超様の部隊が、敵兵に急襲されました！」

「なっ……!?!」

詠は思わず声を失う。翠の傍には鷹那が副官としてついている。見つかる様な下手な真似をするとは思えない。ならば、情報が漏れたのか。

その答えを出すより早く、別の伝令兵が飛び込んでくる。

「報告します！ 張遼將軍が曹操軍の急襲を受け、部隊は離散！ 張遼、馬岱両將軍のお姿も見付けられません！」

2つの別動隊が同時に見付かるなどあり得ない。ましてや、こちらが仕掛ける直前に、最悪と言っていい時機に攻撃を受けるのは、偶然とは考えにくい。

「大変な事になったな」

詠の横に立つ韓遂が、抑揚の無い平坦な声で言う。とてもではないが、狼狽している様子は微塵も感じられない。

「まさか、韓遂様……」

そう口に出しかけた時、周囲から悲鳴と剣撃の音が上がった。

馬鎧を装備した兵が、そうでない兵達によって次々討たれていく。突入部隊である鉄騎兵は全て马超軍の兵である。精強を誇る彼等が、突然味方から斬りかかれなすすべもなく倒れていく。

詠は韓遂へと視線を戻した。

「あんた、ボク達を裏切ったわね!？」

刺す様な視線と共にぶつけられた問いに韓遂は答ええない。代わりに、詠の左腕を強くつかむ。痛みで詠の顔が歪むが、韓遂はお構いなしにその腕を引いた。

力で男性に勝てる訳がない。引かれるまま、体が数歩前に出てしまふ。振りほどこうと試みるが、韓遂の握力が強まるだけだ。

『こいつ、ボクの事をどうするつもりなの？ 普通、すぐに殺さ

れてもおかしくないのに……。翠への人質？」

詠はそこまでで考えるのをやめた。韓遂の真意を探るより、この状況を何とかする方が先だ。

自由になる右手でエプロンドレスのポケットから護身用の小刀を取り出し、躊躇なく切りつける。とっさに韓遂が手を引いたため、腕を掠めて浅く切るだけにとどまったが、とにかく離れる事は出来た。韓遂を正面に見据えたまま、じりじりと後退る。

詠も月と同じで、武の心得は皆無だ。両手で小刀を包む様に構えているその姿は、思い切り腰が引けている。とてもではないが、満身に小刀を振るえる様には見えない。

韓遂は切られた傷口を一瞥する。大した事がないと分かると、詠へと再び視線を向けた。

「……曹操は、自分をここまで出し抜いた相手に興味があるらしい。詠、私と一緒に来てもらうぞ」

「ふざけんな！ 誰が、はいそうですか、って付いていくと思っ
てんのよ！」

怒鳴りながら小刀を振り回す。しかし、闇雲に振り回しているだけで、韓遂には掠りもしない。

「仕方がない。なら、少し痛い目を見てもらう事にしよう」

韓遂は腰に佩いている剣を抜き、切っ先を詠へと向けた。それだけで彼女の体は竦む。先程まで激しく振り回されていた小刀も、今

は小刻みに震えているだけだ。

軍師である詠にとって戦場は慣れたものだ。命のやり取りをしている場面はいくらでも目にしてきている。だが、普段は後方から全体に目を配る彼女には、こうして剣を向けられる経験が今まで無かった。

恐怖で足が自然と後ろへ動いてしまう詠。対して韓遂は悠然と距離を詰める。口角を歪めると、韓遂は剣を大きく振りかぶった。

逃げないと。そう思っても体が動かない。まるで根っ子が生えてしまったかの様に、その足は固まってしまっている。

韓遂の剣が振り下ろされる。その直前、詠の体が宙に浮き、後方へと飛んだ。

「……っ！ し、清夜!？」

背後には清夜が立っていた。彼女が詠の襟首をつかみ、強引に後ろへと引いたのだ。軽く首が絞まったが、切られるよりは余程ましだ。

清夜は詠の無事を確認すると、自分の背中に隠す様に体を入れる。清夜の大きな背中に詠の緊張は一気に緩み、不覚にもその場にへたりこんでしまう。カタカタと小刻みに震える体を抑えられない。

行きなり自分の髪を触られる感覚を覚え、詠は顔を上げた。清夜が後ろ手に頭を撫でてくれている。一瞬で顔が熱くなり、照れ隠しにバシッと手を払う。立ち上がって文句を言おうとする姿に清夜はかすかに笑みを見せる。

その後、清夜は韓遂へと向き直り、戦斧、金剛爆斧を突き付ける。

「どういつつもりだ、韓遂殿。詠に対する所業、説明してもらえるか？」

清夜に睨み付けられ、韓遂は口ごもった。真実を伝えればどうなるか、想像に難くない。間違いなく、戦斧を振り下ろされるだろう。彼も武にはある程度の自信を持っているが、清夜に敵わないのは分かり切っている。

「言えないか。この状況、どうやら貴様が絡んでいる様だな。…ならば、ここで貴様を討ってくれる！」

清夜は両手で戦斧を振りかぶる。今しがたと状況は逆転。今度は韓遂がその顔に恐怖の色を浮かべる事となった。

そんな韓遂めがけ、清夜の腕から剛撃が繰り出される。しかし、その一撃も目標を捉える事はなかった。清夜と韓遂、2人の間に割り込んだ女性に、身の丈程もある大剣で戦斧を受け止められたためだ。

「しや、孝儒！」

「驥疾様、お下がりください！」

孝儒と呼ばれた女性に言われるまま、韓遂は数歩下がる。この様子に、清夜は舌打ちを1つ。そして、閻行め、と口の中で呟く。

今韓遂を守った女性は姓を閻、名を行、字を彦明という。韓遂に

とっては懐刀、切り札といっても過言ではない将である。というのも、まだ一刀が現れる前の事だが、一騎討ちで翠を打ち負かした程の腕を持っているからだ。

肩の辺りで切り揃えられた灰がかつた黒髪。少し波打つその髪を、首の後ろで1つに束ねている。そんな柔らかい雰囲気とは裏腹に、彼女の瞳は細く鋭い。まるで獲物を狙う猛獣の様に鋭い眼光で清夜を睨んでいる。

「……詠、この場は退くぞ」

清夜は詠にのみ聞こえる程度の小声で囁く。閻行と何度か手合わせをした経験のある清夜には、閻行の強さは十分に分かっている。

勝てない相手ではない。ただし、お互いに五分の状態であれば、だ。今の清夜は詠を守る必要がある。さらに、周囲にいる兵が敵なのか、それとも味方なのかもハッキリしていない。こんな状況では、逆立ちしても勝ち目はなかった。

「……それしか、手はないわね」

詠も反対するつもりはない。このまま無理にとどまったところで、曹操軍が川を渡ってくるだけだ。そうなれば全滅は免れない。ここは兵力を少しでも温存するためにも、撤退する以外の道はなかった。

詠の返事を聞くと、清夜は戦斧を頭上で回し始める。

「はああっ！」

気合い一閃、ゴルフクラブの様に戦斧を振るい大地を抉る。砂利

混じりの土が闇行に向かって無数に飛ぶ。狙い通りに闇行が怯んだ隙に馬へと跨がり、さらに詠を引っ張り上げた。

「者共！ 韓遂は我等を裏切った！ 遺憾ではあるがここは撤退し、再起を図る！ 我に続けーっ！」

馬上で清夜が叫ぶと、鬨の声が上がる。恐慌状態に陥っていた馬超軍の兵達は何とか落ち着きを取り戻し、駆け出した清夜の後に続く。一点突破で囲いを破り、彼女達は遁走を始めた。

「追え、孝儒！ 華雄は殺しても構わん。だが、詠は何としても捕らえろ！」

韓遂の命令に従い、闇行は追撃をかける。

馬鎧を装備している分、馬超軍の足は遅い。最後尾から次々討ち取られていく。しかし、清夜と詠を乗せた馬は混乱の中を駆け抜け、2人は命辛々逃げ切る事が叶った。

第4章・涓水編・第7話〈裏切り〉（後書き）

正直、負け戦は勝ち戦を書くより全然難しいです。詠が韓遂の動きに気付かない事など、ご都合主義と言われればそれまでの様な気がして……。

話の中で出てきた霧の説明についてですが、ざっと調べただけですので、間違いがあるかもしれません。

次回もまだ書き上がっていないため、しばらくは隔週で投稿していこうと思います。ストックが多少たまったら週一に戻すという事で、よろしくお願いします。間に合うにしろそうでないにしろ、活動報告の方で連絡はさせていただきます。

今話から出てきた閻行は、不識庵・裏さまからアイデアを頂きました。

第4章 - 渭水編・第8話（代償）

霧に紛れて対岸へと渡河した馬超隊は前もって決めていた通り、小さな森へと兵を伏せた。そのまま息を潜め、作戦の決行を待つ。

予期せぬ事態が起こったのは、太陽が中天に差し掛かる直前。さあこれから、と意気込んだ時の事だ。

「か、火事だーっ！」

兵の1人が大声で絶叫する。兵達は一瞬でざわめきたつ。翠と鷹那も声のした方へと顔を向ける。

2人の位置から確認は出来ない。だが、次の瞬間、馬超隊の周囲に炎が走る。まるで大蛇が地を這うかの様に木々の間を抜け、縦横無尽に広がっていく。あっという間に炎に包まれてしまった。

「なっ、何だ！？ どうなってるんだ！？」

「これだけ早く火が回るところを見ると、油を撒かれている様です。どうやら、嵌められましたね」

あわてふためく翠に対し、鷹那はいつもの様に冷静だ。その落ち着いた態度に中てられてか、翠も冷静さを取り戻す。

「……とにかく、この状況から抜け出すのが第一、か」

周囲に目を遣る。炎の囲いはまだ完成していない。今なら突破出来る。恐らくは、その先で曹操軍が待ち伏せているだろうが、この

ままた炎に巻かれるのを待つよりはよっぽどマシだ。

「皆、聞けっ！ 悔しいが、あたし達は曹操の罠にかかった。だが、まだ終わりじゃない。この場を脱出し、体勢を立て直せば十分勝機はある！」

翠が馬上から檄を飛ばすと、兵達も喊声を返す。

まだだ、まだやれる。

翠の瞳に諦めの色はない。馬首を返すと、自ら先頭に立って木々の間へと飛び込む。細い枝や蔓が身体中を打つが、速度を落とさず一気に森を駆け抜けた。

案の定、森の外には曹操軍が待ち伏せていた。降り注ぐ矢の雨にも臆する事なく、翠はさらに速度を上げ、曹操軍へと突っ込でいった。

一方、下流に兵を伏せていた霞達もまた、曹操軍に急襲されていた。やはり火計を受け、混乱したところを攻め込まれて部隊は瓦解。蒲公英と霞は決死の覚悟で囲いを破り、何とか追撃をかわして川を渡った。

「……どうしよう、霞姉様？」

ようやく落ち着いて会話が出来る状況になったところで、蒲公英が息を整えながら尋ねる。尋ねられた側の霞も呼吸が荒い。2人共、顔といい体といい、多くの傷を負っていた。

また、2人に従う兵もそうだ。七千人いた張遼隊の兵も、共に脱出出来たのは百人にも満たない。その全てが大なり小なり傷を受けている。無傷で済んだ者は1人もいない有り様だ。

「あの火の回り様……、恐らくやけど、油が撒かれとつたんやろな。ちゅー事は、や。ウチらがあそこに兵を伏せんのを知つとつた事んなる」

「たんぼぼ達の作戦が漏れたの？」

「ああ。せやけど、今回の作戦、詳細まで知つとるんはウチらを含めても両の指で数えられる程度や。普通、外に漏れるとは考えられへん」

そこで霞の言わんとしている事に気が付いたのだろう。蒲公英はハツとした様な表情になる。

「まさか、叔父様が……？」

「一刀の言うとつた通り、いや、それ以上に悪い事なつとるみたいやな。もつとも、ウチの考えが正しければ、やけど」

そう言ったものの、霞には確信めいたものがあるらしい。苦虫を噛み潰した様な顔をしている。その表情に、蒲公英の心には不安が首をもたげた。

「お姉様や本陣の詠ちゃん、大丈夫なのかな……」

「翠のそこには鷹那があるし、こんくらいの事は感付くはずや。」

詠の方もお清がおるし、な。とにかく、こっちはこっちで逃げて、後で合流を果たすしかないやろ」

そこへ、斥候に出ていた兵が戻ってくる。比較的傷が少ない者に本陣の様子を探りにいかせていたのだ。兵からの報告を聞き、やっぱりか、と霞は呟いた。

報告によれば、『馬』と『華』の旗は下ろされ、馬鎧を装備した鉄騎兵の死体が転がっているらしい。霞の推察した通りの事が起きていると考えて、間違いはない状況である。

2人に出来るのは、ともかくこの場を離れ、仲間の無事を信じる事だけだった。

「よくやつてくれたわ、韓遂」

韓遂は今、曹操の眼前で膝をつき、頭を下げていた。その脇に並ぶ様にして、閻行も同様に膝をついている。

詠と清夜を追撃した閻行だったが、捕らえる事も討つ事も叶わなかった。彼女が韓遂の下に戻るとすぐ、曹操から呼び出しがかかった。閻行は韓遂の副官として、実際には韓遂の護衛として、曹操の前に出ていた。

「まあ、連合軍の軍師を捕らえそこなった件については、こちらも馬超や張遼を討ち漏らしたのだし、咎めない事におきましょ

う。涼州、関中勢のほとんどを引き入れた功もあるし」

「はっ、寛大な処置、痛み入ります」

さらに深く頭を下げる韓遂を、曹操は玉座の上から見下ろしている。薄い笑みの浮かぶその顔には、戦勝の喜びも高揚した様子も見えない。ただ、かすかに笑っているだけ。その目は何かつまらなそうに韓遂を見ていた。

「で、いったい誰なの？ 私をここまで追い詰めてくれたのは。涼州にそんな切れ者がいるなんて、聞いた事がないのだけれど」

以前は手に入れたいと欲していた霞にも最早興味はない。今はただ、自分を散々出し抜いてくれた相手の事を知りたいだけだ。

出来る事ならこの場で顔を拝みたかったのだが、いないのであれば仕方がない。せめて話だけでも。そんな思いだった。

「はい、その者の姓は賈、名は駆、字は文和といいます」

「賈文和……？ どこかで聞いた名ね」

かすかに聞き覚えのある名前に、曹操と夏侯淵は揃って眉根を寄せる。同席している夏侯惇は何も引つ掛からなかったらしく、2人の様子を不思議そうに見ている。程立はすでに感付いたのか、普段通りのボーツとした雰囲気のまま表情を変えてはいない。

「聞いた覚えがあるのは当然です。董卓軍の元軍師ですから」

韓遂の言葉を聞いて、曹操は思い出した。反董卓連合軍で洛陽を

攻めた時、董卓と共に首級を差し出された軍師がいた事を。

「……なるほど。身代わりを立て、2人は馬騰に匿われていた、という訳ね」

たった一言聞いてこの答えにまで辿り着けたのには理由がある。曹操も同じ様な事をやっていたからだ。

黄巾党の首領であった張角、張宝、張梁の張三姉妹。表向きには、彼女達は曹操に討ち取られた事になっている。だが、実際には曹操に生け捕りにされていた。曹操は3人に利用価値を見出していたのだ。

今現在、張三姉妹は曹操の領内で募兵や兵の士気の上、慰問活動に勤しんでいた。

「まあ、賈馱と董卓が生きていたのには少し驚いたけれど、それほどでもないわ。貴方の見立てでは、この先馬超はどう動くかしら。涼州に戻り徹底抗戦を貫くのか、それとも……」

「確かに、西涼にはまだ兵が残っていますが、賈馱等がそれを認めるとも思えません。ですが、他に行く当てもないですから……。どこかに潜伏するか、可能性があるとするば、羌族に保護を求めるか」

韓遂には、一刀が益州に向かった事は伝えられていなかった。

「そういえば、馬騰は羌族との混血だったわね。羌族の中に逃げ込まれると厄介だわ……」

顎に手を当て、考える様にしながら呟く。

羌族の支配地域は涼州よりさらに西になる。とてもではないが、遠征を行う余裕はない。かといって、羌族の助力を得て攻め込まれば大変な被害を被る事になるだろう。羌族の中に逃げ込まれるより先に捕らえる。それが最善の手だった。

「秋蘭、風、河北に続いてで悪いのだけれど、馬超の追撃と涼州の制圧を任せるわ」

はっ、と短く返事をする夏侯淵。一方の程立は、

「相変わらず、人使いが荒れえな」

「こらこら、宝慧。華琳様にそんな事を言つては駄目なのですよ」

などと言っているが、拒否するつもりはない様子だった。

「韓遂、早速だけれど貴方にも私のために働いてもらつわ。2人に従い、馬超追撃の任に就きなさい」

自分に降つた者に、いきなり部隊を任せる真似をするほど曹操は愚かではないし、他人を信用してもいない。とりあえずは、夏侯淵の参謀的な立場として同行させるつもりでいた。それに、血縁者を討たせる事で自分への忠義を見定めるつもりでもあった。

韓遂とてすぐに自分が信用されるとは思っていない。いくら涼州と関中に存在する豪族のほとんどを連れて帰順していたとしても、自分の場所を確立するためには、結果を出さなければならぬ

のだ。

裏切ると決めた時から、姪である翠を討つ事に躊躇いはない。先程の夏侯淵の様に歯切れよく返事をし、スツと立ち上がる。そのまま踵を返し、天幕を退席しようとした彼の背中に曹操がこんな言葉をかけた。

「そうだわ、韓遂。私に貴方の真名を預けなさい」

思わず自分の耳を疑ってしまう。いくら降将とはいえ、ここまで一方的に真名を強要される事は普通あり得ない。曹操に背を向けたままの韓遂の顔は屈辱に歪む。

しかし、振り返った時にはそんな感情は面から消えていた。

「私の真名は驥疾といいます」

ここで感情に任せて行動を起こしたとして、翠を裏切り、すぐさま曹操に刃を向ける自分に一体どれほどの諸侯が付いてくるか。それ以前に、夏侯姉妹だけでなく、許緒と典韋という猛将までいるこの状況を切り抜けられるのか。

そう考え、この場合は事を荒立てない方が得策であるとの答えに至った。

そんな打算を見抜いたかの様に、曹操は冷やかな笑みを浮かべている。その表情のまま、視線をわずかに横に滑らす。

「確か、閻行だったわね。貴方の真名も、一応聞いておきましょうか」

ひどく尊大な物言いである。

曹操はこの場で自分の優位性を見せつけてやるつもりでいた。反抗心は生まれるかもしれないが、真名を一方的に知る事で精神的にも支配するつもりでいたのだ。

当然、韓遂が真名を預ければ、臣下である閻行もそれに倣うものだと考えていた。曹操だけでなく韓遂でさえも。だが、閻行は、

「申し訳ありませんが、お断り致します」

と言い放つてみせた。

貴様、と吠えて目を三角にした夏侯惇が飛び掛からんばかりの勢いになる。それを止める夏侯淵の顔にも怒りが浮かぶ。

そんな2人の態度にも、張本人である閻行には全く動じる様子がない。そして、曹操もまた、先程と表情を変える事なく笑みを浮かべたままにいる。まるで、次の言葉を促している様だ。それに応えべく、閻行が続けて口を開く。

「私が忠誠を誓ったのは韓遂様だけ。韓遂様が曹操殿に従う事を決められたので、私はここにいるに過ぎません。そもそも真名を強要する様な行いは、丞相と呼ばれるお方がなさるべき行為ではないと考えますか？」

曹操に向かい、お前は丞相に相応しくない。そう言っているのと同じだった。夏侯惇ばかりか、許緒や典韋までもが腰を浮かし、天幕内を剣呑な雰囲気満たす。その空気を破ったのは、他でもない

曹操の大笑だった。

「この私に、正面切ってここまでの大言を吐くとはね。いいでしょう、言いたくないのなら構わないわ。それから、韓遂。貴方の真名も聞かなかった事にしてあげましょう」

一堂が呆気にとられて曹操を見つめるなか、閻行だけが普段通りの顔でクルリと振り返る。

「参りましょう、驥疾様」

そう言っつて、閻行は韓遂を先導する様に歩き出す。その背中を、曹操は淫靡な笑みを浮かべながら見送った。

韓遂の裏切りもあつて散々に打ちのめされた翠や霞達は、それでも何とか合流を果たした。雨の降る夜、暗い森の中で残存している兵力をまとめると共に、これからの動きを検討する。

「しっかし、ものの見事にやられたわ。それでも、翠やウチらが無事だったんは何よりやけど」

確かに霞の言う通りだった。西涼を発つた時には三万いた兵は、今は千人にも満たない。そんな惨敗を喫した戦場を6人揃って切り抜けられたのは、僥倖と言っても過言ではなかった。

しかし、これだけ兵力を損なつてしまつては将が健在でも戦闘は

続行できない。追撃部隊が接近しているという斥候からの情報もある。である以上、ここにいつまでもとどまる訳にはいかない。

西涼に戻り、残しておいた兵力を使って再起を図る。そんな翠の考えは猛反対を受け、あつという間に却下された。

西涼に残してきた兵力は、あくまで匈奴族への備えである。それを曹操との戦に回せば、隙を突かれて侵略を受ける可能性は高い。それに、韓遂に従って曹操に寝返った涼州の人間も少なくない。何とか西涼に帰還出来たとしても、周りが全て敵だらけ、という事もあり得るのだ。

「なら、どうしろって言うんだよ！ 後は、玉砕覚悟で突撃するくらいしかないだろ」

「琥珀様の敵討ちを諦めるのなら、それでもいいかもしれないわね。けど、まだ手は残っているのよ」

半ば自暴自棄になりながら叫ぶ翠を宥めるためか、詠がゆっくりとした口調で話す。本当か、と尋ねながら、翠は珍しくすがる様な眼差しを詠に向ける。

「ええ。もちろん、絶対に曹操を討てるとは限らない。討てたとしても、それがいつになるかは分からない。それでも、このまま西涼に戻ったり、やけになって何の策もなしに突っ込むよりは分のいい話だわ」

「で、どうするんだ？」

「決まってるでしょ、益州へ向かうのよ」

肩幅に開いた足に体の正面で組まれた腕。堂々とした態度のメイドがそこにはいた。だが、内心はその姿と裏腹だった。

彼女の心の内にあるのは、激しい後悔と一刀への申し訳なさ。大事な情報をもらっていながらそれを活かせず、大敗を招いてしまった。せめて一刀の描いた通り、翠を益州にまで連れていかなければ。

しかし、事の全てを正直に話す訳にはいかない。もし、一刀が先に益州へと赴き自分達の受け入れを交渉していると知れば、翠は意固地になって行くのを拒否するだろう。

一刀に関する事は伏せつつ益州行きを納得させる。詠が敢えて自信満々に言ってみせたのは、そのためでもあった。

「益州、っていうと……。劉焉、いや、劉璋が治めている地か」

「違うわよ！ 今は劉備が治めてるの。あんたにも間者からの報告は上げてるでしょ？ 少しは覚えておきなさい、まったく」

「そうそう、お姉様。頭の中まで筋肉にしちゃうから、大事な事が覚えられないんだよ」

詠は、呆れた、と言わんばかりにため息を吐く。その尻馬に乗る形で、蒲公英が翠をからかう。彼女も覚えているのかどうか、微妙なところではあるのだが。

案の定、翠の拳骨が蒲公英に落ちる。こんな状況で何をやっているんだか。2人のやり取りを見て、詠からは先程よりも盛大なため息が出た。

「話を戻すわよ。こうまで惨敗した以上、ボク達だけで曹操と戦うのは不可能。であれば、どこかの勢力に助力してもらうしかない。幸い、と言っているのか分からないけど、向こうは覇道を掲げて天下を狙っているんだから、どこにいたって戦う事になるわ」

現在、曹操以外で残っている勢力は話に上がった劉備に、徐州と揚州を治める孫策、荊州を押さえる劉表と、漢中を中心に信者を広げる五斗米道の教祖、張魯である。その中で最大の勢力を誇るのは孫策であるが、関中からは距離がありすぎる。それに、曹操の本拠地であるエン州や豫州を通らなければならず、危険度も高い。逆に、最も近い位置に存在する勢力である張魯では、軍備が足りず曹操に對抗出来ない。

「消去法で劉備か劉表しか残らないけど、劉備は月の洛陽脱出に協力してくれたんでしょ？ 接点がある方が、ボク達を受け入れてくれる可能性は高いわよ」

こうしてきつちり説明されてしまえば、翠に異論を挟む隙間などあるはずもない。しばらく考える様子を見せた後、翠はこの案を受け入れた。

何とか一刀との約束が果たせると、ホツと胸を撫で下ろす詠。だが、翠の中では、この戦はまだ終わっていないかった。

翌朝、というには早すぎる時刻。東の空も白んではおらず、夜が

明ける気配は微塵もない。降っていた雨は上がり、木の葉の間から見える夜空には、昨夜は姿を見せなかった月が燦然と輝いている。

その月明かりを頼りに、1人の少女がぬかるんだ土の上を歩いている。少女は1本の大木に繋がれた馬の下まで歩を進めると、馬の頭を軽く叩く。馬は嬉しそうに少女へと顔を擦り寄せた。

「悪いな、黄鵬。もう一働きしてもらおうぞ」

自らの愛馬に語りかけた少女　翠は鞍に手をかけ、その身を馬の背に上げようとした。

「どちらへ行かれるおつもりですか、姫」

「鷹那……」

いきなり暗がりから声を掛けられ、鼓動をわずかに速めながら振り返る。そこには外套を身にまとった鷹那の姿があった。

声を掛けられるまで、その存在に気付かなかった。地面がこれ程ぬかるんだ状態では、いくら身の軽い鷹那でも足音を立てずに歩く事は不可能だ。という事は、翠がここに来るのを予測して待っていた事になる。ならば、尋ねた問いに対する答えが分かっているのも道理だ。

「韓遂殿のところ、ですね？」

「……ああ、そうだ。曹操の奴は取り敢えず諦めるとしても、叔父上は許しちゃおけない。母様とあたしを裏切ったんだ。はじめをつけないと、あたしは母様にも父様にも顔向け出来ないからな」

近寄ってくる鷹那に向かい、止めても無駄だぞ、と付け加える。鷹那は無言で翠の側まで歩み寄ると、黄鵬の隣に繋がれている自分の愛馬にひらりと跨がった。翠はポカンと口を開けて見上げていた。

「誰も止めはしません。ただ、私も同行します。もし姫の身に何かあれば、それこそ私は琥珀様に会わせる顔がありませんから」

開いていた口はその言葉を聞いて閉じられ、緩やかな弧を描く。誇らしげな微笑み。だが、一抹の寂しさを孕んだ微笑みでもあった。

韓遂の部隊は夏侯淵が率いる本隊の前方に陣を張っている。その入り口に立つ番兵が大きなあくびをする。東の空はわずかに明るくなり始めていた。

太陽が完全に姿を現せば見張りは交代。布団にくるまって眠れるまで後少し。見張りの緊張感が一番緩くなる時間帯だった。

あくびをして大きく開かれた番兵の口に何かが飛び込む。そのまま、悲鳴すら上げる事なく倒れてしまう。突然の事にもう1人の番兵が覗き込む様に口の中を見てみれば、そこには矢が突き刺さっている。

敵襲。そう叫ぼうとして顔を上げた彼もまた、後ろから頭部を射抜かれて一瞬で絶命する。ゆっくりと倒れる番兵の脇を、2騎の騎兵が駆け抜ける。翠と鷹那、2人の騎射によって呆気なく入り口は突破された。

韓遂隊の反応は鈍い。それは、時間帯だけの問題ではなかった。壊滅的な打撃を負った馬超軍に対する掃討戦である。よもや相手の方から攻めてくるなど、多くの者は考えてもみない事だった。

このまま一気に韓遂のところまで。そう考えた2人の前方に1人の人物が立ち塞がる。だいぶ距離はあるが、肩に担ぐ剣の大きさから閻行であると判別出来た。

閻行は肩幅よりも広く足を開き、ぬかるんだ地面で滑らない様に強く踏ん張る。そのまま大きく腰を落とすと肩から剣を外す。それを右脇に押し付け、切っ先を背に向けて体を右に目一杯捻る。

「でやあっ！」

気合いと共に、捻れたゴムが元に戻る様に体が左へと回転。遅れて大剣が空を斬る。

いくら閻行の武器の間合いが長いとはいえ、到底届く距離ではない。だが、大剣によって巻き起こされた殺気を孕んだ旋風が、翠達の駆る馬の足を竦ませた。

「やっぱり来たのか。相も変わらず猪突猛进だね、あんた。驥疾様のところへ行くつもりだろうが、そうはさせないよ」

閻行は振り抜いた、柄の長い斬馬刀の様な大剣を体の正面で構え直す。

こんなところで足止めを食らっている場合ではない。それは分かっているが、閻行が黙って先に進ませてくれるはずもない。

ここは力づくでも。翠が槍を握る手に力を込めた時だ。馬の背から跳んだ鷹那が愛用の偃月双刀、龍爪牙で斬りかかった。閻行は斬撃を刀身で防ぐと、宙に浮いた鷹那の体ごと弾き返す。空中で体を捻り、翠と閻行の間に着地する鷹那。そのまま偃月双刀を正面に構える。

「姫、ここは私が。姫は韓遂殿の首を」

「だけど……」

「ここまで来た目的は何です！ 今を逃せばこの様な好機、巡ってくるとは限らないのですよ！」

洪る翠を叱咤する。確かに韓遂隊全体に油断のある今でなければ、目指す韓遂の首にまで届かないだろう。翠は一瞬目を瞑り、覚悟を決める。

「死ぬなよ、鷹那」

「ええ。御武運を」

翠は黄鵬の腹を蹴り、再び駆け出させる。そちらに攻撃を仕掛けようとする閻行に対し、鷹那がもう一度斬りかかった。先程と同じ様に防がれ弾かれる。だが、その間に翠は間合いの外に出ている。時間稼ぎは十分だった。

小さくなっていく翠の姿を睨んだ後、鷹那へと向き直る。その表情には、意外と焦りが見られない様に鷹那は感じた。

「本当に私とやり合うつもりかい？ あんたで私に勝てるんでも

？」

鷹那は琥珀に仕えて10年。対して閻行も約10年韓遂に仕えて
いる。鍛練や模擬戦で刃を交える機会は幾度となくあった。最初は
ほぼ互角の力量を有していた2人だが、ここ4年、閻行は鷹那に一
騎討ちで敗れてはいない。その自信が言わせた言葉だった。

翠は黄鵬を全力で駆けさせていた。

閻行の武は自分に匹敵する程で、真つ向からの戦いでは鷹那に分
が悪い。彼女の事は心配ではあるが、今はこれ以上考えても仕方が
ない。出来る事は一刻も早く韓遂を討ち、鷹那のところへ戻る事だ
けだ。後ろを振り返りたい思いを殺し、ただ前へ前へと駆けていく。

陣の中央よりやや奥、少し小高くなっている位置に韓遂の天幕は
あった。そこには韓遂の側近達が数人、てぐすね引いて待ち構えて
いる。しかし、翠にはわずかな迷いもない。敵の中に騎乗したまま
突っ込むと、一気に全員を斬り伏せてしまう。

黄鵬の背から降り、乱れた呼吸を整えるべく、1度深く息を吐く。
そして、槍を右手に携えたまま、左手で天幕に掛かる目隠しの布を
勢いよく捲り上げた。が、そこには誰の姿もない。

逃げたのか、それとも初めからここにいなかったのか。いなかっ
ただとすれば、この近辺に潜んでいる事はないはず。

迷う翠は天幕の中をもう一度見回してみる。

あたしの襲撃に気付いて逃げただけだ。

迷いは晴れた。机の上に残された盃と乱れた寝具が物語っていた。

天幕から出て辺りを見渡す。ちょうど馬に跨がろうとしている韓遂の姿が翠の瞳に飛び込んだ。振り返った韓遂の顔は恐怖に怯えていた。

翠は黄鵬の鞍に付けておいた短弓を手に取り、弓を引き絞る。最初は韓遂の頭を狙ったものの、馬の尻へと目標を変えた。

かなり距離がある。人の頭のような小さい目標を狙って外すよりは、まずは韓遂の足を奪おう。そう考えての事だった。

この考えは効を奏した。韓遂が跨がった直後の馬に矢が刺さる。突然の事に驚いた馬は前足を跳ね上げ、韓遂を振り落とす。強かに腰を打ち付け、短い悲鳴がその口から漏れた。衝撃に思わず目を瞑る。

「ぐっ……！ うっ、す、翠……！」

韓遂が目を開けると、目の前には馬に跨がった翠の姿が。怒りに眦を決して見下ろしている。その怒気にあてられ、韓遂は腰を地面に付けたままで四肢を使って後退る。

「ま、待て、翠。これには理由が……。そ、そうだ、義姉上の……」

「黙れ！ 叔父上も武人なら、命乞いや言い訳なんかするな。武人らしく剣を取れ！」

一切聞く耳を持たない翠の態度に、韓遂も腹を括るしかなかった。ゆっくりと立ち上がり剣を抜く。万が一にも勝てる相手ではない。なかば自暴自棄になり、奇声を上げながら剣を上段に振りかぶる。だが、その剣が振り下ろされる事はなかった。

翠の電光石火の一撃が韓遂の胸を貫いた。

目を見開き、何事かを呟く。しかし、声にはならず、まるで酸欠の金魚の様に口をパクパクとさせるだけ。翠に槍を引き抜かれると、その体は前のめりに倒れた。

瞳に宿るのは後悔か、絶望か。翠にとっては興味のない事だった。

「一刀も、叔父上も、何でだよ……」

先程までの怒気もすっかり消え、力なく呟いた翠。その頬を一筋の涙が伝った。

鷹那と閻行。仕官している年数が同じなら、歳も鷹那が上の1つ違い。身長も同じくらい高く、175センチある一刀とそうは変わらない。

そんな2人の大きな違いは体型だ。

線が細い鷹那は、よく言えばスレンダーでモデルの様な体型。悪く言えばメリハリがない幼児体型である。

一方の閻行は、出るべきところはしつかりと出ている。が、翠の様に女性らしい体つき、という訳でもない。骨太で、全体的に筋肉質のガツチリした体型であるためだ。

この体型の違いが2人の戦い方にも表れている。技と速さで相手を翻弄する鷹那に対し、閻行はその巨大な大剣で防御を固め、強力な一撃によるカウンターを得意としていた。

2人の戦いは、閻行が若干有利に進めていた。待ちの戦い方をする彼女には、自分から攻めなければならぬ今の状況は不利である。だが、それ以上にぬかるんだ地面は鷹那にとって不利だった。激しく動き回る戦い方をするため、足下が安定しないのは致命的なのだ。

もちろん、足下に不安があるのは閻行も一緒だ。それでも、最悪は上半身だけで強烈な一撃を繰り出せ、しかも間合いの広い閻行の方が有利だった。

「……くっ」

何とか凌ぎ続ける鷹那であったが、着地の瞬間に足が滑りバランスを崩してしまう。好機と判断した閻行は、大股で踏み込みながら大剣を脇に構える。翠達の前に立ち塞がった時と同様の構え。だが、距離は近い。全力での横薙ぎだ。

かわせないと判断し、鷹那は偃月双刀で防御する。それをまるで薄い木の板であるかの様に容易く粉碎し、閻行の振るった大剣は鷹那の脇腹を抉った。

鷹那の体は数メートル吹き飛んで地面に転がった。当たる瞬間、

自ら力のかかる方向に身を投げ出したのだが、威力を吸収しきる事は出来なかった。

「ぐっ……！」

体を突き抜ける激痛に低く呻きながら鷹那は体を起こす。裂傷はないが、どうやら肋骨が数本折れたらしい。右手で左脇腹を押さえながら、足下が少しおぼつかない状態で立ち上がる。

閻行の大剣は、斬るといふよりは重量を利用して叩き潰す事に主眼を置いている。これにより、刃こぼれや血糊の付着による切れ味の低下は関係なくなる。もっとも、鷹那が正面から受け止めようと踏ん張っていれば、その身は真つ二つにされていただろうが。

「流石だよ、鳳徳。当たる瞬間、自分から跳ぶなんてさ。けど、今の一撃は手応えがあった。あんたのあばらを数本いった手応えが、ね」

ニヤリと口角を吊り上げる。

あばらを折ってやった以上、今までの様な動きは動きは出来ないはず。ましてや、あの苦悶の顔だ。間違いない。

閻行は勝利を確信した。

その時、遠くから馬の蹄の音が響いてきた。はっとして音の聞こえてくる方へと顔を向ける閻行。その視線の先には、全身血濡れて赤く染まった翠の姿が。

閻行の心臓が大きく跳ねる。なぜ、という問いが浮かぶ。

「……馬超、貴様ーっ！」

問いの答えはすぐに出た。考える以前に、最初から答えは持っていた。馬超がここに戻ってきた理由は1つしかない。認めたくはなかったし、考える事すら怖い。だが、それしかないのだ。

驥疾様が馬超に殺された。

瞬間、閻行は雄叫びのように絶叫し、翠へと向かい駆け出していた。

護衛に付いていた連中は何をやっていたのだ。なぜ、驥疾様はお逃げくださらなかったのだ。いや、自分のせいだ。自分が鳳徳相手に手間取ったせいで驥疾様は死んだのだ。そもそも、これが鳳徳の狙いだっただに違いないのに。

今さらだとは閻行も分かっている。翠を討ったところで韓遂が生き返る訳ではない。それでも臣下として、女として、けじめだけはつけなければならなかった。

鬼気迫る表情で翠に駆け寄る閻行の姿に、鷹那は思わず声を出した。

「姫っ！」

叫んだ鷹那の脇腹を激痛が襲う。だが、それに構っている場合ではない。片方の刀身を失った偃月双刀の柄を両手で持つと、それぞれの手を逆に捻る。カチリと音が鳴ったかと思うと、柄は真ん中で2つに分かれ、2振りの偃月刀になった。

刀身の残っている方の偃月刀、龍牙を振りかぶると、閻行めがけて投げつける。勢いよく回転しながら飛ぶ龍牙はブーメランの様に大きく弧を描く。閻行の死角から襲い掛かり、彼女の左足ふくらはぎを裂いて大地に落ちた。

急に襲ってきた痛みで足を前に出せず、閻行はつんのめる様にしてその場に倒れた。顔だけを上げて、翠を呪わしい瞳で睨み付けている。その瞳の色に、さしもの翠も背筋に悪寒が走る。

生かしておけば後の禍根になるのは間違いない。そう考え、止めを刺そうとした翠の視界に這いつくばる鷹那の姿が入った。様子がおかしいのは遠目にも分かった。翠は閻行を無視し、鷹那へと馬を寄せる。

「大丈夫か、鷹那」

「ええ。それよりも、韓遂の方は……？」

「……ああ、ケリはつけた。行けるか？」

翠に声を掛けられた鷹那は苦しげな顔をしていた。脂汗も額に滲み出ている。だが、出来る限り平静に振る舞おうとしているのが分かり、翠も深くは追求しなかった。

ええ、ともう一度返事をして立ち上がる。いつの間にか心配そうに寄り添ってきた愛馬に痛みを堪えて跨がる。

翠と鷹那は倒れている閻行を最後に一瞥し、その場を離れていった。

こうして、馬超を筆頭として蜂起した涼州勢力は目的を果たす事が出来ず、結果、曹操の版図は涼州にまで広がる事となったのである。

第4章・渭水編・第8話〜代償〜（後書き）

今回で馬超対曹操はひとまず決着。次回は成都に到着した一刀の話を書いて、第4章は終了する予定です。

ただ、初めの二千文字書いた時点で話が全く進んでいないので、ひよっとしたらもう1話増えるかもしれないが。

第4章・渭水編・第9話 交わる道

「やっと、着いたな……」

街をぐるりと囲む高い城壁を見上げながら、感慨深げに一刀は呟いた。

「そうですね……」

一刀と連なつて麒麟の背に跨がる月も、安堵のため息混じりに相づちを打つ。

今、彼等の前にそびえる城壁は、益州州都である成都を守る城壁である。ここに着くまでの間、訪れた村々で新しく益州を治める事になった桃香の話聞いた。話に聞く限りでは、総じて好意的に受け入れられている様だった。

とりあえず、一刀の知っている歴史通りに事態が推移した事にはつとずる。もちろん、展開が早くはあるのだが、劉璋が勝つのに比べたら何の問題もない。もしそんな事になっていたら、一刀の計画は全て破綻するところだった。

城門に詰める兵はいたが、特に見咎められる事もなく2人は成都へと入る。まず最初に視界へと飛び込んできたのは活気ある街並み。そして、明るい表情の人々だった。

それだけで、桃香がどんな政をしているかが窺える。もつとも、以前会った時に感じた桃香の雰囲気と、諸葛亮達がいる状況で酷い政を行っているとは思えない。

そういえば、鳳統は無事なのかな。彼は自分で助言した事を、今の今まですっかり忘れていた。

それを確認するためにも、城へと行かなければならないのだが、こちらはすんなり通してくれるはずがない。馬超からの使者だ、と騙れば通してはもらえるだろう。が、話の内容が内容だけに、最初に負い目を作りたくはない。誰か顔見知りで桃香に仕えている人物にでも会えれば話は早いのだが、この広い成都の街でそれを期待するのは偶然が過ぎる。

やっぱり、正規の手順を踏むのが1番か。城に行つて目通りを申請し、待つしかないな。もし俺の名前に誰かが気付けば、順番を繰り上げてくれるかもしれないし。

そう考え、一刀はひとまず宿を探す事にした。申請が受理されて順番が回ってくるまでに、どれだけ待つかは分からない。あまりにみすばらしい格好をしているのは、門前払いされる可能性もある。それに、今着ている庶民的な服より、学園の制服型の服に着替えておいた方が気付かれやすいだろう、という考えもあった。

大通りから脇道へと入る。大通りには確かに立派な宿が立ち並ぶが、やはり料金も立派だ。残りの路銀はそれほど多くなく、何泊しなければならぬか分からないのに高級宿には泊まれない。裏通りにある安宿を探すつもりなのだ。

この行動が、一刀達に思いがけない人物との再会を果たさせる事になるのだが、この時はそんな事になるとは思いもよらなかった。

裏通りはさらに活気に溢れていた。屋台や露店がいくつも軒を連

ね、非常に雑然としている。呼び込みの聲がいたるところから響き、胃袋を刺激する様々な匂いが辺りに広がる。ちょうど昼飯時な事も、あり、人出も相当なものだ。

一刀は月の手を握る。この人混みではぐれたら見付けられるのは骨だ。彼は月の手を引きながら、人混みを縫う様にして進んでいく。

ふと、一刀は足を止めた。流れる人の波の中に、ボーツと佇む見覚えのある少女を見付けたからだ。

「れ、恋？」

一刀が見付けたのは、肉まんを売っている屋台を物欲しげな表情で見つめる恋の姿だった。声を掛けられ、恋は2人の方へと振り向いた。

「……月？ それに、一刀も……」

一刀達は恋に近づく。

約束がある。そう言って西涼を発った後、一切話に聞かなくなっていた恋。その彼女が、なぜこんなところにいるのか。それを尋ねようと思ったのだが、彼女の方は一刀達に興味はないらしい。尋ねられる前に、視線を屋台へと戻してしまった。

恋は肉まんを蒸している蒸籠をジーツと見つめる。思い出した様に腹は物凄い音で鳴った。道行く人が何事かと立ち止まるほどだ。しばらくそうしていたらしく、屋台の店主も非常に気まずそうにしている。

「肉まん、食べるか？」

あまりに物欲しそうなその様を見かね、一刀はそつと尋ねてみる。視線を蒸籠へ釘付けにしたままコクリと頷く恋の動きに、知らずと苦笑が浮かんでしまった。

「月も昼は肉まんでもいいかい？」

宿を探しながらどこかで昼食を、と思っていたところだ。一応は月にも確認してみるが、思った通り、微笑みと共に肯定の返事が返ってくる。

1人1つでいいか。だが、注文する直前で、恋が翠以上の大食漢である事を思い出した。背中から腹の虫の鳴き声が切なく響く。

結局、恋の分に3つ、合計5つの肉まんを購入した。

早速肉まんをパクつく恋を見ながら、一刀と月も昼食にする。本当は恋に色々聞きたいところなのだが、彼女の意識は肉まんにしか向いていない。食べ終わるのを待つしかなかった。

先に食べ終わった一刀は何となしに恋の食べる様を見ていた。同じ大食漢でも、翠の様にがつつく訳ではない。何となく、リスの様な小動物を連想させる可愛らしさがある。不思議と癒され、食べ終わってしまうのが残念に感じるほどだった。

「で、恋はどうしてこんなところに……」

「恋殿ーっ！ 遅れて申し訳ないのですーっ！」

食べ終わるのを待って話し掛けた一刀だったが、遠くから聞き覚えのある声に邪魔をされた。恋に続き、声の聞こえた方に視線を向ける。

そこには、小さな体で人混みを掻き分けながらこちらに向かってくる少女の姿があった。恋と共に西涼を離れた音々音だ。

一刀達が気付いたのにわずかに遅れて音々音も気付いたらしい。驚いた顔を見せて立ち止まりかけたが、そのまま3人の側へと駆け寄ってくる。

「月殿、それに一刀も、どうしてこの様なところにいるのです」

「まあ、ちよつと、な。それより、ねねこそどうしたんだ？」

質問には曖昧に答えながら探りを入れる。

「ねね達は……」

「……ねね、行くつ」

「あつ、そうなのです。出掛けに朱里と雛里に捕まってしまい……」

また答えは得られなかった。それでも音々音の言葉から察するに、やはり偶然で成都にいる訳ではない様だ。だとすれば、ここで2人を逃す手はない。

「恋、ねね、俺達も一緒に行ってもいいかな」

歩き出した2人の背中に向かって声を掛ける。どこに行くつもりなのか、そんなものは当然分かっているが。

「……一刀と月も一緒にくる。ご飯は皆で食べた方が美味しい……」

振り返った音々音は迷惑そうな顔を見せたものの、恋にこう言われては反対出来なかった。

まだ食べるのか、と一刀は顔をひくつかせた。

さつき食べた肉まんは思いの外ボリュームがあり、1個で十分満腹になった。月は食べ切れずに半分残したほどだ。それを、恋は自分の分である3個に加え、月の残した半分まで食べていたのだ。

半ば呆れながらも、一刀は2人に付いていく事にした。

物凄い数の料理を次々に平らげていく恋を横目に、音々音達が成都にいる理由を一刀は尋ねる。

「うう、仕方がない。最初から話してやるのです」

そう言って、音々音は西涼を発ってから成都に着くまでの経緯を話し始めた。

恋が鈴々と再戦を約束していたため、それを果たすべく徐州へと赴いた事。しかし、2人が着いた時には、徐州は袁術によって支配されていた事。その後、何の手がかりも得られなかったため西涼へ

と戻る途中、関羽と再会し荊州まで同行した事。そのまま益州にまでくっついてきた事。

仕方ない、と言いながら、音々音はかなり饒舌に語ってくれた。

「……という訳で、恋殿とねねは桃香殿に客将として力を貸してやっていますのです」

えへん、と大きく胸を反らす。その様は子供らしく滑稽で、可愛らしいものであった。

ともかく、今の2人の立場は一刀の望んだ通りだ。

「実は俺達、桃香に話があつてここまで来たんだ。ただ、いきなり行つても門前払いを食らうだけだろ？ だから、桃香に目通りが叶う様、ねねから口添えしてもらえないかな」

「ねねちゃん、私からもお願い」

月も一緒に頼み込む。

「一刀はともかく、月殿に頭を下げられては断る訳にいかないのです。……なら、ここの食事代で手を打ってやるのですぞ」

財布の中身を確認する。支払いは大丈夫だろうが、余裕は一気になくなってしまう。しかし、短時間で桃香に会える可能性が極めて高いこの話を断るのはあまりにも勿体ない。

「分かった。その代わり、しっかり頼むぞ」

「ねねに任せておけばいいのです!」

一刀の念押しに、音々音は自信満々で、ドン、とその小さな胸を叩いた。

食事が終わると、ひとまず一刀達は別れる事にした。恋と音々音は先に城へと戻り、一刀と月は適当な宿へと入っていく。

桃香と顔見知りとはいえ、さすがに身なりを整える事もせずに出る事は出来ない。湯と手拭いを借りて汚れを落とすと、それぞれ正装へと着替える。月はメイド服、一刀は本物の聖フランチェスカ学園の制服である。レプリカではない、ポリエステル製の制服に袖を通すのは、涼州の諸侯に天の御遣いとして紹介されて以来、およそ一年半ぶりだ。

二の腕、胸、太ももと、いたるところがきつい。ピチピチで恥ずかしいが、鍛練の成果をはっきりと感じられたのは嬉しかった。

一刀と月が侍女に案内されて玉座の間に入ると、すでに桃香に仕える将のほとんどが揃っていた。以前会った時から仕えている関羽や、別の人物に仕えていた趙雲。他にも見覚えのない人物が数人並んでいる。その中に鳳統の姿を見付け、一刀はホツとした。

この場にはいないのは桃香と諸葛亮の2人だけだった。

「遅くなっちゃってごめんなさい!」

扉が開くと共に明るい声が飛び込んできた。その声の主は一刀へと駆け寄り、両手で包み込む様に彼の手を取る。

「久しぶりだね、一刀さん。益州へようこそ。でも、急に訪ねてくるなんてどうしたの？」

にっこりと微笑んだかと思うと、大きな瞳で上目遣いに聞いてくる。その瞳に吸い込まれそうな感覚を覚え、一刀はやりわり手を振りほどく。寂しそうな顔を見せる桃香をたしなめる様に、関羽が1つ咳払いをした。

「あつ、ご、ごめんね？ 私、一刀さんに会えるのが嬉しくて、つい舞い上がっちゃって……」

ペコリと頭を下げた後、桃香は玉座へと歩き出す。その横には、いつの間にか諸葛亮の姿もあった。

ともかく、これで中心人物は揃った。一刀は気持ちを引き締め直す。桃香も浮わついた気持ちを落ち着ける様に、大きく深呼吸をしてから話し始める。

「一刀さん、貴方はどうしてこの益州に来たんですか？ それに、私に話がある、と、ねねちゃんから聞きましたか？」

彼女にしては珍しい真剣な表情と固い喋り方だった。諸葛亮の指示だろうか、無理をしているのが一刀にも分かった。

「はい、劉備様にお願いがあって参りました。馬超を初めとする涼州の將兵を、劉備様に受け入れていただきたいのです」

「えっ？」

桃香は思わず声を漏らしてしまった口を手で塞ぐ。そのまま口元を隠す様にしながら、隣に立つ諸葛亮に小声で話し掛ける。

「朱里ちゃん、話が違うよ〜」

「はわっ、す、すみません。もう少し詳しく話を聞いてみてください」

桃香は姿勢を正し、仕切り直しとばかりに咳払いを1つする。

「ええと……、受け入れて欲しい、というのは？　もう少し詳しく言ってもらえますか」

「马超を盟主とする涼州連合と曹操が関中において争っているのは、劉備様もご存知だと思います。この戦に敗れば、涼州に戻る事も出来ず流浪の身になるのは必至。それを救っていただきたいのです」

片膝をつき、両手を体の前で組んだ姿勢のまま、一刀は真っ直ぐに桃香を見つめた。真剣な眼差しに桃香の心が揺さぶられる。

「えっと……、うん、って言ってもいいんだよね……？」

再び小声で諸葛亮に尋ねる。

「だ、駄目ですよ。まだ何も分からないじゃないですか。……もう」

はあ、とため息を吐くと、諸葛亮は一刀へと視線を向けた。

「確かに先程、北郷さんが言われた通り、馬超さんと曹操さんが戦争をしているのは知っています。ですが、涼州連合軍は十五万に届くほどのに対し、曹操軍は三万がいいところ、との報告も受けています。これだけの兵力差があつて、敗れた時、ですか？」

「兵力の差が戦の結果に直結しない事は、諸葛亮もよく分かっているだろう？ ましてや連合軍、寄せ集めの大所帯だ。末端まで統率するのは難しい」

ちなみにこの2日前、翠は曹操に大敗北を喫していた。電話の様な通信手段がないため、その情報が成都にまで届くのはまだまだ先の話だ。

「仮に馬超さんが負けるとして、私達が馬超さん達を受け入れる義理はないはずです。それとも、曹操さんを敵に回すのに見合っただけの物がありますか？」

「曹操が覇道を掲げて天下を狙う以上、時間の前後はあれ、戦う事になるのは間違いない。その時のために戦力を充実させる、つていうのは、十分な利じゃないのか？」

桃香の心は決まっている。以前同じ目的を持って戦った仲間が助けを必要とするのなら、手を差し伸べたい。もっとも、それは赤の他人であつてもそうなのだが。

しかし、諸葛亮は軍師として国の事を考えるが故に、一刀の言葉に頷く事が出来ない。翠達を受け入れる事の利が少ない上に、一刀

の言葉には腑に落ちない点が多すぎる。

「桃香様、朱里、少しよろしいか？」

一刀と諸葛亮が言葉を戦わせる中、1人の女性が発言を申し出た。その女性は敵顔と名乗り、一刀に威圧的な眼差しを向けてくる。

「以前、この益州を治めていた劉焉様は馬騰殿と同盟を結んでいてな。わしも何度かお会いした事がある。もちろん、その御息女である馬超殿にもだ。その時の感じからすれば、負けた後の事を考えて手を打つ様な真似をするとは思えんが？」

「……敵顔さんの言う通り、馬超の指示ではなくて俺の独断です。独断でここまでできました」

「ならば、北郷殿は馬超を見捨てて成都にきた、という事か!？」

「違う! 俺は翠を見捨ててなんか……」

割って入った関羽の言葉に、一刀も思わず感情的になって反論しかけた。だが、尻すぼみになり、最後は口の中だけで呟いた。

翠を見捨てたつもりは微塵もない。彼女のために成都まできたのだ。しかし、事情を知らない者には見捨てた様に見えるのだろう。そう考えるくらいの冷静さは残っていた。

そんな一刀に、さらに辛辣な言葉が投げ掛けられる。

「何も違う事はあるまい。馬超殿を残し、お主1人で成都にまできた。馬騰殿の仇を討たんとする馬超殿を、お主は裏切ったのである。

るっ」

違う、と反駁したかった。全力で否定したかった。だが、それをするには初めから事情を説明しなければならなくなる。もちろん、一刀の素性も含めて、だ。

桃香達には自分の事を全て話すつもりでいる。しかし、彼の手の内にあるカードはこの1枚しかない。ここで感情のままにカードを切っても効果は薄い。今は言い返したい気持ちを抑えるしかないのだ。

「そもそも、馬超殿が負ける前提で話が進んでいるが、勝った場合にはどうするつもりだ。涼州側が有利なのだろう？」

「その時は……、好きにしてもらって構いません」

「首を差し出す、というのか？」

一刀は無言で頷いた。

もし翠が勝ったら。歴史とは違う結果を迎えるとは思えなかったが、それでも考えた事がない訳ではない。そうなれば、もう2度と翠の前に立つ事は出来ないだろう。それならいつその事、という思いは少なからずあった。

「だ、駄目だよ、そんなの！」

慌てて桃香が口を挟むと、張り詰めた空気のまま沈黙する。

「あ、あの……!」

ピリピリとした空気の中、ぎゅっと拳を握る一刀の背後で声がかかる。そこにいるのは月だけだ。

彼女は1歩足を踏み出す。が、

「侍女の分際で口を出すな！」

と、関羽に一喝されてしまった。

月の事は侍女としてしか紹介していない。ただの侍女がこの場に
いる事が関羽には面白くないし、ほとんどの者が、なぜ、という思
いでいる。

あまりの迫力に月の体は強張る。それでも、勇気を持って足をさ
らに1歩前に出す。

再び声を荒げようとする関羽は服の裾を恋につかまれ、きっかけ
を失ってしまった。

「初めまして、劉備様。以前はお世話になり、ありがとうございます
ました」

「……えっ？」

月の言葉を桃香は理解出来なかった。

初めまして、の後に、以前お世話になった、と続くのだ。桃香で
なくてもおかしいな声を上げただろう。

混乱しつつも必死に思い出すとする桃香の様子に頬を緩め、月は言葉を続ける。

「以前、私は洛陽で暮らしていて、その時には董卓と名乗っていました」

それを聞いて桃香達は合点がいった。と同時に、別の疑問がわき上がる。

「そうか、貴方が董卓さんだったんだね。でも、どうしてここで私達にそれを教えてくれるの？」

「私がこうしてられるのは、馬超さんを初めとする涼州の方々のお力があつたからです。劉備様、どうかお力添えをお願いします。もし、皆さんを受け入れてくださるのであれば、その時は、私の首を……」

「そこまでだ、月」

頭を下げる月の言葉を一刀が遮る。でも、と反論しようとする月には視線を向けず、真っ直ぐに前を見つめている。

「月はどう思っているか知らないけど、もう董卓の首に大した価値はないよ。そうだろ？」

そう言って、一刀は諸葛亮へと話を振る。自分が話すよりも、第三者である諸葛亮の言葉の方が聞き入れやすいだろう。そう思っただけの事だった。

「北郷さんの言う通りです。反董卓連合の解散直後ならいざ知ら

ず、これだけ時間が経っては……。すでに、身代わりの首級で決着がついていますから。そもそも、董卓さんを馬騰さんが匿っていたと知れば、その名を汚す事になりますよ」

月は自分の考えが浅はかだったと思い知らされた。ガツクリとうなだれたその頭に、一刀の手が優しく乗せられた。

「それにさ、そんな事になったら、詠や清夜に八つ裂きにされちゃうだろ、俺」

一刀は少しおどけた感じで微笑んだ。だが、すぐに真剣な表情へと戻り、桃香達へと視線を移す。

「彼女の首はともかく、もちろん見返りが何もない訳ではありません。俺の持つ天の御遣いの知識、その全てを劉備様に捧げる事ではいかがでしょうか」

知識、という単語に諸葛亮と鳳統の眉が跳ねる。2人は口を開こうとするが、それより早く敵顔が声を発した。

「ハンツ、天の御遣いの真偽も分からんのにその知識など、眉唾に過ぎる」

話にならない、とばかりに鼻で笑う。この態度に噛み付いたのは、張本人である一刀ではなく桃香だった。

「桔梗さん、一刀さんは嘘を吐く様な人じゃありません！」

「ならば、なぜこやつはその知識とやらを己の主のために使おうとはせんのです。本来であれば、馬騰殿や马超殿のために使うのが

臣下の務めではありませぬか。そうしないのは、大した価値がないか、そもそもそんな物は存在しないか。そのどちらかであると考えるのが自然でしょう」

「それは、きつと何か事情があつて……。大体、桔梗さんは一刀さんとは初対面じゃないですか！ 私はお話した事もあるし、桔梗さんより、いっぱい一刀さんの事を分かっているんです！」

「わしが言えた義理ではありませぬが、桃香様は少し他人を疑う事を覚えた方がよろしい！ でなければ、いつか取り返しのかん事態を招きかねませんぞ！」

過熱する2人のやり取りを見兼ね、何人かが仲裁に入る。敵顔には隣にいた淑やかな女性 黄忠が、桃香には関羽がそれぞれ宥めるべく声を掛ける。

「落ち着いて、桔梗。客人の前なのよ」

「桃香様も落ち着いてください。こうして2人が言い争ったところで、何もならないではありませんか」

桃香は玉座へと腰を下ろし、敵顔も体を正面、つまりは一刀の方へと向ける。何とか納まった様に思えるが、実際はそうではない。

桃香は不機嫌なのを隠そうともせず、頬を膨らませている。それはまだ問題ない。一国の王の態度としてはどうかと思うが、可愛らしい女性のそんな姿は、一刀の瞳には魅力的に映った。

問題は敵顔の方だった。黄忠に止められ行き場を失った不満が、鋭い視線となつて一刀に襲い掛かっている。さすがは歴戦の勇士で

ある。一刀も身震いを抑えるのがやっとで、何か言葉を口に出す事もためらってしまう。

そんな緊張感の中、おずおずと鳳統が手を上げて喋り出した。

「あの……、北郷さん。天の知識というのは、長安で私に言った事と関係があるんですか？」

探る様にゆっくりな口調で一刀に尋ねた。だが、一刀はその問いに直接は答えない。

「あの時の事、役に立った？」

そう答えただけである。

「ええと……、どういう事、雛里ちゃん」

諸葛亮がそのやり取りを不思議に思い、鳳統に問うてみる。長安で一刀と会った、という話は聞いていたが、その時に何か言われたとは聞いていなかった。

「うん。私と愛紗さんが長安で北郷さんに会った時、その別れ際に言われたの。落鳳破には気を付けて、って。その時には意味が全然分からなかったんだけど、ラク城を攻めるのに通る間道が落鳳破だって聞いてビックリして……。だから、あそこで伏兵の可能性に気付けたのは北郷さんのおかげなの」

鳳統の話聞き、諸葛亮の眉間にはしわが寄った。彼女の頭脳が高速で回転を始める。

落鳳破は行軍もままならない様な細い間道である。そんな地元の者だけが知っている様な道を、なぜ知っていたのか。そして、どうしてそこが危険だと知っていたのか。さらには、涼州連合軍の敗北に自分の首を賭けるほどの自信はどこからくるのか。

『まさか……。でも、それなら辻褃は合うけど……』

諸葛亮の中で1つの結論に辿り着く。だが、それは到底信じがたいものであった。

「……桃香様。北郷さんにはしばらく別室でお待ちいただこうと思っておりますが、よろしいですか？」

諸葛亮の思い詰めた雰囲気を感じ、桃香は素直に従った。

「で、どうしたの、朱里ちゃん」

一刀と月が退出した後の部屋で桃香が尋ねる。その問いに対し、顎に手を当てたまましばらく悩んだ後、諸葛亮はゆっくりと自分の考えを述べ始めた。

「北郷さんですが、未来を見通す力を持っているのかもしれないん」

諸葛亮の言葉に一同ざわついた。それくらい、すっとんきょうな発言だった。

「……つまり、奴は預言者の様な力を持っている、と？」

そんな中、比較的冷静な趙雲が自分の考えた答えを諸葛亮にぶつけた。

「いえ、そんな曖昧な物ではないと思います。北郷さんは、知識と言っていました。であれば、これから起こる事をすでに知っているのかもしれませんが。そう考えると、雛里ちゃんが落鳳破で危険に晒される事を知っていたのにも納得出来るんです」

「そう言えば、初めて一刀さんに会った時も変な事を知ってたよね。私が村にいた頃に、草鞋売りをしていた事とか」

そうですね、と返事をしかけて、諸葛亮はハツとした。未来が分かるというだけでは、桃香の過去まで知っているのはおかしい。その事まで踏まえて、もう一度考え直してみる。

「……そんな事、ある訳ないよね」

彼女は自分の導き出したあまりにも馬鹿げた答えに、自嘲しながらそう呟いた。

約1時間後、一刀と月は玉座の間へと再び通された。

「お待たせしてごめんなさい。翠ちゃん達を受け入れる件、お引き受けしますね」

そう言って桃香は優しく微笑んだ。その笑みで、一刀の体からは力が抜ける。よかった、と心底ホツとした。

「それで北郷さん、先程の件なんですけど……。もしかして、貴方は未来からきて、これから先に起こる事を知っているのでは……？」

諸葛亮が自信なさげに尋ねる。そして、仲間達はそんな彼女に怪訝そうな顔を向ける。

ついさつき彼女が述べた仮説とは違っている。しかも、より一層ありえないと思われる方向に。周囲から訝られるのも無理はなかった。そもそもが、諸葛亮自身も1つの可能性として捉えているだけでしかない。

だが、一刀はそんな諸葛亮に笑ってみせた。

「ああ、その通りだ。俺は天の国からきたんじゃない。今からおよそ1800年後の未来からきたんだ」

やっぱり、と呟く諸葛亮。だが、他の面々は驚きの表情を浮かべたり、疑いの眼差しを向けたりと、当然ながら信じられない様子だ。

「……朱里、それに北郷。わしらにそんなとっぴょうしもない話を信じろ、と言うのか？」

「この際、俺が未来からきた事の証明は省かせてください。手元には証明する物が何もないし、重要なのは、俺の持つ情報をどれだけ有用な物に出来るか、でしょう？」

未来からきた、などと、厳顔には信じることが出来ない。と言うよりも、あまりにもとっぴょうしもない話に頭がついていけない。それでも、一刀の言葉は道理であったし、その堂々とした態度は好

感を持てるものだった。

その後、一刀の口から語られた事柄は、未来からきた事を彼女達に確信させるまでには至らなくても、天の御遣いの名に偽りが無い事を知らしめるには十分だった。

一刀が成都にきて数日、彼は桃香の客将となっていた。今日も昼まで諸葛亮と鳳統を相手に、様々な事を話した。午後からはそれを文字に起こさなければならぬが、それほど時間がかかる仕事でもない。

街に出て昼食にしようか。そんな事を考えながら歩いていると、廊下の先で桃色の何かが揺れている。桃香の髪の毛だった。

彼女は廊下の角から顔を出し、窺う様に顔を左右に振っていた。

「何やってんだ、桃香」

「ひゃあっ！」

桃香は飛び上がらばかりの勢いで驚いた。

ちなみに、一刀は桃香の客将になるにあたり、様付けで呼ぶ事を考えたのだが、桃香は頑としてそれを拒否していた。

「か、一刀さんか……。ビックリさせないでよ、もう」

不満そうに言いながらも、彼女の顔には笑みがこぼれていた。

「ごめんごめん。でも、何ごそこそやってるんだ？」

ギクツ、という擬音が聞こえてきそうな程、桃香は顔を引きつらせた。

「えっ？ えーっと……。ところで、一刀さんこそどうしたの？」

この反応で、一刀は大体の事を察した。西涼にいた頃、翠や蒲公英もよく仕事をサボっていたものだ。

「これから昼飯でも、と思ったんだけど。桃香は仕事を抜け出したのか？」

「ち、違うよ。でも、お昼にするんだったら私も一緒にいいかな？ せっかくだから、街の中を案内したいし」

サボりなのは間違いないだろうが、成都の街は右も左も分からない。罪悪感があったものの、一刀は桃香に案内を頼む事にした。

昼食もそこそこに、2人は街中を散策する。この街を訪れた時から感じていた事だが、人々が驚くほど明るい。活気ある街は、ただ歩くだけで元気になれる様だ。

「おや、劉備様。珍しい、今日はお1人ですか？」

不意に露店の女主人から声を掛けられた。

「こんにちは。もう、違います。ほら」

桃香は一刀の腕を引き、女主人に紹介する。ペコリと頭を下げる
と、一刀は桃香にそつと話し掛けた。

「珍しい、って言ってたけど、普段は一人で街に出ないのか？」

「そうだよ。どこに間者がいるかも分からないからって、愛紗ちゃんや朱里ちゃんが、街に出る時は護衛をつける様にするさいの話を聞いて合点した。」

西涼では、太守であった琥珀もその娘の翠も、どちらも一騎当千の豪傑だった。仮に暗殺を企てた者がいたとしても、返り討ちに来ただろう。

だが、桃香ではそうもいかない。先日、関羽が桃香に稽古をつけているのを見たが、その腕は素人然としていた。

「あ……、じゃあ、城の中でこそそしてたのは、関羽達に見つからずに抜け出そうとしたのか？」

仕事をサボっているものだとばかり思っていたが、どうやらそうではないらしい。凶星を指された桃香は少し引きつった笑みを見せる。

「あはは……、愛紗ちゃん達には黙ってたね？ やっぱり、護衛の兵士さんがいると、街の人と距離が出来ちゃって」

一刀は、やれやれ、と深くため息を吐いた。黙っててね、と言われても、城門にいた兵には見られている。そこから関羽達に報告がいくのは想像に難くない。

帰ったら一緒にお説教か。そう思ったものの、テヘツ、と舌を出す桃香の笑顔を見たら、文句を言う気は失せてしまった。

「あらあら。ひよつとして、劉備様の大切な殿方なんですか？」

「えっ！？　ち、違いますよ！」

思わぬ勘違いに、桃香は顔を真っ赤にして否定する。その様子に、一刀も少し顔が上気するのを覚えた。

桃香が懸命に説明するも、その言葉は女主人に届かない。おばちゃんはこの世界も変わらないな。そう思っていると、一刀は急に腕を引かれた。

「い、行こう、一刀さん」

桃香に引かれるまま、彼はその場を離れていった。

太陽が西の山に掛かり始めた頃、2人は城壁の上から茜色に染まる街並みを眺めていた。しばらく沈黙が2人の間を支配していたが、一刀がそれを突き破った。聞いておきたい、気になる事があった。

「あのさ、この間の、俺が知っている事を話している時、桃香は

途中で出ていったら？ あれ、どうしてなんだ？」

翠達を受け入れてくれる代わりに、一刀が知る知識 主にこれから起こるであろう事柄を話している最中、桃香は1人、玉座の間を後にしていた。じゃあ後は朱里ちゃん達に任せるね、とだけ言って。当然、関羽達は引き止めようとしたのだが、彼女は聞く耳を持たなかった。

「あれね。あの後、愛紗ちゃんにも怒られちゃった。桃香様には為政者としての自覚をもっと持っていただかなければ困ります、って」

それは一刀も思った事だ。全てが役に立つ訳ではないだろうが、それでも聞いて損する話ではないからだ。

「……ねえ、一刀さん。もし、今年は好天続きで豊作になるのが分かっていたら、どうしますか？」

いきなりの飛躍した問い掛けに一刀は面食らう。それでも聞き返す事はせず、真摯に考えて答える。

「豊作だって分かっているなら、さらに少しでも多く収穫出来る様に頑張る、と思うけど……？」

「じゃあ、逆に不作だと分かっていたら？」

「そりゃあ、不作だとしても耕作はするだろう？ 少ない中でも、ちよつとでも多く収穫出来る様に」

桃香は大きく頷く。

「うん、そうだよね。豊作だと分かっていても、畑を耕して種を蒔かなければ収穫はない。不作だとしても、しっかり頑張れば普段の何割かは取れるだろうから」

街を見下ろしていた彼女は顔を上げ、真っ直ぐに一刀を見つめる。

「例え未来が分かったとしても、私達に出来る事は一生懸命頑張る事だけだと思うの。出来る事をしっかりとやる、それだけ。もちろん、不作だって分かっているれば対策も行えるんだろうけど。でもね、結局は毎日を精一杯生きていく事の積み重ねが……」

桃香の言葉を遮る様に、大きな笑い声が響く。一刀が大声で笑っていた。

「えっ、あの……、私、何か変な事言ったかな？」

「ははっ……。ごめん、そうじゃないんだ。ただ、桃香らしいな、って。未来が分かっても頑張るだけ、か。確かにそうだ。俺の知っている未来は未来で、その通りになるかどうかは俺達次第だもんな。……うん、ありがとな、桃香」

一刀も桃香を真っ直ぐに見つめ返して礼を述べた。その顔は、何か憑き物が落ちた様にスッキリとしていた。

関中を脱出した翠達は秦嶺山脈を越え、漢中に近付いていた。曹

操軍の追撃もなく、凍える様な寒さ以外、道中は順調だった。

そんな中、詠だけは関中からこっち、ずっと浮かぬ表情をみせている。

「どないしたん？　ずーっとそないシケた面して。愛しの月ちゃんに会えるのに、嬉しくないんか？」

詠に馬を並べてくる霞。彼女の姿を一瞥した詠は深いため息を吐いた。その様子に、ニヤニヤしていた霞は不満そうに唇を尖らせた。

「……別れ際にあんなひどい事を言ったのよ。どの面下げて月に会ったらしいのよ。どうせあんたは、成都にいたら美味しいお酒をいっぱい飲もう、くらいしか考えてないんでしょうけど」

「まあ、それは否定せんけど。けど、あれは月ちゃんの事を思ってたんやん。ウチは月ちゃんやったら詠の気持ち、分かると思うけどな。そない気の回らん子やないやろ？」

それは誰に言われるまでもなく、詠が一番分かっている。誰よりも優しく他人の心を理解出来る人物である、と。もし、あの時の言葉を言ったのが別の誰かであれば。その時は、霞と同じ様な言葉を掛けて慰めただろう。だが、月を傷付けた罪悪感もあり、詠はそこまで素直に考える事が出来ずにいる。

そこへ、今度は清夜が馬を寄せてくる。彼女は背筋を伸ばし、正面を向いたままで口を開いた。

「安心しろ、月様は全て分かっておられる。お前の真意を全て、な。だから、天幕を飛び出した月様を追いかけた時、私にお前を護

る様頼まれたのだ。今まで私を護ってくれた様に、これからは詠ちゃんを護ってあげてください。そう仰られた」

「……そ、そう。……ありがとう」

詠は俯き、自分の跨る鞍へと視線を落とす。そして、眩く様に礼を言った。その顔にはわずかだが、久しぶりの笑みが浮かんでいた。

幸せそうな顔をみせる詠に、霞のいたずら心がむくむくと湧き上がる。

「幸せそうな顔しおって。月ちゃんに会えるんがそない嬉しいんか？ あっ、それとも一刀の方か？」

「なっ、何であいつの名前が出てくるのよ！」

詠は大声を上げて霞を睨み付ける。だが、わずかに赤く染まった頬は、霞にからかう材料を与えるだけだ。

「そない照れんでもええやん。月ちゃんと一刀は一緒に益州へ向かったんやから、会う事になるんは当然やで？」

「別に、あいつになんか会いたくないわよ！ そ、そう。ボクは月が一刀に変な事をされていないか、それが心配なだけなの！」

大声で否定する詠はカラカラと笑い飛ばす。

月に自分の真意が伝わっていた事を聞いて、詠は浮かれていた。自分がどれくらい大きな声を出しているかも気付かない程に。その事に気が付いたのは、少し前を行っていた翠が立ち止まっているの

を見た時だった。

足を止めた3人を翠の鋭い視線が襲う。思わず目線を外した3人に、翠は馬首を返してゆっくりと近付く。そして、詠の眼前で馬を止めた。

「どういう事だ」

翠が口にしたのはその一言だけで、何が、とは言わない。しかし、それで十分だった。何について問い質しているのかは、3人にしつかりと伝わっていた。

懸命に頭脳を回転させて誤魔化す方法を探す。だが、そうそう上手い言い訳が思い浮かぶはずもない。押し黙る3人に、翠がもう一度、感情的になって怒鳴る様に聞いた。

「どういう事なんだ！ 一刀と月は……」

「あゝも〜、うつさいわ〜。お前も大体の予想はついとんのやる？ 一刀と月は益州に行つて、ウチらを置いてくれる様、劉備と交渉しとんねん」

さも面倒臭そうに、霞は頭をボリボリと掻きながら答える。

「な、何だよ、それ。そんなのあたし、聞いてないぞ！」

「当たり前や。言うてへんもん。言うたら、益州へは行かん、とか言い出しそつやからな」

「当然だろ！ あいつはあたし達を裏切ったんだ。何で裏切り者

の世話になる様な真似をしなきゃならないんだ！」

「いい加減、ガキみたいに駄々こねんのやめえや。そんなら他に手があんのか？ あるんやったら言うてみい！」

馬上で激しく言い争い、互いに睨み合う。一触即発の雰囲気、鷹那達がその間に入って両者を引き離した。

「とにかく、あたしは絶対、成都になんか行かないからな！」

「なら、勝手にせい！ もう、ウチは知らん！」

互いに顔を背けると、それぞれ別の方角に馬を進ませる。

「ちょ、ちょっと、待ちなさいよ、あんた達！」

詠が叫んでみても、2人は振り返るところか歩みを緩める事すらしない。オロオロするしかない詠と蒲公英。そんな中、鷹那はあくまで冷静だった。

「仕方ありません。詠と清夜は霞と共に、先に成都へ向かってください。私は姫を説得してみます。たんぽぽも、いいですね？」

「う、うん。お姉様を1人にしておく訳にはいかないからね」

鷹那の声を聞きながら、詠は自分の迂闊さを悔いた。しかし、後の祭りである。今は鷹那の言う通りにするしかない。

「……………分かったわ。でも、大丈夫なの？」

「ええ、姫は私がお守りしますから。一刀さんにも安心するよう伝えてください。では」

鷹那が馬首を返すと蒲公英もそれに続く。詠が聞きたかったのはそういう事ではなかったのだが、聞き直す間はなかった。

その日、一刀は警邏のために街へと出ていた。そこへ城からの使いがやってきて、彼に何事か告げる。それを聞くなり、一刀は城へと駆け出した。

大通りから城門を抜け、廊下も全力で駆けていく。途中、文官や侍女と何度かぶつかりそうになったが、それでも速度は落とさない。その勢いのまま大扉を開け放つ。部屋の中にいた者達は一斉に一刀の方を向いた。

そこには久しぶりに会う仲間の顔が。だが、一番会いたかった人物の姿はそこにはない。

「やつぱり、か……」

口の中で呟いた。それでも落胆した表情を微塵も見せる事なく、呼吸を整える様にゆっくりと歩み寄る。気まずそうな3人に対し、先に口を開いたのは一刀の方だった。

「3人共、無事みたいでよかったよ。お疲れ様」

「あ、ああ……」

まさか、労いの言葉を掛けられるとは思ってもみなかったらしく、霞はキョトンとした表情でぼやけた返事をした。彼女は一旦視線を落とした後、意を決して一刀の瞳を正面から見つめる。そして、すまん、と謝った。

「一刀がここにおる事、翠に知られてもってん。あいつとは、漢中で別れたつきりで……。ホンマにすまん！」

頭を下げ、両手をまるで拝む様に合わせる。

「顔を上げてくれよ、霞。翠達も無事なんだろ？ だったら、それでいいさ。……清夜も、無事で何よりだよ」

霞が顔を上げたのを見て、一刀は清夜の方に向き直る。

「お前こそ、よく月様を守ってくれた。礼を言っぞ」

「まあ、ほとんど何もなかったからな」

1度虎と遭遇した以外は、一刀と月の旅は概ね順調であった。心配させるといけないので、その事は黙っておく。

後は詠なのだが、彼女の様子は少しおかしかった。翠の事を気にしているのは一刀にも理解出来る。だが、視線はずっと床に落としたまま、顔を上げようとしてもしない。少し迷ってから、一刀はそつと声を掛ける。

「詠も、ご苦労様」

「……のよ」

小声で呟かれた言葉は、一刀には聞き取れなかった。えっ、と耳をそばだてる。

「何でそんなに気を使ってるのよ！」

突然大声を出され、一刀は思わず仰け反るが、俯いたままの詠はそれにも構わがなり立てる。

「あんたから戦の顛末を聞いていたのに負けたのも、翠にあんたの事が知れたのも、全部ボクのせいなの！ 文句の1つも言えばいいじゃない！ それなのに、そんな気を使った様な言葉、使わないでよ！ 余計惨めになるでしょ！」

玉座の間は、シン、と静まり返った。聞こえるのは詠の荒い息遣いだけだ。

「ごめんな」

「謝れ、なんて言ってな……！」

ポン、と詠の頭に一刀の手が乗った。彼女は手を振り払う事もせず、ゆっくりと一刀を見上げる。

「本当は、軍師だった俺がやらなきゃいけない事だったのにな。でも、皆が無事に脱出出来たのは詠のお陰だろ？ きっと俺じゃあ、逃げる事すら叶わなかった。だから、やっぱりこうい言葉しか出てこないんだ。ご苦労様、ありがとう、って」

真っ直ぐ見つめられながら言われた言葉に面映ゆくなり、詠はた
まらず視線を外す。あれだけがなくて急にしおらしくなるのは恥ず
かしく、自らの非をさらに並べてしまう。

「で、でも、ボクのせいで翠と会えなくなったのに……」

「翠も無事なんだろ？　なら、どうとでもなるさ。生きてさえい
れば、な。俺がきつと何とかしてみせるから、そんなに自分を責め
なくていいんだぞ」

優しく微笑み掛ける一刀。その瞳の奥には強い決意が宿っていた。

第4章・渭水編・第9話「交わる道」(後書き)

という事で、今話で第4章は終了です。今のところ全7章を予定しているのです、ようやく折り返せた感じでしょうか。

次回からの第5章はたぶん短めになると思います。今のペースで更新できれば、年内で終わらせられるかも、といったところです。

第5章・漢中編・第1話〜一刀の覚悟〜

韓遂が翠に討たれてから数日後。鷹那に負わされた傷も癒えない中、閻行は曹操に目通りを求めた。

「韓遂は残念だったわね」

ぐるぐるに包帯を巻かれた足で跪く閻行を前に、曹操は言った。別に、嫌味ではない。彼女自身も韓遂の死は予定外であった。

本来、涼州への侵攻はもつと先の予定だった。河北を制圧した後は、東の地を治める孫策を叩くつもりでいたのである。というのも、孫策だけが天下への野望を抱いている、と感じていたためだ。

荊州を治める劉表。益州を治めていた劉璋。そして、豪族達の顔役として実質的に涼州をまとめていた馬騰。この3人には天下を窺うだけの才覚、もしくは大望がない、と考えていた。

だからこそ、涼州への侵攻は後回しにするつもりだったのだ。ましてや涼州は、北から匈奴族、西から羌族に脅かされている。馬騰が統治していたからこそ羌族との友好関係が築けていた訳で、彼女が亡くなった今、その関係もどうなるか分からない。

そこで、曹操は韓遂に涼州の統治を任せる方向で考えていた。馬騰の義弟であった彼も、それなりに羌族に顔がきいたし、涼州豪族からの信用もあった。それだけに、ここで彼が殺されたのは曹操にとって痛手であった。

「いえ、私の力が足りないばかりに、このような結果になってし

まいりました」

「で、貴方はこれからどうするつもりなのかしら」

「なにとぞ、馬超を討つ機会をお与えいただきたく……！」

閻行は頭を下げる。

「ならば、私に忠誠を誓う、と？」

「はい。その証として、我が真名を曹操様にお預けいたします。我が真名は、考儒、と申します」

本来は、曹操に真名を預けたくなかない。以前に1度、突っ撥ねているのだから。だが、今の状況では曹操の力を借りる以外、韓遂の仇討ちを叶える手立てはなかった。

「そう、いいでしょう。なら、まずはその傷を治す事を考えなさい。再戦の場は、私が必ず用意してあげるわ」

「はっ、感謝します、曹操様」

曹操の言葉に礼を述べ、さらに深く頭を下げる閻行。そんな彼女に向かい、曹操は顔を上げる様に命令する。閻行がそれに従うと、曹操は柔らかい微笑みを湛えていた。

「これから私の事は、華琳、と真名で呼びなさい。いいわね、考儒」

こうして閻行は曹操の臣となり、打倒馬超に全てを懸けるのだっ

た。

霞と別れた翠達3人は漢中へと向かった。その地を治める張魯に助力を願い、曹操に抗するつもりだった。

だが、漢中の街に入っすぐ、鷹那の様子がおかしい事に蒲公英が気付いた。

「だ、大丈夫なの、鷹那姉？」

そう言っ鷹那の顔を覗き込む。見つめる先の顔には苦悶の表情と共に大量の油汗が浮かんでいる。

何の反応も示さない鷹那に、蒲公英はもう一度、大丈夫、と声を掛けた。

「……え？ ええ、大丈夫……」

ようやく声に気が付いたらしい鷹那が返事をした時だった。その体から力が抜け、蒲公英にもたれ掛かる様にして倒れた。

「ちよ、ちよっと、鷹那姉？ 鷹那姉！？」

蒲公英がいくら耳元で叫んでも、返事は返ってこなかった。

『ここは……？』

重い瞼を何とか開けた鷹那の瞳には、見覚えのない天井が映っている。どういう事か状況を整理しようとするが、もやがかかった様に頭ははつきりしない。

とにかく現状だけでも把握するべく、上体を起こそうとした彼女の脇腹に激痛が走った。わずかに頭を浮かせたところで止まり、再び体を横たえる。だが、この痛みでもやが少し晴れ感じがした。

ここはどこかの部屋で、自分は寝台に寝かされている。さっきの痛みは闇行に負わされた傷だろう。おそらく、この痛みが原因で気を失ったか。

傷の状態を確認すべく、痛みを堪えながら布団をめくる。すると、彼女の目に飛び込んできたのは綺麗に巻かれた包帯だった。自分でサラシをきつく巻いて固定しただけだったものを、誰かが治療してくれたのだと分かった。

ところで、布団をめくっただけで包帯を巻かれていると知れたのは、上半身が裸だったからだ。下半身はというと、感覚で下着だけは付けているのが分かった。これについて、別段、羞恥心は湧かない。治療をする際に服を脱ぐのは当然だ。それに、起伏の全くない自分の体など見たところで興奮する訳もない、と考えていた。

「ああ、気付いたか。そろそろ、麻沸散の効果が切れる頃だからな」

不意に男の声が聞こえ、鷹那は顔を左側へと向ける。首を捻るだけでもわずかに脇腹は痛んだ。

扉のない入り口から1人の男性が入ってくる。鷹那の見た感じでは、一刀より2つ3つ年上の好青年である。ただ、燃える様な赤い髪が少し暑苦しさを感じさせる。

青年は鷹那の横たわる寝台へと近付いてくる。その姿を見上げながら、彼が自分を治療してくれたのだ、という結論に辿り着くのに大した時間は掛からなかった。

まずは名を名乗り、礼を言わなければ。

鷹那は脇腹に走る激痛に耐えながら上体を起こそうとするが、青年に押し留められた。

「無理をするな。かなりの重症だったんだからな」

そう言うと、彼は枕元にある椅子に腰掛けた。鷹那の手を取り、脈を確かめながら言葉を続ける。

「俺の名は華陀、医者だ。君は、鳳徳、でいいんだな？」

「どうして私の名を？」

「君の連れ、馬超と馬岱から聞いたんだが」

やはり、頭はまだ完全に覚醒していないらしい。少し考えれば分かる質問だった。

「今、2人はどこに？」

「この地を治める張魯殿に会いに行っている。まあ、日が沈む前には戻ってくるだろう」

華陀は手を離し、少し笑った。

わずかだが、翠を慕ってついてきた兵もいる。自分はともかく、彼等を飢えさせるのは忍びない。そうならないためには、張魯に仕官して給金を貰うのが一番手っ取り早いのだ。

華陀の顔が、問題ない、と語っている様で安心した。

「しかし、私は一体どうしてここに？」

口にした後で、先程から質問ばかりしている事に気付く。しかし、現状が何も分からないのだから仕方ない。

「俺が薬草を採って戻ってきたら、城門を潜ってすぐのところまで2人が騒いでいたんだ。何事かと思って覗いてみれば、尋常ではない程の汗を掻いて苦しそうな顔をしていたからな。家まで連れてきて処置を施した訳だ」

言われてみれば、確かに城門を潜る前後辺りからの記憶がない。

「しかし、無茶をし過ぎだ。肋骨が折れたまま放っておくなど、最悪は内臓を傷付けていたぞ」

言われてやっと、事の重大さを自覚した。

「申し訳ないです。今は手持ちが大してありませんが、必ず……」
謝りながら言うと、華陀は首を横に振った。

「気にしなくていい。君を助ける事は、俺の恩人からの頼みでもあつたからな」

華陀は爽やかに笑った。

恩人、とはどういう事か。少なくとも、漢中近辺に私の知り合いはいないはずだ。

ならば、答えは1つしかなかった。

「その恩人というのは、北郷一刀、ですね？」

華陀は大きく頷いた。

「以前、虎に襲われているところを助けてもらったんだが、その時に頼まれたんだ。鳳徳という女性が漢中を訪れる事があつたら診て欲しい。病気が怪我かは分からないが、きつと体調を崩しているはずだから、とな。もつとも、本当にそうなるか、半信半疑ではあつたが」

やはりか、と思う。未来を知っている彼が、手を回してくれたいたのだ。もし頼んでいなければ、私はここで命を落としていたのだろうか。

そう思いながら、ふと、別の考えが浮かんだ。

「この事は、馬超達には……？」

もし聞かれていたら、今度はどんな行動を取るのか。それは鷹那にも分からない。だから、彼女にしては珍しく、おずおずと尋ねた。

「いや、まだ伝えてはいないが」

鷹那はホッと胸を撫で下ろした。

「ならばこの件、2人には黙っておいていただけますか？」

華陀は少しの間、不思議そうに鷹那を見つめたものの、理由を聞く事なく頷いた。訳ありだと察してくれた様だった。

となれば、気になる事はあと一つ。

「それで、治るまでにどれくらいの時間が必要なのですか？」

「まあ、春が来て、雪が溶けるまでには十分完治するさ」

椅子から立ち上がった華陀は寝台をぐるりと回り込み、反対側へと移った。そして、窓を開け放つ。寝台に寝ている状態でも見える民家の屋根には、白い雪がうっすらと積もっていた。

成都を遅れて訪れた詠達もまた、一刀と同じく桃香に召し抱えら

れる事となった。

霞と清夜は騎馬隊の将に。詠と月は、知識を買われて参謀となつた一刀の補佐官に、それぞれ落ち着いた。

成都での暮らしにもだいぶ慣れてきたある日、詠と月の2人は私用で街へと出ていた。

「まったく……、何でボクがこんな大荷物を持たなきゃなんないのよ」

街に出るなら、と、出掛けに数人からお使いを頼まれた詠は、両手一杯に荷物を抱えながら愚痴を言う。しかし、それを聞く相手はおらず、あくまで独り言である。一緒に街に出たはずの月は、重い物を持たせる訳にはいかない、という詠の考えで、小物を中心にお使いをするべく別行動をとっている。つまり、今の状況になったのには詠本人の責任も多分にあるのだ。

合流を打ち合わせておいた場所に着いた時、まだ月の姿はなかった。小物が多い代わりに、回る軒数も多いのだから当然ではあった。

道端に移り荷物を下ろす。少し手が痺れている事に気付き、感覚を確かめる様に数回強く握ってみる。そうしながら、通りへと目を遣った。

行き交う人々の顔はどれも明るく幸せそうだ。しかし、そんな平和に見えるこの街にも、やはりよからぬ事を考えている人間は存在している。

詠の目の前を通った少年が、彼女が足元に置いていた荷物を持つ

て走り出した。

「ま、待ちなさいっ！ この泥棒っ！」

叫んでみたが、泥棒が足を止める訳はない。そのまま、通りを埋める人の波に飛び込んでいってしまふ。一瞬躊躇したものの、残った荷物をつかみ、詠も人の流れの中へと突っ込んだ。

少し距離はあるが、見失ってはいない。むしろ、泥棒の方が人混みに紛れた事で撒けたと思ったのか、足を止める事はしないまでも、後ろを振り返って警戒する素振りを見せずにいる。

このまま取っ捕まえて突き出してやる。自分より少し小さいくらいの少年だったためか、詠はすっかりその気になっていた。これが成人男性であれば、こんな向こう見ずな事は考えなかつただろう。

少年が脇道に入ると、その後を追って詠も脇道へ続く。さらに一本脇道に入り、それに続いて詠が角を曲がった直後。曲がり角の死角にいた人に気付かず、詠は正面からぶつかってしまった。角を曲がるために速度は緩めていたが、それでも衝撃で尻餅をついてしまふ。

「いてて……」

その声を上げたのは詠ではなく、ぶつかられた相手の方だ。野太い声で呟いている。

いくら気の強い詠でも、さすがにこの状況で、邪魔よ、と怒鳴り付ける真似はしない。そこまでの傍若無人さを持ち合わせてはいないのだ。しかし、謝らなければ、と思いい目を開ける詠の体は思わす

強張る事となった。

目の前には数人の男達。その中の1人、中央にいる男にぶつかったのだろ。腕を擦りながら痛そうにしている。だが、その男と回りにいる連中の顔には、ニヤニヤといやらしい笑みが浮かぶ。

厄介な奴等に絡まれた。そう思った詠は逃げようと腰を浮かす。さつき盗まれたのは霞に頼まれた酒だ。後で文句を言われる程度で大した問題はない。

「どうしたんですか、アニキ？」

詠の背後で不意に声が発せられた。体をビクツと震わせ、ゆっくと振り返る。そこにはガラスの悪い男が2人、並んで立っている。まるで逃げ道を塞ぐ様にしながら、やはりニヤついた顔を見せていた。

「このお嬢ちゃんがいきなりぶつかってきてよく、おかげで腕の骨が折れちゃったぜ」

さつきぶつかったらしい男がへらへら笑いながら言うと、周りの男達も心配する様子を見せる。もちろん、そんなはずがないのは誰もが分かっている。分かっているやっっているのだ。

詠はため息を吐くと、毅然とした表情で立ち上がった。そして、男達を見回す。

「何なのよ、あんた達。ボクに因縁つけて、金でも巻き上げるつもりなの？」

「おいおい、嬢ちゃん。アニキは腕が折れた、つつつてんだぜ。まずは謝るのが筋じゃねえのかよ」

「何が筋よ。大体、あんなもんで骨が折れたんだったら、それはそっちが悪いわ。ボクのせいじゃないでしょ」

詠が、ハンツ、と鼻で笑いながら言い放つと、男達から先程までのニヤついた顔が消えた。

「ガキが、調子に乗ってんじゃねえぞ」

凄味をきかせた低い声を口にしながら、さっきの男が詠へと手を伸ばす。そのまま、怯えた表情を見せて後ずさる詠のおさげ髪をギョツとつかんで引つ張った。

「キヤツ!」

詠がそう悲鳴を上げたのと、

「エイツ!」

という短い掛け声が響いたのはほぼ同時だった。わずかに遅れて、何か硬い物がぶつかつた様な鈍い音がして、男の悲鳴がそれに続いた。

「平気、詠ちゃん？」

「ゆ、月!？」

目の前にいる人物に、詠は驚いて大声を上げてしまった。そこに

は木刀を構えた月の姿があった。

「な、何やってんのよ！ 何でそんな事……、月には無理だったば！」

「大丈夫だよ。詠ちゃんと別れた後、一刀さんに剣を教わったの。今度は私が詠ちゃんを守れるように、って」

月は木刀を正眼に構え、背中越しに返した。

だが、それを聞いて詠が安心出来る訳もなかった。長安の近辺で2人が別れてからたった2、3ヶ月。その間にどれだけの鍛錬を積もうと、大して腕が上がるはずはない。長い年月をかけて少しずつ積み上げていくのは、勉強も武も変わらないのだ。

実際、詠の危惧した通りだった。大きく踏み込み振り下ろした木刀は呆気なくかわされてしまう。その手を男につかまれ、捻り上げられる。

「随分とふざけた真似してくれるじゃねえか」

さつき月に一撃入れられた男が近付き、その頬を張った。小さな少女の体は吹き飛び、地面へと倒れる。詠は慌てて月へと駆け寄り無事を確認すると、男達を睨み付ける様に見上げた。

「おいおい、大事な商売道具だぜ。傷付けて値段が下がったらどうするんだよ」

アニキ、と呼ばれていた男が2人の前に出てくる。もう、痛がる様な演技もしていない。彼はしゃがみ込むと、2人の顔を舐める様

に眺めていく。

「こっちの嬢ちゃんは、まさかの掘り出しもんだな。これなら相当高く売れそうだ」

月の顎をつかみ、無理矢理自分の方に顔を向かせると、男は下卑た笑いを浮かべて言った。

彼等は人攫いなのだ。年端もいかぬ子供達を攫い、人買いに売り飛ばすつもりだ。

「あんた、ボク達にこんな事をしてタダで済むと思ってるの？ボク達は……」

「お前等みたいなガキの1人や2人、消えたところでどうって事はねえよ。第一こんなところ、誰が見てるってんだ？」

その時だった。辺りに高笑いが響く。男達は慌てて周囲を見回すが、その一角には彼等以外はいない。

「だ、誰だ！ 出てきやがれ！」

1人の男が叫んだ。

「無垢な少女を攫う不埒な行い、例え天が見過ごしたとしても、この華蝶仮面はそうはいかん！」

「う、上だ、アニキ！」

彼は民家の屋根の上を指差していた。男達、そして、月と詠もま

た、つられる様に男の指先へと視線を移す。そこには太陽を背に立つ人物があつた。全員の視線が集まったところで、その人物は屋根から宙へと跳び、綺麗に着地を決めてみせた。長い直槍をくるくると回し、男達に向かってビシッと突き付ける。

「華蝶仮面、見参！」

彼女は力強く名乗りを上げた。

月と詠が大変な目に遭っている頃、一刀も諸葛亮と鳳統と共に街へと出ていた。治安の改善や区画の整理など、手をつけなければならぬ事は多い。まずは、それらの問題点を洗い出すため自らの目で確認しよう、という事になった。

「では、次は西の区画の方に行きましょう」

街の見取り図を片手に持った諸葛亮は、空いている方の手で行く方向を指差した。そうして歩き出す諸葛亮に続く一刀の手の中には、何かを感じた時にメモを取れる様、竹簡と筆一式がある。それらを右手にまとめて持つと、空いた左手を鳳統の前に差し出した。

「じゃあ、行こうか、雛里」

「……は、はい」

鳳統の小さい手が差し出された手をそっと握る。手を繋いで歩くその姿は、まるで仲のよい兄妹の様だ。

一刀が鳳統と諸葛亮から真名を預けられたのは半月程前の事だ。元々、命の恩人の様な関係にあった事もあり、鳳統は一刀に好意的だった。

一方の諸葛亮は、最初のうちは警戒を隠そうとしなかった。それでも、一刀と接し続けて人となりが分かってくると、徐々に警戒心は薄れていった。逆に、自分にはない知識や考え方を持つ彼に対し、憧れに似た好意を抱く様になったのである。

そうして3人が次の目的地へと歩いていると、前方に黒山の人だかりが現れた。しかも、まだまだ人は増えている。実際、一刀達を追い抜いていく人が多い。

「おい、また華蝶仮面が出たらしいぜ」

脇を駆けていった男の声が一刀達の耳に届く。瞬間、雛里の表情が華やいだ。

「朱里ちゃん、華蝶仮面だつて！ 行こう！」

雛里にしては珍しく興奮している。だが、それとは対照的に、朱里は少し引きつった笑みを浮かべる。その様子にも気付かず、雛里は一刀と朱里、2人の手を引いて駆け出した。

十重二十重に重なっている人垣を掻き分けて中に入って行く。ようやく中央に辿り着いた一刀だが、その瞳に飛び込んできた光景に狼狽する。華蝶仮面、つまりは趙雲がこの場にいるのは当然だが、彼女に守られる様にして月と詠の姿も見えたからだ。

と、周囲がドツと沸いた。華蝶仮面がゴロツキ風の男を昏倒させ

たためだ。見れば、他に何人もの仲間とおぼしき男が倒れている。

当然と言えば当然だった。数人がかりとはいえ、趙雲がゴロツキ相手に遅れをとる訳がない。それでも、当の本人は拍手喝采の状況にまんざらでもなさそうではある。

「やっぱり強いね……、華蝶仮面さん」

「う、うん……」

月達が無事らしい事にホツとした一刀と違い、雛里は華蝶仮面の強さに感嘆している様だった。若干歯切れ悪く返事をする朱里に構わず、雛里はなおも続ける。

「華蝶仮面さんみたいな強い人が仲間になってくれたら、心強いのにね」

華蝶仮面に視線を固定したままで雛里が言う。そうだね、とだけ返すと、朱里は小さく嘆息した。

そのやり取りを聞いていた一刀は、まさか、と思いつながらも一応確認してみる。

「なあ、朱里。まさかとは思いつけど、雛里って、華蝶仮面の正体に気付いてない、って事はないよ、な？」

「そのまさか、なんです。それも、雛里ちゃんだけではなくて、なぜか皆さん気付かないんですよ」

一刀を見上げた朱里の顔は、不思議、というよりは呆れた感じだ。

一刀は華蝶仮面へと視線を戻す。

蝶を模した仮面をつけて素顔こそ隠してはいるが、服装や手に持った槍などは普段のまま。どう考えても正体はバレバレだ。第一、一刀は初対面で見破っているのだ。それでも堂々と華蝶仮面を名乗っているのを見ると、むしろ、雛里は気付かないふりをしているのでは、と勘繰りたくなってしまふ。

「どいてくれ、お前達！」

そんな事を考えていると、聞き覚えのある凜とした声が響いた。人混みを強引に押し退けやってきたのは、関羽と数人の兵達。ようやく警備隊が到着したらしい。

辺りを一瞥して状況を確認した関羽は、周囲に転がっている連中を捕らえる様に指示を出す。そうして自身は華蝶仮面の前へと進み出る。

「また貴様か、何とか仮面」

関羽の言葉には怒りが滲み出ている。

「何とか仮面ではない。華蝶仮面だ。いい加減、覚えていただきたいものだな、美髪公殿」

「それはすまなかつたな。ところで、貴様はここで何をしていたのだ」

「何、とは異なる事を聞かれる。この状況を見ても分からぬ、と？ 我は正義の名の下、悪人共に裁きを下してやったまでだ」

怒りを隠そうとしない関羽に対し、華蝶仮面は飄々と答える。逆に、わざとあおっているかの様に口許には薄い笑みが浮かぶ。

関羽は改めて辺りを見回した。死人こそ出ていないが、3人は一目で骨が折れていると分かる。他の者も大なり小なり傷を負っている状況だ。

「やり過ぎではないのか。そもそも、悪人を取り締まるのは我等の仕事だ。邪魔をするのは止めてもらおうか」

「邪魔、だと？　これだけ遅れておいてよく言う。私がいなければこの2人がどうなっていたか、分からん訳ではなかるう」

もつともな華蝶仮面の言葉に、関羽は返答を詰まらせた。

そんな剣呑な雰囲気 of 2人を見て、一刀は関羽が華蝶仮面の正体に気付いていない事を覚った。

もしこのまま両者がぶつかる様な事になれば、止めに入らないとな。2人の間に飛び込むのは正直怖いが、放っておく訳にはいかないだらう。

こんな一刀の心配を余所に、華蝶仮面は関羽に対してさらに挑発的になっていく。

「フツ、邪魔なのは私ではなく、お主の胸ではないのか？　無駄に大きな胸をしているから、ここまでするのに時間が掛かるのだから？？」

ある程度離れた位置にいる一刀にも、関羽のこめかみがひくついたのが分かった。

「……これ以上、戯れ言に付き合うつもりはない！ 今日こそ貴様をしょっぴいてくれる！」

吠えた関羽は手にした青龍偃月刀の切っ先を華蝶仮面に突き付ける。だが、華蝶仮面は涼やかな笑みを浮かべ、

「残念だが、関將軍に付き合うつもりはないのでな」

と言い残し、ヒラリと屋根に舞い上がった。そのまま屋根の上を走って逃走を図る。

「逃がすなっ！ 追えーっ！」

手空きの兵に命令しながら、関羽自身が先頭を切って駆け出した。

華蝶仮面と関羽、この2人が去った事で集まっていた群衆も散る。先程までの喧騒が嘘の様に静まり返り、辺りは普段通りの静寂さを取り戻していった。

城の中庭を1人歩く一刀は、大きくため息を吐いた。

「……どうしたもんかな」

昼間、華蝶仮面の騒動を眺めた後、街の巡察は何となく打ち切られた。そのまま月と詠と5人で城まで戻ったのだが、その途中、朱里から何とかしてくれる様に頼まれた。もちろん、華蝶仮面の事だとは言われなくても分かった。

確かに一刀も放置出来ない問題だと思う。気付いていないとはいえ、味方同士で刃を交える様な真似は馬鹿げている。それに、正義の味方として活動をしているらしい華蝶仮面を捕らえようとするのは、庶民からの受けもよくないはずだ。

だが、どうすれば、という答えは思いつかない。一番手っ取り早いのは、華蝶仮面の正体が趙雲だと教えてやる事なのだが、堂々と偽名を名乗る彼女がそうやすやすと認めるとは思いづらい。本人が認めなければ、仮面をつけただけで趙雲だと気付けなくなる関羽が納得するとも考えられない。なにより、正義の味方の正体をばらすのは酷く無粋な気がしている。

とりあえず、流れに任せるしかないな。一刀は半ば諦めに似た覚悟を決め、2人の待つ東屋へと向かい足を速めた。

東屋には、すでに関羽と趙雲の姿があった。趙雲は酒を飲んでいたのでろう。彼女の前にはとっくりと杯が1つ置かれている。しかし趙雲は、杯を傾けているにしては機嫌が悪い。酒好きの彼女は、飲んでいれば大抵上機嫌なのだ。

対する関羽は素面のまま。しかし、こちらも柳眉を吊り上げ、2人は睨み合っていた。一刀も思わず声をかけるのをためらってしまふ。結果、先に関羽達が気付き、声を掛けられた。

「遅いです、北郷殿」

「まったくだぞ、北郷。自分から呼び出しておいて、どういっつもりだ」

機嫌の悪い2人から、八つ当たり気味に文句を言われてしまう。ごめん、と謝りながら椅子に座ると、なぜ2人揃って不機嫌なのか、その理由を尋ねる。

「そんなもの、決まっているでしょう。星の奴が、あの変態仮面の肩を持つのです」

「変態仮面ではない、華蝶仮面だと何度言ったら分かるのだ。第一、あの御仁のどこが変態だというのだ」

「どこからどう見ても変態ではないか！ あんなおかしな仮面で己の顔を隠すなど、普通の人間のする事ではない！」

「な、何だと！？ いくら愛紗とはいえ、これ以上華蝶仮面を侮辱するのであれば許さんぞ！」

まさに一触即発、といった雰囲気にも包まれる。慌てて一刀は間に割って入る。

「ちょ、ちょっと、落ち着いて。な？」

フン、と鼻息荒く、両者はそっぽを向いてしまった。やっぱり2人一緒に話をしようとしたのが間違이었다か、と、一刀は内心でため息を吐く。

「そうだ。北郷はどう思っているのだ、華蝶仮面の事を」

不意に趙雲が尋ねてきた。

「わざわざ聞く必要もあるまい。きつと、私と同じ考えだ」

「お主には聞いておらん。……さあ、正直に答えてみる」

関羽と趙雲に両側から顔を見つめられ、一刀は汗が噴き出すのを覚えた。当然、美女2人に見つめられた事に照れた訳ではない。鋭い視線で睨む様に見られているためだ。どちらと答えても、否定された方は不満に感じるだろう。

「……俺は、カッコいいと思うよ。正体不明、謎の正義の味方、っていうのは」

一刀は趙雲の側につく事にした。自分自身をけなされていい気はしないだろう。それに、趙雲の方がおだてに弱いか、という読みもある。

「見ろ、愛紗。やはり、分かる者には分かるのだ」

たったこれだけの事で勝ち誇る趙雲。一方の関羽は愕然とした表情を見せている。

別に、本気で華蝶仮面の格好をカッコいいと思った訳ではないので、趙雲の喜び様に少し罪悪感を感じる。だが、ひとまず状況が落ち着いた今、本題に入るべきだと一刀は考えた。

「そもそも、何で関羽はそんなに華蝶仮面の事を目の敵にするん

だ？ 今日だって、彼女のおかげで月と詠は助かったんだぞ。やっているのは、褒められる事じゃないか」

一刀の視界の端で、趙雲がうんうんと頷いている。

「褒められる？ あれがですか！？ 我々の先回りをして、邪魔をしているだけです！ この街を守るのは我等の任務。それを、あの様などこの馬の骨とも知れぬ者に横槍を入れられるなど……」

関羽は忌々しそうに言うと、机を思い切りたたいた。とっくりが跳ね、杯になみなみ注がれていた酒がこぼれる。

「ちよつと待った。確かに、街の平和や人々の安全を守るのは俺達の責務だ。でも、俺達だけでやらなきゃならない訳じゃないだろ？ 大事なのは、誰が守るか、じゃないはずだ」

うっ、と言葉に詰まる関羽に、一刀はさらに続ける。

「華蝶仮面のやり方は乱暴かもしれない。実際、邪魔になる事もあると思う。でも、この街の平和と安全を守ろうとしているのは間違いないんじゃないか？ 趙雲は、そう思わないか？」

一刀の言葉を真面目な顔で聞いていた趙雲は、いきなり話を振られてハツとした。普段の飄々とした態度を取り戻す様に、半分くらいしか酒の残っていない杯に口をつける。

「……まあ、聞いた話では、そんな感じのする御仁である事は間違いないから」

直接的には肯定しない。素直じゃないな、と趙雲を横目で見なが

ら一刀は感じた。

「しかし……」

関羽は未だ納得出来ない様子だ。そんな彼女に、一刀は改めて向き直る。

「それに、さ。華蝶仮面は正義の味方として街の人に認知されつつある。なのに、無理矢理彼女を捕らえようとすれば、桃香に対して不満を抱かせる事につながると思うんだ」

「……ならば、北郷殿は、あ奴を見逃せ、と言うのですか？ 正義のためとはいえ、街中で力を振るうのを黙認しろ、と？」

うつむいていた関羽は顔を上げ、一刀を真っ直ぐに見つめる。その瞳には悔しさが滲んでいる。

「黙認、というより、いつその事、国として認めてしまえばどうだろう。そうすれば、彼女の手柄は桃香の名を高める事になるんじゃないか？ 今日の1件でも分かったと思うけど、この広い街を警備隊だけで何とかするのは、少なくとも今のところは無理なんだ。なら、お互いに協力して平和を守ればいいじゃないか。それに、仮にも正義の味方が、その見返りに金品を要求する様な真似はしないだろうし。……なあ、趙雲？」

趙雲が華蝶仮面として活動しているのは、少なからず自己満足があるのだろう。だが、もちろんそこには街の平和を守る、という思いがあるはずだ。ならば、趙雲も分かってくれるはずだ、と一刀は考えている。

そうだな、と、やや間が空いた後で趙雲から返事が返った。関羽と違い、その表情から心の内を量るのは難しいが、分かってくれたと思いたかった。

「まあ、すぐに気持ちを切り替えるのは難しいだろうけど、考えてみてよ」

「……分かりました。桔梗や焰耶とも計ってみます。では……」

不満顔を見せてはいるが、関羽は頭を下げてその場を離れる。これで全てを納得出来るほど、華蝶仮面に対する苛立ちは小さくないのだろう。それでもこれで変わってくれば。そう思いながら、一刀は小さくなっていく関羽の背中を見送った。

「さて、では私も失礼するかな」

そう言って趙雲も椅子から立ち上がり、東屋を後にしようとする。その際、屋根の下から出るか出ないかのところで足を止め、たおやかな仕草で振り返った。月明かりに照らされた彼女の笑みは、妖しさを湛えていた。

「そうだ。私の事は真名で、星と呼んでくれて構わんぞ。その代わり、私もお主の事は、一刀と呼ばせてもらおう」

それだけ言い残し、趙雲はとっくりと杯を持って立ち去ってしまった。

まさか、華蝶仮面を褒めたのが気に入られたのか。理由ははっきりしなかったが、真名を預けられて悪い気はしなかった。

それから多少の月日を重ね、益州を囲む山々から雪が姿を消し始めた頃、成都に危急の報せが届いた。張魯軍が侵攻を開始し葭萌関を越えた、というのである。これを聞いた一同は、すぐに迎撃の準備にとりかかった。彼女達に焦りはない。なぜなら、一刀からもたらされた情報により張魯の侵攻は予測され、十分な下準備がすでになされていたからだ。

急ぎ出陣した劉備軍四万は、梓潼の北方で張魯軍二万と対峙する事となった。倍の兵力を有する劉備軍であつたが、一気に殲滅、とはいけなかつた。というのも、張魯軍の中に翠に蒲公英、鷹那の姿があつたからだ。

「あの馬鹿っ！ ホンマに何考えとんねん！」

この事を知つた霞は吐き捨てる様に言った。

桃香が一刀に対して翠の受け入れを約束した以上、このまま戦端を開く訳にはいかないのではないか。いや、敵に回つた以上、あの約束は反故になつて然るべきではないのか。軍議の席で様々な意見が飛び交う。そんな中、一刀は沈黙を貫く。彼は全てを朱里達に伝えた訳ではない。自分の胸の内に強い決意を抱き、彼は時が来るのを待った。

「敵陣より、単身進み出てくる人影があります！」

軍議の行われている天幕に、物見の兵が報告に入ってきた。軍議

が煮詰まっている事もあり、全員が外に出て様子を見る。

一刀はハツとした。大きく心臓が跳ねたのが自分でも分かる。あまりの衝撃に、呼吸をする事すら忘れてしまいそうだ。

馬に跨った凛々しい姿。風にたなびく栗色の長い髪。髪の毛と同色の、意志の強そうな太い眉。手にした十文字槍。

そこにいたのは紛れもない、愛馬黄鵬に跨った翠だった。彼女は槍を1度高く掲げた後、穂先を劉備軍の陣へと突きつけた。

「あたしの名は馬超！ 恩ある張魯殿の先鋒として、劉備軍に一騎討ちを申し込む！ 誰か、このあたしと打ち合う勇氣ある者はいないか！」

地を揺らす様な大声1つで、すでに何割かの兵が吞まれている。それ程の威圧感が今の彼女にはあった。

「よし、鈴々がばーんとぶっ飛ばしてやるのだ！」

これに早速反応したのが鈴々である。蛇矛を左手に持ち、右手をぐるぐる回しながら進み出る。すると、星が鈴々の首根っ子をつかんで止めた。

「待て、鈴々。抜け駆けはよくないだろう。錦馬超が相手とあれば、我が武を振るうのに申し分ない。ここは私が……」

「にや〜、鈴々が先だぞ！ 邪魔をするのはよくないのだ！」

そのまま2人はどちらが一騎討ちに出るか、口論を始めてしまう。

「いい加減にしろ、お前達！」

そんな2人に対し、拳骨と共に関羽の雷が落ちたのは当然だった。鈴々は痺れる様に痛む頭を押さえ、涙目になりながら関羽を見上げる。唇を尖らせて、不満たらたらといった表情を見せている。

「北郷殿や霞達の気持ちも考えたらどうなんだ、お前は」

まったく、とため息を吐きながら、関羽は説教を始めた。鈴々は関羽から視線を外して説教を聞き流す。そのまま気だるそうな顔で周囲に目を遣り、ある事に気付く。

「あ、あれ？ お兄ちゃんがないのだ」

鈴々の言葉に眉をピクリと跳ねさせた関羽も辺りを見回すが、確かに一刀の姿はない。次の瞬間、蹄の音が聞こえたかと思うと、1頭の馬が劉備軍の陣から駆け出していく。

「なっ……！？」

馬の背に跨る人物の姿を見た者は、皆一様に驚いた。それは桃香達だけでなく、張魯軍側にいる蒲公英達も同じだ。そして、この場にいる誰よりも驚愕していたのは、一騎討ちを仕掛けた張本人である翠だった。

「……本気、なのか？」

目の前で馬を止めた相手に向かい、翠は小さいが、確かに怒りのこもった声で尋ねた。何の返事も返さずに馬から降り、自分に背を

向けたまま馬の頭を撫でる相手に、今度は大声でもう一度同じ事を尋ねる。

「本気なのか、一刀！」

名前を呼ばれ、一刀は振り返った。彼は馬上の翠をまっすぐに見つめる。

「ああ、本気だよ。その横っ面ひっぱたいてでも、俺が目を覚ましてやる」

そう言うと、一刀は腰から太刀を抜き放った。

第5章・漢中編・第1話〜一刀の覚悟〜（後書き）

今回から第5章・漢中編になります。前話の後書きで書いた通り、5章は4話くらいでまとまるんじゃないかと思えます。

次話は一刀と翠の一騎討ち。この話でいくつかある書きたいシーンの内の1つなんです、そうした話の方が苦戦するんですよ。まだ、最初の数百文字しか書いていませんが、再来週に投稿出来る様、頑張りたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7662p/>

真・恋姫十無双～西涼に落ちた天の御遣い～

2011年11月8日01時29分発行